



黙阿弥全集

第一巻



河竹默阿弥





凡例

一、本全集は狂言作者河竹默阿彌の著作を輯錄せるものにして、嘗て刊行せられたる「默阿彌脚本集」に增補修正を施し面目を一新せる復興的改版である。

一、編輯は大凡年代順としたが、獨立せる淨瑠璃物、所作事の類は、便宜上一卷に纏めることにした。

一、校訂に際しては、狂言百種及び其以前に一度印行せられたものは、多くは作者自身の校訂を經たものであるから、その印行本と原作稿本とを參酌したが、其他の諸作に於ては、原作稿本と舞臺使用本とを參酌して決定することにした。但し、風俗上差控へるのを至當とするの箇所は、主として糸女の改訂に據つて改訂した。然し、用字並に句讀、校正、解說等に關する責任は、一切編者にあることを明らかにしておく。

一、各作の扉に用ひたる勘亭流又は行書の題字は、作者の手蹟である。

一、各作に附したる解說は簡略で摘記同樣のものに過ぎない。作者或は俳優との關係、史的事實等の詳細に就ては、默阿彌傳、演劇史、年代記の類を參照せられんことを希望する。挿畫の

説明は特殊なるもの以外、解說の末に附載した。尙各卷末に附した興行年表は、渥美淸太郎氏の手を煩はしたものである。

一、本全集の成るにあたつて、恩師坪內博士は終始懇篤なる示敎と便宜とを與へられ　久保田米齋氏は裝畫に、三村竹淸氏は題字に、又三田村鳶魚、樋口二葉の諸先輩並に故竹柴其水を始め作者の門弟諸君が、編纂上に校訂上に、編者を裨補激勵せられたる事甚だ多い。玆に殊記して謝意を表する。

大正十三年七月中旬

編　　者

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第一卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第一卷目次

挿繪目次

富岡の
恋の山開

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「岩戸の景清」は「難有御江戸景清」三立目（序幕）の返しとして新作されたもので、嘉永三年三月、作者三十五歳の折河原崎座に於ての作である。海老藏（七世團十郎）が追放赦免となつて江戸へ歸來したお目見得狂言として、「一谷嫩軍記」に熊谷と琵琶の景清とを勤めるに際し、その前曲として、またお目見得のダンマリとして附加されたものであるが、獨立したものとして取扱はれ、「海老藏出勤大出來大々當り」と豐芥子は歌舞伎年代記續編に記してゐる。一流れのまとまつた狂言として見ることはできないが、作者にとつては最初に獨立して執筆したものとせられてゐる。海老藏はその時の口上中に「……猶お土產狂言には一昨年彼地にて相勤めましたる琵琶法師の景清御覽に入れ奉りまする。然るに右景清にてダンマリを一幕致しまするやう御好みに、何がなと工夫いたしましたる所、先年五代目祖父白猿向島へ隱居いたし再勤の折柄初代歌川豐國天の岩戸に見立て三枚續きに描きましてござりまする、が、この度二代目豐國又々天の岩戸に私を見立てましたる錦繪御評判にあづかりし由承り、これ幸ひと右の岩戸をダンマリに取仕組御覽に入れ奉りまする。然れどもなか〱五代目白猿同樣と增長いたしましたる心にてはござりませぬ、たゞ錦繪に本づきましての儀にござりますれば左樣思召しのほど願上奉りまする」とある。これによつてこの作の由來が明らかにされてゐる。後年時として新歌舞伎十八番の中に加へられたりしたのも、かういふ來歷を持つてゐるからであらう。

書卸しの時の役割は、市川海老藏（惡七兵衞景清）、坂東彥三郎（北條時政）、尾上菊次郎（朝日）、市川九藏（秩父重忠）、市川蝦十郎（和田義盛）、岩井粂三郎（衣笠）、尾上松綠、千葉ノ介常胤）、市川猿藏（江間義時）、坂東竹三郎（鷲尾義久）等。――挿畫にした錦繪は國芳の筆であり、扉に用ひたのは書卸し當時の正本の表紙で、默阿彌の手迹である。

大正十三年七月　　校訂者



難有御江戸景清（岩戸の景清――一幕）

江之島岩窟路の場
同　岩窟の場

〔役名　平家ノ侍大將惡七兵衞景清、秩父庄司重忠、北條四郎平ノ時政、和田左衞門義盛、千葉介常胤、江間ノ小四郎義時、長谷八郎、天城ノ猪の又、須ノ股運平。義盛妹朝日、重忠妹衣笠等〕

（岩窟路の場）本舞臺一面の黑幕、上の方藪疊、下の方松の立木。總て江之島岩窟路の體。東西の窓蓋をおろして暗くし、浪の音にて幕明く。と、花道より仕丁二人松明を照して先に立ち、後より鎌倉の大名六人、小素袍、侍烏帽子小刀にて、各自横笛、篳篥、羯鼓など樂器を持ちて出來り、

大一　此度我君頼朝公、平家追討の院宣を賜はり、先達御連枝たる蒲の冠者範頼公、まつた、九郎判官義經公。

大二　須磨の內裡に立てこもる、平家の一門討取らんと、生田の森の砦にて、今合戰の最中と聞く。

大三　狭くより彼の地へ我君も、御出陣あるべきところ、このほどよりの御不例にて、矢尻を磨ぎしも

思はぬ延引。
大四　それ故日夜典藥も、耆婆扁鵲が醫療をたづね、お藥調進なすと雖も、
大五　更に藥の驗しもなく、次第に御不例甚しく、在鎌倉の大小名安氣ならざる時も時、
大六　三日三夜此方は、日月星は光りを失ひ、灯影なければ歩行もかなはず、前代未聞の天變故、
大一　時の博士に占はせしに、當江之島の岩窟に當り、金氣の光り現はるゝは、
大二　まさに不思議の一つなりと、博士の教へに案の如く、岩窟の口を盤石にて、
大三　鎖して通路留めしは、これ凡人の業ならず、
大四　辨財天女の戒にて、神慮にかなはぬことあらんと、
大五　すなはち今日この所へ、頼朝公の御名代として、秩父の庄司重忠殿、
大六　まつた北條和田殿始め、我々どもに至るまで、神み勇めの神事の役。
大一　最早、奉幣祈念の刻限、
大二　諸侯の御入りに間もあるまじ、
大三　別當方にて相待ち申さん。
五人　左樣ござらば安西殿、

大一　いづれもござれ。

ト皆々上の方へはひる。とばた〳〵になり、花道より須の股運平、水汲軍兵の装へ蓑笠を着て松明を點し出來り、呼子の笛を吹く。これにてバッタリと音して、上手の藪疊を押分け、長谷ノ八郎忍びの装にて出來る、運平是を見て、

運平　長谷樣。

長谷　こりや、(トおさへ)須の股運平、合圖の呼子は。

運平　はッ、火急のお使一大事、須磨へ範頼義經二手に別れて押寄せ來り、追手は範頼搦手は軍慮に敏き義經故、要害堅固といひながら如何なる手段あらんも知れず、それ故御一同方公達方、景清樣をお待兼ね、急ぎ彼地へ御越しあるやう、お迎への爲め參つてござる。

長谷　むゝ、すりや源家の奴輩が須磨の內裏へ押寄せしとな。して〳〵、勝利は何れなるぞ。

運平　いまだ勝負は分からねど、いかに要害堅固なりとも油斷大敵。して、景清樣には。

長谷　むゝ、主人景清は先達都を開きしその砌、この鎌倉へ忍び來て、先づ頼朝を討取らんと姿を替へて狙ひしかど、大望成就の時を得ず、それ故此の江之島の岩窟に隱れ、妙音天女に祈誓をかけ日に例へたる平家の重寶、小烏丸の御劍へ月の兎の血潮を灑ぎ、日月合して蝕となる天地の道理、

劔の威徳に三日三夜世界はくらがり、この虚に乘つて調伏なし、源家の根を斷ち葉を枯らさん、かねて主人の計略なり。

運平 すりやこの如きくらがりは、劔の威徳でござりましたか。

長谷 いかにも。汝は人目にかゝらぬ中、夜を日についで須磨へ立越え、この地の樣子を注進せよ。我は主人ともろともに、後より須磨へ立越えん。

運平 然らば、拙者はこれより直に。

長谷 片時も早く、

運平 心得ました。（トこの時以前の仕丁出で、）

仕丁 樣子は聞いた。（トかゝるを、長谷抜討ちに切倒し、）

長谷 行きやれ。

運平 はッ。

ト運平は逸散に花道へはひり、長谷は上手へはひる。とこれにて黒幕を切つて落す。

（岩窟の場）……本舞臺一面に岩山の景にて、眞中に七五三を張りし岩窟、この前に大いなる大岩立

てかけあり。總て江之島岩窟の體。上下に錦を摺込みし幕を張り、左右に四神を飾り、舞臺前上下に大篝を焚き、兩窓蓋を下ろし波の音にて道具納まる。

ト波の音打上げ大薩摩になる。

〽夫神代の昔、天の岩戸の常闇に、八百萬神の神樂を奏し、常世となせし例に倣ひ、今鎌倉の天變に月日の光り蝕の如く、晝夜の別あら海に、かの常闇と岩窟の、神をいさめの庭神樂。

ト神樂の入りし迫上の鳴物になり、舞臺眞中へ北條時政錦の袋入りの鏡を三方に載せて立ち、上手に和田義盛の妹朝日白き幣を持ち、下手に重忠妹衣笠青き幣を持ちゐる。上の方のスツポンよりは和田義盛しでの附きし榊を持ち、下の方のスツポンより、千葉介常胤鉾を持ちて、三方一緒に迫上がる。これと同時に花道へ秩父庄司重忠錦の袋入りの曲玉を三方に載せて持ち、下手に江間小四郎義時、荒事の裝にて白き鷄を抱へたる見得にて、双方見合つて迫上がる。

重忠　まことや唐土漢の高祖は、三尺の劍を以て四百餘州を切りなびけ、つひには王の位に上る。

時政　今我が君朝賴公、一張の弓の雄飛にて、君の宸襟安んぜんと、

朝日　驕る平家を追討の、御仁惠厚き御身さへ、物に障りの花に風、

衣笠　月に浮雲御不例に、都の空へ御出馬も、昨日と過ぎて今日は又、

義盛　諸山の奉幣諸寺の祈念、丹誠怠ることなけれど、

常胤　神明佛陀の加護もなく、心ならざる時も時、

義時　陰陽二精の光りを失ひ、三日三夜闇夜の如く、

朝日　かゝる不思議は世の憂ひ、

衣笠　急ぎ岩窟を開けよと、

義盛　嚴命下り神代なる、

常胤　天の岩戸を開きたる、

義時　例に倣ふ神勇め。

重忠　卽ち、君の名代として、秩父庄司次郎重忠、

時政　神事の補佐は元老たる、北條四郎平時政、

朝日　鈿女の舞も今樣に、和田義盛が妹朝日、

衣笠　同じ役目も不束ながら、秩父重忠が妹衣笠、

義盛　路次の警衞非常を守るは、和田左衞門義盛、

常胤　添役として、千葉介常胤、

義時　末座に控へし某は、岩戸を開く手力雄、鈍き力も有難き、このお目見得に御贔屓の、惠を江間

時政　小四郎義時、
義盛　その他三浦小玉黨、
常胤　在鎌倉の大小名、
朝日　神樂の役にたつか弓、
義時　矢なみつくろふ武士も、
衣笠　貝鐘ならぬ、
重忠　笙篳篥、
皆々　實に勇ましき、
　　　神いさめ。
　　へ岩うつ波にこだまして、心耳を澄ます江之島の、神の岩窟ぞ物凄き、
　　　トこれにて花道の時政、義時舞臺へ來る。重忠思ひ入あつて、
重忠　あれ見られよ方々、神仙自然の岩窟へ大磐石を鎖せしは、よも凡力にはあるべからず。
時政　何さま、三日三夜の常闇に、それこれ思ひ合すれば、
重忠　夫の神代の故事に、天照神素盞雄尊の悪行を憤られ、

時政　天の岩戸へ籠りたまひ、
衣笠　八百萬の神々が、
義時　庭上左右に篝を焚き、
常胤　天の鈿女のわざおぎに、
義時　御神岩戸を開けたまふ、
重忠　それは遠つ神代の昔、
時政　これは目前人の世に、
朝日　月日の光りあらずして、
衣笠　三日三夜の常闇は、
義盛　世にも稀なる、
常胤　天變不思議。

ト此時鷄時をつくる。

重忠　最早長鳴鳥の聲を發せば、
義時　方々神樂の用意めされい。

ト下座にて大勢「ハア、」と答へありて、本行の神樂になり、朝日、衣笠立つて舞はうとする。この時ドロ〳〵になり、兩人眩めきたぢ〳〵となる。これにて左右の篝火一時に消える。皆々きつと思入。と、この時正面の岩窟の間より後光さす。

重忠　やゝ、岩戸の内より赫々と、金氣の光り現はれしは、

時政　妙音天女の感應なるか。

義時　何にもせよ、いぶかしきは岩窟の内。

ト義時つか〳〵と行き、磐石へ手をかける、大ドロ〳〵にて後光は消え、義時磐石を引き退ける。岩窟の内より景清大百日にて、錦の袋入りの小烏丸を持ち出て、前の岩へ片足踏み出し、小烏丸を拔きかけキツと見得。これにて烏澤山に舞ひ上がる。兩窓蓋を明けて明るくなる。皆々景清と顏見合せ扨はといふ思入。景清小烏丸をしやんとさす。これにて又兩窓蓋をおろし、元の暗黑になる。夜神樂の入りし鳴物になり、ダンマリ模樣の立廻りにて景清は皆々の中を縫ふ。此内に天城ノ猪の又出て景清へかゝり、小烏丸へ手をかける、景清これを振放すと、猪の又は劍の紐を持つたまゝ下の方へ轉る。景清は小烏丸を腰にさし、皆々を縫つてよろしく立廻り、よきほどに長谷八郎窺ひ出て、

長谷　重忠觀念。

ト重忠へ切つてかゝるを、重忠身を躱し突きやる。義時長谷を引附ける、此時景清は花道へ遁れて

行く。猪の又剣の紐を持ちたるまゝつか／＼と行き組附くを、景清小烏丸にて抜打に切倒し、猪の又は下の方へ見事に轉る。これにて鳥笛になり、兩窓蓋を明けて明るくなる。皆々景清をすかし見て、

時政
重忠　まさしく平家の。

トこれにて景清ギックリして、小烏丸の袋にて太刀を押へるを木の頭、兩窓蓋をおろして暗くなり、景清は血を拭ふ思入。舞臺にては長谷八郎跳ね返すを、義時片足かけて見得。皆々は景清の方を見込み、引張りの見得よろしく、ドロ／＼カケリにて、

ひやうし幕

ト幕外にて、景清血糊を拭ひし劍を見る。これにて兩窓蓋を明けて明るくなり、鞘へ納めてきつと見得。鳴物になり、花道へ振つてはひる。跡シヤギリ。

岩戸の景清（終り）

年々歳々ありふれた隣同志の世話場をば仕組を替へて地獄極樂しかも所は龜井戸の娑婆と冥土の境町閻魔の小兵衛と名もうれた鬼の女房に氣まぐれな三途おばあが筒もたせ手切に取りし百兩の金に心もくらまぎれ廓をぬけて若草が忍ぶ浮世の伊之助と名のらぬ先は兄弟と知らぬが佛西念がぐぜいの船のだんまりほどきもとは平家の某と二十餘年の夢物語かはつた趣向を三立目より第二番目へつゞき狂言

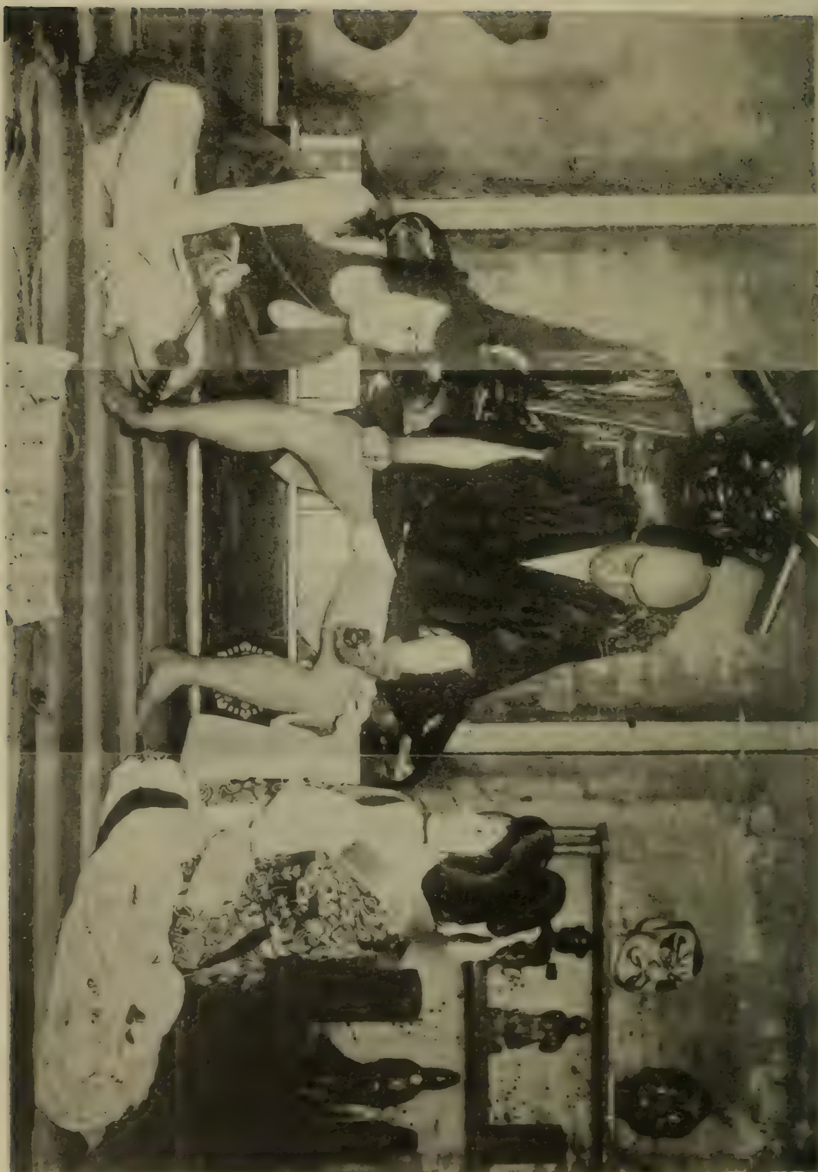
升鯉瀧の白旗

「閻魔小兵衛」は嘉永四年、作者三十六歳の十一月、顔見世狂言の二番目として書卸されたもので、世話物に於ける處女作といふことになつてゐる。隣同志といふ趣向はさまで珍らしいことではないが、それを地獄極樂と對照せしめたところに作者の三題噺的趣向の才が認められる。それに年の暮、節分、龜井戸の神事などを巧みに取入れた寫實味は、劇としてのみならず、一種の世相史、風俗史としても亦鑑賞するに足るであらう。稿下當時世上の好評を博したのも無理はない。結末に至つて大時代になつて納まるのは、一番目の筋を受けたのと十數年來途絶えてゐた顔見世狂言常例の形式を復活せしめたものである。尚この作は作者の見聞を基礎として、構想されたものであると言はれてゐる。作者がある門弟の件に就いて龜井戸の佛師屋を訪ねたところが、その佛師屋は狹い棟割長屋に住んでゐて、部屋の中には塗りかけの閻魔だの、箔をおきかけの佛像などがごちや／＼に置かれてあつたのを、印象深く見て來たのでそれを役に立てたのだといふ。

書卸しの時の役割は、市川海老藏（佛師屋閻魔小兵衛實ハ越中次郎盛次）、八世市川團十郎（船頭浮世伊之助、梶原源太景季）、市川九藏（修行者西念實ハ主馬判官盛久）、岩井粂三郎（若菜屋の若草、小兵衛女房三途お婆お六）、尾上新七（三位中將重衡）、市川團之助（吳羽ノ内侍）、淺尾奥山（番頭ひれ六）、河原崎長十郎（蝶々寶）等である。口繪は龜戸豐國筆の錦繪（小兵衛、西念、若草、伊之助）であり、挿繪は大正九年現左團次、幸四郎等上演の際の舞臺寫眞である。

大正十三年七月

編者誌す



幟鯉瀧白旗（閻魔小兵衞――一幕）

序幕　向島道行の場

（淨瑠璃）若菜屋若草、浮世伊之助、濡嬉浮寐鳰（淸元連中）

【役名――閻魔小兵衞、浮世伊之助、修行者西念、三位中將重衡、番頭ひれ六、貸物屋眼七、若菜屋の若い者喜助、同多助、同米吉。若菜屋の遊女若草、吳羽の內侍、蝶々賣眼玉の長吉等。】

（源兵衞堀の場）――本舞臺後ろ黑幕。上の方橋の袂、柳の立木、よき所に平家の落人三位中將、吳羽の前の人相書を立て、總て源兵衞堀夜の體。通り神樂時の鐘にて幕明く。と上下より一文獅子赤飴豆がら柊賣りの仕出し行違ひてはひる。と花道より若い衆三人、藏前伊勢屋と記せし弓張提灯を持ち、下男の裝にて、鉦太鼓を打ちながら出來り。

○迷兒の〳〵番頭さんやい。

△ひね六さんやアい。

ト呼び、後より眼七貸物屋にて出來り、弓張提灯をすかし見て、

眼七　おい〳〵、そこへ行くのは、藏前の米伊勢屋の若い衆ぢやあないか。

ト是にて三人後を振返り見て、

□　お前はたしか、貸物屋の眼七さん、どこへ行きなさる。

眼七　おいらアちつと人を捜すのだ。まあ向うへ行かう。（ト皆々舞臺へ來り。）

○　そしてお前は、誰をさがしなさるのだえ。

眼七　聞いて下せえ、貴樣達の所の番頭ひね六殿が、昨日おれが所へ來て、今夜年忘れの茶番があるから、心中者の衣裳と毛氈を貸してくれろと言はつしやるから、毛氈はあるが衣裳が家にないから、仲町の長岡屋で、帶から襦袢までそつくり借りてやつて、今朝返す約束だから見世へ行つたところが、昨日出たきり歸らないとのこと、ついぞ茶番などはしなさらない人だから、もし本當に心中でもされては大變だから、今日一日方々さがして歩くが、今もつて行方が知れない。見れば貴樣達も、迷兒を捜す樣子だが、誰をさがすのだ。

△　左樣さ、お聞きなさる通り、番頭さんが昨日から歸らないから、迷兒に出ましたのさ。

□　聞けば、家の旦那の鮫鞘の脇差を持出したさうだから、それで分かつたわえ。

○　そして横町の花屋で、樒を一本買つたといふことだから、それぢやあ心中に、出たのかも知れな

いて。

眼七　それぢやあいよ〳〵心中に違へねえが、借りてやつた代物まで玉なしにされちやあ、そいつは大變だわえ。

ト下手より喜助、多助、米吉若い者の裝、若菜屋といふ弓張をさげ、鉦太鼓をたゝきながら出で、

三人　迷兒の〳〵若草さんやアい。

ト呼ぶ。皆々見て、

曰　お前方は、どうか吉原の衆だが、やつぱり搜しものかえ。

眼七　貴樣達は若菜屋の若い衆だが、駈落者でもあつたのか。

喜助　お前さんは米屋の番頭さん。お聞きなさい、お馴染の花魁若草さんが、暮方から駈落さ、それで搜しに出ましたのさ。

眼七　あの若草さんは、當時評判の花魁だが、惡足でもあつたかね。

多助　左樣さ、堀の船頭浮世伊之助といふのが足だが、あの妓も借金が多いから、心中でもしなけりや

二　あいゝと、內證でも心配さ。

米吉　もし、お前さん方は藏前のお方だが、お家にも駈落者がありましたかね。

△　左樣さ、番頭のひね六さんが昨日出たきり、今聞けば心中の衣裳を眼七さんから借りたとのこと。

○　もし心中でもしやあしないかと、それで捜して歩くのさ。

喜助　それぢやあひよつと若草さんも、ひね六さんと心中する氣ぢやあねえか知らん。

眼七　そんなら、あのひね六さんは、お前方の家へ客にあがるのかえ。

多助　左樣さ、若草さんのところへ、よつほどあつくなつて來なさいますよ。

眼七　それぢやあいよ／＼番衆は、若草さんと心中に違えねえ。さあ／＼大變だ。貴樣達と一緒にさがさなくツちやあならねえ。

□　そんならこれから、向島の方を捜すがようござりませう。

米吉　然し、まだ日が暮れて間もないから、わしどもは此近所をがん張つてゐるから、お前方は向島の方へ行きなせえ。

○　そんなら、あつちを一ぺん捜して見ませう。

眼七　おいら達は小梅から、こゝら近所を捜して見よう。何にしろとんだ人に損料物を借りられた。

皆々　迷兒の／＼番頭さんやァい。

皆々　若草さんやァい。

眼七　ひね六さんやァい。

ト皆々呼びながら上の方へはひる。後説教がゝりの唄一くさりあつて、時の鐘ばた〳〵にて、花道よりひれ六、派手なる衣裳へおしよぼからげ頰冠り一本差し樒を腰へさし、毛氈を肩へかけ口紅の文を持ち、走り出來り躓き思入あつて、

ひね　今鳴る鐘は、ありや淺草寺のたしか五つ、若菜屋の若草が心中してくれいと頼みの文を、船頭の伊之助に持たしてよこした故、あまり死にたうもないけれど厭とも言はれず、心中の衣裳を貸物屋の眼七に借り、せりふは芝居の狂言方に書抜をかいて貰つたが、この若草はもう來さうなものぢや。待たるゝより待つ身になるなとは、よう言ふたものぢやなあ。(ト又唄になり向うへ思入あつて舞臺へ來り、)こゝはもう源兵衛堀、河童の忰ではなけれども、こゝで待つてゐてくれろとの文、もしひよつと所でも違ひはせぬか。もう一ぺん讀んで見よう、それがよい〳〵。(ト件の文をひろげ見て、)何ぢや、『淨瑠璃名題。東西々々』(ト下にゐて、)『淨瑠璃名題、若菜屋若草浮世伊之助「濡嬉浮寐鵺」淨瑠璃太夫淸元太兵衛連中、相勤めまする役人岩井粂三郎、若太夫長十郎、市川團十郎――。』こりや若草の文と思ひのほか、どうして淨瑠璃の觸書と間違うたやら、それにしても淨瑠璃で粂三の相手ならば、奥山でありさうなもの、團十郎とは、これもやつぱり間違ひと見え

ゐわえ。

ト手を組み思案の思入。通り神樂になり、上手より以前の喜助等三人に眼七附いて出で來り、ひね六を見つけ、

三人　や、見付けた〳〵。ひね六さんだ〳〵。

眼七　何だ番頭だ。こう〳〵ひね六さん、お前はとんだ人だ。損料物を借りて心中しようとは、めつぱふかいな、さあ脱ぎなせえ〳〵。

ひね　あゝこれ〳〵、待つて下せえ〳〵。今心中に出たばかり、まだ心中はしないのだ。

眼七　されてたまるものか、さあ〳〵脱ぎなせえ〳〵。

多助　これひね六さん、花魁はどこへこかした。さあ在所を言ひなせえ〳〵。

ひね　なに若草か、おれも其の若草の來るのを、待つてゐるのだ。

米吉　たは言を言ひなさんな、お前が若草さんを連れ出しておいて、待つてゐるも氣が強え。

喜助　さあ有樣に言ひなせえ。どこへやつた〳〵。

ひね　やあ〳〵、そんなら若草は、約束違へず駈落したのか。

多助　駈落かも凄じい。さあ在所を言ひなせえ〳〵。

ひね　あゝ可愛や、おれ故、太い苦勞をしやるなう。
三人　べらぼうめ、たは言つかずと、早く在所を言へ、在所を言へ。
ひね　いや／＼、心中しようと文をよこしたばかり、若草の在所は知らない／＼。
米吉　なに知らねえことがあるものか、言はずば締めあげても言はせるぞ。
眼七　あゝこれ、このまゝ締められちやお衣裳が代なしになる。裸にしてから締めるがいゝ。
三人　さあ／＼、裸になれ／＼。（ト皆々衣裳を脱がせる。）
ひね　あゝこれ／＼、それはあんまり情ない。待つてくれ／＼。
眼七　やかましい、ふんばげ／＼。
三人　合點だ。

ト皆々ひね六の衣裳を脱がせる。ひね六襦袢一つになる。三人在所を言へ／＼と、有合ふ棒にてひね六をくらはす、ひね六やう／＼逃げて下手へはひる。三人は後を追つてはひる。此内眼七衣裳を疊み風呂敷へ包み、

眼七　これ／＼、衣裳は取つたが、損料を取らにやあならねえ。オヽイ番頭、待つてくれ／＼。

ト眼七下手へ追ツかけてはひる。これにて前の道具を引いて取り、黒幕を切つて落す。

（向島平岩河岸の場）＝本舞臺三間常足位の草土手、眞中書心に坂道、向ふ船板の塀、此内に二間大和葺の二階屋、軒口に平岩と記せし提灯をかけ、一面に伊豫簾をおろしあり、上の方一間出茶屋の臺、是れに葭簀を立廻しある。下の方は松、紅葉の立木、舞臺前亂杭付の河中、半月出てあり、總て向島平岩河岸の體。と二階の伊豫簾を捲上げる、清元連中袴羽織にて居列び、浄瑠璃になる

〽いにしへを捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬうき中に、浮氣を隅田の土手の霜、解けた二人がふくさ帶、夢も結ばぬ假枕、

ト出茶屋の葭簀の蔭より伊之助廣袖船頭の裝、若草胴抜女郎の裝、伊之助の袢纒を掛けて出來り、

伊之　若草、

若草　伊之助さん、

伊之　これ、しづかに言や。（ト思入。）

〽水の出初の竿雫誰に遠慮も棚なし小舟、もやひに搖れて散り紅葉立田にあらで綾瀬川、歩の浮世の伊之助に、まだもえやらぬ若草が實とまことの厚氷り、行方當途も長堤よそ目にそれと心中も、死ぬ覺悟こそわりなけれ。

トこの文句の内兩人よろしく舞臺へ來り、

若草　今夜内證の年忘れのどさくさまぎれ、首尾よく大門を拔けて、こゝまでは逃げ延びんしたが、是からどうしなますえ。

伊之　どうと言つて見留も付かねえ。極樂を當に心中するのもこけな沙汰、當分影をかくした上話し合をつける覺悟で、あの米伊勢屋の番頭をだしに遣つて、彼奴が連れ出した積りにすつぽり書いた狂言よ。

若草　そりやようざますが、江戸の内にかくれて居いしては。

伊之　なに、そこが燈臺元暗しと遠ッ走りをするより、近所にかくれてゐる方が結句知れねえのよ。

若草　さうして、どこへ連れて行きなますえ。

伊之　その行く先は案じることはねえ、おれが親父が世話をした、西念といふ同心者が、境橋に居るから、當分そこへ行くのよ。

若草　さうした所がひよつと話し合がつかず、もし吉原へ歸るやうにでもなりんすと、わつちア生きてゐる氣はありんせんよ。

〽くど〳〵いふも愚痴ながら、いつぞや下の巳待の夜旦那さん方藝者衆の多くのなかでこなさんの。〽面白い座の持ちやうぢや、好いたらしいと陰言にお前の眞似を樂しみにせぬ間は

暫しもないわいな。假令心にそまずとも粹なお前のことなれば、苦界する身を立てるとて、義理一遍の仇口は結句心のもめるほど、苦勞苦患に引きかへて、一緒に暮す嬉しさと、番ひ放れぬ風情なり。（ト兩人よろしく思入）

〽かゝる所へ向島、顔見世だけに商人も、棒の素顔に掛値なし、負けぬ氣性の小ませ者、

ト合方通り神樂にて、花道より蝶々寶眼玉の長吉手甲脚絆、手拭を冠り、大きなる辨慶に眼玉の蝶々をさしたるを擔ぎ出で花道に留る。

〽蝶々とまれぢやなつけんけれど、日本堤で皆御存じの仕出しぞめきの客さん方も、格子で袖を引け四つ過ぎに、それとまつた、朝の歸りに持てゝは睡い、眼玉の蝶の諸翅振りかたげたる戻り足、（ト蝶々寶振あつて舞臺へ來る）

伊之　（見て）誰かと思つたらば、いつも土手にゐる眼玉の蝶々屋さん、今時分どこへ行つたのだえ。

長吉　あいさ、明日は年越で龜井戸の豆蒔だから、錢まうけをしようと思つて、地所を取りに行つて、それから寺島の平作さんの家へ、用があつて今歸る所だが、お前方は堀の船頭衆に吉原の花魁、今時分こゝら邊りにゐるからは、こいつアてつきり心中だな／＼。

伊之　どうして／＼、顔見世さう／＼緣起の惡い、鶴龜々々。

若草　今時向島で、心中なんぞをする野暮はありんせんよ。

長吉　こいつァ一番あやまつた、扨はお前方は駈落だね。

伊之　まァそんなものさね。

長吉　二人こつそり手を取つて、こゝから直に隨徳寺、誰憚からずちん〳〵かも〳〵、えゝ畜生め。

〽さつてもうまい舌鼓、打つは追灘の鬼打豆よ、福は内外の目顔を忍び、連れて軒端の梅松竹で、三々九度の盃に四海なみ〳〵お銚子の、變らぬ妹背色なほし、立てる屛風の蝶番ひ、女蝶男蝶のたはむれ遊び。

ト蝶々賣よろしく。是より竹の蝶を指金のやうに獨りで遣ひながら、振になる。

〽戀すてふ戀の胡蝶があなたへひらり、こなたへひらり、ひらりひらり〳〵、ひら〳〵ひらり風の蝶、味噌を揚羽の蝶花形か、八つ花形の香にめでゝ猿若町の色くらべ、古い文句でやつてくりよ、（トよろしくあつて、田舍節の振になる。）〽花に蝶々はわしや氣がもめる。來てはちらちらまよはせる、いてきちやぐん〳〵オヤヤレ〳〵〳〵さうだぞ〳〵。沖のかもめがなくのも道理、水にあはずに暮らさりよか、いてきちやぐん〳〵オヤヤレ〳〵〳〵さうだぞさうだぞ、さうだんべい。〽うかれていつまで長遊び、ゆるりとおしげりお樂しみ、獨りちやち

やくちや蝶々賣、羽風こぼして走り行く。

ト蝶々賣辨慶をかつぎ上手へ走りはひる。兩人後を見送り、

伊之 あの奴め、獨りしやべつて行つてしまつた。然し蝶々は祝言の附物、いゝ辻占ぢやあねえか。

若草 そりやさうと、お前の心安い坊さんの所へ行つても、窮屈でありんせうねえ。

伊之 なに、氣は詰まりやあしねえが、狹え家だからどうせ樂にやあ行きやあしねえ。是から亀井戸までよつほどあるが、そんな自墮落な裝ぢやあ仕方がねえ。この出茶屋の中で支度をしよう。

若草 わちきァどうしてよいか、分かりイせん。

伊之 おれが着物をきせてやらう。いや、とんだ厄介者だ。

若草 そんならおもひれ歩けるやう、着物を着せてくんなましよ。

〽更けて山谷に打つ紙のきぬたの音もはや絶えて、ぞつと身にしむ小夜嵐、雲足早き雨雲にねぐらの闇やこもるらん。

ト兩人立上り、思入あつて出茶屋の内へはひる。これにて二階の伊豫簾をおろす。時の鐘合方になり、花道より三位中將重衡淺葱頭巾笈摺にて、吳羽の內侍さら毛鬘笈摺、兩人とも胸札草鞋、藁づとを背負ひ、柄杓を持ち出來り、

三位　今日も最早暮過ぎ、宿り定めぬ旅の空、これこの所は東に名高き隅田川、世にある人は詩歌に讀みて慰めど、今は日蔭の二人が身の上。
吳羽　落人の身の後や前、行きなやみたるうき旅路、都と聞くもなつかしき、鷗とやらの羽風さへ、もし、追手かとおどろかれ、
三位　一足づゝに消えて行く、霜の劍を踏む心地。
吳羽　お心細いはお道理ながら、人目にかゝらぬ其内に、
三位　少しも早う、今宵の宿りへ。
吳羽　我君さま、
三位　あゝこれ、さあ、おじやいなう。（ト兩人舞臺へ來り、立札をすかし見て）何々「平家の落人三位中將重衡、吳羽ノ內侍人相書、」
吳羽　やゝ、こりやこれなる札に、人相を記しおき、
三位　訴へ出る其者には、恩賞なさんとこの立札。
吳羽　扨は我らが行く先々、草を分かつてきびしき詮議、
三位　かくまで平家を苦しむる、無得心なる源氏の輩、

吳羽　御運の末とは言ひながら、

三位　是非もなき身の、

吳羽　成行ぢやなあ。

ト三位中將以前の人相書きと錦の袱紗に包みし系圖を出し、

三位　それに就いても大切な、肌身はなさぬ家の系圖、よく〳〵最前落しもせなんだ。そもじも路用に貯へし、金子は所持してゐやらうの。

吳羽　その路用は、妾がしかと肌身に付け、こゝに持つてゐますわいな。

ト吳羽懷中より、紫の袱紗に包みし金子を出す。此時兩人の非人窺ひ出で、

非人　扨こそ落人、路用の金を。

ト吳羽が持ちし金を取る。三位中將驚き其手を捉へ、

三位　や、狼藉者、ゆるさぬぞ。

兩人　何を小癪な。

ト三位中將金を懷へ入れる。非人是を引出さうとして系圖の一卷を引出し、

非人　や、こりや卷物。

三位 南無三、系圖。

ト取返さうとするを非人系圖を下手へ放り、三位中將の懐へかゝるを支へる立廻り。此内花道より閻魔小兵衞、どてら、三尺、羽織を引かけ手拭を冠り、古き位牌を澤山繩にてからげ肩へかけ、小提灯を持ち出來り、この樣子を見て舞臺へ來り此中へはひり、兩人を鬪ひ位牌にて非人をくらはす。これにて非人下手へ逃げてはひる。此中三位中將は呉羽に囁き、呉羽は金を懐へ入れる。小兵衞思入あつて、

小兵 いやはや、途方もねえ奴等だ。(ト提灯にて兩人を見て、)コウ／＼若い旅の人、あぶねえことだ、何ぞ取られはしなさらねえか。もう／＼怖いことはないから、こゝへ來なせえ／＼。

三位 (思入あつて、)はい／＼、どなたかは存じませぬが、危いところへおいで下され、夫婦の者が難儀をお救ひ下さりまして、有難う存じます。

小兵 はい／＼、わしは此の境橋にゐる、閻魔小兵衞といふ貧乏佛師屋だが、眼玉は大きいが怖い者ぢやあねえが、見りやあ夫婦連れの順禮衆、宿を取りおくれて、こゝらへ野宿をする積りだね。

三位 左樣でございます。勝手知れざる夜の道、狼藉に出逢ひ大切なる、いや、少しばかりの貰ひ溜を、すでに取られんと致せしを、あなたがお助け下さりました故、これ女房あなたへお禮を。

ト此の前より呉羽癪いさし込み、段々苦しき思入。三位中將驚き、

これ女房、どうしやつた、こりや、持病がおこつたのかや。

小兵　（この様子を見て、）おゝ御内儀は癪が起つたさうだ。やれ／＼可愛さうに。（ト提灯を松の枝へかけ呉羽を介抱して、）こりや大そうな癪だ。これ／＼、反つちやあ悪い／＼。これ御亭主さん、藥はないか藥はないか。

トこれにて三位中將懐をさがし、人相書を取落す。

三位　はい、折惡う藥をみなにいたしました。

小兵　そいつは困つたものだ。おれも藥は持たず、あゝこれ、だいぶ差込む様子だ。反つちやあ悪い悪い。

ト言ひながら呉羽の癪を押すとて懐へ手を入れ、以前の金包を探り見て思入。

三位　これは／＼、御介抱下されまして有難うござります。これ女房、心をたしかに持ちやいなう。

小兵　これ／＼齒を喰ひしばる様子だ。せめて水でも飲ませてえものだ。おゝ幸ひの川水、御亭主お前柄杓で汲んで來なせえ、早く／＼。

三位　心得ました。

ト三位中將とつかはと柄杓を持ち、前なる川水を汲まうとする。小兵衛呉羽を抱へながら三位中將を川中へ蹴込む、この音に呉羽おどろき見て、

呉羽 やゝ、こりや我君を。

ト寄るを小兵衛懐の金を引出す、呉羽驚き其の手へ縋るを酷く突きとばす。これにて呉羽よろ〳〵と川端へ倒れるを、小兵衛同じく川中へ蹴込み川を見込む。是にて提灯の明り消え、本釣鐘忍び三重になり、下手の蘆原を押分け、西念鼠木綿の着附同じく手甲脚袢誂への頭巾、六阿彌陀箔代建立といふ幟を持出る。出茶屋の葭簀をばら〳〵と倒して伊之助若草の手を取り、探りながらそろ〳〵と舞臺へおりる。此中小兵衛件の金をさぐり見て、につたり思入あつて懐へ入れる。西念窺ひ出で足にさはりし以前の系圖を取上げ、合點の行かぬ思入にて懐へ入れる。小兵衛位牌を搜すとて伊之助に行當りびつくりなし下手へ來り、又西念に行當り思入。これにて入替り、小兵衛眞中に土手へ足を踏みかけ上手に西念幟を構へ、下手に伊之助若草を圍ひ、三方一時にきつと見得。凄き鳴物になり、四人世話ダンマリの立廻り、小兵衛件の金を落すを、伊之助拾ひ探り見て懐へ入れる。小兵衛西念の懐より系圖を引出さうとするを、西念立廻つて系圖を取り、振拂ふ。小兵衛これにて手をつき、以前の人相書を取上げ懐へ入れる。よきほどにひれ六顫へながら上手より出で、思はず此中へ入り、あちこち突廻され若草を捉へ、すかし見ておどろき、

ひねや、われは。

ト此の聲に伊之助探り〳〵ひれ六を突退け、若草の手を取り花道の方へ行く。小兵衞探りて若草の襟を捉へる。西念窺ひ寄り小兵衞を捉へ後へ引戻す。これにて若草の袖切れて、伊之助若草花道へ行く、小兵衞西念をふり拂ひ、懐を捜し、金包なき故おどろき向うをすかし見る。ひれ六窗より出る

小兵　どろぼう。(ト大きくいふ。)

ひね　(びつくりして、)や。

ト花道へ出るを小兵衞突廻す　西念この内[illegible]を拾ひ、思はずひれ六を當てる、ひれ六〳〵と思入、伊之助小石を拾つて、

伊之　えい。

ト礫を打つ、礫立身にて苦しむひれ六に當り見事に轉る。花道の兩人下にゐる小兵衞は袖を銜へる、西念は鎌を構へる。雙方よろしく一時に木の頭、伊之助若草のがれて花道へはひる。西念小兵衞をさへ、兩人向うをすかし見る。時の鐘三重模樣にてよろしく、

ひやうし幕

二幕目六切

龜井戸境町の場

隣合地獄極樂の場

〔役名――浮世屋伊之助、えんま小兵衞實ハ平家の近臣次郎兵衞盛次、修行者西念實は平家の近臣主馬ノ判官盛久、梶原源太景季、三位中將重衡、伊勢屋番頭ひれ六、家主長兵衞、小兵衞子分勘太、同金八、酒屋の亭主眼六、梶原の郎等。若菜屋の遊女若草、小兵衞女房お六、吳羽の內侍、長屋の女房おわた等。〕

（龜井戸境町の場）――本舞臺正面二間の居酒店、一間中窓、酒肴と書きし障子、此の脇縄簾、中汲、諸白と書きし立障子、上の方裏長屋の路地口、井戸札に閻魔小兵衞といふ名札、そのほかいろ〳〵の名札打附けあり。左右朝鮮矢來、下の方柾垣、總て龜井戸境町邊の體。幕の內より三人の若い者村の勇みの打扮にて、床几に腰をかけ酒を呑みゐる。傍に眼六紺の前垂片襷の酒屋の亭主にて立かゝり、下手に友七股引草鞋の人足にて、首へ赤鰯豆萁柊を入れし籠を斜にかけ、おわた白髮の姿にて見すぼらしき裝にて赤鰯を選り取りゐる。この見得龜井戸の大拍子にて幕明く。

若者　眼公、今日は豪氣に賑やかだの。

眼六　へい、どうでも節分だけ、龜井戸へ鬼やらひを見に人が出るせゐか、お客の絶える間がござりません。

友七　もし〳〵、どれも同じ赤鰯でござります、よい加減にお選りなさい。

わた　さうでないよ、大きいのと小さいのとある、同じことなら大きいのがよい。

若一　おつかあ、いくつになつても慾が深いの。

わた（若い衆を見て、）こりや尾村井の兄ィ達か、お相でもしようかね。

若二　さうよ、おつかァでも女だ、野郎よりましだ。

若三　いつぺえやんねえな。（ト茶碗を出す。）

わた　それは有難う。（ト酒を呑む。）

眼六　おわたさん、此の頃はさつぱりやんなさらないの。

わた　どうして〳〵、夏と違つて寒くなつては洗濯物はなし、長い錢が取れない故、白馬も呑めねえわな。見なせえ、まだ單衣だ、あんまり洗ひ物がねえから、今年の垢の落しじまひに、無けなしの髪を洗つたわな。

友七（大拍子の聞える思入にて、）もし〳〵、あの太皷は天神樣でござりますか。

眼六　あい、今日は節分故十二座の神樂があつて、晩には追儺の神事の鬼が出ます。

友七　なるほど話に聞きました、龜井戸の節分、丁度幸ひ商ひをしながら見に行きませう。

わた（豆萁、赤鰯、柊を取つて、）おい〳〵、赤鰯一本に豆萁柊、これでいくらだえ。

友七　はい、それでは十六文が物だけれど、仕舞物だ、八文にして上げませう。

わた　それはお忝だが、とてものことに、もう二つ三つ赤鰯をお貸けなね。
眼七　おわたさん、お前の家は一方口だのに、どこへそんなに挿しなさるのだ。
わた　何さ、晩に茶漬を喰はうと思つて。
眼七　とんだことを言つたものだ。鹽がからくつて喰へるものかな。
わた　おや、そんなにからいかね。（ト友七の籠より赤鰯を一本とり、一口喰つて）おゝからい〳〵、口がもげるやうだ。これ、口なほしにもう一ぱいおくれな。
若一　なんだのと言つて、又一ぱい呑まれるのか。
若二　とてものことに、大きいものでやんねえ。
わた　それは嬉しいね。（ト茶碗にて酒を呑む。）
眼六　いや、おわたさんも常談者だ、どこの國にか赤鰯を喰ふものがあるものか。ほんに今の顏は閻魔が鹽辛を嘗めたやうだ。
友七　いや、閻魔と申せば此の路地札に、閻魔小兵衛としてござりますは。
眼六　あれは佛師屋の職人で、閻魔を彫るのが上手で、そこで閻魔小兵衛といふのさ。
友七　はあ左樣でござりますか、とんだ名のお人もあるものだ。これはおやかましうござりました。赤

鰯や〳〵。（ト呼びながら下手へはひる。）

若一　さあ、もういゝ加減に切上げようぢやあねえか。

若二　さうよ、龜井戸を一ぺんひやかして來よう。

若三　勘定は、歸りに一緒にしますよ。

眼六　よろしうござりますよ。

わた　こりやあ兄ィ達、御馳走になりました。

三人　また歸りに寄りやせう。

ト三人は下手へはひる。眼六見世を片附けながら、

眼六　おわたさん、濁酒のいゝのが出來たがどうだ。

わた　白馬と聞いちやあ氣が惡いの、節分の御祝儀に三合ばかりおくれな。

眼六　勘定は大晦日かな。

わた　知れたことさ。（ト眼六の注いでくれた德利を取りて、）こりやあ有難う、どれ、あつたまらうか。

トおわたは路地口、眼六は縄簾の内へはひる。と、花道より二人の人足〇〇早桶をさし擔ひに擔ぎ、長兵衞羽織股引尻端折りにて、畳んだる役提灯を持ちて出來る。

○　モシ〳〵、どうやら繩が切れさうで、ぎち〳〵しますよ。

□　どうでも佛が土佛のせゐか、豪氣に重たい。あれ〳〵繩が切れさうだ。

長兵　なに、繩が切れさうだ。こゝでまお佛をこぼしては始末がしにくい。まあ〳〵向うの居酒屋の前へおろせ〳〵。

兩人　さうしませう〳〵。（ト早桶をおろすと、繩切れる。）

○　それ〳〵繩が切れたわ、こゝでゆつくり締めなほすがよい。

□　もし、大家さん、こゝらで繩を貰ひなさいましな。

長兵　さうしよう、幸ひ、こゝの見世で貰ひませう。もし〳〵、ちとお賴み申します〳〵。

眼六（內より出來り、）はい、こつちへおはひりなさりませ。葱鮪に鰯の鹽燒がありますが、なんで上げませう。

長兵　いえ〳〵繩を一筋下さい、今こゝの見世の前で、早桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりました、早く繩を下さい〳〵。

眼六　なんだ、人の見世先へ死人をおろして繩をくれろ、とんだことを言ふ奴だ。名主のねえ村からでも來やあがつたか、ちつともおくことはならねえぞ、その死人をそつちへ持つて行かつせえ。

長兵　これ〳〵、そなたは居酒屋の亭主か。これ、繩が切れたからおろしたのだ。見世の前であらうが乃至御玄關の前であらうが、おろしたがどうした。死人をおろすことは法度か、さう強情を言はれては、五日でも十日でもこの死人を、この見世へおかにやあならねえ。不承ながら置いて貰はうおいて貰はう。

兩人　さうだ〳〵、持つて行くことは厭だ〳〵。

　　トロ々にわめく、此時以前の若い者三人出來り、

三人　なんだ〳〵。

若一　こいつは何だ、居酒屋の前へ死人をおろしたな。

若二　そいつはとんだことだ、薄汚ねえ。

若三　早く持つて行きやあがらねえか。

眼六　ぐづ〳〵すると、うぬら打ッくぢくぞ。

長兵　何だ、打ッくぢく、面白い、打つなら打つて見ろ。

眼六　いけふざけた奴等だ。若い衆、手を貸してくんなさい。

三人　合點だ〳〵、死人擔ぎを打ッくぢけ〳〵。

兩人　さあ。打たれよう。

眼六　打たねえでどうするものか。

ト早桶の棒を取つて打つてかゝる。皆々有合ふ棒にて敲き合ふ。このはずみに桶の箍切れて中よりひれ六の死人經帷子の裝、頭陀袋をかけたるが轉げ出る。皆々捨ぜりふにて思はずひれ六を踏み散し、見世にある手桶を取つて打ちつける、此の水ひれ六にかゝり息を吹返す。皆々それを知らず、同志打に敲き合ふ。ひれ六心附きたる體にてずつと立ち、喧嘩と聞いて此の中へはひり、仲裁人の思入にて、

ひれ　待たつしやい〱〱。（ト捨ぜりふにて止め、）おれが預かつた、預けさつしやい〱。

皆々　いやだ〱、いやだい。

眼六　（ひれ六の裝を見て、）やあ、わりやあ何だ、裁人か〱。

ひれ　おゝ、裁人に濁りをうつたざいにんだ。

皆々　やあ、幽靈だ〱。

ト膽を潰し、わつと言つて下手へ逃げてはひる。ひれ六一人殘り、早桶のこはれや自分の裝を見て、思入あつて、

ひれ　昨夜向島で横ツ腹をひどく打たれて、あゝ痛いと思つたぎり、それから後は夢現、このマアおれ

が裝といひ、こりやテツキリ死んだと見える。死んだらこゝはもう冥土か。(トうろ〳〵四邊を見て)おゝ。どうでおれも心中を仕そこなつて死んだの故、極樂へは行かれまい。何にしろこゝは地獄の何といふ所だか、針の山や血の池も見えず、今では地獄も娑婆のやうだと見える。どうぞ早く閻魔樣の近附になつて、居候にでもおいて貰ひたいものだ。

ト路地より以前のおわた酒に醉ひたるこなし、白の浴衣の裝にて出來り、

わた　あゝ、いゝ心持だ、一人で三合やつたら、べらぼうに醉つて熱くてならぬ故、袢纏を脱いだら丁度いゝ心持だ。

ひね　(おわたを見て、)はあゝ、もし〳〵憚りながらお前さんは、三途川のお婆さんでございますか。

わた　なに、さんづ婆アえ、そりやあこの裏の閻魔さんの所のお上さんの渾名だよ、私アおわたといふ洗濯婆アさ。

ひね　左樣でございますか。はあ、それではこの裏に、閻魔樣がゐさつしやるか。扨はこゝは地獄だわえ。もし、こゝは何といふ所でございます。

わた　龜井戸の境町と言ひやす。

ひね　はあゝ、冥土の境町、それでは地獄極樂の追分と見える。さうして阿彌陀樣の力はどつちでご

ざります。

わた　なに、六阿彌陀かえ、そりやあこの先の横町さ。

ひね　その阿彌陀樣の所へは、行かれますまいか。

わた　あゝ此間まで行かれたが、一昨日から道普請で往來止めだ。

ひね　南無三、それではいよ／＼地獄へ行くのか。もし、袖振り合ふも他生の縁、どうぞその閻魔樣の所へ、お連れなされて下さりませぬか。

わた　えゝそりやお易いことだ。一緒に來なせえ、教へて上げよう。

ひね　それは有難うござります。あゝ地獄にも今は人鬼が、

わた　あゝ、その人鬼も今に出ますよ。

ひね　扨は呵責の責めに逢ふのか。

トおわた先にひね六附いて路地口へはひる。これにて此道具廻る。

（小兵衛内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面鼠壁、上の方一間障子屋體。正面に大いなる彩色せる閻魔、例の所門口、佛師閻魔小兵衛といふ名札、下の方路地口、こゝに前幕の小兵衛好みの打扮

にて硯箱を置き、帳を調べゐる。お六世話女房半纏裝にて鏡臺へ鏡をかけ、髮を撫で附けゐる。下手に勘太鬼やらいの赤鬼の裝にて、節料理の人參牛蒡を切つてゐる、金八同じく青鬼にて、鰹節箱にて鰹節をかきゐる。この見得四つ竹節、柳島の題目太鼓を冠せ幕明く、

お六　こう〳〵、お前達は臺所はいゝ加減にして、早く天神さまへ行きなさいな。

勘太　何さ、鬼やらいの初まる前には、八野郎が知せに來る積りさ。

金八　日の暮れねえ中に行くと、人に見られるのが難儀だ。

お六　淸公は今年初めてか。

金八　あい、わつちは新婆婆さ。

お六　それぢやアどぢに逃げると打たれるよ。

勘太　なに、そりやあ私が附いてゐます、逃げることにやあ喧嘩でもなんでも、引をとつたことはねえ。

金八　違えねえ。

兩人　はゝゝゝゝ。

小兵　えゝやかましい、靜にしねえか、帳の調べが出來やあしねえ。

勘太　親分、何をそんなに調べなさるのだ。

小兵　後生樂めらが、今日はいつだと思ふ、節分だ。餅もつかねえけりやあならず、疊替もしにやあならず、いくら錢があつても足りやあしねえ。それだによつて、押上の眞濟寺から賴まれた、應擧の圖を寫したこの閻魔、正月の間に合ふやうにと此間から矢の催促、やうやく仕上前になつたによつて、あらましの勘定をして、眞濟寺から借りて來にやあ、この暮が凌げねえわえ。これお六、いつまで頭髮をせつちようしてゐるのだ、早くお節でも煮てしまはねえか。

お六　え丶忙しない、もうお節を煮るばかりだわな。コウ人參や牛蒡を拵へるなら、序に鰹節も。

金太　姐さん、言はれねえ内にかいて置きやした。

お六　氣が利いてゐるの、とてものことに、晩に蒔く豆を炒つておいてくんな。

金太　あい〱。

小兵　いや、人遣ひの惡いか丶あだの。お丶、その豆で思ひだした。勘太や門口へ柊をさしてくれ。

勘太　あい〱。

お六　ほんに、人遣ひの惡い亭主だの。

小兵　ハツクシヨ、又風邪を引きさうだ。

ト路地口よりおわた先にひれ六出來り、門口から、

わた　お六さん、今日はお目出度う、嘸お忙うございませう。

お六　おや、隣のおつかあか、お上りよ。髪をお洗ひだね。

わた　あい、洗ひばえもしねえが、かゆくつてならねえから。

小兵　いやさうでもねえ、洗ひ髪ぢやあおち坊主も、いやおつかあの前ぢや坊主はさゝしたの。

勘太　違えねえ、龍興寺の坊主は、

金太　みんなお前の喰ひ物だ。

わた　なんの、そりやあ昔のことだ。

　ト　ひれ六此内内を覗き、びつくりなし、

ひね　イヤア怖ろしや／＼、あのまあ怖いえんま様、左右には赤鬼青鬼傍に帳を控へてゐる眼玉の大きいのが見る目で、淨玻璃の鏡に對つてゐる鼻の高い上さんがかぐ鼻に違ひない。然し繪で見たとは大きな違ひ、えんま様も裏店住居とは、地獄も今はしやれたことだ。

小兵　（この聲を聞きつけて、）おッかあ、表に誰か居るぢやあねえか。

わた　あい、お前に逢ひたいといふ人がある故、連れて來ましたよ。

小兵　それは世話であつた。もし、どなたゞかおはひんなせえ。

ひね（おづ／＼内へはひりて、）はい／＼、どうぞお助け下さりませ／＼。
小兵 何だ、見りやあ金毘羅参りを見るやうな装をして、助けてくれ、助けてくれと。
お六 おほかた草鞋銭でもくれといふのだらう。
ひね いえ／＼左樣ではござりません。どうぞお助け下さりませ／＼。
お六 おッかあ、お前近附かえ。
わた いえ、今表で頼まれたのさ。
小兵 何だか、わけが分からねえ。これ、手前達聞いて見ろ。（ト勘太、金八へ思入。）
兩人 あい／＼。（ト兩人ひね六の首を捉へ引たてる。）
ひね あい、おゆるされませ／＼。
勘太 これさ、何もひどいことはしねえ。譯を言ひなせえ。
ひね へ、申します／＼。何をおかくし申しませう。私は娑婆の藏前で、米伊勢屋の番頭ひね六と申します者でござります。ふと吉原の若菜屋の若草といふ女郎になじみ、雨の降る日も雪の夜も通つた擧句は身の詰り、とても添はれぬことなれば、心中してと若草が頼みに是非なく浄瑠璃に、名を殘さうと思ひのほか、その夜女郎は船頭の伊之助といふ色男と、廓をぬけて行方知れず、心中

せうにも相手はなく、向島をまごつく中、その若草を見つけた故、引捉へようとする所を、胛腹をどんとくはされて一人心中しました私、決して嘘は申しませぬ故、舌をぬかずにこのまゝに、偏にお助け下さりませ。

勘太　何だ、助けてくれ〳〵と、富士講が熱に浮かされたやうに、

金八　いつたい、お前は何だよ。

ひね　はい、亡者でござりまする。

お六　えゝ氣味の惡い、早く追出しなせえな。

小兵　いや待て〳〵、さつきからの話の樣子、何でもこりやあ間違ひが。これ亡者さん、お前こゝを何處だと思ふのだ。

ひね　はい、地獄ではござりませぬか。

小兵　なるほど、閻魔はあるし赤鬼も青鬼もゐるから、間違つた人の目から見たら、地獄と思ふも無理ぢやあねえが、こゝは龜井戸の境町、私は小兵衛といふ佛師屋職人だ。

ひね　へえゝ、娑婆でござりますか。（ト心附き、閻魔を見て）なるほど、さうおつしやれば、あの閻魔樣は木彫でござりまするね。

小兵　こりやあ押上の眞濟寺から賴まれて、わしが彫つた應擧の閻魔さ。

ひね　して、この赤鬼さんや青鬼さんは。

勘太　わつちらは龜井戸の天神樣の、鬼やらいの神事に出る、赤鬼に青鬼さ。

金八　これ見なせえ、縫ぐるみの下が人間だ。

ひね　して、又、三途のお婆さんは。

わた　こゝらあたりの寺方へ、お針にはひる洗濯婆アさ。

ひね　はゝあ、それぢやあわしも、亡者ではないか知らん。（ト立つて見て、）おゝ今まで心附かなんだ。
　足がある〳〵。

兩人　何にしろ、足があるとは緣起がいゝ〳〵。

ひね　はてな、私は死んだに違ひないが、此のやうに生返つたは、日頃贔屓な娘御達が、藏前の不動樣
　へお百度でも上げたと見える。

兩人　おきやあがれ。

お六　とんだ道化師だの。どれ、わつちア日の暮れない中、一風呂はひつて來よう。

小兵　湯へ行くなら表へ聲をかけて、ついでに肴を見つくろつて、

お六　え丶承知だよ。
わた　お六さん、今日はおひねりだぜ。
お六　ほんにさうだの。（ト　おひねりをこしらへ、門口へ出て、）亡者さんお話しよ。（ト路地口へはひる）
小兵　何にしろ、お前も生返つて仕合せなことだ。
ひね　いいえ、あまり仕合せなこともござりませぬ。
皆々　そりやなぜ／＼。
ひね　はい、私が心中しようと思つた若草めは、伊之助とたしかに心中して、あの世へ行つたに逢ひござりませぬ。なまなか生返つたばつかりに、もう逢ふことがなりませぬ。
小兵　なるほど、こりや娑婆から冥土へは、幽靈でも行かれまい、いや、お力落しのことだ。
わた　して、その若草伊之助といふは、どんな人達だえ。
ひね　まづ役者で例へて見ようなら、粂三と八代目に生き寫しさ。
わた　待ちなよ、その八代目と粂三に似た女郎と二才は、この後ろの西念坊の所にたしか。
ひね　はあ、それぢやあこの後ろに來てゐますか。やれ、十萬億土を早い足だな。
勘太　こ丶は娑婆だといふに。

ひね　ほんにさうでござりました。して見ると、二人も心中をしないと見えるわえ。
金八　なに、今頃野暮に心中するものがあるものかな。
小兵（これを聞き）むう、そんなら昨夜の二人連が。（ト思入。）
ひね　若草伊之助を、何にしろ見たいものだ。
わた　とてものかゝり合ついでに、私が一緒に行つて敎へてあげよう。
ひね　それは度々御苦勞をかけます。
小兵　おツかア、今に酒が來るよ。
わた　あい、ぢき行つて來ます。

トおわた先にひね六路地口へはひる。

勘太　いや、とんだ混ッ返しだ。
金八　おゝ、うかうかする内日が暮れた。どれ行燈をつけようか。（ト行燈を出し、灯をつける。）
小兵　手前達はもうよからうぜ、早く鬼やらひをしまつて來て、ゆつくり呑まッし。
勘太　あい、さうしやせう。（ト麻の杖を持ち。）
兩人　それぢやあ親分、行つて來やすぜ。（ト兩人花道へはひる。）

小兵　こりやあ豆を蒔かざあなるめえ、えゝ面倒な。今おれた婆アの話では、割符を合はせた二人連、昨夜の奴等に違えねえ、殊に女郎とあるからは、云はずと知れた駈落者、弱みへ附込み片袖から文句をつけたら昨夜の百兩。

ト此の時下手にて、

○　福は内、福は内。（ト豆を蒔く音する。）

小兵　むゝ、いゝ、辻占だ。（トにつたり思入。鬼は外福は内の聲にて、此の道具廻る。）

（修行者西念内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面一間の押入、佛壇、上の方折廻し鼠壁、この壁に彩色の天人墨繪の佛像など張つてあり、いつもの所門口、下の方は隣りの長屋、正面に箔置の阿彌陀如來、傍に六阿彌陀寫し阿彌陀如來箔代建立願主西念といふ幟立てかけあり。よき所に蓮池を畫きし二枚折の屏風。こゝに西念前幕の修行者にて、破れたる行燈へ灯りをつけてゐる。

西念　冬至からは疊の目ほど日が延びるといふが、まだ一向に延びたが知れぬ。今日も朝から修行に出て、暮れぬ中に急いで歸つたが、もう入江町の暮六つだ、歩いては短い日ぢやが、戸棚の中に寐てゐては瞧長いことであらう。どれ／＼、（ト戸棚のそばへ行き、）さあ日が暮れました、ちつとこ

つちへ出さつしやりませ。
トこれにて内より戸を明ける。中に前幕の伊之助、若草ゐる。
伊之 あゝもう暮れましたか、昨夜とつけり寐ないものだから、戸棚の中でぐつすりやつた。
ト伸びをしながら出る。
西念 さあ〳〵、お前もこつちへ出さつしやりませ。
若草 もうそこへ出ても、ようざますかえ。(ト若草よき所へ出る。)
西念 嘸お前方、腹がへらつしやつたろ。茶はわしが出る時に、炭團をいけかけておいた故、おほかた沸いてゐる時分、何はなくとも、まあ飯でも上らつしやりませ。
伊之 なに、八つ時分に晝飯を食つて、それから直に寐たもんだから、まだねッから喰ひたくない。
若草 わたしよりはお前さん、嘸おひもじうありんせう、構はずお先へお上りなましな。
西念 はい〳〵、ちつと行かねばならぬ所もあれば、そんなら先へ喰べませう。(ト櫃を明けて見て、)やあ、こりやお飯がちつともない。てもよう上らつしやつたな。
伊之 なに、少しもないいえ、さつきまでいつぺえあつたものが。
西念 はゝあ、よめた。お櫃の蓋からこゝらあたりが、犬の足跡だらけだ。扨は戸の壞れから雌犬がは

ひり、お櫃を明けて食つたと見える。

伊之　それぢやア今夜、飯を炊かずばなるまい。

西念　さあ、五合ばかり鍋でゞも炊きませう。（ト立ちかゝる。）

伊之　うつちやつておきねえ、そりやおれがしよう。

若草　ほんに、知らぬながらも、わたしもとも〴〵。

西念　いかさま、是から二人で世帶をさつしやれば、どうで飯も炊いたり水も汲んだりせねばならぬ。そんなら稽古がてら二人で炊いて上らつしやりませ。私は今夜柳島にお齋があるから、先で馳走になりませう。

若草　（壁に張つてある天人を見て）もし伊之さん、彼處に張つてあるは、ありやお天人さんとやらおやね。

伊之　さうよ、ありやお天人よ。おゝ外に、まだいろ〳〵な佛が張つてある。

西念　さあ、この壁を張る時に、後ろ長屋の佛師屋から貰ひました下繪の反故さ。

伊之　西念さん、あの笙篳篥の音はどこだね。

西念　あれは天神様の別當所でござりませう。

伊之　いや、とんだ茶番のやうだが、正面には阿彌陀様、壁の張交には天人やら羅漢やら、笙篳篥は聞

えるし、極樂へ來たやうだ。
西念　違ひございませぬ、はゝゝゝ。
伊之　いや、その極樂の菩薩はあるかえ。
西念　さあ、五合位はこゝにあります。（ト偈箱より貰ひ溜の米を鍋へあけ、）おゝ丁度五合ばかりあります。首尾よく飯ができましたら、此の表の居酒屋で菜の物を賣りますから、何ぞ買つて上りませ。
伊之　なんの、錢はこつちにあるよ。はあ、それぢやあ表で菜を買ひやすか。
若草　書附を取つて見ようぢやありませんか。
伊之　馬鹿を言へ、部屋ぢやァあるめえし、
西念　そんなら私は行つて來ます。いや、なんぼ田舍近い所でも、吉原からは僅な路、殊に今夜は節分故、厄拂ひやら法印やら、種々な者が裏へ來る故、必ず表は明けさつしやりますな。
伊之　そりやお合點だ。おまへはいつ頃歸りなさるえ。
西念　四つ前には歸りませう。
若草　そんならお早う。（ト西念門口へ出て、）
西念　どれ行つて參りませう。（ト花道へはひる。）

伊之　西念坊も苦勞人だけ、通り者だなあ。（ト門口へ掛金をかける。）

若草　ほんに氣のおけない、よい人ざますねえ。

伊之　手前思ひついちやあいけねえぜ。

若草　堪忍しなましな、親にしてもよいやうな人を。

伊之　（思入あつて、）おゝその親と言やあ、いつぞは聞かうと思つてゐたが、手前の親元は他人ださうだが、實の親は何處だえ。

若草　さあ、私の實の親といふは、何處の誰とも知りませんが、守袋に印籠の片々を添へて捨てゝありしと、養ひ親のつね／″＼話し、それはお前も知つてのこと。また養ひ親は五歳の年、私を吉原へ賣つた後は音信不通で行方知れず、ほんの親は知りませんわな。

伊之　手前もおれも若え身空、これから先へ長く生きたら、逢へねえこともあるめえから、まアそれを樂しみにしてゐるがいゝ。

若草　ほんにさうざますねえ。五歳の年から親なし故、逢ひたうざますが仕方がおッせん。

伊之　まあ、それよりやあ夜食の支度だ、手前米でも磨ぎやな。

若草　あい、水でかきまはすのざますか。

伊之　いや、さうぢやあねえ、そんなことで裏店の何でかゝあになれるものか。

若草　稽古をすれば、出來いせう、まあやらしてくんなましよ。

伊之　さらば、おれがお師匠番か。

若草　もし、やさしく教へておくんなんし。

伊之　いやはや呆れ返つたものだ。どれ、政岡と出かけようか。

ト若草に手拭にて片襷をかけさせ、伊之助鍋の中へ水を入れ、捨ぜりふにて米の磨ぎ様を教へる。此内門口へひれ六出來り、戸の隙間より中を覗き腹の立つ思入にて、ばた〳〵と足拍子を踏み、門口を無暗にたゝく、是にて兩人びつくりして飛退き、伊之助若草を戸棚の中へ匿す。ひれ六夢中になり、門口をたゝき力足を踏み後ろへ倒れる。此の時路地口より小兵衛下駄穿きにて出來り、この體を見て、

小兵　そこへ倒れたは、おゝ、さつきの亡者か。

ト小兵衛手を持つて引起す、ひれ六やはり夢中にて、

ひね　え、腹が立つわえ〳〵。

小兵　これさ、どうしたのだ。（ト背中をたゝく、ひれ六心附き。）

ひね　閻魔さんか、ちよつと來て下され〳〵。（ト小兵衛の手を取つて花道へ連れ行き、）いよ〳〵あの家に

ゐるのが、若草伊之助に違ひない。わしを騙して連れ出させ、あの伊之助と匿れてゐることは、ええ腹が立つわえ〳〵。これ〳〵閻魔様、どうぞ敵をとつて下され〳〵。

小兵　何と言ひなさる、そこの家にゐるのが、若草伊之助に違えねえとか。

ひね　決して違ひはいたしませぬ、どうぞ敵をとつて下され〳〵。

小兵　これさ、まあ靜にしねえ。

ト　ひね六に囁く、ひね六呑込み又小兵衛に囁き、兩人うなづき舞臺へ戻り、ひね六は路地口へはひる。小兵衛門口へ寄つて、

もし、お賴み申しやせう、お賴み申しやせう。

伊之　（思入あつて）あい〳〵、誰だか今明けてあけやす。

ト言ひながら戸棚の傍へ來り、若草に囁く思入、小兵衛は門口より内を窺ふ。と、この時路地口より以前のお六、草履下駄の音をがた〳〵とさせて來り、

お六　そこにゐるのは、家の人ぢやあないか、何をしてゐるさんすのだ。

小兵　お六か、これ、（ト囁き）よしか。

お六　どうしてまあ、めつさうな。

小兵　はて、大事ない、しかけて見ろ。（ト合方になり、小兵衛鏡ふこなし、お六門口へ來り、）

お六　あの、ちつとお賴み申しまする。

伊之　あい、今明けます。（ト門口を明け、顔を見合せ、）おゝ男の聲だと思つたら、こりや小粋な、いや。お前はどこから。

お六　私や脊中合せの裏長屋、小兵衛といふ佛師屋の女房でございますが、西念さんはお留守かえ。

伊之　修行先に齋があるとて、日が暮れてから出て行きました。

お六　さうでござんすか、さうしてお前さんはえ。

伊之　わつちかえ、わつちは居候さ。お上さん、何ぞ用でもありますなら、歸つたらさう申しませう。

お六　あい、お長屋の喜左衛門さんの家に産があつた故、長屋中が寄合つて祝つてやりますから、それを屆けにまゐりました。

伊之　それは大きにお世話さまでござります、歸りましたらさう申しませう、お長屋衆によろしくお賴み申します。

お六　左様なら、お酒の三升もやりませう。ほんにお前お淋しからう、ちつと遊びにおいでなさい。

伊之　有難うござります。

お六　ほんに男世帶で、嘸不自由でござんせう、裁縫でもあらばおよこしよ。
伊之　またお賴み申しませう。
お六　西念さんも獨り者故、いつでも私が仕立屋さ。もし／＼、お前袖口がほころびてゐるよ。
伊之　いやもう、ほころびは常不斷さ。
お六　若い者が見ッともない。ちよつとお出し、縫つて上げやせう。
伊之　なに、お氣の毒な。そして、絲や針も。
お六　いえ／＼、私が頭に袖口ぐらゐのほころびは、おゝこれ／＼。（ト髷にさしたる針をとつて）丁度縹色の絲がありやした。さあ、寒からうがちよつとお脫ぎ。
伊之　裸にならずと、片肌ぬいで、（ト肌をぬぎ）おゝ寒くなつた。自由ながらこのまゝで。（ト袖を出す。）
お六　ぢつとしておいでよ。（ト お六伊之助の傍へ寄り、左りの手にて袖を控へ右の手にて行燈を引寄せ、かきたてようとしてわざと灯りを消し、）これは粗相な、つい消したわいな。
伊之　えゝ、暗黑になつちやあ大變だ。もうほころびは止しませう。
ト燧箱を尋ね、捨ぜりふにてかち／＼と打附ける。これを聞いて小兵衛そつと內へはひり、よき所へ坐る。伊之助附木へ火をうつし、

さあ〳〵附きましたく〳〵。何處の國にか不遠慮な、お長屋のお上さんとたつた二人、灯りを消して、（ト行燈へともし、ふと小兵衛を見て、）や、こなたはどこから。

お六　ほんにお前はいつの間に。

小兵　ふんばり女め、動きやあがるな。（ト伊之助に向ひ、）もし、私ア裏長屋に住む、閻魔小兵衛といふ佛師屋職人の貧乏人だが、見りやあ此の長屋で顏も知らねえ小二才、一人暮しの此の家へ他人の女房を引きずりこんで、慰みものにさしツたか。間男は御定法、並べておいて四つにするぞ。

伊之　むゝ、そんならお前が、このお上さんの御亭主か。今來て逢つたお上さん、そんな覺えはありやあしねえ。

小兵　覺えねえとは言はさねえ。人の女房と暗黒に二人ゐるのが第一不審、言はずと知れた間男だ。あ野郎、何とか返事をしやあがれ。

お六　實にお前に濟まねえが、私アほんに迷つたのさ。

小兵　うぬ、亭主の前でよくもそんなことをぬかしたな。
　　ト片肌ぬいできつとなる。小兵衛の腕に犬といふ字の痣あること。

伊之　（思入あつて、）あゝこれで讀めた。女房を玉に美人局、扨は亭主も、（ト腕の痣を見て、）やゝ、腕の

— 慧は。（ト目を附ける。）

小兵　や、（ト小兵衞うろたへて、肌を入れる思入。）

伊之　こいつあ仕事にかゝつたか。

小兵　それに似寄りの、この片袖。（ト前幕の袖を見せる。）

伊之　すりや、その袖を。

小兵　證據にしたなら枝が咲く、さ、若いの、こんな餘計の仕事があつちやあ、よもや女房と間男を。

伊之　さあ。いや、しやしたよ。

小兵　いよ〳〵こなたが、

伊之　女房の間男、

小兵　間男ならば首代貰はう。

伊之　むゝ、してその首代は。

小兵　たんともいらねえ、たつた百兩。

伊之　なに百兩、いやお前も眼玉は大きいか、こりやあちつと見損ひだ。高が裏屋の居候、金と言つちやあ。

小兵 いゝや、ないとは言はさねえ。袱紗包みに、小判で百兩。

伊之 や、

小兵 手にあることも見ておいたが、ないと言ふならこの片袖、首代替りに詮議をせうか。

伊之 さあ、それは、

小兵 耳を揃へて百兩だすか。

伊之 さあ、

小兵 この片袖の詮議をせうか。

伊之 さあ、

小兵 さあ、

兩人 さあ〳〵〳〵。

小兵 きり〳〵百兩、出してしまへ。

伊之 むう、すりやどうあつても百兩を。

小兵 出さにやあ袖の出所を、詮議したなら勾引。

伊之 むゝ。

小兵　いやでも首代出さゞあなるめえ。
伊之　（思入あつて、）いゝや、首代出しにくいが、その片袖を賣るなら買はう。
小兵　むゝ、百兩ならば首代兼ねて、この片袖も賣つて進ぜう。
伊之　賣るとあるなら引替へに、
小兵　この片袖と、（ト袖を伊之助の前へ出す。）
伊之　（伊之助懐より金を出し、）この百兩。
兩人　どれ。（ト兩人引替へに取り、思入。）
小兵　首代たしかに受取つた。
伊之　こつちは袖を買ひきる百兩、これぢやあおれが惡名も、
お六　間男沙汰も、
小兵　算用濟んだ。

ト四つの鐘鳴る。

お六　あゝもう四つか、寒くなつたの。
小兵　寐酒はあつたか。

お六　あい、とつておいたよ。
小兵　どれ、歸つて暖まらうか。（ト立上り、懐より金を出してお六に見せる。）
お六　お前またそれを取られちやいけねえよ。
小兵　馬鹿ア言へ、今ぢやあ堅氣だ。取られる金がありやあ、烏金でも貸すわえ。

ト言ひながら小兵衛、お六門口へ出る。

伊之　あ、ちぎれた袖を百兩とは、すてきに高い代物だ。

ト此時戸棚の中にて、ばた／＼と音する。小兵衛この音を耳にして、

小兵　あれこそ、たしかに。（ト内を覗くを、）
伊之　（つか／＼と來て門をしやんと閉め、）えゝ、をとゝひ來なせえ。

ト唄になり小兵衛お六に囁く、お六うなづき下手へはひる。小兵衛は路地口へはひる。伊之助門口を明け思入あつて、

何は兎もあれ若草が、戸棚の中にゐることを、氣取つた上は此家に、うかつに足は留められねえ。ちつとも早く巣を變へて、（トつか／＼と行き戸棚の戸を明ける。後ろの壁を切破りあるに、伊之助びつくりして、）やゝ、こりや戸棚の壁を切破り、（ト此の時切破りし穴より、以前のひれ六脇差をさし、ぬつと

出るぞや、われは。

ひね　若草が客のひね六だ。(トずつと出る。)

伊之　扨はこなたが、若草を。

ひね　おゝ、盜みだした。

伊之　なんと、

ひね　これまで廓にゐる中に、われ故多くの金を取られ、鼻毛をよまれた意趣返し荷擔人賴んで降りから、壁を破つて若草はこのひね六が盜みだしたが、われがあつては寐覺が惡い、殺しておいて若草を此ひね六が女房にする氣だ。さあ、かなはぬところと覺悟しやれ。

ト拔きかゝるを伊之助留め、戸棚の内を見て、

伊之　むゝ、壁の後ろはたしかに小兵衞、扨は是れも彼奴がさしがね。

ひね　知れたことだわ。(ト拔打に斬つてかゝるを、ちよつと立廻つて、)

伊之　表を廻るは面倒な、破れし壁より。(ト伊之助行かうとするを、)

ひね　われをやつては。

ト支へる。それより伊之助有合ふ勸化幟にて立廻り、ひね六の一腰を打落し、これを取つて行かうと

するを留める、この立廻りの内にひれ六を一トかせ切る、ひれ六ワツと倒れる、伊之助見て、

伊之　や、手の廻りにて思はぬ深手。

ひね　人殺しだ〳〵。（ト聲を立てる。）

伊之　えゝ、是非に及ばぬ。

トひれ六を斬り倒す、ばた〳〵になり、以前の西念足早に出來り、門口を明けこの體を見ておどろき、

西念　やゝ、こりや伊之助殿には、人をあやめて、

伊之　さ、これには段々。（ト言譯をしようとする。）

西念　あゝこれ、（ト四邊へ思入あつて、）ひそかに〳〵。

ト心遣ひの思入、伊之助ひれ六に止めをさす。この見得時の鐘の送りにて道具廻る。

（元の佛師屋の場）　本舞臺元の佛師屋の道具へ戻る、こゝに若草に猿轡をかけ、赤鬼の勘太、青鬼の金八繩にて縛りゐる、小兵衛はよき所に焚火をしながら砥石にて脇差を磨いでゐる。此の見得時の鐘凄き合方にて道具納まる。

勘太　親方、この女はどこへやらう。

小兵　いや、こかすにや及ばねえ、野郎の來るまで二疊へでも入れておけ。

兩人　合點だ。さあ運びな。（ト兩人して若草を上手の屋體へ入れ、出て來る。）

小兵　ふん、手前達は刄物はあるか。

金八　別當所で一つづゝ借りて來やした。（ト閻魔の蔭より脇差を出す。）

小兵　それぢやあ野郎が來たならば、な、（ト囁き、）合圖をしろべに、

兩人　下からぐつさり、

小兵　どぢを働くな。

兩人　合點だ。

ト下手の揚板をあげ、椽の下へはひる。小兵衞刀を磨きしまひ、焚火にてきつと見る。時の鐘下手の壁の破れより伊之助腰を差し、窺ひ出で兩人顏見合せ、小兵衞は刀を後ろへ匿し、兩人きつと思入。

小兵　や、こなさんはさつきの、

伊之　間男でござります。

小兵　夜更さふけにどこからござつた。

伊之　くづれた壁の破れから。

小兵　はて、無遠慮な。（ト伊之助のよき所へ住ふを見て、）して、何ぞ用かえ。

伊之　あい、無心に來ました。

小兵　そりや何を。

伊之　（以前の片袖を出し、）この片袖の身ごろをば。

小兵　なんと。

伊之　貧乏暮しの押入から此家へぬけるくづれ穴、鼠が引いたか隱したか、身幅も狹き女物、而も廓の派手模樣、身ごろの合ふわつちに下せえ。

小兵　いや鼠が引いたか知らねえが、見なさる通りの裏長屋、隱しどころもねえ住居、

伊之　すりやこなさんはこの袖の、

小兵　身ごろとやらは知らねえの。

伊之　知らぬとあらば家搜しして。（トきつとなる、上手屋體にてばつたりと音する。）や、あの物音は、

小兵　鼠が出る故地獄おとしさ。

ト此の時伊之助の前へ白刃二本出る、是を見て、

伊之　や、この白刄は。

ト小兵衞南無三といふ思入にて有合ふ摺鉢を焚火へ置く、これにて暗くなる。

小兵　や、

地獄落しか極樂か、劍の山よりけんのんな、

伊之　こりやめつたに油斷はならぬわえ。

ト時の鐘凄き合方になり、双方へ別れきつとなる。これと同時に上手屋體より若草縛られたまゝつかつかと出る。小兵衞伊之助を切らうとするはずみに若草の繩を切る。これにて猿轡取れ、暗がりにて危き立廻りになり、探り〳〵伊之助若草へ行當り、頭を撫でゝ見て、

若草か。

若草　伊之助さんか。

ト此の聲をしるべに小兵衞斬つてかゝる。伊之助身をかはし脱れる。この拍子に若草たぢ〳〵となり、上手の鏡臺へ手を突き、手へ剃刀のさはりし思入にて取上げる。この中緣の下より勘太、金八出て闇を小楯に面白き立廻りよろしくあつて小兵衞若草を一刀斬る、若草アツと倒れる。この聲に伊之助小兵衞を斬る、小兵衞立廻つて伊之助を斬る。勘太若草を引附ける。金八は摺鉢の上へこけかゝり、

そのまゝ摺鉢を取る、これにて焚火パッと燃える。小兵衛閻魔の上より斬りかゝる、伊之助刀にて受けるこの見得にて明るくなり、三人きッと見得。小兵衛の疵口より流るゝ血汐若草の血と一つに寄るにつと目を附け、

小兵　やゝ、今若草を斬りし血潮と、我が疵口より流るゝ血と一つに寄りしは、むゝ。

兩人　何と。

ト伊之助、若草小兵衛に斬つてかゝるを、勘太、金八支へる。小兵衛思入あつて、

小兵　もしや若草が左の腕に、犬といふ字の、（ト又立廻りの内、勘太、金八若草の腕を捲り痣見ゆること、）扨こそ痣のあるからは。（ト又立廻つて、伊之助勘太、金八を當てる。小兵衛守り袋より印籠を一重出し、）この印籠をとくと見やれ。（ト投げてやる。）

伊之　（取上げ見て、）この印籠は若草が、親の形見と肌身放さず、

若草　大事にかけし片々の印籠、（ト若草守り袋より印籠を出し、合せて見る。）

伊之　時代蒔繪の雪の梅、

若草　模樣もしつくり合ひたるは、

小兵　小松殿より拜領せし、

伊之　扨は平家の某と、
若草　臍の緒書きに記しあるは、
小兵　邪慳な親のこの盛次。
伊之　そんなら此方が、實父なりしか。
若草　とゝさんでござんしたか。
小兵　別れ程經し娘であつたか。
　ト三人顏見合せ、
三人　やゝゝゝゝ。
　トびつくり思入、小兵衞思入あつて、
小兵　あゝ思ひ出せば一昔、この身の懺悔聞いてくりやれ。（ト謠への合方により。）今は何をか包むべき、元我こそは平家の近臣、越中の前司盛俊が一子次郎兵衞盛次、父前司子なきをうれひ犬神を祈りて儲けし故、腕に犬といふ字の痣あり。我またいまだ壯年の時、主馬盛光が娘をめとり間もなく我胤を懷胎なし、産落せしは女子にて、不思議なるは左りの腕に犬といふ字の痣あるを、母は見るよりいまはしく、心苦しく思ふ内遂にはそれが原因となり、七夜立たざるその内に果敢なく此

の世を去りし故、是非なく〱も乳母の乳で二月あまり育てしが、日頃信ずる陰陽師我娘をつらつら見て、劍難の相ある上家に祟ると敎へられ、不便ながらも當歳にて三條小橋へ捨つる折、親子の緣の盡きずして、名のり合ふべき時もがなと傍にあり合ふ印籠の上の一つを守袋へ入れ、淚ながらに棄てたるは早二十年の昔にて、それより平家沒落して斯く淺ましき身となりはて、祟ると言ひし家もなく、今更棄てしを後悔なし、雨の夜雪の朝には思ひ出さぬこともない。あゝ親はなくとも子は育つと、よくも成人なせしよな。

ト小兵衞若草を引寄せる、若草もすがり寄り、

若草　年頃尋ねし父さんに、めぐり逢ひは逢ひながら、思はぬ深手を負ひし身に、

小兵　逢ふは別れの今の仕儀。（ト若草の頤へ手をかけ、）娘、

若草　父さん。えゝ、おなつかしうござんすわいな。

ト若草すがり泣く、小兵衞淚を拭ふ、伊之助ほつと思入あつて、

伊之　神ならぬ身の情なや、知らぬことゝは言ひながら末は女房と約束の現在親を手にかけしは、天より罰を受けたるか。棄兒と思ひし若草は系圖正しき身と知れて、今更なんと言譯も立つに立たれぬこの場の有樣。

若草　名乘る甲斐なく先立つ不孝、殊には親に刄向うて薄手ながらも手を負はせ、嘸や浮世の口の端に、

伊之　かゝりや繫がる親人へ、刄を當てし申譯（ト伊之助脇差を腹へ突立て、）これにてどうぞ許して下さ

え。（ト苦痛の思入。）

小兵　（見て、）あゝよしなく我が名乘りし故、あたら花を散らせしは、思へばく不便やなあ。

伊之　知らぬ先は兎も角も、親殺しの汚名を受け、

若草　死ぬる二人の身の悲しさ、

伊之　犬死なすが、

兩人　口をしい。

小兵　いや、犬死ならぬ、御身替り。

兩人　すりや、何人の。

小兵　（思入あつて、）三位中將重衡卿まつた吳羽の內侍詮議きびしき街の立札。（ト懷中より人相書を出し、）そち達二人が面體年頃、丁度似寄に首討つて源家へ渡し若干の、恩賞受けんと邪慳にも、科なき者を殺さんと思ひし者は棄てたる我子、願うてもなき御身替り、二人が首にて一旦の詮議の闇み開かせて、何處に忍びましますか、お行方尋ぬる我心底。

わた（この以前より門口に窺ひゐて）扨は小兵衛は平家の落人、殊には重衡內侍が僞首、注進なして褒美の金子、さうだ。

ト行かうとする。路地口より西念出で、おわたを捉へ突廻して當て、下手の釜の中へ打込む。

小兵（門口を明けこれを見て）や、あなたは隣りの。（ト思入。）

西念 氣遣ひあるな、盛次殿。

小兵 や。（トきつとなる。）

西念（內へはひりて）その贋首へ極書、この西念が進上申さう。

小兵 なんと。

西念 假令似寄りの面體でも、邪智深き源氏方、證據なければ受取るまい。その極はこの系圖。

ト前幕にて手に入りし系圖を渡す。

小兵 やゝ、こりや重衡公御所持の系圖、扨はこなたも由緣の者か。

西念 いかにも、最前よりの一部始終承つて驚きしは、現在血筋の人々故、

小兵 然いふこなたは何人なるぞ。

西念 名乘るも面ぶせなれど何をか包まん、我こそは貴殿の妻女の弟たる、主馬判官盛久なり。

小兵　やゝ、盛久殿であつたるか。
西念　我十歳代のその折に一度逢うたるその儘にて、領地に人となつたる故、互ひに面は見忘れしが貴殿の懺悔に不思議の對面。あゝ、さはさりながら、名乗る甲斐なき今の身の上。
小兵　すりや、貴殿にも世を忍び、
西念　亡き一門の追善旁々、時もあらばと恥を捨て、表は殊勝な有髪の僧。
伊之　（聞いてゐて思入あつて、）そんなら、つながる。
若草　あの、伯父樣でござりましたか。
西念　あゝ現在血筋の伯父なれど、知らぬことゝてこれまでは、
伊之　他人向きにて二人とも、
若草　お世話になりしも、
西念　亡き妹の導きなるか、
小兵　あ、いかなる過去の宿業にや。
伊之　未來の苦患眼の前り、
若草　親子刄を合はせしは、

小兵　とりもなほさずこれ修羅道。
伊之　閻魔の前に寄り合うて、
若草　見るもうたてき劍の山、
西念　心の鬼に責められて、
小兵　阿鼻叫喚の苦しみより、
伊之　つらき親子の、
若草　一世の別れ、
西念　思へば果敢ない、
四人　身の上ぢやなあ。（ト四人手を取交し、よろしく思入。）
伊之　あゝ、いつまで言うても返らぬこと、憚りながら御介錯。
小兵　いふにや及ぶ、
西念　あたら若木を、南無阿彌陀佛。
ト伊之助腹の刀を引廻す。若草うつとりとなり、よろしく手を合せる。
小兵　えい。

ト首を打落す、これをキッカケに遠寄せの鳴物を打込む。西念思入あつて、

西念　や、あの太鼓は。

ト此時勘太、金八心附き兩人にかゝるを立廻り引附ける。

小兵　最前女房お六に言附け、重衡卿梟羽の內侍捕虜となせし故、首討つて渡さんと梶原が旅宿へやつたれば、首受取りの討手ならん。さるにても此系圖、いかにして手に入りしぞ。

西念　その一卷の手に入りしは、夜前隅田の川原にて。

小兵　やゝ、なんと。（ト思入。）

西念　折しも月の雲隱れ、あたり小暗き川の岸。（ト勘太、金八かゝるを立廻りながら、）入水の者か水音にぱつとさはだつ群鷗、怪しと窺ふ蘆原にて躓き拾ふその系圖、帛紗は覺えの劍先布、內やゆかしく開き見れば、系圖と共に入れありしは、秩父三十四ヶ所の守り、これにて思ひ合すれば重衡卿には順禮に、姿をやつしてお忍びありしか。

小兵　さては夜前隅田川にて、軍用金になさんずと、金に目がくれ突落せし順禮夫婦は、まさしく尋ぬる、やゝゝゝゝ。（トびつくりなし、）身替り首にて詮議をゆるませ、君の御行方尋ねんと思ひし事も今となり、水の哀れや兄弟も腕の痣の犬死なるか。えゝ知らぬこととは言ひながら、現在この身は

主殺し。（ト腹を切らうとする、勘太、金八これを支へる立廻り。）

西念　やれ待たれよ、早まられるな。もし人違ひであるならば千萬悔いても返らぬこと、急く所ではない盛次殿。いざ此上は二人の首級、片時も早く持參あられよ。

景季　（上手の屋體にて。）やあ、持參に及ばず、梶原源太景季疾よりこれにあり。

小兵　なんと。

ト小鼓の入りし合方になり、上手の屋體の障子を引抜く、内に景季長上下大小にて、左右に袴股立の郎等桶を持ち控へゐる。小兵衞これを見て、

こりや、いつの間に。

景季　最前女房が注進に、裏より忍び始終の樣子。いや、疾より是に待受けたり。

郎一　重衡内侍二人の首級、

郎二　早く實驗に供へてよからう。

トこれにて小兵衞思入、西念兩人の首を景季の前へ出し、

西念　（お訴へ申せし重衡内侍が首、證據は即ちこの系圖、いざ御檢分下さりませう。（ト系圖を出す。）

景季　（見て。）ほ、お三位中將重衡、吳羽の内侍に相違ない、出かした〱。よくぞ討ちしぞ恩賞くれ

ん。やあ〳〵、申附けたる品これへ。

お六　(下手にて)はあ。

ト時の太鼓にて、下手よりお六先に三位中將、昊羽の前順禮裝にて出來る。

小兵
西念　(見て)これは。

お六　もし、こちの人、梶原樣のお情にて下しおかるゝ御褒美は、常々お前の尋ぬる品、ようお禮をおつしやりませ。

小兵　すりや御二方を。はゝはッ、御情厚き御賜物、有難く頂戴仕ります。

西念　して御二方には、如何して、御安泰にてましませしぞ。

三位　夜前隅田川原にて測らず入水なしたるが、日頃信心なし奉る、熊野三社の靈驗なるや。

昊羽　水に溺れず不思議にも、流れ寄りしは待乳の麓、折よくこれなる景季殿通行ありて助けられ、

お六　御二方のお命に、恙のないもあなたのお蔭。

小兵　は、寛仁大度の梶原殿へ、此の身の素性包むに詮なし。

西念　名乘る甲斐なき事ながら、われ〳〵こそは。

景季　こりや、平家に由縁の者あらば、首討てよとある、鎌倉殿の嚴命なるぞ。

兩人　むゝ。（ト兩人思入あつて）
西念　斯くまで厚き情を受け、又向ふ又のあるべきぞ、たゞこの上は御二方の御安泰を願ふのみ。
小兵　いかにも、是まで集めし軍用金も、凡そ員數三千兩を祠堂金となしたまひ、君にはこれより高野へ登り、亡き一門の追善供養。
三位　ほゝ言ふにや及ぶ、某も疾より浮世を捨法師、
吳羽　佛へ仕ふる身は墨染め。
ト三位中將、吳羽肌を脱ぐ、下は白の裝に墨衣の袈裟をかけゐる。
西念　その御供は、この西念。
景季　重衡ならぬ今道心へ、源太景季施物なさん。
ト以前の系圖を三位中將へ渡す。
三位　や、こりや失ひし家の系圖、忝ない。
小兵　是にて我も安堵せり、今ぞ此身の邪道に、積惡報ふ自業自得。（ト刀を腹へ突込む。）
景季　ほゝお、惡に強きは善にも強し、
お六　私も共に、死出三途。（トお六死なうとするを西念留めて）

西念　こりや、死ぬる命をながらへて、

三位　夫の菩提、

吳羽　法の道連。（ト此時鷄鳴く。）

景季　最早鷄鳴。

郎等　お立ち。

大勢　（下手にて）はあゝ。

ト皆々四天矢筈の紋附の提灯を持出る。この時、

樂屋頭取　（立いで）まづ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し。

閻魔小兵衛（終り）

梅蝶樓に寄する聖廟の梅園 菊地貞行が菅神の初詣に召れて茲へ御目見得は さぞ若衆哉く 其鶯替の鳥山秋作

御攝御好任 七草四郎 若菜姫が 合巻其儘島原歌舞伎榮

柳下亭に比する博多の柳町 大友刑部が廓の初買に名ざして茲へ御目見得は さぞ女かなく 其浪枕の契情船越

此頃筑前の鐘の岬に蛙の合戦ありと聞く噂も高き額堂に神の御燈の蔭澤と共に消行く雪岡が無念は晴れぬ雨催ひ親子の緣も淺倉に我身を贄に秋篠が一念通す岩太郎の變を三つ地の小鼓に打て替りし犬千代が天女の加護に宮島の試合天晴なるかな豐後之介が三年で歸る忠義始めに青龍の兜を諫言の種員

其頃豐後の錦ヶ獄に蜘の妖怪ありと聞く噺も朧の春の夜の月の照葉は影くらき松代と共に落人が身により掛る雪催ひ積る怨みの執着に小磯が嫉妬眞平が哀れ命を捨小舟浮世の夢も鮫藏に毒藥變じ鯖九郎が鬼も佛に阿彌陀寺の腹切健氣なるかな多聞之介が初冠の手柄はじめは白雉の鏡に治世の國貞

志らぬひ譚

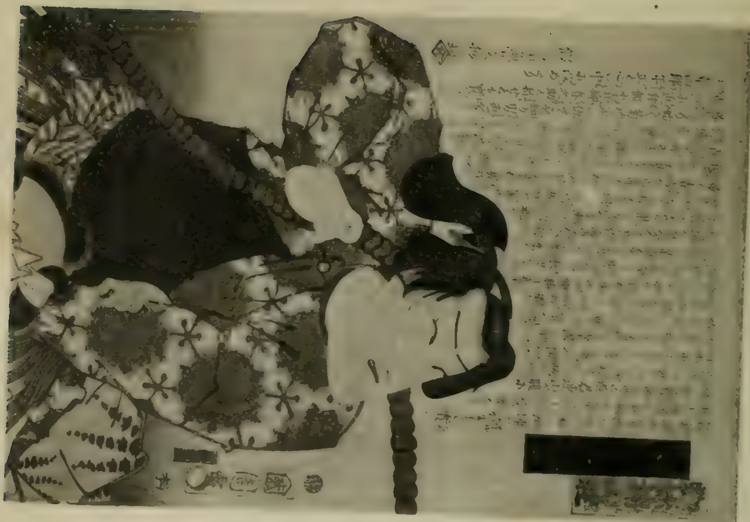
新春御慶廼 ○

白縫譚は嘉永六年二月、作者三十六歳の時、河原崎座に書卸された。柳下亭種員の『白縫譚』を脚色せるものであつたが、異常の好評を博し、後日狂言さへ續いて上場されたくらゐである。合巻又は草雙紙を作者が取扱つた標本として輯錄した。篇中乳母秋篠が忠死するの件と小磯の嫉妬とは、特に舞臺効果に富み、屢ゝ上場される場面である。

書卸し當時の役割は、坂東彦三郎(鳥山豐後、七草官丁禮の亡靈、漁夫鰭九郎、大友刑部)、嵐璃寛(菊池貞行、乳母秋篠、漁夫浪六)、坂東しうか(若菜姬、青柳春之助、小磯)、嵐璃玨(鳥山大千代後に秋作照忠)、坂東竹三郎(雪岡冬次郎、照葉)、淺尾奥山(大友岩太郎、漁夫鮫藏)市川團之助(蔭澤夏之丞、雪岡腰元松代)、市川男女藏(淺倉三太夫)、嵐和三郎(龍川小文次)、坂東大吉郎(漁夫鱶八、雪岡下部眼介)等であつた。

挿繪にしたのは、豐原國周筆の見立錦繪で、五世菊五郎の家橘時代の春之助幷に先々代田之助の若菜姬である。

大正十三年七月　　編者誌す





しらぬひ譚（白縫譚――八幕）

序幕

筑前莖ヶ岡の場
同　鐘ヶ岬の場
同　錦ヶ嶽の場

〔役名――漁夫春吉後に青柳春之助、大友の息女若菜姫後に白縫大盡、六部經典實は玄海灘右衞門、鷲津七郎正吉、旅虛無僧實は鷲津六郎正時、漁夫梶作、同磯平、同浦藏、同洞六、同沖藏、同濱六、同鳩八、同澪藏、同鱶八、同漕六、同灘藏。七草官丁禮の亡黨等。〕

（香椎明神祭禮の場）――本舞臺三間後淺葱幕、所々に地口行燈をかけ、上の方に朱塗りの片鳥居、眞中に誂への高札を立て、舞臺前波板、總て筑前莖ヶ岡、香椎明神祭禮の體。爰に磯平柿の筒ツぽう、漁夫の裝、大きなる畚へあわび貝にて目鼻を附け引網をあふり、浦藏、洞六、濱六、鳩八、澪藏同じく漁夫の裝にて立ちかゝり、波の音屋臺囃子にて賑かに幕明く。

皆々　何でも目出度い、舞ひこめ〳〵。（トみな〳〵獅子を舞つて、）

浦藏　さあ〳〵、一息ついて明神さまから、濱中を廻らにやあならねえ。

皆々　それがいゝ、一服やらかせ〳〵。（ト莚を敷き、皆々これへ住ふ。）

磯平　けふは日和もよくッて、明神さまの祭も賑かで、濱中の仕合せだ。

洞六　それ〳〵、いつぞやから此の鐘ケ岬の沖に、夜な〳〵光り物があつて、去年の暮から漁がさつぱりなかつたところ、

濱六　領主の殿樣が此沖に沈んで居る、釣鐘を引上げたらば、その光り物もなくならうから、

鳩八　水練を得たものに、海へ這入つて其鐘の龍頭へ綱を附けて來た者には、莫大の褒美を下さるといふ。

浦藏　あれ、あの通りの高札が所々に立つた其日から、光り物はあるが此の四五日、久しぶりで大漁があつたゆゑ、

磯平　濱中の者が生きかへつた心持で、お禮の爲に鎭守の明神で祭りをするのだから、おもひれ賑かにするがいゝ。

澪藏　是れから何でも、獅子を濱中の家々へ、舞ひこませにやならねえ。

皆々　それがいゝ、支度をしろ〳〵。

ト濱唄、聖天になり、花道より梶作世話親仁の裝、三方へ造酒徳利と強飯の高盛りを載せて持ち、近

藻島田鬘やつし娘の裝、重箱の風呂敷包みを提げて出來り、

苅藻　とゝさん、向ふの鳥居の前に、若い衆が獅子をもつて集まつてぢやわいな。

梶作　おゝさうだ〳〵、早くあそこへ强飯を持つて行き、喰はせてやれ。

苅藻　あい〳〵、さあ行きなさんせ。（ト右鳴物にて兩人舞臺へ來て、）

梶作　おゝ濱の若い衆達、獅子がよく出來たな〳〵。

浦藏　誰かと思つたら、漁夫仲間の春吉の父さん、

磯平　妹の苅藻どのも一緒に、よくござつたなう。

皆々　さあ〳〵、ござれ〳〵。（ト梶作苅藻眞中へ來て、）

苅藻　皆さん、今日は大きに御苦勞でござんす。おいしくはあるまいが、お强飯にお煮染を持つて來たほどに、澤山あがつて下さんせ。（ト重箱を出す。）

洞六　そりやあ忝ない、今獅子が出來上つて、丁度煙草にしたところ。

濱六　よつほど腹もきた山時雨、辭儀なしに馳走になりませう。

露藏　腹を丈夫にして、父さんの家へ舞ひこむぞえ。

鳩八　さうだ〳〵、苅藻さんもゐるから、獅子の洞入りをやらかすがいゝ。

苅藻　えゝも、何を言はしやんすぞいなあ。

梶作　いや、賑かで目出度い〳〵。皆の衆も知つての通り、鐘ケ岬の沖中に夜な〳〵の光りもので、去年の暮から大不漁、此頃四五日空も晴れ、久し振りで漁が澤山あつたゆゑ、濱中が言合せ香椎の明神さまへお禮がてらの祭禮、おらが家が濱行事に當つたゆゑ、強飯やら煮染やら今朝からのこしらへ、晩にはお造酒開きで、酒を澤山呑ませるほどに、皆早う來さつしやれや。

浦藏　それは忝けない、さうして孝行息子の、春吉はどうしましたの。

梶作　聞かつしやれ、日頃から親孝行の春吉、この度御領主の菊池貞行樣がお建てなされたあの高札、海の底に沈んで居る釣鐘へ綱を附けた者には、多くの褒美を下さるとあるを聞くと、何でも手柄して褒美を貰つて、此親仁を樂にすると、此中からお船出を待兼ねて居たところ、

苅藻　けふ殿樣が袖の港から、お船に召して浦々を御遊覽と聞かしやんして、何でも今日こそ手柄すると言はしやんす。何ぼう小い時から海邊に育つたとて、千尋も知れぬ海の底、止しにせいと父さんが留めるを聞かず、最前お船先へ行かしやんしたわいな。

梶作　こなた衆は知るまいが、あの春吉はおれが妹おれんの子、父親は樣子あつて他國のもの、春吉を生み落すと間もなく、妹は死んだゆゑおれが方へ引取り、苅藻が兄にして育てゝゐる義理ある

倅、日頃から顔形に似ず水練の達者、氣遣ひはなけれども、怪我でもあるまいかと案じられるわいなう。

磯平　そりやもう、案じさつしやるは尤もだが、漁夫仲間で誰も及ばぬ春吉が水練、

洞六　まんまと龍頭へ綱を附け、褒美を貰ふは知れたこと。

皆々　必ず案じさつしやるな。

梶作　皆の衆が其やうに、言つてくれるで力が附いた。これ娘、おれは明神さまへこれを供へて、倅が身に恙ないやう、お願ひ申して來るほどに、わが身は先きへ歸つて、何かの支度して待つて居や。

苅藻　あい〳〵、早うおまゐり申して來なさんせ。

梶作　そんなら皆の衆。どれ、お供へ申して來ようか。（ト右の鳴物にて梶作三方を持ち、鳥居の内へはひる。）

苅藻　さあ〳〵皆さん、早うお強飯をあがらぬかえ。

浦藏　いやも、さつきから喰ひたくつて、喉がぐび〳〵鳴つて居る。

濱六　しかし、苅藻さんが見て居ては、少しこツ恥かしいやうだ。

磯平　えゝ、笑はしやあがるぜ。さあ〳〵、やらかせ〳〵。（ト此時向ふにて）

鱶八　濟まねえぞ〳〵。

ト端唄聖天にて、花道より鱶八漁夫の裝にて、角樽を手拭にて肩に掛け、同じ裝の沖藏の胸倉を取つて出る、漕六同じ裝にて留めながら出て、

漕六　これさ鱶八、今日は目出度い濱の祭りだ、いゝ加減に了簡さつせへ〱。

鱶八　いや、いやだ、おれが行先へ突當りやあがつた沖藏、了簡ならねえ〱。

沖藏　これは又迷惑千萬、貴樣の方から突當り。しかし、わしが惡くはあやまらう、道中で人も見る、まあこゝを放してくれ。（ト鱶八の手を放す。）

鱶八　いや、放さねえ、いやだ〱。（トまた立掛るを、漕六中へはひつて留める。）

漕六　まあ〱、おれに預けろ〱。

鱶八　いやだ〱、濟まねえぞ〱。（ト爭ひながら舞臺へ來る、苅藻見て、）

苅藻　お前は鱶八さん、見ればきつう腹立てなんした樣子。また沖藏さんも濟まぬ顏附。漕六さん、どういふ譯でござんすえ。

漕六　其譯は、今こゝへ來る道で、鱶八に沖藏が突當つたといふ、いや、そつちから突當つたといふごたつきよ。

苅藻　不斷からの心安だて、もうよい加減に了簡して、仲直りをしなさんせいなあ。

浦藏　さうだ〳〵、苅藻さんの言ふ通り、心安い友達仲間、
洞六　殊に目出度い明神さまの祭りなり、
皆々　了簡さつしやい〳〵。
鱶八　成程けふは目出度い祭りといひ、おれも此濱へ返り新參なれば、手前達に籠められねえやうに、酒を一杯呑ませうと、此通り持つて來る道で、沖藏の野郎が突當つたもんだから、了簡ならねえといふのよ。
沖藏　これさ鱶八、どうしたもんだ、出合頭に貴樣から突當りながら、おれが突當つたといふゆゑ、そんならおれにして了簡しろと言つたなら、もうい丶加減にするがい丶ぢやあねえか。
苅藻　沖藏さんの言はしやんす通り、出合頭のお互ひに言ひが丶り、元より根もない間違ひなれば、もう大概に不承したがようござんすわいなあ。
鱶八　いや、いや、根も葉もねえことはねえ、不斷からおれが惚れて居る苅藻、口說いて見てもぴんしやんするは、沖藏めと腐りあつて居るから、われがそんなに肩を持つのが、胸糞が惡いわえ。
沖藏　これは又どうしたものだ、目出度い祭りのさいさきと誤つて居りやあ附上り、さう强情に言やあ仕方がねえ、小いやらしいが此苅藻と、話し合をしてゐる此沖藏、おぬしが構つたことはあるめ

鱶八　え、但し、此濱ちやあ色事をするのは法度か、岡焼餅ならよしにしろ〳〵。岡焼餅もすさまじい、色事法度でなくッても此鱶八がならねえわ。なんぼ歸り新參でもわき土地から來た沖藏に、幅をされちやあ了簡ならねえ。おゝいやだ、今日からわれが手を切つて、苅藻はおれが女房にするわえ。

沖藏　口に門番がねえと思つて、大層な御託を吐き出したな、なんぼわれが手を切るの足を切るのとぬかしても、さう自由にやならねえわ。

漕六　これさ〳〵、どうしたものだ、折角引き潮になつたに、また潮をあげて來た。まあ〳〵互ひに、四海波靜かにするがいゝぢやあねえか。

苅藻　さうでござんす、わたしのことでお二人の爭ひ、聞いてゐる其辛さ、どうぞまあ了簡して、仲直りして下さんせいなあ。

鱶八　いやだ〳〵、斯う言ひ出しちやあ金輪際了簡ならねえ、いやだ〳〵。

沖藏　さう吐かしやあ是非がねえ、おれも男だ、相手になるわ。

鱶八　やかましい、其頰桁を歪めてくれべい。

ト波の音屋臺囃子にて、兩人立廻り、苅藻、漕六中へはひり漁夫皆々留める。花道より灘藏漁夫の二

しらへ、櫂の先へ網を括りつけて出で、直に本舞臺へ來り、

灘藏　これ／＼、二人とも此の喧嘩は、灘藏が預かつた、おれに預けろ／＼。

鱶八　いやだ／＼、了簡ならねえ／＼。

沖藏　さうだ／＼、退かつせい／＼。

灘藏　いゝや退かれねえ、靜かにしろ／＼。

漕六　これ／＼、灘藏どのゝ挨拶だ。

皆々　待たッせえ／＼。（ト兩人を引分ける。濱唄の合方、聖天。）

苅藻　ほんによい所へ灘藏さん、よう留めて下さんしたなあ。

灘藏　おれも今こゝへ來かゝつて、何だか樣子は知らねえが、初春早々二人が喧嘩、同じ濱生業で一つ網を引きあふ仲、野暮らしくたゝき合もあんまり出來た話しでもあるめえ。二人ながら腹も立たうが、此喧嘩は灘藏が、年玉がはりに貰つた／＼。

苅藻　あれ、あのやうに灘藏さんも、言はしやんす程に、鱶八さん。

漕六　苅藻坊の言ふ通り、これ沖藏、折角灘藏どのゝ挨拶だ。

皆々　了簡さつしやい／＼。

鱶八　成程おぬし達の挨拶といひ、灘藏の挨拶、了簡ならねえ所だが、さう強情も言へめえ。仕方がねえ、了簡しようよ。

沖藏　鱶八がさうおとなしく出りやあ、わしが方にも何も言分はないのさ。

灘藏　さう言つてくれりやあ、口を利いたおれも花を持つといふものだ。さあ〳〵一つ〆てくれ〳〵。

鱶八　初春早々丸〆だ。

沖藏　さあ〳〵、〆ろ〳〵。

皆々　ヨイ〳〵〳〵、ヨイ〳〵〳〵。（ト手を打つことあつて、）

漕六　やれ〳〵、灘藏さん、御苦勞々々。

苅藻　どうなることかと思つたに、灘藏さん、いかいお世話でござんした。

灘藏　何の禮にやあ及ばねえ、そんなら此れから明神さまへまゐつて、濱行事の梶作の家で祭の振舞を幸ひ、仲直りの盃をさせよう。

皆々　それがいゝ〳〵。（ト灘藏栗作を見て、）

灘藏　これ〳〵、そこに居る栗作、手前は去年の暮大阪へ立つといつて、餞別を貰つてまだ行かねえか。

栗作　左樣さ、わしも早う立つのでござりましたが、連れの者が女郎にはまつて、其上わしも此の濱に

……お名殘りが惜しいから、頭に賴んで、もう一濱働いて立つのでござります。

灘藏 いや、蟲のいゝ男だ、何ぞおごれ。

栗作 久し振りでお前、團子でも奢つてくんなさい。

皆々 おきやあがれ。

灘藏 そんなら是れから神明さまへ。

沖藏 みんなも一緒に。

灘藏 さあ來やれ。（ト右鳴物にて、皆々鳥居の内へはひる、引違へて梶作出で、）

梶作 先づ明神さまへ供物をして、春吉が身に恙ないやうお願ひ申したれば氣遣ひはない、是れから歸つて、よい便りを待たうかい。（ト行かうとする、此時鳥居の内より灘藏出で、）

灘藏 これ〳〵梶作どの、ちつと用がある、待つて下せえ。（ト前へ出る、梶作見て、）

梶作 誰かと思つたれば灘藏どの、此中は逢ひませぬが、何ぞ御用でもござるのか。

灘藏 されば此頃久しく筑後へ行つて、二三日跡に家へ歸つて樣子を聞けば、領主の菊池殿から浦々へ建てられた高札、鐘ケ岬に沈んで居る釣鐘の龍頭へ綱を附けたものには、褒美の金をやるとのこと、こなたの息子春吉が、菊池殿の船出を待つて、釣鐘へ綱を附けて褒美の金を貰ふとのこと、

梶作　常からかぼそいあの春吉、いかに水練が達者でも、あぶねえ仕事だ、止しにさせるがよからうぜ。

梶作　親切なこなたの詞、知つての通り義理ある忰のあの春吉、日頃からの孝行者、殿樣のお目通りで手柄して褒美を貰うて、わしを樂にさせるといふゆゑ、いや／＼命がけの危い仕事、止しにせいと留めるも聞かず、今日菊池殿のお船出と聞いて、今朝から支度して行きましたわいの。

灘藏　何といふ、そんなら今日菊池樣が船出と聞き、春吉が行つたといふのか。

梶作　待ちに待つた今日の船出、喜び勇んで行きました。

灘藏　南無三寶、今日の船出を夢にも知らず、春吉に先を越されたか、是れから直に追附いて鐘の龍頭へ綱を附け、褒美の金をせしめてくれべい。（ト灘藏身ごしらへして、行かうとするを驚き留めて、）

梶作　これ、待つてくれ、忰が手柄の邪魔する灘藏、おぬしはめつたに遣られぬ／＼。

灘藏　いらざる留立て、手柄は仕勝ちだ、放せ。

梶作　いゝや、めつたに放さぬ／＼。

灘藏　えゝ面倒な、どきやあがれ。

ト屋臺囃子になり、梶作留めるを蹴散らし灘藏逸散に花道へはひる。此内鳥居の内より苅藻出で、

苅藻　これ父さん、樣子は殘らず聞きました、兄さんの手柄の邪魔するあの灘藏、わたしもともゞ跡

梶作 追掛けて。鐘ヶ岬へちつとも早う。

苅藻 そんなら父さん。(ト屋臺囃子になり、梶作苅藻花道へはひる。此うち鱶八出て、)

鱶八 日頃から仲の惡い春吉に先を越されちやあ、鱶八が面が立たねえ、跡から追仰け加勢して、灘藏に手柄をさせ、褒美の金の分口を貰はにやあならぬ。

ト身ごしらへして行かうとする、此内後へ沖藏出で、

沖藏 鱶八待て。(ト鱶八振返り見て、)

鱶八 待てとは、何ぞ用があるか。

沖藏 知れたことだ、親孝行な春吉が、手柄の邪魔する灘藏が加勢をする鱶八め、わりやアめつたに遣られねえ。(ト鱶八を留める。)

鱶八 しやらツくさいことを吐かしやあがる、苅藻が縁で春吉の肩を持つ沖藏め、邪魔だてひろぎやあ鱶八が、さつきの喧嘩の枝ほねを、爰でぴし〳〵折つてくれるぞ。

沖藏 小癪な一言、なんぼ春でも悠々と、うぬらの自由になつて居る、そんな間拔があるものか、留めかゝつたら金輪際、めつたに此場は動かさねえ。

鱶八　こま言言はずと絃放せ。

沖藏　いゝや、ならねえ。

鱶八　なに、ちよこざいな。（ト兩人ちよつと立廻り、鱶八懷より錦の旗を落す、沖藏取上げ。）

沖藏　や、こりや慥に大友家の重寶、錦の旗。

鱶八　南無三、それを。（ト手早く取つて懷中する。）

沖藏　その赤旗を持つてゐるからは、扨はおのれは大友家の餘類のもの。

鱶八　それ知られたら觀念しろ。

　ト屋臺囃子になり、兩人櫂を取つて立廻り、よき程に一の鳥居の内より、漕六出て此體を見て、

漕六　おぬしは鱶八、また喧嘩か。

鱶八　漕六か、加勢しろ。

漕六　合點だ。

　ト漕六高札を取つて此中へはひろ。三味線入り祭りの鳴物にて三人立廻りあつて、よき見得にて屋臺囃子にて此道具廻る。

（鐘ヶ岬の場）――本舞臺三間高足の土手、向ふ波手摺、下手より眞中へ掛けて岬の岩端、上手松の立木、日覆より釣枝、總て鐘ヶ岬の體。灘藏大阪手甲、腰蓑の裝、脇差をさして、立掛り、左右より梶作、苅藻取りついて居る見得、波の音にて道具留る。

灘藏　やア、しみしつこい老耄、女郎め。留立てすると殺生は、漁夫の業なら是非がねえ、うぬらが命を取らにやあならねえ。

梶作　情知らずの灘藏め、大事の悴の一生の手柄、假令命は取られても、

苅藻　女の念力、兄さんの叶はぬまでも手柄の加勢。

梶作　やはかおのれは、

兩人　やらぬ〳〵。

灘藏　えゝ面倒な。

ト三味線入りの鳴物になり、梶作苅藻有合ふ櫂を取つて打つて掛る、灘藏脇差を拔き三人立廻り、トド灘藏高土手の上にて兩人を切り下げる、兩人苦しみながら、

苅藻　どうでも二人を、

兩人　殺すのか。

灘藏　こま言ぬかさず、くたばつてしまへ。（ト兩人を切る、波の音にて下手より漕六出來り。）
漕六　灘藏か、大事だ〳〵。
灘藏　わりやあ漕六、大事とは。
漕六　今乾坤丸の船先で、綱引ッかゝへて春吉が、海の底へ飛びこんだ〳〵。
ト捨ぜりふにて下手へ走りはひる、二人これを聞き思入、後を見て、
梶作　やゝ、すりや春吉は、
苅藻　千尋の底へ、
灘藏　手柄は仕勝、波間を潜つて。（ト行かうとする。）
兩人　いゝや、めつたに。（ト取附く。）
灘藏　何を小癪な。
ト波の音、灘藏行かうとする兩人取附くゆゑ散々に切倒し、二重より下へ蹴落し、刀を納め身ごしらへして、
入らざる支へに暫時のおくれ、是れより直に龍頭のもとへ、おゝさうだ。
ト波の音一聲になり、灘藏思入あつて後の波間へ飛込む、ドンと波の音、波煙りパッと立つ、知らせ

につき、此道具廻る。

（鐘ヶ岬海底の場）――本舞臺一面闇ぼかしの浪幕、上下貝類の附きし岩組、日覆より同じく闇ぼかしの浪板をおろし、總て鐘ヶ岬海底の體、よろしく道具留る。と、ドロ〳〵打上げ、大薩摩になる、

〽往事渺茫として夢かよと、夢か現か幻に闇々として影くらき、千尋の海の水底に、姿おどろに異國人、羅綾の袂破れはてゝ、物凄くもまた怪しけれ。

ト誂へドロ〳〵、唐樂の入りし物凄き迫上げの鳴物になり、上手に陰火立ち、舞臺眞中へ七草官丁禮の亡靈、百日鬘、破れたる裝束異形のこしらへ、貝類のつきし岩臺へ片膝かけ、下手に春吉、藁で結びし若衆鬘、絞りの筒ッぽう、同じく脚絆厚子やうのものを着、腰簑をかけ漁夫のこしらへ、よろしく兩人迫上がる。

丁禮　如何に小冠者承はれ、我宿世の縁あつて、汝を待つこと年久し、それゆゑ是れまで招きしぞ。

春吉　さいふは日本に見馴れぬ異人、われを待つとは合點行かず、そも先づ汝は何者なるや。

丁禮　ほゝお、いしくも問ふたり、我こそは元この地の者ならず、唐土福州の船人七草官丁禮といひしもの。

春吉　夢にも知らぬ唐土人が、われを招きし仔細は如何に。

丁禮　その仔細語り聞かさん。（と誂への唐めいたる鳴物になり、丁禮思入あつて、）我壯年の頃なりしが、不圖海賊の群に入り、はからず月日を送るうち、遂に彼等が頭となり數多の手下を從へて、唐日本の嫌ひなく、渡海の折柄強盗なせしに、思ひ出せば十七年先き、此筑前の沖に來り往來の船を惱ませしが、貞行が父菊池秀行、かねて手段を廻らしけん、思ひがけなき闇の夜に數多の兵船漕ぎ出し、わが元船を追つ取卷き不意をうたれしことなれば、手下の者は驚きあわて、如何はせんとなす折柄、秀行が下知として、水練勝れし灘藏といへる者に、乘りたる船底くり拔かれ、射る矢は霰船には水、よしや翼のあればとて脱れがたなく其場にて、手下は殘らず射て取られ、殘るは我が身たゞ一人、されども心を勵まして乘込む敵を切拂へば、近寄るものもなかりしに、討手の大將雪岡多太夫、間近く船を漕ぎ寄せてねらひ定めて放つ矢は、我が顳顬にはッしと立つ、急所の痛手に今は早やこれまでなりと唐土より、奪ひ來りし釣鐘の船にありしを引ッかつぎ、其儘海へ飛び入つて底の藻屑と成果てたり。其頃肥前長崎なる、連山と呼ぶ傾城に深く馴染を重ねしが、彼女わが胤を宿してより早五月にあたるころ、我は空しく討死なす、其後程なく連山は年季も明けて親里なる、兄梶作が家に歸り生み落せしは則ち汝、されども流石異人の胤を宿せしこと

を恥ぢ、それを言はねば梶作夫婦も、我が子とは知るよしなし、此程夜な〳〵此海に怪しき光りをなしたるは、我が靈のする業ぞ、これまで汝を招き寄せ、是れを語らん其爲なり。

ト思入にて言ふ、春吉これを聞きびつくりするこなし、

春吉 むゝ、始めて聞きしわが素性、今が今まで梶作が、子とのみ思ひし我こそは。

丁禮 この七草官丁禮が、此土に殘せし遺兒。

春吉 すりや、肉身分けし現在の、我が父上にてあつたるか。

丁禮 絶えて久しき對面も、

春吉 父は唐土、

丁禮 わが子は日本、

春吉 海山隔てし、

丁禮 親と子が、

春吉 一つに寄るも、

丁禮 思へば、盡きせぬ、

兩人 縁ぢやなあ。（ト兩人手を取交し思入あつて）

春吉　えゝ、お懐しうござりまする。（トすがる。）

丁禮　あ、十七年は一昔、よくも成長なせしよなあ。（ト思入あつて）かく名乘り合ふ上からは、當の敵の菊池一家を討滅し、我が此の無念を晴らしてくれよ。

春吉　云ふにや及ぶ、今より無念を受けついで、此水底に沈みある、鐘の龍頭へ綱を附け、それを功に菊池へ取入り、貞行はじめ一家一門討ち滅ぼして父上の、修羅の御無念晴らさせ申さん。

丁禮　ほゝ、末頼もしき汝が心底、菊池一家を滅ぼすには力となるべきものこそあれ、先年滅びし豐後なる大友宗麟が遺兒、若菜姫といへるもの、錦ヶ嶽に年を經し蜘蛛の妖術うけ繼いで、これも父の敵たる菊池太宰を討たんず結構、彼れに合體なす時は、龍に翼を得たるが如し、心を合せて本望遂げよ。

春吉　それこそ幸ひ、若菜姫の行方を尋ね、廻り逢ひなば合體なさん。

丁禮　彼れが行方は遠からず、我が業通にて導き得させん。（ト此時修羅太皷をはげしく打ち、丁禮顚へながら思入あつて）あれ〳〵、修羅の使ひのしげゝれば、最早對面これ限り。（ト立上る。）

春吉　すりや、父上には此儘に、

丁禮　たとへ此場は別るゝとも、

春吉 大望成就なるまでは、

丁禮 影身に添ひて守るべし。

春吉 ちえゝ、忝けない。

丁禮 おゝ、名殘りは盡きじ。(トたゞ／＼と後へ下る。)

春吉 おし。(ト縋るを振拂ひ、)

丁禮 はや、さらば。

ト大ドロ／＼になり、丁禮引拔きにて跳への骸骨になり、ばら／＼と碎け後の浪幕へ消える。春吉思入あつて、

春吉 やゝゝゝ、今までありし我が父の、姿は消えて髑髏、これが形見となつたるか。

ト髑髏を取上げ、無念の思入、此時上手より以前の灘藏一腰差し、窺ひ出で、

灘藏 樣子は聞いた、生けては置かれぬ。(ト拔き打ちに切つて掛るを春吉突廻して、)

春吉 や、われは船底をくり拔きし敵灘藏、覺悟なせ。

灘藏 何を小癪な。(ト又切つて掛るをちよつと立廻つて、件の一腰を引取り其まゝ浴びせ、)

春吉 父の敵を討ち滅ぼす、其幸先の血祭りに。(ト首を打落して)はて、心地よや、嬉しやなあ。

ト岩臺へ踏みかけ、きつと見得。大ドロ〳〵にて、岩臺のまゝ仏吉を迫下げる。是にて知らせに附き、日覆の浪板うち返し、杉の釣枝になり、左右の岩組杉の林に替り、正面の浪幕を切つて落す。

（錦ヶ嶽辻堂の場）――本舞臺正面二間常足の二重、茅葺本縁附の辻堂、狐格子に開け閉てあり、所所に杉の立木、上下木の間に誂への紙帳釣りあり、後黑幕、よろしく道具留る。と山おろしになり、上手紙帳の内より六部、鼠布子の六部裝にて出來る。

六部　やれ〳〵寒いぞ〳〵、どうでも里と違つて山中は、春になつても寒さが強い、しかし木賃宿へ泊るより世間知らずの氣樂な野宿、屋根代三文出すには及ばず、枯木で飯を炊きながら清水を汲んで茶をわかし、是れで寐て錢を貰へば大名になつたよりましだ、そりやあさうと同行の、怪典とのはもう歸つて來さうなものだが。（ト下手の紙帳のうちを見て、）まだ隣りの修行者どのも歸らぬさうだ、おほかた冷え凍えて歸るであらう、どれ氣をきかして歸らぬうち、里で寐酒を買つて來ようか。

ト山おろしになり、六部一升徳利を提げ花道へはひる。ドロ〳〵になり、日覆より心といふ字を辻堂のうちへ引いて取る、是れにてドロ〳〵打ちあげる。本釣鐘になり、辻堂の扉を開け、若菜姫ム順

禮笈摺、胸札、脚絆手柄杓を持ち出で、

若菜　そんなら今のは、夢であつたかなあ。（ト四邊へ思入、本釣鐘誂への合方になり、）ほんに思へば世の中に、月日の經つは夢のやう、十年振りにてはる〴〵と坂東ならぬ西國を、廻つて歸る順禮の飾る袂の錦ヶ嶽、山また山に分けまよひ問ふ人もなく辻堂に、一夜を明す憂き旅の、道の疲れにとろとろと臂を枕にまどろむうち、あり〳〵と見しは筑前の鐘ヶ岬の水底にて、菊池の爲に討たれたる唐土福州とやらの海賊、七草官丁禮が遺兒の我が悴へ、敵たる菊池を討つて亡き父が、多年の恨みを晴らしくれよと、我が子へ頼む詞のうち、大友宗隣が娘若菜姫と心を合せ、本望遂げよと言ひしは正しく。（ト思入あつて氣を替へ、）あ、是れも晝から山坂に、疲れし心の煩ひなるか。はて、思はぬ夢を見るものぢやなあ。

ト此時揚幕にて、松蟲の鉦の音、東の揚幕にて尺八の音聞ゆる、若菜姫これを聞き思入あつて、

麓の方より鉦の音と竹の音色の聞ゆるは、邊りに釣りし雨覆、宿りに歸る修行者なるか、旅は道連れ話しの伽、どれ、堂のうちにて待ちませうわいなあ。

ト山おろしの合方になり、思入あつて辻堂の内へはひる。尺八の入りし六部三重になり、花道揚幕より玄海灘右衛門の怪典、鼠の着附、手甲脚絆、草鞋、六部のこしらへにて笈を背負ひ、錫杖を突き出

來る。これと一緒に東の揚幕より、鷲津六郎正時の修行者、同じく鼠の着附、丸ぐけ手甲脚絆草鞋、だ虛無僧のこしらへにて、天蓋を冠り尺八を持ち出來る、此時ドロ〳〵になり、日覆より誂への蜘蛛相引きにて、舞臺前へ下る。兩人これへ思入あつて、花道よき所へ留り、

兩人　はて、怪しやなあ。（ト兩人一時に笠を取り、きつと見得。誂への鳴物になり）

怪典　松柏茂る山中の木の間を漏るゝ月影の、光りに見れば一つの蜘蛛、

正時　兩眼鋭く其形、尺餘りに及ぶはこれ怪物、正に變化をなすものならん。

怪典　既に西洋雜俎にも、車輪の如き蜘蛛あつて、よく人を取り喰ふとある、

正時　我が日の本にも古へより、其例ありと聞く、

怪典　彼れは其智慧深くして、虛空へ巧みの網を張り、居ながら諸蟲をこれへかくる、

正時　それを憎みて聖人は、必ず蜘蛛の巢を破る、

怪典　今海内に噂ある、白縫と呼ぶ曲者は、

正時　蜘蛛の妖術行ふと聞く、

怪典　若しやそやつか、なす業なるか、

正時　何にもせよ、

怪典　稀代な蜘蛛の、

兩人　振舞ぢやなあ。

トドロ〳〵にて件の蜘蛛辻堂の内へ引いて取る、兩人是れに目を附け、思入あつて、

正時　夜更けぬうちに、今宵の宿りへ、

怪典　最早初更に間もあるまい、

兩人　さうぢや〳〵。（ト又出の鳴物になり、兩人本舞臺へ來り、入替つて、）

怪典　あいや、御修行者どの、待たつしやりませ。

正時　むゝ、待てと留めさつしやれたは、廻國修行の六部どの、何ぞ用ばしござつてか。

怪典　いや別に用もござらぬが、往來も稀な此山へ、夜に入つてから登られしは、どれからどれへござらつしやれまする。

正時　どれからどれと定めなき、身は雲水の旅の空、昨日の暮より此所へ、野宿を致すものでござる。

怪典　それは思ひ合ふたこと、わしも四五日以前から、同行あつて此山に、やはり野宿を致してござる。

正時　すりや六部どのにも此所に。して、そなたの宿りは。

怪典　則ちこれなる紙帳のうち、して、そなた様には。

正時　手前も同じ、これなる紙帳。（ト兩人上下の紙帳へ思入あつて）
怪典　はて、知らぬことゝて此やうに、
正時　一つ所に在りながら、
怪典　晝は互ひに修行の身、
正時　夜に入つてより歸るゆゑ、
怪典　顏も知らねば、
正時　名も知らず、
怪典　斯う近附になる上は、
正時　今から後は、
怪典　隣り同志、
正時　心置きなく、
兩人　話しませうかい。（ト誂への合方になり、怪典笈をおろし）
怪典　何にしろ、火の氣がなくては寒くてならぬ。
正時　いかさま、暖まらねば話しも出來ぬ。（ト怪典枯枝や落葉を集めて）

怪典　さあ〳〵、枯枝を集めました。

正時　どれ、火を打つて進ぜませう。（ト正時火打袋を出し枯枝へ焚きつける）

怪典　さあ、側へ寄つてあたらしやりませ。

正時　いや、あたれとは忝けない。（ト兩人焚火の側へ寄り、あたりながら、）時に六部どの、こなたは何所の產れでござるな。

怪典　わしでござるか、わしは大阪の產れでござる。

正時　すりや六部どのにも大阪とか、はて懷しい、わしも難波の產れでござる。

怪典　はあゝ、修行者どのも難波でござるか、こりや猶々話せるわえ。

正時　して、こなたには、何時から修行に。

怪典　さあ、わしが故鄕を出かけたは、一夜明くればもう一昨年、足かけ三年この土地で、何れも樣の御厄介、それは〳〵他國と違ひ御贔屓強い所ゆゑ、わしらがやうな者にまで、やれこれ言つて下さるは、何と有難いことではござりませぬか。

正時　さあ、其御贔屓強い所と聞き、わしも早く下りたく、願ひに願つてやう〳〵と、去年の暮に着いたれど、西も東も知らざれば、產れも同じ難波津に一つ流れのこなたを賴み、何れも樣へわしが

身を、どうぞお願ひ申して下され。

怪典　そりや脱れぬ中の修行者同志、お願ひ申して遣りたいが、またわしさへもろく／＼にお馴染もない身の上なれば。

正時　はて、一年でも先きへ來て、御贔屓うけたこなたのこと、是非ともこれは頼まにやならぬ。

怪典　いや、さう言はれては仕方がない。出過ぎた奴とお叱りも、返り三歳のお馴染甲斐にお願ひ申さう。（ト兩人下に居て、）お聞きの通り何れも樣、脱れぬ中のこの修行者、何卒わたくし同樣に、

正時　永く御贔屓お取立てを、憚りながら、隅から隅まで、

兩人　偏にお願ひ申し上げまする。（ト兩人よろしく辭儀あつて、）

怪典　さあ、斯うお願ひ申せば大丈夫、必ずお捨てなさらぬが、他國と違ふ當地の御氣性、身分が案じずゆつくりと、まあ煙草でも吞まつしやりませ。

正時　袖振りあふも他生の縁と、いかいお世話になりました。

怪典　なに是れしきに。南無三、焼木がなくなつたわえ。

ト　怪典枯枝を取りに立上る、此時懐より鑑札なげつたり落す、正時手早く取りあげ、

正時　や、この鑑札は。

怪典　やあ、それは、(ト怪典引ったくり懐中する)。

正時　正しく今のは黒崎の、城中出入りの慥に鑑札。

怪典　いゝや、こりやあ修行者が、諸國を廻る往來切手。

正時　はてな。(ト思入、時の鐘、焚火消える)

怪典　思はぬ話しで夜も更けた。何と、もう寐ようぢやあごんせぬか。

正時　如何さま、焚火も消えたれば、

怪典　また是れからは草臥直し。

正時　足を延ばして、

怪典　紙帳越し、

正時　寐ながら話しを、

怪典　しませうかい。

ト時の鐘、山おろし合方にて兩人思入あつて、怪典は上手の紙帳、正時は下手の紙帳へはひる。と花道より以前の六部徳利を提げ、酒に醉ひたる思入にて唄をうたひながら出來り、

六部　頭に寐酒を吞ませようと、えつちらおつちら買ひに行つて、つい寒いので歸りしなに、みんな吞

んでしまつたやつさ、あゝ面目ねえことをした。（ト言ひながら舞臺へ來り、）しかし酒を買ひに行つたばかり、今道端で拾つたこのきれ、（ト懐より錦の旗を出し、）こりやあ厄落しに捨てた褌ぢやあねえか知らん。（トよく〳〵見て、）やゝ、こりや結構な錦の旗、こいつア金目な代物だわえ。（トドロ〳〵になり、指金附き誂への蜘蛛出て、六部の身體へ這ひあがるを拂ひのけて、）えゝ、何だ知らぬ。（ト蜘蛛を見てびつくりなし、）やあ、こいつア恐しい蜘蛛だ。（ト蜘蛛また六部の身體へ這ひあがり、巣を掛ける思入、）えゝ何をしやあがる〳〵。（ト拂ひのける、蜘蛛はあちこち身體に纒ひ、段々巣をかける思入、六部身體の自由にならぬこなし、）こいつアおれの身體へ巣をかけやあがるな。（ト六部兩手にて巣を拂ひのけるこなしよろしくあつて、）あゝ、苦しい〳〵。（ト立ちすくみに苦しみ見事に轉る。是れと一時に、正面の辻堂より若菜姫、花櫛をさしたる、さら毛の下髪、振袖裲襠投帯姿にて顯れ出て本舞臺へ來り、六部の懐より件の旗を引き出す、六部心附き、）南無三それを。（ト取りにかゝるをちよつと突廻し、旗をひろげ、木の間の月に透し見る思入。この時左右の紙帳の窓より、怪典、正時顏を出し窺ふ、若菜姫兩人を見てぎよつと思入、兩人は其まゝ隱れる、此うち六部はからだの蜘蛛の巣を取る思入あつて、）怪しい女め。（ト若菜姫に掛るを、立廻つて件の旗を六部の首に纒ひ、ぐつと締殺す。六部苦しむ。若菜姫きつと見得、これにて上手紙帳をばり〳〵と破り、怪典大百日、黑の褞袍、丸ぐけ素綱一本ざしにて片足出

して見得。下手紙帳を破り、正時野袴ぶつさき羽織、素網大小にて同じく片足出し、三方一時の見得。これにて誂への鳴物になり、若菜姫思入あつて旗を取り、六部を投げ退ける、怪典、正時窺ひ寄り、此旗へ手をかける。これより旗を楯に三人ダンマリの立廻りよろしくあつて、トゞ若菜姫旗を舞臺前へ取落すを、兩人一時に切つてかゝる。若菜姫その儘辻堂へ上り印を結ぶ。兩人たぢ／＼となる、此時ドロ／＼掛焔硝にて、若菜姫消える。是と一時に上手杉の空洞より鷲津七郎正吉、野袴ぶつさき羽織、素網大小にて弓を持ち出で、きつと見得。怪典、正時心附き四邊を窺ひ、兩方より取らうとするを、正吉この中へ割つて入り、弓にて隔てる。兩人若菜姫と思ひ正吉に切つて掛る。これより鳴物替つて、また三人立廻りあつて、よき程にドロ／＼になり、以前の蜘蛛現はれ、旗を啣へ辻堂へ這入る。三人これを見て辻堂へきつと思入。この時大ドロ／＼になり、辻堂屋臺潰しになり、屋根の上に莫大なる土蜘蛛、この上に若菜姫傾城のこしらへにて、件の旗を立身にて持ち、後の黒幕切つて落し、一面銀張りの蜘蛛の巣になる、これにて三人ぎよつと思入。三方へ別れて、足を踏み出すを木の頭。蜘蛛は眼を動かし火焔を吹く。若菜姫につたりと思入。三人これを見込み、引張りの見得よろしく、大ドロ／＼誂への鳴物にて、

ひやうし幕

とこの幕梅林の道具幕にて、大拍子にてつなぎ、よき程に切つて落す。

二幕目　太宰府參詣の場

〔役名——大友刑部宗連、菊池右衞門佐貞行、青柳春之助、雪岡冬次郎、淺香三太夫、蘆澤夏之丞、宇壺矢九郎、荒鐵太刀藏、雪岡の草履取眼助、茶道宗原逸齋、神主高間主膳、小姓葵之助。夏之丞の許嫁柵、腰元早蕨、同紅梅、同初音、同春野等。〕

（天滿宮社内の場）——本舞臺三間の間中足、白木造りの額堂、向う透し間の板羽目、丸庇、軒口に繼行燈、前面その外ともいろ〳〵の額を掛け、左右に梅鉢の紋附きし手水鉢、梅の立木目覆より同じく釣枝、總て太宰府天滿宮社内の體よろしく。と、唄への出の鳴物になり、花道より貞行、棒茶筅小忌衣小さ刀庭下駄、葵之助小姓にて袴裝にて刀を持ち、春之助若衆髷、振袖上下衣裝大小、三方に高綸の鏡の箱を載せ、冬次郎同じく上下衣裝大小、夏之丞同じく上下衣裝大小、三太夫更けたるこしらへ、上下衣裝大小、柵振袖屋敷娘の裝、花筒に梅の枝の入りしを持ち、早蕨、紅梅、初音、春野腰元の裝、四人袴大小近習の裝、逸齋茶道にて附き出で花道に並ぶ、上手より主膳神主の裝、矢九郎、太刀藏上下衣裝大小にて出迎へ、

矢九　我が君樣には、只今御參詣、

三人　遊ばされましたか。

貞行　春風一度發すれば、淸香數里芳しと、實に太宰府の神社、春知り顏に盛りの梅花、

春之　色香も薄き未熟者、隣り町からはる〴〵と、召されて爰へ入來鳥、
冬次　おなじ色香の片言に、ほう法華經も三年ぶり、
夏之　男形さへ白梅の、まだ不束な蕾がち、
三太　重ねし枝も河原崎、年も老木の鶯宿梅、
栅　誰が袖ふれん恥かしき、馨りも遠き谷の梅、
早蕨　木振も直なしだれ梅、
紅梅　數も幾世の手まり梅、
春野　やまと山梅美しき、
初音　行方も廣き野路の梅、
○　酒の樂寐の臥龍梅、
△　匂ひも高き好文木、
逸齋　お茶があつけりや梅の花、宗原逸齋眞ッ盛り、
春之　わが君さまには神前へ、
貞行　皆も一緒に、

皆々　先づ入らせられませぬ。

ト右鳴物にて此人數舞臺へ來り、二重へ毛氈、褥を敷き、これへ貞行住ふ。舞臺へ毛氈を敷き皆々上下へよろしく居並び、

主膳　殿樣へ申し上げまする、日和も長閑に今日の御參詣、恐悦至極に存じ上げまする。

矢九　御先觸として、宇都矢九郎、

太刀　荒鐵太刀藏、これにて御出迎ひ仕りましてござりまする。（ト三味線入り大拍子になり。）

貞行　神職はじめ兩人とも、出迎ひ大儀、例年正月二十四日、家の重寶花形の鏡、當社の神前へ捧げ祝詞を奏し、武運長久を祈る菊池家の吉例。

春之　則ち花形の鏡、御預り役は、身不肖なれども青柳春之助、大切に守護仕ッてござりまする。

三太　まこと菊池の御先祖より、筑紫累代の御家柄、民を撫育の御功、我々に至るまで、大慶に存じまする。

冬次　下世話に申す、上を學ぶ下とやら、我が君樣の御仁政を感じ、

夏之　民百姓に至るまで、下々を惠む御仁德顯はれ、斯く泰平の御代の春、

○　太刀は鞘、弓は袋にかたく納り、

□　天下泰平とざゝぬ御代、
△　かやうな時節に生れ出るは、
◎　われ／＼ばかりか子孫の繁榮、
逸齋　鎧冑は五月幟の飾り物に見るばかり、有難いことでござりまする。
貞行　方々の悦び滿足せり、それは格別、三太夫の娘柵が、持參なしたる、是れなる梅の一枝は、
柵　はッ、其一枝は奧樣の御祕藏遊ばすお庭の一木、天滿宮の神前へ差上げよとの、仰附けにてござりまする。
矢九　荒鐵氏御覽なされ、是れにいろ／＼奉納の額面、あれにござる男が女をおぶつて居るは、歌舞伎淨瑠璃に語りまする、お半長右衛門の畫面でござらうな。
逸齋　これはしたり、何を仰せられまする、あれは平の維茂が、鬼女を背負ふた所でござる。
矢九　左樣でござるか、手前は春氣で、兎角目がかすんで見えます。
太刀　お待ちなされ、こちらにござる唐人が、三人で酒を呑んで居るのは、狐拳をいたし居るのかな。
逸齋　いえ／＼、あれは玄德張飛關羽が、桃園とやらにて、義を結ぶ畫面でござります。
太刀　左樣かな、身共はまた拳の稽古でもいたすのかと思つた。（ト此内春之助額を見ることあつて、）

春之　何れも御覽なされい、あれに掛けある額面、願主雪岡冬次郎と記しござるが、殿樣の御前に臣下の姓名高く、あるは恐れあり。何れも、取りはづしめされい。

矢九 太刀　心得ました。（ト太刀藏矢九郎、件の額をおろす、冬次郎思入あつて、）

冬次　御兩所、その額面は某が奉納、此方へお渡し下され。（ト受取らうとする、）

貞行　こりや待て冬次郎、其方が奉納の額、箱に籠めしは如何なる品か。矢九郎太刀藏開いて見よ。

兩人　畏つてござります。

冬次　あいや申し、箱のうちには某が、天滿宮へ捧げし願書、君の御目に觸れるは恐れ。

貞行　見せともながるは仔細であらん、急いで開け。

冬次　あいやもし、其儀は。

春之　冬次郎どの、君の上意。

兩人　控へさつしやい。（ト太刀藏冬次郎を押へる。矢九郎額の箱の蓋をあける。内より短冊出る。）

矢九　はツ、箱のうちには一首の短冊。

春之　なに、一首の短冊とは。

冬次　やゝ、箱のうちへは某が願書を認め奉納せしが、短冊と替りしとは、何をもつて合點參らぬ。

貞行　春之助、その短册の歌讀み上げい。（ト春之助取つて、）

春之　はツ、「冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。」こりや、まがひもない冬次郎どのの手迹の一首。

冬次　なに、其短册が、某が手迹とや。

冬行　短册これへ。

春之　はツ。（ト貞行へ短册を持ちゆく、貞行見て、）

貞行　『冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。』春之助、此歌の心を判斷いたせ。

春之　すりや某に歌の心を、判斷せよと御意遊ばしますか。

貞行　それにてとくと判斷いたせ。（ト言ふ。此時花道の揚幕にて、

刑部　我君、しばらく。刑部めがそれへ參つて、歌の判斷いたすでござらう。

ト三味線入り中の舞になり、花道より大友刑部、えんでん、上下大小にて出で、花道に留る、

矢九　貴殿は大友刑部、

太刀　只今伺候、

皆々　めされたか。

刑部　今日拙者御分家へ、御使者に參り歸宅の其後、我が君御例の御參詣と承り、後より伺候いたしてござる。

貞行　大友刑部、太儀にこそあれ、さゝ近う〳〵。

刑部　然らば御免下されませう。（ト三味線入り大拍子、刑部舞臺へ來り、眞中へ住ふ。）

春之　宗連殿には、今日の御役目、

皆々　御苦勞千萬に存じます。

刑部　青柳氏を始め、朝倉蔭澤雪岡その外、何れにも御參詣の御供御苦勞千萬、只今あれより見受けますれば、雪岡冬次郎が奉納の額より出でたる短册の、歌の心を判斷せよとの君の上意。

貞行　判斷なさんと刑部が詞、して其歌の心は如何に。

刑部　はッ、只今判斷仕らん。（ト短册を取り、）『冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。』むゝ、此歌は安からぬ、こりや我が君を調伏の歌でござる。

三太　刑部殿、何と仰せらるゝ。すりや、其短册に記せし歌が、

夏之　我が君樣を、

皆々　調伏とや。

冬次　此身に取つて露いさゝか、覺えなきことながら、何故あつて我が君樣を調伏とは。

刑部　はゝ、調伏であるまいか、冬かけて盛り久しと讀出せしは、取りも直さず我が名の冬、見し菊のと三の句へ菊といふ字を讀み入れしは、菊池の殿に雪岡の寵愛久しからんことを思ひしものを、さにあらねば其事を憤り、花もあとなき雪の下草と、菊池の家の跡絕えて、わが雪岡の下草に爲しなんものと、天滿宮へ我が君を、調伏なさん祈りの歌、よも相違はあるまいが。

冬次　こは情なき刑部殿のお詞、何故あつて某が、君を調伏いたすべきや。

刑部　しら〴〵しき其一言、汝が手迹に紛れなき此の一首、但し調伏でないといふ證據があるか。

冬次　さあ、それは、

刑部　言譯あるか。

冬次　さあ、それは。

兩人　さあ〳〵〳〵。

刑部　返答ぶちやれ、なゝ何と。

冬次　はッ。（下平伏する。貞行急いて）

貞行　雪岡冬次郎それへ出い、いやさ、づッと出い。(トきつと言ふ。)

冬次　はゝはッ。

貞行　おのれ若年の身を持ちながら、何故あつて我を恨み、これまで扶持せし恩義を忘れ、主を呪詛なす大罪人、天命知らずの人畜めが。

冬次　はッ、お言葉返すは憚りながら、調伏なりとの御疑ひ、申すも恐れ多けれどわが不束の為我が作の、御心に逢ふこと度々なれば、何とぞ神のお蔭にて深き過ちあらざるやう、天満宮へ祈りの願書、箱に納めて捧げしが、この短冊と替りしは、察する所某に、意趣あるものゝ仕業ならん、数代御恩を蒙むる御主君、天満宮を誓ひに立て、何とて恨み奉らん、御賢慮願ひ奉りまする。

夏之　只今冬次郎が申す通り、御家譜代と申すうち、父多太夫よりして君の舊恩深き身が、何とて左様の事の候ふべきや。

三太　御歸館の上事の實否をお糺しあり、かゝる悪事を企むものどもを、きつと御吟味遊ばされ、

桐　冬次郎さまの無實の罪、お疑ひお晴し下さりますやう、

三人　願はしう存じまする。

貞行　やあ、無益の執成し聞く耳持たぬ、日頃見知りし冬次郎が手跡の短冊、わが寵愛を失ひて恨むる

由は疾く聞きたり、思へば〳〵憎きわつばめ。幸ひのこの一枝、青柳春之助、人非人の冬次郎めを目通りにて打ちすゑい。（ト梅の枝を春之助の前へ投げる。）

春之　はッ、御意ではござれど、此儀ばかりは。

貞行　主命背くか。

春之　全く以て。

貞行　打ちすゑい。（ときつと言ふ。）

春之　はッ。（ト春之助立つて、）冬次郎どの、君の上意、主君を呪ふ天罰の、汝に出て汝に返る呵責の笞、かう〳〵〳〵、何と骨身にこたへたか。（ト散々に打つ。）

貞行　出來した〳〵。もうよい〳〵。

矢九　何といづれも御覽じたか、冬次郎どの丶あの有樣、大切なる君を調伏なしたる罰が當り、

太刀　同じ朋友の春之助どのに、梅の枝で打擲され、落花は目前犬の足あと、

逸齋　犬同然に四ッ這ひになつて、手出しもならぬあのざまは、

○　武士の風上にも置けぬ侍。

□　大小立派にたばさんでも、

△一言半句の答へも出來ず、
◎犬突這ひに突這つた姿。
春之　いづれもの詞の如く、二代相恩の主君を呪ひし大罪人、誠にこれが犬侍。
皆々　左樣でござる、は、、、、。（トあざ笑ふ、冬次郎ちつと思入。）
冬次　各々方の詞の通り、天命盡きたる冬次郎、何面目に存へん。いづれも、さらば。
ト刀へ手をかけるを、夏之丞留めて、
夏之　あいや冬次郎どの、切腹には及ぶまい、こりや貴殿が仕業ではござるまい。
刑部　默らッせへ夏之丞、かゝる慥な短册の、證據があるに。
矢九　冬次郎どの、、
皆々　仕業でないとは。
夏之　その短册は、僞筆でござる。
皆々　なに、此短册が、僞筆とは。
夏之　僞筆の證據御覽に入れん、此額面の年號は、去年の秋、此短册の墨色は、（ト花筒の水を短册にかけ）
まツこの如く墨の散りしは、昨日今日認めたる僞筆の證據。これ全く冬次郎どのを、罪に取つ

て落さん爲。かゝる企みをなす族は、いやさ、かゝる企みは冬次郎どのゝ業でないことは、某がよき證人、それゆゑ切腹に及ばぬと、留めました夏之丞が、誤りではござりますまい。

三太　いかさま夏之丞どのゝ詞の如く、外に惡事を企むものがあるまいとも申されぬ、御歸館の上執權たる、鳥山豐後介殿へ仰付けられ、御詮議あつて然るべう存じまする。

刑部　入らざることをさわぎ立て、假令僞筆の短册にもせよ、其本人の出でざるうちは、疑ひ晴れぬ冬次郎、ぢつと蟄して御沙汰を待ちやれ。

主膳　我が君樣へ申し上げます、何はともあれ神前へ、御參詣あつて然るべう存じまする。

貞行　如何さま、思はぬことに暫時の暇入り、春之助は神職諸共、寶の鏡神前へ持參なし、奉幣祈念いたしてよからう。

春之　畏つてござります。

刑部　我が君樣には神前へ、

貞行　方々こなたへ、

皆々　御入りあられませう。（下唄になり、貞行先きに此人數殘らず奥へはひる。冬次郎殘り思入）

冬次　あゝ恥かしき我が身の上、此程より君の寵愛薄きを悔み、禍を脫れんと、天滿宮へ祈りの願書、

何者の仕業にや、君を調伏の短冊と摺替られ、言譯さへも情なや、滿座の中で打擲の邪慳の咎のこの梅花。(ト枝を取上げ、)思へば〳〵、(ト無念の思入れにて奥を見ながら立上り、持ちたる梅の花ばらばらと散るを見て、)落花再び枝に戻らず、どうで此身は。

ト きつと思入、早き唄になり、冬次郎ついと奥へはひる。と、直に奥にて、

柵　もし夏之丞さま、ちよつと來て下さりませ。(ト三味線入り大拍子、柵夏之丞の手を引き出る。)

夏之　これはしたり、大切なるお供先き、みだら千萬、たしなまツしやれ。

柵　さあ、其事は辨へて居るけれど人目もなし、まあ爰へ掛けて下さりませいなあ。

ト 無理に床几へ掛けさせる。

夏之　斯ういふ所を人が見ては互ひの身の上、こゝ放して下されいなう。(ト行かうとする。)

柵　あゝもし、御館のうちも多くの人目、今日のお供を幸ひに、よい首尾あらうと樂んで居るものをそりやあなた聞えませぬわいなあ。

夏之　不義は御家のきつい御法度、折を見合せ、互ひの親々より言ひ入れて、婚姻をするまでは、必ず人目に掛らぬやう。

柵　さあ、其お詞は尤もでござんすが、斯ういふ首尾は又とござんせぬ、ちよつと來て下さんせいな

あ。

ト手を取る。

夏之　はてさて、聞分けの悪い、大切のお供先、爰は人目がしげいといふに。（ト振りきる。）

柵　ほんにもう、辛氣なことではあるわいなあ。（ト夏之丞へ寄添ふ。奥にて、）

○　夏之丞樣は、どれへおいでなされた、夏之丞樣々々。（ト聲する、兩人びつくり別れる。早拍子にて出る。）

夏之丞樣、これにおいでなされましたか。

夏之　はッ、只今柵どのから、奥樣の御言傳を承はつて居つたのでござる。

○　御前樣がお待兼ね、ちやつとお出でなされませ。

夏之　畏りました。（ト行かうとする。）

柵　あゝもし、ちよつと待つて下さりませ。

夏之　はて、奥樣の御用は承知いたして居るわい。

○　さあ、ちやつとお出でなさりませ。

夏之　御一緒に參りませう。（ト大拍子になり、柵留めるを振切り、夏之丞○に附いてはひる、奥より矢九郎出て、）

矢九　柵どの、これにおいでなされたか。

梛　あなたは宇齋矢九郎さま、今日は御苦勞千萬にござりまする。

矢九　これは〳〵御挨拶、御苦勞さまでござりますなあ、と言はるゝところがどうもたまらぬな。(ト抱き附かうとして、)はゝゝゝゝ、こなたさまも御苦勞でござります。

梛　矢九郎さま、是れにおいでなさりませ。(ト行かうとするを留めて、)

矢九　あゝこれ梛どの、暫く〳〵、ちと其許に折入つてお頼み申さにやならぬ事がござる。

梛　して、私へお頼みとおつしやるは。

矢九　其頼みと申すは外でもござらぬ、大友刑部殿の弟御岩太郎殿が其許へ執心、何卒身共に取持ちくれよと餘儀ない頼み、何と聞き屆けては下さるまいか。

梛　何事のお頼みかと存じましたれば、不束な私を其やうにおつしやつて下さりますは、お嬉しうござりますけれど、不義は御家の堅い御法度、御免なされて下さりませ。

矢九　いや〳〵其許さへ得心なら、表向きより言入れて、岩太郎殿の直に奥方、何と色よい返事をなされて下され。

梛　心に願ひがござりますれば、殿御を持ちますことはいやでござりますわいな。

矢九　どのやうな願ひか知らぬが、男を持つが不承知とは、そりや嘘々、そんなてんごう言はずとも、

色よい返事を、これさ〳〵。（ト捉へる。）
柵　あれも、しつこい、存じませぬわいな。（ト振切り下の方へ逃げようとする、此時太刀藏出て聞いて、）
太刀　どつこい、逃がさぬぞ〳〵。
柵　あなたは太刀藏さま、惡いてんごうなされますな。
太刀　いや、てんごうではない。まあお待ちなされ。これさ矢九郎どの、岩太郎殿に賴まれたは貴殿と身共、それを出しぬきに一人手柄をしようとは、近頃惡い顏でござる。
矢九　いかにも身共一人手柄に仕ようと思ひの外、ずんと手強い柵どの、此上は二人がゝりで、參らずばなるまい。
太刀　いかさま、二人掛りで參らう。これ柵どの。武士たるものが申し出したる一言、われ〳〵兩人刀に掛けても、得心させねば相成らぬ。
矢九　此場で色よい返事をば、
太刀　柵どの。
兩人　何とでござる。（トきつといふ、此うち後へ三太夫出て聞いて居る、）
柵　假令どのやうにおつしやつても、此事ばかりは。

兩人　すりや、どのやうに申しても。
三太　如何にも、假令娘が得心でも、此三太夫が不得心でござる。（ト前へ出る。）
柵　や、あなたは父さん。
矢九　貴殿は朝倉三太夫殿、
太刀　すりや、此場の樣子をば、
三太　殘らず後で承はつた。これ、大切なお供でありながら、是れに參つて自身の遊びは嗜め〳〵。少しも早く御前へ參れ。
柵　畏りました、左樣ならばあなたは是れに。
三太　はて、行けと申すに。
柵　はい。（ト唄になり、柵奧へはひる。）
矢九　これさ三太夫殿、娘御柵どのへ、割ッつ口說いつ我れ〳〵が申すこと。
太刀　譯も聞かずに横合から、何ゆゑあつて不承知とは、
三太　此三太夫氣に入り申さぬ。
兩人　何と。（ト合方。）

三太　譯は大概聞かずとも知れてある、色好みの岩太郎、女さへ見るとひろ〳〵と、武士にあるまい不行跡、お手前方も同じやうに娘を捉へて無理口說き、女房にほしくば表向き、媒人頼んで言ひ入るゝが世上の法式、それに何ぞや無理所望、左樣な道知らずな聟にとること罷りならぬ、此通り立歸つて岩太郎へ傳へさつしやい。

矢九　如何にも、此趣き岩太郎殿へ申し聞けるが、何の事だ、不得心なら不得心までのことだ、道が違ふの法が違ふのと、惠方參りが酒に醉つたやうに、我々へ對して雜言過言。

太刀　畢竟似合相應の、緣談と思へばこそ、取持ちいたす我々が親切、仇にする片意地もの、岩太郎殿へ此趣き申し聞かせ、

兩人　此返報は、重ねてきつと、

三太　念には及ばぬ、かやうな馬鹿者に構はずと。

兩人　どういたしたと。

三太　どれ、御前へ參らうか。（ト唄になり、三太夫奥へはひる。）

矢九　太刀藏どの、

太刀　矢九郎どの、

矢九　誠に手強いあの老耄、とても心得はいたすまい。

太刀　一體岩太郎殿は冬次郎が、妹照葉を執心のところ、鳥山豐後が忰阿呆もの、犬千代と許嫁と聞き。

矢九　其面當にあの柵を女房に貰はうと言はれしゆゑ、口說いて見たれど親子共に片意地者、然し一旦言ひ出した武士の詞、岩太郎殿の思案もござらう。

太刀　いかさま、殿御歸館のその上で、岩太郎殿へこの樣子を、申し聞けて何かの手段、何はともあれ殿の御前へ。

矢九　然らば一緒に、

兩人　御同道申さう。

ト大拍子になり、兩人奥へはひる、三味線入り大拍子になり、上手より刑部、下手より春之助窺ひながら出來り、

刑部　春之助どのか。

春之　宗連どの、ではない、愛しい兄上。（ト寄り添ふ。）

刑部　これ。（ト思入。替つた合方になり、兩人四邊へ思入。）

春之　かねて御身に申す通り、我が父丁禮、博多の沖にて菊池家の爲に滅びし時、矢先きに掛けたる雲

岡多太夫、早くも此世を去つたれば、折を窺ひ倅冬次郎めを討つて捨て、父の恨みを晴らさん所存。

刑部　身共とてもさいつ頃、白木ヶ淵の大龜退治、その時弟岩太郎と冬次郎めが爭ひし遺恨あれば、貞行殿へ讒言なし不首尾にさせた冬次郎。

春之　天滿宮へ願書の奉納、彼が下部眼助は某に同腹ゆゑ、窃に言附け短册の僞筆を入替へさせ、罪に取つて落さんと思ひしに、夏之丞めが入らざる計らひ、大事の望みも事成らず。

刑部　此上の手段といふは、これ。（ト春之助へ囁く。）

春之　すりや某が預りの、寶の鏡を押隱し、箱のうちへ某が小柄を入れ置き、態と詮議の其時に。

刑部　眼助めに言附けて、冬次郎に頼まれて、まツ斯う／＼に計らひしと、誠しやかに白狀させ、冬次郎に科を塗り、それから跡は身共が胸、

春之　天晴妙計、何かのことは歸館の上。

刑部　今宵夜詰の折を見合せ、

春之　拙者が寢間へお忍びあつて、

刑部　肌あたゝめて、

春之　互ひの睦言。（ト寄り添ふ。）

刑部　おゝこれ。（ト兩人四邊を見て、刑部春之助を引き寄せ囁く。）此見得、大拍子にて道具廻る。

（天滿宮別當書院の場）――本舞臺常足の二重、向ふ梅鉢の銀襖、上下杉戸の出這入り、總て別當書院の道具。貞行二重の上に住ひ、梅始め腰元四人、近習四人逸齋茶道にて、長柄、瓶、臺の上に肴よろしく酒宴の見得。三味線入り音樂にて道具留る。

梅　御前樣、今一獻召上られませう。

貞行　館のうちと事替り、社家の庭なる梅花を肴に、此頃にない鬱散いたした。

逸齋　いやもう、愚老なども御前樣の御相伴で、ほとんとよい慰みをしました。

○　誠に梅は諸木の兄に例へ、盛りの色もまた格別。

□　櫻は花の王と申せど、梅の馨りは奥床しいものでござる。

△　然し、いくら梅の花が美しいとても、

◎　御酒がなくては、お慰みになりませぬ。

早蕨　御前樣へ申し上げまする、梅の盛りを題にいたしまして、

紅梅　不束な私共。

初音　腰折歌の一首も、御添削を願ひまする。

柵　こりや皆さま、よい思召し、お慰みに少しも早う。

逸齋　何と仰せらるゝ、梅を題にいたして歌を詠むとおつしやるか、左樣ならば愚老が一首いたしませう。

女形　こりや面白うござりませう。

近習　さあ〳〵、何と〳〵。

逸齋　お待ちなさい。「さなきだに梅は喰ふとも種喰ふな、中に天神寢てござるかな」とは、どうで有馬の人形筆々々。

女形　何を言はしやんすぞいなあ。

皆々　ほゝゝゝ、はゝゝゝゝ。

貞行　騷がしい、控へい。最前から小姓どもが見えぬ、春之助を呼べ〳〵。

逸齋　畏りました。（ト立たうとする、下手の襖を明けて、）

春之　春之助、只今それへ。（ト眞中へ出る。）

貞行　そちや春之助、さゝ、近う參れ〳〵。

春之　はッ、殿樣には御機嫌よろしく御酒宴のお催し、大慶に存じまする。（ト思入にていふ、貞行見て、）

貞行　春之助、見れば其方は常ならぬ顏附、何ぞ心に掛ることでもあるか、但し氣分でも惡いのか、どうぢや〳〵。

春之　はッ、お目立ちまする上からは包むに詮なし、恐れながら殿樣へ、竊に申し上げたき儀がござりする、御近習を始め腰元衆を、暫く御次へ。

貞行　承知いたした。こりや用事あらば手を拍つ、其方どもは次へ立て〳〵。

橋　左樣ならば御前樣。

貞行　立て〳〵。

皆々　畏りました。（ト音樂にて皆々上下へはひる。）

貞行　あたりの者は遠ざけた、用事あらば近う〳〵。（ト春之助側へ寄り。）

春之　御前樣へ、ちとお願ひがござりまする。

貞行　改つて願ひといふは。

春之　お暇を願ひたうござりまする。

貞行　何と申す。（ト誂への合方。）

春之　賤しき此身を明暮に、一方ならぬ御寵愛、其お情を徒になし、お暇願ふ某の胸中、御察しあつて只今より、御暇下し置かれなば有難う存じまする。

貞行　むゝ、斯くまで深くいつくしむ情を徒に振捨てゝ、暇を願ふそちが心底、仔細があらう、仔細を言やれ。

春之　はッ、有難きお詞、数ならぬ身を御不便加へ冥加に餘る御恵み、立身出世いたせしを友朋輩の羨み妬み、遂には冬次郎が如きものあつて、勿體なくも君を調伏、其元はといへば私ゆゑ、お暇下したまはらば殿の御身に恙もなし。とはいへ是れまで片時も、お側を離れず御寵愛蒙りし身を徒事に、身を退く私が心の内の悲しさを、御推量遊ばされて下さりませ。

貞行　何事かと思へばそれ故に、俄かの暇の願ひとか、そりや叶はぬ、其方を嫉み妬むものあらば、冬次郎をはじめ誰にもせよ、皆悉く暇を取らせ、其方はいつまでも予が傍を離すことは相ならぬ、暇の願ひ無用ぢやぞよ。

春之　すりや、殿様に願ひ上げましても、御暇は叶ひませぬか。

貞行　何として〳〵、國家に替るそちぢやもの。

春之　すりや、左程までに私を。

貞行　思はいで何とせう。

春之　えゝ、有難う存じまする。（ト貞行ぢつと手を取り、春之助の顔を見て、）

貞行　見れば見るほど。

春之　御前樣。

貞行　可愛い奴ぢやなあ。

ト春之助ぢつと引寄せる。此時奥より、ばた〳〵、音樂にて、矢九郎太刀藏鏡の箱を持ち、夏之丞近習四人腰元皆々附き出で、

矢九
太刀　御前樣へ申し上げまする、一大事が起りました。

春之　各方、一大事とは何事でござる。

夏之　されば神前へ飾りたる、寶の鏡が紛失いたしてござりまする。

春之　すりや、寶の御鏡が紛失とや。

貞行　して、手掛りにもなるべき、證據にても有るか無きか、どうぢや〳〵。

矢九　證據と申すは箱のうちに、小柄が入れてござりました。（ト出す。）

貞行　其品これへ。
矢九　はツ。（ト貞行小柄を見て、）
貞行　はて、此小柄は見覺えある、いつぞや予が春之助に與へし小柄。
夏之　すりや其小柄は、春之助どの、小柄とや。
春之　や、どうしてそれが、御鏡の箱のうちにござりましたな。
ト　わざと驚く、この時冬次郎窺ひ居てつか／＼と出で、春之助を引附け、
冬次　御鏡の盜賊春之助、最前某に恥辱を與へしその返報。盜賊の折檻かう／＼。
ト扇にてさん／＼打つ。
貞行　待て冬次郎、おのれ蟄居の身を以て、春之助をなぜ打つた。
冬次　でも、御寶の盜賊ゆゑ。
貞行　だまれ、寶の鏡は春之助の預り、我とわが手に盜み取り、わが小柄を入れ置かうか、たはけ者め。
春之　情ない冬次郎殿、最前のことを遺恨に思ひ、某を罪に落さんといふこなたの企みか、そりや卑怯。なぜ武士らしく討果して恨みは晴らさぬ、察する所御鏡はこなたが盜んで其科を、某に塗付ける企みであらうがな、さあ眞直に白狀おしやれ。

冬次　やあ思ひ掛けなき其詞、此冬次郎が御鏡を盜みしとは、それには何ぞ證據があるか、返答聞かん、さゝ、何と。（トきつといふ。此時下手にて、）

刑部　其證據は是れにあり、きり／＼歩め。

ト音樂にて下手より刑部、眼助の中間に繩をかけて連れて出で、眞中に住ひ、

夏之　や、刑部殿が繩掛けられし其下部は、慥に是れなる冬次郎どのゝ草履取。

冬次　いかにも拙者が家來の眼助、何故あつて刑部どの。

刑部　繩掛け來りし其仔細、今神前にて此小者が、怪しき素振合點ゆかずと引ッ捉へ、拷問すれば直さま白狀。さ、今一應此所にて白狀いたせ。

眼助　申しますとも／＼、斯うなる上からは、何もかも言つてしまひます。寶の鏡は人に頼まれ、わしが竊に盜みました。

春之　して其頼みては、

皆々　何者だ。

眼助　外でもござりませぬ。わしが主人の、冬次郎殿に頼まれました。

冬次　やい眼助、そちや血迷ふたか、何を申す、某が頼みしなんぞとは、跡方もなき僞り者。

眼助　もし／＼冬次郎様、もう助からねえ、頼まれたことは言ふまいと思ひましたが、あんまり詮議が嚴しさに、何もかも白狀します、あれ程こなたに頼まれて、鏡を盜んでこなたに渡した。

冬次　なんと。

眼助　いやさ、お前に盜んで渡した鏡、受取つて置きながら、はて物覺えのわるい御方。さあ斯う白狀した上は、命は助けて下さいまし。

刑部　如何にも、白狀いたした寶の盜賊冬次郎に極まる上は、そちが命は助けてくれう。

眼助　有難うございます。

刑部　此上は冬次郎、汝が家來が明白の白狀、脫れはあるまい、寶の御鏡きり／＼此場へ出してしまへ。

冬次　こは情ないお疑ひ、寶を奪ひしなんぞとは、此身に取つて露聊か、毛頭覺えはござりませぬ。

春之　やあ如何やうに陳じても、現在家來が自身の白狀。

太刀　とても脫れぬ天の網。

矢九　但し、こなたが盜まぬといふ、證據があるか。

冬次　さあ、其言譯は。

刑部　言譯なければ盜賊か。

冬次　さあそれは、

春之　言譯あるか、

冬次　さあそれは、

皆々　さあ〳〵〳〵。

刑部　遁れはあるまい冬次郎、さあ眞直に白狀しやれ。

冬次　假令如何やうに申さるゝとも、更々覺えはなけれども、言譯なければ是非に及ばず、此場に於てさうぢや。（ト腹切らうとする。此以前より三太夫出掛り、聞き居て、）

三太　あいやもし、冬次郎どの、其切腹は叶ひますまい。（ト眞中へ出る。）

貞行　其方は朝倉三太夫、疑ひうけし冬次郎が、切腹なすをなぜ留めた。

三太　はッ、殿の御詞ではござりますれど、切腹いたすは誠の武士のいたすこと。大罪人の冬次郎、切腹は相成りますまい。

刑部　またしても入らざる留め立て、罪に伏した冬次郎、切腹するをなぜ成らぬ。

三太　はて知れたこと、盜賊ならば縛り首、殊に自身に白狀せざる冬次郎、それゆゑ切腹はなるまいと留めたは某が、よもや誤りではござりますまい。

刑部　假令冬次郎が白狀せずとも、家來が白狀なしたる上は、よもや脱れはござるまい。

三太　いや、白狀合點行かぬ、其科人は身共が預り、館へ連行き一詮議。

眼助　一旦白狀したわしを、改めて朝倉樣が。

三太　身共が預り立歸り、執權の鳥山殿へ相渡し、きつと詮議を。とやかく妨げめされるは、却つて其身に疑ひが。

刑部　や。

三太　いやさ疑ひかゝりし冬次郎どの、御前は叶はぬ、それ何れも、引立てめされい。

矢九　心得ました。冬次郎どの、立たつせい。(ト七つの時計にて矢九郎太刀藏冬次郎を引立て下手へはひる。)

貞行　最早夕陽歸館なさん。春之助夏之丞は、猶も淨めの神樂を奏し、立歸れ。

春之 夏之　畏つてござりまする。

貞行　大友刑部には、申し附くる一條あり、三太夫其餘の者は供觸れいたせ。

皆々　畏つてござりまする。

三太　左樣ならば、我が君樣。

春之 夏之　御機嫌よろしう、

貞行　行け〳〵。

皆々　はッ。

ト音樂にて春之助夏之丞は奥へはひる。貞行刑部殘り、三太夫先きに近習四人眼助を引立て腰元皆々附いて花道へはひる。

貞行　今日は何かと心配り、たゞ憎きは寶の鏡を奪ひ取つたる冬次郎め、館へ歸り禁獄させよ。

刑部　畏つてござります。斯かる變事もあらんかと春之助と申し合せ、こしらへ置きたる贋物の御鏡、誠と心得奪ひしたわけ、則ち誠の御鏡は內陣へ祕め置き、篤と祈念いたしてござれば、いざ御落手下さりませう。（ト懷中より、錦の袋に入れし鏡を出して、貞行に渡す。）

貞行　流石は刑部、天晴の働き、出來した〳〵、其褒美として只今より、五百石の加增申し附けるぞ。

刑部　すりや五百石の御加增とや、えゝ有難う存じまする。

貞行　供觸れいたせ。

刑部　はッ。殿の御歸館。（ト向ふにて）

大勢　はあゝゝ。（ト貞行鏡を見て）

貞行　其方なくば大事の御寶、持つべきものは、（ト鏡を見て、）家來ぢやなあ。

刑部 恐れ入りましてござります。(ト辭儀をする。音樂、行列三重にて此道具廻る。)

(境内玉垣外の場)——本舞臺三間上手石の鳥居、下手折廻し、石垣の上に玉垣の角を見せて飾り、向ふ本社の書割、所々に石燈籠梅の立木、日覆より釣枝、大拍子にて道具留る。と、合方にて奥より冬次郎悄々として出來り、思入あつて、

冬次 思ひ廻せば廻す程、最前僞書の短册といひ、又候や寶の紛失、此身に聊か罪なくして、君の御不興蒙ること、これ皆刑部春之助が深き企みに極まつたり、日頃より殿に阿り諛ひよからぬ事のみお進め申せば、お側に久しくあるうちに、如何なる事をや仕出さん、然ある時には御家の大事、幸ひ彼れめがお供におくれて歸るは天の與へ、歸るを待ち受け討つて捨て國家の憂ひを除きし上、我れも其場で切腹せん。さりながら御寵愛の春之助を害する時は、跡に殘りし兄弟へお祟りあるは知れたこと、いづくへなりと人知れず落しやらん、妹照葉は犬千代と許嫁なれば、我死するとも烏山親子が惡しきやうには計らふまじ、落行く先きは其以前家に仕へし村岡眞平、長門國所崎の浦に住むと聞けば、かしこを指して落しやらん。委細の樣子を、妹照葉へ知らせの文。(ト懷中より手紙を出し、)今別當所の硯を借り、認めたれど誰を使ひに、はて、何としたものであらうなあ。

ト思案の思入、やはり合方にて、奥より柵出來り、

柵　あなたは冬次郎さま、まだお歸りなされませぬか。

冬次　柵どの、まだこなたさまも。

柵　はい、私は今一度あの夏之、いえさ、夏の日と事かはり、夜とはいへどまだ日短か、大神さまへ何やかのお願ひで、つい遲うなりました。

冬次　殿にも只今御歸館、少しも早うお歸りなされい。

柵　左樣ならば私は。（ト立たうとする。）

冬次　あゝこれ柵どの、丁度幸ひ某は、夏之丞どのに申し談ずる用事あれば、何卒この一通御歸りの後妹照葉へ、お屆けなされては下さるまいか。（ト手紙を出す。）

柵　そりやもうお易い御用、照葉さまへお屆け申すでござりませう。

冬次　必ず共にお頼み申す。

柵　心得ました、左樣ならば冬次郎さま。

冬次　柵どの。

柵　お先きへ參りまする。（ト唄になり、柵手紙を持ち花道へはひる。冬次郎跡に殘り）

冬次　あの手紙を照葉方へ屆けやれば、是れにて安堵、（ト此時雨車になり、）幸ひ降り來る此春雨、恨み重なる春之助、かれが歸りは生の松原、暗きを便りに、小蔭に待受け只一打ち。（ト刀を拔き草履を脱ぎ、嫉刄を合せ、）先きへ廻つて、（ト刀を鞘へをさめるを木の頭、）おゝさうだ。

ト時の鐘、早めたる合方にて、冬次郎袴の股立を取りながら、花道へはひる。この模樣よろしく時の鐘にて、

幕

三幕目

蘆屋の里賤家の場

同返し　生の松原殺しの場

〔役名〕――菊池貞行、賤の女すゞしろ實は若菜姫、茶道逸齋、手下、旅人村岡貞平、野岡冬次郎、青柳春之助、大友刑部、荒鐵太刀藏、下部强平、同眼助等。〕

（蘆屋の里賤ケ家の場）――本舞臺二間中足の二重、栗丸太の柱折廻し本絲附、藁葺屋根の角を見せ、前へ、押出して飾り、左右四つ目垣に山吹、舞臺前土手松に山吹、竹の折戶梅の立木、總て蘆屋の里賤ケ家の體。時の鐘雨車にて道具留る。と、本釣鐘のかしら、誂へ兩吟の唄になり、よき程に雨車、花

道より賤の女すゞしろさら毛結下げ、結構に仕立てたる肩入の振袖、前帶、くり下駄にて、貞行同前の裝、兩人蜘蛛の巢と見える誂への傘をさし出る、跡より逸齋附いて來て花道にて、

賤女　春雨に匂へる花もあかなくに、

貞行　香もなつかしき山吹の花。

賤女　降りみふらずみ春雨に、高位のお方か知らねども、濡るゝを厭ふ御有樣。

貞行　折よく丁度賤の女の、情を假の雨宿り、

賤女　お供申して思はずも、歸る家路に咲きそめし、

貞行　色香を含む山吹の、

賤女　花色ごろも主もなき、

貞行　袖ふり合ふも、

賤女　他生の御緣、

貞行　手折らすこゝろか。（ト寄り添ふ。）

賤女　何であらうと、わたしが家へ。

貞行　案内しやれ。

賤女　斯うお越しあそばしませ。

ト唄になり兩人思入、雨は止んだといふ思入にて、賤の女は傘をつぼめる。貞行逸齋に持たせろといふ思入。賤の女憚りといふこなしあつて、傘を逸齋に渡して、恥かしさうに貞行の手を取り、思入あつて、兩人舞臺へ來り、暫くと貞行を門口に待たし、足早に二重へ上り花莚を敷きて、

むさくろしくとも、先づ／＼是へ。

貞行　然らば許しやれ。（ト貞行内へはひらうとする。）

逸齋　あゝもし御前樣、斯やうな賤しきものゝ家へ、お腰をお入れ遊ばすは、餘りぶしつけ。

貞行　よいわ／＼、雨の降るのに濡れては歩かれぬ、此家の軒に晴るゝを待つのぢや。

逸齋　いえ／＼、雨はもうさつぱりと止みました。

貞行　えゝ無粹な奴、雨は止んでも、（賤の女の思入。）

逸齋　え。

貞行　捨て置け／＼。（ト唄の切れにて貞行二重へ上り花莚の上へ住ひ、あたりを見て、）予が館とは事替り、下下の家は、わびた住居ぢやなあ。

賤女　お恥かしう存じまする。

貞行　あゝ喉がかわく。こりや、茶をもて。

逸猶　はツ、折あしくお茶瓶の者が。

貞行　こりや女、それに茶があらう、早う持て〳〵。

賤女　最前から心附きましたれど、お茶碗とてもむさくろしく。

貞行　苦しうない〳〵、早うもて。

賤女　畏りました。

ト替つた合方になり、賤の女大和風呂に掛けし土瓶の茶を汲み、貞行へ持ち行く、貞行取つて呑み、

貞行　あゝ呑み加減ぢや、も一つ所望。（ト賤の女汲んで出すを貞行呑んで）思ひがけない衆の無心、そちが埴生の家に參り、今日の疲れを休め過分に思ふぞよ。

賤女　冥加に餘る其お詞、有難う存じまする。

貞行　見れば年端も行かぬ身で、寡婦ぐらしの樣子ぢやが、そちに夫はないかどうぢや。

賤女　御覽の通りの一人住、父母共に先にみまかり、未だ定まる夫もなく便りない身でござりまする。

貞行　それは近頃不便なことぢや、思はず此家へ來りしも、不思議な緣といふもの、予は當國の領主ぢやが、今の詞が誠なら、是れより館へ同道なし、側女となして召仕はん。

賤女　そんならあなたが、菊池の殿樣。

貞行　いかにも、右衛門佐貞行ぢや。

賤女　ても思ひがけない、お見上げ申せば申すほど。

貞行　手活の花に手折らする、心はないか、どうぢや〳〵。

賤女　其お詞は嬉しいが、お館には奥樣はじめ多くのお伽、ことに美しいお小姓衆も澤山と聞けば、不束なる私を、お弄り遊ばすおしやれごとでござりませう。

貞行　何い弄らう大眞實、其やうに卑下せずと、予が思ひ晴らさせてくれいやい。（ト ぢつと引寄せる。此時賤の女懷より誂への守袋を落す、貞行取上げ見て、）こりやこれ、慥に。

ト目をつける、賤の女びつくりして、

賤女　あれ、もし。（ト ちやつと取つて懷中する。）

貞行　今のは正しく臼杵切。

賤女　え。

貞行　いやさ、うすき緣にあらずして、行末ながく不便を加へん。

賤女　其お詞が誠なら、どうぞ今から。

貞行　可愛がらいで何とせう。
賤女　えゝお嬉しう存じまする。（トちつと寄り添ふ。）
逸齋　いや呆れたものだ。もし／＼御前樣、如何にあなたが女好きでも、身元も知れぬ賤の女を、どうしてお伽に。
貞行　こりや、そちが構うたことではないわい。
逸齋　それぢやと申して、
貞行　えゝ、控へて居れ。
逸齋　へい。（ト思入。）
貞行　こりや女、そちが名は何と申す。
賤女　はい、すゞしろと申します。
貞行　むゝ、すゞしろ、今日太宰府より歸館の路次、神すゞしめか賤のすゞしろ。
賤女　天神さまが結ぶの神。
貞行　出雲にあらぬ我が國の、
賤女　心づくしの末かけて、

貞行　見捨てぬ證據の、固めをこゝで。
賤女　それぢやというて。
貞行　はて、初心な奴なあ。(ト引寄せる。賤の女側へ寄らうとして逸齋を見て、)
賤女　あれ、見てぢやわいなあ。
貞行　こりや〳〵無粋な奴ぢや、心を通せ。
逸齋　あの私に。(ト顔を出す。)
貞行　背けい。(トよろしく言ふ。)
逸齋　あッ、是非に及ばぬ。(ト下の方を向く、兩人思入。)
貞行　これ。(ト賤の女の手を取る。)
賤女　おゝ、耻かしい。(トぢつとなる。薄ドロ〳〵になり、賤の女放心せし思入。)
貞行　こりや、すゞしろ、どうしやつた。(ト賤の女心附き、)
賤女　さあ、お手ふれられしに放心なせしは、慥にあなたの懐に。
貞行　や。
賤女　いえさ、高位のあなたに賤の女が、勿體ないのでござりませう。

貞行　いや、氣の小さい女ぢやなあ。

ト思入、時の鐘、ばた／＼にて花道より、以前の近習四人出て、舞臺へ來り。

○　殿、こゝに居られましたか。

◎　雨も小止みになりましたれば、

□　最早黄昏、

△　御歸館遊ばされ、

四人　然るべう存じまする。（ト是れにて貞行思入あつて）

貞行　おゝ、直樣歸館いたすであらう。（ト二重より下りながら）これや女、今日は何かと厚い厄介。約定せし詞に違變はない、近きうちに館へ招く、迎ひの便りを待つて居やれ。

賤女　有難う存じまする。（ト貞行門の外へ出る。賤の女門口まで送つて出て、）御機嫌よろしう。（ト手を突く。）

貞行　面を上げい。（ト賤の女の顏を見て、）見れば見るほど。

逸齋　え。（ト逸齋顏を出す。）

貞行　たはけものめ、（ト中啓にて頭を打ち、）さらばぢや。

ト唄時の鐘、貞行思入あつて皆々附いて花道へはひる。賤の女跡を見送り二重へ上り、やはり時の鐘

にて、上下より女盗賊四人、各思ひ〳〵の盗賊のこしらへ、蠑螺の殼へ火を點して窺ひ出で、

女一　頭の、

皆々　姉御。

賤女　これ。（ト時の鐘、凄き合方、賤の女思入。）今の樣子を、聞いたであらう。

女二　あい、後で殘らず聞きました、折角かゝつた網の魚、

女一　どうでも煮燒が出來さうなを、

女三　迎ひの來たので手を空しく、

女四　歸してやつた頭の了簡、

四人　合點が行きませんよ。

賤女　成程みんなが言ふ通り、菊池の殿と知つたゆゑ、傘の無心を幸ひに此家へ伴ひ色仕掛け、首尾よくやらうと手を取つたら、身動きならねえ今の動亂、あの貞行の懷に菊池の寶の名鏡を、持つて居るばつかりに、蜘蛛の術もいたづらに行ふこともならぬゆゑ、無念ながらも見遁して、一先づ歸したあの貞行。

女一　それで樣子が分りました。

女二　然し頭の胸のうちに、

賤女　迎ひをよこすと言つたからは、館へ乘込み仕樣はさま〴〵。

女四　然し姉御の今の素振、貞行殿に氣のある樣子。

賤女　そりや大名高家だもの、日向臭い百姓や町人とは違つて、滿更憎くねえやつさ。

女三　どうでも姉御は、

皆々　濡事師だなう。

賤女　えゝ、よしてもくんな、濡れるといへば、どうか晩には、（ト隅の柱に手を掛けるを木の頭、）ばれにやあいゝなう。（ト空を見上げながら片手に後れ毛を掻きあげる、これをキザミにて、よろしく、）

ト禪の勤めにてつなぎ、引返す。

ひやうし幕

（生の松原の場）――本舞臺三間向ふ黒幕眞中振りよき大樹の松、左右丸ものゝ松並木、日覆より釣枝、上下藪疊、總て生の松原の體。時の鐘にて幕明く。と雨車、時の鐘、合方にて花道より强平、笠を冠り紺看板の中間にて、青柳の紋附きたる箱提灯を持ち、後より乘物一挺、この後より中間笠を冠

り蔭澤の紋附きし提灯を持ち乘物一挺、侍、中間附き出て舞臺へ來る。此時上手の藪疊を押分け、冬次郎袴股立にて窺ひ出で、刀を抜き强平の持ちたる提灯を切落す、禪の勤めになり、强平先きに皆々あッと言つて乘物を捨てゝ逃げる、冬次郎先の乘物にかゝり、

冬次　主君に阿り人を讒する、佞奸邪智の不敵の曲者、恨みの刀受取りやらう。

ト乘物越しに突込む、と、此うち强平窺ひ出で、下の乘物の戸を明け春之助を出し、囁き合つて下手へ小隱れする、駕籠の内にて、

夏之　やあ亂心なせしか冬次郎、何ゆゑあつて、我に手を負はせしぞ。

ト此聲を聞いて冬次郎びつくりなし、

冬次　やゝ、然いふは慥に夏之丞どの、南無三寶人違へ、今一挺の乘物こそ、人非人め思ひ知れ。

ト探り寄り下の駕籠の内へ刀を突込む、手ごたへなきゆゑ戸を明け透し見て驚き、

やゝ最早春之助は逃げ失せしか、殘念やなあ。（ト夏之丞の駕籠の戸を明ける、内に夏之丞手負の裝にて刀を杖に半身出掛る、冬次郎見て）面目なし夏之丞どの、御家の仇たる春之助を、殺害せんと最前なら爰に待受け提灯の、紋を目當に思ひ過ち斯くの仕合せ。

夏之　すりや最前の遺恨より、春之助を討たん爲の人違ひ。疵は淺い、氣遣ひあるな冬次郎どの。

冬次　忠義と思ひ仕出せしことも水の泡、却つて此方の仇となつたか、えゝ口惜しい。（ト此うち春之助強平窺ひ出で、此聲を知るべに春之助刀をぬき、冬次郎を一刀切る、冬次郎おどろき、）やあ、何者なれば卑怯未練の欺し討ち、奇怪なり、さあ尋常に勝負なせ。

ト禪の勤めにて強平も一腰を拔き冬次郎へ切つて掛る、此内下手より矢九郎太刀藪拔身にて窺ひ出で切つてかゝり、冬次郎四人を相手に立廻り、よき見得にて月出で、冬次郎春之助皆々を見て、

や、さてこそ青柳春之助、それに荷擔の惡人ども、重なる恨み覺悟せよ。

春之　小癪な一言、觀念なせ。（ト夏之丞これを聞いて、）

夏之　人非人の春之助、深手ながらも冬次郎に、助太刀なさん、覺悟せよ。（ト刀を杖に駕籠より出る。）

春之　入らざるおのれが刄向ひ立て、何れもぬかりめさるな。

三人　心得ました、くたばつてしまへ。

夏之　何を小癪な。

ト禪の勤めになり、夏之丞よろめきながら刀を拔き六人立廻り、よき見得にて三味線入りの鳴物になり立廻りよろしく、月隱れて闇の立黑廻り、時の鐘、忍び三重にて六人よろしくあつて、又月出で、冬次郎夏之丞手負ひながら烈しき立廻り、此内上手より中間一人冬次郎の紋附きし提灯と、傘下駄を

持ち迎ひの心にて出で、此立廻りの中へ這入り、提灯を切落され、ぴつくりして花道へ迯げ行き、傘と下駄を、花道へ落して迯げてはひる、トヾ冬次郎は、太刀藏、矢九郎兩人と立廻り危くなる、夏之丞は强平と立廻り危くなる、春之助夏之丞を切り下げる、是れと一時に、上手の藪より槍出で冬次郎の脇腹をしたゝかに突く、冬次郎あッと苦しみながら槍を持つて引出す。藪の内より刑部着流し、尻端折り、大小にて槍を持ち出る、冬次郎夏之丞苦しみながら皆々と立廻り、刑部冬次郎の太股へ槍を突き立てる、春之助夏之丞の刀を踏へきつと見得。時の鐘、凄き合方、冬次郎と夏之丞は刑部を見て、

冬次　やゝ、おのれは大友刑部ならずや。

夏之　春之助と心を合せ、お家に仇する人非人。

冬次　盡せし心も水の泡、却つておのれら兩人の、非道の刄におめ〳〵と、

夏之　忠義に凝つたる我々が、命を捨つるか。

兩人　思へば〳〵口惜しい。

刑部　言ふにや及ぶ、元より阿房の貞行を猶馬鹿者に仕立て上げ、菊池の家を横領する邪魔になる汝ゆゑ、罪に取つて落さんと、かねて仕込みしこしらへ事も、行き損なつた返報を、うぬが方から仕返しの折に幸ひこの助太刀。

春之　不便や雪岡冬次郎、恨み重なる春之助が手に掛り、嘸無念にも思はうが、我また汝に恨みあるゆゑ、態と怒りを起させて首尾よくやつた謀計、樣子一々物語らん。所詮行くべき冥土の旅、あの世で父の多太夫へ、土産に詳しく言聞かせよ。（ト夏之丞を蹴返し、眞中の石へ腰をかけきつと見得、誂への合方。）わが誠の父といふは、いつぞや博多の沖に於て菊池秀行が軍配にて、汝が父たる多太夫が矢先きに掛りし異國の海賊、丁禮といふ者なり、いつぞや鐘ヶ岬にて父の靈魂の告げにより始めて知りたる父の敵、討つて恨みを晴さんにも、菊池秀行多太夫諸共、此世にあらねば詮方なく、血筋の者に仇なさんと思ふに幸ひ菊池の嫡子、右衞門佐案道の戀慕に我を引きあげ、立身出世の寵に誇り、不行跡をすゝめ込み、忠義立てする奴輩は忍び／＼に讒言なし、此程汝が太宰府へ奉納なせし願書の額面、調伏の短册と窃に入替へ、今日社内にて貞行が詞にまかせ打擲も、父が恨みを晴らさん爲め、また夏之丞も某が、歸り道を其方が待受けをると察せしゆゑ、下部へ言附け提灯を、摺替させたばつかりに、運命盡きたる夏之丞、我れに替つて敢ない最期、仔細といふは此通り、何と膽が潰れたか。

刑部　我も兄たる宗隣が領國を望みしゆゑ、舟岡川の合戰に裏切りなして功を立てしに、其甲斐もなく宗隣が、所領は菊池が手に入つて、我は菊池の家來の如く長門の國にて僅かの所領、宛行はるゝ

其無念さ、春之助と心を合せ、菊池一家を討ち滅ぼし、筑前豐後はいふに及ばず、九州一圓中國まで二人が領地になさんず企て。

春之　今汝等を討ち取るは、菊池を滅ぼす軍の血祭り。

刑部　心嬉しや、

兩人　悦ばしやなあ。（ときつと思入、冬次郎夏之丞無念の思入て）

冬次　えゝ、聞けばきく程空おそろしき企みの一々、疾くにもそれと知るならば、仕樣模樣もあるべきに。

夏之　お家の大事も見屆けず、惡人ばらの手にかゝり、命を捨つるか冬次郎どの、

冬次　夏之丞どの、思へば〳〵。

兩人　口惜しい。

春之　やあ、此期となりて入らざる囈言。

刑部　いくらじたばたひろいでも、足腰立たぬ不便な奴等。

春之　此世の暇を取らせてくれん。

冬次　假令深手は負ふとても、

夏之　冥土の道連れ、汝等兩人、

兩人　せめて一太刀。

刑部　だまつてくたばれ。

ト刑部冬次郎へ突立てし槍を引きぬく、冬次郎よろぼひながら春之助へ切つて行く、夏之丞同じく刑部へ切つて行く、其刀を打落し、刑部刀を取つて夏之丞を切り下げる、春之助冬次郎を切り下げて、

春之　父尊靈のましまさば、怨敵雪岡冬次郎を討ち取るさまを御覽ありて、修羅の無念を晴らさせたまへ。

ト冬次郎へ乘掛り止めを刺す、時の鐘、ばた〳〵にて、上手より以前の眼助息を切つて出來り、此體を見て、

眼助　刑部樣、春之助樣、これにおいでなされましたか。

強平　おぬしは眼助、どうして爰まで迯げて來た。

眼助　さればさ、三太夫めが引立て館へ歸り、囚獄のうちへ繋がれて居たを、やうやく繩を引切つて、迯げて來ました。して、冬次郎どのは。

矢九　晝の遺恨を恨みに思つて、春之助どのと間違へて、夏之丞へ手を負はせし所、

太刀　我々始め刑部殿が、助太刀して、夏之丞めも側杖に、

春之　冬次郎めを討取つて、日頃の恨みを晴らしたわい。

眼助　そいつは首尾よく參りましたな、日頃から主人を見限り、あなた方へ一味の眼助、是れから下郎が身分をよろしう。

刑部　氣遣ひいたすな、大望成就の其上は、取立て遣はす奉公始め、申し附くる一儀がある。

眼助　して其御用は。

刑部　弟岩太郎が執心の、冬次郎が妹照葉、忠義顏にもてなして。（ト眼助に囁く。）

眼助　心得ました、お指圖通り照葉どの、今宵のうちに連れ出しませう。

刑部　荒鉀宇壺の兩人は、館へ歸つて此場の樣子、冬次郎が狼藉にて、夏之丞を殺害せしを、身共が駈付け討取りしと、詞を巧みに訴へめされ。

兩人　心得ました。

春之　强平、そちは身共より、先きへ歸つて何かの計らひ、これ。（とさゝやく。）

强平　心得ました。

矢九
太刀　然らば御兩所。

刑部　必ずともにぬかりめさるな。

兩人　合點だ。（ト時の鐘にて矢九郎太刀藏强平眼助上手へはひる。）

刑部　兩人が館へ歸り、委細の樣子訴へなば、檢使の者の來るは必定、某は此場に殘り事の次第を計らひ申さん。

春之　某は館へ歸り、此場のあらまし貞行殿へ、詞巧みに言上なさん。

刑部　表門は檢使の混雜、道をとりかへ裏門より。

春之　心得ました。

ト身ごしらへする、花道の揚幕にて人音するゆゑ、兩人囁き合ひ、刑部は上手春之助は下手へ小隱れする。時の鐘合方にて、花道より村岡眞平やつし旅裝、草鞋、菅笠と小提灯を持ち出來り、

眞平　今夜はもう何時か知らん、さつきの降りで道がぬかる、久しぶりで菊池のお屋敷をお尋ね申すので道がさつぱり知れない。（ト捨ぜりふにて舞臺へ來り、冬次郎の吹替の死骸を蹴つけ、びつくりして透し見て。）や、こりやこれ人が。（ト此うち刑部窺ひ出で、眞平の持ちたる提灯を打ち落す、眞平びつくり思入、春之助此うち探り／＼花道へ行き眞平を透し見て。）どうやら怪しい。（ト花道を見る、刑部拔きかけるを眞平留る、春之助花道にて小石を拾ひ礫に打つ、眞平菅笠にてうけける、刑部拔きかけし刀をしやんと納め

ろ。双方一時に木の頭。）あぶないことだ。

ト提灯をさがす心にてあたりを探る、刑部向ふを見る引けり、是れをキザミ、雨車時の鐘にて、

ひやうし幕

ト幕引附けると一緒に、春之助花道にて、以前の中間が捨て置きたる傘と下駄を探り見て思入。

春之 また降り出す春雨に、丁度幸ひ下駄傘、夜更けぬうちに、それ／＼。

ト春之助下駄をはき傘をかつぐ、時の鐘忍び三重の模様、雨車にて春之助悠々と花道へはひる、鳴物打ちあげ、止めの木にてシヤギリ。

四幕目　鳥山屋敷の場

〔役名　鳥山豐後之助保忠、鳥山犬千代後に秋作照忠、龍川小文治、宇座矢九郎、荒鐵太刀藏、侍、中間、奴。犬千代乳母秋篠、腰元小篠、同一重等。〕

（鳥山屋敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面に床の間、三尺の袋戸棚、掛物、料紙硯箱など書割よろしく。此下雲母形の襖、上の方折廻し障子屋體。此前に月に雁の繪の衝立、下の方白窓の附きし板羽目、揚幕一間の冠木門、總て鳥山屋敷の體。爰に小篠、一重家中腰元の裝にて、煙草盆の

掃除なして居る、唄にて幕明く。と合方しらべになり、

一重　これ小笹どの、またお上のお噂するやうなが、なぜこちらの若旦那犬千代様は、あのやうな愚しいお生れであらうぞいなあ。

小笹　さいなう、親旦那豊後様の御發明に引替へて、もう十七におなりなさるに、乳母や／＼と秋篠さまを、明けても暮れてもお慕ひなされ、とんと幼いお子も同然、したがお好きな事は別なもの、あの愚しいお心に、舞や鼓のお上手さ、かほどのお智慧があるならばと、思ふ程猶おいとしいわいなう。

一重　犬千代さまもおいとしいが、又おいとしいは、冬次郎さまのお妹御照葉さま、幼い時より犬千代さまのお許嫁であつたけれど、あの通りのお生れゆゑ、お呼び迎へもないうちに、冬次郎さまの果敢ない御最期。

小笹　おゝそれ／＼、委しい譯は知らねども、御家にあつては悪いかして、其夜のうちに照葉さま力松さまと共々に、腰元がお供して屋敷を脱け出で、どこへお出でなされたやら、いまだにお行方知れぬといなあ。

一重　嘸や馴れぬ旅路にて、艱難をなされたであらうわいな。

小笹　ほんにおいとしいことぢやわいなあ。(ト此時奥にて)

犬千　「信濃の國の住人、麻生殿の御内に。」

小笹　あの聲は、犬千代さま。

一重　またお狂言が始まつたさうな。

ト誂への合方になり、奥より犬千代若衆鬘、袴振袖一本差し、細き竹の先きへ、飾りに侍烏帽子を附け、これを持ち、小文治同じく若衆鬘袴一本差しにて、兩人麻生の狂言をしながら出來り、

犬千
小文　「藤六といふ下郎が主の宿を忘れて、はやしものをして行く、げにもさありやよ、かりもさうよの。」

トよろしく振あつて、

小笹　これは和子さまには、麻生のお稽古でござりますか。

犬千　おゝ、そち達も面白いか。おれも面白い。小文治、そちも面白いか。

小文　面白うござります。

犬千　さあ／＼是れからは小文治、そち一人でやつて見せい。(ト烏帽子を小文治に渡す。)

小文　へい、私一人でいたしまするのでござりますか。

犬千　おゝ、おれは是れで見物する。さあ／＼、始めい／＼。(トこれにて小文治烏帽子を持ち)

小文「信濃の國の住人麻生殿の御内に、藤六といふ下郎が、主の宿を忘れて、はやしものをして行く、げにもさありやよ、かりもさうよの。」（ト是れを犬千代見ながら拍子を取り、餘念なき思入。）

犬千　あゝ面白い〳〵、もう一遍せい。

小文　はッ、「麻生殿の御内に藤六といふ下郎が、主の宿を忘れて、はやし物をして行く、げにもさありやよ、かりもさうよの。」

犬千　もう一遍せい。

小文　え、またでござりますか、幾度しても同じこと、もうお許し下さりませ。

犬千　いや〳〵、おれがいやになるまで、何遍もせい〳〵。

小文　左樣ならば、ちと腰元衆におさせなさりませ。

小笹　いえ〳〵、どうして私共にお狂言が出來ませう。

一重　やはりそれは、小文治どのがよろしうござりまする。

犬千　おゝ小文治がよい、早ういたせ〳〵。

小文　どうぞお許し下さりませ。

犬千　いや〳〵、舞うて見せねば、おりやいやぢや〳〵。（ト犬千代足摺りなして思入。）

小笹　これ小文治どの、また和子さまがおむづかり遊ばす、

一重　早う狂言をなされませいなあ。

ト唄になり、花道より秋篠着流し屋敷乳母のこしらへ、跡より中間白木の臺へ札守を載せ持ち出來る

犬千　さあ〳〵、早うせねば、おりやいやぢや〳〵。

小文　どうぞ、お許しなされて下さりませ。（ト此中秋篠舞臺へ來り、札守を受取り、中間下手へはひる。）

秋篠　和子さま、只今戻りましてござりまする。

犬千　おゝ、乳母戻つたか、よう戻つた〳〵。（ト秋篠に縋り附き、）わが身はどこへ行つたのぢやぞいの。

秋篠　今日は巳待にござりまするゆゑ、嚴島の辨天さまをお移し申せし妙音院へ、和子さまの御願掛けに參りました、見れば大分御機嫌の惡い樣子ぢやが、こりやどうぞなされましたのかいな。

小笹　さあ、是れは今まで小文治どのと、お狂言をなされしところ、

一重　小文治どのがいやぢやと言うて、それからおむづかり、

兩人　遊ばしたのぢやわいな。

犬千　これ乳母、小文治が言ふことを聞かぬわいなう。

秋篠　それは憎い奴でござります。これ小文治、あれ程わしが言附けおくに、なぜお相手をせぬのぢや

ぞいの。

小文　お相手はするけれど、同じ狂言を何遍もするのぢやゆゑ。

秋篠　そりや何遍なりともお相手をしたがよいのに、何ぞといふといやの應のと、お心易だてに我儘ばかり。あなたをそちは何と思ふ、大事々々のお主さまぢやぞ、そのお主のおつしやることを、背くといふがあるものかいの。（ト秋篠小文を叱る、犬千代同じやうに、）

犬千　背くといふがあるものかいなう。

秋篠　ほんに、さうでござりますわいな。

犬千　ほんに、さうでござりますわいな。（ト顔見合せ、）

兩人　ほゝゝゝゝゝ。

小笹　秋篠どので、和子さまの、

一重　お笑ひ顔が出ましたわいな。

秋篠　おゝ、御機嫌が直りましたら、乳母がよい物上げませう。（ト帶の間より袱紗に包みし舞扇を出し、）これ御覽じませ、あなたに上げようと存じ、こんな舞扇をとつて參じましたわいなあ。

ト犬千代に遣る、犬千代開き見て、

犬千　おゝ、こりや赤い畫ぢや、嬉しい〳〵。

小文　どれ、私にお見せなされませ。

犬千　いや〳〵、そちには見せぬ〳〵。

小文　ちよつとお見せなされませ。（ト小文治犬千代扇を奪ひ合ふ、小文治無理に取る拍子に、扇の親骨放れる。）や、こりや扇の親骨が放れました。

犬千　大事の扇の骨をはなした、おりやいやぢや〳〵。（ト秋篠扇を取つて思入あつて）

秋篠　おゝ、こりや糊ばなれがしましたのぢや、今に乳母が離れぬやう、かゞつて上げませう。これ小文治、なぜこのやうなわるさばかりしやるぞいの。

小文　いえ、そりやわしではござりませぬ、和子さまでござります。

犬千　いや〳〵小文治、そちぢや〳〵。

小文　いえ〳〵、お前さまぢや〳〵。

秋篠　これはしたり、どうしたものぢや、そなたが麁相をして置いて、な、（ト呑み込ませ、）和子さまのせるにして憎い奴ぢや、今に見よ、大きな灸をすゑてやるぞ。

犬千　え。（トびつくりして、）おれは灸は堪忍してくれよ。

秋篠　いえ、あなたではござりませぬ、小文治めにする事でやります。

犬千　そんならおれではないか、あゝ嬉しや〳〵。

秋篠　これ、爰へ來て和子さまへ、御免なされませとお詫びを申しや。

小文　それぢやといふて。（ト小文治すねる思入。）

秋篠　こりや、早うお詫びをしやらぬか。（ト秋篠小文治へ目で知らせる、是れにて小文治呑み込み、）

小文　和子さま、眞平御免なされませ。（ト手を突いてあやまる。）

犬千　やい〳〵誤つた〳〵。（ト烏帽子を小文治の顔の先へ出して囃す、小文治むつとするを、秋篠それと思入あつて、）

秋篠　さあ、あのやうにお詫をいたしますから、もう御了簡なされませ。（ト思入あつて、）これ小文治、このお札を床の間に直して置きやれ。

小文　畏りました。（ト小文治札を受取り立上るを、犬千代留めて、）

犬千　其札はおれにくりやいの。

秋篠　いえ、是れは辨天さまのお守札、お玩具にしては勿體ないことにござりまする。これ小文治、早う奥へ持つて行きやいなう。

小文　心得ました。(ト小文治犬千代を振拂ひ、お札を持つて奥へはひる。)

犬千　あゝこれ小文治、待たぬかいなう。(ト立上り)「やるまいぞ〳〵。」

ト合方にて、犬千代狂言の思入にて、追ひかけ奥へはひる。

秋篠　あゝ危い、また爭うてかいな、腰元衆奥へ行つて見て下され。

小笹　畏りました。(ト兩人奥へはひる、跡見送り、秋篠件の舞扇の骨の取れしを見て)

秋篠　けふは巳待に日頃から、信心をなす御城下の辨天さまへ參りし戻り、和子さまへ土產に取つて來た古代模樣の舞扇、僅か引合ふ其のはずみに此親骨のはなれしは、和子の御身かわが子の上に、若しや凶事ある知せではあるまいか。あゝ、心に掛ることぢやなあ。

ト秋篠心に掛る思入、ばた〳〵になり、花道より袴大小の侍出來り、

侍　はツ、申し上げまする、只今御本城より御上使として、宇壺矢九郎さま荒鐵太刀藏さま、御入りでござります。此由旦那樣へ申し上げて下さりませ。

秋篠　心得ました。

侍　どれ、御案內申さう。(ト侍引返してはひる。秋篠思入あつて)

秋篠　折も折とて御本城より、俄かの御上使御入來に、もしや扇の、(ト骨のはなれしを見て思入あつて)あ

お鶴縫々々。(ト氣を取直し)どれ、御上使の御入來を、旦那様へ申し上げませう。

ト唄になり、秋篠扇を持ち思入あつて、奥へはひる。是れにて床の淨瑠璃になり、

〽治世にも亂を忘れぬ武者小路、智勇の譽れ鳥山か忠義を磨く玄關前、宇都矢九郎荒磯太刀藏、上意をかさに入來れば、龍川小文治出で迎ひ、

ト此うち中の舞になり、花道より矢九郎、太刀藏上下大小にて出來る。是れと一緒に奥より小文治出來り、よき所に住ひ。

小文　これは〳〵御上使様には、御苦勞千萬、先づ〳〵是れへお通り下さりませう。

兩人　役目なれば、罷り通る。

〽肩臂はつて上座に通り、(ト兩人平舞臺へ來り、上手へ住ひ。)

矢九　して、豐後殿には在宿めさるか。

小文　はッ、如何にも在宿仕りまする。

太刀　何ゆゑ出迎ひめされぬのだ。

小文　只今お出迎ひ仕るでござりませう。

矢九　假令執權職にもせよ、殿の上意を蒙りて、上使に立ちし我々は、則ち殿も同しこと。

太刀　早速出迎ひあるべきを、顔出しさせぬは上への失禮。
矢九　とく／＼是れへ出迎はれよと、
太刀　奥へ行つて言はつせえ。
〽いかつがましく罵れば、一間のうちに聲あつて、（ト奥にて）
豊後　あいや鳥山豊後之介保忠、只今それへ参るでござらう。
〽刀片手に豊後之介、禮儀みださず立出でゝ、はるか末座に手をつかへ
ト奥より豊後介繼上下一本差し、刀を提げて出來り、下手に控へ、
これは／＼、宇壺荒鐵の御兩所には、上使の御役目御苦勞千萬。
〽上使を敬ふ保忠が、武威に呑まれて俄かに追從。（ト矢九郎太刀藏顔見合せ思入あつて、
矢九　いや、これは／＼豊後殿、お取次でもよいことを。
太刀　執權職の御自身に、お請けめさるは御苦勞至極。
〽言ふを打消し、
豊後　あゝいや左にあらず、假令某執權職にあるとも、御兩所は殿の上使に立たれしからは、則ち殿
と同じこと、敬ひ申すは臣下の禮儀。

兩人　いや、これは痛み入つてござる。
〽竹篦返しに兩人は、撥鬢天窓掻くばかり、豐後之介は威儀を改め、
豐後　して、御上使の趣きは。
〽いふに矢九郎席を進み、
矢九　いや上使の趣き餘の儀にあらず。(ト誂への合方張扇の音にて)かねて我君貞行公、御信心あらせらるゝ嚴島の辨天へ、御參詣あらん爲、明日博多の港より乾坤丸にて御出船、それにつき一家中の若殿輩殘りなく召し連れられ、夫の宮島の舞殿にて武藝勵みの爲とあつて、得物々々の試合ないたさせ、武藝のほどを試み給はん則ち殿の思召し、豐後殿の御子息犬千代殿も、今年纔か十七とか、武藝をお勵みなさるゝ盛り、それゆゑ御供を仰せ附けらるれば、御用意あつて然るべし。上意といふは斯くの通り。
太刀　今宇壺氏の演舌ありしは、則ち上意の趣きなれど、承はれば御子息の犬千代殿はお生れつき、御病身とも或は又おまいとやら辛いとやら、一家中噂とり〴〵、遂に一度人中へ出られた事のない御樣子、斯樣申せば御子息を蔑するに似たれども、晴れ〴〵しき今度の試合、後れでも取らるゝ時は、親御の名までも出るといふもの。こりや御病氣を言ひ立てに、御供においでなさらぬが、

先づ大丈夫と、申すものではござらぬか、なう矢九郎どの。

矢九　何さま貴殿の言はるゝ通り、轉ばぬ先きの杖とやら、平にお供をなされぬが御身のお爲と申すもの、殊に家中の誰れ彼れも、武藝勝れし其中にも、大友刑部殿の弟たる岩太郎殿などは、音に聞えた早業手利。

太刀　かの人などゝ立合ふならば、一溜りもござるまい、兎角お出しなされぬが、上分別でござらう。

〽さみする詞を耳にもかけず、空嘯いて居たりしが、衣紋くつろげ豐後之介。

豐後　御親切なる方々の御意見、親の身に取り何程か忝くは存ずれど、申さば晴れな武藝の試合、願うてもない今度の御供、よしや忰の犬千代めが、病氣で罷りあらうとも、押してお供いたさせ申す。上意の趣き豐後之介畏り奉ると、お請けの段は御兩所より、殿へ言上いたしめされい。

〽案に相違の返答に、宇壺荒鐵顏見合せ、

太刀　いや、再應申すも異なものながら、人並ならぬ御子息を、多くの人の中へ出し、恥かゝするは親御の無慈悲。

豐後　默りめされい。

矢九　御子息不便と思しめさば、御供は平に御辭退めされい、我々よしなに言上なさん。

豐後　默りめされい。

太刀　はて、かれこれと蔑なすとも、人の噂も七十五日、

豐後　だまれ。

矢九　此儀はとくと御思案あつて、

太刀　其上御請けが、

兩人　ようござらう。

豐後　默れ〱、だまらつしやい。

〽豐後之介は聲あらゝげ、

身不肖なれども當家の執權、鳥山豐後之介保忠が、所存あつて御請を申すを、おのれ等如きに習はうや。此上にも御口出しなさば、上使とは言はさぬぞ。

〽氣色を替へて居直れば、またも懲りずまに兩人は、

矢九　さゝ、其御立腹は御尤もながら、かやう申すも御子息の、お身のお爲を存ずるから、

太刀　こりや朋友の誼と申すもの、平に二人が、

兩人　お止め申す。

豐後　やあ、まだ〳〵申すか慮外者めが。こりや小文治、彼等兩人を追出しやれ。

〽言ふに小文治飛んで出で、

小文　畏まつてござります。

〽何の容赦もあらがね宇壺が、首筋ぐつと引提へ、（ト小文治兩人の首筋を捉へ、强力の思入、）

やあ、おのれが役目を餘所にして、無禮過言の蛆蟲めら、最前から此腕が出したうてならなんだ。お許しが出た上からは、目に物見する覺悟なせ。

〽二人を宙に引立てゝ、門の外へと突き出せば、（ト小文治兩人を門より外へ突出す。）

矢九　うぬ、ちよこざいな素丁稚め、

太刀　其分にはいたさぬぞ。

〽双方一度に小文治が、腕首とれば振りはらひ、其儘大地へずでんだう。

小文　やあ、とつとゝ此場を歸ればよし、うじ〳〵なさば小文治が、覺えの手料理喰さうか。

〽刀の柄へ手をかくれば、手並に恐れ兩人は、

ト矢九郎太刀藏起上り、小文治を見てびつくりなし、花道へ行き、

矢九　あゝこれ〳〵、さりとは短氣な、誰も歸らぬとは言はぬわい、最前からの不馳走で、我等の膽は

冷しもの。

太刀　又其上に盛り替の、太刀の魚とは大禁物。

兩人　必ず御馳走下さるな。

〽砂うち拂ひ、行きかけしが、

兩人　とはいふものゝ。(ト立歸る。)

小文　手料理御馳走申さうか。

矢九　いや、其馳走は、

兩人　喰べたも同然。

〽尻尾をまいて犬侍、こそ〳〵として立歸る。(ト太刀藏矢九郎思入あつて花道へはひる。)

小文　えゝ、言ひ甲斐のない奴等ぢやなあ。

〽跡を見送る小文治に、豐後之介はやゝ暫し、手を拱いて居たりしが、(ト豐後之介思入。)

豐後　愚な生れの悴をば、晴れの試合に出せよと、殿の上意をかさに着て、我に恥辱を與ふる所存、これに附けても一家たる、冬次郎等が非業な死も、正しく彼奴等がなせる業、思へば憎き佞人ばら

〽此惡企みの裏をかくには、不便ながらも悴の命を。

小文　え。（ト思入、豐後之介是れに構はず、）

豐後　主君の爲には、替へられぬわい。

〽思ひわびつゝ立上る、日影も首も傾きて、胸は思案に暮れ近き、一間のうちへぞ、

ト豐後之介よろしく思案の思入。三重にて此道具廻る。

（奥座敷の場）――本舞臺常足の二重、四間通しの屋體。大和葺本椽附き、正面上手一間床の間、下手銀張りの襖、上の方後へ下げて一間の障子屋體。下の方建仁寺垣、石燈籠、四つ目垣などよろしく、舞臺前に誂への石の手水鉢、下草の土手板、總て奥座敷の體。三重にて道具留る。と、屋體を舞臺前へ押出し、

〽入相の鐘に火ともす奥の間に、乳母を相手に犬千代が、智慧も麻生の太郎冠者、稽古の聲ぞ優しけれ。

ト此内屋體の伊豫簀を卷き揚げ、内に短檠をともし、上手に秋篠大名の思入、下手に犬千代藤六の思入にて控へ居る、よき所に誂への鼓、箱の上に載せある、兩人狂言詞にて、

秋篠「やい藤六、何とあしたの襟附はどうしたものであらうぞ。」

犬千「まづ下に白小袖を召しませう。」

秋篠「して又中には。」

犬千「紅梅がようございませう。」

秋篠「上には何がよからうぞ。」

犬千「熨斗目を召さつしやれたがようございませう。」(ト秋篠思入あつて、)

秋篠 おゝ、是れはよう出來ました、今の藤六の狂言詞なか／＼乳母はかなひませぬ。よう／＼こちの和子さま／＼。

〽褒なれば犬千代嬉しげに、

犬千 これ乳母、おれと小文治とは、どちらか上手だぞ。

秋篠 そりや申さずとても、あなたがお上手でござりますわいの。

犬千 おゝ、おれが上手か、嬉しい／＼。

〽餘念なき顏秋篠は、恨めしさうに打ちながめ、(ト秋篠犬千代を見て思入あつて、)

秋篠 好きこそ物の上手とは、てもよう言うたことぢやなあ。(ト誂への合方になり、)武藝はもとより手習學問、何一つお覺えなさらぬ和子さまが、好きな道とてお隣りの能狂言の稽古を聞き、自然に

お覺えなされしゆゑ御指南を願ひし所、一を教へて十を知る其發明に引替へて、外のことは幼兒同然、もう十七にもなりたまへば、人並々であることなら、誰あらう御家の執權鳥山様の御嫡子ゆゑ、これ此やうな烏帽子を召し、(ト以前の烏帽子を取上げ思入あつて、)上には熨斗目下には白、間着は何が映りよからうと、色彩に綺羅を飾つて御出仕ある筈、何をいふにも愚しいに、主の宿を忘れたる藤六下郎に劣らぬお生れ、いつかいつまで此やうに、前を落さず振袖でお育て申す此乳母が、年に似合はぬ餘所外の、利發の御子を見る度に、心の内の悲しさは、まあどのやうにあらうぞいなう。

〽悔みなげくも餘所ごとに、

犬千「げにもさありやよ、かりもさうよなう、さうよなう。」

〽烏帽子を持つて舞遊ぶ、我が育て子の愚さに愛しさまさる秋篠が、我が名のあはれ身に知りて、涙にくるゝ折柄に、

ト此文句のうち、犬千代以前の烏帽子を附けし竹を持ち遊び居る、秋篠よろしく思入。

豊後 やあ、犬千代は何れにある、

犬千 はッ、御前に候ふ。(ト狂言詞にて言ふ。)

〽何に附けても狂言の、あひの襖を押開き、立出る豐後之介、見るより乳母は涙を隠し、

ト此うち奥より豐後之介出來る、秋條思入あつて、

秋條　これは旦那樣でござりますか、取り散らしましたる所へ。（ト四邊を片附けるを、）

豐後　あゝこれ、構やんな／＼。いやも、幼兒同樣な悴が守で、嘸ほつとしやるであらう。

秋條　いえ／＼、どういたしまして、此頃はいかうお辨へが出來ました。さあ、ちやつと御挨拶をなされませ。（ト此うち秋條袖を引き、敎へる。犬千代思入あつて、）

犬千　「ひやろ／＼、とつぱひやろの、ひ、」

秋條　これはしたり、何をおつしやりますぞいなあ。

〽目顔で叱れば、

豐後　あいや／＼、其儘にせい／＼。（ト思入あつて、）いやなに秋條、ちと悴犬千代に申し聞かさにやならぬ儀がある、暫しが間其方は、次の間へ立つてくりやれ。

秋條　何か樣子は存じませねど、現他愛もない和子に。

豐後　さ、言はねばならぬ一大事。

秋條　えッ。

豐後　いやさ、大事ないことぢやゆゑ、暫くそちは次の間へ。

秋篠　畏まつてござります。（ト立ちあがる。）

犬千　乳母、一緒に行かうわいなう。（ト縋るを、）

秋篠　あいや〳〵お前さまにはおとゝ様が、御用がござりますれば、爰においでなされませ。乳母はちよつと奥へ行て參りますれば、おとなしうお待ちなされませや。（ト犬千代合點するを、）おゝ、ようお聞き分けなされましたなあ。（ト思入、氣を替へて、）左樣なれば、旦那樣。

豐後　秋篠。

秋篠　お次へ、參りまするでござりませう。（トこなしあつて奥へはひる。豐後之介思入あつて、）

豐後　こりや犬千代、爰へ〳〵。（ト招く。）

犬千　あい〳〵。

〽何心なく立寄つて、

これ、お前は誰ぢやえ。

豐後　そちが父ぢやわい。

犬千　えゝ、嘘ばつかり言ふ人ぢや。ちゝは乳母にあるわいなう。

豐後　あゝ其愚しい心ゆゑ、今日につゞまるそちが命、今某が申すこと心に留めてよく聞けよ。（ト誂への合方になり）武士たるものは一命を、君へ捧げ奉り、いつ何時の限りなく、死なねばならぬが家來の役目、それゆゑそちもお主の爲に、今宵死なねばならぬぞよ。足らはぬながら我が倅助け置きたきものなれど、左ある時には佞人どもの、讒言の罠にかゝり、豐後之介が自滅ばかりか、終には御家の害となる。まつたそちを殺す時は、佞人讒者を押籠めて、萬歳うたふお主の爲又二つには親の爲なりや、戰場の討死より遙かに勝つた最期ぞや。今父が手に掛ける程に、未練な死を遂げるな、天晴豐後が倅よと、褒めらるゝやう覺悟せよ。

〽言ひきかすれば、けゞん顏。（ト犬千代合點の行かぬ思入にて）

犬千　何ぢや死ぬのぢやえ。死ぬとは、どうするのだやでいの。

豐後　むゝ、わが親さへも辨へねば、死ぬるといふも知らぬ筈。こりや、そちが首を討つのぢやわい。

犬千　はあゝ、首を討つとは。（ト天窓を手で打つて）天窓こツきりするのかえ。

豐後　えゝ、情ない生れぢやなあ。

〽しどない我が子に打ちうなづき、

こりや／＼、死ぬるといふは、そちが好きな舞をまふのぢやわい。

犬千　おゝ、死ぬるとは舞をまふのか、そんなら早う死にたい〳〵。

豐後　おゝ、死んで冥土へ行つて見よ、寂光淨土の舞臺にて、歌舞の菩薩の舞ひ奏で、伽陵賓迦の囃し子もの、いや面白いことぢやわい。

〽だまし賺せば、

犬千　さういふ面白い所なら、行きたいわいの〳〵。

豐後　よい覺悟ぢや、今父が死なしてやるぞ。

犬千　あゝ、早う死にたい、死にたいわいの。

豐後　あゝ不便ながらも、是非に及ばぬ。

〽口に唱名目に涙、刀すらりと拔きはなせば、犬千代びつくり飛びのいて、

ト豐後之介思入あつて刀を拔く、犬千代見てびつくりし、

犬千　おれ乳母、こはいわいなう。

〽いふ聲きいて秋篠は、一間のうちを驅けて出で、

ト奧より秋篠はしり出來り、豐後之介を留め、

秋篠　まあ〳〵、待つて下さりませ。

豐後　いゝや乳母、殺さにやならぬ、留めるな〳〵。

秋篠　いえ〳〵、是れが留めずにをられませうか。

〽刀持つ手にすがり附き、

まあ〳〵待つて下さりませ、何の仔細か存じませぬが、此うつゝない和子さまを、手討にせうとは胴慾な、譯を聞かせて下さりませ。

〽身をさしつけて打恨めば、豐後之介も目をしばたゝき、

ト秋篠犬千代を圍ひ、豐後之介に詰寄る、豐後之介思入あつて、

豐後　生みの親にもまさつたそちに、仔細も明かさず殺さうとした無得心、其恨みは尤もながら仔細を言はゞ得心すまじと、わざと一間へ遠ざけしが、今は何をか包むべき、科なき我が子を親の手で殺さにやならぬ其譯は、先刻殿の上使として、心よからぬ宇都荒鐵、權威をかさに入來り、明日殿嚴島辨天へ御參詣、御供に列なる若者ども、彼の舞殿にて武藝を試む晴れの立合、其場へ足らはぬ犬千代を、差出せとの御上意は、佞人どもが進むる業、いなむ時には忽ちに上意を背くと言ひ立て、我を押籠め罪なさん、あざとき企みと知つたゆゑ、其惡企みの裏をかきお請け申して歸せしは、不便ながらも犬千代が首を討つて持參なし、君に諫言申し上げ、佞人ばらを一々に取

りひしぐべき我が思案、そちが歎きは思ひやれど御家の大事に替へがたし、爰の道理を聞き分けて、どうぞ忰が命をくりやれ。

へ理を盡したる豐後が詞、なんといらへも涙にくれ、さしうつぶいて居たりしが、やう〳〵に顏をあげ、

ト兩人よろしく思入、犬千代は以前の烏帽子、鼓などをもちやすびにして餘念なきこなし、秋篠これを見て、

秋篠 段々の事譯を承はれば御尤も、御家のお爲に死ぬるのは武士の身に取り何程か、冥加にかなうたことなれば、否まんやうはなけれども、あれ御覽なされませ、今殺されることさへも辨へ知らぬ愚なお心、何をお教へ申してもお覺えなされぬ其内に、好む道とて不思議にも、鼓を打つこと舞ふことは人並々にも勝れて覺え、わが身を相手に餘念なく、今の今まで舞ひ奏で、和子が好きゆゑこの乳母も、いつしか覺えし舞の一手、せめて此世の名殘りには、犬千代さまに打ち囃させ乳母が一手を冥土の餞別、暫しのうちのお暇乞ひ、どうぞお慈悲に旦那樣、御猶豫なされて下さりませ。

へ思ひ入つたる有樣に、豐後之介も面を和らげ、

ト秋篠よろしく思入にて言ふ、豐後之介こなしあつて、

豐後　今に始めぬそちがまごゝろ、此愚しき悴をば十七年が其間、養育なせし功にめでゝ、願ひに任せ猶豫なさん。心殘りのないやうに、暇乞ひしたがよい。

秋篠　すりやお聞き屆け下さりまするか。えゝ有難う存じまする。

〽涙ながらに伏し拜む、側には和子の頑是なく、

犬千　こりや乳母、おりやもう睡たうなつたわいなう。

秋篠　おゝ、さうでござりませう／＼、もうお睡氣のつく時分。どれ／＼乳母が目覺しに、舞ひを舞うてお目に掛けん。

犬千　そんなら早う舞うて見せや。

秋篠　はい／＼、只今舞うてお目に掛けます。

豐後　あゝ暫しの猶豫はなすものゝ、遲刻いたさば我が名の恥辱。

秋篠　聲ぐば則ち和子の命、立ちまふ舞が此世の名殘り。

豐後　謠ひの切れが知死期にて、打たねばならぬ小鼓に、

秋篠　憂きをみつちの乳母が身は、

豐後　辛苦にからむ、
秋篠　心の調べ、
豐後　ゆるがぬやうに、
秋篠　え。
豐後　名殘りを惜しみやれ。

〽刀を鞘に保忠は、心の奧へぞ入りにける、秋篠跡を見送りて、其儘和子を抱き寄せ、

ト豐後之介思入あつて奧へはひる。秋篠跡を見送り犬千代を引き寄せ、

秋篠　これ和子さま、ひよんな事になつたわいなあ。(ト抱き入れ思入あつて)今父上のおつしやつたこと、和子の耳には入るまいが、お主の爲親の爲、こなたは死なねばならぬわいなう。

〽言へども何の辨へなう、

犬千　おゝ、おりやさつきから死にたいのぢや、早う死なしてくれいやい。
秋篠　あゝ譯もないこと仰しやりませ、死ぬると命がござりませぬぞ。
犬千　命がなうても乳母さへあれば、おれは何にも入らぬわいなう。
秋篠　それ程までに此乳母を、お慕ひなさるゝ育て子を、どうまあ是れが殺されうぞいなう。

犬千　これ乳母、そちも一緒に死んでたもいなう。
秋篠　おゝ死にませうとも〳〵、和子さまばかり先立てゝ、どうまあ跡に存らへませう。
犬千　そんならそちも、一緒に死ぬるか、あゝ嬉しい〳〵。
秋篠　生きる死ぬるも何の事やら、辨へ知らぬお心に、何をいうても詮ないこと、仕様模様もないわいなう。
〽仕様模様も中垣の、隣りに謠ふうたひの聲。（ト下座の謠ひになる）
〽いづるぞなごり三日月の〳〵、都の西に急がん。
おゝ、あの謠ひはお隣りの、お師匠さまのお弟子へお稽古、出るぞ名殘り三日月の、都の西に急がんとは、折も折とて此身の辻占、殊には和子の好きな玉とり、あれを名殘りにさうぢや〳〵。（トかたへの鼓を手に取って）もし和子さま、お隣りのお師匠さまで、海士の謠ひが始まりましたれば、あれに合して鼓をお打ちなされませ、乳母が舞ひませう。
犬千　おゝ、おれが好きな玉取りか、合點ぢや〳〵。（ト秋篠鼓を渡し、）
秋篠　時刻移らぬ其うちに、此世の名殘り志度の浦、どれ、玉取を舞ひませうか。
〽どれ舞ひませうかとかい立てば、鼓調べて犬千代が、何の樣子も知らばこそ、夢かうつゝ

か打ち囃す。あどなき姿見るに附け、いとゞ歎きの彌增り、涙玉なす玉取の其故事をぞ立ち舞ひける。（ト此內犬千代鼓を調べ居る、秋篠思ひ入あつて、）

〽海士のかる藻に住む蟲にあらねども、我れから濡らす袂かな」（ト犬千代鼓を打ち、秋篠よろしくあつて袖にて涙を拭ひ、）あゝ如何なる過去の因果にや、父上樣はいふに及ばず、お過ぎなされし母上樣も、菊池の御家に二となき御利發、どちらに似ても人並の御器量にはなるべきを、似ても似つかぬ愚なお生れ、それゆゑにこそ今日の仕儀、覺悟はそれと極めても、十七年が其間、手しほに掛けし育て子に、どうまあ別れられうぞいなあ。

〽名殘り惜しさと果敢なさに、暫しは舞の手も亂れ、思はずわツと伏し沈めば、何の頑是もなき聲に、犬千代乳母が背撫でさすり。（ト秋篠わツと泣く、犬千代さすりながら、）

犬千 これ乳母、何でそなたは泣くのぢやぞいなう。

秋篠 さあ、是れが泣かずに居られませうか。

犬千 そなたが泣くと、おれも泣きたうなるわいなう。

〽目をすりながら泣きければ、乳母は心を取直し、

秋篠 えもう、何で乳母が泣きませう、もう〱泣きはしませぬぞえ。さあ〱早う御機嫌をお直しな

されませ、乳母は泣きはしませぬぞ。

犬千　いや／＼、泣かぬといへど乳母の目から、それ／＼涙がこぼれるわいの。

秋篠　何の、こりや涙ぢやござりませぬ。おゝそれ／＼、こりや目から雨が降るのでござりませう、はほゝゝゝ。

〽涙隠して秋篠が、笑ふ心ぞせつなけれ。

犬千　おゝ、そちが笑へばおれも笑ふ、はゝゝゝ。

秋篠　おゝ、和子の機嫌が直りましたら、今の跡を舞ひませう。

〽立上りても指しかぬる、扇引取り犬千代が。

ト秋篠扇を持ち、立ち上り愁ひの思入にて、扇をさし、謡をうたはうとして思入。犬千代鼓を下に置き、秋篠の扇を取り囃しながら、

犬千　取つたら遣ろな／＼。（ト扇を見せびらかす。）

秋篠　あゝこれ、其扇がなうては、舞ふことがなりませぬわいの、ちやつと下さりませ。

犬千　こゝまでござれ、扇を遣ろな。（ト上手へ行き扇を見せびらかす、秋篠側へ行き、）

秋篠　さあ、下さりませ。（ト手を出す。）

犬千　あかんべい。（トべつかつこうをする。）

秋篠　えゝも、何をなされますぞいなう。

〽扇を取れば犬千代が、側なる鼓取上げて、拍子せわしく打ち鳴らし、

ト秋篠扇を取上げる、犬千代直に鼓を取つて打ち、

犬千　さあ〱、早く舞はぬかいなう。

〽せがみ立てられ、是非なくも、

ト秋篠これにて扇を構へしやんと見得、犬千代は鼓を下に置き、頬杖を突いて見て居る、鳴物は踊りの稽古の心にて下座へ取る、

秋篠　〽さるにても此儘に、別れ果てなん悲しさよ」（ト思入あつて、）此上願ふは神佛、一命かけてお願ひ申さん。（ト秋篠思入、犬千代また扇をとり、）

犬千　〽南無や志度寺の、觀音薩埵も力を合せてたびたまへ」

トやはり下座の鳴物にて、犬千代舞ふ。秋篠これを聞き思入あつて、

秋篠　おゝ、さうぢや、神や佛の眞心を憐みたまふものならば、この秋篠が命を斷ち、和子の心の愚さを正しくなしてたびたまへ、南無嚴島辨財天、心願納受なさしめたまへ。

〽一心不亂に合掌なし、天女を祈る後より、扇をかざし目を蔽ふ和子を引退け、扇を指して立上り、

ト此うち犬千代秋篠の後より種々思入あつて、ト扇にて目を隱す、秋篠其まゝ引退け扇を持つて居直る、犬千代は腹這ひになり、頰杖をつき畫面の見得、下座の鳴物になり、秋篠思入あつて、

〽かねて企みし事なれば、持ちたる劍を取直し、乳の下を搔き切り玉を押籠め、

ト此うち秋篠思入あつて、懷劍をぬき放し、乳の下へ突き立てる。

〽わツと一聲秋篠が、其儘そこに倒るれば、犬千代は只うろ〳〵と、手負の周りを打ちめぐる、音に驚く豐後之介、小文治諸共走り出で、

ト犬千代びつくりなして顫へ居る、これにて奧より豐後之介、小文治出來り。

小文　やあ、こりや母人には、何ゆゑあつて此有樣。

〽縋りなけゝば保忠も、

豐後　ほゝお、自害なせしは仔細ぞあらん。して〳〵樣子は、如何に〳〵。

小文　これ、心を慥に持たつしやれ。

〽介抱すれば秋篠は、苦しき息をほつと吐き、

秋篠　さあ、此秋篠が命を捨てしは、大事の〳〵和子の爲。

豐後　何と言やる。（ト謡への竹笛入りの合方になり、）

秋篠　改めいふには及ばねど、何の因果か和子さまは、お生れだちより愚しく、五つになれば智慧附かうか、十にならば辨へも出ようものかと年月を、待つ甲斐もなき十七年、三つ兒も同じ心にて、好きの道とて明暮に能よ謡よ鼓よと、此秋篠を友達か何ぞのやうに思召し、あどない心を苦にやんで、お果てなされし奥様の御臨終の折までも、よく〳〵お氣に掛ればこそ、妾を召してくれ〴〵も、犬千代のこと頼むぞと繰返したる御遺言。いかにお家の爲ぢやとて、和子をあなたの手にかけさせ、どう存へて居られませう、とても死ぬべき命なら、我が身は爰に終るとも魂は犬千代さまの影身に添うて、宮島にて立合ふその時に、天晴勝を取らするなら、今まで愚よたわけよと、後指をさゝれたる恥を清める其上に、手に掛けたまふに及ぶまじと、心に思ひ詰めしゆゑ、辨財天へ祈誓をかけ、此身を神の贄となし、和子の愚な魂をたちどころに正しくなし、武勇も智慧も世の人に勝るゝやうになさんものと、それゆゑ死ぬる秋篠が、心のうちの苦しさを、御推量なされて下さりませ。

〽せぐり苦しき物語、聞くに豐後も目をしばたゝき。（ト秋篠よろしく思入あって言ふ。）

豐後　ほゝお、一命捨てゝ犬千代を、人となさんおそちが心底、忝けないぞや。さりながら、生れだちより愚なる悴が、何とて正しく相ならんや、あたら最期をさせしよなあ。

〽言ふに秋篠顏ふり上げ、

秋篠　あいや〳〵、此身を神の贄となし、思ひ込んだる一念力、やはか通さで置くべきか。

〽突き貫きし懷劍に諸手をかけて一抉り、さと迸る血潮をば、有合ふ烏帽子にうけ留めて、

ト秋篠懷劍にてゑぐり、血潮を烏帽子にうけて、

これ小文治、一心凝りし我が血潮、和子に一口呑ませてくりやれ。

小文　心得ました。

〽言ふより早く小文治が、烏帽子の血潮犬千代に、無理に一口呑ますれば、うんとばかりに悶絕なす、これはと驚く豐後之介、乳母は祈念に髮逆立ち、

秋篠　南無嚴島辨財天、大願成就なさしめたまへ〳〵。

ト此うち文句の通り、よろしくあつて、

〽物狂はしく秋篠が、天女を祈る折こそあれ、本城より馳け來る、迎ひの下部が緣先より、

トばた〳〵になり花道より、れぢ切奴二人馳け來り、直に舞臺へ來り、

○　最早殿には御出船、遲刻いたせし犬千代どの、

△　引立て來れと、上より言附け。

兩人　いざ、お立ちあれ。

〽小腕取つて引立つれば、むつくと起きて犬千代が、二人を一度にどつと投げ、夢の覺めたる有樣に、

ト奴二人にて犬千代を引立てる、此時薄ドロ〳〵にて、犬千代兩人を左右へ投げ、きつと見得。

小文　や、和子さま、お氣が附きましたか。

犬千　むゝ、我に返りし鳥山犬千代、何者なれば無禮の手向ひ、すさり居らう。

〽すされやつと呼はれば、

○　やあ、宇壺荒鐵御兩所の、仰せをうけて參りし我々、

△　手向ひなさば容赦はないぞ。

〽又もや下部が引立つるを、振拂つて眞の當、うんとばかりに兩人は、もんどり打つて倒れ伏す。

ト又兩人かゝるを立廻つて、下手へやり一時に當てる、是れにて下の方へ兩人見事に轉る、豐後之介

これを見て、

豊後　やゝ、常に替りし悴が働き。

秋篠　さては天女の加護ありしか、ちえゝ忝けない。

犬千　これ乳母、よう死んでくれたなあ。

〽乳母にひつしと抱き附き、悲歎にくれていたはりつゝ。

今悶絶なしたるうち、現の如く天女の告げに、おことが忠義はよく知つたり、此犬千代の愚を悔み命を捨てゝの立願は、世に有りがたき志し、神明納受の證には、心氣力も常とは違ひ、いと健かに覺ゆるぞや、冥土の土産に犬千代が、うけ得し力の程を見よ。

〽四邊見廻し緣先なる御影石の手水鉢、寄るよと見えしが拳を固め、やごゑを掛けて丁と打てば、石はかッしと缺け散つたり、保忠思はず横手を打ち、

ト此文句の通りよろしく。犬千代石の手水鉢を打ちかく、豊後之介これを見て、

豊後　ほゝお、驚き入つたる汝が力量、是れぞ乳母が一念に、天女の加護と覺えたり、武藝の程もさこそならん。

〽長押にかけたる槍おつ取り、りう／＼はッしと扱きつゝ、

ト豐後之介長押の槍を取りよろしく扱き、

今某が突きかくる、此槍先を受けて見よ。

〽胸先目がけ突きかくるを、有合ふ扇に丁と受け、

犬千　仰せに任せ、親人御免。

〽槍はね返し身構へなせば、又もや繰出す穂先をば、上段下段に受け流し、

ト大小入りの鳴物にて豐後之介は槍、犬千代は扇にて兩人よろしく槍の立廻りあつて、

〽飛鳥の如き働きに、保忠からりと槍投げ捨て、

豐後　凡術ならぬ無刀のあしらひ、かゝる手練のある上は、試合なすとも勝は必定、ほゝお、天晴々々。

〽手練をほむる保忠に、乳母は苦痛を打忘れ、

秋篠　なう有難や忝けなや、其健氣さを見る上は、和子に心は殘らねど、一つの迷ひは我が忰、思へば最前親骨の放れし扇は斯くなる知せ、今よりしては孤兒なれば、お主大事に奉公なし、父母そなた三人の、うけたる御恩を身一つに、必ず忠義を忘るゝな。

小文　氣遣ひあるな母者人、我もこなたの氣をうけつぎ、見事忠義を立てまする。

秋篠　おゝ、それ聞く上は此母が、最早思ひおく事なし、少しも早く此世を去り、冥土にござる奥樣に

和子の話しを申し上げ、褒めらるゝのが樂しみぞや。

へ褒めらるゝのが樂しみと、口にはいへど心には名殘り惜しさの數まさる、養ひ君と産みの子を右と左に抱き寄せ、放れがたなき風情なり、豐後は心察しやり、

ト此うち秋篠は犬千代小文治を側へ引寄せ、よろしく思入、豐後之介こなしあつて、

豐後　女に稀なる汝が義心、我が子にもまた其心を、習はさん爲これよりは、犬千代といふ名を改め、秋篠の一字を取り秋作照忠と名乘らすべし。又そちが忰小文治は、乳兄弟ゆゑ行末とも、末悪くは計らふまじ、是れを此世の思ひ出に、未來は迷ふことなかれ。

秋篠　あゝ殘る方なき御惠み、嬉しく成佛いたしまする。

へ言ふ息さへも四苦八苦、

最早近づく此身の知死期、

犬千　今切れ果つる玉の緒に、其玉取りの一指を。

豐後　此世の名殘に所望いたす。

へ聞くより手負は莞爾と打笑み、

秋篠　おゝ、和子の相手の仕納めに、一指舞うて冥土へ行かん。（ト秋篠苦痛の思入にて、居住ひを直し）

奴二人　ヘあら有難の御經やな。（ト下座にて舞の鳴物になり、此時以前の奴心附き）
覺悟。

ト豐後之介犬千代に掛るを、立廻つて引提へる。此うち秋篠立ちかれる思入、小文治介抱なし漸く立上り、扇をさし舞ふことあつて、

豐後　ウタヒヘ今このきうの徳用にて、

犬千　ヘ天龍八部、

秋篠　ヘ龍女成佛。あ、これが此世の。

奴二人　うぬ。

ト跳返す兩人を立廻つて投げ退ける。是れと一緒に秋篠苦痛の思入よろしくあつて、どうとなり、双方一時に木の頭、下座にて大勢、

ウタヒヘ佛法繁昌の靈地となるも、此の孝養と承はる。

ト段切れの謠ひ、鳴物にて、秋篠扇をさした儘落入る。皆々愁ひの思入よろしく、

ひやうし幕

五幕目　嚴島廻廊の場

〔役名――菊池右衛門佐貞行、鳥山秋作照忠、淺倉三太夫、宇壺矢九郎、荒鐵太刀藏、小姓葵之助、大友岩太郎、青柳春之助、鳥山豐後之介保忠其他。〕

（嚴島廻廊の場）――本舞臺三間中足の二重、瓦屋根向ふ廻廊前、表に御簾を掛け、上下腰羽目の狐格子の出這入り、舞臺一面小高き置舞臺、左右花道附際まで朱塗の高欄、雨落より浪板、東西の棧敷打返し、廻廊の屋根、鐵燈籠、向ふ正面前側同じ浪手摺、大鳥居の笠木を出し、總て嚴島廻廊の體。上手に矢九郎太刀藏前幕の裝、下手に三太夫二幕目の裝にて、帳面硯を控へ、左右に侍二人麻上下大小にて控へ、大友岩太郎摑み立ての若衆鬘、肩衣をはれ、股立襷にて竹刀を持ち、若侍兩人竹刀にて試合の見得、波の音白囃子にて幕明く。と岩太郎兩人と立廻りあつて、兩人打ち据ゑられる。

○　岩太郎どの〳〵お手のうち、

△　われ〳〵誠に、

兩人　恐入つてござりまする。

岩太　いや、左程にもおりないに、畢竟時の張合ひといふもの、何れも必ず恨みにばし思はつしやるな然し最早一家中に相手になるべき人はない、さすれば今の試合、隨一の手柄は斯く申す岩太郎

でござる。（ト襷を取つて、よき所に仕ふ。）

矢九　岩太郎どの、日頃の御手練とは申しながら、

太刀　わけて今日は晴れの立合、お手柄のほど、

皆々　我々感心いたしてござる。

三太　中にも一の晴勝負と申すは、岩太郎殿と殿御氣に入りの青柳春之助兩人の槍の試合、兩人とも見物でござつた。

岩太　されば朝倉氏をはじめ各のお詞、痛み入つてござる。（ト三太夫帳面を見て、）

三太　最早これにて一家中、大半勝負も行き届きますれば、今日の試合もこれまでゞござらう。

岩太　すりやもはや試合は是れまでとな、誰ぞ今一人しつかりとした相手がほしいもの。おゝ思ひ出した、今日の立合に殘りしものは、朝倉三太夫殿、貴殿と一勝負いたさう。

三太　これは岩太郎殿のお詞とも覺えず、今日の試合は若侍の面々武術勵みの爲の立合、拙者は最早老體のこと、此儀は平に御免下され。

岩太　いや〳〵其儀は相成り申さぬ、すは戰場といふ時に、老若の差別はござらぬ。

矢九　岩太郎殿の仰せらるゝ通り、今日これへ出仕の面々、假令老衰したればとて、貴公樣一人殘り申

す儀はござるまい。

太刀　殊に相手は、當時御家中に鳥山殿を差措いては、肩を並ぶる者のなき刑部殿の弟御。

△　相手に取つて不足はあるまい。

○　是非とも此場で立合ひめされ。

岩太　いや〳〵各待たつしやれ、三太夫殿は相手の身共が不足ゆゑ、それで立合ひめされぬのでござる。

三太　あいや、全く左樣ではござらねども。

岩太　いや〳〵さうだ〳〵、不足と申す證據がござる。只今申して聞さう。三太夫殿、これへ出さつしやい。（ト三味線入り音樂になり、三太夫前へ出て）

三太　岩太郎殿、身共を呼出しめされしは、何事でござる。

岩太　三太夫殿覺えがござらう、先達て太宰府へ、殿貞行公御參詣の砌、是れなる宇都荒鐵の兩所を以て貴殿の娘柵を、身共が妻に申し受け度旨申し入れたる時、何と言はれた、岩太郎は人でなしの人非人、聟に取ることは不承知だと申したではないか、それゆゑ今日も、相手になるが不足でござらう。

三太　そりや貴殿の言はるゝ通り、押附け業の嫁入り穿鑿、聟に取るが不承知だと申したが、今日立合

の相手不足とは得申さぬ。

岩太　不足でなくば此所で立合ふた上、身共が試合に勝つたなら、いや應なしに柵は、身共が妻に申し受ける。

三太　是れは又いかなこと、緣邊の儀ばかりは、親の身共が自由にも相成らぬ。

岩太　然らば緣組の儀は兎も角も、此所にて立合ひめさるか。

三太　それぢやと申して、老體の三太夫。

矢九　試合を否むは、上の上意を背くも同然。

太刀　是非とも此場で立合ひめさるか。

三太　さあ其儀は、

岩太　上意を背くか、

三太　さあ、それは、

矢九
太刀　立合ひめさるか、

三太　さあ、それは、

皆々　さあ〳〵〳〵。

岩太　返答ぶちやれ、なゝ何と。(ト此時花道の揚幕にて、)

秋作　何れも暫く、其お相手これにあり、鳥山豐後之介が悴　同苗秋作照忠、只今參上仕つる。

皆々　なんと。

ト三味線入り中の舞にて、花道より秋作、前幕の裝、上下衣裝大小にて出で花道よき所へ留る。此時正面の御簾をあげる、眞中に貞行小忌衣指貫小太刀にて褥の上に住ひ、上手に豐後之介前幕の裝、上下大小、春之助振袖上下衣裝大小にて控へ、後に葵之助袴小姓、早蕨、紅梅、初音、若草腰元にて控へ居る。

豐後　其方は悴秋作、只今出仕いたせしか。

貞行　すりや其方が、多病と噂ありし、豐後之介が悴犬千代か。

秋作　はッ、某幼年より病に冒され、出仕とても仕らず、漸く本復いたせし折柄、今日の立合に出仕いたせよとの有難き嚴命、則ち秋作と改名なして只今出仕、遲刻の段は幾重にも、眞平御免下されませう。

岩太　はあゝ、すりやお手前が聞き及ぶ、鳥山の御子息犬千代、改名なして秋作とな。

貞行　岩太郎が幸ひ試合の相手、目通り許す近う／＼。

春之　秋作どの、君のお許し蒙る上は、遠慮に及ばず、急いで是へ。
秋作　はッ、有難きお詞、然らば御免下さりませう。（ト鳴物にて舞臺へ來り、下の方へ住ふ。）
三太　聞き及ぶ、鳥山の御子息犬千代どの、存じの外なる健かな出立ち、祝着に存ずる。
秋作　これは〳〵、御挨拶恐入りましてござりまする。
早蕨　何と皆さん御覽じませ、御家の執權鳥山樣の御子息とて、
紅梅　殿御振りなら、物ごし恰好、
初音　今御寵愛の青柳さまにも、
若草　負けず劣らぬ殿御振り、
葵之　御手練のほども嘸かしと、
五人　御推量申し上げまする。
矢九　何れも方も知つての通り、是れまで多病の犬千代どの、
太刀　やう〳〵今日本復して、折角出仕めされたところ。
△　試合の相手は誰あらう、勝誇つたる岩太郎どの、
□　勝負の程は心許ない、

◎それよりいつそ御免を願ひ、
○立合ずにしまふのが、
皆々　却つて其身の爲でござらう。
景後　各の詞の通り尤もながら、相手に取つて不足なき岩太郎殿、よしや後れを取ればとて、聊かも恥辱ならず、君の嚴命下りし上は、御苦勞ながら岩太郎殿、忰めとお立合ひ下され。
岩太　仰せまでもござらぬ、我が君の上意、何しに某違背ござらう。
貞行　猶豫いたさず、急いで立合へ。
三太　何れも、竹刀を持たつしやい。
兩人　はッ。
春之　御兩所ともに、支度めされい。
秋作　畏つてござる。（ト白囃子になり、諸士眞中へ竹刀を直す、秋作岩太郎前へ出て、）
岩太　秋作どの、貴殿は是れまで病身と承はれば、武術修業も怠りならんと思ひの外、よくぞ御出仕めされた、今日の試合身共第一の勝と極りたる所なれば、直樣拙者と立合はれよ、何も怖いことはござらぬぞ、身共よい程に、そろ〳〵あしらひませう、さあ〳〵是れへ。

ト岩太郎竹刀を取つて秋作へ投げてやる、秋作側へ寄り、

秋作　身不肖の拙者、御不足ながらお相手に。

ト竹刀を取る。岩太郎だしぬけに秋作を打たうとして打たれぬ思入。兩人じり〳〵と構へてきつと見得、三味線入り白囃子になり、兩人立廻り、始終岩太郎受け太刀になること、岩太郎びつくりなし、敵役顔見合せ思入、秋作トヾ岩太郎の竹刀を打落し打ち据ゑる、矢九郎太刀藏竹刀を持つて一時に打つてかゝる。秋作兩人と立廻つて兩人危ふくなる、此うち後へ諸士八人、何れも袴股立にて竹刀を持ち、左右より秋作へ打つてかゝる、是より八人を相手に立廻り、トヾ秋作八人を打ちすゑる。

貞行　手のうち見えた、皆引け。

皆々　はツ。（ト皆々控へる、矢九郎太刀藏、岩太郎と顔見合せ無念の思入。）

三太　今日の試合、第一の手柄は、大友岩太郎殿と思ひの外、鳥山秋作殿、お手柄々々。

秋作　武術未熟の鳥山照忠、御賞美のお詞、恐入りましてござります。

豊後　取るに足らざる悴めが手のうち、武運にかなひし今日の試合、岩太郎殿必ず遺恨にばし思はれな。

岩太　何がさて勝負は時の張合と申すもの、然し立派な御子息の手のうち、隨分共に御自慢なされい。

春之　聞きしにましたる、秋作殿の武術手練、春之助めも感心いたしてござります。

秋作　重ね〴〵のお詞、生前の面目有難う存じまする。
貞行　鳥山秋作、近う參れ。
秋作　はッ。（ト前へ出る。）
貞行　其方が手練の程なか〳〵感心した。當座の褒美を遣はさう、何なりとも望め〳〵。
秋作　是れは恐入つたる君の御諚、未熟の手のうち御賞美とあつて御褒美を下されんとの嚴命、有難う存じまする、望めと御意の出でたる上は、お願ひの品がござります。
貞行　おゝ、何なりとも望め〳〵。
秋作　外でもござりませぬ、君御寵愛の青柳春之助を、頂戴仕りたうござります。
貞行　何と申す。（ト誂への合方。）
秋作　若年の某が申し上ぐるも、恐入りたることながら、君には此程御心猛々しく、いつぞやより新參に召抱へられし、青柳春之助のみ御寵愛の餘り、彼れが詞は何くれとなく用ひたまひ、御政道の事までも依怙贔屓の御沙汰多く、これぞお家に禍起る源なれば、今日の御褒美に、何卒春之助を頂戴仰付けられなば、有難う存じまする。
貞行　やあ、心憎きわつぱが言分、予が祕藏なす春之助を、乞ひうけんとは奇怪至極。まだ其上に我な

さみなす詞の一々、今一應吐して見よ、手討になすぞ。(ト小さ刀に手を掛ける、春之助留めて、)

春之　あいや、其御憤りはさることながら、素性賤しき某を、君の恵みの深きゆゑ、見る人毎にこれを嫉み惡ざまに申すなるべし、忠義一途の秋作殿、誠と心得只今の諫言、主君を思ふ心底は斯くこそ有りたきものなれば、聊か恨みに思ふまじ。今秋作殿をお手討ちとなしたまはゞ、いよ〳〵世の人拙者を憎み申すべし、何卒御憤りを止まりたまひ、御機嫌お直し下さるやう、偏に願ひ上げまする。

貞行　詫言致さぬ憎き秋作、今一言申して見よ、其座は立たせぬ、さゝ何と。

秋作　お聞き濟みなき上は、元より覺悟の秋作照忠、さあ御存分に遊ばされませう。

貞行　憎き一言、觀念せよ。(ト又刀を拔かうとする、豐後之介留めて、)

豐後　あいや我が君、暫く〳〵。(ト舞臺へかけ下り秋作を引附け、)不忠者の秋作、身共が折檻、かう〳〵かう。(ト扇にて散々に打ち、)おのれ若年の身をもち、親を差措き、三代相恩の御主へ、憚り多くも諫言なすのみならず、詞を返す大罪人、殊に汝が只今の立合、誠の勝と心得居るか、總て貴人高位の御前に於て立合なすには、刀の表を向けざる本文、武士たる身にて辨へなく、時に乘じ勝誇り、我儘氣儘の今の振舞、親の身共が面まで汚す不所存者、目通り叶はぬ勘當ぢや、きり〳〵

御前を下り居らう。

秋作　すりや、拙者めを御勘當とな。

豐後　長居いたさば、殿のお手を下さるゝまでもなく、身共が此場で討ち放すぞ。

三太　鳥山殿のお詞御尤もながら、申さば忠義の秋作殿、我が君へお詫びの儀は、拙者も共々お願ひ申さん。

豐後　御親切なる御詞なれど、此儘置かば某にまで、恥辱を取らす不忠者、必ず共に捨て置れよ。

春之　拙者が儀より事起り、秋作殿の御勘當とは、はて是非に及ばぬ。

豐後　それ、何れも、秋作めを引立てめされい。

諸士四人　心得ました。（ト四人秋作へ立掛り、）

秋作　元より覺悟極めし身なれど、父が勘當是非に及ばず、此儘お暇仕らん。我が君樣には御機嫌よろしう。

貞行　やあ詞交すも穢はしい。それ、引立てい。

四人　きり〳〵お立ちやれ。

秋作　はツ。（ト思入、三重時の太鼓になり、諸士四人秋作を取卷き、花道へはひる。）

岩太　扨て氣の毒なは鳥山豊後殿、今日の勝負より御子息を、勘當めされし御胸中、お察し申す。

豊後　これは〳〵御挨拶、不所存なる悴めは、有つて益なく失うたとて事缺かず、それらの事は私事、只歎かはしきは此程より、不行跡なる我が君の御身持、序ながら我が君に、御覧に入れる一品、且又申し上ぐる一條こそ候へ。

ト豊後之介思入、二重へ飾りし三方の上なる蒔繪の箱を眞中へ直し、蓋を取らうとするを、貞行見て、

貞行　豊後之介暫く待て、其箱の中なるは、父尊靈の御形見菊池家第一の重寶、青龍の甲ならん、上座は恐れ、はゝはッ。

ト三味線入り序の舞になり、貞行二重より下りて下手へ來る、是れにて三太夫始め春之助岩太郎顔見合せ、殘らず下の方へ平伏する。豊後之介上手にて甲の箱に一禮して貞行に向ひ、

豊後　君御若年より御心荒々しく、よろしからざる御行跡ゆゑ、御父君秀行公御最期の砌、君の御身持正しくなさん爲、此豊後之介へ預けたまひし御甲、今改めて某が申し上ぐる一々、愼んで聞しめされよ。

ト豊後之介甲の箱を明けようとするを、貞行留めて、

貞行　あいや、青龍の甲出すに及ばず、其儀について豊後之介へ窃に申し聞かする仔細あり、春之助を

始め殘りの者どもは此場を退き、歸り申しの神樂を奏せよ。

春之　はツ、左樣ござらば我が君樣。

三太
岩太　後刻お目通り、

皆々　仕りませう。

ト唄、音樂になり、春之助岩太郎思入、三太夫先きに皆々附いて下手へはひる。貞行跡をとつくりと見送り、甲の箱へ目禮して上手へ來る、豐後之介下手へ來る。

貞行　豐後之介、申し聞かす一條あり、近う〳〵。

豐後　はゝはツ。(ト豐後之介側へ摺寄り、)近習の武士を遠ざけられ、豐後之介めに仰せ聞けらるゝ一條とは。

貞行　此程より貞行が、放埓惰弱の身の行ひ、今其方が改めて異見なさゞる前方に、父の形見の甲を誓ひに、我が存念の一通り、汝に窃に語り聞かさん。

豐後　何と御意なされまする。(ト鼓の入りたる誂への合方。)

貞行　さいつ頃船岡川の合戰の砌、父秀行公に打ち滅ぼされし大友入道宗隣の一族、こゝかしこに徘徊なし、菊池の家に仇なす企て、殊に大友刑部宗連は、其戰に裏切りなし、傾く運と現在の、兄を

我が父に討ち取らせ、大友の重寶飛龍丸の太刀を分捕りなし、菊池の幕下に隨ふ所存は、大友の所領のうち一二郡は我が物ならんと思ひの外、足利殿より秀行公にたまはりしを、無念に思へど詮方なく、折を窺ひ菊池の家へ仇を報はん豫ての大望、又新參の春之助は、博多の沖にて多太夫が爲に滅びたる七草官丁禮が一子にて、冬次郎は父の仇と知つたるゆゑ、此程生の松原にて冬次郎を討ち取り、大友刑部へ心を通はせ、彼にすゝめて忠義の武士を讒言なす不敵者、まつた大友宗隣が娘若菜姫、女ながらも父の無念を受繼ぎ、錦ヶ嶽の山寨に隱れ住み、より／＼味方を集むる由を仄に聞けば、貞行は阿房者と世上に流布せば、彼等に十分手段をあやまらして亂を起させ、其虛に乘つて殘黨餘類を容易く討取る我が所存、態と放埒惰弱にもてなし、衆道狂ひの色好み、此程太宰府の戻り道、蘆屋の里にて怪しき女に出逢ひしゆゑ、色に事寄せ試し見るに、所持せし守りは大友の寶臼杵切、彼奴こそ正しく若菜姫と推量なせど、彼れ神變不思議の蜘蛛の妖術を行ふ曲者、容易く討取ることかなはず、時節を待つて敵を滅ぼし國家安全になさんものと、心を碎く貞行が胸中、推量いたせ豐後之介、仔細といふは斯くの通り。

豐後 はッ、恐入つたる御詞、某疾くより其お心とは、推察はなしたれども、只今誠の御心底を承はり、豐後めが心の安堵、然は知らずして我が君へ、諫言なしたる悴秋作、御憤りを幸ひに、態と勘

貞行　當なしたるは、殘黨餘類を詮議の爲。割符を合す汝の胸中、謀は密なるをよしとすと、猶色好み放埓と、世上へ知らする我が計略。

豐後　はッ、御尤もなる御詞、兎にも角にも世の中に、

貞行　誠の武士の身の上ほど、切なきもの〻あるべきか。

豐後　わが君樣。

貞行　豐後之介。

豐後　思ひ廻せば廻すほど、

貞行　味氣なき世の、

兩人　有樣ぢやなあ。（ト兩人よろしく思入、此時黑具の忍び窺ひ居て、）

忍び　其甲を。

ト甲へ掛るを突廻して、貞行拔き打ちに斬る、忍び見事に轉る。此途端上手の唐戸を明け、春之助袴裝にて窺ひ、貞行と顏見合せる、

貞行　春之助、す〻ぎを持て。

春之　畏りました。

トかすめて浪の音、合方になり、貞行血刀を出す豐後之介鼻紙にてこれを拭ふ。此うち春之助塗盥湯桶を持ち出で、貞行の側へ持つて來て、春之助水を掛け貞行手をそゝぐ、此うち豐後之介甲の箱の蓋を明けて改める。貞行手を洗ひ手拭はと思入、春之助懷中の鼻紙を捜し見て、紙なきゆゑ我が振袖の端を出す、貞行見てうい奴といふ思入にて豐後之介と顏見合せる。豐後之介箱の蓋をしやんとする。貞行袖を持ち、春之助を引き寄せる、双方一時に木の頭。貞行袖にて手を拭きながら、春之助と頰摺りをする。豐後之介箱の紐を靜に結ぶ。これをキザミにてよろしく、

ひやうし幕

六幕目　玉島川の場

〔役名――島山秋作照忠、漁夫鰭九郎、漁夫浪六實は村岡眞平、冬次郎弟力松、漁夫四人、刑部家來破鐘權内、漁夫鮫藏。冬次郎妹照葉、雪岡腰元松代、鰭九郎娘小磯等。〕

（玉島川濱邊の場）――本舞臺後波幕、上下山の張物、眞中書心に松並木、下手苫舟、總て肥前國玉島川濱邊の體。爰に○△□◎の漁夫四人焚火をして居る、浪の音にて幕明く。

○　さあ〳〵、是れで船底のたても出來たといふもの。

△　船はすつかり砂で洗つたから輕くなつた、さつさとおさうぜ。

□　まだ日足は高い、一服やらうぢやあねえか。
◎　何だか春でも汐風で寒い、焚きつけて一あたり、あたらうぢやあねえか。
○　いや、あたれとは縁起がいゝ、當れ〳〵。（ト捨ぜりふにて四人焚火をしてあたる。）
△　時においら達の親分の鰭九郎どんは、今では所一番の金持だが、何と慾の深いやかましい人ぢやあねえか。
□　いやも、人は倒れようが起きようがどうしようが、己れさへよければ構はねえと、あんな又無慈悲な人はあるまい。
◎　そりやあ其筈、この肥前の國は大友刑部樣といふ、無慈悲な殿樣の領分、その人に使はれる鰭九郎どの、大抵なものぢや氣に入るまい。
○　其領主の大友樣からお觸れのあつたお尋ね者、筑前の菊池の家來で、雪岡冬次郎といふ人の妹照葉とやらに、弟の力松。
△　其二人を捉へて出せば、褒美の金は望み次第とのこと、若しこゝらへ來たならば、引捉へて褒美の金にしようぢやあねえか。
□　そりやあさつき鰭振山の麓で見掛けたのが、其お尋ね者に違ひねえ、とてもこちと等の手際にや

あ行くめえから、御家來の破鐘權内さまへ注進して、其褒美を貰ふ方がよからうぢやあねえか。

◎　それ〳〵、大取りしようより小取りをするがいゝ、貴樣がしつかりと見附けたなら、是れから直に破鐘樣へ寄らうぢやァあるめえか。

○　それがいゝ〳〵。もうおッつけ七つ下り、さあ〳〵船を片附けて、一緒に行かう。

皆々　それがいゝ〳〵。（ト船を片附け焚火を消して、）

ヘ　さあ〳〵是れでいゝ、今まで焚火であつたまつたから、是れから褒美で暖まらう。

皆々　違えねえ〳〵。

ト浪の音にて皆々下手へはひる。浪の音、濱唄にて花道より、照葉振袖屋敷娘の裝、菅笠を持ち、松代腰元旅裝、一本ざし、着流しの力松をおぶひ出て、花道にて、

松代　もし照葉さま、馴れぬ旅路の石高道、嘸おみ足が痛みまするでござりませう。

照葉　いやも、わしよりはそなたこそ、力松を背負うて、大抵な事ぢやあるまいわいなう。

松代　今後の濱邊で承はりますれば、爰はもう肥前の國玉島川とやら、呼子の浦へはもう半道足らずとのこと、日の暮れぬうちに參られませう、お草臥れではござりませうが、もそつとお急ぎなされて下さりませ。

照葉　あい〳〵、さあ、ちつとも早う行きませうわいの。(ト有鳴物にて三人舞臺へ來り、)

松代　まだまあ、日足も高うござりますれば、幸ひ爰に小船が上つて居りまする、是れへお掛けなされて、暫くお休みなされませ。

照葉　さうしませう、さあ力松もおんりして、松代をちつと休ませてやりやいなう。

力松　あい〳〵。(ト合方になり、力松をおろして、三人船へ腰を掛けて、)

照葉　思ひ廻せば世の人の、身の浮き沈み程、悲しいものはあるまいわいなう。此程殿樣のお供にて太宰府へ御參詣の歸り、兄上冬次郎樣は忠義の爲に、惡人の春之助を手に掛くれば、血筋の者にお祟りあらんほどに、弟力松諸共、以前の家來眞平方へ落ちよとのお知せ、そなたのすゝめに是非もなう、屋敷を出でし其夜の騷動。

松代　如何なる事にや、日頃お仲のよい夏之丞さまを手に掛けたまひ、剩へ若旦那は、春之助どのに討たれたまひしとのこと、常から心よからぬ眼助めが、大友岩太郎の間者となつて、あなたを無理に女房にせんと、危いところをお許嫁の、犬千代さまの御家來小文治どのに助けられ、やうやう爰まで落延びて、わたしが兄眞平どの、今では此肥前の國で浪六とて漁夫の世渡り、これへ便らばお二人さまのお身の上、お氣遣ひはござりませぬ程に、必ずお案じなされますな。

照葉　其許嫁の犬千代さまも、健忘とやらの御病氣も御本復なされ、秋作さまと御改名なされたれど、何ういふ事やら舅御さまの御勘當うけたまひ、是れもお行方知れぬとのこと。

松代　秋作さまも　慥か此國の邊へお出での由、風の便りに承はりますれば、お行方を尋ねやがてお逢はせ申しませう。

照葉　何から何までそなたの親切、此上ともによいやうに頼むわいなあ。

力松　これ松代、早う兄上さまへ逢はしてくれいやい。（トこれを聞き、兩人愁ひの思入。）

松代　えゝおいたはしい。兄御さまの御最期も御存じなく、其やうにおつしやるお心根。

照葉　側で聞くさへ胸潰れ、

松代　袖に涙の旅の空、

照葉　松代、

松代　照葉さま、

照葉　思へば果敢なき、

兩人　身の上ぢやわいなあ。

ト思入、浪の音にて花道より、破鐘権内、半纏股引にて黒四天の捕手六人附いて出來り、

權内　こりや家來ども、漁夫どもが注進にて、雪岡冬次郎が妹照葉力松諸共、この濱邊へ來りし由、見附次第引捉へて、御主人へ差上げれば、御褒美は望み次第、必ずぬかるな。

皆々　心得ました。

權内　參れ／＼。（ト皆々舞臺へ來り兩人を見附け、）扨こそ／＼、爪はづれの尋常さ、雪岡が妹照葉、幼いものは力松に疑ひなし、引括つて御主人刑部樣へ連れて行く、さあ尋常に腕まはせ。

松代　いえ／＼、私共は此肥前の國の阿彌陀寺へ參詣の兄弟連れ、左樣なものぢやござりませぬ。

權内　いゝや、注進あつて慥かに聞いた落人め。それ家來ども、搦め取れ。

捕手　腕まはせ。（ト立ちかゝる。）

松代　包むとすれど、顯はれし上からは是非に及ばぬ、女ながらも此松代が、お供した御主人方、めつたに渡してよいものか。申し照葉さま、愛構はずとあなたさまは、力松さまをお連れなされて少しも早う。

照葉　心得ました、弟おぢや。（ト力松の手を取り行かうとする。）

權内　おのれを遣つて詰るものかえ。（ト支へるを松代留める、此うち照葉力松を連れ上手へはひる。）やあ、邪魔だてひろぐ憎き女郎め、討つてとれ。

皆々　心得ました。
權内　身共は照葉を追掛けて、
松代　いゝやならぬ。
權内　何を小癪な。

ト禪の勤めになり、松代權内を留める、捕手三人松代へ打つてかゝる、權内上手へはひろ。松代一腰をぬき、皆々と立廻りあつて、トゞ松代皆々を追つて下手へはひる。此うち上手より權内力松を引抱へ、照葉を引立て出て、

逃げろとて逃がさうか、刑部さまへ連れて行く、きり〳〵うせう。

ト浪の音にて花道へかゝる。花道より秋作前幕のこしらへ、武者修業の裝、大小菅笠を持ち出で、此體を見て力松を引取る、權内それと寄るを舞臺へ押戻す。

やあ、何者なれば入らざる妨げ、小忰めをこつちへ渡せ。
秋作　樣子は何か知らねども、幼きものと若き女子に此場の狼藉。(ト此うち照葉秋作を見て、)
照葉　や、あなたは夫犬千代さま。(ト秋作照葉を見て、)
秋作　さういふそちは許嫁の、照葉ならずや。(ト力松を照葉に渡す、權内これを聞いて、)

權内　扨はおのれは豐後之介の、勘當なしたる忰の秋作、身共が手柄の照葉兄弟、こつちへ渡して觀念ひろげ。

秋作　照葉兄弟を渡せとぬかす、おのれは慥か人非人の、大友刑部が討手のものよな。身共がこれへ來るからは、やはかやみ〳〵渡さうか、道を開いて通すまいか。

權内　小癪な一言、身共に渡せ。

秋作　何を。

ト禪の勤めになり、船の中なる櫂を取つて立廻る、權内叶はず上手へ迯げてはひり、秋作追掛けようとするを、照葉留めて、

照葉　おゝもし、迯げて行くなら留めずとも、もう御無用になされませ。

秋作　いかさま、長追ひせんも無益の至り、（ト櫂を投げ捨て）、御身等兄弟難儀の場へ、折よく来參りしも盡きせぬ緣。

照葉　あなたさまには、御病氣も御本復、御機嫌よい今日のお目もじ。

秋作　そなたといひ、力松にも、思ひがけない此場の再會。

照葉　焦れ慕うた秋作さま。

秋作　絶えて久しき照葉どの。

照葉　よう顔見せて下さりませいなあ。（ト縋つて思入）まあ〳〵、是れへお掛けなされませいなあ。

ト合方になり、秋作船へ腰を掛ける、照葉力松を船に乗せ同じく腰を掛ける、秋作思入あつて、

秋作　思ひがけなき此程の騒動、冬次郎どのゝ敵なき最期より、御身等兄弟まで追手をかけて行方の詮議、是れ皆佞人讒者の仕業、して此國へ來りしは、いづくを目當。

照葉　申すも甲斐なきわれ〳〵兄弟、以前の若黨眞平と申すもの、今は當國呼子の浦にて漁り渡世、是れを便りて眞平が妹松代を伴うて、來かゝる道に今の追手。

秋作　我れも此程宮島にて、父豐後之介殿に勘當の體にもてなし國遠なせしも、大友の殘黨詮議の爲、御身等同胞此國に知邊あらば、それを便りて身を忍び、時節を待つて雪岡の家再興、某よきに計らひ得させん。

照葉　有難き其お詞、外に便りない兄弟が身の上、必ずともに。

秋作　氣遣ひあるな、未來を掛けて。

照葉　えゝ、お嬉しう存じまする。（ト思入、此うち後へ權内窺ひ出で）

權内　其間に餓鬼めは、身共が手柄に。（ト力松を引捉へる。秋作見て）

秋作　小癪な匹夫が憎き振舞、こゝまで言ぬかさば手は見せぬぞ。

權内　何を小癪な。

ト兩人子供を爭ふ立廻り、風の音砂石の降る音烈しく、日覆より大鷲出で、權内を蹴散らし、吹替の子供を掴み、下の方日覆へ舞ひ上る、權内は下手へ倒れる、秋作驚き、

秋作　やゝ、大事の弟力松を鷲の翅にはるかの空、打捨て置かれぬ小兒の命、照葉は早う知邊の方へ、我は飛行く大鳥の、行方を慕うて、おゝさうだ。

ト風の音、カケリにて秋作花道へはひる。照葉見送り、

照葉　思ひがけなく許嫁の、犬千代さまにお目にかゝり、嬉しい仰せも情ない、あのいとけない力松を鷲の翅にかけられて、命のほども心元ない、あの松代は何して居やる、早う戻つてたもいなう。

ト向ふへ思入、浪の音、可笑味の合方、下手の苫舟より鮫藏漁夫の裝、今まで寐て居たりし思入、伸をしながら出て、照葉を見附け、懷より繪姿を出し較べ見て思入。

鮫藏　うまいわ〱、こながら酒の醉心、ぐつすりやつた船のうち、何だか樣子は知らないが、爰にまします一人のうツつい乙女、姿なら器量なら、此繪姿のお尋ね者に生寫し、引括つては可愛さうだ、そつと捉へて褒美の金。さあ姉さん、わしと一緒に來たまへ〱。（ト照葉の手を取るを振り放し、）

照葉　こつちの心の探めるも知らず、慮外じやんな放しやいなう。

鮫藏　なに、慮外とは朝起きて顏を洗ふことか、但し金と錢を替へるを詰めていふのか、そんなむづかしいことを言はずとも、早くこつちへ來たまへ〳〵。（ト又手を取らうとする。）

照葉　またしても慮外もの、てんがうしやると許さぬぞ。

鮫藏　いや、こいつが〳〵、顏に似合はぬ手ごはい女め、情をかければ附上りのよまい言、さう吐かせばこつちもぢが手に引括つて、あの船の中へ入れ、おもいれ慰さんで刑部さまへ連れて行く。さあ、うしやあがれ。（ト引立てようとする。）

照葉　えゝ、聞くもうるさい其詞。これ、松代は何して居やるか、早う戻つてくれぬかいの、何して居やるなう。早う戻つてくれぬかいなう。

鮫藏　なに松代に戻れ、そんな奴に戻られてたまるものか、邪魔のないうち、きり〳〵うせう。
ト浪の音可笑みの鳴物にて兩人立廻り、船の周りを追ひかけ廻り、トゞ照葉鮫藏を突倒し、上手へ逃げてはひる。鮫藏起き上り、眼へ砂のはひりし體にて、
いや、おそろしい手酷い女め、目の中へ砂を入れをつた、あゝ痛い〳〵目が明かれない、よくもよくも砂の中へ目を入れ居つたな。おのれ女め、遠くは行くまい、待て〳〵。

ト あたりを探り、櫂を取つて杖に、鮫藏盲目の思入にて上手へはひる。禪の勤めになり、下手より松代、以前の皆々と立廻りながら出で、きつと見得、三味線入り鳴物になり、仕抜きの立廻り、皆々を切倒し權内へ躓く、是れにて權内心附き兩人立廻り、鳴物替つて烈しき立廻り、互ひに手を負ふことあつてよろしく、トヾ權内を切倒し、松代ほつと思入、

松代　えゝ口惜しや、殘念や、心は逸れど多勢の追手、假令深手は負ひたりとも、大事の〳〵の御主の御先途見屆けいで置くべきか。照葉さまイなう、力松さまイなう。

トよろめき〳〵向ふを見る、此うち捕手心附き、一人づゝ松代へ掛る。是れより靜かなる鳴物にて松代手負ひの立廻りあつて、トヾ皆々を切倒しどうとなる。浪の音ばた〳〵にて、上手より照葉走り出來り、松代を見てびつくりして縋り附き、

照葉　これ松代、心を慥かに持つてたもいなう。これ松代、氣をしつかりと持つてたも、これイなう、これイなう。

ト抱き起して呼ぶ、松代やうやく目を開き、照葉を見て、

松代　あなたは照葉さま、お身にお怪我はなかつたか、あゝ嬉しい。（ト又がつくりとなる、照葉縋つて、）

照葉　是れはしたり松代、どうしたものぢや、疵は淺い、日頃の心に似合はぬこと、氣をしつかりと持ちやいなう。（ト呼び生ける、松代よろしく心附き、）

松代　照葉さま、よう仰しやつて下さりましたなあ。（ト竹笛の入りたる合方、松代思入あつて、）心は彌猛にはやれども、此深手ではとてもお供は叶ひますまい、お心細くおぼさうが力松さまをお連れなされ、日暮れぬうちに濱邊傳ひ、呼子の浦とお尋ねなされ、兄眞平どの〻所まで、早う落ちて下さりませ。

照葉　そなたの詞は尤もぢやが、深手に苦しむこの有様、見捨て〻どうまあ行かれうぞ。まだ其上に悲しいは、最前爰で許嫁の秋作さまにお目にか〻り、悦ぶ甲斐も情ない、追手の者が力松を、連れて行くを秋作さまが支へるうち、可愛やあの子は鷲にさらはれ、行方が知れずなつたわいなう。

松代　え〻、そんなら力松さまは鷲がさらつて、え〻〻〻。さりながらそれも此場のもつけの幸ひ、卽坐にお命も失ふまい、足手纏ひのないうちに、あなたは此場を早う〳〵。

照葉　それぢやというてわし一人、どうして此場が落ちられうぞいの。

松代　え〻聞きわけない、命を捨つるも苦をするも、みんなお主が大事ゆゑ、またもや追手の來るならば心盡しも水の泡、わたしを不便と思召すなら、どうぞ忠義を立てさせて、早う落ちて下さりませ。

照葉　成程、それ程までにいふことなら、わしは先きへ行きませう、氣をしつかりと必ずともに、死ぬ

るのぢやないぞや。

松代　いえ／＼、死にはいたしませぬ、さゝ早う／＼。

と時の鐘三重にて、照葉思入あつて、東の揚幕へはひる。松代後を見送り、

もし、必ず怪我して下さりますな、お名殘り惜しいは照葉さま、心に掛る力松さま、どうぞお命恙なう。（ト刀を杖にやう／＼と立上り、向ふへ思入、此時權内心附き。）

權内　何を。（ト又掛るを、よろしく立廻り、權内の脇腹へ刀を突込み、權内わツと苦しむ。）

松代　お別れでござります。

ト松代權内と一緒に苦しむ。この見得、時の鐘、波の音にて道具廻る。

（濱邊蘆原の場）――本舞臺後黑幕、左右以前の張物、眞中松の大樹、日覆より釣枝、上下小高き蘆原、舞臺まで浪板、總てこれまでの濱邊を後前に見たる體。爰に以前の漁夫照葉を取卷き居る、右鳴物にて道具留る。

○　お觸れのあつたお尋ねもの、引括つて褒美の金だ。

皆々　さあ／＼、一緒に來やれ／＼。

照葉 いえ〳〵、わたしやそんなものぢやござんせぬ、どうぞ堪忍して下さんせ。

△ いや、ならぬ〳〵、落人に違ひない。

皆々 引きずつて行け〳〵。

ト浪の音にて照葉を引立て行きに掛る。花道より浪六、二幕目の漁夫のこしらへにて、櫂の先きへ網を括り附けて擔ぎ出て、舞臺へ來り、此體を見て、皆々を掻き退け、照葉を囲ふて皆々捨ぜりふにて照葉へかゝる。浪六櫂にて滅多打ちになぐる。是れにて四人逃げて花道へはひる、照葉思入あつて、

照葉 どなたさまかは存じませぬが、危いところを、有難う存じまする。

浪六 何さ、禮にやあ及ばねえ、然し今頃、女中がたつた一人、こりやてつきりお觸れのある。

照葉 え。(トびつくり、此時浪六頬冠りを取り、照葉を見て)

浪六 さういふあなたは、照葉さまぢやあござりませぬか。(ト照葉見て)

照葉 ほんにそなたは眞平どの、よい所で逢ひましたわいなう。

浪六 やれ〳〵、丁度よい所へ參り合せました、あなたが此國へござつたからは、定めしわしが家を目當に。

照葉 定めて樣子は聞きやつたであらう、兄上樣の御最期より、刑部どのゝ惡心にて、われ〳〵兄弟を

此邊まで厳しい詮議、そなたの住家を便りにて、松代を力にやう〳〵是れまで。

浪六　よろしうござります、委しい事はあとでのこと、以前のお主様の事なれば、私が命に掛けておかくまひ申しますが、舅鰭九郎は心よからぬ者なれば、打明けては申されませぬゆゑ、女房どもに頼みまして、目褄に掛らぬやうにいたしまするが、若し見咎められた其時は、お前さまを私が博多で馴染んだ女郎だと、僞りを申します程に、必ずどのやうな事がござりますとも、私次第になされておいでなされませ。

照葉　あい〳〵、そりや心得てをりまするわいなう。

浪六　夜更けぬうちに、ちつとも早う。

照葉　そんなら眞平、

浪六　さあ、お供いたしませう。

ト兩人身ごしらへする。風の音、トヒヨになり、上手の蘆原より、指金の水鳥大分立つ。是れにて浪六照葉を圍ひきつと見得、蘆原を押分け、鰭九郎白髪鬘褞袍裝、火脇差しをさし、好みのこしらへにて半身出る、此きつかけに月隠れて、本釣鉦の頭、凄き鳴物になり鰭九郎探り出で、照葉を捕へる、照葉「アレ」といふ、是れにて浪六びつくり是れを支へる。下手より小礒世話女房のこしらへにて、提

灯を持ち出で、此中へはひる。鰭九郎提灯を打落し、四人ダンマリ模様の立廻りよろしくあつて、ト浪六照葉を連れ摺抜け花道へ行く。照葉花道にて躓く。浪六手を取りシヤンと引き起す。舞臺は鰭九郎立廻りの内に小磯を蹴飛ばし、小磯べつたり下に居る。双方一時に木の頭。これにて日覆より月出る。鰭九郎小磯を見て、

鰭九　わりや娘か。

小磯　とゝさん。

鰭九　これ靜かに言へ。

ト小磯を引寄せて囁くをキザミ、時の鐘、三重にてよろしく、

幕

幕の引附けと一緒に、浪六照葉の手を引き花道へはひる。幕引附けると、浪の音にてつなぎ引返す。

七幕目

鰭九郎内の場

呼子ヶ浦の場

〔役名〕――漁夫鰭九郎、漁夫浪六實は村岡眞平、庄屋佐次郎兵衞、在所かゝおお蛸、同お倉、漁師、

捕手、漁師鮫藏、冬次郎妹照葉、鰭九郎娘小磯等。)

(鰭九郎内の場) ―― 本舞臺三間の間ヶ舞臺、正面暖簾口、押入戸棚、鼠壁、上の方九尺の中二階、付子建切り、丸太の梯子、下の方三尺の物置、莚下げあり、此下敷疊、いつもの所門口、總て漁人鰭九郎内の體。爰に鮫藏絞りの筒ッぽう、脚絆褞袍裝にて、網をすいて居る。此傍に佐次郎兵衞打紐着流し、庄屋にて立ちかゝり居る。此見得波の音、在郷唄にて幕明く。

佐次　これ鮫藏、鰭九郎どのに逢ひたい、家に居るか。

鮫藏　あい、親方は今奥に寐て居ます。

佐次　又起したら小言だらうな。

鮫藏　何ぞ用でもござんすのか。

佐次　いや、外の事でもないが、此間御領主大友さまからお觸れの出た、雪岡冬次郎といふ小姓の妹と、弟が、此國に身寄りがあつて、入込んで居るといふ噂ゆゑ、誰か捕へて出さうとも、此庄屋が褒美の步一を取るほどに、鰭九郎どのにも其事を、よく斷つておいてくりやれ。

鮫藏　いや、おらが親方は慾が深いと思つたが、又庄屋は庄屋だけに、人に骨を折らして置いて步一とはよつぽど上手だ。

佐次　はて、爰らが庄屋のかすり所ぢやわい。

鮫藏　何にしろ其落人を引捉へ、褒美の金に有りつきたいものだ。

佐次　おれも歩一に有りつきたいものだ。（ト鮫藏懷より人相書を出して、）

鮫藏　御領主さまからお觸れの廻つた、二人のものゝ人相書、字は讀めねえが畫を見れば、一昨日の晩出會した慥に娘に違ひない、是れに附けても此家の入聟、あの浪六は前方に、菊池の屋敷に居たとやら、若しや身寄りぢやアあるめえか、こいつあ金になりさうだわえ。

ト佐次郎兵衛煙草を呑みながら、

佐次　なに、風になる、又荒れねばよいが。

鮫藏　とんだ早耳だ。

佐次　いや、其風で思ひ出した、まだ言ひおかねばならぬことがある。此の呼子ヶ浦の沖中で、一昨日の晩から不知火の燃ゆるゆゑ、とんと漁がきかぬげな、何でもこりやあ村の内に、嫉妬深い女があつて、それで燃ゆるに違ひない、共吟味にせにやならぬぞよ。

鮫藏　さればさ、一昨日の晩から夜に入ると荒れ出して不知火が燃ゆるゆゑ、雜魚一尾かゝりはせず、漁夫仲間は大きな違ひ、これが江戸であらうなら、篝火入らずに不知火で、さぞ白魚が取れるで

あらう。

佐次　違ひないぞ。

兩人　はゝゝゝゝ。

ト波の音テンツヽになり、花道よりお蛸、お倉在所嬶アのこしらへにて、手拭襷帶なんどを大分持ち出來り門口より、

お蛸　小磯女郎、

兩人　內かなく。

鮫藏　えゝやかましい、どいつぢやい。

兩人　どいつでもない、わしらぢやわいの。（ト兩人內へはひる。）

鮫藏　誰かと思つたら、お蛸女郎にお倉女郎か。

お蛸
お倉　これは新田の庄屋さま。

お蛸　お許しなされませ。（ト兩人よき所へ住ひ、）

鮫藏　あゝ又おれを口說きに來たか、うつたうしい奴等だ。

お蛸　えゝ常談はおいておくれ、それどころではないわいなう。

お倉　沖に燃ゆる不知火のことで、今朝から歩き續けだ。
お蛸　小磯女郎が内にならちよつと逢ひたい、呼んで下され。
鮫藏　おゝ合點だ。（ト奥へ向ひ、）小磯さん〳〵。（ト奥にて、）
小磯　あい〳〵、今そこへ行くわいなあ。（ト合方になり、奥より小磯前垂がけ、世話女房のこしらへ、肩へ花勝見の紋附きし手拭を掛け出で、）おゝ、是れは新田の庄屋さまに、おたこさんにおくらさん、ようお出でなされましたなあ。
佐次　いつ見ても、美くしいものぢやや。
小磯　又庄屋さまの惡口ばかり。
鮫藏　いや、誰が見ても美くしい。
小磯　えゝ、そなたまでが同じやうに。
お蛸　さあ、さういふのも無理でない、江戸から貰うた錦繪の、いゝしうかとやらに生寫し。
お倉　ほんに、濱でも評判ぢやわいなう。
小磯　えゝもう、よい加減におだてゝ下さんせいなあ。それはさうと、お蛸さんにお倉さんは、何ぞ用でもござんすかえ。

お蛸　さいなあ、今日二人連れで來たのはな、此月の濱行事がおくら女郎とわしの所、わるい月に當つたは一昨日からの沖の不知火、海が荒れて漁がなし、何でもこりやあ明神さまのお氣にかなはぬ悋氣深い女があるに違ひないと、そこで今朝から村中を、詮議して歩くのおやわいなう。

佐次　それは二人とも御苦勞々々、まだまあ是れとも知れぬかいなう。

お蛸　さあ、誰もわしが悋氣したといふものはないゆゑ、まだそれとも知れぬわいなあ。

お倉　ほんに、庄屋さまは覺えておいでなさいませうが、上在所の與吉どのが、よその娘と懇したを、か丶衆が見附けて修羅もやすと、海へ火の燃ゆるが一時、何か大雨大風で、沖の中のおそろしさあのか丶衆もとう〳〵海へはまつて死んでしまうた。それからとんと無かつたが、四五日跡からまた火が燃ゆるは、どうでも此村に悋氣深い女房があると見えますわいなう。

鮫藏　これ、か丶衆達、人事のやうに詮議するが、洗つて見たらこんた衆かも知れねえ。

佐次　いや、又そんな覺えがあるならば、ふッつりと思ひ切り、悋氣を止めて懺悔したがよいぞや。

お倉　あの言はしやんすことわいなあ、こちの常作どのは、年中病人、色事の氣遣ひはない人、悋氣したうても當がないわいなあ。

鮫藏　お蛸女郎は怪しいぜ。

お蛸　いえ〳〵、人と違うて此お蛸は、娘の時から五助どのに附けつ廻しつ口説かれて、女夫になつた戀女房、こちに悋氣はないわいなあ。

お倉　したが、わしらと違つて妾の聟の、浪六どのはあのやうな好い男、亭主にしたら、悋氣も出ようか、なう小磯女郎。

小磯　いえ〳〵、此在所では明神さまのお咎めで、悋氣嫉妬のならぬことは、小い時から聞き傳へて居りまする、あの不知火といふは、ありや何の火でござんすえ。

お蛸　おゝ、其火の譯は何のことやら、

お倉　わしら二人も、知らぬわいなあ。

佐次　おゝ知らぬ筈〳〵、あれはとつと昔のことぢや。

小磯　御存じならば其譯を、お話しなされて下さりませ。

佐次　搔摘んで話しませう。昔松浦姫といふのがあつた所、其御亭主に狭手彦様といふ、あゝよい男であつたげな、何が朝も晩も鮑の岩に取附いたやうに、吸ひついた仲であつた所、俄に御亭主が唐へ商ひに行かつしやる。さ、そこで女子の廻り氣に、わしに飽が來て唐の揚貴妃とやらに、見返るのぢやゆゑ、遣るまい、いや行かうといふ女夫喧嘩、狭手彦様は大事の金儲け、遅るゝと錢の

三百も違ふこつちやゆゑ、とつと〻船出してしまうたによつて、只手を上げて船よなう〳〵と、呼べど叫べど雲霞、つひに其所へ立縮みに、石になつて死なつしやつた。それを祀り込んだところが松浦大明神さま、其執着の石から出た不知火、一たい悋氣深い神さまなれど、萬更一人腹も立てられず、ぢやによつて氏子のうちに悋氣する女があると、かの火が誘うて行かつしやる、因縁あら〳〵斯くの通り。あゝ、喉がひッつく、茶を一杯下され〳〵。

小磯　あい〳〵。（ト茶を汲んで持ち來り、）ほんに今のお話しで、さつぱりとよく分りました。

お蛸　さあ、それゆゑに共吟味、手拭なりと帶なりと、海へ流して明神岩へ打ち上げたが、悋氣嫉妬のある女、さうない人は一夜のうちに、また元の磯へ流れ戻るげな。

お倉　そこで此やうに手拭やら襷やら、村中集めて海へ流し、慥な證據を見るのぢや、出しなさんせ。

お蛸　小磯女郎も何なりと、其身の身ばれぢや、出しなさんせ。

小磯　あい〳〵、そんならわたしも、此手拭を上げませうわいな。（ト手拭を出す、お蛸取つて見て、）

お蛸　おゝ、こりや花勝見とやらの紋附、あゝよい染の手拭ぢやの。

小磯　そりやあの江戸の土産に貰うたわいの。

お蛸　道理で藍の色がよい、さあ、是れで村中揃うたれば、直に海へ流さうではないか。

お倉　おゝ、それがよいく。

佐次　直に流しに行くならば、おれが検分してやらう。

お蛸　そんなら庄屋さま。

兩人　一緒に行きませう。

佐次　おゝ、道行としようわい。

鮫藏　それぢやお又不知火が、殖ゑやァしませぬか。

佐次　いゝや大丈夫だ。（ト門口へ出る。）

三人　そんなら小磯女郎。

小磯　皆さん、ようおいでなされました。

佐次　さあ、行きませう。（ト浪の音、テンツヽにて、花道へはひる。鮫藏跡見送り）

鮫藏　えゝあの庄屋め、顏も長いが尻も長い奴だ、大分西が暗くなつて來たが、又今夜も時化るかしらぬ。

小磯　おゝ、時化るといへばとゝさんが、鮫藏に濱へ行つて船を磯へ上げておけと、言附けてあつたぞえ。

鮫藏　なに船を磯へあげておけ、まア少し位いゝではないか。

ト小磯の手を取らうとするを振拂ひ、

小磯　えゝもう、てんがうせずと、早う行かぬかいの。（トツンとする。鮫藏思入あつて、）

鮫藏　親方は寐て居さつしやるし、浪六どのは沖から歸らず、こんないゝ首尾はないと思つたに、えゝいま／＼しい。（ト言ひながら不承々々に門口へ出る。）

小磯　まだ、行かぬかいなう。

鮫藏　今行くところさ。

ト浪の音になり、鮫藏花道まで行きかけ、思入あつて下手の物置へはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になり、

〽落人のかやにも心奥と口、小磯は窺ひ押入に、忍ぶ照葉を伴ひ出で、四邊憚り聲潜め、

ト小磯四邊を窺ひ、押入の錠を明け、内より屋敷娘振袖の照葉を伴ひ出で、合方になり、

小磯　照葉さま、嘸お氣詰りでござりませうなあ。

照葉　何の氣詰りな事があらうぞいの。さうして爰に居ても、大事ないかいの。

小磯　大事ござりませぬとも、とゝさんは最前から、夜網の疲れで寐て居りますれば、めつたに目の覺

める氣遣ひはなし、鮫藏には用を言附け、今落へ遣つたれば、これも歸るはよほどの間、誰に遠慮もござりませねば、ちとお身晴らしをなされませいなあ。

照葉　そなたの親切嬉しいわいの、遂に一度これまでに、逢うたことのないわしを、連添ふ夫の緣により、內外の者の目を忍び、何かに附けて心遣ひ、何と禮を言はうやら、これ、手を合せて拜なわいなう。

ト照葉手を合すを、小磯其手を拂ひ、

小磯　えゝ勿體ないことおつしやります。何のお禮に及びませうぞいなあ。夫浪六どのが其以前。眞平どのといふた時、お勤め申して御恩をうけたお娘御、眞平どのにお主なら、連添ふ女房の私にもやつばり同じお主さま、他人行儀になされずと、小磯斯うせいあゝせいと、家來をお使ひなさるやう、必ず御遠慮なされますな、結句隔てゝ下さりますと、お恨みに存じますわいなあ。

へ恨むといふも眞實に、照葉はいとゞ賴もしく。

照葉　それ程までに言うてたもる、そなたを何で隔てようぞ、とはいふものゝ世に落ちし、今は日陰の身の上なれば、主と思はず同胞と、思うてどうぞ行末とも、力になつてたもいなう。

小磯　賤しい此身を同胞と、思うてくれとおつしやりまするは、有難過ぎて勿體ないが、まだお詞に隔

てがござりまする。なぜ其やうな事おつしやります、そりやもう夫はもとより私も、及ばずながらお力にと、思うては居りますれど、何をいふにも身貧な暮し、殊にはまでない父親ゆゑ、お世話申すも人目を憚り、戸棚の内に御窮屈、心にもない御介抱、お許しなされて下さいませ。

照葉　いやなう、國を立退き方々と道に迷うて歩くうち、泊りの宿を取りはぐれ、野山の宮や辻堂に夜を明かせしも幾度か、其艱難にくらべては、戸棚はおろか下家でも、何のそれを厭はうぞいなう。

小磯　ではござりませうが是れまでに、何の御不自由なき御身にて、いかい御苦勞なされまするが、只おいとしうござります。

照葉　それも是れも世の成行き、まだしもわが身は此やうに、そなた衆二人に救はれたれど、それに引きかへ眞平の妹松代は途中にて、追手を防ぎ果敢ない最期、又弟の力松も、其場よりして行方知れず、もしや是れも追手の爲に、命を取られはせまいかと、思ひ過して案じられ、ほんに夜の目も合はぬわいなう。

〽おとゞひ思ひ主思ひ、倶に涙に暮近き門に樣子を窺ふ鮫藏、内にはそれと氣も附かず。

ト小磯照葉愁ひの思入、よき程に、以前の鮫藏物置より出で、門口に窺ふ。

小磯　さあ、其事につき眞平どのが、今朝早うから漁をかけ、力松さまのお行方を、尋ねに參りました

れば、今に様子が知れませう、また松代どのゝ遺骸も、お寺樣へやりましたれば、必ずお案じなされますな。

照葉 あゝ何から何までそなた衆の、いかい世話になりますわいなあ。

小磯 はて、お主の世話を家來がするは、こりや當りまへでござりますわいなあ。

〽力を添へる折柄に、始終窺ふ鮫藏が、跫音高く門口から、

ト鮫藏拔足にて、花道の附際まで行き、態と跫音をさせ、門口の外より、

鮫藏 小磯さん、今歸りました。

〽聲にびつくりあたふたと、照葉を戸棚へ押隱し、錠前ぴんと胸撫でおろし、

ト小磯あわてゝ照葉を元の押入へ入れ、思入あつて、

小磯 鮫藏、戻つてかいなう。（ト是れにて鮫藏門口を明け、）

鮫藏 一人の力で行かぬゆゑ、四郎藏と九郎作を頼んで、殘らず船は上げました。

小磯 それは御苦勞でござんした、奧へ行て夕飯を喰べたがよい。もうこちの人も戻る時分、どれ、膳ごしらへなとして置かうか。

〽言ひつゝ立つを引留めて、

鮫藏　小磯さん、ちよつと待つて下さんせ。

小磯　何の事か知らねども、用があるなら後の事に。

鮫藏　いや、急に話さにやあならねえ。まあ、下に居なせえ。

〽まあ下にと、しなだれ寄り、（ト鮫藏小磯の手を取り無理に引据ゑ、誂への合方になり）

いつも／＼、同じやうなせりふばかり言ふやうだが、爰の家にお前といふ船玉さまがあればこそ、玄海灘を梶取るより、まだ取りにくい親方の機嫌を取つて辛抱する、その實のある鮫藏を、颶風の雲より猶嫌ひ、おなじ梶子の浪六と、海より深く言交し、聟に直したむやくしさ。然し今更仕方がねえ、是れから帆足を引直し、あの浪六めは捨小舟、一間櫂でずつと突出し、わしといふよい男の新造舟に乘替る、心はないか小磯さん。幸ひ四邊に人もなし、一網打つによい汐時、色よい返事は、どうぢやぞいの。

〽抱き附くを振拂ひ、

小磯　えゝ、又してもいやらしい、夫のあるのに無體なこと、しつこう言やると親方へ、言はずには置かぬぞや。

鮫藏　おゝ言はつしやれ／＼、お前よりわしから先きへ、親方に言はにやあならぬ事がある。

小磯　なに、父さんに、言はにやあならぬ事とは。

鮫藏　此の人相書の落人を。（ト以前の人相書を出す。）

小磯　えゝ。（トびつくり思入。）

鮫藏　何とびつくりでごんせうがな、訴人をすればずつしりと、褒美の金にありつく落人の娘が、そこらにあることを嗅ぎつけて置いた、此鼻をお前が嫌へば破れかぶれ。戸棚のうちの代物を、代官所へ連れて行き、褒美の金を貰はにやならぬ。

〽戸棚を目掛け立寄るを、小磯はあわてゝ押し留め、

小磯　あゝこれ鮫藏、まあ〳〵待つてくりやいなう。

鮫藏　おゝ、待てといふなら待ちませう。

〽退引きならぬ鎹に、當座のがれの間に合せ。

小磯　成程今まではそなたを嫌ひ、態とつれなう言うたれど、眞實わしを思うてなら、そなたの心に隨はうほどに、どうぞ戸棚のうちの事は。

鮫藏　さういふお前の心なら、なに、わしが言ふものか。

小磯　必ず言うてくりやんなえ。

鮫藏　さあ言はぬ替りに、ちよつとこゝで。（ト手を取るを）
小磯　あゝこれ、今というては。
鮫藏　どつこい、其手は喰ふまいわい、後にと言つて玉をこかし、跡にて酷い目に逢はせうでの。
小磯　何のこつちに、其やうな事が。
鮫藏　なければちよつと口にても。
小磯　さあ、それは、
鮫藏　いやなら女郎を、引摺り出さうか。
小磯　さあ、それは、
鮫藏　應かいやか。
小磯　さあ、
鮫藏　さあ。
兩人　さあ／＼／＼。
鮫藏　えゝもう、こたへられぬ。
〽こたへられぬと追ひ廻す、折から沖より歸り來る、此家の入聟浪六が、何心なく家へ入る

出合頭に抱き附く鮫藏、其儘とつてすでんどう。

ト此うち浪の音を冠せ、花道より浪六褞袍絞りの手甲、脚絆、漁師のこしらへ、櫂の先へ網を結び附け、これを擔ぎ出來り、舞臺へ來て内へはひる。此時鮫藏小磯と心得、浪六に抱附くを、其儘取つて投げ退ける。

鮫藏　あいたゝゝゝゝ。（ト起上り、浪六を見て）や、若親方か、でも早う歸らしやつたな。

浪六　おれが家へおれが戻るに、早からうが遲からうが、われが構つたことはねえ。

鮫藏　さ、何も構やせぬけれど、あの今日は漁がきゝましたかいの。

浪六　はて、此頃の不漁續きで、雜魚一尾かゝりはせぬわい。

鮫藏　あゝ、よつ程手ごたへがしたに、とつと水際で落してのけた。おゝ、何やら忘れたやうな、おゝそれ、庄屋どのから親方へ言傳を頼まれた、どれ、ちよつと言うて來ようか。

〽間にあひ口もそこ／＼に、奥へはひるも知らぬ振り。（ト鮫藏思入あつて奥へはひる。）

〽跡には妻がほた／＼と。

小磯　ほんにまあ、よい所へ戻つて下さんした、お前の戻りが遲いゆゑ、あの鮫藏がそれは／＼。

浪六　はて、えいわいの、捨てゝ置きやれ。

〽あたり窺ひ、
これ、かのお方に、お變りはないか。
〽何やら濟まぬ夫の顏、
小磯　もしこちの人、お前どうやら、濟まぬ顏附きぢやが。
浪六　これにはちつと樣子のあること、小磯、まあ爰へ來や。(ト合方になり、小磯浪六の側へ住ふ。)これ小磯、おりやわが身に見せる物がある。
小磯　なに、わたしに見せる物とはえ。
浪六　さあ力松さまのお行方が、どこで聞いても知れぬゆゑ、もしや海へでもはまりはさつしやらぬかと、網打つ振で浦々を尋ね捜せどやつぱり知れず、詮方盡きて戻りがけ、ふと目に附いたは明神岩に、打ちあげあつた此手拭。(ト以前の小磯の手拭を出し、)見知りはないか。
〽差し出せば、
小磯　えゝ、あの、是れが。
浪六　さあ、こりやわが身のではないかいの。
〽胸にぎつくり立波の、騷ぐ心の梶取り直し。(ト小磯思入あつて、)

小磯　わツけもない事言はしやんせ、こりやわたしのぢやござんせぬわいな。
浪六　でも、よう似た此模様。
小磯　いえ〳〵こりや何ぼもある染模様、これが岩に掛つたは、大方どこぞの悋氣深い女中さんが、手拭でござんせうわいな。
浪六　是れがわが身の手拭でなければ、おれも先づ安堵、とさあいふものゝ其譯は、以前勤めたお主さまの不慮の事からちり〳〵に、おれを頼みに妹がお供をしたる御姉弟、一昨日計らずお目に掛り跡より追手の來ると聞き、どこへ伴ふ當もなく、わが身に其事打明けてお匿ひ申せし照葉さま、器量勝れしその上に、もう年頃にもならつしやれば、お主といへどもしひよつと、おれが何ぞであらうかと、女心の疑ひに悋氣嫉妬があるまいかと、言はれぬ矢さきへ此手拭、それでわが身に問うたのぢやわい。
小磯　ほゝゝゝ、いつにない何を言はしやんす、そりや人によつたもの、お主大事と忠義なお前、そんなこともあるまいし、又お主といふたのがお前の馴染んだ女子にせよ、はて、そこが譬の男のこと。手掛け妾はあるならひ、それを悋氣する時は明神さまのお咎めで、其身も死すれば親夫にも、ひよんな歎きをかけると思へば、此手拭を見てさへも、勿體なうて怖しうて、人の事でも悋

氣のりの字、聞いてもぞつとするわいなあ。
浪六　む、その心では若しおれに、妾といふやうなものが出來ても、悋氣はせぬか。
小磯　眞實誓文、そんな心は。
浪六　そりやほんまに、
小磯　お前に嘘を言はうかいなあ。
〽眞實見えし女房が、詞に心奥の間より、此家の舅鰭九郎欠しながら出來り、
ト此うち奥より鰭九郎、白髪鬘大縞の褞袍、漁夫の親仁のこしらへにて、烟草盆を提げ出來りて。
鰭九　あゝ寐た〳〵、夜網の疲れでがつかりと、半日餘り寐てのけた。
浪六　親仁さま、お目が覺めましたか。
小磯　さあ、こゝへござんせいなあ。
〽娘が手當あつ錦、蒲團の上に高胡坐。（ト小磯大縞の座蒲團を敷く、鰭九郎此上に住ふ。）
浪六　それ、お茶でも上げねえかえ。
小磯　あい〳〵。
鰭九　聟どの、けふはちつと晴れようかの。

浪六　いえ〳〵、西へ雲が廻つたれば、又降りでござりませう。

鰭九　此頃の不漁つゞき、一昨日からの不知火で、沖が荒れて漁がきかず、こりや糧米櫃の底をたゝかにやあならぬ。

浪六　成程舅どのゝ言はつしやる通り、何ぞ金儲けに有りつかねば、此顋をつるさにやあならぬ。

鰭九　おゝ、其金儲けと云やあ、聟どん、ちつとこなたに聞きたい事がある。

浪六　これは改まつた親仁さま、何の御用でござります。

鰭九　いや、外でもない、戸棚のうちに入れてある娘は、そちが主筋か。

浪六　えゝ。

〽思ひがけなき舅の詞に、夫婦は目と目見合せて、

さあ、あれは。

鰭九　いや、何も隠すことはない、これ此やうに人相書で、捕へて出せば褒美を遣らうと、心よからぬ刑部殿から、行方を尋ぬる菊池の家中、雪岡冬次郎どのゝ妹御、照葉どのであらうがな、こなたの為にお主ならおれが為にもやつぱりお主、打明したら金輪際、この鰭九郎が匿ふ氣、はて、人の落目を見捨てぬが、殺生をする罪滅し、聟どん、なぜ打明してはくれぬぞい。

　〽情をかけるは底巧み、ありそ海とも不知火に、

小磯　これ浪六どの、何もかもとゝさんが、知つての上は打明けて、

　〽あゝ是れ待てと女房を、止むるうちもとやせんと、胸に浪うつ浪六が、思案を定め、どつかと坐し、

浪六　あ、舅どのゝ情の詞に、是れまで僞る空怖しさ、何を隱さう女房に、お主の娘と言ひくろめ、店棚のうちへ匿ひしは、

鰭九　や。

浪六　この浪六が言交せし、博多の女郎でござりまする。

小磯　えゝゝゝ。

　〽おどろく女房を、目顏で抑へ、

浪六　あゝこれ、其の人相書のお尋ね者と、丁度似寄りの年配ゆゑ、お疑ひを幸ひにお主と僞りあの女を、匿ひ置きたいものなれど、女房はともあれ舅どのに、一夜流れの傀儡女を主あしらひにさせられませうか、勿體なさに打明けてお話し申す女の素性、もと浪六が筑前に、奉公稼ぎに居た時分、博多の廓で買馴染、末も思はず女房に、しようならうと言つたのを、誠と思つて馴落なし、

國を隔てゝ來りしものを、むげに歸れと言はれもせず、どあつて聟の身の上なれば、我が家へ連れて來られもせず、詮方なさの出來心に、お主の娘と女房を僞り、引入れたのは博多の女郎、斯く我が身の罪を打明けて、お話し申す上からは、疑ひ晴らして下さりませ。

へ一寸のがれに三寸の舌に任せて浪六が、舅を僞るつくり言、聞く女房は誠と思ひ、

小磯 むゝ、すりやお主の娘御というたは、お前が博多とやらで女房約束なさんした、傾城どのでござんしたか。

浪六 あゝこれ、さうでは。

鰭九 むゝ、さうでなくば觸れの廻つた、冬次郎が妹照葉。

浪六 何しに、左樣な。

小磯 そんならやつぱり、傾城どのか。

浪六 さあ、それは、

鰭九 われが勤めた古主の娘か。

浪六 さあ、それは、

小磯 傾城どのか、

浪六　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

〽さあ〳〵どうぢやと兩方より、問ひ詰められて詮方も、浪に漂ふあま小舟、寄邊定めぬ風情なり。（ト鰭九郎小磯上下より詰めよる、浪六じゆつなき思入）

〽折から爰へ駈け來る、村の歩きが門口から、

トばた〳〵になり、花道よりあるき一人走り出來り、門口から、

歩き　鰭九郎どの〳〵、代官所から急御用、わしと一緒にちよつとござりませ。

鰭九　えゝ、折のわるい代官どのゝ使ひ、これ〳〵、今跡から行くと、先へ歸つて言はつせえ。

歩き　いや〳〵、急御用ぢやから、是非一緒にござりませ。

鰭九　えゝ、泣く子に地頭、仕方がねえ、これ娘、羽織をくれ。

小磯　あい〳〵。（ト小磯押入より羽織を出し、鰭九郎に着せる、鰭九郎羽織を着ながら、）

鰭九　これ聟どの、代官所からの急の使ひ、慥に落人詮議の筋、假令何と僞つても、此國へ入込んだこと訴人あつて知れたれば、女郎にせい何にせい、似寄りの女であるからは、こなたの力では隱は

れぬ、又この鰭九郎が匿へば、外は知らず此國では、指でも指すことではない、それもおれが詞を用ひず、連れ出しでもするが最後、合圖の太鼓で出口を固め、此隣國の通路を留めれば、網の魚も同じこと、跡で後悔せぬやうに、代官所から歸るまで、思案極めて返事をしやれ。(ト此せりふを言ひながら門口へ出て、)娘、留守せいよ。(ト門口をしめ、)どれ、行つて來ようか。

〽慈悲も情も白砂の、道をぼか〳〵巖乘親仁、代官所へぞ出て行く。

トこれへ浪の音を冠せ、鰭九郎先きに歩き附いて花道へはひる。

〽舅を見送り、浪六が、

浪六　これ女房ども、堪忍してくれ〳〵、現在わが身の親なれど、心よからぬ鰭九郎どの、それゆゑ態と博多の女郎と、間に合口の一寸脫れ、それをわが身が實と思ひ、問はれる度の其苦しさ、櫓櫂を取らぬ法もあれ、わが身を捨てゝ餘所外の、女を内へ呼ばれうかいの。

小磯　さあ其實を知りながら、それとも若しやと女氣に、つい疑うたはわたしが誤り、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

浪六　おゝ、そんなら疑ひ晴れたかいの。

小磯　晴れいで何とせうぞいなあ。

浪六　あゝ嬉しや〳〵、それでおれも落附いたわいの。
小磯　いえ〳〵、まだ落附かれぬわいなあ。
浪六　なに、落附かれぬとは。
小磯　さあ今にとゝさんが、代官所から、戻つてござんした其時に、お前何と言はしやんすえ。
浪六　何と言うたらよからうか、戻つてござるそれまでに、思案が附かねば絶體絶命。
小磯　え。
浪六　いや、斯ういふ時には酒の力、酒があるなら燗してくれ。
小磯　何の造作もない、藪際まで。〈ト德利を提げ門口へ出て、〉どれ、一走り行て來ようわいな。
〽德利を提げて氣も輕く、酒屋をさして走り行く。〈ト小磯思入あつて下手へはひる。〉
〽跡に浪六とつおいつ、思案に暮るゝ火ともし頃。〈ト浪六思入あつて、〉
浪六　今代官所から、舅どのを呼びに來たのは、慥に詮議に違ひなし、詞の罠にかゝらぬうち、此家を立ち退き濱傳ひ、呼子ヶ浦より小船にて、いづくの島へかお供なし、脫るゝだけは落延びん。さはさりながら不便なは、親には似ざる女房小磯、跡にて我を恨まんが、お主の爲には替られぬ。
〽難儀一時に降りかゝり、身に知る雨の音に紛れ、錠ねぢ明くれば戸棚より、照葉はその儘

轉び出で、（ト浪六思入あつて、戸棚の錠をねぢ切り明ける、内より照葉出で、）

照葉　これ眞平、始終の樣子は戸棚にて、とつくり聞いて居たわいなう。

浪六　樣子御存じある上は、此家を早く落延びん。さゝ、片時も早く御供なさん。

〽用意の一腰ぼつこんで、（ト浪六戸棚より脇差を出しこれを差し、）

照葉　して是れよりは、いづれを當に。

浪六　其行く先きは、もし。

〽さゝやく後に鮫藏が、（ト鮫藏窺ひ出で、）

鮫藏　落人やらぬ。

〽落人やらぬと組附かれ、とやせん隱れ身の大事、みのは幸ひ身の防ぎ、

ト鮫藏組附くを振拂ひ、立廻りながら有合ふ簑を取りあげ、

浪六　この簑笠で、人目を忍び。

鮫藏　何を。

〽又もや組附く鮫藏を、振りほどいて眞の當て。

ト浪六立廻りながら、照葉に簑笠を着せ、竹笠を持つてよき程に鮫藏を當てる。鮫藏どうと下に居る。

浪六　さ、ござりませ。

〽降り來る雨の足よりも、道を早めて急ぎ行く。

ト雨車浪の音をかぶせ、浪六照葉の手を取り花道へはひる。

〽引違へて脇道より、傘傾けてとつかはと、小磯はわが家へ立歸り、

ト右の鳴物にて、下手より小磯德利を提げ、酒屋の傘をすぼめながらさし、門口から、

小磯　こちの人、今戻つたわいな。(ト内へはひる。)思ひがけない雨でござんしたなア。や、こちの人、どこへ行かしやんした、こちの人〳〵。

〽尋ぬる拍子つまづく鮫藏、

や、鮫藏か。

〽聲にびつくり心附き、

鮫藏　うぬ、浪六め。(ト小磯を見て、)や、小磯さんか。

小磯　これ鮫藏、こちの人は、どこへ行かしやんしたぞいなう。

〽いふに鮫藏、打ちうなづき、

鮫藏　あゝ遲かつた〳〵、お前の留守の其うちに、あの浪六が戸棚から、博多の女郎を連出して駈落せ

うといふ所を、おれが見附けてやるまいと、爭ふはづみに脾腹を打たれ、氣を失つたゆゑ跡は知らぬが、爰に二人が居ぬからは、手に手を取つて睦じく駈落したに違ひない。これ、お前は欺され嫌はれて、是れでも悔しく思はぬか、おりや悔しくてならぬわい〳〵。

〽焚きつけられて、胸の火の燃ゆるを隱す夫思ひ。

小磯　そんならやつぱりお主といふたは、博多の廓の傾城どのか。

鮫藏　おゝ傾城とも〳〵、二世も三世も約束した、あの浪六が買馴染。

小磯　えゝ、何故さうならば其やうに、わたしに言うては下さんせぬ、そりや聞えぬわいなア浪六どの。

〽思はず側なる鮫藏が、胸倉取つて引きすゑれば、

鮫藏　はあゝ、こりや悋氣の門違ひだ。

〽言ふも小磯は、耳へも入れず。

小磯　最前わたしがあれ程に、言うたをお前は忘れてか、てかけ妾は男のかうけ、わたしや悋氣はせぬわいな。それを振捨て行かしやんすは、餘りといへば胴慾なと、思へば涙がこぼれるわいな。是れがやつぱり悋氣とやらか、えゝ悲しいわいな〳〵。

〽其まゝそこにどうと伏し、口說き歎くぞ道理なり。

鮫藏　おゝ尤もだ〳〵、大方二人今頃は、どこぞでちん〳〵鴨南蠻、うまい事をして居よう、此腹いせには跡追かけ、二人に恨みを言はつしやれ。

〽悋氣をすゝむる惡企み、小磯は心取直し、

小磯　どう思ひ直しても、傾城どのを呼返し、一つに居て貰はねば、わしが悋氣をしたやうで、世間へどうも心が濟まぬ、こりや跡追掛けて、迎へて來よう。

〽さす傘のえもいはず、胸のもや〳〵雨雲の、行きては戻りもどりては行き、

ト小磯よろしく思入あつて、

えゝ、結句留めに行つたなら、悋氣ぢやと言はしやんせうが、是れほどまでに思ふわしに、愛想が盡きての家出なるか、假令どのやうに嫌はれても、わしや離れる氣はないわいなう。えゝ、こりやどうしたらよからうぞいなあ。

〽思ひ惱みにうつとりと、蟬蛻のからかさ吹きまくる、風は魔風かざは〳〵〳〵、俄に沖鳴りはたゝがみ。（ト小磯いろ〳〵思入、雨車 雷の音になり、小磯きつと思入、鮫藏是れを見て、）

鮫藏　やあ、とう〳〵ほんまの嫉妬になつたか。

〽見送る小磯は髮逆立ち、

小磯　假令いづく〳〵迯ぐるとも、女の一念跡追掛けて、連れ歸らいで置くべきか。

〽物狂はしくわが身をば、われとは知らぬ身をつくし、心づくしの不知火に誘はれ行くこそ哀れなれ。

ト此うち雨車ドロ〳〵、雷の音烈しく、小磯向ふをきつと見て、思はず歩むこなしにて花道へはひる。鮫藏これを見てびつくりなし、顫へながら、

鮫藏　やあ、あの勢ひでは二人の奴等を喰ひ殺さうも知れぬ權幕、是れも松浦明神の、嫉妬の咎めかおそろしい、おそろしい。

〽わな〳〵顫ふ其所へ、慾に眼もくら紛れ、いきせき歸る鰭九郎。

トやはり雨車雷の音にて、花道より鰭九郎、尻端折り、骨の折れたる傘を半すぼめにさし、駈け出來り門口から、

鰭九　やい鮫藏、居るか、鮫藏々々。

鮫藏　おゝ親方か、何でごんす。

鰭九　これ、浪六は内にゐるか。

鮫藏　浪六どのは落人の、女を連れて今しがた。

鰭九　おゝ、突走つたか。
鮫藏　おいなう。
鰭九　風を喰つて逃げるとも、合圖を打てば近郷近在、出口を固めて網の魚、さうだ。
〽丸太梯子を攀ぢ登り、障子を開き二階より、はるかの沖をきつと見て、
ト鰭九郎上手二階家へ上り、障子を引きぬく、内に太鼓掛けあり、鰭九郎柱に捉まりきつと見て、
あれ〳〵沖に閃く稲妻の、光りに見ゆる二人連れ、呼子の濱へ落行く樣子、鮫藏われも跡追掛け、
野郎共に加勢して、必ず彼奴等を取り逃すな。
鮫藏　心得ました。
鰭九　どれ、合圖の太鼓を打つてくれうこ
〽撥おつ取つて打ち鳴らせば、四方に聞ゆる太鼓の音。
ト鰭九郎太鼓を打つ、是れにて下座、揚幕にて、同じく太鼓を合す、鮫藏大阪手甲の裝になり、
鮫藏　そんなら親方。
鰭九　早く行け。
鮫藏　合點だ。

〽飛ぶが如くに、

ト雨車雷の音にて鮫藏櫂を持ち、逸散に花道へはひる。鰭九郎は太鼓を早めて打つ、これにて此道具廻る。

（呼子ヶ浦夜の場）――本舞臺向ふ二段の浪手摺、後黑幕、上手岩組の張物、松の立木、日覆より釣枝、よき所に水の溜りし岩山、此傍に丸太造りの藁葺の濱小屋、此うちに碇綱板子など入れあり、下手一面に蘆原、總て呼子ヶ浦夜の體。やはり、雨車雷の音にて道具留る。

〽夜嵐に降り來る雨も荒海の、音やはげしき呼子の浦、ものゝあいろも白砂の、光りを當てに浪六が、照葉を伴ふ目配り氣配り、やう／＼磯邊に歩み寄り、

ト右の鳴物ばた／＼にて、花道より以前の浪六、照葉の手を引き、走り出來り、直に舞臺へ來る。

浪六　照葉さま。

照葉　眞平。

浪六　嬉しや爰まで、落延びました。

〽一息ほつと息をつき。（ト浪六思入あつて）

もうお案じなされますな、是れから船にて何れへなりとも、御供をなして立退きまする。

照葉　あゝそなたの親切忝けない、よしない主ゆゑ思はぬ苦勞、取分け小磯が昨夜より、親身も及ばぬ介抱の、禮も言はずに立退きしが、嘸や跡にて恨んで居よう、殊にはそなたの舅とやらへ、博多の女郎というたゆゑ、もしやわしを女郎と思ひ、夫を寐取つて連行きしと、思ひ違ひをしやせまいかと、それが心に掛るわいなう。

浪六　あいや〳〵、舅と違ひ女房は、それは〳〵親切者、お主大事と思ひまして、それでお世話をいたしましたを、假令お禮をおつしやらずとも、何のお恨み申しませう、そんな奴ぢやござりませぬ。

照葉　其貞節な小磯をも、よしない主のわしゆゑに、捨てゝ立退くそなたの心、思ひ遣られていとしいわいの。

浪六　はて、わつけもないことおつしやりませ。女房がお主に替へられませうか、いや、益ないことをいふうちに、追手に逢はゞ御身の大事、少しも早う船にて此場を

爰の蘆原かしこの磯邊、尋ね探せど船もなく。（ト浪六思入あつて船をさがす。）

やゝ、こりや磯に一艘も、今日に限つて船のないは。

〽途方に暮るゝ折柄に、四方に聞ゆる太鼓の音。

や、あの太鼓は。

照葉　何ぢやぞいなう。（ト照葉浪六に縋る。）

浪六　あれは正しく此浦にて、事ある時に近郷の人を集める合圖の太鼓、扨は鰭九郎がわれ〳〵を、捕へん爲の合圖なるか。

照葉　えゝゝゝゝ。

浪六　陸には追手、海には船なく、進退こゝに谷りしか。

照葉　こりや、どうしたらよからうぞいなう。（ト照葉うろ〳〵と思入。）

浪六　最早浪六が絶體絶命、追手が來たら腕限り、一方切拔け御供なさん、必ずお案じなされますな。

〽力づくれど浪六が、如何はせんととつおいつ、口と心のうら傳ひ、夫を慕ふ一念力。

ト揚幕にて、

小磯　こちの人ィなう、浪六どのィなう。

〽呼ばはる聲も物凄く。

浪六　むゝ、わが名を呼ぶは慥に追手、むゝ。

〽身ごしらへする其所へ、悋氣嫉妬に小磯が執着、こけつ轉びつ走り來る、こなたは逃ぐる

出合頭、思はずはつたと行當り、飛びのく折から稲妻に、互ひに顔を見合せて、
ト此うち雨車雷の音にて、花道より小磯髪を亂し、以前の傘の散々に破れしをさし出來り、浪六に行當る、此時雷はげしく、兩人飛びのき透し見て、

浪六　や、わりや女房か。

小磯　こちの人か。

照葉　おゝ、さういふは小磯どの。

浪六　どうして爰へは。

〽おどろく夫に縋り附き、

小磯　えゝ、聞えぬわいなあ〳〵。（ト誂への凄き合方になり）これ浪六どの、なぜ隠しては下さんす。最前も最前でお主さまの娘御を博多の女郎というたのは、心よからぬとゝさんへ、僞りいふと言はしやんしたが、やつぱり誠は、お主といふは馴染重ねし傾城どの、それ連退かうばッかりに、わたしに酒を買ひにやり、其間に二人迯げようとは、そりや胴慾ぢや〳〵わいなあ。

〽悔みなげゝば、

浪六　えゝ、最前もあれ程に、舅を僞るつくり事と、言ひ聞かせ置いたるに、やつぱりわれは照葉でま

を、馴染の女郎と思つて居るか。

小磯 知れたことイなあ。

照葉 あゝ其疑ひは尤もぢや、今も今とて言はぬことか、追手の爲にこのやうに、眞平そちと立退きしを、もしや小磯が女氣に博多の女郎と思ひ違へ、夫を寐取り連行きしと、跡で恨みはせまいかと言うた口も乾かぬところ、さら／＼無理とは思はねど、わしや女郎ではないわいの、疑ひ晴らすは此照葉が、肌の守りの臍の緒に、菊池の家中何某が乙の娘と書いてある、これ見て疑ひ晴らしやいなう。

ト照葉守りを出さうとする。

小磯 あゝもう言うて下さんすな、お主であらうと女郎さんであらうと、わたしや構ひはせぬわいな、一生添はうと思ひ込んだ、大事の／＼わたしの夫、浪六どのさへ戻つてくれゝば、はて、手かけめかけは男の働き、お主なりと女郎なりと好いた女子でござんすなら、内へ呼んだがようござんす。悋氣嫉妬は神樣のお祟りあるが怖しさに、恨む心はないわいの、さあ浪六どの、其女郎さんと諸共に、早う戻つて下さんせいなあ。

浪六 えゝ、まだわが身は疑うてか、人にこそよれ此浪六、女郎狂ひをするものかせぬものか、おれが

心も知つて居ようぞい。
へ眞實見えし夫の詞に、
小磯　あゝ、それ程まで言はしやんすに、よもや僞りもござんすまい、疑うたはわたしが誤り。これこちの人、堪忍して下さんせ。もしあなた、御免なされて下さりませいなあ。
浪六　すりや、疑ひ晴れたか。
照葉　嬉しいわいなう。
小磯　さあ、眞實あなたがお主なら、猶更家へお連れ申し、お世話をせねばならぬわいな。さあ早う戻つて下さんせいなあ。
浪六　其志しは忝けないが、舅どのが照葉さまを、お尋ね者と知つたからは、家へ戻らばお身の大事、それゆゑわが身に譯もいはず、お供申して立退いたは、一先づいづくの果なりと知邊へお預け申す心、あなたのお身さへ片附かば、直に歸つて來る程に、暫しの間これ小磯、どうぞ待つてくれいやい。
へいふに又もや角目立ち。
小磯　いや〳〵、そりや噓ぢや〳〵、わしを振捨て連れて退かうとは、どうでも女郎に違ひない、えゝ

大事の夫を寐取られしか、悋氣嫉妬は神樣のお祟りあるが怖しく、せまいと思へど女子の悲しさ。
これ此やうに涙が出るわ、やつぱり是れが悋氣かいなあ。

〽かつぱと伏して泣き叫ぶ、波のあはれやさし汐の、寄せ來る如き人ごゑに、

ト揚幕にて、ありや〳〵と大聲する。

浪六　や〻あの人聲は慥に追手、見咎められぬ其うちに、少しも早く。

照葉　それぢやというて、小磯を捨て〻。

浪六　はて、小事は構はずござりませ。

〽照葉が手を取り行かんとする、夫に小磯は縋り附き。

小磯　え〻假令追手が來ようとも、こなたは遣らぬ、遣らぬわいなあ。

浪六　え〻、聞分のない、放せ〳〵。

小磯　い〻や、放さぬ〳〵。

〽はなれがたなき嫉妬の一念、忽ち沖に燃ゆる不知火。

トドロ〳〵になり、兩窓蓋をおろし、後の黑幕を切つて落し、向ふ遠見へビイドロ入り誂への不知火仕掛にて燃ゆる。

浪六　御主の難儀も、辨へぬ程の者ではなかつたが、扨は女のあさましさに、夫を恨む一念に、神の祟りをうけたるか、え丶情なやなあ。

〽え丶情ないといふ夫の顏、恨めしげに打ち守り、

小磯　え丶つれないは我が夫、恨めしいは其女、假令この身に明神の、祟りなうけて死ぬるとも、女の一念二人とも、やはか此儘添はさうか。

〽物狂はしき有樣に、仕方なく〱浪六が、

浪六　これ程までに言ふものを、聞分けなければ是非に及ばず、もう是れまで、お主の爲には替られぬ。

〽縋る小磯をはつたと蹴倒し、刀の柄へ手をかくれば、照葉はあわて縋り留め、

照葉　あ丶これ眞平、はやまつたことしてたもんなや。

浪六　え丶、お留めなされますな、お放しなさりませ。

〽留める照葉を振拂ひ、脅しの刀振りあぐれば、小磯は夫に身を差附け。

ト浪六刀をぬき振上げる、小磯これを見て體を差附ける。此うち始終ドロ〱不知火燃ゆる。

小磯　さあ殺さば殺せ、思ふ男の手に掛り、死ぬる程なほ附纒ひ、いつかな添はさぬ添はしはせぬ。

〽怒りの涙はら〱と、髮も心も逆立ちて、

さあ〳〵殺せ、殺しをれやい。

〽身を摺附くれば浪六が、流石夫婦の恩愛に、振上げは上げながら殺すも不便と刀を納め、宥め賺して脱れんと。

浪六　あゝ殺さうとしたはおれが誤り、何科もない女房を、どうまあ刃があてられう。さゝ、おれが悪いおれが悪いゆゑ、これ此やうに誤る程に、どうぞ心を入替て、わが身は家へ戻つてくれ。これ女房ども、頼むわいの〳〵。

〽手を下げ頼めば猶せきたち、

小磯　いや〳〵聞かぬ〳〵、なんぼでも聞かぬ〳〵。

浪六　すりや何うあつても。

小磯　男を寐取りしあの女、此身の恨みを晴らさにやならぬ。(ト小磯きつとなり、照葉に立掛る、)

照葉　あれえ。

浪六　えゝ、是非に及ばぬ、

〽髻摑んで引き寄すれば、髪も心も亂れやき、夫の刀引き抜いて照葉を目掛け振上る、白刃の稻妻篠つく雨、海はどう〳〵鳴神の、物凄くもおそろしけれ。

ト此うち浪六小磯を引据ゑる、小磯引据ゑられながら浪六の刀を抜き、照葉に切つて掛る、浪六照葉を圍ひ是れを留る立廻り、淨瑠璃の切れより雨車、雷の音物凄き誂への鳴物になり、浪六有合ふ傘を取つて立廻り、照葉正面の岩の上へ迯げて行く、小磯追掛け行く、浪六これを留めながら、三人岩を枷に立廻りあつて、浪六傘にて刀を打落し、直に刀を取り、小磯を切らうとする、照葉これを留める、是れにて小磯岩の上より滑り落ちどうとなる、此跡を浪六切附ける。これにて淨瑠璃になる。

〽かゝる折から數多の漁夫、松明照して追駈け來り、

ト波の音にて、花道より漁夫八人、大阪手甲脚絆紺の腹掛、一人先きへ松明を持ち、駈出し來り、

〽一度に櫂にて打つてかゝれば、難儀重なる浪六が、一世の瀬戸と切立てながら、

ト八人櫂にて打つてかゝる、浪六ちよつと立廻りながら、

○　それ、落人脫すな。

皆々　合點だ。

浪六　さあ、照葉さまには此場を早く。

〽早く／＼とせり立つれば、照葉は詮方なく／＼も、濱邊傳ひに迯け行くを、小磯は跡を慕ひ行く。

ト照葉上手へ迯げてはひろ、小磯起上り、此跡を追掛けてはひろ。此うち浪六立廻つて、眞中にきつと見得、八人左右へ別れて取巻く。

○　邪魔になる浪六め、こいつを先きへ、

皆々　疊んでしまへ。

浪六　何を小癪な。

ト誂への鳴物になり、八人櫂にて打つて掛り、立廻りあつて、鳴物替り、上手の濱小屋より碇綱梃子など出し、これを枷に立廻りよろしくあつて、

〽多勢を相手に浪六が、火花を散らす其所へ、駈け來る舅の鰭九郎、手馴れし櫂をおつ取つて、當るを幸ひ打ち立つれば、二人が手並に船子ども、漁る千鳥の騒立つごとく、むら／＼ぱつと迯げ散つたり。

ト此うちばた／＼になり、花道より鰭九郎尻をからげ肌脱き、大阪手甲一本差しにて櫂をかい込み、走り出で來り、此中へ這入り、櫂にて漁夫を打倒す大まくしの立廻りあつて、トヾ鰭九郎は上手へ四人を追込み、浪六は下手へ追込む。

〽追駈けんとして立戻る、親子ははつたと行當り、（ト兩人後退り舞臺の眞中へ來る）

浪六　やあ、舅どのか。

鰭九　聟どの、怪我はなかつたか。

浪六　なに、是れしきに怪我どころか、して、こなさんには何ゆゑ爰へ。

鰭九　おゝ、照葉どのを助けん爲。（ト鰭九郎思入あつて、）

浪六　何と言はつしやる。

鰭九　えゝ聞えぬぞよ、これ聟どの。（ト鰭九郎よき所へ住ふ。誂への合方になり、）最前あれ程舅がいうたを、こなたは疑うて代官所より戻らぬうち、照葉どのを連出してどこを目當に落ちる氣だ、此近鄕近在は大友刑部が領地ゆゑ、搦めとつて差出せば、褒美の金は望み次第と、代官所より配符を廻せば、慾に目のなき世の中ゆゑ、我れ捉へんの鵜の目鷹の目、こなたの力で匿ひ置けば知れるは必定、この鰭九郎は日頃惡事に耽るゆゑ、褒美の金を餘所にして匿ひ置くとは誰も知るまじ、それゆゑ最前お主なら匿はんといつたのは、可愛い娘に連添ふ聟に、忠義がさせたいばかりなるぞ、それを疑ひ照葉どのを伴ひ出しと聞きしゆゑ、南無三寶しなしたり、追手の爲に命や捨てんと、二人を助けん其爲に、追掛け來たる鰭九郎、かほどに思ふも水の泡、あゝ常が常ゆゑ子にまでも、疑はるゝが口惜しいわいやい。

〽僅に殘る奧齒を噛み、悔み涙に暮れければ、扨はさうかと浪六も、大地にはたと兩手を突き。（ト此うち鰭九郎よろしく思入にていふ。浪六思入あつて、）

浪六　あゝ親の心子知らずと、左ほどにおほす心を無になし、疑ひ通して家出せしは、此浪六が一生の誤り、腹も立たうが舅どの、是れもお主を大切に思ふから皆起りしこと、忠義の二字に免じられ不孝の罪はお許しなされて下さりませ。

〽巧みありとも白砂に、頭を埋め詫びければ、

鰭九　さて、聟どのには疑ひ晴れ、舅が盡す眞心の今ぞこなたに知れたるか、えゝ忝けない、して照葉どのゝ見えざるは、いづくへお落し申せしぞ。

浪六　今の追手に濱邊傳ひ、松浦の方へ行かれしが、案じられるは女房小磯、あなたを女郎と思ひ違へ悋氣嫉妬で照葉さまの、跡を追駈け行きし樣子。

鰭九　やゝ、それは氣遣はしい、少しも早く跡追掛けてお助け申せ。

浪六　言ふにや及ぶ。

鰭九　さゝ、早く〳〵。

浪六　合點だ。

〽跡追掛けんとする所へ、こけつ轉びつ迯げ來る照葉、小磯は跡を追掛け來り、

ト浪六身ごしらへする、バタ／＼になり、上手より照葉迯げて出來り、跡より小磯追掛け來る、浪六照葉を圍ふ、小磯きつとなつて、

小磯　男を寐取りし仇し女め、喰附いてなと怨みを晴らさん。（トドロ／＼にて照葉の側へ歩み寄る。）

照葉　あれえ。（ト浪六へ縋り附く。）

浪六　えゝ情ない、まだも心が解けぬよな。

小磯　いツかな解けぬ、命を取らねば心は解けぬ。

〽照葉を目掛け立ちかゝれば、中を隔つる浪六が、手出しもならぬ舅の前、それと察して鰭九郎。

鰭九　おのれお主へ手向ひなす、憎い女郎め、覺悟せよ。

〽腰のだんびら拔くより早く、小磯の肩先切附くれば、うんとばかりに倒れ伏す、又ふり上げる刀の下、其身を枷に浪六が、舅の腕しつかと留め、

ト鰭九郎小磯の肩を一刀切る、これにて小磯下手へ倒れる、浪六鰭九郎を留めて、

浪六　あゝこれ、舅どの待たつしやれ、日頃に似ざる女房が、悋氣嫉妬は神の祟り、小磯の業ではござ

りませぬぞ。

鰭九　むゝ、如何にも此ほどよりの沖の不知火、何れの誰が娘ぞと、餘所事に思ひしも。こいつの嫉妬であつたるか、所詮神の祟りにて、最早命のない娘、親が手に掛け殺すがまだしも。

照葉　えゝ、是れといふも皆わしゆゑ、許して下され、これ親御。

〽手を合して伏し拜めば、流石親子の恩愛に、（ト鰭九郎思入あつて、）

鰭九　あゝ思へば女の嗜むべき、悋氣嫉妬の募りしゆゑ、神の御罰で死ぬるのは、自業自得といひながら、我が子と思へば不便でござる。これ聟どの、所詮命は助からねば、こなたへ頼み今際の名殘に、娘と末期の水盃、あの世の土産にしてやつて下され。

〽言ひつゝ四邊のあわび貝、手に取りあげて、

幸ひこゝに鮑貝、片思ひなる娘が盃、岩間に溜る天水を、末期の水にこなたが呑んで、殘りは娘に呑まして下され。

〽貝を片手に立上り、合圖の咳二つ三つ、蘆原押分け鮫藏が、岩間へ打込む砒霜石、鰭九郎は水汲みあげ、

ト鰭九郎立上り、思入あつて咳拂ひをする。是れにて蘆原の蔭より鮫藏半身出し、岩の水溜りへ毒藥

を打込む、鰭九郎この水を汲み、
さあ聟どの、こなたが呑んで娘へ跡を。
〽差出せば貝取りあげ、

浪六　あゝ、此世は神の祟りにて、非業に死すとも、未來は必ず、替らぬ女夫ぢやぞ、則ち是れが固めの盃。

〽ぐつと一口呑み終れば、鰭九郎はとつくと見て、（ト浪六件の水を呑む、鰭九郎見て、）

鰭九　おゝ、よく呑んでくれた、殘りは娘に呑ませてやるわ。

〽持つたる貝を取落し、

南無三、これは麁相をしたわえ。

〽こぼるゝ水は毒藥に、濱邊の蟹の穴より這ひ出で、一度に死すれば浪六目を附け、

ト鰭九郎鮑貝をおとす。是れにて薄ドロ〳〵、指金の蟹出で一時に死ぬ、浪六是れを見て、

浪六　やゝ、今こぼしたる其水の、砂地へ引けば澤蟹の、穴より這ひ出て死したるは。

鰭九　それぞ毒氣のきゝめなるわ。

浪六　やゝ、何と。

へびつくりなして立上りしが、面色替りて苦痛の體、尻邊にどうと倒るれば、照葉は悲しく縋り附き、（ト浪六立上り、毒の廻りし思入にてどうとなる。照葉介抱して）

照葉　これ眞平、どうぞしやつたかいなう。

浪六　五臟俄に惱亂なし、骨も碎くる苦しみは。若しや呑んだる今の水は。

鰭九　南蠻祕法の毒藥だわ。

照葉浪六　えゝゝゝゝ。（ト兩人びつくりなす。鮫藏葛籠を背負ひ出て）

鮫藏　親方、まんまと首尾よく。

鰭九　毒を喰つて、はて、いゝざま。

浪六　えゝ情の詞に騙されて、手盛りを喰ひしか。

へ氣を揉みあせれど毒氣の廻りに、五體自由にならざれば、無念の齒がみなすばかり、照葉はすかさず浪六が、刀おつ取り立上り。

ト此うち浪六毒氣に苦しむ思入よろしく、照葉浪六の刀を取り、

照葉　眞平の敵、覺悟しや。

へ切つてかゝるを身を躱し、刀捥ぎ取り突放せば、小腕とつて鮫藏が、照葉を其儘引き据ゑ

ろ、鱗九郎は傍なる岩にどつかと腰打ちかけ。

ト照葉切つてかゝるを、鱗九郎刀を引つたくり、四邊の岩角へ腰うち掛け、

鱗九　やい浪六、じたばたしてももう叶はぬ、冥土の土産に今おれが、言つて聞かせることがある。

（ト誂への合方になり、）一昨日の夜の宵月に、ひれふる山の磯端を、通りかゝれば蘆原の、陰に男と女の聲、聞き耳立つればお尋ね者、菊池の家中雪岡が娘照葉と知つたるゆゑ、褒美の金に有り附きしと蘆原分けて出る折しも、月は隠れて薄闇がり、やらじと留めるを振拂ひ、女を連れて逃げ行きし男が烈しき働きに取逃したる後影、聟が姿に似たるゆゑ家へ戻つて窺へば、戸棚のうちへ匿ふ様子、さては聟にてあつたるか、是れ幸ひと情をかけ足を留めさせ其上で、訴人をせうと思ふところへ、代官所よりの急使ひ、是非なく行きし其跡にて、照葉を連れて落ちしと聞き、合圖の太鼓を打鳴らし出口々々を固めさせ、擒にするは騙すに手なしと、嫉妬の念で祟りをうけ、死ぬる娘を役に立て、薄手を負はせたばつかりで、巧みのあるも知らずして一杯喰つた毒藥は、浪六われをおッ殺し、主の娘のこの照葉は、刑部さまへ差上げて、望み次第の褒美を貰ひ、榮耀榮華に暮すのを、草葉の陰から見物しろ。

ト飽くまで憎き雑言を、聞くにこなたは膝行り寄り、

浪六　えゝ、毒氣の廻りに五體もかなはず、大恩うけし御主人の娘を暗々擒にされしか、ちえゝ口惜しや。

〽悔み涙にくれければ、主の娘といふ聲の、耳に通じて倒れ居し、手負の小磯はむつくと起き。（ト小磯心附き起上り、）

小磯　えゝ、そんなら女郎と思ひしは、やつぱり誠のお主でありしか、こちの人堪忍して下さんせいなあ。

〽われに歸れば不思議にも、沖にひらめく不知火の一度に消えて元の海、小磯は支ふる鮫藏を取つて突退け照葉を圍ひ、（ト此うちドロ〳〵になり、黑幕にて不知火を隱す。）

小磯　えゝおいとしいは照葉さま、また恨めしいのは父さん、如何に褒美がほしいとて現在娘の連添ふ男を、親の手づから毒害なす、心は鬼か蛇かいなう。

〽歎く娘に目もかけず、

鯖九　親子の義理を辨へて、今の浮世が渡れるものか。やい鮫藏、われは照葉を葛籠へぶち込み、刑部さまへ連れて行け、聟や娘のかたを附け、褒美はおれが取りに行くぞ。

鮫藏　むゝ、承知しました。さあ女郎め、うしやあがれ。

〽襟上取つて引立つれば、

照葉　えゝ、言はうやうなき惡人どもの、手籠めになるか、口惜しいわいなう。

鮫藏　はて、やかましいわえ。

小磯　あゝこれ、照葉さまは、やらぬ〳〵。

〽支ふる娘がえりがみ取り、鰭九郎は氣をいらち、

鰭九　こりや鮫藏、邪魔せぬうちに。

鮫藏　おゝ合點だ。

〽情容赦もあらなはにて、くる〳〵卷きに葛籠へ打込み、手早く鮫藏しつかと背負ひ、いちあし出して駈り行く、

ト此うち鮫藏照葉を有合ふ繩にて縛り、葛籠へ入れ、これを背負ひ波の音にて、逸散に花道へはひる。

浪六　えゝ、暗々お主を連れ行かれしか、跡追掛けんもこの苦痛、えゝ口惜しいわい〳〵。

小磯　これ、こちの人、氣遣ひさしやんすな、手負ひながらも女の一念、お前に替り跡追掛け、取戻さいで置くべきか。

浪六　出來した女房、少しも早く。

小磯　合點ぢやわいなあ。
〽手負ながらも一念力、跡を慕うて驅行けば、（ト小磯思入あつて逸散に花道へはひる。）
鰭九　えゝ、親にさからふ罰當りめ、うぬ、待ちやあがれ。
〽行かんとするを眞平が、やらじと縋り留むる折柄、鰭九郎が懐ろより、取落したる一卷に。
ト鰭九郎行かうとする、浪六留める、此時鰭九郎系圖の一卷を落す。
浪六　や、此一卷は。
鰭九　それを。
〽取りにかゝるを振拂ふ、はずみに海へ打ち込めば、波にゆられて流れ行く。
ト件の一卷をうしろの波間へ打ちこむ。
やゝゝゝゝ、大事の系圖を。
浪六　はるかの海へ。
鰭九　これもうぬゆゑ、えゝいまくしい。
〽五體叶はぬ眞平が、えりがみ取つて岩角より、海の深みへ打込みて、あと白浪と、
ト鰭九郎浪六を浪手摺の内の切穴へ打ち込み、水煙りパッと立つ、浪の音三重にて、鰭九郎逸散に花

道へ走りはひる。波の音にて藁葺の小屋、蘆原を引いて取る。雨落より一面の浪手摺を出し、よき所へ誂への岩臺を押出す。

〽追うて行く折から空に降出す、雪はさながら八寒地獄、紅蓮の波の逆立ちて、呵責に苦しむ罪人より毒氣に弱る眞平が、一卷を口に啣へ波間を潜りて泳ぎ出で、傍の岩に攀ぢ登り、苦しき息をほつと吐き、

ト浪の音烈しく、切穴より浪煙りパッと立ち、浪六好みの鬘、口に一卷を啣へ、岩臺へ這ひ上り一卷を取り思入あつて、

浪六　ちえゝ殘念や、只一滴の毒藥にて五體叶はず此儘に、底の藻屑と成果つる、此眞平がいまはの際に、不思議に手に入るこの一卷。

〽鰭九郎が所持なせしは、合點行かずと押し開く、後に窺ふ二人の船子。

ト此うち上下の切穴より、以前の船頭二人泳ぎ出で、岩臺の後より這ひ上り、

船頭　その一卷を、こつちへ渡せ。

〽こつちへ渡せと組附くを、苦痛を怺へ眞平が、一度に取つて投げ退けて、

ト兩人かゝるを、浪六双方へ投げのけ、一卷を見て、

浪六　やゝ、こりや龍造寺高頼が、執權、小島典膳が家の系圖。
船頭　何を。
〽有合ふ汐木追取りて、打つて掛るを身を躱し、手早く一卷まき納め、隙を窺ふ兩人を取つて引しき捻ぢ伏せて、（ト浪六兩人を相手に立廻りあつて、）
浪六　扨は先年博多にて、七草宮丁禮が討滅ばされし其折に、討手を脱れ迯げ延びし、小島渦丸といひし海賊は、龍造寺の餘類と聞きしが、すりや鰭九郎にてあつたるか、こりやよいものが手に入つたわい。
船頭　その一卷を。
〽振りほどいて双方より、系圖を目掛け組附くを、毒氣に弱る眞平が、こゝを先途と打合ひ組合ひ。（ト此うち立廻り、文句の切れより、床と下座謡への合方になり、）
浪六　證據になるべき此一卷、菊池家へ差上げて鰭九郎を討取らせ、我が恨みを晴らさんとは思へども翅なければ叶はぬこと。
船頭　それをこつちへ。（ト立廻つて、）
浪六　此上は腹かッさばき、魂魄この土に止まつて系圖を差上げ、照葉さまの御身の上。

船頭　なにを。（トまた立ちかゝる。）

浪六　斯かる例は後醍醐帝隠岐の國へ左遷の折柄、秦の武文といひしもの、主人の爲に命を斷ち、其一念蟹と化し、御息女を救ひしと聞く、それに倣つて命を斷ち、主人を守護なし奉らん。

〽持つたる刀取直し、がばと突立て引き廻せば、船子はすかさず一卷を、奪ひ取るを眞平は弓手に引据ゑ、めてに我が五臟を探り引き出し、虚空へ目がけ投げ附くれば、忽ち一つの陰火となり、怪しの鷗あらはれ出で、船子が持ちし一卷を、啣へて陰火ともろともに、西の方へと飛び行きしは。

ト此うち浪六よろしく腹を切り、臟腑を摑み投げ附ける。是れにてドロ〳〵になり、燒酎火燃え、誂への鷗一卷を啣へ舞ひ上る、浪六これを見てにつたりと思入、兩人組附くを浪六切倒す、兩人左右へ見事に轉る。

〽あやし怖ろし、

ト大ドロ〳〵になり、件の鳥と誂へのビイドロの人魂を向ふ正面へ引いて行く、是れと一時に、浪六喉をつらぬき、岩臺の上より轉り落ちる、よろしくドロ〳〵三重にて、

幕

八幕目大結

阿彌陀寺の場

〔役名――烏山秋作、雪岡の娘照葉、龜谷光行の家臣神崎右内、同玉島左司馬、漁夫鮫藏、侍、捕手
漁夫、鰭九郎娘小磯、漁夫鰭九郎實は海賊小島渦丸、龜谷多門之助光行等。〕

(淺葱幕の場)――本舞臺一面の淺葱幕、雪の積りし松の釣枝、雪おろしにて幕明く。とやはり雪おろしにて、花道より黑四天の捕手○△□◎の四人蓑笠にて出來り、直に平舞臺へ來り、

○ 如何に方々、われ〳〵は此度大友刑部さまの内意を受け、雪岡冬次郎の妹照葉、まつた弟力松が落行く先きを詮議の役。

△ また二つにはお家の執權、烏山豐後が悴秋作、いつぞや宮島試合の折、父豐後に勘當うけ、行方も知れずなりたる所、

□ 跡にて樣子を窺へば、親子兩人言ひ合せにて、蜘蛛の妖術行ふと聞く、大友宗隣が娘若葉姫、かれが行方を詮議の由。

◎ 烏山親子は刑部さま春之助さまに邪魔の奴等、それゆゑ若しも見當らば、討つて捨てよと内意の言附。

○何にもせよ、照葉なり秋作なり搦め取つて差出せば、褒美の金は望み次第、何れも油斷しめさるな。
三人　心得ました。
○　ござらつしやい。
　　トやはり雪おろしにて四人上手へはひる。知せにつき、淺葱幕切つて落す。
一
　（雪幕の場）——本舞臺あとへ下げて一面の雪幕、左右雪の積りし松の立木、同じく釣枝、よろしく道具留る。と、誂への鳴物になり、花道より龜谷多門之助光行、剃立て椿茶筅、野袴ぶつさき羽織大小、簑、塗下駄、竹笠を翳し出來る、跡より漁夫姿の忍びの者一、二一本ざしにて窺ひ出來る、ドロ〳〵になり、本舞臺へ陰火燃ゆると、前幕の鴫舞ひ下りる、是れを見て、
光行　はて、いぶかしやなあ。
一二　光行覺悟。（ト掛るを立廻つて一を踏まへ、二を捻ちあげる。）
光行　今龜谷多門之助光行が、管領職のお許し受け、男體せし元服に、九州順見の嚴命蒙むり、其地の樣子を探らん爲、從者も連れず只一人、來かゝる路次を妨ぐる怪しき二人の曲者に、目先きを

遮ぎる一つの陰火、殊には鷗の何やらん口に啣へて舞ひ下りしは、凶事か吉事か何にもせよ、怪しき此場の振舞ぢやなあ。

ト二を投げ退ける、一跳ねかへし掛るを、ちよつと立廻つて兩人を投げる。本舞臺へ來り陰火へ思入兩人は後より窺ひ來る、光行思入あつて、

なに、菊池が家臣雪岡の若黨、村岡眞平が我れに告ぐる仔細ありとか、むゝ。(ト光行思入。)

兩人　覺悟。

ト兩人左右より切つてかゝるを、光行鐵扇を持ち兩人を相手に立廻りながら、陰火へ思入あつて、物を聞くこなし、

光行　何と、先年父秀行に滅ぼされし異國の海賊、七草官丁禮が餘類の者、この四邊に住居をなすとか。

兩人　うぬ。(ト切つてかゝる。)

光行　されば、かねて光行が家の仇にならんと察し、寄々詮議なす折柄、さては此世を去りし業通にて我が胸中を察し、賊徒の餘類を知らせしよな。

兩人　何を。(ト又立掛るを、聞くことあつて、)

光行　むゝ、鴎の啣へし一巻は、其曲者の系圖とな。どれ、(ト鴎光行の側へ來る、光行一巻を取り、開き見て)こりや龍造寺高頼が家臣、小島典膳が家の系圖、ありや島山の殘黨よな。(ト開くことあつて)なに當國阿彌陀寺にて、その曲者が我が手に逢ふとか、よくぞ知らせし村岡眞平、その功に愛で汝が主なる、雪岡冬次郎が家名相續の儀、某兄へ執成し得させん、迷はず成佛得脫せよ。

トこれにて、ドロ〳〵陰火消え、鴎飛び行く。

兩人　覺悟。

トまた切つて掛るを、鳴物替つて烈しく立廻り、トゞ光行鐵扇を啣へ左右へ一時に當てる、兩人立ちすくみになる、光行鐵扇を持ち、思入あつて、

光行　今眞平が魂魄の、われに告げたる賊徒の餘類、討ち亡ぼす、(ト兩人を扇にて一時にかへす、兩人見事に轉る。)手始めなさん。

ト思入、ばた〳〵になり、下手より、右内左司馬野袴ぶつさき羽織、大小草鞋裝にて出來り、下手へ控へ、

左司　我が君、是れに、

右内　お渡りありしか。

光行　おゝ、左司馬右内か、待兼ねしぞ。

左司　御跡を慕ひ見え隱れに、御供なして參りし所、此あとの松原にて、君の御姿を見失ひ、

右内　そこよ爰よとお尋ね申し、それゆゑにこそ思はぬ遲刻。しかし、我が君には、

人是　是れよりいづくに。

光行　當國阿彌陀寺へ參詣なせば、兩人共に供いたせ。

兩人　畏まつてござります。（ト此時一、二窺ひ寄つて）

一二　光行覺悟。（ト切つて掛るを、左司馬右内兩人隔て、立廻りて一時に引敷き）

兩人　君に刄向ふ、此奴等は、

光行　道を遮ぎる曲者なれば、斬つてしまへ。

兩人　はツ。（ト一、二が脇差を取り見事に斬る、光行見て）

光行　おゝ、賊徒詮議に幸先よし。（ト此うち左司馬右右は刀を捨て手をつかへ）

兩人　然らば、我が君。

光行　兩人來やれ。

兩人　はあ――。

ト時の太鼓になり、行列三重やうの鳴物にて、光行先きに左司馬右内附き上手へはひる。知せに附き正面の雪幕切つて落す。

（阿彌陀寺塔下の場）――本舞臺三間の間高足の二重、三方折返し三尺の本椽附、正面明けたての戸、平瓦葺の屋根附、此端に寶鐸をさげ、總體朱塗り、極彩色鍍金金物附き、總て三重の塔下の體。左右寺めいたる塀、此後松の立木、日覆より同じく釣枝、此道具一面に雪降りの好みよろしく道具納る。と、雪おろしにて禪の勤めになり、日覆より雪降り、ばた／＼にて、花道より前幕の鮫藏葛籠を背負ひ出來る。是れと同じく小磯亂れし髮を襟元にて結びし體、花道にてちよつと立廻り、直に本舞臺へ來り、小磯鮫藏を支へて、

小磯　これ鮫藏、その葛籠を、どうぞわしにたもいなう。

鮫藏　えゝしみしつこい小磯さん、假令何と言はんしても、親方から預つた大金になる此代物、どうして是れが渡されう。

小磯　そりや尤もぢやが、これ鮫藏、この小磯が一生の頼み、手を合せて拜むほどに、どうぞわしにくりやいの、情ぢや、頼むわいなう。

鮫藏　成程それ程までに言はつしやるなら、うんと言ふまいものでもないが、はて、そこが魚心おりや

水心、この鮫藏が首ッたけ惚れぬいて居る小磯さん、お前の頼みもうんといふ其代り、またわしが頼みも、うんといふなら渡しませう。

小磯　さあ、それは。

鮫藏　それがいやなら、こつちもいやだ。（ト行きかゝるを小磯留め、思入あつて）

小磯　あゝこれ鮫藏、氣の短かい、誰もいやぢやと言ひもせぬものを。

鮫藏　そんならわしの言ふことを。

小磯　さあ、それは。

鮫藏　いやなら女を連れて行かうか。

小磯　さあ、それは。

鮫藏　言ふこと聞くか。

小磯　さあ、

鮫藏　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

鮫藏　いやかおうかの、返事をさつしやれ。（ト小磯ぢつと思入あつて）

小磯　こりやもう、是非に及ばぬ。（ト鮫藏の刀へ手をかける、鮫藏留めて、）

鮫藏　こりや、脇差へ手を掛けて、どうするのだ。

小磯　さあ。

鮫藏　この鮫藏を切る氣だな。こりやもう、可愛さ餘つて憎さが百倍、邪魔立てすりやあ生けては置かぬぞ。

小磯　さういふおのれも、生けては置かれぬ。

鮫藏　何を小癪な。

ト振拂つて行き掛る、小磯足へ取附く、これを蹴退ける拍子に、鮫藏どうとなる。小磯有合ふ制札を取つて打つてかゝる。鮫藏葛籠を下へ置き脇差をぬき立廻り、雪おろし三味線入り禪の勤めになり、小磯鮫藏の脇差を打落し、直に取つて切つて掛る。是れにて鮫藏塔へ駈け上る。小磯追掛け行き、立廻りあつて、トゞ鮫藏扉を開き内へ逃げ込む。小磯追掛けはひる。と、時の鐘雪おろしばた／＼になり下手より、覆面頭巾、達附、大小蓑笠にて姿を隱せし者出來る、跡より以前の捕手窺ひ出る、件の武士葛籠より出掛りし振袖へ目を附け、思入あつて立ちかゝる、此時捕手窺ひ寄り、

捕手　捕つた。

ト打つてかゝるを左右へ投げ退け、裏向にて塔の上を見上げてきつと見得、知せに附き、いつもの山門迫上げの鳴物になり、捕手を相手に立廻りながら、此道具ゆつくりと廻る。

(塔上の場)――本舞臺二間常足、三重 塔の二重目、三方折廻し、前の分を一間鍍金金物附き、折返しの高欄、上下瓦家根、雨落より霞をせり出し、爰に小磯鮫藏立廻りの見得にて道具留る。と、雪おろし誂への鳴物になり、雪しきりに降る、兩人立廻りよろしくあつて、トゞ鮫藏叶はず高欄を越え飛び下りし思入にてせり穴へ飛込む。小磯同じく高欄を越え、せり穴へ飛込む。此時ばた〳〵になり、正面の扉を蹴開き、前幕の鰭九郎出で、高欄へ足を踏みかけ、きつと見おろし。

鰭九 えゝ、親の邪魔する憎い女郎め、息の根止めてくれんと思ひ、駈けあがつたる此三重、鮫藏諸共二重めより遙かの下へ飛び下りて、體は微塵に碎けしならん、是れで足手まとひはない、刑部さまへ落人の照葉を伴ひ褒美の金、雪岡一家の枝葉を絕ち、七草官丁禮が無念に死したる魂魄の今ぞ恨みを晴らしてくれん。あら、心地よや、嬉しやなあ。

ト よろしく思入、また知せに附き、迫上げの鳴物になり、此道具廻る。

(元の塔下の場)――本舞臺元の塔の下の道具に戻る。と、爰に小磯鮫藏の脇腹へ、刀を突込みゐる

り居る見得、鮫藏苦しみ、

鮫藏　え、女と侮り、不覺を取りしか口惜しい。

ト小磯刀をぬく、鮫藏バツタリ倒れる、直に乘掛り止めを刺す、鮫藏アツと苦しむ、小磯これにてホツと思入あつて、

小磯　あゝ有難や、神や佛のお助けにて、塔の上より飛び下りしに、どこに一つの怪我もなう、殊には邪魔なこの鮫藏、しとめし上は照葉さまを、少しも早う伴うて、何れへなりとも落延びん。おゝさうぢや。（ト葛籠へ立掛る、此時扉を開き、鰭九郎つか〳〵と出て小磯を引き退ける。）や、とゝさんか。

鰭九　娘、わりやあ命があつたか。（トびつくり思入。）

小磯　もし、此葛籠のうちの照葉さまは、どうぞわたしに下さんせ。

鰭九　えゝ馬鹿なことを吐かしやあがれ、大金になる此の女、われに遣つてたまるものか、さあ、そこどけ、どけ〳〵、えゝ、どきやあがれ。（ト小磯を蹴倒し。）是れから褒美を、貰はにやあならぬ。

小磯　いえ〳〵、何と言はしやんしても、是ればつかりは渡されぬわいなあ。

鰭九　うぬ、さうぬかしやあ命がねえぞ。

小磯　さあ、命がなくばいざ知らず、息あるうちは遣られぬ〳〵、遣られぬわいなあ。

鰭九　え丶面倒な、放しやあがれ。（ト小磯の留めるを振拂ひ脾腹を蹴る、是れにて小磯うんといつて倒れる。鰭九郎是れを見て）此間に早く。（ト以前の葛籠の蓋を取り、引き出さうと手を差入れる、內よりその手をきつと取る。鰭九郎きつと思入。此時葛籠四方へ開き、內に秋作、前幕の裝へ照葉の振袖を着て居る、鰭九郎の手を拂ひきつと見得、誂への合方になる。）やあ、わりや照葉と思ひの外。

秋作　鳥山秋作照忠なるわ。

鰭九　やゝゝゝ、どうしてわれが此中へ。

秋作　最前こゝまで大友刑部が、下知をうけたる捕手の奴ばら、照葉を入れしこの葛籠を、奪ひ行かんとなしたる折柄、思はず此場へ來かゝりて、照葉を救ひ、猶も汝が惡逆を、見出さん爲に入替り葛籠に忍びし此秋作、何と膽が潰れたか。

鰭九　おゝ十が九つうま／＼と、行きしを娘が邪魔せしばつかり、褒美の金を失ひしか、此腹いせは秋作め、うぬが首を刑部さまへ持つて行き、褒美の金にせにやならぬ、覺悟極めてそれへ直れ。

秋作　むゝ、はゝゝゝゝ、身の上知らぬ其雜言、此兩腕の無くば知らず、わい等の手に合ふ秋作ならず、馬鹿なことを。

鰭九　小癪なわッぱめ、いで、其首を落してくれん。

秋作　おゝ、見事某が首とるか。

鰭九　おんでもないこと。（ト拔きかけるを秋作留めて、）

秋作　何を、（ト誂への鳴物にて、ちよつと立廻りあつて、鰭九郎錦の袱紗に包みし古城の繪圖を落す、秋作手早く取りあげる、是れにて袱紗取れ、繪圖を見て、）何と、「島山古城の繪圖面、」是れは。

鰭九　南無三。（ト鰭九郎繪圖を取り、懐中する。）

秋作　むゝ、漁夫に用なき古城の繪圖面、所持なす上からは、汝こそは正しく本名ある曲者、さあ其本名を名乘つてしまへ。

鰭九　いゝや名乘る名は持たねえ、古城の繪圖と見たのは僻目、こりやお海上案内の、淺瀬を記した漁夫の書物、呼子ヶ浦に隱れない、鰭九郎といふ立親仁だわ。

秋作　すりや、名乘る名は持たぬとな。

鰭九　知れたことだわ。

秋作　むゝ、知らぬとあらば漁夫にして、其海上の地理案内、此場に於て身共に見するか。

鰭九　さあ、それは。

秋作　但し其身の、本名名乘るか。

鰭九 さあ、
秋作 繪圖を見するか。
鰭九 さあ、
秋作 さあ、
兩人 さあ〳〵。
秋作 なゝ何と。
鰭九 むゝ。(トつかへる。此時以前の光行等出で、)
光行 さあ、最早如何ほど爭ふとも、遁れぬ證據はこの一卷、見覺えありや小島渦丸。
ト以前の系圖の一卷を見せる。
鰭九 やゝ、其一卷は家の系圖、どうしてそれを。
光行 ほゝお、最前是れへ參る道にて、村岡眞平といへるものゝ魂魄中有に迷ひ居て、汝が素性を委しく告げ、我れに與へし系圖の一卷。
右内
左司 何と遁れはあるまいがな。
鰭九 やゝゝゝゝ。(トびつくりする、是れにて小磯心附き、)

小磯　えゝ、そんなら夫眞平どのゝ、魂魄中有に迷ひ居て、恨み重なるとゝさんの、素性を委しく話せしか。

左司　おゝ、如何にも異國の海賊、七草官が一味なりし汝こそ、

右内　誠は龍造寺高頼が、餘類なりと委しき告げ、

秋作　扨こそ所持なす古城の繪圖面、最早脱れぬ鰭九郎。

光行　其の本名を、

皆々　名乘つたく。

鰭九　ちえゝ口惜しや、斯くなる上は包み藏すは卑怯の至り、如何にも、我こそは肥前の國島山の城主龍造寺高賴が家臣、小島典膳が一子渦丸と言ひしもの、思ひ出せば其昔島山落城の折柄は、我いまだ八歲にて、乳母諸共に彼處を落延び、長門の國にて人と成り、七草官丁禮に從ひ强盜なせしも二十年先き、彼れ博多にて亡ぶる折、運よく討手の船を切拔け、父が舊地の懷かしく此肥前へ再び歸り、住家となせど誰あつて、我を賊徒と白浪の、よせて歸らぬ身の年波、今日まで露顯せざりしに、今ぞ天命盡きたるか。えゝ、殘念やなあ。

秋作　扨こそ小島典膳が、餘類のものにて、

皆々　有りしよなあ。

鰭九　斯く名乘る上からは、片ッ端から死人の山だ、觀念なせ。

皆々　何を小癪な。

光行　それ、ものども。

六人　はッ、動くまいぞ。

ト侍六人左右よりばら／＼と矢衾にて取卷く、小磯つか／＼と行き、鰭九郎を圍ひ、我が身を楯に思入あつて、

小磯　あゝもし、まあ／＼待つて下さりませ、惡人なれど親は親、今殺さるゝを子の身として、何と見捨てゝ居られませう、どうぞわたしを替りに殺し、とゝさんの命をお助けなされて下さりませ。もし、拜みます、拜みますわいなあ。（ト小磯皆々を拜み廻り、鰭九郎是れにてよろしく思入あつて、刀を取直し腹へ突立てる、小磯びつくりして）やゝゝゝ、とゝさんには、こりや何ゆゑに、腹切らしやんすぞいなう。

ト縋り泣く、竹笛入りの合方になり、

鰭九　あゝ心に連れて身は賤しと、世の諺も今ぞ知る、九州に猛威をふるひし小島典膳が嫡子と生れ

無念に滅びし君父の仇を、今日の今まで餘所になし、此の日本に生れながら異國の賊に一味なし強慾非道の惡事を行ひ、剩へ賊徒の張本丁禮が仇を報はんと、雪岡一家を附けねらひ、娘の泣きも顧せず、聟の眞平を毒害なし、緣に繫がる主人の娘照葉を捉へ褒美を取らんと、極重惡人い此親を親と思うて今娘が、命にかはる孝行に、先非を悔む鰭九郎、身の言譯のこの切腹、大罪人の娘ながら生れ勝つた孝行者、何卒かれが命をば、お助け下され光行公、これぞ一つの御願ひ。これ娘、われも共々お願ひ申せ。

小磯　いえ／＼、夫に別れ親に別れ、何樂みに存へませう、照葉さまに恙なければ、此世に思ひ置くことなし、わたしも共に死出三途。

ト小磯死なうとする、ばた／＼にて、下手より前幕の照葉、下着裝にて出來り、小磯を留め、

照葉　これ小磯、早まりやんな、まあ／＼待つてたもいなう。（ト袖にて白刃を押へる。）

小磯　いえ／＼、放して下さりませ。

秋作　こりや、死する命を存へて、親夫の菩提の爲、其身は尼とも姿を替へ、是れなる照葉を伴うて、鷲の蹴爪に掛けられて、行方知れざる力松が、生死を見屆け、忠義を立てよ。

小磯　すりや、死ぬるにも死なれぬかいなあ。

照葉　其歎きは尤もながら、そなたばかりか此わしも、親兄弟には死別れ、又秋作さまにはお望みあつて、諸國をお廻りなさるれば、暫しのうちの生別れ、世に便りない此照葉、どうぞ力になつてたもいなう。

小磯　生き存へる上からは、夫眞平に成り替り、あなたの御先途見屆けませう、必ずお案じなされますな。

照葉　えゝ、嬉しいわいなう。

鰭九　すりや、娘が命は、お助け下されんとな。

光行　おゝ、汝が健氣な切腹に、罪はそれまで、咎はない。

鰭九　えゝ忝けない是れにて思ひ置くことなし、娘が命お助けありし、御恩報じは此の繪圖面、いざお取次ぎ下されい。（ト懐より以前の繪圖を出し、左司馬に渡す、左司馬開き光行に見せ、）

左司　我が君、御覽なさりませ。

光行　むゝ、龍造寺が居城の繪圖面。

鰭九　それこそ我が父典膳が、系圖と共に讓りし繪圖面、萬に一つも行末に、用ひたまはん事あらば、死しての後の何より悦び。

秋作　實に傳へ聞く島山は、九州無双の要害なりとか、もしや謀叛の族もありて、かしこに籠ることあらば。

光行　われ先陣を乞ひうけて、此繪圖面にて地理を質し、比類なき手柄をなさん。

左司　其時こそは龍造寺の、家名を君に願ひ上げ、

右内　菊池の家の幕下となさん。

鰭九　ちえゝ忝けない、最早近づく此身の知死期、秋作どのには介錯賴む。

秋作　おゝ、いふにや及ぶ。（ト秋作立掛り、）さりながら、情はなさけ仇は仇。

光行　異國の賊徒小島渦丸。

左司
右内　君の御手に討ち取つたり。

鰭九　今ぞ此身の、

小磯
照葉　いまはの名殘。

鰭九　あこれ。（ト照葉を押へ秋作に向ひ、）聲かくるまで、
ト片足踏出し、刀へ諸手を掛け、秋作は刀を振りあげる、一時に木の頭、

介錯無用。

ト鰭九郎引廻す、小磯ハツと泣き伏す。皆々よろしく、引張りの見得。カケリにて幕引き附ける。幕の内にて、

秋作　えい。（ト首を打ちし音、知せに附き打込み）

初日　白縫譚（終り）

寶晉齋の秀吟に
梅が香や
花子の家も
覗かるゝ
此句を種に二番目へ
書綴りたる狂言は
昔噺の根なし事

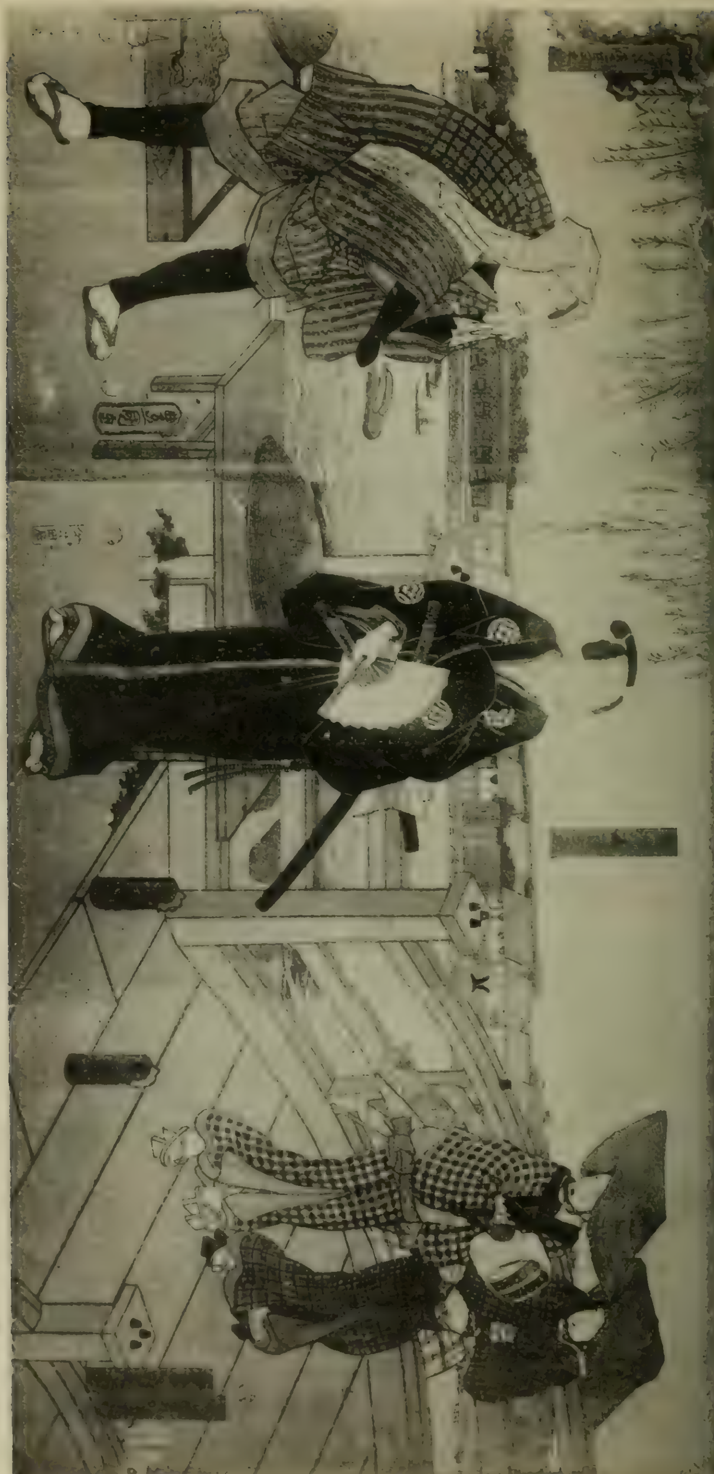
夢結蝶鳥追

、「雪駄直し長五郎」は安政三年三月、市村座に於て書き卸された、作者四十一歳の時である。此の作は、四世坂東彦三郎が倅の竹三郎に五世彦三郎を譲り、自らは坂東龜藏と改名した時の興行に際して、二番目世話狂言として作し「大出來大當り」との評を得た。吾妻橋でおこよを源之丞が見初めるの場は、目の覺めるばかりに美しく、或は多田の藥師の石置場で長五郎と半次とが主膳を殺害する、殺しの場などが評判であつた。が、尙此の作は作者に取つて特に記念すべきもので、作者は此の年以來河原崎座より轉じて市村座の立作者となり、其後十年間世話物作者としての手腕を揮ふに至る、その第一作であり、且つ安政の大震後、最初に江戸の舞臺に現はれた新作だからである。前版には省略した「お長隱家」の一場を增補し得たことを特記しておきたい。

書卸しの時の役割は、坂東龜藏(雪駄直し長五郎)、坂東彦三郎(阿古木源之丞)、尾上菊五郎(女太夫おこよ、熊坂お長、甚兵衞娘お關)、關三十郎(梶井主膳)、河原崎權十郎(山崎屋與五郎)、淺尾與六(小手柄半次、駕籠屋甚兵衞)、市川新升(盜賊野手の三次)、中村歌女之丞(藤屋吾妻、山崎屋娘おてる)、關歌助(尼妙貞)、坂東又太郎(小家頭喜六、荒川三左右衞門)、坂東村右衞門(山崎屋淨閑、家主市郎兵衞)、松本國五郎(山崎屋の番頭權九郎)等であつた。——挿畫にしたのは龜井戶豐國筆の錦繪と、大正八年十二月市村座上演の際の寫眞で、六代目菊五郎の長五郎に坂東三津五郎の源之丞である。

大正十三年七月

編者誌す



夢結蝶鳥追（雪駄直し長五郎――五幕）

序幕

鎌倉花水橋の場

腰越庚申の場

笠目谷小屋の場

〔役名――雪駄直し長五郎、人相見梶井主膳、阿古木源之丞、鳶の者下駄の市、女太夫おとら、山崎屋與五郎、三原傳藏、小屋頭喜六、山崎屋手代權九郎、判人佐渡七、中間可助、同角助、猿廻し佐兵衞、非人とつこの胴六、同烏の羽藏、同ごもくのごみ太夫、同大森しゆろ八、同烏田ふり七。雇ひかかアお鍋、女太夫おこよ、藤屋吾妻、松葉屋女房お高、山崎屋丁稚久太等。〕

（花水橋の場）――本舞臺三間上手より正面へかけ、橋の登り口畫心に飾り、向ふ稻瀬川の遠見、浪手摺、上の方落咄しの建看板、開帳札、柳の立木、日覆より釣枝、下の方葭簀張の出茶屋、田中屋といふ掛行燈、よき所に臺を据ゑ、吹替の雪駄直し古き笠を冠り仕事をして居る、出茶屋の床几に○△□の町人の仕出三人、一、二の素見の仕出二人履物を直させて居る。總て水水橋の體、鳥追唄通り神

樂にて幕明く。

○　何と、今日は好い天氣ぢやあないか。

△　さうさ、よつぽど暖かになつたから、もう藝者のはひつた船が出るの。

□　向島へもよつぽど人が出る、今からちつとぶらついてはどうだらう。

○　それもいゝが腹がきたやうだ、川升へ行つて一杯やらうぢやねえか。

ト此内直しは履物を直して出す。

おい、こりやあお世話だ、大丈夫かの。

△　おれがのは、まだ切れはしないが、ついでに直してくんねえ。

□　駒形の川升は大層流行るの、山の宿へも出店が出たぜ。

○　あれは、菊屋橋に居たのがこつちへ來たのさ。

△　川升より花川戸の横丁へ、揚屋町の玉屋の長吉が料理屋を出したから、行つて見ようぢやあねえか。

□　それは燈臺下暗し、さつぱり知らねえ、近くツてそこがよからう。

ト此内直しは下駄を拵へて出す。

二 おや、もう出來たか。それ、錢をとんねえ。

○ 假宅の晝見世をひやかして、三町目へ行つて見よう。

△ 大層はひるさうだから、立見は出來めえ。

□ まあ、ぶら〳〵行つて見ようぢやあねえか。

△ どれこつちも出掛けよう、茶代をとんなせえよ。

○ さあ行かう〳〵。

ト右鳴物にて仕出下手へはひる。吹替の雪駄直し道具を片附け、出來上りし履物を二三足持ち下手へはひる。通り神樂流行唄にて、花道より、仲の町の藝者吾妻餘所行きの裝、お高茶屋の女房の裝、喜助供にて附き出て、舞臺へ來り、

お高 もし吾妻さん、與五郎さんが言はしやんした、花水橋の川中屋はこゝでござんす。

吾妻 さうでござんすか、ぬしは見えなさんしたか、聞いて下さんせ。

お高 あい〳〵。もし、こちらへ明神下の山崎屋の與五郎樣が、お出での筈でござんすが、まだお出でなさんせぬかいな。(ト茶見世より茶屋男出て、)

喜助 いえ、まだお出でなされませぬが、追附けお出でゞござりませう。まあお掛けなされませ。

お高　そんなら吾妻さん、こゝへ掛けなさんせ。

吾妻　あいあい。（ト兩人床几へ掛ける。茶屋男茶を出す。）これ喜助どん、お前一服呑んで、與五郎さんがお出でなさんせうから、廣小路まで行つて見て來て下さんせ。

喜助　はいはい、畏まりました。

ト喜助上の方へはひる。右の鳴物にて下手より與五郎、羽織着流し町人の裝、久太丁稚包みを背負ひ附き出で來り、

與五　そこに居るは、吾妻ではないか。（ト吾妻與五郎を見て。）

吾妻　お前は與五郎さん、よう來て下さんしたな。

お高　ほんに若旦那、さつきにからお待ち申しましたわいな。

與五　松葉屋のお高さん、けふは御苦勞でござります。これ久太、わしは觀音さまへお參り申して歸る程に、先へ歸つてお靜にさう言うたがよい。

久太　はいはい、若旦那また吉原かえ。

與五　無駄口利かずと、早く行きや。

久太　はいはい。（ト上の方へはひる。與五郎床几へ掛ける。）

吾妻　若し與五郎さん、今日は向島へ行く程に早う來やと言はしやんして、今までどこへ行つてござんした、大かた餘所の女中さんの所へ、行て居やしやんしたのであらうぞえ。
與五　何のそのやうなことがあらう、今日お出入りの千葉のお屋敷へ出て、遲うなつたのぢやわいな。
吾妻　ほんにお屋敷といへば、其の御家中の三原傳藏さんが、身請けするというて、うるさうてならぬわいな。
お高　それ故吾妻さんが、大抵氣を揉んでござんす程に、早うあなたの方へ身請けの御相談を、なされてお上げなされませ。
與五　わしもさう思つて居れど、そなた衆も知つての通り、元わしは千葉の家中橋本次郎太夫樣の悴にて、幼い時に山崎屋へ養子の身の上、親父さま與次兵衞樣は世間の義理ゆゑ、表向きわしに家督を讓り、法體して渾閑と名を改め隱居といふは名ばかり、わしに越度があらば追出し、妹のおてるに持參の附く聟を取らうといふ無慈悲の人ゆゑ、今に身代を渡されねば金の出入りは自由ならず、今日も千葉樣から呉服屋の代金百兩受取つて持つて居れど、わしが儘にはならぬゆゑ、身請けの金に當惑して居るわいの。
吾妻　そのおてるさんとお前とは、小さい時からの許嫁、近いうちに祝言をなさんすとのこと、それゆ

る金の出來ぬを幸ひに、身請けをせぬのでござんせう。

與五　はて、そなたも疑ひ深い、義理ある親の言附けなれば、表向き祝言はするけれど、何のおしるを女房にしてよいものかいの。

吾妻　いえ〳〵、祝言なさんすれば、世間晴れての夫婦なれば、どうでわたしは捨てられもの、お前に別れ片時も、生きて居る氣はござんせぬぞえ。

與五　案じやんな、起請まで取り交して居る二人が仲、假令どのやうなことがあつても、替る心はないわいの。

吾妻　そのやうに言はしやんしても、殿御の心は秋の空、どうして油斷がならうぞいな。

お高　お前の氣を揉ましやんすは尤もぢやが、與五郎さんに限りそんな事のないはわたしが證人。したが、身請けの手附けなりとも、早う渡したうござんすなあ。

與五　それゆゑわしもいろ〳〵に、金の工面して居る程に、氣を揉まぬがよいわいの。

ト　ばた〳〵鳥追通り神樂になり、花道より梶井主膳、總髮少し更けたるさんするなるこしらへ、大小にて羽織着流し、手代の權九郎を引立て出來る。

權九　もし〳〵、どうぞ御了簡なされませ。

主膳　いや／＼、了簡ならぬ、向うへ參れ／＼。

ト右鳴物にて兩人舞臺へ來て上手へ來る　與五郎見て、

與五　これ／＼、そなたは權九郎ではないか。（ト是れにて權九郎見て、）

權九　おゝお前樣は若旦那、よい所へおいでなされました。

與五　見ればお侍に引立てられ、こりやどうして譯ぢやぞいの。

權九　いやも、近年にない不調法で、此御浪人に無禮をいたして此通り、どうぞお詫をなされて下さりませ。

與五　そりやどのやうなことか知らねど、わしがお詫びをして見ようわいの。（ト與五郎主膳の側へ來て、）申し御浪人樣、此者は私が召使ひでござります、樣子は何か存じませぬが、あなた樣へ對し御無禮をいたしましたとてお腹立の體、何卒私にお免じ下されまして、御了簡下さりませ。

主膳　すりや何とおいやる、お手前は此者の主人ぢやと申すか。

與五　左樣でござります。

主膳　惡い召使ひを持つて氣の毒千萬、委細の譯を申し聞かす、とつくりと聞かつしやい。（ト合方になり、主膳床几へかけろ、）身共は梶井主膳といふ者、見らるゝ通り浪人の世渡りに、向うの四つ辻に

て賣卜をいたし居る所、此者通り掛り、身の上を見てくれいと申すゆゑ、判斷違はせし所相違いたせしとて筮、天眼鏡は元より、恐れ多くも土御門公より拜領なせし易道免許の御書を土足に掛けたる不屆き奴、浪人なせど帶刀いたせば、此儘には差置かれず、此所に於て眞二つにいたす、覺悟極めてそれへ直れ。（ト刀の柄へ手をかける、權九郎びつくりして）

權九　あゝもし〳〵、それは餘りお情ない、全く酒興の上の了簡違ひ、大事にいたせばまだ一生ある命、斷ち賣りの鮭か鱈ではあるまいし、眞二つにされてはなりませぬ、若し若旦那どうぞお詫〳〵。

與五　樣子を聞けば一方ならぬ不調法、わしの心一杯お詫びする程に、落附いて居や。

權九　何分お願ひ申します。是れでござります〳〵。（ト手を合せ拜む。）

與五　申し御浪人樣、委細の樣子承はりますれば、申し上げやうもない不屆至極の憎い奴でござりますが、何卒あなた樣のお慈悲をもちまして、お助け下さりまするやう、偏にお願ひ申し上げます。

主膳　其許がそれ程詫びいたすを、聞き屆けぬではないが、此儘には濟まされぬ、その譯は只今も申す通り、土御門公より拜領の免許を損じては、明日より賣卜渡世が相成らぬ、それゆゑ京都表へ斷くの次第を申し上げ、此者の命乞ひをいたして、又候拜領いたすには、それ〴〵附屆けの金子がなくてはならぬが、其金子は承知でござらうな。

與五　その儀は召使ひの不調法、お詫びいたしますからは、私が身に叶ひます程ならば。
主膳　いや、何も格別な金子ではないて。
與五　して其金子は、何程でござります。
主膳　その金高は百兩ぢや。
與五　え、左樣なら金子は百兩でござりますか。
主膳　それ得心ならば、勘辨いたしくれう。（ト與五郎當惑の思入。）
權九　もし〳〵若旦那々々、人間の命は萬物の寶、百兩位には替られませぬ。どうぞ偏にお助け〳〵。
吾妻　もうじ與五郎さん、可哀さうな權九郎さん、どうぞ仕樣はないことかいな。
與五　わしも助けたいは山々なれど、大枚百兩といふ金、千葉樣から受取つた、百兩は爰に持つては居れど、手籠めに遣うては親父樣へ言譯が。
權九　若旦那、お前樣千葉樣から百兩受取つて、持つておいでなされますか。
與五　爰にしつかり持つて居るわいの。
權九　じめた。（ト大きく言ふ。）
與五　や。

權九　いえさ、胴卷でしめてお出でなさるならば、どうぞお慈悲に其の金で。
與五　それぢやと言うて、親父樣へ。
權九　成程一徹な親旦那樣、御尤もでござります、左樣ならば其の金子を私に、暫くの間お貸しなされて下さりませ。
與五　でも大枚な百兩の金。
權九　若し若旦那、私も大家の山崎屋のお店を預かる番頭の權九郎でござります、百兩や二百兩の金であなたに難儀は掛けませぬ、どうぞお貸しなされて下さりませ。
與五　それほどに言やること、親父樣へは受取らぬというて、貸してやりませう。
權九　左樣なら、お貸しなされて下さりますか、えゝ有難うござります。
與五　念の爲めぢやによつて、慥な一札を書いてたも。
權九　畏まりました、暫くお待ち下さりませ。
ト權九郎矢立を出し證文を書く。鳥追通り神樂になり、下手より佐渡七羽織着流し股引にて出で、與五郎を見て、
佐渡　そこにおいでなさるは、山崎屋の若旦那ぢやござりませぬか。

與五　そなたは判人の佐渡七、どこへ行きやつた。

佐渡　どこへぢやあござりませぬ、お前さんを今朝から搜し歩きました。よい所でお目に掛りました、外の事ぢやあござりませぬが、吾妻さんの身請けのこと、此間からお前さまが身請けするとばかり、今に手附もお渡しなさらないが、外から身請けの相談がござりますが、お前さまが先口ゆゑ、御挨拶を聞き切つて來いと申しましたが、どうなすつて下さいます。

與五　成程此間から金の都合に掛つて居れば、是非手附を渡します程に、どうぞ二三日の所を。

佐渡　いえ二三日所ぢやござりませぬ、先方は今夜手附を渡すと申しますこと、只今出來ずはお氣の毒ながらお斷り申します。

お高　若し佐渡七さん、今與五郎さんも氣の揉める事がござんす。どうぞ待つて上げて下さんせいな。

佐渡　どうして〳〵、わたしが待つても、親方が不承知だから仕方がないのさ。

ト此時權九郎證文を書いて、

權九　若旦那、證文が出來ました「一、金百兩也、右は我等據なく命を買ひ求め候金子に差支へ、借用いたし候處實正に御座候、返濟の儀は其許樣御入用次第早速返金申すべく候、念の爲仍て如件、年號月日、山崎屋與五郎殿、借主山崎屋手代權九郎判」これでよろしうござりますか。

與五　それでよい、さうして此金はいつまでに戻しやる。（ト證文を取る。）
權九　それは證文通り何時なりとも、御入用次第。
與五　そんなら今宵戻してたも。
權九　それはあんまり性急、せめて二三日お貸しなされませ。
主膳　こりや〳〵與五郎とやら、いつまで待たせて置く。不得心ならあの者を、眞二つに。
權九　あもし、只今相談最中でござります。もし若旦那々々、早く金をお貸しなされませ。
與五　そんなら明後日、間違ひなく戻してたも。（ト胴巻より百兩出す。）
權九　はい〳〵慥に借用いたしました、直にあなたから御浪人樣へ、お上げなされて下さりませ。
　　ト與五郎百兩を主膳の前へ出し、
與五　主膳樣、權九郎のお詫金百兩、何卒是れにて彼が一命、お助けなされて下さりませ。
　　ト主膳百兩を受取り、
主膳　承知いたした、百兩は千葉の封金改めるに及ばず、慥に受取り申した。はて命冥加な町人だやな。
與五　これ〳〵佐渡七、此通り權九郎に百兩貸して明後日までに戻す約束、どうぞこなたの顏で、明後日まで親方の前を賴むわいの。

佐渡　さうおつしやると私が實に困ります、左様ならば、今權九郎さんからお取りなすつた證文を、お預り申して親方へ、言ひ延ばして置きませう。

與五　成程尤もぢやが、此一通がわしが手に無い時は、若し親父様に此事が。

佐渡　それが御不承知なら、私の方も不承知でござります。（ト主膳是れを聞き思入あつて、）

主膳　こりや佐渡七とやら、是れへ來やれ。

佐渡　へい／＼、何ぞ御用でござりますか。（ト佐渡七こちらへ來る、）

主膳　最前から是れで承はつたが、御身は大磯の廓で奉公人の肝煎渡世いたす男さうなが、あれに居る藝者吾妻が身請け、身共にいたさせてくりやれ。（ト是れにて皆々びつくり思入、）

佐渡　ついぞ是れまで、お馴染でもないあなたが、吾妻さんのお身請けを。

主膳　不審に思ふも理り、身請けの客といふは外にある。

與五　さうして吾妻が、身請けの客とおつしやるは。

ト此時上手より三原傳藏、羽織着流し大小にて窺ひ居て、

傳藏　身請けの客は、身共でござる。（ト合方になり、前へ出る。皆々見て、）

吾妻　や、お前は。

お高　あなたは、三原傳藏樣。

權九　思ひがけない、此所へ。

傳藏　山崎屋與五郎、權九郎も是れに居つたか、かね〴〵吾妻に執心の傳藏、身請けいたして歸り、妻にいたす。

與五　そんなら主膳樣が、身請けするとおつしやつたは。

主膳　三原氏とは昵懇の身共、それゆゑ身請けの取持ちいたす、身請けの高は二百兩と聞く、手附け金百兩只今相渡し、後金は一兩日中、さあ改めて受取りやれ。（ト主膳件の金を出す。）

與五　そんなら其百兩で、はてなあ。（ト思入。）

佐渡　いえもう、私はどなたでもお金の早いがよろしうございます。若し與五郎樣、お聞きの通りでござりますから、お前樣の方はお斷り申します。もし、權九さん、矢立をちよつと貸して下さいまし。

ト權九郎より矢立を借り證文を書く。

吾妻　もし與五郎さん、傳藏さんの方へ行けば、わたしや生きては居ぬぞえ。

與五　はて今身請けが濟むといふではなし、わしも今宵の内に手附の金を渡す程に、氣遣ひせぬがよい

わいの。（ト此内佐渡七證文を書き、主膳の前へ出し、）

佐渡　手附金百兩の受取、お名宛は傳藏樣でよろしうござりますか。

主膳　これでよし、さあ封金百兩受取りやれ。（ト證文を取り、百兩渡す。）

佐渡　へい／＼百兩金、慥に受取りました。（ト佐渡七財布へ入れ、懐へ入れる。）

傳藏　これ吾妻、跡は渡さずとも手附が濟めば、今日より傳藏が宿の妻も同然、身共と一緒に、さあ來やれ。（ト吾妻の手を取る。）

吾妻　おいて下さんせ、假令黄金の山を積み體は身請けされるとも、心が得心せぬからは、お前の儘にはならぬわいな。

傳藏　いや如何やうに申すとも、後金を渡し身請けいたせば傳藏が心の儘、否といはうが應といはうが、我が思ひを晴らさにやおかぬ、さう心得て身共と一緒に。

吾妻　いえ／＼、わたしが體は、今日一日は與五郎さんの揚げでござんす。

お高　わたしが預つた吾妻さん、あなたの自由にはなりませぬわいな。

傳藏　むゝ、つべこべと喧しい、是非とも身共が連れ參る。（ト立ちかゝる。）

主膳　これはしたり三原氏、身請けの濟まぬ其うちは、彼等が氣儘も是非がござらぬ、捨て置いて手附

の濟んだ祝ひ酒、小倉庵へでも行かうではござらぬか。

傳藏　そりや何方へなりとも參らうが、吾妻を同道いたさねば。

主膳　はて、野暮は當時は流行りませぬて。

ト通り神樂にて、橋の向うより角助、可助紺看板の中間にて出で、與五郎を見て、

角助　これ可助見ろ、さつき向う河岸でおいら達に突ツかゝりやあがつた、二才野郎が爰に居る。

可助　ほんにさうだ、ろくに挨拶もせず逃げてうしやあがつて、爰で女とむたいいて附いてけつかる。

兩人　さあ、一緒に屋敷へうしやあがれ。（ト與五郎へ立ちかゝる。）

與五　あこれ、待つて下されい、ついぞ見たこともない中間衆、向う河岸で突當つたの何のと、こつちはさつぱり覺えのないこと、無體なことをさつしやるな。

角助　なに、覺えがねえ、此野郎は寐とぼけて居るやうだ。

可助　目の覺めるやう、おいら達が。

兩人　性根を附けてやらうかえ。（ト與五郎へ立ちかゝる、主膳留めて、）

主膳　こりや〳〵、何か樣子は知らねども、靜に申さば事は分かる、手荒くいたすな〳〵。

角助　なに手荒くするな、うぬらが知つたことぢやあねえ。

可助 片隅へすッ込んで見物しろ。

兩人 さあ、野郎め、うしやあがれ。

　ト通り神樂になり、兩人與五郎へかゝる。主膳支へる振にて、與五郎の懐の紙入を取つて懐中する仕組の立廻り、兩人主膳へかゝるを、ちよつと立廻つて兩人を投げる。兩人起上り、

角助 あゝ痛え〳〵、うぬはどこの天狗の面か、ひよつとこか知らねえが。

可助 譯も言はずに、何でおらを投げたのだ。

主膳 おゝ、投げてもいゝ、打殺しても大事ないわ。

兩人 そりや又何で。

主膳 何でとは舌長な奴、若い男に無法な手籠め、見るに忍びず支へたる身共に對し慮外な匹夫め、手向ひいたさば手は見せぬぞ。

角助 あゝもし〳〵、つい時の張り合ひで、

可助 あなたに慮外いたしました。

兩人 御免なされませ〳〵。

主膳 詫びるとあらば許しくれる。以後はきつと嗜み居らう。

角助　はい〳〵、嗜みます〳〵。（ト言ひながら兩人橋の上へ行き、）えゝ忌えましい、折角呑代にしようと思つたを。

可助　いらざる奴がうせたばかり、とう〳〵仕事はぐれ蛤。

兩人　よく味噌を附けさせやあがつたな。

主膳　どういたした。

角助　いやさ、蛤鍋でやつて來よう。（ト通り神樂にて兩人花道へはひろ。）

吾妻　ほんにまあ、どうなる事かと存じましたに、

與五　危い難儀をお助け下されまして、有難うござります。

主膳　何の〳〵、其禮には及ばぬこと。さあ三原氏、參らうではござらぬか。

傳藏　參るは參るが、吾妻をこゝへ殘しては。

主膳　はてさて、しつこい、まあござれと申すに。

ト鳥追逐り神樂にて、主膳傳藏を連れ、橋を渡り向うへはひろ。與五郎此時紙入のなきに心附き、

與五　や、今まで懐に持つて居た、紙入が見えぬわいの。

權九　なに、紙入が見えませぬ、そりや大事でござります、よく捜して御覽じませ。

與五　あの中には今權九郎から取つた百兩の證文、まだ其上に吾妻が起請も入つて居る大切だ。あゝ、聞えた、今の賣卜者がわしを支へる折、懷へ手を入れたが、そんならあの時浪人が。

權九　何とおつしやる、今の浪人がお前樣の紙入を。やあ〳〵、えゝ憎い奴、待ち居れやい、泥坊泥坊。（ト通り神樂にて、權九郎追掛ける振にて橋の向うへはひる。）

佐渡　時に手附の濟んだ吾妻さん、いつまで爰には。なあお高さん、あの子を連れて親方へ。

吾妻　いえ〳〵、わたしや今日一日は、與五郎さんの揚げでござんす。

お高　そんなら斯うなされませ、最前からのもや〳〵で、與五郎さんもお氣の揉めることばかり、わたしの家で御酒を一つ上つた上、お歸りなさんせいな。

吾妻　ほんにそれがようござんせう。佐渡七さん、お前も一緒に。

與五　行くことは行くけれど、紙入のことが心にかゝつて。

佐渡　はて、權九郎どのが追掛けて行かれたから、取返して參りませう。

お高　きな〳〵思はず與五郎樣、お一つ上つた其上で、

吾妻　又よい思案もござんせう。さあ、ちつとも早う。

與五　それぢやというて、どうもわしは。

女兩人　はてまあ、お出でなさんせいな。

ト流行唄通り神樂にて皆々花道へはひる。下手より長五郎雪駄直しのこしらへ、古き笠を冠り、柄手桶を提げ出で來り、四邊へ水をまき臺の上へ坐り、籠の中より道具を出し仕事に掛る。浪の音の頭、屋根船の唄、誂への兩吟になり、橋の向うより阿古木源之丞着流し挾帶、鮫鞘の大小、一文字の編笠にて出來り、橋の上にて左右を見返ることあつて舞臺へ下りる。此內草履の横鼻緒切れる、源之丞思入あつて、

源之　はて、折惡き草履の鼻緒。（ト四邊を見廻し長五郎を見て、）幸ひの履物直し。（ト思入、又唄になり、源之丞そろ〳〵と長五郎の側へ來て、）こりや直しのもの、鼻緒が直して貰ひたい。

ト履きたるまゝ前へ出す。

長五　はい、畏りました。

ト又唄になり、長五郎臺の上にある麻裏草履を、片々取つて源之丞にはかせ、切れたる草履を取つて見る。是れにて唄切れる、跡かすめた通り神樂。

こりやまだ卸したてのお草履、どうして鼻緒が切れましたか。（ト言ひながら源之丞の装なじろ〳〵見て、）素敵に立派なお侍様だ。（ト編笠の内を覗き、）はて美しいな、種貸の草双紙の白縫大盡のや

うな殿様だ。(ト又笠の中をよく〳〵見て思入)はてな、どこかあなたは見たやうだ、お思ひ出した、

おゝさうだ、見た筈だ。もし殿様、憚りながらお前様は、阿古木源之丞様ではござりませぬか。

ト是れにて源之丞思入あつて。

源之　むゝ、我が名を知つたる其方は。

長五　へい、御不審は御尤も、長五郎めでござります。

ト四つ竹模様の合方、長五郎、笠手拭を取る、五十日のきたなき鬘、源之丞よく〳〵見て、

源之　おゝ、まことにそちは以前出入りの長五郎、思ひ掛けなき此出合ひ。

長五　躓く石も橋詰めに、

源之　切れた鼻緒が縁の端、

長五　切れざる縁の、

源之　主従、

長五　二人。

源之　長五郎、

長五　お殿様。(ト源之丞も笠を取つて)

源之　はて、久々であつたよなあ。

長五　面目次第もございませぬ。（ト兩人思入）まあ〳〵あなた樣にも御機嫌よく、こんな目出度いことはござりませぬ。

源之　そちも堅固で重疊々々、さりながら以前に替る賤しき姿。

長五　お聞きなすつて下さりませ、以前は神田白壁町で、人に知られた左官の棟梁長右衛門の忰の長五郎、三度の飯より色と酒、まだ其上に弄み好き、異見も馬の耳に風、打つやら買ふやら亂ちき騷ぎ、詮方盡きて親父の勘當、あつちの近附きこつちの友達、四月五月半年はごろつき歩きの居候、長い月日に短い錢、三文半錢の働きも出來ねば他人の悲しさに、末の別れは愛想づかし、身のたずみも人の軒、貰つて暮す氣散じは譬の通り三日して、忘れられねえ世渡りに、到頭非人の仲間入り、親父の罰で此ざまと、朝夕我が身を悔んで居ります。

源之　聞けば不便なそちが身の上、何卒まことの心になり、其身を淸うしたがよいぞや。

長五　有難うございます、私が身の上話しでお履物が遲なはりました、暫くお待ちなされませ。

ト長五郎直しにかゝる、源之丞紙入より小判を出して紙に包み、

源之　長五郎、取つて置きやれ。（ト出す、長五郎取つて、）

長五　へい、こりやお金。もし殿樣、有難うござります。

ト長五郎金を腹掛の隱しへ入れる。鳥追神樂になり、花道よりおこよ島田鬘黃流し編笠を冠り、おとら島田崩しの黃流し編笠、三味線を二挺合せて手拭へ包み抱へて出來り、舞臺へ來て長五郎を見て、

こよ　もし長五郎さん、此間はお目にかゝりませんねえ。（ト長五郎見て、）

長五　おや、誰だと思つたらおこよさん、今お歸りでございますか、大きに御無沙汰をいたしました。どうぞ頭によく言つておくんなせえまし。おこよさん、いつもながら綺麗だね。

とら　長さん、お株で世辭のいゝこと、其口で幾人女が殺されたか知れないよ。

長五　おゝおとらか、うまくいふぜ。コウ火口があらァ一服呑まッし。

こよ　長五郎さん、ちつと遊びにおいでなさいな。

とら　ほんに長さん、今日はおこよさんの誕生で、赤のお飯が出來たから晩に遊びにお出でな。

長五　そいつあ有難え、御馳走になりに行きやせう。

とら　長さんきつとお出で、騙すときかないよ。

ト右鳴物にて、兩人橋の上へ行きながらおとらおこよに囁く。おこよ振返り〳〵源之丞へ心を殘し、兩人橋の向うへはひる。源之丞是れまでおこよに見惚れて居て、本意なき思入にて扉を開き、是れを

翳し跡をきつと見送る。本釣鐘しつぽりとしたる合方、長五郎草履を直し、源之丞の前へ出し、

長五　へい殿樣、お草履が出來ました。（ト言へども耳に入らず、向うを見て、）

源之　「梅が香や、乞食の家ものぞかるゝ。」

長五　大きにお待遠でございました。

源之　晋子が秀句目のあたり、はて、おでやかな。（ト見惚れし思入、長五郎心附ず、）

長五　お履物が出來ました。（トいへども返事をせぬゆゑ、）もし、殿樣。

ト大きく言ふ、源之丞びつくりして、持つたる扇を落す、木の頭。

源之　世話であつた。

ト源之丞草履をはきながら、やはり向うを見送る。長五郎落ちたる扇を疊んで出す、是れをキザミ、屋根船の佃節、薄き浪の音にてよろしく、

幕

ト幕引付けると禪の勤めになり、直に尻引けに引返す。

（庚申塚の場）――本舞臺三間後、黒幕數疊、上手大きなる石の庚申塚、松の立木、日覆より釣枝、下には葭簀張の出茶屋を片附けたる體、總て小梅ケ谷の通り。右鳴物にて幕明くと釣師の仕出其外大勢捨ぜりふにて行違ひはひろ。三味線入り禪の勤めになり、花道より以前の源之丞、後より長五郎鍵

を肩に掛け出來り、

長五　もし殿樣、私に何か用がある、人通りのない所まで來いとおつしやつたが、こゝらはもう人絶えでござります。

源之　ちと其方に、折入つて頼みたい一義がある。

長五　左樣なら、向うへ參りませう。（ト右鳴物にて、兩人舞臺へ來て）

源之　長五郎、其方に頼みたいことがあるが、頼まれてくれまいか。

長五　譯もおつしやらずに、頼まれろ〳〵。何でもようござりますが、立ちながらお話しも出來ません。お待ちなされませ、いゝものがござります。（ト下手に重ねた出茶屋の床几を持ち來り）さあ、是へお掛けなされませ。

源之　誰も外に人もなければ、そちも掛けやれ。

長五　左樣なら、眞平御免なされませ。（ト兩人床几へ腰を掛け）さうしてお頼みとは、どんなことでござります。

源之　外でもない、取持ちが頼みたい。

長五　何とおつしやります。（ト替つた合方になり）

恥しきことながら、さいつ頃同じ鎌倉の昵近の武士、南方十次兵衛が娘お早といふ女と語らひ、夫婦の契約なしたる所、遺恨あつて倉岡某の手に掛り、親子諸共箱根に於て敢なき最期遂けたりしが、最前出逢ひし鳥追娘、眉目形風俗まで別れしお早に生寫し、似たる姿に心の迷ひ、親しき樣子の詞の端、何卒そちが働きにて酒宴の相手にあの娘、身共に取持ちいたしくりやれ。長五郎、頼みといふは此通りぢや。

長五　それならさつきの女太夫に、殿樣がほの字にれの字だね。

源之　長五郎、笑うてくやるな。

長五　なに笑やアいたしませんが、あの娘はちとむづかしいといふ譯は、ありや笹目ヶ谷の割下水の小家頭、喜六といふ者の一人娘で、乞食でこそあれ不足はねえから、あゝして歩くのも稼ぎぢやござりません、慰みでござります。其上親父といふは大の堅藏だから、とてもれこづくで話しは出來ません、が、先刻一緒に附いて居た年増、ありやあ仲間内の嚊あだからあの女に吹ッ込んで娘の心を聞いて見て、娘さへうんといやあどうでもなりますから、斯うなすつて下さいまし。もう一兩金を貸して下さいまし、今夜娘の誕生だといつたから此裝ぢやあ行けません、布子の身請けでもして土産の一つも買つて、是れから直に喜六の所へ行つて、成るたけ首尾して參りますから、

源之　お前さんは其内小倉庵で、一口上つて待つておいでなさいまし。

長五　承知いたした。（ト紙入より小判を出し、）金子は是れでよいか。（ト長五郎へ渡す。）

源之　よろしうござります、是れで身裝をこしらへて、直に今から參りませう。

長五　然らば身共は、小梅にて待合さん、隨分共にぬかりなきやう。

源之　お氣遣ひなされますな、どうかこじ附けて參りませう。

長五　長五郎、待つて居るぞよ。

ト唄になり、源之丞は下手、長五郎は籠を肩へ掛け上手へはひる。時の鐘になり、上の方より以前の主膳編笠を冠り、下手より傳藏、權九郎、角助、可助附いて出で、四邊へ思入あつて、

傳藏　梶井主膳殿。
權九

主膳　これ、靜に言はつしやい。（ト笠を取ろ、木魚入りの合方、）

傳藏　言合せた通り、まんまと首尾よく。

權九　是れといふも、主膳殿の働き。

角助　山崎屋の與五郎が持つて居る、紙入を拔く魂膽。

可助　こッとら二人が喧嘩を仕掛け、然し、よつぽど酷い目に逢ひました。

傳藏　大儀々々、さあ是れで一杯づゝ呑んだがよい。（ト紙入より一分銀を二つ出して遣る。）
角助　こりや有難うござります。可助、これで今夜は假宅だ。
可助　まあ、どこぞへ行つて一杯やらう。
兩人　こりやあ旦那、有難うござります。
ト兩人下手へはひる。主膳懷より以前の取りたる紙入を出し、
主膳　與五郎が此紙入の中にあるは、權九郎どんの百兩の證文、又これが佐渡七から取つた、吾妻が手附の百兩の受取り、よつほど骨が折れたわ。
傳藏　いやも御苦勞々々、日頃から吾妻めに惚れて居れども、與五郎めに心中立して自由にならぬゆゑ、主膳殿の思ひつきで、權九郎が無禮をしたと言ひかけて。
權九　道樂息子が千葉の屋敷から、受取つた百兩を詫金に借出し、其金を傳藏樣が吾妻の手附に渡すといふ新狂言。
主膳　此證文のない時は、百兩の金の行場は與五郎の科になつて、勘當されゝば娘のおてるは權九郎どんの女房、三原殿は吾妻を引かし、どちらも失禮ながら、出來合の色事師だね。
兩人　是れは御挨拶。

主膳　さあ、首尾よく遣つた骨折り賃を、お貰ひ申したうござります。
傳藏　如何にも約束の褒美を、なう權九郎。
權九　左樣々々、直に渡しませう。（ト兩人紙入より五兩づゝ出す、主膳取つて見て）
主膳　何だ此金は、一人前たつた五兩づゝか。
傳藏　當座の褒美、取つておきやれ。
主膳　當座の褒美も凄じい、五兩ばかりの端た金、こんなに糞骨を折つて詰るものか。
權九　さうしてこなたは、幾ら取る氣だ。
主膳　知れたこと、傳藏は百兩の手附證文、權九郎も百兩の證文だから、一人前安くッても五十兩宛よこさつせい。
兩人　なに、五十兩宛取る了簡か。
主膳　そんなにびつくりすることはねえ、百兩づゝの仕事だから、五十兩なら格安ものだ。
傳藏　そんならどうでも、五十兩づゝ出さねば、
權九　その證文を渡さぬ氣か。
主膳　知れたことよ。

兩人　それだといつて五十兩、
主膳　出すが厭なら、此證文の尻を割らうか。
兩人　さあそれは、
主膳　五十兩づゝ金を出すか。
兩人　さあそれは、
主膳　尻を割らうか。
兩人　さあそれは、
主膳　金を出すか。
三人　さあ〳〵〳〵。
主膳　春になつてもまだ日が短い、早く片を附けて下さい。（ト思入れ。）
傳藏　是非に及ばぬ、出しは出さうが今といつては持合さねば、四五日中に渡すであらう。
權九　こつちもやつぱり五十兩、都合して渡しませう。
主膳　そんならそれまで、此證文は預つて置かう。
ト二通の證文と十兩の金をば、件の紙入へ入れて懷中する。

傳藏　これさ、相談が極つたらば、今の五兩は、

權九　二人の方へ戻して下さい。

主膳　馬鹿を言はつせえ、こりや今日の立前だ。

權九　そんならそれまで返さぬのか。

主膳　當り前よ。

兩人　いや、呆れたものだ。

主膳　五十兩の金が遲いと、此證文で山崎屋のしはん坊親父に、何もかも割つてしまふよ。

ト言ひながら花道へ行きかける。

傳藏　いや恐ろしい敵役、然し當時はこなたより、

權九　外に敵役のない世界。

主膳　これ、幾ら胡麻をすつても、五十兩一文も負けないぜ。

兩人　そんならどうでも、

主膳　元直が切れるわ。

ト主膳編笠を肩へ掛けると、唄、時の鐘になり、主膳花道へはひる。舞臺は此儘道具廻る。

（乞食小屋の場）――本舞臺三間柿葺、所々にこはれ瓦を並べたる家根附の平舞臺、正面鼠壁押入、眞中暖簾口、上の方一間の中二階障子立てあり、下手一間葺きおろし屋體、是れに赤かう、白かう、と書きたる障子、いつもの所門口、此外梅の立木、舞臺上手に木綿の小蒲團を敷き、喜六褞袍三尺、更けたる小家頭の裝、竹の燭臺を照し、おとら箱火鉢に鑵瓶を掛け燗德利にて燗をして居る、眞中に酒肴を並べ、佐久兵衞非人の猿廻しにてなり、ごみ太夫三味線を彈き、獨り角力のしゆろ八棕櫚の首日蔓、鳥追ひのふり七島田蔓木綿の振袖にて、兩人踊つて居る。お鍋更けたる雇婆アの裝にて給仕なして居る。總て北割下水乞食小家の體。おけさの唄にて道具留る。

喜六　いや騷々しい奴等だ、耳が宿替をしさうだ、ちつと靜にして呑んでくれ。

とら　これさお前方、頭が靜にして酒をお上りとさ、まことに氣逆上がするよ。

佐久　これ〱、頭が靜にしろと言はつしやるから、もう踊りは止めにしろよ。

八　それでも目出度い晩だから、思いれ馳走になつて、思いれ踊る積りだ。

七　後は又わつちが花笠踊り、和かい振事を見せようよ。

お鍋　ほんに八さんと七さんの踊は、眞物だよ。

喜六　今夜は久し振りで、手前達の藝盡しをやつて見せるがいゝ。

佐久　そりやあお好み次第、山王の佐久兵衛が、お猿は目出度やなあ、を遣らかしやせう。まあ藝當は跡へ廻して、うまくはなからうが氣に入つた物を喰つて、大きな物で呑むがいゝ。

ごみ　いやも、さつきからお辭儀なしに、やッつけて居りますよ。

お鍋　皆さんお氣に入つた物を、お替へなさいよ。

八　これ〳〵ごみ太夫、一つ彈いてドッし、おれが何ぞ端唄をやらかさう。

とら　そりやあお聞きごとだ、ごみさん彈いておくれ。

ごみ　あい〳〵、味噌漉し胴でやらかしやせう。

喜六　こりやあよからう、所望だ〳〵。

トごみ太夫三味線を彈き、鳥追ひを唄ふ思入、靜なる端唄へ通り神樂を冠せ、皆々捨ぜりふにて酒盛になる、花道より長五郎、福袍三尺に着替へし裝にて出で來り、門口へ來て、

長五　御免なさいまし、長五郎でござります、頭はお宿かね。

お鍋　どなたか、此方へおはひんなさいな。（ト長五郎内へはひる。）

とら　おや長さん、約束通りよくおいでだね。

喜六　珍らしい、長五郎よく來さしツた。さあ、ずつと火鉢の脇へ來さッし。

長五　そんなら御免なせえ。（ト賑かなる合方、長五郎上へ來り、）おい仲間の手合、さつぱり逢はねえが、みんな達者でいゝの。

佐久　長五郎兄イ、お前もお變りがなくッてようございます。

皆々　兄貴、よく來なすつたね。

喜六　早速持合せだ、何にもねえが一つ呑まッし。（ト猪口をさす、おとらつぐ、）

長五　こりや有難うございます、さつきおこよさんとおとらに逢ひ、あの子の誕生だから來いと言つたから、御無沙汰の言譯ながら出掛けたのさ。

喜六　よく來さしッた。これお鍋、長五郎に吸物を早く。

お鍋　はい〳〵、今持つて參ります。

ト奥へはひる、長五郎懐より風呂敷に包みし合巻と、羊羹の折を出し、

長五　頭、こりやお柳下亭の作の新板に練羊羹、おこよさんに年玉さ。

喜六　止さつしやればいゝに、、、おまが大悦びだ。これおとら、長五郎に呑ませてくれろ。

お鍋　へい、お燗も吸物も出來ましてございます。

とら　長さん、お燗が出來たよ。

長五　おとら、お前にやるよ。

とら　あれさ、お銚子の替り目だわな。

ト始終合方、雇ひ嚊ア吸物を持つて來り、皆々捨ぜりふにて酒盛よろしくあつて、

長五　コウおとら、今夜こつちへ出て來たは、ありやうはおぬしにちつと用があつて來たが、おこよさんはどうなすつた。

とら　あの子は頭痛がするとツて、寐轉んで居なさるが、わつちに用とは何の用だえ。

長五　その用といふは。（ト喜六へ思入）

喜六　長五郎、内のあまに何ぞ用か。

長五　いえなに、用といふでもござりませんが。

とら　長さん思はせ振りな、用があるなら早くお言ひな。

長五　其の用といふは、まあ、そりや跡でいゝから、もう一ぺい遣らかしやせう。

ト酒を吞む、喜六思入。

喜六　用といやあ、あまの誕生日にごた〳〵したので、稲荷様へ参るのを忘れた。コウお鍋、提灯をつけてくれ。

お鍋　はい〳〵。
喜六　長五郎、ちよつと參つて來るから、ゆるりと存まツし。
長五　頭一人でいゝかえ、誰ぞ連れて行きなさいな。
喜六　なに、直そこだ。それ、みんな遠慮なしに存んだがいゝぜ。
ト喜六提灯を持ち、下駄をはいて門口へ出る。
皆々　頭、早くお歸んなせえ。
喜六　長五郎ゆるりとさつしやい。（ト唄になり、喜六思入あつて下手へはひる。）
佐久　ときにみんな、大層馳走になつたぢやあねえか。
八　もう酒はお預けにして、おまんまと仕ようぢやねえか。
七　其事々々、その事羽織と單衣、スチヤラチヤチヤン〳〵。（ト踊る。）
とら　まあみんなが、もう一つお上りな。
佐久　いえも、大層酩酊、大橋兩國ばしだつ
とら　おやきつい洒落だ、コウお鍋さんみんなを奧でおまんまにして、又お中酒に上げておくれ。
お鍋　あい〳〵。さあ皆さん、奧へお出でなさい。

佐久　そんなら長五郎兄貴、
長五　みんなゆるりと、
皆々　さあ〳〵行かう〳〵。（ト甚句の合方、お鍋先きに皆々わや〳〵言つて奥へはひる。）
長五　やれ〳〵騒々しい手合だ。
とら　大風の吹いたあとのやうだね、長さんお燗をよくして、もう一つお上りな。
長五　いや、酒より大事の用がある。
とら　其の用とは、どんな用だえ。
長五　その用は、斯ういふ譯よ。（ト四つ竹の合方。）外の事ぢやあねえが、さつき東橋でおこよ坊と手前がおれに話しをした時、履物を直して居た人があつたらう。
とら　あの美しいお侍。
長五　ありやあ此の本所で、阿古木源之丞様といふ、御眤近の殿様よ。
とら　むゝさうかえ、それぢやァあの好い男の殿様が、わつちに、そりやほんの事かえ、わつちのやうな者に、それでお前、取持つてくれろと、頼まれて來なすつたのかえ。
長五　自惚をいふな、手前ぢやあねえ。おこよ坊を見て、以前女房約束をした女に似て居るといつて、

首ッたけ惚れたのよ。

とら　さうかえ、いゝ面の皮さ。

長五　そこでおれに取持つてくれろと頼ましやつたれど、あの通り偏屈な親分のことだらう、とても話しは出來ないが、そこはおぬしが女同志でおこよ坊に話しをして、あの子がうんと承知さへすりやあ、先方は殿樣、隨分おぬしもれこになることだぜ。

とら　長さん、其の話しなら大承知だよ。

長五　これさ、おぬしばかり承知でも、おこよ坊が何といふか。

とら　いゝえさ、其のおこよさんが大承知だよ。

長五　そりやどういふ譯で。

とら　お聞きよ、さつきお前の見世先きにあの殿樣が立つておいでの時、わつちがおこよさんに、ちよつとお見、好い男だ、竹三郎に正だねえと言つたらばあの子が、わたしはこんな賤しい身、先きは立派なお侍さん、とても及ばぬことなれど、たつた一晩でもあのお方のお情受けたことならば、死んでもいゝと言つたから、おや〳〵それはいやなことだ、どんなに男がいゝとッて此頃の麻疹なのがれ、一晩位のお情でわたしや死ぬのは眞平だと、思いれ笑つてやつたのさ。

ト此内よき時分二階の障子を明け、おこよ此樣子を聞いて居る。

長五　そんなら、おこよ坊も、惚れて居るか。

とら　それだから承知だといふのさ。

長五　そいつあ奇妙だ、そんなら今夜直に殿樣を、連れて來てもよからうか。

とら　いゝ段ぢやあない、實はあの子はそれで鬱いで居るから、此の譯を話しやあどんなに嬉しがるか知れやあしない。

長五　そんなら是れから一走り、迎へに行つて連れて來るから、おぬしがいゝ鹽梅に賴むぜ。

ト長五郎下の方へ來る。

とら　あれお待ち、連れて來るはいゝが、内の者の前もあり、第一親指が寐ないうちはむづかしいから、今夜九つを打つたらば裏口から、

長五　やるのか、

とら　そつとだよ。

長五　合點だ。そんならおとら。（ト門口へ出る。）

とら　長さん、御苦勞。

長五　行つて來るぜ。（ト唄になり、長五郎足早に花道へはひる。跡合方、おとら思入あつて、）

とら　縁といふものはとんだものだ、さつき東橋で初めて逢つた殿様が、おこよさんと相惚れとは。（ト上手を見て、おこよと顔見合せ、）おや、おこよさん。

こよ　おとらさん。

とら　さつきからそこにおいでか。

こよ　あい。

とら　そんなら今のれこしきの。

こよ　長五郎さんの話しを聞いて、心で拜んで居たわいな。

とら　おこよさん。

こよ　あい。

とら　今夜はお樂み。（トおこよ恥しき思入、早き唄にて障子をぴつしやり閉める。）親指に知れないやうに、是れからこつそり何かの支度。さあ、いそがしくなつて來たよ。

ト唄になり、おとら奥へはひる。四つの鐘甚句の合方、奥より以前の六人にお鍋附き出來り。

お鍋　皆さん、まだしづかでもいゝぢやあないかえ。

八　どうして〳〵、今鳴る鐘は四つの鐘「女房悅べ、忰はお役に立つたわやい。」
ト分らぬ聲色なつかふ。
七　さあ、四つだから麹町の呉服屋としようぜ。
佐久　ひらきますや（いはき升屋）といふ洒落か、そんなら、さあ〳〵お開き〳〵。
八　篦棒め、紡績か小紬ぢやアあるめえし。（ト皆々門口へ出る。）
七　大層醉つて、ひよろ〳〵と轉びさうだぜ。
八　轉んだら起きて行かッしな。
七　「起きたら互ひに抱附かれ」サ。
ごみ「ついでに日和を見てたもれ、」（ト猿の思入。）
佐久「お猿は目出度やなあ。」
ト猿廻しの合方になり、ごみ太夫細帶を引きずるな佐久兵衞これなひかへ、皆々囃し立て、花道へはひろ。お鍋奥へはひる。右鳴物にて道具廻ろ。
（離れ座敷の場）――本舞臺三間常足本緣附藁葺の二重、上手床の間下手赤壁、眞中一間張交の襖

明立あり、よき所に三味線、笠掛けあり、上手一間の屋體、竹格子の中窓、此前くも手に揩鉢の水鉢、胡麻竹の手拭掛け、下手正面丸太屋根の二枚開き戸、左右穂竹の垣根、見切りの四つ目垣、上手振りよき梅の立木、總て離れ座敷の體。二重に短檠を照し、時の鐘にて道具留る、と鞠唄の合方になり、奥よりおこよ、おとら出來り、

とら　もしおこよさん、お前まことに嬉しさうに、そわ〳〵おしだね。

こよ　おとらさん弄つて下さんすな。したが、ひよつと父さんに知れたら、どうせうぞいな。

とら　なに親指は醉つて寐ておしまひなすつたから大丈夫さ、今夜せえ首尾よく行けば、跡で知れた時はまたどうでもなるから、お案じでない。

こよ　さうして殿様がお出で遊ばしたら、何というてよからうぞいな。

とら　何もいふには及ばぬわいな、わつちが好い鹽梅しきにして上げるよ。

こよ　おとらさんの恥かしいことばかり。

とら　なに、子供ぢやァあるまいし、恥かしいことがあるものかな。もう九つになりさうなものだが、今夜は何だか夜が長いやうだね。

ト時の鐘靜な合方、捨ぜりふにておこよは煙草盆火鉢などを拭いて居る。おとら焜爐の火を直し土瓶

を掛ける。花道より長五郎小提灯を持ち、跡より源之丞出來り、花道にて、

長五　もし、泥濘があるかも知れませんから、氣をお附けなさいまし。

源之　忍ぶ便りはよけれども、殊の外暗い晩ぢや。

長五　かうッと、曲つた梅の木へ附いてはひつたから、何でも爰らが裏口だが、さつぱり見當が知れない。(ト舞臺を透し見て、)よし／＼向ふだ／＼。さあお出でなさいまし。

ト兩人舞臺へ來て、長五郎木戸を叩く、おとら聞き附け、

とら　そら來た／＼。(ト大きく言つてびつくりなし、)おこよさん、火入の火を見ておくれよ。今開けますよ。

ト下の方へ小聲で言ひながら、雪洞を持ち駒下駄をはき二重の脇より垣の後へはひり、開戸口へ來り、

長さんかえ。(ト戸を開ける。)

長五　おとらさんか、首尾はいゝか。

とら　大極上々吉。

長五　殿樣、おはひんなさいまし。

源之　大事ないか。

とら　よろしうございます、さあ入らつしやいまし。（トおとら開きをしめ、兩人を連れて、二重の横手より舞臺へ出て）さあ、是れへお上んなさいまし。

ト源之丞二重へ上る、おとら褥を上手へ敷き源之丞を住はせる、長五郎小聲にて、

長五　おこよさん、嘸待遠でござりましたらうね。

トおこよ恥しき思入、おとら煙草盆を出さうとして、長五郎に燧箱でなくてもよからうかと手眞似をする思入。

なに、構ふことがあるものか。

トおとら持つて行かうとして、おこよに持つて行けといふ思入、おこよ恥かしさうに源之丞の前へ出す、おとら茶を汲みおこよに出させる。源之丞始終おこよに見惚れ居て心附き、四邊を見て、

源之　長五郎、そちが話しと事替り、殊の外綺麗な住居ぢや。

長五　お屋敷と違つてむさうござりますが、其代り綺麗なものがござります。（トおこよを前へ出して、）もし殿樣、家の娘でござります、お近附きのためお詞を下さいまし。

源之　こりや／＼、其やうに堅くるしくせずと、斯樣に忍び參りし上は、打ち解けるがよいではないか。

とら　もう／＼／＼通り者のお殿樣、長さんそんな三つ指とやら、言ひ附けねえことは止して、やつぱ



り乞食附合、いえさ、お心安いがいゝぢやあねえか。
長五　さうよ、構ふことはねえ。おこよさん、ずつとお側へ行きなせえ。（ト突きやる。おこよ恥しき思入。）
源之　不思議な緣で今宵の厄介、こりや二本差しは野暮ぢやなどゝ、愛想をつかすまいぞや。
こよ　冥加に餘るそのお詞、賤しい伏屋へお厭ひなう、お越しなされしお志し、有難う存じます。
とら　あれまだやつぱりそんなこと、然しお初會のことなれば引附けのお盃、どれ、取つて參りませう。（ト浮いた合方になり、おとら奧へはひる。）
長五　何と殿樣、美しいものでござりませうね。
源之　笠の內とはまた一入、色香もまさる夜の梅、早う折らせてくりやれ。
とら　もし殿樣え、今日はあの子の誕生日で、ほんの內の有合せ、お一つ召し上りませ。
ト奧よりおとら綺麗なる臺へ肴を載せ、錫のちろり盃臺を持ち出で、
源之　それは何より。長五郎、亭主役に始めぬか。
長五　どういたしまして、まあ〳〵お始めなされませ。
源之　然らば馳走になりませう。（ト盃を取る、おこよ酌をする。）祝言の盃は女子よりさすなれど、そこを略して、わしからそなたへ。（トおこよへ盃をやる。）

こよ　有難うございます。（トおとらついでおこよ呑む。）
長五　その盃は、殿様へ。
こよ　それでもあんまり。
源之　さあ〳〵遠慮なしに、頂戴々々。
こよ　おゝそれながら。（ト盃を返す、源之丞又呑む。）
源之　こりやおとらとやら、何かと骨折り一つ過ごしやれ。
とら　はい〳〵、お有難うございます。（ト盃を取る、長五郎酌をする。）
源之　長五郎、肴をやりやれ。（ト紙入を渡す。）
長五　畏りました。（ト金入より小判を出し思入あつて、）もし殿様、額はなしかえ。
源之　えゝ、それを取らせいな。
長五　そんなら是れを、（ト思入あつて紙に包み、）殿様が、お肴を。
とら　おや、わつちに是れを、有難うございます。（ト帯の間に入れて、）さあお盃も濟んだれば、あ
まり更けねえそのうちに。
長五　おゝ媒人は宵の内だが、さうしてお床は。

とら　あすこへ取つて置きました。（ト上手屋體を教へる。）
長五　むさくるしくとも此の一間へ。（ト長五郎源之丞を上手屋體へ連れ行く。）
とら　さあおこよさん、お前も早く。（トおとらおこよの手を取りて引立てる。）
こよ　あい。（ト嬉しき思入。）
とら　さぞ嬉しいことだらうね。（トおこよの恥かしがるをおとら上手屋體へ突入れる。源之丞思入あつて、）
源之　どれ、樂しき夢を結ばうか。（ト唄になり、上手屋體の障子をしめる。）
とら　先づ、待女郎の役は濟んだ。
長五　こつちは色氣より慾氣だが、一兩といふ金は容易なことぢやあ手に入らねえが、うつかりして落すなよ。
とら　どうして、わつちやあ小判といふ物を、始めて貰つたよ。
長五　半分こづりを寄越しねえ。
とら　おや蟲の好いこと。さあ長さん、奥で一口。
長五　極熱燗で。
とら　火傷をおしでないよ。

長五　ちげえねえ。

　ト合方にて長五郎おとら奧へはひる、やはり合方にて、花道より喜六提灯を持ち出來り、花道にて、

喜六　さつき長五郎がおとらめに、娘は内に居るかと聞いて、おれが顏を見て何だか譯を言ひ兼ねたは、てつきり譯のあることゝ、稻荷樣へ參る振で外へ出たは、若しや娘に惡い蟲でも、附いたのではあるまいかと、案じられてならぬゆゑ、裏からそつと内へはひり、篤と樣子を窺はう、むゝさうださうだ。

　ト右の合方にて喜六提灯の明りを消し、思入あつて下手の木戸へはひる。時の鐘、なまめいた合方になり、上手屋體より以前の源之丞おこよ出來り、四邊へ思入あつてよき所へ住ひ、

源之　君が一夜の情には、百歳の命を延ぶる今宵の契り、そちも必ず忘れまいぞよ。

こよ　勿體ないおつしやりやう、賤しい私を末かけて、お見捨てなされて下さりますな。

源之　何の見捨てゝよいものかいの。

こよ　えゝお嬉しう存じます。（ト此時奧にて、）

喜六「千秋萬歳の、千箱の玉を奉つる。」

　ト兩人びつくり、合方になり、奧より喜六着流し羽織に着替へ、誂への三方へ菓子を載せ持出で、源

之丞の前へ出し下手へ住ふ。兩人は思入。

こよ　や、お前は父さん。

喜六　こりや竊にしやれ。もしお殿樣、わたくしは此娘の親父でござります。

源之　すりや、其の方が此の家の主人。

喜六　喜六と申しますかたくな者、最前長五郎が娘の事をおとらに尋ね、何やら用があるを私に隱す樣子、若しや娘に惡い蟲でも附いたのか、何でも仔細のあることゝ、其場を立つて樣子を見れば思ひ掛けなき御大身樣のお入り、仔細の樣子を承り、有難いやら勿體ないやら、嬉しうて〳〵、あの小座敷で最前から、泣いてばかり居りました。

源之　そのやうに言はれては面目次第もない仕合せ、必ず笑うてたもるなや。

喜六　勿體ないことおつしやります、不束なる娘を御寵愛の有難さ、何とお禮の申し上げやうもござりませぬ、さりながら隱すとすれど壁に耳、度重なれば人の目に立てば大事の御身の上、お手引いたせし長五郎は一筋繩にて行かぬ惡漢、若しや凶事でもある時は取つて返らぬ一大事と、さまざまに心を碎き、やう〳〵に思案を回らし、わたくしが以前懇意にいたしまして、大音寺前に賣卜渡世をいたし居る、梶井主膳と申す浪人、才智勝れし者なれば彼が方へ娘を預けまして、表向き

は急病で死んだと披露いたしますれば、氣の附く者はござりませねば、此親父が彼の方へ竊にお供いたしませう、其上にて兎も角も取り計らひ方もござりませう程に、此家へお出では今宵限り、必ず御無用になされませ。

源之　重々厚き其の親切、忘れは置かぬ忝けない、詞に任せ其の方が便りを必ず待つて居るぞよ。

こよ　日頃に似合はぬ粹なお心、まことに父さま大明神さま〳〵。

喜六　御覽じませ、形は大きうても子供同然な娘、此の末ともにお殿樣、お目掛けられて下さりませ。

源之　侍冥利、二腰さゝぬ法もあれ、心遣ひは無用にいたしやれ。

喜六　えゝ有難うござります。（ト七つの鐘）ありや七つ、夜明けまでは間もあれば、今少々御休息遊ばして、夜明けぬうちにお屋敷へ。

源之　一先づ歸つて其の方が、便りを待つぞよ。

喜六　先づそれまでは、御機嫌よう。

源之　そちも堅固で吉左右を。

喜六　お待ちなされて下さりませ。

ト唄になり、喜六上手の屋體へはひる。時の鐘合方にて、奥より長五郎おとら出て、

長五　もし殿様、もうお目覺めでござりますか。

源之　長五郎、さぞ待遠であつたらう。

長五　なに、今まで奥で遣つて居りましたが、七つを打ちましたからお歸りがようござりませう。何のことはねえ、假宅の茶屋が迎ひのやうだ。

とら　長さん、野引きは法度だとさ。

長五　うさあねえ。

源之　長五郎そろ〳〵參らうか。

長五　お供いたしませう。（ト合方、所々にて鷄笛、源之丞舞臺へ下りる。おこよ大小を取つて渡しながら、）

こよ　そんならどうでも、お歸りでござりますか。

源之　名殘り惜しくは思へども、曉近き亂鳥、

とら　又のお出でを樂しみに、

長五　夜明けぬうちに、

源之　おこよ、さらば。（ト行かうとする、おこよ下へ下りて、）

こよ　もし、（ト源之丞の袖を引く、兩人ぢつと顏を見て名殘りを惜しむ、）

源之　長五郎、もう明けるかな。
長五　すつかり東が白みました。
こよ　そんならどうでも、
とら　お名殘り惜しくも、（トおこよを隔てる。）
長五　明けないうちに、（ト長五郎源之丞を門へ出すを木の頭。）お出でなさい。
トおこよ行かうとするをおとら留める、源之丞歸らうとするを長五郎隔てる。此模樣よろしく、あれまた憎やの唄にて、
ひやうし幕

二幕目

名越山崎屋の場
小袋坂裏手の場
神輿ヶ嶽山下の場

〔役名――雪駄直し長五郎、山崎屋與五郎、鳶の者下駄の市、山崎屋與次兵衛、鴛屋甚兵衛、小手柄半次、山崎屋番頭權九郎、三原傳藏。石井半三郎妻熊坂お長、山崎屋娘お照、同下女お静等。〕

（山崎屋奥形見世の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ山崎屋と記せし長暖簾、右手中棚帶地を並べ、

下に引出しの簞笥、左手反物を積みし棚の書割り、上の方畫心に一間障子屋體。此前に帳場の格子、下の方いつもの門口まで畫心に三間の見世附、庇に紺暖簾、奥の方紺の長暖簾、此の前に用水桶、下座の所町木戸、此間漏斗に往來の遠見、總て名越明神下、山崎屋呉服見世の體。こゝに權九郎羽織着流しにて帳場の内に帳合をして居る、丁稚立ちかゝり居る。手代の一、二硯箱を控へ、買物買ひ○△□の三人前に住ひ、反物小切など取散らしある、此見得鳥追通り神樂にて幕明く。

手一 判取り。（ト丁稚受取りを持ち、）

丁稚 はァい。

手一 毎度有難うございます。（ト受取を渡す。）

○ 是れは大きにお世話になりました。（ト下手へはひる。）

手二 あなた樣のは斯樣な品では如何でございます。（ト反物を見せる。）

△ わつちァ職人だから、銘仙より此結城にしやせう。（ト反物を取る。）

手二 それは、とんだよい柄でございます。

□ もし、こりやあ珍らしい中形だね。（ト切地を取つて見る。）

手一 左樣でございます、當年の新形でございます。

□ 道理で今まで見ない形だ。

△ この結城は二分二朱だね。

手一 左様でございます。

△ それ、額が二つに二朱金が一つあります。（ト腹掛の隠しより金を出してやろ。）

手二 是れは有難うございます、只今お受取りを上げます。

△ なに、それにやあ及びやせぬ。

□ わたしやあ歸りに寄るから、此の中形をのけて置いておくんなせえ。

手一 畏まりました。

手二 又何ぞ御用をお願ひ申します。

△ あい、おやかましうございました。

手一
手二 是れは有難うございました。（ト△□の兩人下手へはひろ。）

權九 與助どん、今日はお客の絶える間がないの。

手一 左様さ、今朝から引續いて職人衆の客ばかり。

手二 何でも此節は、職人衆のことだ。

権九　夏仕入は、縮緬より木綿を餘計に仕込まずばなるまい。
手一　今の内わたし共は、夜食をたべてしまひませうではないか。
手二　ちつと早いがお客の途切れだ、番頭さんお頼み申します。
手一　さあ來さつしやいよ。（ト手代二人奥へはひろ。）
権九　これ小僧、突立つてばかり居ずと、茶碗でも片附けろ、やれ〳〵世話のやけたことだ。
ト鞠唄の合方にて、奥よりお照出來り、
お照　権九郎、與五郎さまはまだお歸りなさらぬかいの。（ト権九郎つんとして、）
権九　はい、見世番はいたしますが、與五郎さまの番はいたしませぬ。
お照　其のやうな意地の悪いことを言はずと、どうぞ教へてたもいなう。
権九　何ぢや教へてたも、お丶教へて上げませうとも、教へたうてなりませぬ。
ト お照の側へ寄る、丁稚見て、
丁稚　やあ番頭さんとお孃さんと、ほうやらほ〳〵。（ト是れにてびつくりして飛び退き、）
権九　えゝ又しても入らぬ口を、奥へ行つて行燈の支度でもせい。
丁稚　まだ行燈の支度には、早うござります。

權九　早くツてもいゝから奥へ行けよ。
丁稚　あゝ無駄なことだに。
權九　何だと。
丁稚　そりや又怒つた。（ト丁稚逃げてはひる。權九郎お照の袖を控へ）
權九　お孃さん、まあちよつと下においでなされ、あゝお前さまはおいとしいなあ。（ト合方になり、お照を捉へ）許嫁ゆゑ末々は夫婦にならうと思召す與五郎さまは、吾妻といふ藝者と疾うから言交し、毎日々々お屋敷を廻るといふは表向き、内證は吾妻と二人連れ、今日は花見の芝居のと片時側をはなれぬ中、それを知らずに心中立てるは今時流行らぬ大きな野暮、外に男をこしらへて面當なされるが先づ當世、お氣があるならツイこゝらに、よい男がござりますぞえ。
　　ト權九郎思入、お照もこなしあつて、
お照　さあ、私も疾からその話を、聞いてゐる故よそ外に、よい殿御があつたらと。
權九　思うておいでなされますか、それは幸ひその男は、どんな男でござりますぞいな。
お照　わたしの思ふは、二丁目の役者によう似てゐるわいの。
權九　はて、二丁目の役者なら、彦三郎に三十郎、但し梅幸か竹三郎か。

お照　いえ〳〵、そんな人達ぢやないわいの。
權九　それでなければ新升か。
お照　わたしの思ふは、厭味のない、すつきりとしたよい男。
權九　そりや慥に今業平と、世間で噂の國五郎、
お照　えゝもうわたしや國五郎とげじ〳〵は、きつい嫌ひぢやわいな。
權九　ほい、してお前様のお好きなのは、
お照　あの八代目の弟の、權十郎ぢやわいの。
權九　それでは、やつぱり若旦那か。
お照　さうぢやわいの。
權九　えゝ、げじ〳〵と一緒にされたか。このまゝつまみ出されろとも、（トお照を捉へる）
お照　何をしやるぞいなう。
ト通り神樂鞠唄にて權九郎お照を追廻す、此の内花道より與五郎羽織着流しにて出來り、直に舞臺へ來り內へはひろ、權九郎與五郎を捉へ、
權九　あの、うつそりの若旦那に。

與五　こりや權九郎、どうしたのぢや。（ト權九郎顏を見てびつくりなし、）

權九　や、若旦那か。

お照　こりや、よい所へ。

權九　あゝ、惡い所へ。

與五　まだ日の暮れぬに見世先で、こりやうつそりしてはゐられぬわい。

權九　ほんにうつそりしてはゐられませぬ。どれ、奧を見廻つて來ませうか。

ト鞠唄の合方にて權九郎奧へはひる。お照思入あつて、

お照　ても憎らしい、權九郎づら。

ト奧へ思入、與五郎よき所へ住ひ、

與五　いや、憎らしいか可愛らしいか、知れたことかいの。

トつんとして煙草を呑み居る、お照思入あつて、

お照　えゝも、可愛らしいとは、そりや何のことぢやぞいの。

與五　何のことか與五郎は、うつそりゆゑ知らぬわいの。

お照　そのひぞりごとはお前より、わたしが言はねばならぬわいの。

與五　そりや何を。

お照　懐育ちのわたしぢやとて、よう知つてゐるわいな。（ト誂への合方になり、）許嫁とは名ばかりにてお側へとては寄ることなく、朝夕一つに居りながら、すけなう暮すも誰ゆゑぞ、皆吉原の吾妻ゆゑ、そりやもう婀娜とやら意氣とやら、噂の高い藝者さんには所詮及ばぬ野暮育ち、お氣に入らぬは無理ならねど、又嫌はれし身になりては、吾妻さんがないならばと恨む心を愼みて、一旦夫と思うたからは外の殿御は持つまいと、操を立つるわたしが心、少しは不便と思うてなら、二度に一度はお優しいお詞掛けて下さんせ、それ樂しみに末々は髪をおろして尼になる、わたしや覺悟でござんすわいな。

與五　すりやお照どのには、わしゆゑに。

お照　けふ母さまの命日ゆゑ、お寺參りを幸ひにお住持さまへお願ひ申し、附けて貰ひし此法名、（ト懐より紙に書きし法名を出し、）派手な模樣の振袖も、ほんの浮世の義理ばかり、墨染を着る心ぢやわいなあ。（トお照泣き伏す、與五郎思ひ入あつて、）

與五　聞けば聞くほど面目なき内を外なる我が身の放埒、是れも餘儀なき譯あつて、何を隱さう吾妻といふは我が親人に仕へたる甚兵衞が娘にて、親人流浪になつてより貢ぎの爲めに甚兵衞が、藝者

に賣りし恩義に依り、辛き座敷の勤めをも少しは樂にさせんと思ひ、つい一度行き二度行きて、馴染を重ね義理づくに、引くに引かれぬ貫論に、見捨てることの出來ぬも意地づく、親の許せしそなたを捨てゝ、見替へる心はない程に、必ず恨んで下さるな。

お照　そりや、あの、ほんまに。

與五　二世も三世も連添ふ女房、何の嘘を言はうぞいの。

お照　嬉しうござんす、其お詞が未來の樂しみ。

與五　そんならどうでも、

お照　此世はどうぞ吾妻さんと、中よう添うて下さんせいなあ。

與五　それぢやというて。（ト此以前より後へ下女のお靜出かゝり居て）

お靜　あゝもし與五郎さま、一旦斯うとお照さまが思召したる上からは、今更後へは返らぬ仕儀、只此後はお心休めに、十度のものは七度に内においで遊ばすやう、憚りながら私がお願ひ申し上げますわいな。

與五　改めそなたが頼まずとも、此の心底を聞く上は、廓へ足は向けられぬわいの。

お靜　いえ〳〵、それでは。

お照　却つてわたしが。

與五　はて、浮世の義理は捨てられぬわいの。（ト思入。）

お靜　ほんにまあお久し振りで、若旦那さまの御機嫌のよいお顏、お照さま、御一緒にお部屋へおいでなされませ、お煮花を入れて上げませう。

與五　こりやよう氣が附いた、そんなら奧へ。

お照　與五郎さん。

與五　お照、おぢや。

ト唄になり、與五郎お照、お靜附き奧へはひる。通り神樂鞠唄になり、花道より熊坂お長御用達女房のこしらへ、小手柄半次の久助、紺の看附脚絆胴金の脇差、小風呂敷の包みを持ち黑鴨のこしらへにて附添ひ出來り。

お長　これ久助、山崎屋といふは、此向うの見世かいの。

半次　左樣でござります、小見世ではござりますが、代物はよろしうございます。

お長　さうして流行物もあるとのことぢやの。

半次　何でも大丸に續いてゞござります。

ト やはり右の鳴物にて本舞臺へ來る、此内奥より權九郎手代二人出で、

三人　これは入らつしやりませ〱。

お長　御免なされませいな。

權九　さあ〱、ずいと是れへお通り遊ばしませ。（ト是れにてお長上の方へ住ふ。牛次入口に居る。）小僧、お茶をお上げ申さぬか。

丁稚　はい〱。（ト茶臺へ載せお長牛次に茶を出す、權九郎よろしく捨ぜりふにて世辭を言ふ、お長思入あつて、）

お長　私はお錺御用を足しまする、石井半三郎が家内の者でござりまする。ちとお誂へ申したいものがござりまして、參りましたわいなあ。

權九　それは〱、手前店御贔屓とござりまして、有難い仕合せにござります。若し隱居さま、お客さまでござります、ちよつとお出でなされませ。

ト合方にて、與次兵衛隱居にて出で、お長を見てよい女だといふ思入。

與次　これは〱よう入らせられました、私事は此家の隱居淨閑めにござります、御用向を仰せ付けられまして、有難い儀にござりまする。

お長　いえもう、些細なことではござりますが、是れからお見世でお貰ひ申したうござりますわいな。

權九　澤山御用をお願ひ申しまする。（トお長懷より書附を出し、）
お長　註文の品々は、是れへ記して參りましたわいな。（ト權九郎受取つて、）
權九　へい〳〵、何々「裾模樣、御振袖、同じく搔取、錦、天鵞絨、帶地、御召縮緬、中形縮緬、紅絹、縹色裏地に、黑繻子袖口、眞綿共、右の通り、」是れは數々の御用向き。
皆々　有難い仕合せにござりまする。
與次　これ與助、お菓子を早く。
手一
手二　はい〳〵畏りました。（ト手代奧へはひる。）
與次　ついでにお歸りのお食事もせいよ。
お長　いえもう、御無用になすつて下さりませ。
與次　左樣ならお品物を御覽に入れますから、二階へ入らつしやりませ。
お長　斯樣いたしませう、今日はちと廻り道もござりますれば、どうぞ明日お手代衆に、初瀨小路の手前宅までお持たせ下されませ。左樣いたしますと主人にも見せまして、お取極めをいたしますわいな。
權九　畏りましてござりまする。私が持參いたしますでござりまする。

與次　然し、まだよろしいではござりませぬか、御酒を一つ差上げませうと、申し附けましてござりまする。

半次　是れから歸りに脇へ廻れば、途中でとつぷり日が暮れよう。もし、どうぞ提灯を一張貸して下さりませ。

お長　有難うはござりますが、ちと廻り道もござりますれば。

權九　左様なれば、明日上りますでござりまする。

權九　お安い御用でござりまする。小僧よ、提灯をお上げ申せ。

丁稚　はい〳〵。（ト下手より弓張を出し、）お蠟もはひつて居ります。

半次　氣の氣いた小僧どんだ。（トこれにてお長立上り、門口へ出て、）

お長　左様ならば、又明日。

與次
權九　よう入らつしやりました。

お長　さ、行かうわいの。（ト鞠唄通り神樂にて、お長半次花道へはひる。）

與次　初春早々、あのやうなお得意が殖ゑるとは、今年は緣起がよいではないか。

權九　よいと申せばあの御新造、氣立てもよければ器量もよし。

與次　ほんに、あゝいふ女中なら、

權九　お氣がござりますか。

與次　馬鹿を言はつしやい。

兩人　はゝゝゝゝ。

ト鞠唄通り神樂になり、花道より傳藏序幕の裝にて出で、舞臺へ來り、

傳藏　賴まう。（ト言ひながら內へはひる。）

與次　あなたは三原傳藏樣。

傳藏　許しやれ。（ト右の合方にて上手へ通る。）

與次　これは〳〵、ようお出でなされました。

傳藏　淨閑、權九郞、久々對面いたさぬな。

與次　左樣にござりまする、隱居いたしましてから、とんとお屋敷へ出ませぬゆゑ、お目通りもいたしませぬ。

權九　して今日は、何ぞ御用向きでござりますかな。

傳藏　いや某今日參りしは別段の儀でもないが、先月晦日に狩場の幕張り其外衣服の代金、勘定所にて

相渡せしに、又候今日も此家の手代右の代金受取りに勘定所へ參りしゆゑ、如何なる間違ひなるか質し參れと、重役共の差圖を受けて罷り越した。

與次　これは怪しからぬ儀でござります、未だ其の金子は頂戴いたしませぬが、して先月晦日にお渡しなされしとは、そりや何者にお渡しなされましたな。

傳藏　何者でもない、此の家の悴與五郎に相渡した。

與次　えゝ。

傳藏　證據は則ち此通り、受取書を取り置いたるわ。

ト懷中より百兩の受取書を出す、與次兵衞取上げ見て、

與次　成程これは悴が手迹。こりや權九郎、與五郎を呼べ／＼。

權九　はい／＼畏りました。もし與五郎さま／＼、ちよつとお出でなされませ。

ト合方になり、奧より與五郎出で傳藏を見て、

與五　これは／＼傳藏樣、ようお出でなされました。

傳藏　いや、あまりようも參らぬて。

與次　これ與五郎、それへ出い。只今傳藏樣がお出でにて、先月晦日にお役所にて百兩の代金そちにお

渡しなされたとあるが、受取つた覺えがあるか。（ト是れにて與五郎ぎつくり思入。）

與五　さあ、其代金は、受取りましてござりまするが。

與次　して、其金子は如何いたした。

與五　さあ、其の金子は。

與次　こりや、知るまいと思ふか横着者め、吾妻とやらいふ藝者に馴染、大枚百兩といふ金、遣ひなくしたであらうがな。

與五　全く以て。

與次　そんなら何に使つた。

ト與五郎權九郎の袖を引き、何とか言つてくれといふ思入、權九郎素知らぬ振をして居る、與五郎是非なく、

與五　其の金子は、貸しましてござりまする。

與次　して、そりや何者に。

與五　外でもござりませぬ、是れなる權九郎に貸してござりまする。其の譯と申しまするは、さる浪人に慮外をなし既に手討になる所、百兩にて其の場を扱ひ、千葉樣よりわたくしが、受取り參りし

金子をば、貸してくれと申しますゆゑ、人の命に替へがたく、據なくあなたが僞り、貸し遣してござりまする。（ト言ひかけるを、權九郎打ち消して、）

權九　あこれ〳〵、與五郎さまそりや何をおつしやります、私にお貸しなされたなどゝは、何日のことでござりまする、權九郎は存じませぬぞ。

與五　何の知らぬことがあるものか、あれ程そなたが頼んだのに。

權九　是れは又情ない、如何にその身に火が附けばとて、覺えのない權九郎に、言ひかけをさつしやりますか。

與五　言ひかけとは何のこと、慥な證據は其の時に、證文が取つてあるわいの。

權九　なに、證文がござります、其の證文拜見しませう。

與五　さあ、それは。

權九　證據をお見せなされませ。

與五　其證文を入れたる紙入、盗まれたゆゑ、今となつては。

ト口惜しき思入、此時花道より下駄の市、紺の腹掛股引鳶の者のこしらへにて出來り、門口にて窺ひ居る、與次兵衛思入あつて、

与次　うぬ、憎い奴め。（ト與五郎の襟上を取つて引附け、）藝者狂ひに遣ひ捨てしを、權九郎に罪を塗り附け、ぬく〳〵それで濟まさうとは、思へばく〳〵憎い奴、二朱か一朱のことならば不承もしようが大枚百兩、形なしにした腹癒せは、かう〳〵〳〵。

ト二尺ざしにて打ちすゑる、奥よりお照お靜出て是れを留め、

お照　あゝもし父さん、是れには樣子がござんせう、まあ〳〵、御了簡なされませいなあ。

與次　えゝ、そちが知つたことではないわい。（ト與次兵衞お照を突きのける、傳藏又與五郎を引附け、）

傳藏　やい與五郎、おのれ金子を受取りながら、親淨閑へ渡さぬゆゑ、又候手代が勘定所へ參りしゆゑに我々が、重役の疑念を受け帶刀にも拘はる仕儀、これ皆おのれが仕出せしこと、自體生白けたしやッ面ゆゑ藝者などが惚れるから、かゝる事も起ると申すもの、以後の見せしめ、かう〳〵かう。（ト扇にて打ち据ゑ突放す、與五郎口惜しき思入。）

與五　ちえゝ大事の證文失なうて、身の言譯も立たざるか。是れといふも、おのれめゆゑ。

ト權九郎の胸づくしを取り思入。

權九　又しても〳〵、如何に物が言ひよいとて正直正路の權九郎へ、言ひかけなさるはお情ない、若旦那でもどなたでも、もう此の上は堪忍ならぬ。

ト算盤を持つて立ちかゝるを、お照お靜その手に縋り、

お照　あゝこれ、そなたまでが同じやうに、

お靜　お怪我があつては濟まぬわいな。

權九　えゝ、自體お前方が留めるのが、腹が立つてならぬわい。(ト振拂ひ)いつそのことに。

ト算盤を振上げる、此時門口の下駄の市つか〱とはひり、權九郎を取つて投げる。

あいたゝゝゝ。(ト與次兵衞見て、)

與次　や、そなたは抱への下駄の市。

權九　何でおれを投げたのだ。

市　投げてもいゝ、打ち殺しても大事ない。

權九　そりや又何ゆゑ。

市　何もかもいるものか、與五郎さまはわれには何だ、此山崎屋の若旦那、主人を打つても大事ねえか、一分一厘疵が附きやあ言はずと知れた主殺し、三尺高い木の空で冷てえ槍の田樂は、木の芽はしゆんだがどつとはしめえ、それゆゑおれが留めたのだ、命が入らずば打たつしやい。

權九　さあ、それは。

市　えゝ恩知らずの禿天窓め、隅の方へ引込みやあがれ。
權　へゝい。（トしよげる。）
與次　いや大事ない、打ちのめせ。今與五郎は此親が、久離切つて勘當なすわ。
與五　すりや私を。
與次　大枚百兩といふ金を、遣ひ捨てたる科により、勘當なせば主人でない。
權九　主人でなければ番頭が、打つても大事あるまいが。人の事より我が身の事、出入先きの番頭を、抱へが投げては濟むまいが。
市　おゝ、濟むわ。
權九　そりや又何で。
市　若旦那が勘當ならおれも爰の出入を上げらア。出入でなけりやあ町内の高が商人呉服見世、手拭一筋買つてもお客だ、うぬらの天窓の十や二十ぶッ毀しても大事ねえ、惡くぐづ／＼ぬかしやあがると、屋體骨を叩ッ毀すぞ、鍵の降らねえ用心しろ。
與次 權九　イヤアー。（ト恐れる。傳藏思入あつて）
傳藏　うぬ、鳶の者の分際で武士の前をも憚らず、最前からの雜言過言、眞一つになす覺悟なせ。

ト傳藏刀を持ち立ちかゝる。下駄の市舞臺の眞中へ胡坐をかき、

市　何だ御大層な覺悟呼はり、見掛けはけちな野郎だが餓鬼の折から役場ぢやあ、一番かけに火の中へ飛んで飛び込む向ふ見ず、どんなおほりを喰はうとも、五分でも引かねえ働きに、梯子持から段々と登つて今ぢやあ頭分、野暮に背中や手の先きへ彫物をして脅すのとは、ちつと違つた鳶の者、朱入りの代りは生疵の、年中絶えねえ此の體、腕から切るか足から切るか、骨を殘さずすつぱりと手際を見せて切らつしやい。

傳藏　うぬ、其口を。（ト拔きかけるを、與次兵衞留めて、）

與次　あゝもし／＼御了簡下さりませ、彼れをお手討になされまするど、跡の難儀は此春閑、御檢使沙汰に大物入り、百兩損した上なれば、半錢も出したうございりませぬ。

傳藏　それぢやと申して。

權九　はて、主人が難儀になりますれば。

與次
權九　どうぞ御了簡下さりませ。

傳藏　むゝ、此家の難儀とあるからは、主人に免じて助けくれう。（ト傳藏思入あつて下に居る。）

市　へん、大方そんな事だらうと思つた。

與次　さあ與五郎、何事も皆われから、又もや難儀のかゝらぬうち、此家をとッとゝ出て行きやれ。

與五　(思入あって)はい、参りますでござりまする。

市　して若旦那には、是れからどこへ。

與五　さあ以前の家來海士崎町の、駕屋甚兵衛が方へ行く心、是れに附けても實の親、治太夫様の御浪浪に、便りない身の此の與五郎、力と頼むはそなたばかり。

市　そりやあお案じなされますな、及ばずながら私が、どこがどこまでもお世話をいたします何も愛の家ばかり、日は照りませぬ。さあお供しませう、お出でなさりませ。

お照　そんなら、是れが。(ト袖にすがる。)

與五　勘當受ければ、縁は是れまで。

お照　ハアヽ。(トお照泣伏す。)

與五　よしなき我ゆゑお照どの、又二つには親御まで、お年の上に何かの御苦勞。

與次　かゝる事もあらんと存じ、拵へ置いた此の附髪、(ト硯箱の引出しより附髪を出し天窓へ附け、)昔にかへる身は與次兵衛。

與五　隨分ともに、御機嫌よろしう。

與次　え〻、知らぬわい。（ト與次兵衞脇を向く。）

市　慾張り親仁に構はずと、さ、若旦那ござりませ。

ト與五郎を引立て下駄の市門口へ出る、お照お靜泣きながら、

お靜　左樣なれば若旦那。

お照　與五郎さま。

與五　達者で居やいの。

お照
お靜　ハア〻。（ト泣伏す。權九郎立ちかゝり）

權九　え〻何をぐづ〳〵、早く行つて貰ひませう。（ト下駄の市權九郎を見て）

市　證據のねえを附込んで、いはゞ騙りの權九郎。（ト立ちかゝるを與五郎留めて）

與五　あこれ、何事も此身の越度。

市　それだといつて。（ト又立ちかゝるを）

權九　一昨日ござれ。（ト門口をぴつしやり締める。）

市　うぬ、罰當りめ、覺えて居ろよ。

ト唄になり、與五郎悄々と先きに立ち、下駄の市跡に附添ひ、花道へはひる。

與次　さて〳〵憎き忰與五郎、金子を使ふのみならず、あなた方まで御苦勞掛け、
傳藏　それも金子の行き場が分り、身共も是れにて安堵いたした。
與次　何はなくとも傳藏さまには、奥にて御酒を。
傳藏　いや、身共は是れなる權九郎に、申し談ずる仔細もあれば、與次兵衞には構はず奥へ。
與次　左樣なれば御免下され。さ、娘來やれ。
お照　あい。（ト唄になり、與次兵衞お照の手を引き、お靜附添ひ奥へはひる。跡傳藏權九郎殘り）
權九　傳藏さま。
傳藏　權九郎、首尾よく參つたな。
權九　これであなたも私も、戀の遺恨を晴らしました。
傳藏　勘當の身となる上は、吾妻はいはずと身共が女房。
權九　お照はさしづめわしが女房。
傳藏　思へば拂ひの百兩が、
權九　種々樣々の用に立ち、
傳藏　互ひの望みの叶ふといふも、

權九　梶井主膳が皆働き、
傳藏　猶も彼めに密談なし、
權九　何かは後して、
傳藏　權九郎、
權九　傳藏さま、
傳藏　その內逢はう。（ト時の鐘唄になり、傳藏は下手、權九郎は奧へはひる。是れにて道具廻る。）

（山崎屋裏手の場）――本舞臺向う一面忍び返し附きの黑塀、三尺の開きの庭口、後黑幕、見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て山崎屋裏手の體。時の鐘合方にて道具留る。とやはり右の鳴物にて、眞中の開き口より、お靜お照の手を引き出て來り、四邊を窺ひ。

お靜　お孃さま。
お照　お靜。
お靜　あゝもし、お靜におつしやりませ。
お照　どうぞ早う與五郎さまに、ま一度逢はせてたもいの。

お靜　必ずお案じなされますな、是れから直にお供なし、きつとお逢はせ申しますから、ようお支度なされませ。(トお靜身支度をなす。)

お照　與五郎さまが失ひしあの百兩は權九郎が、正しく巧みの樣子なれど、證據なきゆゑ言譯立たず、越度となりしがおいとしさに、母樣より貰うたる此三光の櫛の價は、百兩餘りと聞きしゆゑ、せめてこれをお渡し申し、お身の明りの立つやうに、どうぞして上げましたいわいなあ。

お靜　是れにて金子調へば、お身の明りの立つは必定、斯ういふ內も心が急けば、(トお照に頭巾を冠せ、)人の目つまに掛らぬやう。

お照　少しも早う。

お靜　サ、ござりませ。

ト時の鐘合方にて、お靜お照の手を引き花道へ走りはひる。是れにて此道具廻る。

(山崎屋の見世、夜半の場)――本舞臺元の見世の道具、一面に戸をさし眞中に三尺の潜り戸、總て夜の體、時の鐘にて道具留る。と見世の潜りより手代の一、二、丁稚、下男二人、山崎屋といふ弓張提灯を持ち出來る、跡より權九郎出て、

權九　これ〳〵手前達は東西に別れ、早く跡を追掛けてくれ。
皆々　はい〳〵、畏りました。
權九　何でも與五郎を慕つて行つたのだから、山下の界隈を氣を附けてくれ。
手一　それぢやあ私共は、山下の方へ行きませう。
手二
權九　おゝさうしてくりやれ、いや又それともお靜が宿の、六浦の方へ行つたかも知れぬ。
手一　いや、六浦の方は淋しくツて、氣味が惡いな。
權九　そんなことを言はずとも、それ、骨はぬすまぬ、早く行つてくれ。（ト權九郎金を遣る。）
手一　是れは兩方へ一分づゝ。
手二　それでは怖くも何ともない。
權九　その勢ひで少しも早く。
皆々　合點でござります。（ト時の鐘、合方にて花道へはひる。）
權九　あゝ折角與五郎を罪に落し、お照さんを女房と思ひの外に駈落とは、いつも同じ芝居の狂言、あんまり作者も智惠がない。ちつとは娘が番頭に、惚れるゞ趣向がありさうなものだ。
　ト花道の方を見て居る。時の鐘合方ばた〳〵にて、花道より、以前のお長　櫛　笄を拔かれし體にて髮

を亂し、長襦袢一つにて走り出來り、權九郎に縋り附き、

お長　もし、盜人に前逢ひました者、お助けなされて下さりませ〳〵。

權九　えゝこつちにも取込み事、それどころでは、（ト お長の顏を見てびつくり。）や、あなたは最前の御新造さまではござりませぬか。（ト お長權九郎を見て。）

お長　ほんにお前は山崎屋の、そんなら爰は。

權九　はい、山崎屋の見世先きでござります。

お長　えゝ嬉しや〳〵、それでちつと落附いたわいな。

權九　今承はりますれば、盜人にお逢ひなされたとおつしやりましたが、さてはお召物は盜人に。

お長　さあ剝ぎ取られて此姿、それのみならず大勢で手籠めになさんとせし所を、ソウ〳〵迯げて來ましたわいな。

權九　それは危ないことでござりました、何は兎もあれ爰は見世先き、先づ〳〵奥へ。

お長　どうぞ匿うて下さんせ、怖うて〳〵ならぬわいな。（ト お長顫へながら言ふ。）

權九　御尤もでござります、さあ、おはひりなされませ。

ト 權九郎先きにお長滑り戸より内へはひり、戸をぴつしやり締める、時の鐘にて道具廻る。

（同じく奥座敷の場）──本舞臺一面の平舞臺、向ふ一間の床の間、此脇地袋戸棚、違ひ棚、腰張りの茶壁、上手折廻し障子屋體、此前に六枚屛風、眞中に夜具長持と記せし誂への長持、總て山崎屋奥座敷の體。こゝに與次兵衞眼鏡を掛け、丸行燈の明りにて、手箱より小判を出し算へ居る、合方にて道具留る。

與次　與五郎めが跡を慕ひ娘が家出せし上は、もう一旗揚げねばならぬ、どうか最前見世へござつた御新造のやうな女にて、持參をしつかり持つて來る、女房を一人持ちたいものだ、それでないと百兩の穴がめつたに埋らねえ。（ト金をしまふ。やはり合方にて下手より權九郎お長を伴ひ出來り、）

權九　もし旦那、最前の御新造樣が、お出でなされました。

與次　なに、石井樣の、（ト眼鏡の上から見て、）是れは如何なされました。（トびつくりなす。）

お長　最前こなたより歸りがけ、山の內にて四五人の盜人に出逢ひまして、髮の飾りも衣類も皆剝ぎ取られたる上、手取り足取り私を辱めんといたす所、供の者が支へますを隙を見合せ摺り拔けて、やう〳〵迯げて參りましたわいなあ。

與次　それはひどい目に、お逢ひなされましたな。

お長　いえもう、生きた心地はござりませなんだわいな。

權九　よくそれでも其中を、逃げ延びてお出でなされました。

與次　何にいたせお襦袢一つで、嘸お寒うござりませう、幸ひこゝに娘の衣類、これをお召しなされませ。（ト上手の屋體より、誂への派手なる小袖緋鹿の子の下締を持つて來る。）

お長　有難うござりますれど、此樣な御厄介になりましては。

與次　何の御遠慮に及びませう。

お長　左樣なればお詞に隨ひ、少々拜借いたしませうわいな。

權九　どれ、引掛けてあげませう。（ト權九郎小袖をお長に着せる。）

お長　これは憚りでござりますわいな。（トお長小袖を着て下締を締める。）

與次　帶を何ぞあげませう。

お長　いえ〱、是れでよろしうござりますわいな。

與次　左樣なればお心任せに。おゝ權九郎、最前差上げようと思つたお肴があらう、お燗をつけて持つて來やれ。

權九　ほんに左樣でござりました。どれ、持つてさんじませう。（ト權九郎奥へはひる。）

お長　いえもう、其のやうなお心遣ひは、御無用になされて下さりませ。

與次　いえ、どうで私も喰べますれば、必ず御遠慮なされますな、

　ト合方にて奥より權九郎、硯蓋と銚子、盃臺に盃を載せ持ち出來り、お長の前へ置く。

權九　生憎今宵は家内の者が、出拂ひましてござりますゆゑ、お吸物さへ差上げませぬ。

與次　さあ、何はなくとも、お一つお上りなされませ。

お長　いえ／＼私は、一向下さりませぬわいな。

與次　ではござりませうが、お女中はお氣をお揉みなされますと、えてお癪の起るもの、御酒は何よりよいお藥、平にお一つ召上りませ。どれ、お燗を見て差上げませう。(ト盃を取り上げる、權九郎酌をなす、與次兵衞ぐつと呑んで、)左樣なれば、憚りながら。

お長　折角の思召しゆゑ。(ト盃を取上げる。)

權九　どれ、お酌をいたしませう。

お長　少々おつぎ下さりませいな。(ト權九郎ぐつと注ぐ。)是れはまあ滿々と、どういたしませうぞいな。

權九　もし召上られずば、私がお助け申しませう。

與次　いや／＼、其のお盃は私が、お助け申しませう。

權九　いえ／＼私が、先約でござりまする。

お長　まあ〳〵お待ちなされませ、此のお盃は御主人へ御返盃といたしませうわいな。

與次　それは有難うございます。(ト盃を取り上げる。)これ、權九郎つがぬか。

權九　はい、つぎますかな。(トつんとしてつぐ。)

與次　知れたことぢやわ、おとゝゝゝ、こぼれるわえ、一粒萬倍々々、(トこぼれし酒を額へつけ)然し、斯う滿々とは呑めぬ、權九郎助けてくれぬか。

權九　いえ、私は酒は嫌ひでございます。(ト脇を向く。)

お長　少々ならば私が、お助け申しませうわいな。

與次　それは有難い。(ト一口呑んで)左樣ならば、お助け下さりませ。(トお長取つて呑み)

お長　此のやうにたべましたら、今にきつう醉ひませうわいな。

與次　たんとお醉ひなされませ。

お長　したが女子が深うたべますと、みだらになつてなりませぬわいな。

與次　いや、なつてもよろしいではござりませぬか。

權九　も一つお過しなされませ。

お長　此のお盃は、番頭どのへ。

權九　それは〳〵有難うござります。
　ト權九郎悦び取らうとする所を、與次兵衞盃を引つたくり、
與次　どつこい、そつちへは遣らぬぞ。こりや、おれが助けてお貰ひ申したのぢや。
權九　でも、御新造さまより私へ。
與次　主の詞に背くのか。
權九　えゝ忌々しい、どれ臺所へ行つて一杯やらうか。（ト合方にて權九郎奧へはひる。）
與次　先づ邪魔を拂つたわえ。（ト誂への合方になり、）さ、もう一つお過しなされませ。
お長　いえもう、私はきつう醉ひましてござりますわいな。
與次　それでもまだ仰しやつた、みだらにおなりなされませぬ。
お長　是れからもそつと過しますと、何所でも構はずそれなりに、臥りますのが癖ゆゑに、お酒ばかりは夫から、きつく禁じられましてござりますわいな。
與次　お睡くなつたら御遠慮なく、爰へお休みなされませ。
お長　さあ今に迎ひの者は參らず、夜更けて戻るは氣味も惡し、殊にきつう醉ひましたれば、どうか今宵はお邪魔でも、お泊めなされて下さりませいな。

與次　なに、お泊りなさる、それは有難いッ、お睡くなつたら其儘に、お横におなりなされませ。
お長　それほどまでに御親切に、思召して下さるとは、まことに嬉しうございまする。
與次　わしも嬉しう思ひまする。（ト側へ寄らうとするを、お長飛び退き、）
お長　あれ、何をなされますぞいな。
與次　さあ、これは。（ト袖を捉へるを、お長振拂ひ、）
お長　こりやあなたには、御酒機嫌でござりますな。
與次　いえ酒機嫌ではござりませぬ、最前見世へお出での折、縮んだ皺も伸びるほど惚れましたれど、人様の御新造ゆゑ、無駄な事と思ひましたに今夜のお出で、我が身に取つては結ぶの神、よい年をして馬鹿々々しいとおさげすみもござりませうが、幾歳になつても忘れぬは此道ばかりでござります、どうか一夜のお情に、預りたうござります。
お長　不束な私をそれ程までに思召す、お志しは嬉しいけれど、夫のある身でござりますれば。
與次　つい應とはおつしやられまいが、假令夫のある身でも、手籠めに逢はゞ何となされまする。
お長　そりやどうも、是非がござりませぬわいな。
與次　さあ、そこでござります、最前の盗人に手取り足取り押へられ、手籠めに逢つて御覧じませ、ぱつ

と世間へ評判立ち、お内のお恥になりまする、それとは違ふ私一人、誰も知り人はござりませぬ、無理なことぢやが此願ひ、どうぞ叶へて下さりませ。
お長　それぢやといふて女の操、これはつかりは、
與次　どうでもならぬと、おつしやりますか。
お長　お許しなされて下さりませいな。（ト與次兵衛思入あつて）
與次　よろしうござりますく、左樣ならお泊め申すことはなりませぬ、今宵も最早九つ過ぎ、今から一人でお歸りなされ、途中でどんな馬鹿者が、どんな事をしようも知れぬ、さあくお歸りなされませ。
お長　そのお腹立ちは御尤もながら、今からどうして私一人。其樣なことをおつしやらずと、お泊めなされて下さりませいな。
與次　そんならすなほに言ふことを、お聞きなされて下さりますか。
お長　さあ、それは、
與次　但しお歸りなされますか。
お長　さあ、

與次　さあ、
兩人　さあ〳〵。
與次　色よい返事をお聞かせ下され。（ト是れにてお長思入あつて、）
お長　女子の身では第一に愼まねばなりませねど、否と申せば歸れとの、其のお詞に是非なくも、操を捨てゝお心に、隨ひまするが其代り、今宵限りでござりますぞえ。
與次　そりやもう御得心さへ下さらば、跡ねだりは申しませぬ。
お長　左樣ならば一間にて、（ト立上り、癪の起りし思入にて胸を押へ、）あいたゝゝゝ。
與次　こりや如何なされました。
お長　最前思はぬ賊に出逢ひ、怖い〳〵と思つたので、持病の癪が起りました。
與次　それでは押して上げませうか。
お長　いえ、少し横になれば直に納りますわいな。
與次　左樣なれば、少しも早く。
お長　御免なされて下さりませ。
ト唄になり、お長是非なき思入にて上手屋體へはひり障子を締る。跡に與次兵衞嬉しき思入。

與次　さてうまいわ〳〵、俄雨で四つ手網へ大きな鯉がかゝつた同様、思ひがけない今夜の獲物、あつさりとした洗ひより、こつてりしたこい汁が下戸の口には何よりだ。どれ、手料理に。（ト上手の屋體を見込む。これを道具替りの知らせ）かゝらうか。

ト嬉しき思入、合方にて此道具廻る。

（元の見世先の場）＝本舞臺元の見世先きの道具へ戻る。と時の鐘にて、上手より非人の一組冠りにて酒菰を冠り、下手より二、三、四、五、何れも酒菰を冠り出來り、

四人　頭。

一　これ。（ト四人に囁き門口へ寐ると、花道より牛次弓張提灯を持ち出で、門口へ來り）

牛次　お頼み申します〳〵。（ト門を敲く、是れにて内より上の戸を明け、權九郎顔を出し）

權九　はい、どなたでござります。

牛次　最前参りました、石井の供の者でござります。（ト提灯を見せる。）

權九　おゝ、是れは御新造さまのお供さんか。

牛次　はい、左様でござりまする。もしやこなたへ、御新造さまは。（ト言ひ掛けるを）

權九　先刻お出でなされたゆゑ、お泊め申して置きました。

半次　やれ嬉しや〳〵、それで安堵いたしました。定めて樣子はお聞きなされたでござりませうが、途中にて盜人に出逢ひ、御新造さまを見失ひ、內へとては歸られず、所々方々を尋ねし所、お行方が知れぬゆゑ、もしやと思つて參りましたが、先づはあり所が知れまして、是れでお供が出來まする。

權九　いや最前からお前のお出でを、御新造さまも待つてゞあつた、さあ〳〵、おはひりなされませ。

ト上の戶を下し、潛り戶を明ける。

半次　左樣なれば、御免なされませ。

ト半次內へはひろ。此の後より門口にて寐て居たる非人皆々續いて內へはひろ、內にて、

權九　や、こいつらは何で內へ。

一　盜人に來たのだ。

權九　ヤア、、押込みだ〳〵。（ト時の鐘、ばた〳〵にて此道具廻る。）

（元の座敷の場）――本舞臺元の座敷の道具へ戾る。とゝかしいゝみの合方にて、以前の與次兵衞、上手

與次　癪を幸ひ側へ行つて押して遣らうと言つたれど、寐れば直に納るといふので、爰に待つて居たが、いつの間にか鼾の聲、もう癪も納まつたと見える。どれ、側へ行つて樣子を見ようか。
の屋體を窺ひ居て、
ト上手の障子を明ける、ばた〳〵になり、奧より半次權九郎を後手に縛り、四人繩を持ちて引立て、
一は拔身を持ち出る、與次兵衞びつくりして、
や、こりや盜人か。
ト此聲に上手屋體よりお長出で、皆々を見てびつくりなして顫へ、與次兵衞に縋る。
一　さあ、聲を立てると一突きだぞ。（ト刀を疊へ突立てる。）
與次　どうぞお許しなされて下さりませ。
一　許してやるから、金を出せ。
與次　えゝ。
一　明神下で評判の此頃仕出しの山崎屋、金のあるのを聞き込んで、態々盜みにやつて來たのだ、衣類道具に目は掛けねえ、金を殘らず、
四人　出してしまへ。

與次　見込まれたれば仕方がない、命には替へられぬ。（ト箱より小判の包みを出し、）こゝに小判が三十兩是れをお持ち下さりませ。（ト出す、一取つて、）

一　馬鹿アいへ、小切見世でも三間間口、こんなことぢやあきかねえわ。

二　すべよく金を出しやあよし、

三　隱しやあがると、命がねえぞ。

四　それも一思ひにやあ殺さねえ。

五　一分だめしにしてくれらア。

與次　あゝ出します／＼、左樣なれば、もう二十兩、是れで御了簡下さりませ。

（ト地袋の戸棚より二十兩包みを出す。）

一　えゝちび／＼と刻みアがるな。（ト金を取り、）コウみんな見ろ、さつきの年增があすこに居るぜ。

四人　ほんになあ。

與次　さては最前、此女中を。

一　おゝ、櫛笄から衣類持物、殘らず剝いだ、

四人　盜人だ。

與次　そんなら若しや御新造の、

五人　跡をば附けて、仕掛けたのだ。

與次　あゝ思案の外で匿つた、其の甲斐もなく女中ゆゑ、多くの金を取らるゝとは、飛んだ目に逢うたものだ。

一　われの代りに其の女は、おれを始め四人の者が、手籠めにするからさう思へ。

與次　すりや、あの女中を、お前方が。

五人　知れたことだ。（ト牛次思入あつて、）

牛次　いや申し盗人どの、其の女中はわしが主人、櫛笄や衣類は兎もあれ、今こなた衆の手籠めに逢つては、お供をして來た此のわしが、主人の前へ言譯ない、是ればかりは許して下され。

一　喧しいわえ、うぬが濟まうが濟むまいが、そんな義理を構ふものか。これ、そこに酒があるぢやあねえか、持つて來い。

二　合點だ。（ト賊の二銚子と、有合ふ茶碗を持つて來る。）

一　ついでくれ。（ト賊の一茶碗にて酒を呑み居る、お長與次兵衛に縋り、）

お長　もし、どうぞ此の身を穢さぬやう、あなたも共々あの衆へ、お詫びをなされて下さりませ。

與次　おゝ尤もだ〳〵、これ盗人どの、金を出したわしが頼み、女中を手籠めにすることは、どうぞ許してやつて下さりませ。

一　そりやあ色より慾の世の中、金さへ出しやあ許してやるわ。

與次　そんなら此の上まだ金を、

一　出さにやあ女を、

五人　手籠めにせうか。

與次　さあ、それは。(ト詰る。お長縋り附き、)

お長　もしあなたならば兎も角も、あの衆達に此の身をば穢されましては私は、所詮生きては居られませぬ。

半次　金子は後にて主人より、御返濟しませうから、何卒今宵の所をば。

兩人　お助けなされて下さりませ。

與次　乘りかゝつた船、仕方がない。(ト金箱を引くり返し、)是れで身上ありッたけ。

ト出す、一殘らず金を財布へ入れ、

そんなら是れで、もうねえか。

與次　小二朱が一つござります。
一　金を取つたらあの年増を、又見のがせなくなつて來た。
三人　え。（トびつくりなす。）
二　然し爰ぢやあ、金を出した親仁に氣の毒だ。
三　是れからどこぞへ擔ぎ出し、
四　世間知らずにおツけ晴れ、
五　野天で存分樂しまう。
與次　そりや又あんまり。
一　喧しいわえ。これ、なんぞ入物はねえか。
二　幸ひの此の長持。
一　そいつへ打ち込み、擔いで行け。
四五　合點だ。（ト長持をよき所へ出し、お長を引立て、入れようとする。半次立ちかゝり）
半次　假令此身は叶はずとも、御新造さまは渡されぬ。
二三　何を小癪な。（ト半次を引きすゑる。）

お長　え丶情ない、人でなしに身を穢されることかいの。

一　聲を立てると一突きだぞ。

お長　あれえ。（トいふ所を四、五お長を長持へ入れ蓋をなし、棒を通し擔ぎ上げる。）

與次　その長持は遣らぬ〳〵。（ト縋り附くを、一蹴倒す、是れにて與次兵衞ウンと倒れる。）

一　それ、此間に早く。

四人　合點だ。（ト時の鐘にて四、五長持を擔ぎ、一、二、三附添ひ、花道へはひる。）

半次　あれをやつては、此の身の越度、跡追掛けて、おゝさうだ。

トやはり時の鐘にて、半次花道へはひろ。跡に權九郎殘り、縛られたまゝうろ〳〵して、

權九　よい年をして御新造を、自由にしようと思つたばかり、有金殘らず盗まれたも、いはゞ隱居の券柄、詰らぬ者は權九郎、酒も呑まずに此のやうに、とんだお相伴を喰つたわえ。

トばた〳〵になり、下手より以前の丁稚、手代の一、二若い衆出來り、

手一　ハイ番頭さん、今歸りました。や、こりや、

皆々　どうさつしやりました。

權九　泥坊がはひつて縛られたわえ。

皆々　それはとんだことでござりましたな。（ト繩を解いてやる。）
權九　いやおれよりはそこに隱居が、泥坊に蹴倒されて、目を廻してござるわい。
手一　や、ほんに、こりや隱居さまが、
手二　何ぞ藥はござりませぬか。
權九　藥はないから、水を掛けろ。
丁稚　合點だ。（ト奥へ走りはひる。權九郎與次兵衞を抱き起し、）
權九　もし旦那さま〳〵。（ト奥より丁稚柄杓の附きし手桶を提げて出で、）
丁稚　番頭さん、水を持つて參りました。
權九　早くぶッ掛けて呼び生けろ。（ト丁稚手桶の水を掛け、）
三人　旦那さま〳〵。
丁稚　とてものことに、（ト手桶の水を天窓からぶつ掛ける。）
與次　むう、（ト心附くを道具替りの知らせ、）ふゝゝゝ。
トずつぷり濡れて顫へあがる。三人是れを見て笑ふ。早めたる合方にて此道具廻る。

（神輿ヶ嶽裏手の場）――本舞臺一面の藪疊、後黒幕、松の立木、石の地藏、日覆より松の釣枝、總て神輿ヶ嶽裏手の體。こゝに以前の長持をおろし、賊一、二、三、四、五焚火をしてあたり居る。此見得禪の勤めにて道具留る。

二　春になつても夜が更けちやあ、やつぱり風が寒いなあ。

三　それに爰はかけ拂ひ、町家を離れた神輿ヶ嶽、

四　夜に入つてから往來は、燒場へ急ぐ早桶ばかり。

五　天狗化物盗人の、休み所にやあいゝ所だ。

一　何にしろ、姉御を爰へ。（ト長持の蓋をあけ、）もし姉さん、こゝで一服、

四人　遣んなさらねえか。

ト本釣鐘、長持の内よりお長、以前の鬘、前髮みだれて惡婆と見える好みのこしらへ、掻巻を引掛け立ち上り、

お長　あゝ、好い心持に、ぐつすりやつたよ。

ト又本釣鐘誂への合方、長持の後より半次出で、

半次　嬶ア、うまく行つたな。

お長　ほんに、狂言のやうだの。

ト半次石地藏を蹴倒し、臺石へ腰を掛ける、此の地藏長持の側へ倒れる、お長これを踏臺に長持より出る、四、五直に蓋をする、お長これへ腰を掛ける。

半次　金があるだけ盗人の用心のいゝ山崎屋、どうでたゞぢやあ行くめえと、姉御を主に御用達。

お長　石井の妻とこしらへて、堅く見せたる美人局、首尾よくいつた今夜の仕事。

一　ほんに姉御の人柄姿、熊坂お長と名の賣れた、惡婆の果てとは思はれねえ。

二　それに名に負ふ小手柄半次と、肩書のある親分だけ、供の科介はうまいものだ。

三　是れから見りやあ年が年中、うぬが稼業にして居ながら、役者などは無器用だ。

四　書抜きなしにすら／＼と、せりふの並んだ御用達。

五　一ぺい喰ふは當りめえだ。

お長　然し、二度とは利かねえ仕事。

一　一度で澤山、今夜の働き。（ト財布に入りし金をお長に渡す。）

お長　みんなも大きに、御苦勞だつたよ。

半次　骨折代を遣つてくれ。（ト半次懐より手を出し、火に當りながら煙草をついで居る。）

お長　さあ野手や、手を出しな。

一　おゝい。

ト下手より手を出す、お長包みを切り、小判を左の手へ開いて持ち、につたりと思入あつて、

お長　いつ見ても、惡くねえの。

半次　いゝ手と見えるな。

お長　違えねえ。

ト小判を一イ二ウと賊一の手へ打附けるを木の頭、チョン／＼と、三つ程木を合せ、此の仕組よろしく本釣鐘にて、

ひやうし幕

ト時の鐘につなぎ、直ぐに引返す。

（神輿ヶ嶽山下夜の場）――本舞臺上の方袴腰の石垣、此の上草土手松の立木、片附けたる出茶屋の道具、葭簀卷いて立掛けあり、日覆より松の釣枝、後一面の黑幕、總て神輿ヶ嶽、山下夜の體。ここに甚兵衞白髮鬘やつし裝草鞋、駕舁のこしらへにて四つ手駕籠に腰を掛け、煙草を呑んで居る、△同じく駕舁にて呼び掛けて居る、時の鐘合方にて幕明く。と上下より思ひ／＼の仕出出て來り、行違

ひてはひる。

△ へい駕籠、へい駕籠。(ト侍の仕出出で、)

侍 こりや駕屋、假宅まで幾らでやる。

△ 二百五十で參りませう。

侍 何ぢや二百五十ぢや、百にせい〳〵。

△ さうおつしやらずと、二百下さりませ。

侍 いや〳〵二百出す位なら、駈けて參つて一斤取るわ、馬鹿な面な。(ト侍上手へはひる。)

△ 忌々しい奴だな、今夜のやうな間の悪いことはねえ。

甚兵 もう九つ過ぎだのに、まだ米の錢を取らぬ。

△ 延起直しにちつと替へて下せえ。

甚兵 おい〳〵、(ト甚兵衞駕籠より出る、△又駕籠へ腰を掛け、)へい駕籠、へい駕籠。

ト呼掛けて居る、上手より道具屋善六羽織ばつち尻端折りにて、小田原提灯を點し出來る。

善六 いや〳〵、駕籠に乘つちやあ居られない。

へい旦那、御都合まで參りませうか。

甚兵　お安く乘つて下さいましな。（ト袖を引く。）
善六　えゝ入らないといふに。（ト顔を見合せ、）や、貴樣は駕屋甚兵衞どのぢやあないか。
甚兵　さうおつしやるは、道具屋の善六さんか。
善六　今こなたの所へ行つた歸りだ。
甚兵　それは御苦勞さまでござりました。
善六　いや御苦勞は構はないが、放駒の香合は、どうさつしやるのだ。
甚兵　へい今日までのお約束でござりますが、どうぞもう二三日お待ちなされて下さりませ。
善六　どうして〳〵、二三日のことはおいて、半日も待たれない。其譯は外へ賣れば右から左り百兩になる代物だ、つい心安いから是れまでは待つてやつたが、あの香合の持主の質屋の方でもう待たない、丁度外に買手があるゆゑ、明日は賣つてしまふつもり、さう思つて居て下せえ。
ト花道へ行きかけるを留めて、
甚兵　いやあの香合を、外々へ賣られましては故主の身の上、わしも生きては居られぬ仕儀、どうぞ待つて下さりませ。
善六　その言譯も是れまで幾度、今度ばかりはもう待たれぬ。

甚兵　そこをお前の執成しで。

善六　えゝしつこい、知らぬといふに。（ト留める袖を振拂ひ、善六足早に花道へはひる。）

甚兵　あゝこれ、氣の短い、待つて下されといふに。（ト甚兵衛跡を追掛けてはひる。）

△　おいおい甚兵衛どのいい、いゝ加減にしねえのか、仕事があると困るわな、あれあれどこまでも追掛けて行く、いや困つた親仁だわえ。

ト呟きながら又駕籠の中へはひろ。時の鐘合方にて、花道より、前幕のお靜お照の手を引き出來り、

お照　これお靜、わしや足が痛うてならぬわいの。

お靜　もう少しでござります、御辛抱なされませいなあ。

お照　それぢやというて、痛うていて歩かれぬわいな。

お靜　其のやうにお痛ければ、今に山下へ參りまして、駕籠にお乘せ申しませうわいな。

お照　どうぞさうしてたもいの。（ト右の鳴物にて兩人本舞臺へ來る。）

△　へい駕籠、へい駕籠。もし、御都合まで參りませうか。

お靜　おゝ丁度よい所に駕屋さん、海士崎町までお賴み申しますわいな。

△　はいはい、畏りました。

お靜　いか程でござんすかえ。

△　へい海士崎町までなら、二百文でござりまする。（トお靜巾着より金を出し、）

お靜　これを取つて下さんせ。（ト渡す。）

△　生憎お釣錢がござりませぬ。

お靜　いえ〱お釣錢には及ばぬから、どうぞ急いで下さんせいな。

△　へい〱それは有難うござりまする、只今ちよつと相棒が、そこらまで參りましたから、呼んで參ります間、少しお待ちなすつて下さいまし。

お靜　ちつと心の急く者なれば、早う行つて來て下さんせ。

△　へい〱直行つて參ります。えゝ、コノ甚兵衞どのは、そこらに居てくれゝばよいが。

ト時の鐘にて△花道へ足早にはひる、跡兩人殘り、

お照　これお靜、こゝは何といふ所ぢやぞいの。

お靜　神輿ヶ嶽の山下でござりますわいな。

お照　何ぢややら氣味の惡い所、早う駕屋が來てくれゝばよいが。

お靜　いえ、直に參りますでござりませう。

ト此以前より、後へ長五郎頰冠りにて窺ひゐて、態と下手より跫音をさせて出來り、

長五　これは、大きにお待遠でござりました。

お靜　おゝ、お前は駕屋さんでござんすか。

長五　へい、今の男の相棒でござります。

お靜　さうして、今のお人わえ。

長五　夜明しの濁り酒で、一杯やつて參ります。もし、何ぞお大事な物がござりますなら、蒲團の下へ入れますから、お出しなされませ。

お照　そんなら、此包みを。（ト櫛を包みし袱紗包みを出す）

お靜　あゝもし、それはあなたしつかりと。（ト渡しては惡いといふ思入、長五郎これを見て、）

長五　だいぶ此頃は物騷ゆゑ、こつちへお渡しなされませ。（トお照の懷にある袱紗包みを引出す。）

お照　あゝそれは。（ト留めるを振拂ひ、）

長五　わしがしつかり預りました。

お靜　えゝ此人は、不作法な、人の物を手籠みにして、さあこつちへ返しやいの。

トお靜取りに掛るを拂ひのけ

長五　喧しいわえ、物騒だから大事な物は、おれが預つてやらうといふのだ、それをぐづ〳〵吐かしやあがると敲ツくぢくぞ。

兩人　えゝ。（トびつくりなし、）

お照　これお靜、どうせうぞいの。

お靜　よろしうござります、お案じなされますな、私が居りますわいな。

　　　トお靜こはがるお照を後へ圍ふ、長五郎思ひ入あつて、

長五　さあ、まだ是ればかりぢやァあるめえ、見りやあ立派なお孃さん、男を連れず夜る夜中、女ばかりで歩くからにやあ、てつきり下女が取持ちで情人の所へ行くのだらう、櫛ばかりぢやねえ、懐に金があるに違ひねえ、さあそれもおれが預らう。

お靜　えゝめつさうな、金などを、何で持つて居ようぞいの。

長五　うぬが持たざァ、お孃さん、おめえが持つて居なさるか。

お照　わたしや持つては居ぬわいな。

長五　持たぬと言やあ仕方がねえ、こいつァ初春早々から、悄まれにやあならねえわえ。

　　　ト手拭に巻いてある雪駄直しの庖刀を出し、口に啣えて尻を端折る。時の鐘、兩人是れを見てなどを

とする思入、長五郎庖刀を突き附け、

さあ出せ、出さにやあ是れで突殺すぞ。

兩人　えゝ。

長五　さあ痛え目せぬうち、出してしまへ。

お照　それぢやというて櫛より外、何にも持つては居ぬわいな。

長五　何の持つて居ねえ事があらう、男を慕つて迯げるのに金を持たずに出るものか、高が一兩か二兩の櫛ばかりぢやアあるめえ。

お靜　いえ／＼さうではござんせぬ、其櫛こそは三光とて、世にも稀なる品ゆゑに、賣買にする其の時は、百兩餘にもなる代物。

長五　え、（ト長五郎びつくりし）すりや此櫛は三光とて、百兩になる代物とか、こいつア滿更でねえ仕事だわえ。

お靜　それゆゑどうぞ其櫛を、こつちへ返して下さんせ。何を隱さう、此の娘御の許嫁せし夫の爲め、賣り代なさねばならぬ櫛。

お照　切ない譯のあることゆゑ、慈悲ぢや情ぢや其櫛を、どうぞ返して、

兩人　下さんせいな。

長五　おゝ、櫛がほしけりや返してやらう、其代りにやあ隱して居る、金はおれに渡してしまへ。

兩人　いえ〳〵、金というては。

長五　うぬ、さうぬかしやあ痛え目させるぞ。（トお照を引き附ける。）

お照　あれえ。

　トお靜此中へはひり長五郎を留める。お照逃げにかゝるを長五郎追駈ける、お靜これを支へる立廻り、葛西念佛になり、あちこちと逃げ廻る立廻り、トゞ長五郎庖刀にて過つてお照を切り下げる。是れにてアッと言つて倒れる、お靜見て、

お靜　あゝこりや、お照さまを。

長五　えッ、手が廻つたか。

お靜　人殺しぢや〳〵。（ト長五郎にむしや振り附く。）

長五　やかましいわえ。（ト庖刀にてなぐる、是れにてお靜も手を負ふ、）

お靜　人殺しぢや〳〵。（ト聲を立てるゆゑ、長五郎口を押へ、）

長五　毒喰はゞ皿、仕方がねえ。（ト脇腹へ庖刀を突立てる。此時お靜長五郎の小指を喰ひきる。）

あいた〻〻〻〻、うぬ小指を喰ひ切りあがつたな。

ト長五郎庖刀を拔く、お靜ばつたり落入る。長五郎お照の懷へ手を入れる、お照心附き、

お照 あれ、誰ぞ來て下されいなう。(ト苦痛の思入、長五郎懷を搜し見て、)

長五 む〻、こりや懷に金はねえか、え〻忌えましい。(ト長五郎行かうとしてお照を見て、)後日の憂ひ、不便ながら、(トお照を引起し喉を突く、是れにてお照アッと苦しみ落入る。)殺す心はなかつたに、とんだ殺生をした。(ト死骸を上手石の蔭へ蹴込み、庖刀をぼろッ切れへ包み、腰へさし行かうとして、)南無三、向うへ人が。遣り過して。む〻、さうだ。

ト上手葭簀の蔭へ小隱れする、時の鐘柝つた合方、花道より以前の甚兵衛腕組をなし、悄々と出來り本舞臺へ來り思入あつて、

甚兵 ア今更いふも愚痴ながら、三年跡箱根にて御主人橋本治太夫樣が、殿より預かる千葉家の重寶放駒の香合を、盗人入つて奪はれし、しかも其夜はわしが不寢番、其の失ひし越度にて治太夫樣には永のお暇、元はといへばわしが科、それゆゑどうぞ詮議仕出し、御主人樣の御歸參をと、朝夕願ふ甲斐あつて漸く知れし寶のあり所、詮議の日延も今日明日とせつぱ詰りし寶の代金、大枚百兩といふ金ゆゑ千辛萬苦と心は碎けど、金の出來やう手段はなし。日延が切るれば御主人には申譯

の御切腹、わしも共々死なねばならぬ、あゝいづくの誰が盜みしか、恨めしいことぢやなあ。今宵も最早九つ過ぎ、明日を越すより夜の内に、申し譯にさうぢや〳〵。

ト捨石へ乘り松の枝へ駕籠の上の細引を引掛け、首をくゝらうといふ思入、此内後へ長五郎出掛り窺ひ居て思入、甚兵衞思入あつて、

今夜死ぬのは厭はねど、跡に殘りし娘が難儀、目かいの見えぬ孫を引受け、貧乏世帯に女の手一つ、さぞや困るであらうと思へば、是ればつかりが黄泉の障り、難儀をするも死ぬるのも前世からの皆約束、南無阿彌陀佛。

ト甚兵衞思ひ切つて飛下りようとする、長五郎つか〳〵と出て、甚兵衞を抱き留め、

長五　やれ待て、とッさん待たつしやい。

甚兵　いえ〳〵、放して殺して下さりませ。

長五　樣子は殘らず後で聞いた、死なうといふはよく〳〵の事であらうが、死なずと仕樣があらうからまあ〳〵急かずと待たつしやい。（ト是れにて甚兵衞を抱き下す。）

甚兵　御親切な其のお詞、有難うはござりますが、死なねばならぬ譯のある事、留めずと殺して下さりませ。

長五　死なにやあならねえ譯といふは、慥か金の入る樣子。（ト懷より件の櫛を出し、）此櫛は百兩位にはなる代物だといふこと、是れをこんたに遣る程に、早く持つて歸らつせえ。

ト甚兵衞へ櫛を渡す。

甚兵　そんなら此の品を、私に下されまするか。

長五　おれも知らぬが其品は、三光とかいふ稀な櫛。

甚兵　え丶有難うござります。是れにて寶を取り得ますれば、主人を始め此身の仕合せ、附いては孫や娘が悦び、跡にてお禮も申したければ、どうぞお前のお名所を。

長五　いや其禮には及ばねえ、わしやお居所も定らず、そんなことをいふ手間で、夜の更けねえ内早く家へ。

甚兵　有難うござります、お詞に隨ひ、是れから直に。

長五　益ねえ事に暇取らずと、

甚兵　そんなら此の儘、

長五　ちつとも早く、

甚兵　お別れ申しませう。（ト時の鐘にて甚兵衞下の方へ來て、駕籠を直して居る、長五郎心附かぬ思入。）

長五　無駄骨折つて殺生した、三光とやらの今の櫛、親切ごかしに渡したは、まさかの時に人殺しの罪を首尾よく、

甚兵　え。(ト長五郎これにて思入あつて、)

長五　まだ行かねえのか。

甚兵　はい。

長五　氣を附けて行かつしやい。

甚兵　有難うござります。

ト時の鐘、誂への合方、甚兵衛駕籠を直し擔がうとする。長五郎尻を端折り身拵へする。此内序幕の梶井主膳着流し大小、小田原提灯を提げ出來る、長五郎此の明りに身を背ける、主膳舞臺へ來り、糊紅にすべりし思入にて、明りにて舞臺を見て、

主膳　や、こりや夥しき血潮の滴り。

甚兵　え。

ト甚兵衛びつくりなし駕籠を下へどうと置く、長五郎主膳の提灯を打ち落す。時の鐘、忍び三重、主膳さてはといふ思入にて刀へ手を掛けるを、長五郎留めて、ちよつと兩人立廻り、甚兵衛此の中へ駕籠

を擔ぎ出る。是れを主膳引戻し駕籠を枷に鳴物替つてダンマリ模様の立廻り、長五郎庖刀にて切つてかゝる、主膳打ち落し拔きかけるを長五郎駕籠の垂にて留める。甚兵衞は駕籠を擔ぎ花道へ脫れ行く、主膳長五郎立廻りて主膳は長五郎の庖刀を拾ひ星明りに見る。長五郎は駕籠の垂をすつぽり冠る。是れを木の頭。主膳扨はといふ思入、長五郎垂より顏を出し窺ふ。甚兵衞は駕籠をかつぎ懷を押へ、逸散に花道へ走りはひる。是れをキザミ、双盤にてよろしく、

ひやうし幕

跡シヤギリ

三幕目

興泉寺町梶井宅の場
稻村ヶ崎居酒屋の場
多田藥師石置場の場
戀ヶ窪お長隱家の場

同返し

〔役名〕――雪駄直し長五郎、梶井主膳、小手柄半次、小屋頭喜六、お長子分野手の三次其他四人、主膳弟子、居酒屋の若い者、阿古木源之丞。熊坂お長、喜六娘おこよ、其他。〕

（長谷觀音裏手の場）――本舞臺三間の間草土手の上柵矢來、後見世物小屋楊弓場の屋根を見せ、此

間へ松の立木、日覆より同じく釣枝、總て長谷の觀音裏手の模樣。こゝに○△□◎の仕出し四人立掛り居る、見世物の辻打ち、楊弓の音にて幕明く。

○ 何と、是れから奥山へ行つて、新升亭で一杯やり、生人形を見ようではないか。

△ ほんに生人形の細工人は、肥後の熊本の人ださうだが、役者の人形などは、びつくりするやうな細工だ。

□ あの花魁の人形は、今度土鍋の施行を出した、佐野槌の黛といふ花魁ださうだ。

◎ その人形の花魁より、山の宿花川戸の、假宅をひやかさうではないか。

○ まあさう言はずと附合ひだ、一緒に行つて見物しなさい。

○ それでも吉原と違つて、木戸錢が出るわな。

△ えゝ、しみツたれなことを言ひなさんな、お前に錢を出させようとは言はない。

◎ 錢さへ出ないことなら、どこへでも行つて見物しませう。

□ やう／＼直が出來た。さあ／＼、込まない内に早く行つて見よう。

三人 それがいゝ／＼。

トやはり右の鳴物にて、仕出し四人下手へはひる。やはり此の鳴物にて、花道より喜六羽織股引尻端折

り小屋頭のこしらへにて出來る、上手より長五郎序幕のこしらへにて直しの籠を肩に掛け、古い竹の子笠を冠り、ディ〳〵と呼びながら出來り、舞臺にて行合ひ、長五郎笠を取り、

長五　もし親分、どこへお出でなさいます。

喜六　おゝ、誰かと思つたら長五郎か。

長五　今日は役所でござりますか。

喜六　いや今日は寺參りに出掛けたが、丁度よかつた、ちつとおぬしに用があるゆゑ、歸りに小屋へ寄らうと思つた。

長五　そりやあいゝ所でお目に掛りました、して何ぞ御用でござりますか。

喜六　むゝ、其の用といふは長五郎、まあ下に居てくりやれ。

ト合方かすめて双盤になり、喜六長五郎兩人屈んで、

さて世の中といふものは、儘にならぬものだな。

長五　へゝい、其内にもわしなどは、儘にならぬことだらけでござります。さうして御用といふは、何でござりまする。(ト喜六愁ひの思入にて、)

喜六　外のことでもない、娘おこよのことだ。

長五　へい、どうかなさいましたか。
喜六　長々しく話さずとも、おぬしも知つて居る通り、あの阿古木の殿様と一方ならぬ仲となり、あらうことか御大身のお寐間を穢した娘のおこよ、所で昨日殿様から娘の所へお文が来てな、おゝこれだこれだ。(ト懐の紙入より手紙を出し、)前の方は讀むに及ばぬ。「ふと致し候事にて其方と枕を交し是れ迄馴染候處、御先祖の舊功に依つて數代續きし家名をば、我が世に至り穢し候段、第一の不孝と改心致し自分帶刀を捨て隱居いたし候間、其方事も是れまでの縁とあきらめ申す可く、則ち金子五兩差遣はし候。」(ト讀み掛け、愁ひの思入、長五郎こなしあつて、)
長五　そりやあとんだことになりましたな。
喜六　まだ〳〵こんなことではない、此の手紙ゆゑおこよめが書置をして內を駈出し、撞木橋からどんぶりと。
長五　えゝ、(トびつくりなす。)
喜六　身を投げて死んだわやい。(ト喜六淚を拭ふ、長五郎も思入あつて、)
長五　あゝそりやお濟まねえことをした〳〵、これといふもみんなわつちが仕出したこと、嘸腹が立ちなさるだらう。斯うなると知つたならば、あの時お斷り申せばよかつた、坊主になつても奴にな

つても、お前の前へどうも濟まねえ。さあ氣の濟むやうわつちをば、どうでもしてくんなせえ。

喜六　えゝ馬鹿をいへ、何で手前を恨むものだ、水子で死ぬも百年生きるも、こりやあ定まる因緣だ。

長五　それだといつて、是れがまあ。

喜六　はてさ、いはゞ人間の數にもならぬ、喜六つれが娘の身で、夢に見てえといつても出來ねえことだ。畢竟おぬしがあつたれば、一度ならず二度三度、お伽をしたは身の仕合せ、假令千年の壽命を一年に縮めても、お杉受けた果報者。（ト以前の紙入より紙に包みし五兩の金を出す、此時主膳より來た手紙を落す、兩人これに心附かず、殿樣から下すつた手切代りの此の五兩、半分は娘が法事料、又半分はおぬしに遣るから、あれが形見だと思つてくりやれ。

ト二兩二分紙に包み、長五郎に渡すな突戻して、

長五　そりやあとんだことだ、止しになせえまし。それよりやあ其金を一つにして、立派な法事をしてお上げなせえ、あの子の爲めでござります。

喜六　その法事はおれが又、此の半分へ金を足して、どんな法事でもしてやるから、こりやあまあ娘が形見だから、手前の方へ取つて置いて下せえ。（ト長五郎の手の上へ載せ、無理に持たせる。）

長五　それぢやあ、あの子の形見かね、こんなにしておくんなすつちやあ、居ても起つても居られやァ

しませぬ。然し折角の御親切、それぢやあまあ、お貰ひ申して置きませうかね。
喜六 どうぞ取つて置いて下せえ。
長五 おこよさんの追善に、お花でも上げませう。
ト長五郎金を腹掛の隠しへ入れる、此時下手より非人木綿やつし股引尻端折り、手拭を冠り提籠に鯛と海老を入れ提げて出來り、喜六を見て、
非人 おゝ頭、爰に居なすつたか、不漁で何にもござりませぬから、こんな物を買つて來ました。
ト喜六の前へ出す、惡い所へ持つて來たといふ思入にて、
喜六 何だ此魚は、どうするのだ。
非人 今お前さんが買つて來いと、言ひなすつたからさ。
喜六 べらぼうめ、精進物を買つて來いと言つたのだ。
ト立上つて、長五郎が居るといふ思入をして呑込ませる。此時長五郎は喜六が落した手紙を拾ひ、手早く懐へ入れる。
非人 えゝ、はあゝさうかね、とんだ事をした。返して來やせう。(ト行きにかゝるを、喜六留めて、)
喜六 返すといつたつて生物だ、向うで受取らねえわ。かうせう／＼、此間六部藏の拾ひ所から肴をく

れた、あれが所へでも遣るがいゝ。

非人　それぢやあ、さうしませう。

喜六　長五郎、何にもせぬが、明日の晩夜食を喰ひに來さつせえ。

長五　有難うござります。

喜六　貴樣はまだ歸りはしめえ。

長五　へい、ねつから仕事をしませぬから、もうちつと流して歸ります。

喜六　それぢやあ是れで別れよう。

長五　急いでお歸りなせえ。

喜六　そんなら長五郎、

長五　親方、

喜六　さあ行かう。

トやはり見世物の辻打ちにて喜六非人上手へはひる。長五郎跡を見送り、以前の手紙を出し開き見て、

長五　何々、「今日阿古木御二方樣拙宅へ御出で遊はされ候間、貴下にも御出でなさるべく候、喜六殿へ梶井主膳」ムウ、今の魚の樣子といひ、主膳といふは出來星の此の頃流行る人相見、家は慥に

興泉寺町、こいつァ斯うしちやあ居られねえわえ。（ト笠と籠を持ち上手へ行きかけ、思入あつて、）跡から附いて行つたなら、結句悪いか。（ト肩へ籠を掛け、）仕事の振りで見え隱れに、狸親仁が跡を附け、化の皮をひつぺいだら、どうか元手に、（ト笠を冠り、）デイ〳〵。

トよろしく双盤にて此道具廻る。

（梶井主膳玄關先の場）＝＝本舞臺三間常足の二重、正面石摺の襖、左右重ね桟の杉戸、隅切角に三十郎菱の紋附の高張提灯、上手一間の附屋體、塗骨障子、下手忍び返し附の黒塀。いつもの所門口、是れに「周易人相指南土御門殿配下梶井主膳」と書きたる表札、總て興泉寺町主膳玄關先の體。爰に門弟袴一本差し弟子のこしらへにて机に掛り本を見て居る、門口に町人一人立ち掛り居る、合方にて道具留る。

町人　お頼み申します。

弟子　どうれ。

町人　私は、ちと先生にお願ひ申したいことがござりまして參りました。

弟子　今日は御大身のお客來ゆゑ、人相墨色は休日なれば、明日午前にござらしやい。

町人　左樣なら、又明日上りませう。

弟子　左様いたさつしやい。

町人　へい、おやかましうござりました。

ト下手へはひる、やはり合方にて花道より以前の喜六、非人と共に出來り、直に門口へ來て、

喜六　へい、お頼み申しまする。

弟子　人相なら、明日ござらつしやい。

喜六　いえ、左様ではござりませぬ。

弟子　はあ、何ぞ用事でもござつてか。

喜六　へい、今日こなた様へお出で遊ばしました、お客様の事に附きまして參りました者でござります。

弟子　左様でござるか、して何れからござつた。（ト喜六ぐつとつまり、）

喜六　さあ私は、いえ、お客様に附きまして、參つた者ぢやとおつしやつて下されますれば、旦那さまには御存じでござりまする。

弟子　左様なら、暫くそれにお控へなされ。（ト弟子奥へはひる。喜六四邊を見廻して、）

喜六　何と見やれ、結構なお住居ぢやあねえか。

非人　左様さね、雪駄に例へて見ようなら、爰の家は本皮の五分廣、こちとらの家は上汐に流れて來さ

うだ。

喜六　え丶、父馬鹿をいふかい。

ト合方になり奥の襖を明け、主膳總髮袴一本差し、弟子附添ひ出來り、眞中に住ひ、

主膳　お丶是れは喜六どのか、ようござつた。さあ〳〵、是れへ通らつしやれ。

喜六　いえ〳〵お構ひ下さりますな、これが勝手でござります。

主膳　はて、外の家とは違ふ、其の遠慮には及ばぬこと、さあ〳〵入らつしやれ〳〵。（ト喜六おづ〳〵内へ入り、下手につくばふ。）これはしたり、それでは却つて挨拶が出來ぬ。（ト主膳大事ないといふ思入、喜六呑み込み、よき所に住ふ。）さて、今朝はどうやら降りさうでござつたが、思ひの外の天氣になつて、御兩所さまにも一入のお慰み、喜六どのにもよくこそござられた。

喜六　いやもう、お手紙を拜見いたしますると、取る物も取あへず參りましてござりまする。（ト非人い魚籠を取つて、主膳の前へ持ち行き、）旦那さま、何ぞと存じましたが、さして差上げるものもござりませず、是れは途中で調へました淸いのでござりまする、お珍らしくはござりませぬが、お臺所へでもお上げなされて下さりませ。（ト主膳これを見て、）

主膳　これは〳〵、無用になされいで結構なお土産に預り千萬忝ない、いやもう此節の不漁では何も

ござらぬ、只早不鹽と申すは野菜ものばかり、早速調味いたさせるでござらう。

喜六　冥加に餘りましたことでござりまする、してお殿樣は。

主膳　只今奥で御寢なつてござる、今朝よりの御酒宴でまだお目覺めには間もござらう、女中方も庭先で摘草をいたしてござれば、暫時手前居間でお話しなされ。

喜六　有難うござりまする。これ〳〵、手前はもうよいから先へ歸れ。

非人　左樣なら、先へ歸りましてもよろしうござりますか。

喜六　大きに御苦勞であつた。(ト非人門口へ出て、)

非人　どれ、廓でもひやかして行かうか。(ト非人下手へはひる。)

主膳　これ〳〵、此のお魚を臺所へ持つて參り、こしらへ置けと申し附さやれ。

弟子　畏りました。

主膳　さあ喜六どの、手前の居間でお待ちなされ。

喜六　宜しうござりまするか。

主膳　大事ござらぬ、さあ斯うござれ。

ト唄になり、主膳先きに喜六附いて奥へはひる。此の唄を借り、花道より以前の長五郎出來り、門口

の表札を見て、

長五　梶井主膳、ヘンこいつだな。（ト思入あつて笠を取り籠を側へ置き、門口をずつとはひらうとして、）待て待て、ひよつと親仁がまだ來ねえと、どんな目に逢ふも知れねえ。どうしてやらう。むゝ、さうださうだ。（ト門の外より丁寧に、）へい、お頼み申しまする。

弟子　どうれ。（ト奥より以前の弟子出來り、）何だ、直しか。

長五　へい、只今こなた樣へ、年の頃五十ばかりのお方さまで、お供に魚籠を持たした旦那樣が、おいでゞはござりませぬか。

弟子　おゝ、只今お出でなされたが、何ぞ用か。

長五　へい、雪駄の鼻緒が切れたから、直せとおつしやりましたから參りました。

弟子　あゝ、さうか。（ト喜六の雪駄を取つて見て、）いや、こりや鼻緒は切れて居らぬが。

長五　えゝ、何でござりまする、裏金があまくなつたから、直してくれろとおつしやりました。

弟子　そんなら直して置きやれ。（ト長五郎に渡す、とつくと見て、）

長五　これだ。（ト思はず大きく言ふ。）

弟子　それか。

長五　へい。(ト心附き、)これでござりまする。(ト此時奥にて手を打つ。)

弟子　へゝい。(ト長く返事をして奥へはひる、長五郎内を窺ひ思入あつて、件の雪駄をきつと見て、)

長五　焦茶鼻緒の一枚雪駄、おれを一番、(ト雪駄を打附け、)遣りやあがつたな。

　トきつと見得、唄になり此道具廻る

(主膳宅庭外の場)――本舞臺三間の間通しの黒塀忍び返し附き、眞中に三尺の庭口、開きにて出はひり、總て主膳宅庭外の體。合方にて道具留る、と下手より二人腰元装にて日傘へ嫁菜土筆などを入れ、是れを持ち出來り、

腰一　これみどりどの御覽じませ、私は此やうに、土筆をたんと摘みましたわいな。

腰二　おゝほんに、これは澤山に、よう其のやうに摘ましやんしたな、私は又嫁菜にばかり氣を取られ、土筆はとんと氣が附きませんなんだわいな。

腰一　これから此嫁菜と土筆を、お浸しと三杯酢にして、お上へ差上げませうわいな。

腰二　それはさうと、もうお目覺めの時分であらうわいな。

腰一　ほんに、餘程の間であつたわいな。

腰二　さあお目覺めのないうち、

兩人　參りませうわいな。

ト合方にて兩人庭口より内へはひる。下手より長五郎窺ひ〳〵出來り、塀の穴よりあちこちと覗き、庭口を押して見る。開き明くゆゑ旨いといふ思入にて、

長五　こいつは妙だ。(ト開きをあけ内へはひる。合方にて道具廻る。)

(主膳奥座敷の場)――本舞臺三間の間中足の二重大和葺の本椽附き、向う太鼓張りの通ひ口、上手床の間、下手地袋戸棚、違ひ棚、此の上に渾天儀、筮竹、易書など書割り、上手丸窓の附屋體、下手手水鉢石燈籠、後へ寄せて中窓の屋體、上下柴垣よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、屋體前側障子建切りあり、總て主膳奥座敷の體。よろしく道具留る。と誂への獨吟になり、よき程に障子引拔く、内に源之丞着流しにて椽の上に佇み、おこよ着流し屋敷姿のこしらへにて、源之丞の膝にもたれ居る。此の時舞臺へ番ひの蝶飛び交ふ、是れを兩人見て居る。よろしく獨吟一くさり切れて、

源之　これおこよ、あの春草に蝶々の中睦じく飛交ふありさま、何としたならしいことではないか。

こよ　あの蝶々を見るにつけ、賤しい身にて勿體ない、あなたのお綵開を穢せし私、ひよつと愛想が盡

[illegible]きようかと案じ過して此の胸が、わたしや痛うござんすわいな。

源之　それは入らぬ取越し苦勞、其の苦勞をさすまい爲め、此家の主膳に申し附け表向きにて妾となし、我が屋敷へ呼んだ上は、もウきな／＼思はぬがよい。さあ入らぬ苦勞な仕ようより、亂れし髪を取り上げて、愁ひを拂ふ玉箒、機嫌直しに一つ呑いや。

こよ　いえ私よりあなたのおぐしが、きつう亂れて居りまする。ちよつと私が、（ト立ち上り、後へ廻らうとして、）撫附けても大事ござりませぬかいなあ。

源之　大事ないとも／＼、身に罰が當りはせぬかや。

こよ　あの、憎らしいことわいなあ。（ト源之丞を抓る。）

源之　あいた／＼／＼。

ト又獨吟になり、おこよ源之丞の髪を撫附け、前へ廻り、これでよいといふ思入あつて、下手手水鉢にて、水鏡にて我が髪を撫附ける。此間源之丞後よりそつと覗く、水に源之丞の顔の映る心、おこよ振向く、源之丞おこよの手を取り、元の所へ來て兩人顔見合せ、につこり笑ひ手を取る。これにて獨吟一ぱいに切れると、奥にて、

腰元二人　もうお目覺めでござりませうわいな。

ト此聲に兩人びつくりして双方飛退き、源之丞褥の上へ住ふ、おこよ下手に住ひ、しやんと兩人行儀よくして居る。合方になり、奥より腰元二人銚子、盃、廣蓋に肴を載せ持ち出で來る。跡より主膳以前の裝にて出來り、おこよ源之丞の體を見て、

主膳　これはお二人樣にはどうなされました。はあゝ、よい中の戀いさかひ、御前おたしなみなされませ。

源之　いや〳〵さういふ譯ではない、なうおこよ。

こよ　はい、いつでも斯う、ちやんといたして居りますわいな。

主膳　はゝゝゝ、どうでござりますか。さゝ腰元衆、おこよさまをお側へ〳〵。

腰元兩人　畏りました。（トおこよを源之丞の側へ連れ行く。此時喜六平舞臺下手へ出て、）

喜六　お殿樣、喜六めにござりまする。

源之　おゝ喜六か、よく參つた。

こよ　ほんに父さま、何時の間に。

主膳　いや、今日御兩所さま御來駕に附き、豫て申合せ置きし一儀の樣子も承はりたく、且は殿にも御安堵あるやう、手前方へ招き置きましてござりまする。

源之　それはよく心附いた。さて、いつもながら息災にて重疊々々。

喜六　有難う存じまする。

源之　して、かの一儀どうぢやな〳〵。

喜六　さればでござりまする。只今是れへ參りまする道にて長五郎めに出逢ひ、仰せの通りたばかり果せ、金子も彼れに遣はしました所、涙をこぼして有難がり、何の苦もなく事は十分。主膳樣恐れ入りましてござりまする。

主膳　いやあのやうなる族は、早く遠ざけるが上分別　先づは首尾よく參つて手前も大慶、殿にも御安堵、おこよさまにも、嘸お嬉しうござりませう。

こよ　こんな嬉しいことはござんせぬ。何とお禮を申さうやら、父さん、ようお禮を申して下さいなあ。

喜六　いやもう主膳樣のお計らひにて、長五郎めを掃いてしまひ、まことに大船に乘つたやうな心持でござります。

源之　手前とても同じこと、是れまで彼れには幾度となく合力いたしたれど、止む事を知らぬ彼れが性質、合力いたすは厭はねど、若し朋友共の目に掛り、どんな大事にならうかと案じ居つたわい。

喜六　いつたい性來の悪い奴ゆゑ、どんな大事を引出さうも知れませぬ、萬々御家にでも拘はりますやうなことでも出來て御覽じませ、おこよは元より私めが、死んでも足りはいたしませぬ。

主膳　喜六どの〻言はる〻通り根が悪い奴ゆゑに、好い鳥がか〻つたと心得、時折厭がらせを申しては金銀を貪り取り、着もかぶりもいたさずに只酒と博奕に遣ひ果し、種が盡きれば幾度となくうるさく參るが彼れらが附目、さて／＼非人といふものは。

ト言ひ掛けて喜六の顏を見て心附き、煙草に咽せしこなしにて紛らかす。おこよ俯向く。源之丞顏を背ける。喜六庭の梅の木を見て、

喜六　あ〻、梅がよう咲きましたな。

源之　まことに今が滿開ぢや。

主膳　いや、此の花をお肴に、御前一つ召上りませ。（ト盃をとつて源之丞にさす。）

源之　お〻、一獻過さう。

こよ　どれ、お酌をいたしませうわいな。

トおこよ酌をする。此時下手柴垣を破り、長五郎以前の裝、頰冠りにてつか／＼と出で、椽側へ腰を掛け俯向いて居る。皆々びつくりする。主膳・おこよ源之丞を圍ひ思入あつて、

主膳　これ手前は何だ、何用あつて是れへ參つた、見れば冠りものも取らず、用事あらばなぜ玄關より案内を乞はぬのだ、梶井主膳が圍ひ内、仕儀によつては其の分には差許さぬぞ、不屆き奴めが。

トきつと言ふ、長五郎主膳を見て、

長五　へい、お玄關から參りますも存じて居りますが、御遠慮申してお庭から參りました。

主膳　して、われは何處から來た。

長五　どこからも來ねえ、小屋から來た。

ト頰冠りを取りきつと見得、東上總の合方になり、皆々ぎよつと思入れ。

源之　や、そちは長五郎か。

喜六　どうして爰へ。（トいふを長五郎喜六の胸倉を取つて引寄せ。）

長五　この死損ねえ親仁め、わりやあさつき何と言つた。（ト搖り動かす、喜六顫へ居る。）淚をこぼして誠しやかに、阿古木の殿から娘の所へ金を添へての手切文、娘心に突き詰めて書置をして其晩に撞木橋からどんぶりと、へん、訝な所へ身を投げたな。さつきうぬに逢つた時ちらりと睨んだ交魚、どうやら話しが生臭いと、かん附く途端に落散る手紙、それで分つた小刀細工、誰が踏んだか知らねえが、此長五郎の手を切るに二兩二分とはあんまり安い。百や二百はぶら〳〵とぶら附

いて居る此仕事、あすが日おれが喰えこんで、口が辷つた其時にやあ、三千石の御知行を、もし殿樣、棒に振るのは何でもねえ。危ねえ事と氣が附いて、それでおれを掃いたのか、いやさ、袖にしたのか。これ、尋常の手下だと思やあがるか老耄親仁め。此一件は割らにやあならねえ、まあうぬよりア手短かに、あの阿魔ッちよを。（トおこよの方へ立ちかゝる。）

こよ　あれえ。

　ト上手の屋體へ逃げ込む。源之丞刀を取り拔きかけるを主膳留める。喜六長五郎の足へ取附くを蹴返し、きつと見得。

長五　何だ殿樣、お前わつちを切る氣かえ。有難え切られよう、さあ切れるなら切つて見ろ。

　ト源之丞また拔き掛けるを主膳留め、

主膳　これは御前御短慮千萬、先づ〳〵手前にお任せなされませ。

源之　むゝ、恩を仇なる憎い奴、了簡ならぬ所なれど場所といひ主膳が詞、此場は此儘助けくれるぞ。

長五　大方そんなことだらう、何のツケに、斬れるものだ。

源之　うぬ、其舌の根を。（立ちかゝるを主膳又留めて）

主膳　はて、何事も拙者が胸に、お構ひなくと、殿には一間へ。

源之　えゝ、言はうやうない人外めが。（ト早き唄になり、源之丞腰元附き奥へはひる。）

長五　さあ、どいつもこいつもびく〳〵するな、是れから阿魔をそびいて行つて、此一件を割らにやあならねえ。（ト立ちかゝるを主膳隔てゝ）

主膳　何か樣子は存ぜぬが、立ち騷がずと靜にしやれ。（ト誂への合方になり、主膳半舞臺へ下りて）今承はれば其方は、小屋から來たと言ふが、さては非人だな。

長五　おゝ非人だ、それがどうした。

主膳　なぜ非人ならば非人のやうに、切髮なば包み隱し地輻の外から物を言はぬ。忝けなくも土御門の免許を受けし梶井主膳が、何で地輻を穢したのだ。

長五　なに、地輻を穢した、こいつァ可笑しい、今奥へ逃げ込んだ阿魔ッちよと、此の親仁は何だ、こいつらあ非人ぢやあねえか。これ耳の穴をさらつてよく聞きやあがれ、此長五郎は非人でもな、親の腹を飛出す時から、ディ〳〵とは泣きやあしねえ、鹿の角の切口を掌へつけても産れはしねえ。いつ何時でも金せえ出しやあ足の洗へる御身分だ、こいつらがやうに孫子の代まで非人をするのとは譯が違はア、十千萬兩金を積んでも、生涯淸くなれねえこいつらぢやあ穢れねえか、いやさ、おればかりが穢れるか。さあ、ぐつとでも言つて見やあがれ。（ト主膳思入あつて、）

主膳　は、、、、、そりや其方が悪い了簡、假令非人にもせよ乞食にもせよ、人相を見てくれいとて姿を替へて参る時は、それと知つても知らぬ振りにて見て遣はすが則ち情、こりや人助けと申すものぢや。其方とても其如く、なぜ身装を拵へて梶井主膳を頼みに來ぬ、事と品に依つたなら、そちが望みを叶へてやらう。

長五　なに、装をこさへて來たら、おれが望みを叶へて遣る、これ、おらあ錢貰ひにやあ來やあしねえよ。

主膳　これさ〳〵、さう聲高に申さずとも、まあ靜に言ふがよい、錢貰ひには來まいなれど、少々はおれが貰つてやるなら、晩にでもそつと來い。

長五　いやだ、二朱や一分の目腐れ金で、こんたはおれを追ッ拂ふ氣だらうが、さう旨くはいかねえ。一元手にあり附くほど、金を出すなら知らねえこと、左もねえことなら止しにさつせえ。

主膳　はてまあ、さう言はずとも、人のいふ事を聞くがいゝ。

長五　聞いた所が無駄なことだ、金を取らねえ其代り、出る所へ是れから出て、阿古木を始めうぬらまで、掛替のねえ命を取るから、首を洗つて待つてゐろ。(トずつと立つて行きかける。主膳思入あつて、)

主膳　こりや待て。

長五　なに、待て、へぼ將棊をさしやあしめえし、待てとは何だ。

十膳　望みの通り、金を遣らう。

長五　こいつあ、ちつと分つたわえ。（ト合方替つて、）

十膳　これ長五郎、今聞きやあ聲高に首を洗つて待つて居ろと、片褄とつての強面、そんなことにびり附いて、金を遣らうといふではない。今でこそ人相見、土御門から免許を受け梶井主膳と名乘れども、以前はおれも上州で少しは知られた長脇差、銀張り丁半こまめくり、ゆすり騙りも度重なり、唐丸駕籠で道中を、仕飽いた果が構ひを喰ひ、今日は奥州明日は越後と姿を隠して歩くゆゑ、異名を取つたのぶすま竹右衛門、流れ〳〵て此の鎌倉で見やう見眞似の人相見、山師の玄關門構へも少しは腕に覺えがなけりやあ、此世の中に渡られねえ。斯ういふからにやあ長五郎、手前が來たのは無駄にはしねえ、欲しかあ金もやらうから、此のいさくさを任してくりやれ。

ト主膳世話にいふ。長五郎思入。

長五　お前のいふのを默つて聞きやあ、元はいゝ男だから此一件を任せろと言ひなさるのだね、そりやあいゝ男でもあらうが、口でばかり任せろと言つたとて、どうもさうは行き難い、氣の毒ながらこりやあ任し難いよ。

主膳　すりや、いよ／＼任されねえか。（トきつと言ふ。）

長五　知れたことさ。

ト鼻であしらふやうに言ふ。主膳こなしあつて地袋戸棚より、前幕に拾つた庖刀を手拭に包みしまゝ長五郎が前へ置き、

主膳　任せられずば、是れを見やれ。（ト長五郎取上げ見て、びつくりなし）

長五　や、此庖刀は。

主膳　覺えがあるか。

長五　むう。

主膳　知らねえとは言へめえな。（ト長五郎の顔を覗く。長五郎ぎつくりと思ひ入。合方替つて）昨夜夜更けて山下を、通りかゝつて思はずも、のりにすべりしぬかり道、

長五　雨氣つゞいだか叢雲に、日當も知れぬ眞ッ闇黑。

主膳　便りに持つた提灯の、燈火を打消す曲者が、

長五　取落したる庖刀の、

主膳　此柄にあり／＼名前口、

長五　そんならそれで、此の刄物を、

主膳　おぬしが所持と知つたのだ。

長五　むう。

主膳　何と、覺えがあらうがなっ

長五　こいつあ一番當てられた。（ト長五郎思入、主膳こなしあつて、）

主膳　はゝゝゝゝ、覺えがあるなら長五郎、默つておれに任せて置け、今夜殿のお供をしてお屋敷までお送り申し、其節金子を貰つて遣らう、聞けば腹からの非人でもねえとのこと、足の洗へる體なら綺麗になつたがいゝぢやあねえか。何にしろ暮れてから、多田の藥師の石置場で、おれが歸りを待つて居やれ。

長五　ようございます、男は當つて砕けろだ、お前にすつぱり任せやせう。

主膳　すりやおれが顔を立てゝ、任せてくれるか。

長五　くどくは言はねえ、いゝやうにしてくんなせえ。（ト庖刀を懐へ入れて立上り、腰の草履を出して、）詰らねえことの言ひがゝりから、大きな聲をして、おやかましうござりました。

ト門口へ出て、喜六を見てにつたりと思入あつて、

そんなら先生。
主膳　長五郎、
長五　頼みましたよ。
ト手拭で塵を拂ひ肩へ掛ける、これをきッかけに唄になり、花道よき所まで行き、主膳を殺さうといふ思入、氣を替へて花道へはひる。ばた／＼にて、上手屋體よりおこよ脇差を持ち出る、跡より源之丞走り出で、おこよを留め、
源之　これおこよ、何ゆゑ死なうとしやるのぢや。
こよ　どうぞ放して、死なして下さりませ。とても生きては居られませぬわいな。
ト泣き落す、此時喜六前へ出て、
喜六　おゝ娘、尤もぢや、尤もだ／＼、そなたが死ぬには及ばぬ。お殿樣への申譯は此の親仁が、さうおや。（ト主膳の脇差へ手を掛ける。）
主膳　こなたまでが同じやうに、狂氣でもさつしやつたか。
喜六　いえ／＼狂氣はいたしませねど、人でなしめがあのやうに殿樣への惡口を、ぢつと御辛抱なされますも、元の起りは親子ゆゑ、勿體なうて冥加なうて、どうまあ生きて居られませう。産れ替つ

て人となり、一日なりと此御恩を、報いたうござりまする。

こよ　わたしとても同じこと、お慕ひ申したばッかりに、お家に拘はる大事となりしも、天道樣の皆御罰、どうぞ死なして下さりませいなあ。

源之　その歎きは尤もなるが、包み隱せしことならば、今となつて某に濟まぬといふこともあらうが、元より承知のことなれば、其の言譯には及ばぬこと、委細は主膳に賴み置けば、心遣ひは無用にしやれ。

主膳　假令如何やうに申さうとも高の知れたる長五郎、主膳が居れば大丈夫、殿の御身分に拘はるやうなことは決してござらぬほどに、おこよさまにも喜六どのにも、安心いたされたがようござる。

こよ　さうおつしやるほど、

喜六　勿體なうて。（ト兩人刀へ手を掛ける。）

主膳　はて、急いては事の破れとなる、たゞ何事も身共が胸に。

ト主膳喜六を下にするゐる。源之丞おこよの脇差をもぎ取り下に居て、

源之　主膳、困つた奴ぢや。

トおこよ源之丞に縋り泣く、主膳はぢつと思案の思入、喜六手拭にて淚を拭ふ、此見得よろしく唄に

て道具廻る。

（居酒屋の場）——本舞臺三間の間、藁にて拵へたる風除け、松の立木を取合せ、日覆より同じく釣枝、上の方九尺の居酒見世、足附の腰障子、眞中に幅廣の床几、爰に半次脚絆一本差し、紺の半合羽旅歸りのこしらへにて床几に片足掛け、刺身、鍋にて酒を呑み居る。側に居酒屋の若い者立ちかゝり居る。通り神樂にて幕明く。

半次　おい番公、はしら豆腐をもう一ツ下ッし。

若者　はい／＼。

半次　序にこはだのぬたもよ。

若者　畏りました。（ト若い者屋體の内へはひる。半次酒を呑みながら）

半次　あゝ一人ぢやあ旨くねえ、誰ぞ相手がほしいものだ。

トやはり通り神樂にて、花道より以前の長五郎頬冠りにて出來り、半次を見て、

長五　おい、そこに居るのは半次ぢやあねえか。（ト手拭を取る。半次見て、）

半次　おゝ長五郎か、二三日逢はなんだな。

長五　丁度いゝ所で逢つた、今手前の所へ行くとこだ。
半次　何ぞ用か、まあ爰へ掛けさッし。
長五　掛けろと言つたとて、此の裝ぢやあ。
半次　むゝ、さうだ。（ト半次合羽を脱いで、）これを引ッ掛けろ。（ト渡す、長五郎合羽を着て、）
長五　こいつァ有難え。そりやあさうと、一本きめて何所へ行つたのだ。
半次　手前も知つて居る人魂三次が、構ひを喰つて上州へ、行くのを送つて行つた歸りだ。（ト長五郎この内四邊へ思入、）これ長五郎、なぜ掛けねえのだ。
長五　掛けてもよからうか。
半次　誰が氣が附くものだ。
ト是れにて長五郎居酒屋の内へ思入あつて、床几へ腰を掛ける。此時居酒屋の内にて、
若者　中臺の二合は直しだよ。（ト大く言ふ。長五郎びつくりして飛び退き、）
半次　えゝ、何をびつくりするのだ。
長五　それでも誰か直しだと。
半次　馬鹿アいへ、お燗直しだ。

長五　おきやあがれ。（ト長五郎手拭を冠り、床几へ腰を掛ける。）

半次　おい番公、熱くしてもう二合掛けて下ッし。（ト内にて）

若者　畏りました。

半次　さあ長五郎、一杯やりや。（ト茶碗をさす。）

長五　有難え、丁度氣を附けてえ所だ。

ト半次ついで遣る、長五郎酒を呑む。若い者小皿物と燗銚子を持ち出來り、

若者　はい、お誂へでござります。（ト置いてはひる。）

半次　こはだのぬたをやつて見さッし、とんだいゝ。

長五　一夜明けると、冷てえものが好くなるの。（ト兩人捨ぜりふにて酒を呑みながら、）

半次　そりやあさうと長五郎、おれに逢ひてえとは何の用だ。

長五　用といふは外でもねえ。（ト四邊へ思入あつて、）此間ちよつと話して置いた阿古木の話の一件よ、おれが度々無心に行くを鬱陶しく思やあがつて、おれを掃く狂言に、ふつと喜六親仁に逢つた所、殿樣から手切の文が來て、それを見て娘が突き詰め、撞木橋からどんぶりと、身を投げて死んだから、是れまでの事と思つてくれと、涙をこぼしておれへの話し、此の狂言の作者といふは、梶

井主膳といふ、興泉寺町の人相見と、知れたは喜六が落した手紙、大方斯うだと嗅ぎ附けて主膳が家へ仕掛けた所、案の定阿古木の殿と死んだといふ娘が居るゆゑ、一元手に仕ようと思ひ振りこんで行つた所、ちつとこつちに引けがあつて、素手で主膳に任して來たが、金が欲しくばやらうから多田の藥師の石置場で、待つて居ろとの主膳が詞、檣におれをはらす所存、向ふもおれが邪魔だらうが、おれも又主膳があつちやあ、ぐつりに行くに邪魔になるゆゑ、こつちもはらしてしまひたいが、元が上州の長脇差、ちつとは覺えのある奴ゆゑ、おれ一人ぢやあむづかしい。そこで手前の手を借りて今夜主膳をばらしてしまひ、直に阿古木へぶッつかり、たんまり金をゆする積り、禮は言はずと二つ山、半口乘つちやあくれめえか。

半次　むう、そりやあい丶尻尾をめつけたな、おれも此頃取られてばかり、金になる仕事なら、半口乘つてばらしてやらう。

長五　それぢやあ兄貴、乘つてくれるか。

半次　慾と徳なり二つには、友達仲の手前の頼み、假令命を捨てればとて、おれも男だ、いやとは言はねえ。

長五　有難え〳〵、それでこそ友達だ。

半次　丁度旅行きを送つて行くので、差して來たのがもつけの幸ひ。

長五　これから直に先きへ仕掛けて。（ト立ちかゝる。）

半次　もう一杯やつて行きやな。

長五　いや、醉つちやあならねえ。

半次　それぢやあおつもりに仕よう。おい番公、勘定は幾らだ。

若者　はい〳〵。（ト奥より若い者出來り、）はい、七百廿四文でござります。（ト半次二朱を出し、）

半次　それ、赤ツぺらだよ。

若者　はい〳〵、只今お釣錢を上げまする。（ト內へはひる。時の鐘。）

半次　今打つ鐘は丁度入相、暮れるを待つて、

長五　梶井主膳をばらした上、

半次　阿古木の屋敷へぐづり込みやあ、

長五　三千石に拘はる仕事、

半次　表沙汰にやあならねえことゆゑ、

長五　少なずくなも五十と七十、（ト此時酒屋の若い衆百錢を持つて來て、）

若者　はい、百お釣錢を上げます。（ト出す、半次取つて）

半次　長五郎、百だとよ。

長五　むゝ、いゝ辻占だ。

半次　さあ。行かう。

ト時の鐘、通り神樂にて長五郎半次花道へはひる。若い者道具を片附け屋體へはひる。右の鳴物にて道具廻る。

（藥師前石置場の場）――本舞臺向う奧深に多田の藥師の門、左右町家の遠見、舞臺前上下に丸物の石積み上げあり、雨落に川の波板、誂への切穴。日覆より椎の木の釣枝。總て稻瀬川藥師前石置場、夜の體。時の鐘、合方雨車にて道具留る。と花道より○△□◎の題目講の仕出し大勢、長提灯を持ち、太鼓を叩き、出來り、

皆々　南無妙法蓮華經々々々。

○　さあ〳〵大變々々、雨が降つて來た、急いで行きませう。

△　もう二三町行くと、傘を借りる家がある。

□ 濡れた所がもう少しだ、急がずと勧化をしませう。

◎ それ〳〵大難四ヶ度小難數知れず、祖師さまの御難に比ぶれば、何でもないことだ。

○ それでもづぶ濡れに濡れちやあ、まことにいゝ〳〵法蓮華經だ。

△ えゝ、勿體ないことを言はつしやるな。

皆々 南無妙法蓮華經々々。

トやはりわや〳〵太鼓を叩き上手へはひる。ばた〳〵になり、花道より長五郎、半次印の附きし番傘を相合にさし、足早に出來り、直に舞臺へ來て、

長五 半次、きつい降りはねえぜ。

半次 おゝ、西の方が切れ上つて來た。（ト傘をすぼめ）

長五 今道々も話す通り、若しおれが危ふくなつたら、だしぬけにばらしてくれ。

半次 そりやあおれだ、案じるな。（ト長五郎上手を見て）

長五 やあ、提灯は慥に主膳だ。

半次 それぢやあおれは石の間へ。

長五 合圖をするまで隠れて居ろ。

半次　合點だ。

ト時の鐘合方、半次上手石の間へ隠れる。長五郎身ごしらへする、上手より主膳着流し大小蛇の目の傘、足駄がけ、中間赤合羽竹笠にて、箱提灯を持ち出來り、

主膳　こりや／＼、もう送るには及ばぬ、其方は屋敷へ歸りやれ。

中間　左樣ではござりますが、それではお提灯が。

主膳　いや／＼苦しうない、此方へ渡しやれ。

中間　左樣なら、これでお別れ申しまする。

ト中間提灯を主膳へ渡し、引返してはひる。長五郎前へ出で、

長五　主膳さま、今お歸りでござりますか。

主膳　おゝ、長五郎か。

長五　さつきから待つて居りました。

主膳　嘸待遠であつたであらう、大方そちが待つて居ようと、お送り申すと直に其の儘、お暇申して歸つて來たのだ。（ト四邊の石へ腰を掛ける。）

長五　左樣でござりましたか。して、わしが事はどうなりました。

主膳　段々殿にもお話し申し。金子は身共が受取り參つた、然し少々の金子では、そちが爲めにもならぬゆゑ、身に附く程貰つて來た。

長五　そりやあ有難うございまする。さうして、どの位。

主膳　十や二十の端たでなく、延金で遣はさう。

ト立ち上り、一腰をすらりと拔いて長五郎の目先へ突附ける。長五郎びつくりして飛び退き、

長五　まあ／＼待つておくんなせえ、さう何もいきなりに、拔いてかゝらずともいゝぢやあございませぬか、途方もねえ氣の短え人だ、まあ／＼待つておくんなせえ。

主膳　助け置いてやりたい奴ぢやが、大勢の命にやあ代へられねえ。假令百金二百金遣つたとて、それで、おのれが足でも洗ひ、人交りのなるやうにいたす所存のものならば、百や二百はくれても遣るが、負けた時には又屋敷へぐづりに來る氣と見て取つて、金の代りに此刄金、覺悟いたしてそれへ直れ。

長五　これは、お前、そりやあ何をいふのだ。高の知れた雪駄直しの長五郎、百の二百のとそんなに金がどうなるものか、ちつとばかりくんなさりやあ、それでこつちも足でも洗ひ、元の人間になつて人交りがしたさゆゑ。いつまでこんなざまをして、居てえことはございませぬ、實に今ぢやあ

主膳　我が身で我が身に愛想が盡きました。(ト長五郎わざとしつぽりとなる。主膳思入あつて、)ムウ、それぢやあ何か、非人の其身に愛想が盡き、足を洗つて眞人間になりてえとか。

長五　左樣にござりまする。

主膳　あゝ見上げた男だ、さうなくては叶はねえ。そんなら是れから足を洗ひ、元の左官になつて來い、元手位は貸してやらあ。

長五　いえもう、足洗ひ金さへありやあ、直に眞人間になります。

主膳　其の足洗ひ金を貸してやらうか。(ト斬つてかゝる。よろしく立廻つて長五郎主膳を留め、)

長五　こりや、どうでもおれを、切る氣だな。

主膳　知れたことだ、口先きばかりの嘘方便、そんなことを喰ふやうな主膳ぢやあねえわえ。

ト振放して切つてかゝる。時の鐘誂への合方にて立廻り、よき程に、半次石の蔭より出て、主膳を一かせ斬る、主膳たぢ〳〵となり、三人きつと見得、知らせに附き月を引出す。

こりやわいらは言合せて、おれがあつちやあ邪魔なゆゑ、殺す心か、しやらくせえ。

長五　如何にも仕事の邪魔になる、まだ其上に山下の、始末を知つた梶井主膳。

半次　生けて置いちやあ後日の妨げ、それで半次も共々に、待つて居るとも知らずして、

長五　うか／＼来たが運の盡き、覺悟極めてくたばつてしまへ。

主膳　何を小癪な。

ト誂への船の唄、稽古笛のあしらひ、好みの鳴物にて三人石置場の石を小楯に、長五郎出刃庖刀を出して二人立廻りよろしくあつて、トゞ主膳躓くところを長五郎、半次左右より疊かけて主膳を仕留め、長五郎乘つかゝつて止めを刺す、半次四邊を窺ひ、長五郎主膳の紙入を出し、金入の金を紙入の中にある序幕の證文へ打ちあけ、引ッ括つて腹掛の隱しへ入れ、出刃庖刀の糊紅を拭ひ、

長五　べらばうに骨を折らしやあがつた。

半次　どうだ、ちつとはあるか。

長五　二十兩ばかりあつた。

半次　そいつあ話せるな。

長五　半次、此死骸を川へぶち込んでくれ。

半次　合點だ。（ト主膳の死骸を川へ打込む、水の花ぱつと立つ）えゝ、手を糊紅だらけにした。

長五　川で洗やな。

半次　違えねえ。

ト石を傳ひ、眞中の切穴の所にて手を洗ふ、長五郎思入あつて、

長五　半次危ねえぜ、落ちるなよ。

半次　なに、大丈夫だ。

長五　さうか。

ト言ひながら半次を川の中へ蹴込む、水の花、水鳥ぱつと立つ、長五郎川の中をきつと見込む。本釣鐘、長五郎につたり思入あつて、

むごい事を仕度くもねえが、實は手前の女房を疾うからおれがはらして居らあ、それゆゑおれを生かして置いちやあ、枕が高く寐られねえゆゑ、それでどんぶりやつたのだ。（ト雨車になり、四邊の傘を取つて、）これから二人しつぽりと、（ト傘を開き、印しを見て足が附いてはといふこなしあつて、傘をすぼめ川の中へ打ち込むを木の頭、）畜生め、濡れにやあならねえ。

ト川の中を見てにつたり思入、雨車、佃にてよろしく、

ひやうし幕

ト時の鐘のつなぎにて直に引返す。

（戀ヶ窪お長隱家の場）＝＝本舞臺三間の間平舞臺、柿葺の屋根、引窓開閉、誂への紐附き、向ふ押入戸棚、鼠壁、荒神棚造酒徳利、下手鼠入らず、米櫃の書割、此下竈、釜、茶釜、臺所道具よろしく上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方芥溜物置の小屋根、是れを傳ひ屋根へ人の乘ることあり、總て戀ヶ窪お長隱れ家の體。爰に熊坂お長單衣を下へ着たる惡婆、好みのこしらへ、上着を辻番の火箱へかけて寐ころび、角行燈にて小本を見て居る。是れを子分一足を揉み居る。同じく二摺鉢の上へ俎板を載せ河豚をこしらへ居る、三火鉢へ火をおこし四は釜の下を焚附けて居る、此見得通り神樂、四つ竹節にて幕明く。

二　權次や、しつかり焚かねえか、煙くツていかねえぞ。

四　なんぼ場末だつて、まだ蚊は出ねえぜ。

三　薪が生だから、さつぱり焚附かねえ。

二　姉さん河豚が出來たが、何にしようね。

お長　さうよなう、一夜明けると葱もいやだの、湯河豚にでもしようか。

二　それがようごぜえやせう。

一　柚醬油ぢやあ呑めるねえ。

お長　今に出來ると呑ませるから、居睡りをせずと揉んでくんな。

一　居睡りをする氣はねえが、自然としんが睡ると見えて、つい手の方がお留守になつて濟みません。

お長　うまく言つて居るよ、大方昨夜の廓の疲れだらう。

一　いや是れは驚いた、姉御、圖星當りましたぜ。

三　河豚でなくッてまあよかつた。

二　人を馬鹿にして居やあがる。（ト子分の四前へ出て、上手の揚板をあけて見て、）

四　姉さん、今夜はあるが、あしたの朝の薪がねえぜ。

お長　無かァ明日、薪屋へ粗朶をまぜて二百ばかり、持つて來いと言つてくんな。

四　いつも四百か二朱買ふに、昨夜の仕事もありながら、二百とはしみッたれだね。

お長　さういふどぢだからいかねえよ、今ぱッぱと遣つて見ろ、直に足の附く仕事だ、人の噂も七十五日、こなれた時分に内會で、勝つた積りで遣つて見ろ、誰も氣の附く氣遣ひはねえよ。

二　成程こいつあさうだ、昨夜のものを今日遣やあ、足の附くは知れたことだ。

三　ところを二朱買ふ薪を、二百買やあ、攌み金で持つて居ようとは、神佛でも御存じあるめえ。

一　是れだから姉御なざア、二十年來して居ながら、いまだに誰もかぎ附けねえ。

お長　嗅ぎ附けられてたまるものかな。

ト二河豚を平鍋へ入れ火鉢へかける。四一升徳利と燗徳利猪口などを蝶足の膳に載せ、持つて來る、時の鐘合方にて花道より、野手の三、頰冠り尻端折りにて出來り、直に舞臺へ來り。

野手　姉御、内かえ。

お長　誰だ、野手か。

野手　もし姉御、大變だぜ。

お長　大變とは何だな。

野手　ばれやしたよ。

四人　なに、ばれたとは。

野手　昨夜の仕事の足が附いたか、此界隈を捕手の衆が、網を張つて居る樣子、うか／＼しちやあ居られやせぬぜ。

二　そいつあ爰にやあ居られねえ。

三　今夜のうちに裝を替へ、

四　奥筋へでも突ッ走らうか。

一　ふけ支度をしざあなるめえ。（ト此うちお長やはり寐轉び本を見てゐる　野手はお長の側へ來り）

野手　もし姉御、おめえも奥筋へ行きなさるか。

お長「行かねば此身が立たぬといふに。」

野手　むゝ、さうだとも、行くなら直にみんなと一緒に。

お長「行くは行くが、まあ靜に。」

野手　靜どころではねえ、うか／＼しちやあ居られねえ。

お長「えゝ、靜にしやいの。」（トお長本を見て居る、野手氣が附き）

野手　人を馬鹿にして居るぜ、草雙紙の文句のことか。

お長　えゝ、ぎやあ／＼とうるせえ奴だの。（ト本を側へ置く。）

野手　これさ姉御、本どころぢやあねえ、づきが廻つたから、ふけにやあならねえ。

お長　胴二に役が多いから、ふけるのもよからうよ。

二　姉御は株で茶にして居るが、こちとらはひく／＼ものだ。

三　ちつとも早くふけてえが、何しろちやんころなし。

四　昨夜貰つた骨折代は、今朝から小皿で取られてしまひ。

一　路用の金の當がねえが、どうか法の附けやうはあるめえか。

野手　路用の金なら案じるな、奥州までは通し駕籠で、好きな酒を呑まして、おれが一緒に連れて行かあ。

二　手前も親からの悪黨だから、當りのねえ事もいふめえが、御大層な事を言つていゝかえ。

野手　いゝといふ事よ、まあおれが隠しにのつて居なよ。（ト思入あつてお長に向ひ、）もし姉御、今聞く通りわつちを始め、こいつらも影を隠す積りだが、奥州まで行く路用の金を、ちつとばかり貸しておくんなせえな。

お長　うつたうしい奴等だの。（ト煙草の箱の引出しより金包を出し、金を算へて紙に包み、）さあ持つて行きな。

ト投つて遣る、野手取上げ算へ見て、

野手　もし姉御、たつた是ればかりかえ。

お長　なぜ、それぢやあ不足といふのか。

野手　五人の天窓へ十五兩ぢやあ、一人前が三兩づゝ、三兩や五兩の端た金ぢやあ、百里の道は行かれやせぬ、昨夜の仕事がそつくりあらう、刻まず綺麗に、貸してくんなせえな。

お長　何だ、綺麗の汚ねえのと、それぢやあ不足なら止しねえな、無理に遣らうとは言はねえよ。

ト野手きつと思入あつて、

野手　あい、よしやせう、貰ひやすめえ。(ト金を投り出し、胡坐をかき、)これが權兵衛か八兵衛とか、堅氣な人から貰ふのなら、素一分でもいたゞいて行くが、熊坂お長といふ盜人から貰ふなら。

ト大きな聲をする。

二　これさ野手や、何を言ふのだ。

四人　姉御に向つて。

野手　何の、いゝわえ、うつちやつて置け、盜人だから盜人といふのだ、路用の金を器用にくれさあ、えつちらおつちら奥州まで、もう高飛はよしにすらあ。まだひよッこの小野郎だが、親の代から惡事を見習ひ、夜盜かつさき人殺し、この兇状は廻しの上三日晒しの板附と、極つた科も口一つで助かる仕樣は胸にある、どれ、遊び所で安樂に、直の知れねえ飯を喰はうか。

ト野手ずつと立ち、出にかゝるを四人留めて、

三　これ、險相替て、どこへ行くのだ。

野手　どこへ行かうと、おれが勝手だ。(ト門口へ出る。)

お長　これさ、みんな打捨つて置きな、抱いて這入ると脅しを掛けて、二十と三十取る氣だらうが、そん

なことに脅されて、金を出すやうな女ぢやあねえ、うつかり抱いて背負込むなよ。

野手　背負ひ込むか背負ひ込まねえか、細工は粒々。

お長　何だと。

野手　思案を極めて待つて居るよ。（ト唄になり、時の鐘にて野手花道へはひる。跡四人思入あつて）

二　もし姉御、三の野郎が訴人をしやあしめえか。

お長　何のつけにするものか、なに彼奴も命が惜しいわな。

三　さうでもあらうが、何だか不氣味だ。

お長　怖かあ、是れを路用にして、何處ぞへ影を隱すがいゝ。（ト件の金子を遣る。）

四人　さうして姉御は。

お長　何處へ行くものだな。

四人　いゝかえ。

お長　いゝよ。

四人　そんなら姉御。（ト大きく言ふを）

お長　野暮な聲だの。

四人　どれ、ふけようか。（ト時の鐘、四ツ竹の合方にて、四人花道へはひる。お長思入あつて、）

お長　少しの事をびく〳〵と、意氣地のねえ奴等だの。しかしあいつ等がふけてしまふと、足手纏ひがなくていゝ。（ト件の金を出して見て、）成程金といふものは、身に附かねえものだが、一晩たゝねえ其うちに、何やかやでめいつてしてしまひ、もう七十兩になつてしまつた。（ト包んでまた煙草箱の引出しへ入れる。時の鐘雨車になる。）おや、降つて來たやうだが、引窓があいて居やあしねえか。（トお長立つて來て、）案の定、明けッ放しだ。（ト柱に結びし引窓の紐をぐつと引く、紐の片々切れる。）あゝ、いめへましい紐が切れた、しかし障子の方で仕合せ、明日誰ぞに附けて貰はう。

トお長件の紐を柱へ結び附ける、時の鐘四つ竹の合方、雨車はげしく、ばた〳〵になり、花道より、前幕の雪駄直し長五郎、頰冠り尻端折りにて、走り出來り、直門口を叩け。

長五　お長、内か。（トお長見て、）

お長　おや長さん、おめへ一人かえ。

長五　むゝ、足を洗ふから水を下ッし。

お長　あいよ。（ト手桶を門口へ持つて行く、）嘸雨で困つたらうの。

長五　二三町でぐつすり濡れた。

お長　傘はないのかえ。
長五　買ひたくッても四ツ過ぎゆゑ、傘屋は知れず、駕籠屋はなし、めつぱふに困つたよ。
お長　あんまり、駕籠に乘る風でもあるめえ。
長五　見くびるな、おれだつて駕籠ぐれゑに乘らなくつてよ。
お長　擔ぐ方が錢になるよ。
長五　馬鹿いふな。だが、こう箆棒に不自由なところだ。
お長　隱れて居るにやあいゝ所だが、實に場末は不自由だなう。（ト長五郎足を洗ひ内へはひる。）
長五　何だか冷たくつてならねえ、薪を二三本くれねえか。
お長　生憎薪がねえよ。（ト長五郎火箱の積んであるを見て、）
長五　あの火箱をたゝッ毀して焚かう。
お長　詰らねえことを言ひねえな、たゞぢやあねえよ。
長五　しみッたれた事を言ふな、五十か六十四文出しやあ、いくらでも買へらアな。
ト言ひながら火箱を踏み毀し、火鉢にて焚き、着物を干しにかゝる。
お長　長さん靜にしなよ、大家さんがやかましいよ。

長五　其くれへな事を恐れるお長でもあるめえ、實に手前の肚胸にやあ惚れたっ　どうして〳〵、おれなんざアかなはねえ。

お長　あんまりおだてゝおくれでないよ。是れでも元はお屋敷生れ、お人柄に育つたも、油氣なしの水髪に黄楊の木櫛のかけ流し、人に惡婆と言はるゝも、ほんのわつちやあ附燒刄、お前にみんな仕込まれたのだよ。

長五　へん、そりやあ人が違ふだらう、谷七郷の其うちは、脚絆をかけにやあ歩けねえ、中の附いた兇狀持、小手柄半次に仕込まれたらう。

お長　何のあんなどぢ野郎に、どぢといやあお前、片附けると言つたがどうしたえ。

長五　どんぶりと遣つてしまつた。

お長　え、そりや何處で。

長五　多田の藥師の河岸ッ端で、梶井主膳といふものを遺恨があつて殺すのに、おれ一人ぢやあかなはぬゆゑ、半次をおだてゝ手傳はせ、血塗れ仕事に積上げた、石置場から手を洗ふところを川へ蹴込んだが、丁度命の引汐に流れ〳〵て今頃は、百本杭に掛つて居ようよ。

お長　それぢやあ是れから枕を高く。おゝ、寐酒があるが氣はないかえ。

長五 氣のねえどころか酒と聞いちやあ、御遠慮なしだ。所で贅澤をいふやうだが、肴はあるかの。
お長 旬は外れたが、湯河豚があるよ。
長五 そいつあ妙だ、附けてくんねえ。
お長 一升あるからゆつくりおやりよ。(ト燗をつける。)
長五 有難え、おい嗅、といつちやあまだ早いか。
お長 どうでもいゝわな。
長五 寒くツていけねえ、宿六の下馬か褞袍はねえか。
お長 何かあるだらう。(ト押入より出して來て)長さんこれでもいゝかえ。
長五 何だ、こりやあ洗つてあるの、畜生め、うら木に勝る元木といふぢやあねえか。
お長 喋べると、風を引くよ。
長五 はい〳〵。おゝ燗が出來た、ついでくりや。
お長 おや、茶碗でかえ。(トついでやる。)
長五 大きい物でぐい〳〵やらにやあ、腹の中へしみ渡らねえ。
お長 しみ渡るまでにやあ、餘程だらうね。

ト此時向ふの荒神棚へ、指金の鼠出て、御酒徳利を落す、是れにてばつたりと嚴しき音する、長五郎びつくりして茶碗を落し、立ち上つて、

長五　やあ、あの音は。（トきつと言ふ、お長見て、）

お長　荒神棚へ鼠が出て、お御酒徳利を落したのだよ。

長五　おきやあがれ、びつくりした。

お長　國に盗賊家に鼠、脱れぬ中だが鬱陶しさに、鼠取りを喰さうと、買つて置いてさつぱり忘れたの

ト煙草箱の引出しより鼠取薬を出して、見物に見せて其處へ置く、長五郎は茶碗の割れたるを取上げ、

長五　今の音にびつくりして、茶碗を落して割つてしまつた。

お長　是れから二人一緒になるに、二つ割とは氣になるの。

長五　いや、氣に掛けるにやあ及ばねえ、丁度幸ひこの割れで、互ひに呑んで取替へれば、取りも直さず三三九度。

お長　成程いはゞ今夜は婚禮、堅氣のものなら上下に、綿帽子といふとこだが。

長五　媒人なしの氣散じは、この蝶足が蕗の臺、

お長　かけた茶碗の盃に、
長五　長柄くわえは燗徳利、
お長　酒も一升夫婦の固め。（ト此内両人件の茶碗の割れにて酒を呑み、左右へ取替へ思入あつて、）
長五　しかし互ひに兇状持ち、明日にも悪事のばれた上、喰ひ込んだら命の終り。
お長　どうで終ひは板附に、身は野晒しの小塚原、
長五　夫婦並んで往生と、胸に覚悟はしながらも、
お長　命があつての物種ゆゑ、
長五　脱れるだけは巣を替へて、
お長　別れ〳〵にふけるとも、
長五　縁が盡きずば此の如く、（ト茶碗を出す。）
お長　割れた茶碗の一つになり、（ト片々を合せる。）
長五　丸く暮らすか、但しまた、
お長　焼かぬ昔の土塊と、
長五　消えてしまふか、

お長　後日の證據に、
長五　割れた茶碗を片々づゝ、
お長　夫婦の固めに、
兩人　持つて居ようか。（ト兩人茶碗の割を、掛守りへ紙に包んで入れる。此時、時の鐘）
長五　ありやもう九つ。
お長　表をしめて。（ト顏見合せ、思入あつて氣を替へ）
長五　火の用心でも、氣を附けようか。
お長　人を馬鹿にして居らあ。
ト時の鐘　誂への合方になり、花道より小手柄半次頰冠り、前幕と違つた着附、尻端折り安下駄なはき、番傘をさして出て來る。
半次　今熊のところで、此着物を借りて來たが、思へば／＼長五郎め、おれは何も意趣を受ける覺えはねえが、こいつは必定手下の奴等が常からの話し、よもや彼奴に限つてはと、思つて居たがこつちの自惚、きつと野郎が。家へ歸つての樣子にしよう。（ト門口へ來て）お長／＼、今歸つた。
長五　や、あの聲は。

お長　あゝこれ。
　　ト　お長長五郎に囁く。長五郎うなづき、三尺帶をしめ、上手の揚板をあげ、椽の下へ隱れる。お長は四邊へ思入。此うち半次門口を叩き、用水桶にて捨ぜりふを言ひながら足を洗ふ。
半次　お長や、明けてくれ〳〵。（トこれにてお長寢て居たる思入にて、）
お長　あい、誰だ。
半次　おれだ。
お長　内の人か、待つて居たよ。（ト起き上り門口を明ける。半次は傘の雨を拂ひ内へはひる。）大分遲かつたの。
半次　手めへ、もう寐たのか。
お長　あい、今まで待つて居たけれど、九つを打つたから、どうで今夜は歸るめえと、火箱を抱いていい心持に、とろ〳〵とした所だよ。
半次　おれも雨が降つて來たゆゑ、泊つて來ようと思つたが、小降りになつたから歸つて來た。
お長　何の歸らずとも、いやさ、よく歸つて來なすつたの。
　　ト　半次よき所へ住ひ、前にある長五郎の手拭を取上げて、

半次　お長、この手拭は誰がのだ。
お長　え、そりやあ。
半次　丸字菱つなぎの手拭は、長五郎が持つて居たが、野郎は家へ來て居るか。
お長　え、いゝえ。
半次　今夜來にやあならねえ筈だが。
お長　なぜにえ。
半次　腐れ合つて居るからよ。
お長　そりや誰と。
半次　誰でもねえ、手めへと。
お長　何だとえ。（ト詫への合方になり、）
半次　疾うから耳へ這入つて居れど、慥な證據を見ねえうちは、迂濶なことも言はれぬゆゑ、人の笑ふも合點で知らぬ顏をして居たが、今夜出先きの始末といひ、おれが歸らぬ其うちに、此手拭があるからは、野郎を家へ引込んだらう。間男したらしたと言へ、切つたり張つたり野暮はしねえ、話し合でくれてやるわ。（ト是れにてお長思入あつて、）

お長　そりやあお前何を言ふのだ、丸字菱つなぎはいくらもある、仕入染めの安手拭、是れを證據に間男とはあんまりこりやあお情ない、如何に思案の外だといつて、わつちも熊坂お長と云はれ、少しは人に知られた體、雪踏直しや紙屑拾ひを、何のつけに情人にしよう、人のいゝがゝりか知らねえが、詰らぬ事を言ひなさんな、小手柄半次と賣り込んだ、お前の名前にかゝはるよ。

半次　その小手柄の名前へ泥を、塗られたからは、洗ひ落さにや面が立たねえ。

お長　そんならどうでも長五郎と、間男したと言ひなさるのか。

半次　知れたことだ。

お長　むゝ。（ト合方きつばりとなり、河豚をこさへた出刃庖刀を半次の前へ置き、）重ねておいて四つにされる、相手は元よりないけれど、それも疑ひうけたが不承、新内節や淨瑠璃の、文句のやうだが此世は愚か、未來までもと思つて居る、大事の亭主のお前の顏が、立たずばこれでわつちを殺し、どうぞ男を立つておくれ。（トお長思入にて言ふ。半次も思入あつて、）

半次　それぢやあ手めへは長五郎と、いよ〳〵間男しねえといふのか。

お長　したかしないか掛替の、二つとはない命をば、捨てるがわつちの身の潔白、殺した跡で不便だと永い月日に思つたら、三文花に線香の、一本位はあげておくれよ。

ト お長わざと愁ひの思入にて言ふことあつて涙を拭ひ、半次に背中を向け覺悟の體。半次心の解けし思入にて。

半次　人の噂に若しかと思ひ、外に遺恨のある奴ゆゑ、疑つたのはおれが誤り、堪忍してくれ、これお長。

ト半次お長の背中を叩く。

お長　そんならわつちの疑ひは。

半次　さつぱり晴れた。

お長　ほんにかえ。

半次　知れたことよ。（ト此時緣の下にてばた〳〵と音する。）や、緣の下で何かばた〳〵。

お長　裏の下見が毀れたから、大方犬が這入つたのだらうよ。

半次　忌えましい畜生だな。（ト酒肴を見、）むゝ、酒があるな。

お長　早くお前が歸つたら、一緒に遣らうと買つて置いたが、あんまり歸りが遲いから、先へ寐酒に遣つたのさ。

半次　そいつあ有難い、おれも一杯やつて寐よう。

お長　どれ、ついで上げようか。
半次　面倒だ、冷でもいゝ。
お長　それぢやあ是れで。（トお長一升徳利の口より鼠取の薬を入れ、振りながら、）大きい物にしようの。

ト湯呑を出すを、半次捨ぜりふにて取り、お長徳利よりつぐ、半次ぐつと呑んで、

半次　あゝ、いゝ心持だ。（ト茶碗の中を見て、）や、此茶碗にやあ何だかこなが。
お長　え、おや、どうせう、葛を入れた茶碗だよ。
半次　葛酒とは珍らしいな。
お長　ほんに、水ならいゝけれど。
半次　いや、それは眞平だ、今夜しつかり呑んで來た。
お長　何處でそんなに呑んだのだえ。
半次　多田の薬師の河岸端、石置場からどんぶりと、すんでの事に土左衛門と、名前目を替るところ、折よく小船に助けられ、熊の所で褞袍を借り、命を拾つて歸つて來た。
お長　そりやあ、あぶない事だつたが、お株で何處でか呑みなすつたらう、お前は酔ふと性がないから家へ歸つて呑んでおくれ、不斷わつちが言つて置くのに、何處でか意氣なことでもあつて、のろ

けかよろけでどんぶりと、川より女にはまつたらうに、其しが隱しにまじ〳〵と、歸りを待つて案じて居る女房をとらへて間男の、何のかんのと無理を言ひ、出てゞも行つたら其女を家へ入れる氣だらうが、さう旨くはいかねえから、いやでも女房のわつちの酌で、もう一杯吞んでおくれな。（ト湯吞へまた酒をつぐ。）

半次　そんな氣樂なことぢやあねえ、今夜の始末を聞いてくれ。

お長　まあ、吞んでからお話しよ。

半次　む丶、（ト酒をぐつと吞んで、）阿古木の屋敷の一件で、梶井主膳といふ奴を長五郎がはらすのに、彼奴の力にいかぬゆゑおれが手傳ひばらしてやり、遺恨を今夜晴らさした、其恩のある此半次を石置場から船附の、深みへ彼奴が蹴込みやあがつた。

お長　え丶。（ト態とびつくり思入。）

半次　それゆゑこいつあ噂の如く、彼奴が手前の間男で、おれを騙して殺したなと、惡推量で疑つたのよ。

お長　そりやあまあ、ほんの事かえ。如何に乞食をすればとて、あんまりな恩知らず、以前が左官仲間ゆゑ、人交はりの出來ねえものを、ほんに友達同樣に、一つ鍋の物せえも喰ひ合ふ中のお前をば

主膳を殺す主に遣ひ、大分後日の難儀を思ひ、それで川へ突き落したのだらう。話しに聞いてもわつちやあもう、悔しくツて悔しくツてならねえよ。是れといふのも不斷から、油斷のならねえ男だとわつちが言つたを聞入れず、あんまりお前が乘つたから、こんな目に逢つたのだ。あゝいふ義理を知らねえものが、人の女房を盗むのだよ。しみ〴〵憎い奴だなう。

ト お長思入。

半次 其替りにやあ此意趣は、きつと返して遣らにやあならねえ。(トきつと思入、又緣の下にてばたばたと音する。)また緣の下で。うぬ、畜生め。(ト立掛り、鼠取の毒廻りしこなしにてひよろ〳〵となる。)

お長 えゝ、あぶねえ、何うしたのだよ。

半次 どうした事か手足が痺れ、胸苦しいので、こたへられねえ。

ト苦痛の思入、時の鐘、すごき誂への合方になり、お長半次の苦しむをぢつと見てうなづき、門口へ掛金をかけ、

お長 お前、手足がしびれるかえ。

半次 五臟六腑をしぼるやうだ。

お長 鼠ばかりと思つたに、人にも少しはきくさうだ。

半次　なに、人にきくとは。
お長　今呑ました酒のことよ。
半次　え、さては五體の痺れるは、
お長　一服用ひた薬の效驗。
半次　して其藥は、
お長　鼠取り受合藥さ。
半次　え〻〻〻〻。（トびつくりなし、どうとなる。）
お長　きくかきかぬか常談半分、ためしに呑ました岩見銀山、わつちもよつぽどいたづらものだの。
半次　さては亭主に、毒藥を。
お長　何の亭主も氣が強い、一人で居ては世間の聞え、三尺棚でも名前主、ほんの大家のほくよけと、まさかの時は身の科を冠せる積りで女房になつたが、飽きが來たゆゑ一思ひ鼠取りで暇をやる、是れまで盜みを働いて、尻尾の出ぬうち死ぬのが仕合せ、手足をちゞめて往生しなよ。
半次　うぬ、其口を。
ト半次毒氣に弱り、ひよろ〳〵しながらお長にむしや振り附くを、振拂つて解けかゝりたる引窓の紐

をつかひ、誂への立廻り、トヾ半次首へ紐を纏ひ、此の端を上手へ投る。長五郎椽の下より手を出しぐつと引く。半次立身にて苦しみ、落入る。半次此時お長の後より抱留め居る小指を喰切る。上手椽の下をはね上げ、長五郎片足踏み出し、引窓の紐の端を肩へかけ、きつと見得。時の鐘。やはり凄き合方、長五郎半次を見て、

長五　息は留つたか。（トお長半次の鼻へ手を當て、思入あつて、）

お長　大丈夫だよ。（ト是れにて長五郎繩を放す、半次ばつたり倒るゝ、お長指を見て、）あゝ痛へ、小指を喰切りやあがつた。

長五　手前も小指を切られたな。

お長　とんだ奴に心中立つたの。

長五　何にしろ、この死骸はどこぞへこつそり。

お長　埋めにやあ此まゝこゝへ置き、丁度折よくあるこそ幸ひ、河豚に中つて死んだつもり。

ト半次に蒲團をかぶせる。

長五　こいつあ河豚より大當りだ。

お長　當るといふは、縁起がいゝの。

ト時の鐘、此うち花道より野手先きに、黒四天の捕手六人附添ひ出來り、門口へ來て明けようとして
明かぬゆゑ、戸を叩き、

野手　姉さん／＼、ちよつと明けておくんなせへ。

お長　おゝ、野手の三か。（トお長何心なく門口を明ける、捕手十手を振上げ、）

捕手　とつた。（ト是れにてお長門口をぴつしやりしめ、長五郎は行燈を吹消す。時の鐘。）

お長　さては野郎め、訴人をしたな。

野手　此身の科を脱れんため、うぬが惡事の訴人をした。

お長　臆病者め、覺えて居ろよ。

ト長五郎身拵へなし、手拭にて卷きし庖刀を出す。お長は探り寄り、煙草箱の引出しより金を出し、
懷へ入れ、以前の出刃庖刀を持ち、兩人ちよつと囁き合ひ、長五郎窓より引窓をあけ、屋根へ出る。
これと一緒に野手捕手に囁き、松の登り木より同じく屋根へ登り、思はず行き合ひ、

野手　長五郎か。

長五　何を。

ト兩人立廻る。此物音に構はず、お長悠々と身拵へする。野手立廻りのはずみ、引窓をぬけて下

へ出る、是れにて捕手屋根へ上る。野手は下にてお長と立廻る、此時引窓明く、上を見上げて、

野手　屋根のは正しく、長五郎。（トお長また見て、）

お長　落行く先は、滑川の渡しを越えて西へ行き、

長五　左へ取つて極樂寺。

ト是れにて下は探りの立廻り、上は捕手皆々かゝり、誂への鳴物になり、烈しき立廻り、トヾ皆々を追つて後へ下りる、また窓明く、野手見上げて、

野手　落行く月影、

お長　野手の野郎め。（トちよつと立廻り、きつと見得。此の仕組よろしく道具廻る。）

（お長内裏の場）＝本舞臺上手二間柿葺の庇を見せたる屋體。前面は腰羽目附き一面の中窓、後打破る誂へ、是れに續いてよき程の芥溜、あとへさげて物干、續いて路地、向ふ下見にて見切り、總てお長内裏の體。芥溜より足掛りにて、屋根へ人の上る誂へ、好みの通りよろしく、時の鐘、凄き合方にて道具留る。と上手の中窓を蹴破り、内より長五郎出刃庖刀を腰にさし、尻端折りにて前へ出る。是れに續いて以前の捕手路地口より出來り、長五郎を取卷き、「捕つた」と掛る、是れを誂への鳴物に

なり、思ひ／＼の仕ぬきの立廻り、屋根の上下にて好みの通り存分大立廻りあつて、どつこいと留まる。知せに附き月隱れる。是れにて長五郎よろしく摺脱け、花道へ脱れ行き、俯伏しになる、舞臺の皆々うろ／＼と探り合ふ、此時窓の內より、

捕手　熊坂お長は召捕つたり。（ト此聲に長五郎すつくと立上り、思入あつて、）

長五　ええ、喰ひこんだか。

トぎつくり思入。爰へ花道より捕手兩人つか／＼と走り來り、長五郎を舞臺まで押戻す。爰へ上下より捕手ばら／＼と出て、折重つて繩をかけ、其儘起き上るを木の頭、長五郎無念の思入。合方鐵砲の音にて、

ひやうし幕

四幕目

海士崎町駕籠屋の場
雪の下會所の場

〔役名〕――雪駄直し長五郎、駕籠屋の甚兵衞、下駄の市、荒川三左衞門、家主市郎兵衞、米屋仁兵衞、尼妙貞、道具屋善六、葉山彥助、同家來傳八、駕籠舁九郎助、山崎屋與五郎。熊坂お長、甚兵衞娘お關、

藤屋吉妻、座頭浪市其他」

（海士崎町駕籠屋の場）——本舞臺三間の間中足の二重、藁葺本縁附き、向う暖簾口、上手鼠壁、下手押入戸棚、三尺の佛壇、圍爐裏、自在竹、よき所に半琴を立て掛け、軒口にかごやといふ掛行燈、いつもの所門口、揉療治浪市といふ名札、上の方一間の附屋體、三尺戸明け掛け、内に四つ手駕籠入れあり、下の方折掛けの竹垣、此の屋體本縁の下へ這入る誂へ。總て鎌倉海士崎町駕籠屋の體。爰に市郎兵衞羽織着流し家主のこしらへにて、四つ手駕籠に乘り、これを籠舁〇△の二人にてかつぐ稽古をして居る、側に九郎助の駕舁草鞋の紐を通しながら見て居る。此見得さんげ〲の合方、初午の囃子にて幕明く。

〇△　ほい駕籠、ほい駕籠。（ト平舞臺を、二三遍行つたり來たりする。）

九郎　えゝ、此の野郎も不器用な奴だ、まだ掛聲の息が合はねえ。

市郎　こんな駕籠に乘つては、酒手を遣る氣はないな。

〇　へゝ、大家さん旨く言ひなさるね。

△　わつちらが稽古の駕籠よりか、乘つたこともねえくせに。

市郎　何ぼ海士崎町の家主でも、さう安く言はねえものだ、町内でも小口を利く、二人役の市郎兵衞だ、

此間も勘定くづれに、組合と親方を連れて、すつとお駕籠で假宅だ。
九郎　そいつあ大洒落でござりましたね、何ぞ儲け口がござりましたか。
市郎　地面の賣買があつて、歩一とひろめと判賃で、一兩ばかりになつた所から、つい浮れ出したのよ。
九郎　駕籠でおいでなさるなら、かつがして下さればよいに。
市郎　そこに如在はなけれども、こつちの內から乘つて行くと、直に小指へ知れるゆゑ、そこで外から乘つて行つた。
○　どうで大家さんの、乘んなさる駕籠屋なら、
△　氣の利いた駕籠屋ぢやアあるめえ。
市郎　さうよ、やつぱりおぬし達のやうな、間拔けな駕籠屋だ。
○　それぢやあこんなに、
○△　落しやしたか。（ト態と駕籠を曲げ、市郎兵衞を落す。市郎兵衞平舞臺へどうとなり、）
市郎　あいたゝゝゝ。
　ト腰を擦り居る。やはり右の鳴物にて、奧より甚兵衞着流しにて出來り、
甚兵　これは大家さま、どうなされました。（ト市郎兵衞を介抱なす。）

市郎　いや甚兵衞か、酷い目に逢つたわえ。新米の若造が稽古をするから乗つてくれと、頼むゆゑ乗つた所、如何に錢を取らぬといつて、眞ッさかさまに落しをつた。
九郎　大家さんも御大層な、忠信の淨瑠璃ぢやあるめえし。
市郎　いや、あるめえし所か、實に胸板をはッしと打つた。
甚兵　それは危ないことでござりました。これ手前達もどうしたものだ、稽古をするなら外ですればよいに、家の中でするといふがあるものか。
○　それでも大家さんが、やれ擔げ、それ擔げとおつしやるから。
市郎　なに、おれがそんなことを言ふものか。
甚兵　はて、もうよろしうござります。（ト留めて、）して大家さまには、何ぞ御用でもござりましてか。
ト市郎兵衞思ひ出せし思入にて、
市郎　おゝ、お觸れがあつて來たのだ。
甚兵　なに、お觸れとは。
市郎　外でもない一昨日の晩、山下で殺された山崎屋の娘と下女、段々お調べになつた所、三光とやらいふ世に稀な櫛を持つて居たとのこと、そこで殺した者は物取りとお上でも目ぐしが附き、又下

女の口に喰切つた小指が殘つてあつたゆゑ、何でも小指のない者と櫛を持つて居るものを、見當らば縛つて出せと、代官所から裏々へまで、言ひ渡せとある嚴しいお觸れ。

トこれを聞き、甚兵衞ぎつくり胸に當る思入。

甚兵　すりや山下で殺されたは、山崎屋の娘御が、世にも稀なる三光の。そんなら、あの折。

市郎　え。

甚兵　いやさ、折々仕事の歸りがけ買物をした山崎屋、はて氣の毒なことだなあ。（ト甚兵衞ちつと思入。）

市郎　世間を廣く歩くこなた衆、隨分ともに氣を附けさつしやい。どりや、番屋へ行つてあたらうか。

九郎　わしらもそろ／＼見世を張らう。とつさん、お前は休みなさるか。

甚兵　さ、ちつと差掛つた用があれば、誰ぞ相棒を拵へてくれ。

九郎　あい／＼。大家さん、御一緒に參りませう。

市郎　そんなら甚兵衞どの、必ずお觸を忘れさつしやんな。三光の櫛を持つて居る者が、山下の人殺しだよ。

甚兵　承知しました。（ト思入。）

市郎　あゝ、今打つたので腰が痛い。（ト言ひながら門口へ出る。九郎助先に○へ駕籠を擔ぎ出る。）

九郎○△ 大家さん、お駕籠はどうだね。

市郎 いやも、眞平御免だ。

ト右の鳴物にて市郎兵衛先きに、九郎助○△跡に附き下手へはひる。甚兵衛跡を見送り思入あつて、合方になり、

甚兵 あゝ知らぬ事とはいひながら、一昨日の晩山下で切羽詰りし身の難儀を、盗人どのに助けられ、金の替りに貰つた櫛、さる屋敷から拂ひ物と心にもない嘘さへも、正直者と人さまが御存じゆゑに疑はず、首尾よく賣れた代金百兩、そでないこともお主の爲め、只香合が欲しいばかり、今にもあれ此の事が露顯なさば、人殺しの縄目に逢ふは厭はねど、娘吾妻が與五郎さまと深い中ゆゑ娘の爲めに、許嫁のお照さまを殺したかとの疑ひは、言譯なすとも明りが立たぬ。それと知つては少しも早く、凶事のない内香合を故主へお渡し申したい。あゝ、この道具屋の善六どのは、早く持つて來てくれゝばよいに、待遠しいことぢやなあ。

ト門口を覗きなどして氣の急く思入。又さんげ／＼の囃子になり、花道より善六道具屋にて、羽織ばつち尻端折り、香合の箱を風呂敷に包み、これを背負つて出來り、

善六 甚兵衛さん、お内かね。（ト内へはひる。）

甚六　おゝ善六さんか、待つて居た〳〵。

善六　大きに遅くなりました。(ト下手に住ひ)急いで來ようと思つたところ、似寄の品で、いやさ、荷口があると仲間から知らして來たゆゑ、つい慾で廻り道をして來ました。(ト言ひながら風呂敷包みより香合の箱を出し)さあ、お約束の胡蝶の香合、改めて下さりませ。

ト甚兵衞ちよつと紐を解いて見て、

甚兵　いやわしが見た所が知れぬ品、お前のことゆゑ間違ひもあるまい、さお代金を受取らつしやれ。

ト懐の財布より百兩包みを出し善六へ渡す、善六封を切り改め、

善六　慥に受取りました。

甚兵　念の爲め、受取りを書いて下さりませ。(ト硯箱に紙を添へて出す。善六受取を書いて)

善六　これでようござりますか。

甚兵　ようござるとも〳〵。(ト受取を煙草入に入れる。善六は金を胴巻へ入れ)

善六　いや、自由ながら今言つた荷口の事で仲間へ廻れば、直にお暇いたします。(ト善六立ちかゝる。)

甚兵　これは、茶さへ進ぜませぬのに。

善六　そのお茶よりも山吹色で。

甚兵　え。

善六　いやさ、山下で茶漬ツて行かうか。（トとばくさと右の鳴物にて下手へはひる。）

甚兵　はて、そゝッかしい男だな。

ト稽古唄になり、花道よりお關やつし世話女房のこしらへ、風呂敷包みを持ち出で來り、直に本舞臺へ來り、

お關　父さん、今歸りましたわいな。

甚兵　娘戻つたか、早かつた／＼。して旦那樣には、お替りないか。

お關　何のお替りもない御樣子で、後方までに香合が手に入りますと申し上げたら、それは／＼お悦びなされて、今日の日限りの間に合ふは、そち達が働きゆゑ、後方三左衛門を取りに遣はすと、おつしやつてゞあつたわいな。

甚兵　おゝさうであつたか／＼。いや後ともいはず、たつた今、もう手にはひいつたわいの。

ト出して見せる。

お關　そんなら是れが、香合とやらでござんすか。あゝ嬉しや／＼、是れでお主樣の御歸參も叶ひ、お前の忠義も立つといふもの、こんな嬉しいことはござんせぬわいな。

甚兵　此の悦びに引替へて、さ、一つ叶へば又一つと、娘吾妻が身請けの金。

お關　これも大枚二百兩。

甚　娘、あゝふさぐなあ。

ト甚兵衞は今に縄目に逢ふといふ思入、とんげ〳〵にて、花道より傳八が納戸の半合羽一本差し、紺の脚絆草履にて出來り、門口から、

傳八　甚兵衞さん、ちよつとお目に掛りたうござります。

甚兵　はい、何ぞ御用でござりますか。

傳八　お聞き申したいことがござるから、會所まで來て下さりませ。

甚兵　えゝ。（トぎつくり思入。）

お關　こつちにも急な用があれば、なあ父さん。（ト止せといふこなし。）

甚兵　いや、行かずばなるまいわいの。（ト甚兵衞覺悟の思入。）

お關　さうして、お前の留守にひよつと。

甚兵　旦那さまからお人が參らば、お渡し申してくりやいの。（トそつと香合を渡す。）

傳八　さあ手間は取らせませぬ、早く來て下さりませ。

甚兵　はい〳〵、（ト門口へ出て、）そんなら娘、行つて來るぞよ。（トお關を見てほろりと思入。）

お關　早う歸つて下さんせ。

甚兵　おゝ、（ト門口をぴつしやりしめ、）あゝ、歸れゝばよいが。

ト唄になり悄々と花道へ行く。花道中程にて、傳八後より出拔けに繩を掛ける。

これは。

傳八　御詮議がある。うせう。（ト手荒く引立て、花道へはひる。跡にお關心に掛る思入。香合を見て、）

お關　此の香合が手に入つて、悦ぶ中に父さんの、忌はしいあの顏色、案じるせゐかさつきから、顫へる程の胸騷ぎ、この浪市もまだ歸らず、あゝ何ぞ凶事でもなければよいが、心にかゝることぢやなあ。

ト案じる思入。さんげ〳〵ばた〳〵にて、花道より市郎兵衞走り出來り、

市郎　お關どのは、内か〳〵。（トあわてゝ内へはひり、うろ〳〵する。）

お關　はい、爰に居りますわいな。

市郎　大變々々、（ト坐つたり起つたりして、）あわてしさッしやんな〳〵。水でも茶でも、一杯くりやれ。

ト胸を叩き居る、お關茶を汲み持つて來る、市郎兵衞ぐつと呑んでむせる。

お關　お靜かにお上りなさんせいな。
市郎　えゝ、あわてさッしやるな〳〵。
お關　いえ〳〵、あわてはいたしませぬが、大變とは何でござすんぞいな。
市郎　何だ所か、甚兵衞どのが、人殺しの盜人だとて、今縛られて行つたわいの。
お關　えゝ、（トびつくりなし、）そりやまあ、ほんのことでござんすかいな。
市郎　ほんの事とも〳〵、一昨日の晩山下で山崎屋の娘を殺し、三光とやらいふ櫛を盜み、それを横丁の伊勢五の家へ百兩に賣つたとのこと、所で上から嚴しいお觸れに伊勢五から訴へ出で、そこで人殺しと知れたさうだが、日頃正直な氣に似合はず、とんだことをしてくれて、又おれの厄介だ。
お關　すりや父さんが一昨日の晩、貰つて來たと言はしやんした、三光とやらのあの櫛は、盜み物であつたかいな。如何にお主の爲めぢやとて、人もあらうに山崎屋の、娘御を殺すとは、ひよんなことをして下さんしたなあ。（トお關ワッと泣き伏す、花道の揚幕にて、）
妙貞　うしやあがれ〳〵。

トさんげ〳〵になり、花道より妙貞坊主鬘、黒の頭巾のこしらへにて、二幕目の浪市の小按摩を引摺り、跡より仁兵衞羽織着流しにて附添ひ出來り、

妙貞　さあ、うぬが内は何所だか、鼻で嗅いで案内しろ。

仁右　若し妙貞さん、あんまり手荒くして疵でも附いたら、逆捻を喰ひませうぜ。

妙貞　仁右衛門さんも氣の弱い、何構ふものかね。さあ、うしあがれ〳〵。（ト本舞臺へ來り、）海士崎町の駕籠屋だと云ふから、大方うぬが内は爰だらう。

浪市　どうぞ、御免なされて下さりませ。（ト此聲を聞き、お關、市郎兵衛表を見て、）

お關　やあ、そなたは浪市、どうしやつたぞいの。

浪市　姉さん、堪忍して下さりませ。

妙貞　さあ、きり〳〵と内へはひれ。（ト妙貞浪市を引摺りて内へはひる。仁兵衛も跡よりはひる。）

市郎　こりやまあお前方、年端も行かぬものを、手籠めにして、どういふ譯でござります。

仁右　御免下さりませ、私は雪の下の米屋仁右衛門と申すもの、是れなるは妙貞と申す尼御でござりますが、此の座頭どのゝ事に附いて、斷りに上りました。

お關　斷りにお出でなすつたとは、どんな惡いことをいたしましたか、さあ、それをおつしやりませ。
　おつしやりませ。

市郎　あゝこれ、まあ〳〵靜にさつしやれ。わしは此長屋の家主、市郎兵衛と申すものでござるが、何

を浪市がわるさをしましたな。
妙貞　わるさもわるさ、
兩人　盜みをしました。
お關　えゝ。（トびつくりなす。）
市郎　これは椿事ちうよう、今親仁が盜みをして縛られて行つたばツかり、又跡釜に悴とは、こりや家主はこつぱいだわえ。（トこれを聞き、仁右衞門妙貞思ひ入あつて、）
仁右　そんなら何とおつしやります。此の浪市の親父めも、やつぱり盜みをしましたとか。
妙貞　親が親なら子も子とて、目も見えぬくせに盜みをするとは、いけツ太い餓鬼めだな。
仁右　さあ、盜んだ物を出してしまへ。
妙貞　出さにやあ、親の見る前で。（ト妙貞立ちかゝるを、お關留めて、）
お關　まあ〳〵、お待ちなされて下さりませ、盜み〳〵とおつしやりますが、何を此の子が取りましたざいな。
仁右　盜んだ品は、浪市が懐に隱して居るわしが紙入、尼御の巾着。慈悲をすれば何とやらで、年も行かぬに此樣に按摩をするとは不便なこと、きかぬ療治を合點で、來る度毎にいつでも呼ぶ、定得

意のわしら二人。
妙貞　上下揉んで三十二文の、極りの外に八文か十二文は餘計やり、時分時には飯までも喰はせてやつた恩を仇、親兄弟が言ひ附けて、させることか知らないが、目界も見えぬ身を以て、盗みをするとは死太い心。
仁兵　可愛さ餘つて憎さゆゑ、年甲斐もなく引摺つて、
妙貞　斷りに來ましたのさ。
ト是れにてお關ずつと寄つて、浪市の懐へ手を差入れ、紙入と巾着を引出す。浪市其の手に縋るを振拂ひ、
お關　これ浪市、此の紙入や巾着は、こなたほんまに盗みやつたのか。（ト浪市じゆつなき思入にて、）
浪市　はい、つい出來心で盗みましたわいな。
お關　え丶、おのれはなあ〳〵。（ト浪市を引倒し、疊へ摺附ける。市郎兵衞これを留める、）
市郎　あこれ、お關どの手荒いことをさつしやるな、怪我でもさしてはならぬわいの。
お關　いえ〳〵構うて下さりますな。（ト市郎兵衞を振拂ひ、）これ浪市、何でそなたは此樣な、さもしい事をしやつたぞいの。（ト替つた合方になり、）身貧に暮せどそなたには、何不自由もさせぬやう、

出來ぬながらも此姉がすゝぎ洗濯賃仕事、その禮受けて着類は元より辻駕籠擔ぐ甚兵衞の、内に似合はぬ半琴まで、買つて遣りしも欲しがるゆゑ、又稽古の爲めと此春から、療治に出すも僅でも貰うたお錢を積み溜めて、早う官位を取らせたさ。斯程に思ふこの姉の心も無足に盗み事、親兄弟も一つかと疑ぐらるゝが面目ない、今でこそ辻駕籠擔ぎ、輕い身ながら元は武士、譬にもいふ高楊枝、その日の糧に困ればとて、人さまの物塵一葉掠めし事のなき身さへ、言譯ならぬ今日の仕儀、父さんといひそなたまで、盗人の名を取るといふは、口惜しい／＼わいの。さあ、どういふ譯で盗みをしやつた、言譯あらば言やいなう。

浪市　さあ、それは。（ト言ひ兼ねる思入。）

お關　仔細を言はねば姉が折檻、かう／＼。（ト有合ふ杖を取つて浪市を打ち据ゑる。市郎兵衞捨ぜりふにて留める。）さあ、きり／＼と言やらぬか。（ト是れに浪市顔を上げ、思入あつて、）

浪市　もうし姉さま、言うては惡いことなれど、お前の恥になる事ゆゑ、盗みし譯を申しまする。（合方替つて、）三年跡に父さまのお主樣が、失うた大事の寶の在所が知れ、それを買ふには大層な金が入るとて朝夕に、困る話しを聞くに附け、せめて療治の代なりと金の足しにと思ふゆゑ、今日も朝から方々を呼んで歩けど呼び手はなく、妙貞さまのお家へ上り、療治をなして歸りがけ、足に

さはつた巾着に、ふつと浮んだ盗み心、袂へ隱して又それから米屋の旦那を揉むうちに、見えぬ目にて四邊を窺ひ、探る手先きに紙入のさはるを幸ひ懷へ隱す所を見咎められ、憎い奴ぢやとお二人さまに引かれて歸る此身の苦しさ、盗みをすれば命まで、取らるゝ事とは聞いては居れど、わしや殺されても父さんや、お前の苦勞が助けたく、ひよんな事をしたばツかり、親兄弟に惡い名を、附けたはどうぞ許して下され。もし仁右衛門さま、妙貞さま、親兄弟の言ひ附けで、決して盗みはしませぬ程に、憎い奴ぢやと思召さば、此の浪市を。(ト四邊を探り、杖を取上げ、)この杖で打ち殺して疑ひを、どうぞ晴らして下さりませ。さあ打つて下され、打ち殺して下さりませ。

ト浪市仁右衛門妙貞の前へ杖を出し思入。此のせりふの内お關は泣き伏す。市郎兵衛仁右衛門妙貞と顏見合せしく／＼と泣き、此の時三人ワッと泣き出す、涙を拭ひながら、

仁右　あゝこれ／＼、さういふ譯と聞く上は、どうまあこなたが打たれるものか。

妙貞　年甲斐もなく此のやうに、手荒くしたが面目ない。これ姉御、どうぞ、

仁右　堪忍して下さりませ。(ト兩人お關にわびる。お關思入あつて、)

お關　そんならお疑ひは晴れましたか。

妙貞　晴れたとも／＼。さつぱりと、

妙貞仁右 晴れたわいの。

お關 まだお疑ひは晴れましても、晴れぬは此の子の盗みの科。

仁右 あこれ、盗みとは何の事、此の紙入や巾着は此子にわしらが遣つた品、なほ申し、妙貞さま。

妙貞 それ〳〵、それを盗んだの何のとは、こちらがみんな覺え違ひ、悪名附けた代りには、門跡さまへ納めようと、溜めて置いた三兩二分、これを添へて遣りませう。

ト懐より紙入を出し金を包んで、浪市の前へ置く。

仁右 いやお前がさういふお心なら、わしも爰に得意から、拂ひを取つた金が五兩、これも一緒に遣りませう。（ト仁右衛門財布より紙包の金を出し、同じく浪市の前へ置く。市郎兵衛これを見て）

市郎 したり、（ト手を打ち）成程世界には鬼はないものだ、親兄弟の其の爲めに盗みをしたと聞かしやつて、取られた物に輪をかけて、金まで添へて遣らつしやるとは、さりとは見上げた二人の衆、家主感心いたしました。然しわしも見ては居られぬ、僅なれども一兩二分、掃除代の殘りがあれば、是れをば添へて丁度十兩。（ト市郎兵衛紙入より一兩二分出し、同じく前へ並べる。）

仁右 お家主さまの御助力にて、

妙貞 數よく金も揃うたれば、

市郎　さあ、お關どの、
四人　受取らつしやれ。
お關　いえ〳〵是れを受けましては、どうも心が、
市郎　はて濟むも濟まぬも入らぬわい。悪いことはわしが言はぬ、思召をもどかずに、お貰ひ申しておくがよい。（ト是れにてお關思入あつて、）
お關　左樣なればお貰ひ申しまする。これ浪市、ようお禮を申しやいの。
浪市　あい、皆樣有難う、
兩人　存じますわいなあ。（トお關は金を頂き、浪市は手を合して拜む。）
市郎　やれ〳〵、是れでさつぱりと浪市の明りは立つた、是れから親仁の甚兵衛どの。
お關　どういふ譯か會所へ行き、樣子を聞いて來たいにも、餘儀ない事で待合はす人があるゆゑ行くことならず。
市郎　いや、必ず案じさつしやるな。日頃正直な甚兵衛どの、てつきり是れは何かの間違ひ、つい一走り會所へ行き、樣子を聞いて來ようわいの。
仁右　大家さまがお歸りなら、

妙貞　わたし共も御一緒に、

市郎　道までお連れになりませう。（ト三人立ち上がる。）

お關　左様なればお二人さまにも、もうお歸りでござりますかいな。

仁右　いやも、思はぬことで大きに長居、

妙貞　これをば緣に、姉御にも、

お關　はい、お禮ながら上りませうわいな。（ト三人門口へ出て、）

市郎　そんならお關どの、

お關　どうぞ樣子を、

市郎　直に知らせに歸つて來るぞよ。（ト三人花道へ行く、）何とお二人さま、あの浪市は年に似合はぬ、孝行者ではござりませぬか。

仁右　いやもう私共も腹立ちまぎれ、憎い奴ぢやと思ひましたが、

妙貞　哀れな話しを聞きまして、

市郎　家主までも淚の相伴。

仁右　盜んだ時は閻魔の子も、

妙貞　今となつては地藏の子、
市郎　まことに孝行な、やれ、駕籠屋の子。
兩人　はゝゝゝゝ。
市郎　さあ行きませう。（トテンツヽ〳〵になり、三人花道へはひる。お關跡見送り。）
お關　これ浪市、堪忍してくりやいの。（トしをれ居る浪市を抱きしめ、）さういふ心と知らぬゆゑ、一途に盗みをしたと思ひ、杖を以ての今の折檻、どこも痛みはせぬかいの。
浪市　いえ〳〵わしは何ともなけれど、心にかゝるは父さまが、縛られて居やしやるとのこと、何で盗みをしやしやんしたぞいな。（ト浪市お關に縋る。）
お關　樣子知れねど、父さまは、盗みばかりか人殺し。
浪市　えゝ、なに父さまが人殺し。（ト浪市思はず大きな聲する。）
お關　あこれ、ひそかにしやいの。

トお關四邊を窺ふ、浪市は口を押へる。此見得時の鐘さんげ〳〵にて此道具廻る。

（雪の下會所の場）――本舞臺三間の間、常足の二重、本庇、三尺の式臺、向う一面の鼠壁、前側

白木の障子を建切り、式臺の左右駒寄せ、上の方一間中窓の前側、此前に用水桶を三ツ積重ね、下の方一間板羽目の前側、これに觸書の張札、總て雪の下會所の體。爰に仕出し大勢立ち掛り、會所の内を窺ひ居る、これを番太鐵棒にて追つて居る、きんげ／＼にて道具留る。

番太　さあ／＼、通りませう／＼。

ト仕出しわや／＼捨ぜりふにて、やはり立ちかゝり居る、此内花道より以前の善六、香合を風呂敷に包み、これを背負ひ出て來り花道にて、

善六　無駄だと思つた甚兵衞が、思ひがけなく金が出來、放駒の香合をどういふ譯か買はうといへど、眞の品を知らぬゆゑ似寄りの品をおッはめて、百兩取つて質屋へ渡し、利分を取つた其の上に、儲けは背負つて居る此の正物、こいつを賣つて其の金で京大阪から大和巡り、暫く影を隱して來ようか。（ト本舞臺へ來り仕出しに向ひ、）もし、會所に何でござりますか。

○　熊坂お長といふ泥坊と、駕籠屋の甚兵衞といふ親仁が縛られて居ります。

ト是れを聞き、善六びつくりなし、

善六　なに、甚兵衞が縛られた、さてはさつきのあの金は。

ト思入れ、此以前より後に長五郎の吹棒頰冠りにて顏を隱し、善六の風呂敷包へちよつとあたり、思

入あつて、引浚つて逸散に花道へ逃げてはひる。仕出し皆々わや／＼いふ。

一 泥坊々々々々。（ト善六跡を追掛けはひる。）

〇 成程、お仕置場の巾着切だ。

皆々 油斷のならぬことだ。

番太 通りませう／＼。

ト是れにて仕出し皆々捨ぜりふにて左右へ別れはひる。番太も下の方へはひる。合方になり、正面の障子を左右へ引拔く、二重上手に前幕のお長腰繩にかゝり、鰻飯の丼を控へ、燗德利、茶碗、手酌にて酒を呑み居る。下手に以前の甚兵衛同じく腰繩にて俯向き居る、後に傳八控へ、眞中に葉山彦助羽織大小役人のこしらへにて控へ、下手に宿老二人控へ居る、

彦助 こりや甚兵衛、有體に申せ、いくら汝が知らぬといつても、三光の櫛を賣つたからは、人殺しの目ぐしは拔けぬぞ。

甚兵 いえも、此身に覺えのあることなら、何で御苦勞掛けませう。只今も申します通り、其の夜山下を通り掛り、拾ひましたに相違ございませぬ。

彦助 幾度いつても同じことばかり、さりとは死太き奴。それ傳八、拷問なせ。

傳八　畏りました。さあ、どうで先きのねえ身體、一日なりとも娑婆に居る内、樂をするのが其身の徳、痛い目せぬうち言つてしまへ。

甚兵　それぢやというて、知らぬことをば。

傳八　知らぬと言へば、かう／＼。（ト傳八甚兵衞を十手にて打据ゑる。甚兵衞よろしく苦痛の思入。こゝにて、有體に申し上げろ。

甚兵　如何程お責めなされても、知らぬことは申されませぬ。

傳八　成程われは強情な奴だ。

彦助　やい甚兵衞、一體汝は何處の生れで、是れまでどこに住居をなしたぞ。

甚兵　はい、何をお隱し申しませう、產れは即ち下總八幡、千葉の御家中何某樣へ夫婦勤めの若黨奉公、仔細あつて三年跡より、此鎌倉の海士崎町で、駕籠屋渡世をいたして居ります。

ト此中お長は脇を向き、構はず酒を呑んで居る。

彦助　して又汝が子といふは、お關といふ娘と、浪市といふ座頭ばかりか。

甚兵　まだ其外にお松といふ、姉めが一人ございましたが、是れはしかも十四の年、同じ屋敷の若黨と密通なして行方知れず、其の後一度の便りもせぬ、不幸な娘がございました。

ト これを聞き、お長思はず持つて居た茶碗を落し、甚兵衞を見てぎつくり思入。

彦助 すりや三年以前までは、千葉の屋敷に奉公せしとか、それはともあれ只今にては、海士崎町の駕籠屋風情が、櫛の價の大枚百兩何用に使つたか。

甚兵 さあ、それは。

彦助 其の日暮しの身を以て、如何いたした。

甚兵 さあ。

彦助 金子の行場を言ひ兼ぬるは、いよ〳〵以て怪しき甚兵衞、手酷くこれにて拷問なせ。

傳八 畏りました。（ト甚兵衞を引附け、十手を振上げる、お長思入あつて、）

お長 あもし、其の拷問待つて下さんせ。

傳八 何と。（トお長彦助に向ひ、）

お長 お役人樣へ申し上げます、好きな酒にうか〳〵と、餘所事に聞いて居ましたが、今御詮議の人殺しは、其の爺さんぢやあござりませんよ、外に殺した者があります。

彦助 なに、外に殺した者があるとは。

傳八 して、殺した奴は。

お長　外でもない、わつちさ。

ト以前よりお長楊枝を尋ねる思入あつて、割箸を二つに折り楊枝に使ふ。

甚兵　え。（ト思入。）

彦助　すりや、其の方が仕業よな。

お長　まだ〳〵こんなことぢやあねえよ、わつちが惡事を言ひ立てたら、紙幟や捨札が何本あつても書き切れめえ、口數多く人さまに御厄介を掛けずとも、亭主殺しで兇狀はお定りの曝しもの、果ては野末の露霜と消えるも高き木の空で、遠音に響く廓の騒ぎ、近く聞ゆる燒場の念佛、戀と無情を右左寐耳に聞いて往生する氣さ。（トお長よろしく思入にて言ひ、氣を替へて。）おや、わつちとしたことが、重い口からべら〳〵と、似ても似附かぬ親仁の聲色、僅のお酒に醉つたさうだよ。

彦助　いや、此の白狀合點が行かぬ。なぜ汝が殺したのに、甚兵衛が櫛を持つて居たぞ。

お長　そりやあわつちが捨てたのを、あの爺さんが拾つたのだ。

彦助　いや〳〵さうは言はせぬぞ、物も欲しさに人も殺さう。殊には世にも稀なる櫛、何で其の場へ捨て置いた。

お長　こりやあなたでもないお尋ね、着類や道具に目を掛けるは、そりやお駈出しの泥づくさ、女でこ

それ熊坂のお長と異名を取つたわつち、金より外に取りやあしないよ。

彦助　でも殺したといふには、何ぞ汝が方に證據があるか。（ト是れにお長ぐつと詰り）

お長　さあ。

傳八　證據は下女が死骸の口に、殘つてあつた小指の先き。

彦助　まことに汝が殺したなら、小指があるまい、それを見せやれ。（トお長思入あつて）

お長　それ、とつくりと御覽じろ。（トお長前幕にて半次が喰切りし小指を見せる、彦助見て）

彦助　むゝ、さてはいよ／＼人殺しは、

傳八　熊坂お長であつたるか。

お長　小指の證據に疑ひが、晴れたらどうぞ爺さんを、許してやつておくんなさい。

彦助　如何にも繩目は許しくれうが、櫛を賣つたる科あれば、落着までは家主預け。

傳八　これ、甚兵衛の家主は居らぬか。（ト下手より市郎兵衛出で）

市郎　へい、是れに控へ居りまする。

彦助　其の方へ、きつと預けるぞ。

市郎　へい／＼、畏りました。

彥助　それ、繩目を許してやれ。

ト甚兵衞の繩を解いてやる。甚兵衞これまで俯向き居て、此時顏を上げ、お長に向ひ、

傳八　はッ。

甚兵　思ひがけない此身の疑ひ、脫れましたも、(トお長の顏を見て、)や、こなたはどうやら、おゝさうだおゝさうだ、姿形は替れども變らぬ者は幼顏、見覺えのある我が娘。

お長　あゝこれ、(ト言つては惡いといふ思入。)此の爺さんは何をいふのだ、そりや廣い世界だからお前の娘にこの顏が、にたか燒いたか知らねえが、わつちの方にやお覺えはねえよ、今更いふも愚痴ッぽいが、十四の年からぐれ出して、人の物は我が物と、先づ手初めが板の間から、ゆすり騙に美人局、噂が惡さに巢を替へて枕搜しの旅稼ぎ、一度が二度と功を積み追落しやら家尻切り、人殺しさへ幾人か太る度胸に細る首、たうとう仕舞ひが大それた、亭主殺しの熊坂お長。然しこんな莫連でも木の股からも生れねば、親兄弟もあつたれど、音信不通に今では他人、ほんのわつちや一人身さ、親兄弟のないのが仕合せ、あつたら共に縛り繩、足手纏ひで、行くのに邪魔だよ。

ト甚兵衞に名乘つては惡いといふ思入にていふ。甚兵衞も思入あつて、

甚兵　さてはそれゆゑ、此身の科を。

お長　えゝ、又しても餘計な口を、聞けば聞く程愚痴が出る、何にも言はず、此の場を早く。

甚兵　とはいへ、此の儘見捨てゝは。（トお長の側へ行かうとするを、市郎兵衞引留め、）

市郎　これはしたり甚兵衞どの、御免になつた上からは、長居は恐れ、少しも早く。

甚兵　それぢやというて、

彥助　やあ、ぐづ〱と立兼ぬるは、われはお長に身寄りのものか。

甚兵　さあ、

傳八　身寄りの者なら、縛り上げるぞ。

甚兵　え、

傳八　きり〱と立たぬかい。

甚兵　はい〱、立ちますでござります。

　　ト甚兵衞式臺へ下りる。お長懷より紙包みの金を出し、式臺へ投り、

お長　それ爺さん、何か落ちたよ。

甚兵　え、（ト取上げ心得ぬ思入）これは。

お長　十四の年まで育てられた、不孝娘の恩返し、

甚兵　すりや、此の金を、
彦助　なに、金とは。
甚兵　さあ、かねて噂のお長どの、惡に強きは善にもと、何にも言はぬ金ない。
お長　何の我が子に、其の禮が。
傳八　なに、我が子とは。
お長　さあ、我が子にしてもいゝわつち、不便と思はゞもし爺さん、逆ひながら遁り、（ト言ひ掛け氣を替へ）これも今更いらぬ愚痴、わつちに構はず少しも早く。
市郎　さあ甚兵衛どの、行きなせいな。
甚兵　そんなら、是れが、（ト又お長の側へ行かうとするを）
彦助　えゝ、まだ行き居らぬか。
甚兵　はい、只今參ります。

ト合方きつぱりとなり、甚兵衛先きに市郎兵衛附いて下の方へ行きかける、お長跡を見送り思入あつて、

お長　あゝこれ、爺さん。

甚兵　え、（ト振返る。お長ちつと顔を見て、愁ひの思入にて）

お長　煩らつてくんなさんなよ。（トほろりと思入）

甚兵　はァ――。（ト甚兵衛泣き伏す。お長は彦助を見て氣を替へ、注いであつた茶碗の酒をぐつと吞み）

お長　あゝ、冷たくなつた。

ト顔を背ける。市郎兵衛は甚兵衛を介抱なす、此の見得。唄、時の鐘にて、此道具廻る。

（元の駕籠屋の場）――本舞臺元の世話場の道具、時の鐘、さんげ〳〵にて道具留る。と花道の揚幕にて、

大勢　泥坊々々。

トいふ、ばた〳〵になり花道より長五郎頬冠りにて吹替と同じこしらへにて、香合を包みたる風呂敷包みを引つ抱へ、逸散に逃げて出來り、内へ駈込み、門口をしめてほつと思入

長五　すんでの事につかまるところ、爰の内で助かつた。（ト四邊を見て）誰も居ねえか、こいつァ妙だ、（ト長五郎尻をまくつて胡坐をかき）昨夜お長が捕られたから、浮々しては居られぬゆゑ、上方筋へふける積りで路用の足しに盗んだ包み、何ぞ金目な品ならいゝが、（ト包みを明け掛け）何にしろ

眞ッ暗だ。

ト此内時の鐘、やはり合方にて花道より荒川三左衞門羽織袴股立ち大小にて、忍び提灯を提げ出來り、直に門口へ來り。

三左　賴み申す〳〵。（ト是れにて長五郎びつくりなし、）

長五　南無三、表へ誰やら。（トうろたへて件の風呂敷包みを持ち、緣の下へ隱れる。）

三左　賴み申す〳〵。（ト奧にて、）

お關　はい〳〵、どなた樣でござります

ト合方にて、奧よりお關行燈を提げ出來る、三左衞門門口を明け、

三左　荒川三左衞門でござる。

お關　これは〳〵三左衞門樣、さあ〳〵是れへお通りなされませ。

三左　許しめされ。（ト三左衞門上の方へ通り住ふ。）

お關　最前からあなたのお出でを、お待ち申して居りましたわいな。

三左　夕刻との約束ゆゑ、遠慮いたして只今參つた。して甚兵衞どのには、在宿でござらうかな。

お關　はい、父さんは、ついそこまで。

三左　すりや、彼の品を取りにでも。
お關　いえ、其の品は私が慥に預かり置きましたれば、只今お渡し申しませう。
三左　なに、最早手に入つたるとか、それは重疊な儀でござる。一昨年より段々と上への日延べも今日限り、其日限に手に入つたとは、未だ主人の御武運が盡きざる所か　忝ない、これと申すも外ならず、甚兵衛どのゝ忠義ゆゑ、いや、お手柄なことでござつた。
お關　有難う存じます。（ト二重佛壇の内より香合の箱を出し、）いざ、お受取り下さりませ。
　ト出す三左衞門扇を開き、此上へ箱を置き、
三左　陪臣の身で御家の重器、披見は恐れ多けれど、使ひの役目一通り中改めて受取り申す。（ト三左衞門塵手水を遣ひ、香合の箱の蓋を明け中を見てびつくりなし、）すりや此の品を、御家の重寶放れ駒の香合と、存じて是れを取り得しか。
お關　えゝ何とおつしやります。
三左　こりや似ても似附かぬ、僞物なるわ。
お關　えゝゝゝ、（トびつくりなす、三左衞門思入あつて、）
三左　かゝる事とは御存じなきゆゑ、後刻香合差上げんと、旦那樣には取次の重役衆へ言上あれば、今

更これが僞物なりと何とて言譯が相成らうぞ、私ならぬ婚儀の妨げ千葉家の瑕瑾と相成れば、且那樣には御切腹、それのみならず御子息の與五郎樣の御身にまで、かゝりや繋がる拙者も追腹、かほどの大事になる程の大切なる寶をば、女風情に預け置き他出いたすうつけ者、この通りを言上なさん。（ト三左衞門すつと立つて行かうとするを、お關縋り留め、）

お關　其のお腹立ちは御尤ながら、これには定めて樣子のあること、どうぞ父さまの歸りますまで、お待ちなされて下さりませいな。

三左　今宵につゞまるお主の大事、人でなしの歸るをば、べん／＼だらりと、相待ち居らうか。

お關　そこをお慈悲に暫しの內、

三左　慈悲も情も常のこと、

お關　ではござりませうが、

三左　此期に及んで、

お關　もし。（ト袖にすがるを振拂ひ、）

三左　益なきことだわ。（ト門口へ出る、お關提灯へ明りを附けて出しながら、）

お關　くどうも願ふは、今宵のお詫びを。

三左　最早拙者は取次いたさぬ、人がましくば甚兵衛に命を捨てゝ。

お關　え。

三左　言譯いたせ。

ト門口をぴつしやりしめる。唄になり、三左衛門足早に花道へはひろ。お關はハアと泣き伏す、時の鐘替つた合方になり、花道より三幕目の與五郎着流しにて出來り、

與五　今そこで摺れ違ひしは親人の家來三左衛門、血相替へて急ぎの樣子、どうやら心にかゝれども問ふことならぬ我が身の上、若しや失ふ香合のことではないか、それさへも知らぬ不孝の身の放埒、何にもせよ甚兵衛に、逢うて樣子を尋ねて見よう、さうぢやく。

ト舞臺へ來り、門口より内を窺ふ、此時奥より浪市出來り、

浪市　これ姉さん、樣子は奥で聞いて居ましたわいの。(トお關に縋る、お關浪市を見て思入あつて、)

お關　父さんといひ、そなたまで、心にもない盗みをするも、元はといへば此の品ゆゑ、いくせの苦勞も僞物にて、今となつては水の泡。

浪市　お主の爲めと思うたも、お役に立たねば盗人の名を取つたのが口惜しい。

お關　おゝ、尤もぢやくが、これもみんな因縁づく、盗人の名を取つたのも、元をたゞせばわしゆ

――ゐに、血筋を引きしそなたの因果。
ト此時に椽の下より長五郎そろ〳〵と出かけ、思はず上の話耳に入りし思入。
お關　今まで包み隱せしが、不便やそなたは盜人の、胤に生れし子ぢやわいの。
浪市　なに、盜人の血筋とはえ。
浪市　え……。
ト浪市驚く、長五郎心得ぬ思入。お關きつとなり、胡弓入りの合方になり、
お關　思ひ廻せば十三年前、千葉のお家の御領分、下總八幡に居た折に、父さんは旦那樣のお供をなして鎌倉住居、跡はわしと母さんで淋しさまさる片在所、然も小雨の降る晩に女ばかりと侮つて忍び入つたる盜人が、わしを捉へて刄物三昧脫れ難なくそれゆゑに、言ふに言はれぬ恥かしい目は見れど其人の、顏も知らねば名は勿論、明け行く鐘に立ち退きし跡に殘りし、（ト立つて佛壇の下を明け、中より脇差を出し持ち來り、）これ此の脇差、模樣は岩に白浪の、富士形なせし出し目貫。
浪市　そんなら其の時、あのお前が。
お關　恥しいが盜人の胤を宿して産みしはそなた。それを氣病に母さまは一年立たず果敢ない病死、それからそなたを里に遣り、成人なして内へ呼び、世間を憚り弟の積り、實はわたしの子ぢやわいの。

浪市　それではわしの父さまは、行方も知れぬ盗人かいな、こりやまあどうせう、何とせうぞいな。

お関　これに附けても愛しいは、お年寄られた父さんが紛失なせし千葉家の重寶、放駒の香合を求むる價に差迫り、死なうとせしを助けられ、貰うて來たる其の櫛は三光とやら世にいうて、稀なる品に賣代なし、其の價にて求めたる放駒の香合は、似ても似附かぬ僞物にて詮議の日延も今日限りゆゑ、お主樣には御切腹、又父さんは其の櫛ゆゑ人殺しとて繩目の恥、殺されしは誰あらう、與五郎樣の許嫁お照さまゆゑ妹の、吾妻の緣に殺せしかと世間の口が恥しい、三方四方の言譯に人殺しをも身に引受け、書置きなして死ぬ覺悟、心掛りは片輪なそなた、跡に殘すが未來の障り、そればつかりが悲しいわいなう。

トよろしく思入あつて言ふ。此内門口の與五郎これを聞き、はツと思入あつてどうとなり、俯伏になり居る、浪市も思入あつて、

浪市　いえ〳〵お前は死なずとも、ぢい樣の代りなら、わしを殺して下されいの。

お関　おゝよう言やつた〳〵、そなた一人は殺しはせぬ、二人一緒に自害して、わしが手を引き冥土の旅、死出の支度をする間、三途の川の白浪と名附けし唄を此世の名殘に、（下壁に立掛けある牛琴を取つて浪市の前へ置く、浪市探り見て思入、）生死知れざる夫琴へ、暇乞ひにも回向にも。

浪市　わしが作りし白浪の、
お關　名前は父御の世渡りを、
浪市　よそへて附けし端唄をば、
お關　唄ひ仕舞ふが此世の名殘、
浪市　泡と消え行く、
お關　白浪ぢやなあ。
　ト誂への琴唄獨吟にて浪市琴を彈く、お關泣きながら上着を脫ぎ脇差を拔き、寐刄を合せんと行燈を持ち來る。此明りにて長五郎そつと以前の硯箱を引き寄せ、卷紙に書置を書きかける、唄一くさりあつて切れる。本釣鐘、ばた／＼になり、花道より吾妻手拭を吹流しに冠り、走り出來り、與五郎に躓く、これにて與五郎ずつと立上り、狂氣せし思入。
吾妻　や、與五郎さまか。
與五　そなたは誰ぢや、（ト後の藪の竹を拔き取り。）おゝ、行列ぢや／＼。
　トつか／＼と花道へ行く、吾妻追ッかけ行き、
吾妻　もし、お前はお氣が。

トこれをキッカケに又文句になり、舞臺にては矢張寐刄を合せ書置を書き居る。花道にては與五郎花道揚幕の方へ行かうとするを吾妻支へる。トゞ唄の切れ、ばた〳〵にて、與五郎逸散に揚幕へはひる、吾妻跡を慕つてはひる。本釣鐘、お關思入あつて、

お關 無情を告ぐる鐘の音に、いつもの唄も身にしみて、哀れ催す其の一節。

浪市 これに附けてもぢい樣の、

お關 跡のお顏が思ひ遣られて、

ト又唄になり、長五郎そろ〳〵と下より出る、お關浪市の後へ廻り切らうとして切兼れる思入、泣く泣く刀を振上げる、唄一杯に切れ。

南無阿彌陀佛、(トお關刀を振上げる。此の時長五郎お關の手を捉へる、お關長五郎を見て。)

お關 や、お前は何處から、

長五 何處からでもねえ、盗人だ。

兩人 えゝ、(トびつくりなす。)

長五 繩目にかゝつた甚兵衞どの、きつと助かる見込みがあるが。

お關 それぢやというて、

ト お關浪市を殺さうとするを、長五郎白刃を取つてどつかと坐し、

長五　急がずと思案をするがよい。（ト刃物を取り鞘へ納める、此時お關長五郎をよく〳〵見て、）

お關　死ぬる覺悟のわたしら二人を、とゞめさんした、

兩人　盜人さんは、

長五　その盜人も追掛けられ、駈込み這入つた緣の下、とんだ達摩のまじ〳〵と夜の更けるのを待つ内に、思はず聞いた二人の話し、其の孝心と貞女の操に、初めて我が身に愛想が盡き、今から心取り直し、改めるもこなたゆゑ、二人の命を助けにやならぬ。親に代り死なうとは尤なれど無分別、死ぬる親が助かつて歸つた所が娘や孫が、死んだと聞けば年寄つて何しに生きて居られうぞ、いつそ、それよりばつさりと首の落ちるが一思ひ、そこを助ける言廻しは盜人だけに大得手もの、又寶の日延も今宵の內、果報は寐て待つ盜人の晝寐も當の相がたり、死ぬるばかりが孝行や浮世の義理にもなりますまい。人の物をば我が物とする生業にも褌と義理は缺かれぬ浮世の習ひ、急かずと相談さつしやいな。

ト 長五郎よろしく留める。時の鐘やはり合方、花道より甚兵衞出來り、門口にて內の樣子を窺ふ、お關思入あつて、

お關　御親切なる盗人さん、して父さんを今宵の內、

長五　助ける仕樣は外でもねえ、わしを縛つて訴人をさつせえ。

お關　そりや又、何ゆゑ。

長五　一昨日の晩山下で、金と思つて娘を殺し櫛を取つたは、わしが仕業だ。

ト　お關これを聞き思入あつて、

お關　そんならもしや、其の時に、

長五　如何にも此の家の甚兵衞どの、金の切羽に死なうとなすゆゑ、見兼ねて遣つた其の櫛の情が却つて仇となり、人殺しとの疑ひで縄目と聞くが氣の毒さに、命を捨てる身の覺悟。

お關　とはいへそれも父さんの、難儀を救ふお前の情、どうして訴人が、

長五　ならずば是れから名乘つて出で、甚兵衞どのを助けにやおかぬ。

ト　此の内門口の甚兵衞思入あつて、

甚兵　いや、それに及ばぬ、甚兵衞は縄目を許され、疾くより是れに。（ト甚兵衞内へはひる。）

お關　こりや、父さんには、

浪市　ようまあ家へ。

甚兵　戻りかゝつて最前より、樣子は殘らず聞きました。一度ならず二度までも、親子の命救はれし重なる恩の盜人どの、えゝ忝なうござります。
長五　して又、こなたはどうして繩目を。
甚兵　許されたはわしよりも、先きへ會所へ捉はれ居たる、熊坂お長といふ女、山下にての人殺しは卽ち我と自身の白狀、それゆゑ脫れし我が繩目。（ト此れにて長五郎合點の行かぬ思入）
長五　合點行かぬは何故に、覺えなき身で、お長が科を。
甚兵　身に引受けしは仔細あつて。何を隱さう二十年以前、家出なしたる我が娘。
お關　えゝ、すりや家出せし姉さんが、お前に代つて。
甚兵　さあ、積る盜みの數々に、どうで命のない身とて、我を助けし一つの孝。
ト長五郎是れにて思入あつて、
長五　すりや長五郎が名乘つて出で、こなたの繩目を助けた上、是れまで積る惡事の終り、お上の成敗受けようと思つた事も今にては、後の祭りとなつたるか、むゝ。
ト思入あつて、長五郎お關が持つてゐた脇差を拔き、腹へ突立てる。兩人びつくりなし、
甚兵　やゝ、こりや何ゆゑに、

兩人　こなさんは。

長五　死ぬるは元より覺悟のこと、生きてこなた宗親子には言譯ならぬ此の身の惡事。(ト長五郎苦痛の思入。竹笛入りの合方になり、)今更名乘るも面目なさに、甚兵衞どのを助け、繩目に掛つて行く時に殘し置かんと書いたる一通。(ト書置を出し、)讀んで此の身の罪科を、許して下され、女房舅。

お關　なに、女房、

甚兵　舅とは。

長五　仔細は卽ち、此の書置。(ト此れにてお關取上げ、開き見て、)

お關　なに〳〵、「われら事十三年以前御身の家へ忍び入り、一夜の枕交せし後鎌倉へ下り打過ぎ候所、測らずも今宵廻り合ひ、盲目の悴こそ我が胤なりと、其の夜忘れし脇差の白浪の目貫にて相知れ、驚き入り候」(ト讀みかけびつくりなし、)や、そんなら其の夜の盜人は。

長五　此の引窓の長五郎。

お關　假令盜人さんにもせよ、胤を宿せばわたしの夫。

浪市　わしが爲めには實の父さん。

長五　人でなしをばそれ程に慕つてくれる女房悴、それと知らねば情なや、女房に持つた其女は手前

が姉の熊坂お長、重なる縁の舅どの、難儀を掛けしも、皆我ゆゑ。

甚兵　して又それは、如何なる譯にて。

長五　仔細はやはり其の書置。（ト是れにてお關又書置を開き見て、）

お關　「まつた、三年跡箱根にて、三原傳藏に頼まれ、南方十次兵衛様の預りたる、千葉家の重寶放駒の香合を盗み取り候も、やはり我等に御座候。」

甚兵　どれ、（ト又甚兵衛書置を取つて、）「その上昨夜山下にて、娘を殺せしその科を脱れん爲めに櫛を遣り、甚兵衛へぬりつけし、重なる罪の言譯に名乘つて出で、人らしく相果て申す覺悟に御座候、」

やゝ、こりや、香合といひ長五郎どのが、ムヽ。

長五　さゝ、十三年が其間、片輪な悴を養育の、恩あるこなたへ難儀を掛けしも、皆長五郎が仕業、何面目に存へて此の言譯がならうぞい。

甚兵　其の義理ならば死なずとも、最前我が手に入つたる香合。

お關　いゝえ父さんあの品は、似ても似附かぬ、まつかな贋物。

甚兵　なに、贋物とや、やゝゝゝ。（トびつくりなす、）

長五　あいや其香合の正眞は、最前此家へ駈込む折、盗み取つて則ち爰に。（ト以前の香合を出し、）これぞ

甚兵　此品手に入る上からは、御主人樣の御身は安泰。此の身の一つの言譯。（ト甚兵衞受取り、）

お關　それに引替へ十三年、待つたお前の此の姿。

甚兵　死なずと仕樣もあらうのに、

お關　早まつたことして下さんしたな。（ト長五郎思入あつて、）

長五　あ、いや〳〵、是れまで積る惡事の數々、名乘つて見ればこなたの主人、與五郎樣の許嫁お照どのを殺せし上は、取りもなほさず主殺し、三尺高い木の空で人手にかゝらにや死なれぬ體、我手に死ぬは身の仕合せ、必ず歎いて下さるな。

ト ばた〳〵になり、花道より以前の三左衞門走り出來り、直に舞臺へ來り門口を明け、

三左　甚兵衞どの、在宿なるか。

甚兵　や、三左衞門樣か。

三左　最前此の家を歸りしところ、香合詮議の日延三十日の御免を蒙むり、旦那樣にも御助命故、こなたに逢つて寶の樣子、委しく聞かんと參つてござる。

甚兵　いや、その香合は仔細あつて、唯今手に入り、即ちこゝに。

ト香合を出す、三左衛門受取り、開き見て、

三左　まことに是れぞ御家の重寶、ちえゝ忝い。（ト押しいたゞき、）これに附けても心がゝりは、唯今これへ參る道にて、廓の者の噂を聞くに、吾妻どのゝ行方が知れず、與五郎樣が連出せしとて、追手をかけて捉へし上、吾妻が身請けをなせばよし、左もなければ勾引しと、上へ訴へ出るとのこと。

お關　すりや、與五郎樣が妹を、連れて驅落ちなされしとか。

甚兵　何にもせよ吾妻が身請けは、假初ならぬ二百兩、その數ほどには足らねども、最前會所でお關から貰ひし金が七十兩。（ト以前の金包みを出す。）

浪市　わしが貰うた、さつきの十兩。

お關　合せて丁度八十兩。（ト最前の金を出す。）

長五　殘りの金は主膳を殺し、盜み取りたる二十兩。（ト反故に包みし金を出す。）

三左　やゝ、此の書物は、（ト反故に眼を付ける、お關甚兵衞一枚づゝ取上げ、開き見て。）

甚兵　與五郎樣が權九郎へ、貸したる金の借用證文。

お關　今一通は傳藏が、吾妻を連れて身請けの手付證文。

甚兵　その手付こそ與五郎樣が、騙り取られし卽ち百兩。
お關　此の百兩を添へる時は、身請けの高の二百兩。
甚兵　これにてお身の曇りも晴れ、
三左　失ふ寶が戻りし上は、
お關　治太夫樣、
甚兵　與五郎樣、
三左　お二人樣に恙はなし、
三人　ちえゝ　忝い。
ト此時本釣鐘を打込み、長五郎苦痛の思入。
お關
甚兵　最早近づく知死期時。
長五　坊主はゐるか、小僧は居るか。
お關　それ、父さんが、（ト浪市を長五郎の所へ突きやる。）
浪市　わしや父樣の、お顏が見たい。（ト長五郎浪市を引寄せて）
長五　尤もだ〱、あゝ眼を明してやりてえわい。盗人ばかりか生き乍ら畜生よりも淺ましい、まだ其

の上に主殺し、おれの因果が子に報い、不便な生れであつたなあ。

ト長五郎愁ひの思入、三左衛門わざと氣をはげまし、

三左　いで、此の上は片時も早く、お主へ香合、（ト立上る。此の時後へ道具屋善六窺ひゐて、）

善六　その香合を。

トかゝるを三左衛門引据ゑる。此の時善六懐より百兩包みを落すを、甚兵衛取上げ見、、

甚兵　こりやこれ、百兩。

善六　南無三、（ト取りにかゝるを、三左衛門立廻つて捻上げる。）

甚兵　これにて櫛を買戻せば、

お關　父さんの身に構ひなし、（ト三左衛門善六を投げのける。長五郎苦痛の思入にて、）

長五　むゝ、（ト反るをお關介抱なし、）

お關　あ、もし。（ト抱き起す、浪市縋り附きて、）

浪市　とゝさま。

トきつといふ、これにて長五郎眼を明き、浪市を見てにつたりと笑ひ、がつくりとなるを、木の頭、お關、浪市左右より縋り泣く。甚兵衛金を持ち、片手にて伏しをがむ、善六又かゝるを三左衛門引据ゑ

る。此の引張りよろしく、本釣鐘の送りにて、

ひやうし幕

大切　稲瀬川道行の場

（淨瑠璃）

胡蝶に狂ふあづま與五郎
千鳥に慕ふおこよ源之丞

梅柳戀道連（富本連中）

〔役名〕――阿古木源之丞、山崎屋與五郎、荒川三左衛門、三原傳藏、中間二人、若衆一人、下男二人、おこよ、藤屋吾妻。）

（業平橋邊の場）――本舞臺一面の淺葱幕、柳の立木、日覆より釣枝、業平橋邊り夜の體。禪の勤めにて幕明く。ト花道より○△の下男の裝にて、山崎屋といふ弓張を持ちたる下男を先きに立てゝ、鉦太鼓を打ちながら出る。

○　迷兒の〳〵、與五郎さんやい。

△　若旦那さまやアい。

ト舞臺へ來る。上手より□◎の二人中間の裝にて、子持筋の箱提灯を持ち、鉦太鼓を打ちながら出て

□ 迷兒のノ\、若旦那さまやアい。

◎ 奧さまやアい。(ト兩方舞臺にて行合ひ。)

○ もし、そこへお出でなさるは、お屋敷樣のやうでござりますが、迷兒をお尋ねなさるのかね。

□ さうサ、わしらは本所の阿古木の屋敷の者だが、若殿樣と奧樣が行方が知れないから、尋ねに出たのさ。

△ さうでござりますか、内の息子どのがちと不始末で、餘所へ預けられて居りましたが、是れも行方が知れませぬ、

○ それもたゞならようござりますが、氣が違つて駈出したのだから、もしもの事でもあるまいかと思ひますのさ。

◎ それは困つたものだ、わしらの屋敷のも、殿樣と奧樣が行方が知れぬので、屋敷は亂ちき騷ぎさ。

□ これ、こなたの懷に持つて居る、書物はそりや何だの。

△ これは出入り屋敷から來た、註文書でござりますが、今途中で受取つたばかりでござります。

○ どんな註文だか、爰で讀んで見ようぢやあないか。

◎ どれ、わしらも一服呑みながら、讀んで見たいものだ。

△ 何だか長さうなものだから、助けて下さいまし、東西々々。（ト皆々下に居て、觸書を開き）

○ 淨瑠璃名題――、

△ 淨瑠璃太夫――、

◎ 相勤めまする役人――、（トそれ〲讀むことある。）

□ はゝあ、そりやァ慥に淨瑠璃の役人觸れだ。

△ そんなら狂言方で、間違へて寄越したと見えます。

○ 何にしろお互ひに、旦那さまを捜しませう。

◎ それがよい、わしらは是れから寺島の方を捜して見よう。

△ わたし共は、龜戸の方へ行きます。

□ そんなら是れで別れませう。

○ 迷兒の〲、與五郎さまやァい。

◎ 迷兒の〲、殿樣奧さま、さんしよさまやァい。

皆々 何を言はつしやる。

ト右の鳴物にて、兩方へ呼びながら別れてはひる。知らせに附き淺葱幕を切つて落す。

（土手下の場）――本舞臺三間中足草土手の二重、上の方登り坂、二重より下手へ小高き草土手、是れも登り坂畫心に飾り、正面今戸橋邊向川岸灯入りの遠見、舞臺上手一間藁葺道祖神の宮、此の前に蛇の目傘を開きあり、よき所に柳の立木、日覆より釣枝、舞臺前菜の花の土手板、下の方草土手、淨瑠璃臺、これに富本連中居並び、總て隅田堤土手下の道具にて納る。と雨車、風の音にて、直に淨瑠璃になる。

〽先の世と定まる身こそ嬉しけれ、契りも今宵限りぞと覺悟を死出の友烏、可愛と啼くはいとしさの戀ぞ積りし二人連、濡れた同志の雨宿り、

ト本釣鐘、合方になる、宮の扉を開き源之丞着流し一本ざし、おこよ丸髷、兩人對の裝樒の枝を後へさし、毛氈を肩へかけ、開いてゐる傘を持ち兩人前へ出る、知らせなしに日覆より望月出る、兩人これを見上げて思入。

〽朧とは誰が名附けゝん春の夜の、雨の小止みに洩る月の影さへ薄き緣ぞと、思ひ惱みて行先きは冥土とやらの新世帶、一つ蓮の撞木葉に南無阿彌陀々々、南無仇し野の小夜嵐身にし

みじみとしめ泣きの、蛙も哀れ添へぬらん。（ト兩人よろしくあつて）

源之 これおこよ、不思議な緣にて馴れなじみ、夫婦とまではなつたれども、媒介なせし長五郎が惡事あらはれ、草を分けて行方の詮議、捕はれとなる時は、源之丞が身に拘はる大事。

こよ 御大切なお身の上を、斯うしたことにさせました元の起りは賤しいわたしが、嘘僞りで冥加ないお屋敷を穢したゆゑ。

源之 此事露顯なす時は數代續きし阿古木の家、沒收されては先祖へ立たず、とても生きては居られぬ身の上、そなたは存へ立ち歸り、我がなき跡にて追善供養、必ず共に賴むぞよ。

〽お顏をぢつと打ち守り、そりやお情ないおつしやりやう、賤しい身をも顧みず、よしあるあなたを見上げたる、橋の名さへも吾妻と聞くも嬉しの森の露、濡れにし袖の乾く間も泣きの淚に取縋り、かき口說くこそまことなれ、折から來たる人影に、二人はハッと心附き、

こよ 人里はなれし森蔭へ、ちつとも早う。

源之 おぢや。

〽手に手を取りて蓮華寺の、森を目當にたどり行く。

ト源之丞おこよ上の方へはひる。ばた／＼カケリになり、與五郎紫の病鉢卷片肌脫ぎかけ、笹の枝

なかつぎ出て、花道に留る。

〽狂ふは我が身ならずして、菜種に狂ふ蝶と蝶、吾妻誘出せ、誘出せ吾妻、浮名に立ちし戀中を任せぬ事の物狂ひ。

ト花道へ來てどうとなる、ばた〳〵にて跡より吾妻着流しにて走り出で、

〽吾妻はあとに後れ咲き、亂れし袖に取り附きて、なう情なやうつゝなや、吾妻の顔も見忘れてと、忍び涙の草雫、あれ、思ひ人は川柳と、驅け行く袂ひかるゝ袖、人の見る目も憂や辛や。

ト兩人よろしくあつて舞臺へ來り、

吾妻　もウし與五郎さん、氣をしづめて下さんせ、道行く人が笑ふぞえ。

與五　何ぢやと、笑ふ、おゝ、をかしい〳〵、さうしてわが身は誰ぢや。

吾妻　情ないこと言はしやんす、わたしは藤屋の吾妻でござんす、とつくりと顔を見て、正氣になつて下さんせいなあ。

〽替る姿のあさましや、もしわしぢや、吾妻ぢや與五郎さん、氣を鎭めて下さんせ、あれ蟲さへも、番ひはなれぬ揚羽の蝶。こちも比翼の諸翅、未來までもの中々を今更むごう振捨て

て、氣違ひとは曲もなや、情ないぞと取縋る、夢か現の狂人に笹おッ取つて打立てられ、浮ぶ
れて振込む浮き拍子、（ト吾妻與五郎にすがる。）

與五　何ぢや、そなたも泣くか、わしやをかしい、はゝゝゝはゝゝゝ、あれ〳〵面白や〳〵、四季
折々の祭ぢや〳〵。

〽浮立つや春は花見の淺草祭、淺いといへば氣に掛り、夏が來て啼く時鳥、でつぺんかけた
筑摩鍋、肴は刺身酌はたぼ、てんとたまらず仙人が雲の上からおッこちの、まつさかしやか
は卯月の八日、そりやこそ生れた桃太郎、お伽話しの犬と猿、雉はけん〳〵ほろゝ打つ。

ト與五郎これより蝶の狂ひになる。

〽春の花野に戯れ遊ぶ、おのが羽風のひら〳〵〳〵、あなたへひらりこなたへひらり、ひら
りひら〳〵、ひら〳〵ひらり、暫し菜種に羽を休め、又飛び上りひら〳〵〳〵、翼優しき風
の蝶うつゝなや。

トよろしく振りあつてどうとなり、又心附き起上り、

〽しども形振氣違ひの、又駈け行くを權九郎、どつこい遣らぬと取附けば隔てる吾妻商人も
何處を當と中道を、こけつ轉びつ慕ひ行く。

ト與五郎又笹の枝を持ち駈け出す、權九郎留める、吾妻これを隔てる、此の内與五郎一散に二重より下手へはひろ、吾妻も續いてはひろ。

〽更行く鐘の無常音、堤傳ひに源之丞、覺悟の一腰つかの間も、離れはせじとおこよは取附き、

ト時の鐘ばた〳〵、上手より源之丞一腰を持ち出で拔かうとする、跡よりおこよ出で、是れを留め。

こよ　もウし殿樣、これ程申すにお聞き入れなく、あなたお一人死なうとは、お胴慾でござります。

源之　左程までに切なるそちが志、此の上は二人一緒に最期を急がん。

こよ　そんなら聞き分けて下さりますか。

源之　如何なる前世の約束にや、倦きもあかれもせぬ中を、

こよ　此世で添はれぬ因果同志。

源之　思へば深い、

兩人　惡緣ぢやなあ。

〽覺悟の上も今更に、放れがたなき女氣に、男心も亂れ僥、刄もなまる風情なり。

〽同じ思ひの番ひ蝶、夢かうつゝの與五郎を、吾妻はいたはり縋り留め、

トばた〳〵にて二重の土手より、與五郎吾妻出で舞臺へ下り、

吾妻　もし與五郎さん、是れ程いふに夢現、お前は正氣にはならぬかいな。

ト此樣子を源之丞おこよ見て、

源之　二人の衆の樣子を見れば、若き男の狂人姿。

こよ　さうしてお前方は、何處のお人でござんすえ。

吾妻　はい、わたしや吾妻というて、吉原で藝者の勤め、是れなるは山崎屋の與五郎さんでござります。

源之　すりや噂に聞く、山崎屋與次兵衛が養子與五郎とな。

こよ　どうして又其のやうな、狂氣にはならしやんしたのぢやえ。

吾妻　樣子をいへば長いこと、實の親御さんの次太夫樣が、失はしやんした、香合とやらの間違ひで、お命にも拘はると聞かしやんして、狂氣なさんしたのでござります。

こよ　さういふ事なら私が、守袋に入れてある、有難い此のお守。

トおこよ守袋より誂への守を出す、源之丞取つて、

源之　こりや能勢の妙見宮の、祕符の守、少しも早う。

〽疾しや遲しと與五郎が、額に守押し當て、南無妙見大菩薩、病即消滅不老不死と、唱ふ

ろ奇特に狂亂の、心しづまり四邊をながめ、
ト與五郎に守をいたゞかせろ、ドロ〳〵にて與五郎放心するを、皆々介抱する。與五郎心附きたる思入にて、

與五　や、そなたは吾妻、どうしてこゝへ。

吾妻　もし、お心が附いたかいなあ。

與五　そんなら、わしは。

吾妻　さあ、親御樣のお身の上の事を聞かしやんして、狂氣なされたのぢやわいなあ。

ト與五郎これにて源之丞を見て、

與五　あなたはたしか、阿古木の若殿源之丞樣、合點の行かぬ此のお姿。

源之　噂に聞けど始めて逢うた山崎與五郎、面目もない此の身の上。(ト源之丞件のおこよの守の封を開き見て、)おこよが守に添へたる書附、なに〳〵「治承元年三月三日の誕生、南方十次兵衛娘きく、」思ひ出せし事こそあれ、某南方十次兵衛が娘お早と言交し、其折からの物語り、十次兵衛事四十二の二つ兒ありしが、親の命に拘はるゆゑ、妙見宮の守を添へ、捨兒となせしと聞きつるが、若しやおこよは。

こよ　其のお詞に違ひなく、妙見樣の御門前に、捨てゝあつたを喜六どのが拾ひ上げ、娘となして育てられましたわいな。

源之　すりや、まこと非人の種ならず、武士の娘と知れたる上は。

こよ　あなたのお身に凶事もなく。

源之　もう死するには及ばぬわいの。

與五　仔細は委しく存じませねど、お身の曇りの晴れたる御樣子。

與五
吾妻　お目出たう存じまする。

〽妹背はなれぬ二つ蝶、廓日記を假宅へ拙き筆に寫しける。

ト段切れ、知らせに附き、淨瑠璃臺を消す。禪の勤めになり、上の方より二幕目の三原傳藏出來り、

傳藏　後で樣子は見ておいた、身共が手附を渡した吾妻、よい所ででツくはした。さあ、身共と一緒にうせ居らう。

ト傳藏吾妻を引立てる、源之丞突廻して刀にて當てる。やはり禪の勤め、花道より荒川三左衛門忍び提灯を持ち、足早に出て舞臺へ來り、

三左　それにござるは、山崎屋與五郎さま。

與五　さういふそちは、親人の家來三左衛門。

三左　與五郎さまには狂氣なされ、家出ありしと聞きしゆゑお行方尋ね參りし仔細、御主人次太夫樣の失はれし放駒の香合の儀に附き、召捕られし駕籠屋の甚兵衛、疑ひかゝりし三光の櫛を與へし長五郎、惡念發起し切腹の節、三原傳藏に頼まれ放駒の香合を盜み、まつたお照を殺し、三光の櫛を取つたる次第まで懺悔なして、まことの香合再び彼れが手に入りしを、次太夫樣へ差上げたれば、御安堵なされ與五郎樣。

與五　すりや、親人樣の御身の明り立ちましたか、ちえゝ忝ない。（ト此時傳藏心附き）

傳藏　それ知られたる上からは、與五郎覺悟。（ト傳藏立掛るを、三左衛門引附け）

三左　香合の盜賊三原傳藏、身共が繩打つて屋敷へ引く。

傳藏　南無三。（ト逃げようとする三左衛門引附け、取繩を出し傳藏へ繩を掛ける。）忌えましい。

源之　おこよが身の上の明り立てば、屋敷へ歸り改めて、源之丞が宿の妻。

三左　與五郎どのにも吾妻の身請け。

吾妻　世間を晴れて女夫の盃。

與五　山崎屋の家名の相續。

こよ　三方四方の御家の納り。

源之　目出たい〳〵。

ト此時上手より紺看板の中間大勢、子持筋の箱提灯を持ち、ばら〳〵と出て、

中間　殿のお迎ひ。（ト前へ並ぶ。頭取上下にて出て）

頭取　先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し。

雪駄直し長五郎（終り）

蔦紅葉宇都谷峠

世界緘二組三組

前座は伊丹屋重兵衞が故しゆうの爲の
人殺しよしないこと〻氣も筑田鬼藏
小兵衞が質入の茶入を詮議に町髮結ひ
結ぶ元結惡縁に二世を掛たる後の月
尾花才三が戀中は材木町の白木屋お駒
時菊月狂言は

怪談御伽草

御贔屓御好

後座は座頭の文彌こと官金ゆゑに身を
果す恨みは忽廻り來て仁三が强請に
居酒店ぞつとおしづが死靈のたゝり敵
同志と白無垢に一對そろふのちの雛
契情古今が色容は柴居町の黑木屋彦三

ゝ座頭文彌殺しの『宇都ノ谷峠』は安政三年九月、作者四十一歳の時市村座に書卸された全篇を通じて哀愁に富み陰慘の氣の横溢してゐる作で、世話物中の代表作である。殊に鞠子の宿から殺しに至る一幕は興味の中心でもあり、その描寫は精細を極めてゐる。また、この作者に取つてのスツールム、ウント、ドランクとも稱すべき市村座時代（即ち小團次との結託時代）の最初の作である點に於ても記憶せられねばならないし、小團次の寫實的藝術によつて幕末の頽廢的劇境に一味の革新的氣勢を示した、その第一聲である點からも輕視すべき作でない。年代記には『當新狂言は元祖金原亭馬生の座頭殺しのはなしの仕組み、……鞠子宿藤屋文彌重兵衛仁三出合ひ、宇都ノ谷峠殺し……柴井町重兵衛宅文彌幽靈怪談の場古今大當り、古今彥三心中文彌幽靈この所怪談大出來大當り』とある。小團次が殺しの場で文彌から仁三に替るその手際が鮮やかで巧みであつたとか、幽靈になつて出たり消えたりする所に業事師としての特色を發揮したとかの話が傳へられてゐる。

　書卸しの時の役割は、市川小團次（文彌、仁三）、坂東龜藏（伊丹屋重兵衛）、尾上菊五郎（文彌姉お菊後に古今、重兵衛女房おしづ）、坂東彥三郎（佐々木桂之助、彥三）、河原崎權十郎（尾花才三郎）、市村羽左衛門（文彌妹おいち）、淺尾與六（尾花六郎左衛門、坊主小兵衛）、中村歌女之丞（腰元小牧、白木屋お駒）、關歌助（佐野松屋淸兵衛、國侍鹿子島新吾）、中村鴻藏（判人善六、大阪者太郎兵衛）、嵐吉六（こぶ市、下剃萬治）、市川新升（筑田鬼藏）等。

　挿畫にしたのは、龜戶豐國筆の錦繪である。

大正十三年七月　　編者誌す

殺しの場——亀戸豊國筆）



座頭文彌

市川小團次

り、庫裏文彌殺しの『宇都ノ谷峠』は安政三年五月、作者四十一歳の際市村座に書卸された合篇を通して哀艶に富み陰慘の氣の横溢してゐる作で、當時作中の代表作であるとも稱する筋から殺しに至る一幕は興味が深くもあり、その描寫に封論を伴めてゐるとも云はれ、この作者に取つてこのスツールム、ウント、ドラングとも稱すべき市村座時代（稱する小團次との提携時代）の最初の作である點に於ても注意せられねばならない。小團次は寫實的藝風によつて幕末の頽廢的劇壇に一味の革新的氣運を示した、その第一聲であると稱すべき作でない。年代記には『當時狂言は元祖宇都谷峠の庫裏殺しのなどの評判、文彌と兵衛仁三出合ひ、宇都ノ谷峠殺しに柴井町舍兵衛と文彌殺害者に吉今左衛門、吉今彦三心中文彌幽靈』の兩怪談大當り大當り』とある。小團次が殺しの場で文彌から仁三に替るその手際が鮮やかで評判であつたといふ、幽靈になつて出たり顏を見せたりする所に黙阿彌としての特色を發揮したとかの話が傳へられてある。

書卸しの時の役割は、市川小團次（文彌、仁三）、坂東龜蔵（伊丹屋十兵衛）、尾上菊五郎（文彌姉お菊後に吉今、重兵衛女房おせつ）、坂東彦三郎（佐々木仁之助、のち）、河原崎權十郎（尾花才三郎）、市村羽左衛門（文彌母おいち）、中村鶴六（花六郎左衛門）、坂東小兵衛、中村歌之丞（勝元小牧、白木屋お駒）、關三十郎（屋清兵衛、關信夫）、中村鶴蔵（肴屋六、大阪者太郎兵衛）、嵐吉六（上州、下駄屋萬吉）、市川新升（篠田金藏）等。

挿畫にしたのは、一陽齋豐國筆の錦繪である。

大正十三年七月

編者誌す

宇都谷峠

(文彌殺しの場——龜戸豊國筆)



座頭文彌　市川小團次

伊丹屋十兵衛　坂東龜藏

提婆の仁三　市川小團次

蔦紅葉宇都谷峠（宇都谷峠座頭殺し―五幕）

櫻川佐々木家の場
柴井町伊丹屋の場

序幕

〔役名―伊丹屋十兵衞、佐々木桂之助、尾花六郎左衞門、筑田喜藏、尾花才三郎後に髮結才三、望月丹下、佐野松屋淸兵衞、女衒源六、田川伴藏、鳴子曳六、伊丹屋丁稚三太、茶道兵才。十兵衞女房おしづ元伊筒屋の抱勝山實ハ六郎左衞門娘おしづ、佐々木家の腰元小牧實ハ白木屋お駒、佐々木家の妾千種等。〕

（佐々木家塀外の場）―本舞臺正面一面の練塀松の釣枝、眞中に用水桶、總て佐々木家塀外の體。△○□の中間三人、提灯六尺棒を持ちて立ちかゝり、時の鐘にて幕明く

△　筆助、可内、何と今夜も雨氣と見えて、暖かなことではないか。

○　時候は寒いはうが順だが、夜更になると袷ぢやあ冷えつくやうだわえ。

□　その冷え〳〵とするところへ、用意の江戸一、（ト袂より三合德利を出して、）それ〳〵、これさへあ

二　りやあ夜明まで、何のことはない。

△　ツイとろ〳〵と寐るといふのか、いや覺束ねえ番人だ。

○　手前のやうに酒の好きなものは親達の勘當、すでに御家老の筑田喜太夫樣の御子息喜藏樣が、御納戸金を二百兩遣ひ込み、御追放にならしやつたを知つてゐるか。

□　その二百兩も色狂ひといふでもなく、ぱつと遣つたといふ噂もないが、

△　派手なお噂は聞かねども、今日此頃は以前お邸に勤めてゐた、中間の坊主小兵衛とかいふ者の世話になつてござるといふが、手に覺えた內職はなし、えて、とゞのつまりが、斬取り強盜は武士の習などと、手前勝手な道理を附けて、惡いことを仕出すものだ。

○　この頃の物騷といひ、屋敷奉公はしても、劍道の道は少しも知らず險難性だから、中々泥坊を捉へようなどゝいふ手柄ができるものか。

△　さうあきらめて見りやあ、二本差しても犬脅し、案山子に劣つた男だなう。

□　筆助はともあれ、おぬしア嚊衆にまかれて、二本棒だらう。

○　その二本棒は樂しみだが、その傍で毎晩一合酒といふのも、氣晴らしになるやつよ。

△　そんなら、一合はずまうか。

兩人　又味噌を上げようと思つて。

△　何にも言ふな、元締の肩へ乘つて來いといふに。

兩人　おんぶとあれば、何時でも。

△　火の用心々々。

ト三人は上手へはひる。此の時凄き合方になり、練塀より見越の松用水桶を傳はり、筑田喜藏頰冠りにて、口に更紗包みの茶入の箱を啣へ出來り、本舞臺へおり、身繕ひをして、

喜藏　佐々木家の重寶花形の茶入、この預りは豫て遺恨ある尾花六郎左衞門、茶入紛失なす時は切腹、身共はこれを賣代なして此の身の有附、どれ人目にかゝらぬその內に、塒を替へて工夫を付きようか。

ト思入あつて行きかける。此時後ろへ尾花六郎左衞門澁蛇の目の傘にて顏を隱し窺ひゐて、此時喜藏の鐺を取つて引戻し、ちよつと立廻り、トゞ喜藏脫れて花道へ行く。これにて、

六郎　曲者。

トいふ。喜藏小石を取つて打附ける。六郎左衞門は傘にて受ける思入あつてきつと見送る。此の見得風の音にて道具廻る。

（佐々木家千種部屋の場）――本舞臺常足の二重、正面一面の金襖、二重眞中に千種妾の打扮にて住ひ、この傍に蒔繪の煙草盆、文庫の上に鼻紙及び守り本尊を黒の厨子に入れ經卷を載せてある。平舞臺に腰元二人、他に二人の腰元襷がけにて茶道兵才に向ひ、各紅葉の折枝を持ち立廻つてゐる、白囃子にて道具納まる。と又立廻つてト、兵才打ちすゑられる。

兵才　まゐつた〳〵。

腰一　何と兵才殿、女子でこそあれ、覺えの手の內。

同二　これにも懲りず、御自慢なされまするかえ。

兵才　いやもう恐入りました。然し負くるは勝の習ひとやら、無手ながらかうして。

ト兵才腰元の一へ組付く。一これを振切つて突退ける。又立かゝるを二後ろより兵才の眼を隱す。兵才手を取らうとするを、兩人してしつかと押へつける。兵才足をばた〳〵してもがく。

千種　（思入あつて）おゝ女中方、お手柄々々、これにて縛しめ暫く、窮命。（ト文庫の紐を投げてやる。）

二人　心得ました。（ト兵才を縛る。）

腰二　重ね〴〵の恥辱をとりし兵才殿、我々へ降參なせば、

皆々　この窮命は許しまするぞ。

兵才　えゝ情ない、女子と侮り生捕らるゝとは。

腰一　以後の見せしめ、お中の口まで引ぱつて參じませう。

同二　こりやよい所へお氣が附かれました。憎さも憎し、何ぞ仕置をいたしませう。

同一　その思ひ附はいつそのこと、墨塗りにいたしませうか。

千種　それも一興、兵才殿の面體を、反故染にしてもだいじない。

腰一　かしこまりました。さあお許しの出たからは、觀念したが、

皆々　よいわいなう。

兵才　桃栗觀念恥かきねん、わしは殘念、もう御免。

腰三　へらず口を利くからは、それ墨塗りぢやく。

皆々　かしこまりました。（ト硯を取る。）

兵才　これはたまらぬ。

ト兵才逃げだす。此時花道より望月丹下出來り、この樣を見て、

丹下　これはく打揃うて何事をしめさるのぢや。扨は女中衆達の手籠めに逢ひし兵才どの。さりとは面白をかしい御殿の有樣、ちと身共へもお聞かせなされい。

腰四　いえ〱、あなた方の御存じないこと。
皆々　思ふ存分折檻をいたしまする。
兵才　存分にされてはたまらぬ。丹下殿女中方へ、お詫をお願ひ申しまする。
丹下　いやはや卑怯千萬。何かは知らねど身共に免じて、御了簡なされて遣はされい。
腰二　丹下樣の御挨拶、この後兵才殿が劍術の、惡口さへ言はれぬとあれば。なあ呉竹どの。
同一　それ〱、武藝を蔑する兵才殿。是に懲りてきつとたしなみめさるゝなら、皆々へも執成し、
丹下　拙者もお詫いたすほどに、
三人　お許しなされませいなあ。
千種　丹下殿のお口添へ、いよ〱降參とあるならば、
兵才　いやもう降參所か坊さんでござる。お女中方、これ、頭に免じて坊主眞平御免下されい。
皆々　おほゝゝゝゝ、（ト笑ひながら紐を解く。）
兵才　やれ〱、面目次第もない。（ト下手へ下る。）
丹下　兵才殿たしなまッせえ。けれう身共が參り合せて其方の仕合せ、拳も鈍き茶道の身で劍術は無益の沙汰。身共などは斯く兩腰をたばさみ、立派に御知行頂戴いたしてこそ、弓馬槍刀の心掛なうて

はならぬ。尤も千種の方は劍術御執心とあつて附々の女中にまで御指南なさるゝと承はるが、兵才殿が此の爲體、感心仕ッてござる。

腰一　いやもう、拙き業も女子の一心、

一二　お恥しう存じまする。

丹下　又拙者もよい折柄なれば、千種の方へ御稽古を願ひたう存じまする。なんとお叶へ下さるか。

千種　未熟の手の內、どういたしましてお立合ひなりませうや。ほんの申さば、戯同樣なことでござります。

丹下　その戯れが大執心、幸ひこれに紅葉の折枝、色づくところが又一しほ、さゝ是へ〳〵。

千種　そのやうにまでおつしやるを、辭退致すも不興とやら。腰元衆、丹下殿のお相手に出やいなう。

腰一　最前から望む所と存じをれど、お許しもない其內に。

同二　此の方より願ひましては、失禮と存じまして、控へてをりまする。

同三　たつて御所望なれば、千種の方の仰せの通り、そち達の內望月樣のお相手に。

一二　かしこまりました。(下立上らうとするを、丹下思入あつて、)

丹下　あいや暫くお控へなされい。拙者が相手と申すは千種の方、我が手の內は鈍くとも、免許を受け

たる祕事口傳の儀もござる。それとも御意にかなはずば、是にござる桔梗どの、身が相手にならつしやれ。

腰三　どういたしまして未熟の私、あなた様のお相手なぞとは、思ひもよらぬことでござりまする。

丹下　なるほど、こりやさう思はつしやるも尤もぢやが、望月丹下も夜叉鬼神ではござらぬ。女子を相手に致すからは、ずんどあしらうて遣はさう。（ト言ひながら立つて、その腰元の後ろより）かう組みつかれたら、どうぢや〳〵。

　　ト押へ付ける。これにて他の腰元三人丹下へかゝる。兵才これを好きしほと下手へ來り、月の備へ物の團子、枝豆などを取つて喰ふ。この中丹下さん〴〵に打すゑられる、こゝへ兵才薄のつばなを持來り丹下の耳へ入れる。丹下はこれにて耳の穴をほじりながら兵才を追廻す、その中丹下は薄の花活を引つくり返し水流れるこなし、腰元四人は丹下をめつた打にする。兵才は花活を取つて顔を突込み、花道へ行く、

丹下　まゐつた〳〵。

皆々　こりや丹下樣、御卑怯でござります。

　　トその中に兵才は花道へはひる。と、花道より尾花六郎左衞門出來り。

六郎　後の月見に奥殿の賑ひ、實に泰平の瑞相、（ト舞臺へ來り、）こは千種の方には、まづ御健勝の體、大慶至極に存じ奉りまする。
五人　あなたは尾花六郎左衞門樣。
六郎　いづれも打揃うて、當日の賀儀祝し申さん。
千種　月を祝して今日の出仕、互ひの滿足。
六郎　取分けお次で窺ひまするに、望月氏を始め腰元衆の武藝のお試し、感心仕ッてござりまする。
丹下　身共は未だ獨身でござる、相應な縁談がござるかな。
六郎　これはけしからぬ、つんぼゥ話しだ。
丹下　兎角女は眉目形、女に力は入らぬこと。
六郎　あはゝゝゝゝ、少々氣逆せと見ゆる。
皆々　おほゝゝゝ。
丹下　これさ〳〵身共が申すこと間違つた儀は申さぬ。そのやうに笑はるゝな、をかしうはござらぬ。
腰一　それ〳〵、それが違うてをりますぞえ。（ト大きな聲にていふ。）
丹下　あの、相應な縁談があると申すか。

腰二　もし〳〵、丹下様はどうしたことか、きつゥお耳が遠うおなりなされましたなあ。

同三　あまり打ちすゑた故、顚倒なされて、俄の聾。

同二　ほんにさうでござんしたか、笑止なことでござんすわいなあ。

千種　いや〳〵そりやさうではあるまい、年の加減餘病の業とか申すことか。

腰四　千種様へ申上げまする。お耳の遠いその譯は、あの兵才殿が薄のつばなを振廻し、その時丹下様のお耳へつばながはひりましてから、俄の聾でござりませう。

腰二　ほんに、それで聾になりましたか。

皆々　爭はれぬものでござりまするなあ。

六郎　いかさま、物の譬には聞き申せしが見るは始めて、丹下殿を打ちすゑしはあつぱれ感心、まさかの時は一方の、防ぎともなつて頼もしい。

千種　未熟の教へも武家のたしなみ、生兵法は怪我のもと。

六郎　いや〳〵左にあらず、女ながらも武家のたしなみ、誠や人間は病ひの器、どうか直して遣はしたい。

ト此中丹下耳の穴をほじる、皆々へこなしあつていろ〳〵をかしみの思入。千種の方は六郎左衛門の

顏色を見て、

千種　丹下殿の病ひより、疾より見ればこなたの顏色常ならず、息づかひも苦しき樣子、服藥せずばかなふまい。養生が肝要なれば心得違ひの、いや、藥違ひのないやうに。

六郎　こは有難きその仰せ、いかにも持病の惱みはあれど、なに、これしきに屈せぬ某、別に替りはなけれども、老少不定は時を嫌はず、こゝらが常の心得かと存じまする。

千種　おゝ聞及ぶそなたの氣質、忠義ばかりか何事も、義は鐵石のまことの武士と、君にも日頃御噂、隨分其の身を大切に、國家の礎朽ちせぬやうに。

六郎　心の磐石くだくるとても、忠義の魂變ぜぬそれがし。

千種　勇ましきその詞、これより直に君の御前へ。

六郎　拙者も同道。

千種　尾花殿。

六郎　望月樣は、これにゆるりと。

千種　さ、皆もいつしよに。

六郎　まづ、

皆々　お越しなされませう。

ト唄になり、皆々奥へはひる。丹下獨り殘り思入あつて、

丹下　何の事ぢや、身共一人置きざりにして、べちや〳〵しやべつて奧へ行きしが、たゞ不思議なは耳のあんばい。がん〳〵致して聞えねども、わざと聞える體に見せかけ、その座を繕ひおけば、尾花を始め千種の方、それと知らぬは身共が頓智發明と申すものぢや。これを思へば世の中に利口な者は身共一人、此上は諸事萬端引受けて、普請奉行お金方、役德は皆ずり込み、小牧を口說いて身共が女房、さううまく行けばよいが。

ト手を組み思案のこなし、奧より田川伴藏、鳴子曳六出來り、

兩人　丹下さま。（ト言つても聞えぬ思入。兩人思入あつて、）

伴藏　望月氏何をうつかり、田川伴藏、

曳六　鳴子曳六、豫て申し談じたる一件も、大半上首尾、

兩人　（猶だまつてゐるので、）もし、丹下樣。（トきつと言ふ。）

丹下　（心附き、兩人を見て、）是は各、唯今出仕めされたか。

伴藏　いかにも左樣、貴殿は何やら考へて、御思案の大福餅、旨いことをやらるゝな。

鬼六　その分口なら身共へも。(ト言ひかけるを、)
丹下　いや、斯やうでござる。手前儀はちと仔細あつて、耳を遠方へ遣はしました。唯今何かと御意なされたが、少しも聞えませぬて。
仲藏　それはお氣の毒、申し談ずる一儀もあれど、聾となられては、
鬼六　お年も若いが聾とは、あんまり聞えぬ御病體。
仲藏　「丹下殿は三十になるやならずに、つんしうとは、嘸聞きたうあらうのに、」
丹下　「なぜ聞かせては下さんせぬ。」(ト淨瑠璃を語る。)
兩人　えゝ、何を馬鹿々々しい。
　　ト丹下の脊中をたゝく、これにてぎつくりし、耳の聞えるこなし。
丹下　あゝ嬉しや／＼。
兩人　何が嬉しうござる。
丹下　唯今御兩所がどつさりたゝくそのはずみ、つかへし耳がなほりました。
鬼六　すりや貴殿のお耳が、元々に聞えるやうにおなりなされたとか。
丹下　さればのこと、はずみに打つたがもつけの幸ひ、蟻の囁くも聞えまするて。

伴藏　それは重疊、然らば豫て筑田喜藏殿と心を合せ、尾花親子諸共に何ぞれかぞれ、罪にとつて落せし上、彼等二人をぼんでんごく。

曳六　佐々木の家で兩人が重役になる上は、心のまゝと思ひの外、あの喜藏殿は、御納戸金二百兩虛妄せしを、尾花親子に見出され、門前より阿房拂ひ。

伴藏　それ故猶々遺恨重なる尾花親子、筑田氏が計略を以て、昨夜寶藏へ忍び込み、

丹下　あこれ、（トあたりを窺ひ、）六郎左衛門が預かる所の、花形の茶入を盗み取る手筈、首尾よく奪ひ取られしか。

曳六　その儀も上首尾、然し今朝より紛失せし、噂もなきは合點行かぬ。

伴藏　それが即ち智謀拔群なる六郎左衛門、御家の瑕瑾と相なる故、事穩便に計らふ手段。

丹下　それで樣子は殘らず知れた、先刻出仕の六郎左衛門、彼れが語音を探り見ん。

兩人　それこそ妙計。

丹下　これ、（ト制して、）御兩所ござれ。

兩人　心得ました。

ト唄、調べになり、丹下先に兩人奥へはひる。花道より尾花才三郎出來りて、

才三　恐れ多くも我君の御寵愛深く、未熟なる某へ殿樣のお髮上を、仰せ付けられしは此身の面目、今日式日のことなれば、刻限よりも早けれども、取次の御茶道當番は誰人ならん。何はともあれ心急き、御詰所にござらねば、萩の間へ推參いたさう。さうぢや／＼。

ト奥へ行かうとする。此時奥より佐々木の腰元小牧出來り、互ひに行違ひ思入あつて、

小牧　あなたは才三郎樣、唯今御出仕遊ばしましたかえ。

才三　いかにも、疾より出仕はいたせども、茶道衆もござらねば、其取次を相待つところ、小牧どの、憚りながら、お尋ねなされて下されぬか。

小牧　そりやもうお心易いことなれど、そのやうにお急きなされずともよいほどに、まあお下にござんせいなあ、

才三　それぢやと申して。

小牧　はて大事ござんせぬ。御用のお邪魔はいたしませぬ。御殿の樣子はよう存じてをりまするぞえ。

才三　いかさま、晝夜お附の小牧どの、こりや尤もであつたわいなあ。（ト下にゐる。）

小牧　もし才三樣え、ちとお願ひがござりまするが、おかなへなされて下さりまするかえ。

才三　いやもう男女のへだてはあれども、傍輩の此方樣　身にかなうたことなれば。

小牧　嘘ぢやござんせぬかえ。
才三　嘘偽りは大嫌ひ、してお頼みのその仔細は。
小牧　あの百人首の歌に、「瀬を早み岩にせかるゝ谷川の、割れても末に逢はんとぞ思ふ」と申しまするは、どういふ心でござんすぞえ。
才三　そりや崇徳院の御製、一つ流れの水なれども、物にへだゝり離れ〳〵になるにもせよ、いつか又一つになるといふ、待ち詫びたる戀歌の心と思はるゝわいなう。
小牧　てもしをらしい、一つ流の御奉公いたしまして、人目の關にへだゝるとも、末は女夫になられまするかえ。
才三　そりや、その人々の心々さ。
小才　さうして、あなたのお心はえ。
才三　そりや人としてこの道を嫌ふは、木石とか申すものゝ、手前共は大の無骨、親のゆるさぬ不義徒ら、左樣なみだらは致さぬ心さ。
小牧　して、親々のお許し受くる其時は。
才三　いやでござる。（トきつと言ふ。）

小牧　そりやあなたお胴慾でござります。私の心を知らぬか何ぞのやうに。少しは不便と思召し、御推量なされて下さりませいなあ。

才三　武士たる者へ、異なことのおつしやりやう。はて、迷惑千萬な義でござる。

小牧　あれ、又そのやうなことおつしやつて、氣強いばかりが武士とは申しませぬ。戀も情も知る人を仁者とか申しまする。

才三　仁も過ぎればたはけとやら、木石と言はれうとも、その身を堅固に致さねば、不義者の汚名を受け、掟を破る不忠の科、戀の道こそ知らずとも、弓馬の道なら心を碎く某へ、重ねてかやうなみだら千萬、申し出せば其の身の破滅、たしなみめされ小牧どの。

小牧　（立上る才三の袂を捉へて、）そりや又あんまり。

才三　あいや無骨の某、必ずお氣にさへられな。

ト才三郎振切つて奥へはひる。小牧思入あつて、

小牧　思ひこがる丶才三さん、氣強いばかりが殿御の常か、なまなか言出し此の儘に、かなはぬ戀とあきらめても、心の内が恥しい。なんとしたらよからうぞいなあ。

ト歎息したる思入、奥より丹下窺ひ出で、

丹下　それにござるは小牧殿、見るは眼の毒障るに煩惱、聞けば聞きばら、なまなか耳が聞えずば、こなたの歎きは聞かねども、いまの述懷、才三がことはすつぱりと、思ひきつたがよさゝうなものぢや。

小牧　さうおつしやるは、丹下さま。

丹下　丹下此度はぬさも取りあへず、こなたの戀路をかなへんと、思ふ心は手向山。

小牧　その御親切はお嬉しう存じまするが、もう何事もふつ／＼おつしやつて下さりますな。

丹下　言ふは言はぬにいや增す戀路、才三ばかりが男ではあるまいし、某とても獨身なれば、結ぶの神の引合せ。これさ、つんとしては譯が分からぬ。戀知り男になびきをらぬか。

小牧　（丹下の手をかけようとするを振拂つて、）御本性でおつしやることか知らねども、この中までは眞藏殿の御難題、お屋敷を追放より、やれ嬉しやと悅ぶ甲斐もなさけなや、相手替つてあなた樣、みだらなことをなされると、御重役のお方でも容赦は致さぬ。御人體にもないそのお顔で、色の戀のと、ちとおたしなみなされませ。

丹下　こりや、だいぶ手強う出掛けたな。よし／＼おぬしがさういふ心なら、可愛さあまつて憎さが百倍、刀にかけても口說き落さう。

小牧　てもまあ、お役がらにも似合はぬ仰せ、お掟を背く不義の成敗、そのお刀でなされますか。
丹下　その掟を存じながら、何故又才三にうッぽれた。
小牧　えゝ存じませぬ、知らぬわいなあ。
　　ト言ひながら突退けて顔をぴつしやり打ち、唄になり奥へはひる。丹下残つて、
丹下　どう言へばかういふと、中々手しぶいあの小牧、是といふのも才三めに心を通はすとち女め、今にほえ面かゝしてくれる。
　　トばたばたになり、奥より才三郎剃刀を持つて逃げて來る。後より佐々木桂之助、殿の打扮にて長管を持ち出來る。これに以前の四人の腰元、伴藏、曳六の近習兩人、何れも留めながら出る。
桂之　予が面體へ疵を附けた不屆き奴、常ならぬ式日に血をあやして衣服をけがし、濟まうと思ふや、あまりと申さば奇怪至極。
才三　恐れながら思はぬ麁相、幾重にも御宥免願ひ奉る。（ト平伏する。）
丹下　（思入あつて、）恐れ多くも御主君の面體へ疵をつけて、御宥免で濟まうと思ふか。
伴藏　左様々々、平日主君を輕しめたる罰は目前。
曳六　今更お詫を申すとて、この大罪が脱れうか。

丹下　こりや我君のお手おろさるゝまでもなく、いで某が成敗仕らん。（ト立ちかゝる。）
桂之　丹下控へい。
丹下　あ、いや〳〵御前、不屈至極の尾花才三、御家の掟以後の見せしめ、しばり首はお定り、その太刀取りは某が。
桂之　いや、その成敗は予が致す。
丹下　すりや、御前樣が。
腰元　お手づから、あの才三さまを。
桂之　いかにも、新身の試しも自業自得。
丹下　さすがは君の思召し、恐れ入つたる御成敗、斯く罪も極るからは、大小捥ぎとり繩附にして廣庭へ引きすゑい。
曳六　かしこまつてござる。
ト兩人才三郎の大小を取り、下緒にて後手に縛る。
桂之　言はうやうなき人非人め。それ、廣庭へ引立てい。
仲藏　はツ。君の上意、お立ちなされい。

才三 あゝ、斯くなり行くも生者必滅。

丹下 引かれ者の小唄ぢやなあ。

ト皆々よろしく思入、此見得にてよろしく道具廻る。

（廣庭の場）――本舞臺高足の二重、本緣附、上手障子屋體、上下網代塀、下手萩の下草、調べにて道具留る。と、こゝに紺看板の中間三人竹箒と手桶とを持ち、掃除してゐる。

○ 何と折半、當家の殿樣は御仁心なお人ぢやと聞いたが、人の噂とは大きな違ひだなう。

□ 御酒の機嫌か知らねえが、お側にござる尾花才三樣を、お手討になさるといふのは、あんまり短氣なお仕置だなあ。

△ 剃刀で疵を附けた位なら、人をそこなふ殿樣でもねえが、それには何ぞ言譯の、ならねえ失敗があるのかもしれねえぜ。

○ あの才三樣も、今年が厄年でもあらう。

□ 二十四五といふ奴は、男の大厄だ。

△ あたら尾花を枯らすのだなあ。

○　えゝ、洒落どころぢやあねえ。掃除ができたら來やれ〳〵。

ト箒手桶をさげて下手へはひる。合方になり、奥より以前の腰元四人出來り障子屋體へ向つて、

腰一　千種様、それにおいで遊ばしまするか。

同二　我君様よりの仰せ付。

同三　御臺様の御口上で、

四人　ござりまする。

千種（屋體の内にて、）御臺様の御口上とな、それへ行つて承りまするでござりませう。（ト上手の障子を明ける、と内は總て部屋の模様、二重へ來り手をつかへて、）お取次御大儀、して御臺様の御口上とは、いかに仰せ出されました。

腰一　先程よりあなた様のお願ひ、老女千年様を以て申入れたるところ、

同二　尾花才三郎役目の越度とは申しながら、我君の御怒り強く、

同三　再三お諫め申せどもお用ひなく、庭前に於て君の御手討と事極り、

同四　唯今これへ引出し、御成敗との、

四人　儀でござりまする。

千種　すりや、いよ〳〵死罪と極りましたか。
腰一　さるによつて御臺樣の仰せには、千種の方より願ひの趣き、殊勝なる思召しを感じたまひ、
同二　暫く猶豫のその內に、經文讀誦致せよと、仰せ出されましてござりまする。
千種　はッ、有難きその仰せ、生死不定の世の中なれば、我人ともに果敢ない身の上、定業とは申しながら、今を盛りの尾花才三、散り行く命も過去の因緣、せめて未來の土產にもと觀音菩薩の功力によつて、成佛得脫致させんと願ひ出しが、お聞濟みの上からは、時刻を待つて讀誦せん、それなら尊像經卷諸共、これへ持つて來や。
四人　かしこまりました。
ト經机に載りたる經卷尊像をよき所へなほす。千種の方は塵手水をして經卷をいたゞく。と上手にて、大勢の聲にて「步め」と聲し、以前の近習二人才三郞を引立て、後より丹下附添ひ出來る。
近習　下にをらう。
ト以前の下郞めい〳〵土俵を擔ぎ、菖蒲革の侍手桶を持ち出來る、丹下土壇の指圖をし思入あつて、
丹下　千種の方には、是においでなされましたか。御覽の通り尾花才三郞は死罪と極り、見る影もないこの爲體、何とみじめな樣ではござらぬか。

千種　不慮の儀に就き果敢ない身の上、一倍不便に思ふ故、御臺樣へお願ひ申し、せめて未來の土産にもと、御經讀誦いたしまする。

丹下　へえゝ、それは御奇特、然し此の期になつて此方樣が、經文を讀まれても何の爲めになりませう。譬に申す牛に經文、無益なこと、いらざるお願ひお止まりなされいさ。

千種　丹下殿控へめされ、無益と申すはこなたの雜言、御臺樣の仰せによつて、普門品をさづくるに、止まれとは誰人が申しました。

丹下　さあ、それは。

千種　常ならぬ御臺樣の仰せなれば、聞捨てならぬ今の一言、御臺樣へ申上げ、きつと事を正しませうか。

丹下　さ、それは、

千種　人の愁ひを悦びなさるか。

丹下　さうではなけれど。

千種　なければ讀誦の批判なさるか。

丹下　なか〳〵左樣な。

千種　然なくば言譯。
丹下　さあ、
兩人　さあ〳〵。
千種　言譯なければ、この座をとく〳〵、
皆々　お立ちなされい。（トきつと言ふ。丹下こなしあつて）
丹下　でも、繩附をこのまゝに。
千種　科人なれば讀誦濟むまで此方へ、預かる上は氣遣ひなし、下部も引連れ早々お次へお立ちなされ。
丹下　ぐつとつまつて）然らば科人お預け申す。是を思へば才三殿、死花の咲く果報者、羨しいと言ひたいが、忌はしいこの繩目、不埒者のその傍にべん〳〵とゐようより、下部どもは身について參れ。
中間　心得ました。
丹下　然らば科人は千種樣、繩附のまゝお渡し申す。
千種　御念に及ばぬ。
丹下　どりや、休息致すであらうわえ。（ト丹下先に中間附いてはひる。）

腰一　邪非道の望月丹下も、其理に服してこそ〳〵と立退きますれば、
同二　寸善尺魔のない中に、お經文を讀誦あつて、才三樣の未來の迷ひ、
同三　お晴らしなされてあげましたら、其の悦びはいかばかり、
同四　名僧知識の引導より、尊いことで、
四人　ござりませう。
千種　これにて普門品を、唱へまするであらうわいなあ。
腰一　左樣なれば私共は、その由を御臺樣へ、
千種　御苦勞ながら、
皆々　後ほど御目にかゝりませう。

ト腰元四人奥へはひる。千種の方あたりを見廻し經卷を取つて、

千種　實に果敢ないは人の命、露霜よりも保ちがたし。
才三　明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐もこの身にあたる私へ、お經文をお授けなされて下さるとは、有難い結縁と存じまする。
千種　武士の恥あるものと思ひなば、最期に未練はあるまじきが、煩惱の絆に迷ひ、見苦しき死を遂げ

んこと末代の恥辱、さるによつて普門品の威徳を以て、未來永劫成佛なされや。

十三　こは忝きその御詞、死するに未練はござらねども、我君の御怒りによつて、御手討に相なりますれば不忠の汚名、せめてのお慈悲お情には、切腹仰せつけられなば此身の本懐、かくまで厚きこなた樣のお情を以て、この儀お執成下さらば此世の望み更になし、何卒お願ひ申し上げまする。

千種　尤もなる願ひなれど、死するを執成す謂なし、とてものことに助命を願ひて歸り花、世を忍ぶお心はないかいなう。

十三　一旦罪の極まる上は、助命を願ふ未練はござらぬ。

千種　さればのこと、こなたに未練がないにもせよ、未練を殘すものがある。

十三　そりや誰人が。

千種　外でもない、この千種、私ぢやわいなう。

十三　何と。（ト思入。）

千種　さあ、觀音經の終らぬ中死急ぎをなされずとも、まあこゝへ來てお經を受けたがよいわいなう。

十三　やはりこのまゝ、これにて聽聞仕らん。

千種　（經卷を持つて、）「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」、お前は二十四、

才三　や、（ト思入。）

千種　（また經をしやんと持ちて、）「爾時無盡意菩薩卽從座起偏袒右肩合掌向佛、」

ト經を讀みながら、だん／＼土壇の内へはひる、是にて才三郎だん／＼押されて土壇の外へ出る。千種これに構はず附廻しのやうに舞臺の中央へ來る。才三郎これを不思議に思ひ、

才三　千種樣には、こは、何事をなされまするぞ。

千種　（經を止めて、）何事とは胴慾な、日頃から戀したれど儘ならぬ身の情なさ、空に月日を送るうちお前樣には不慮の御最期、とても逢はれぬことなれど、御臺樣へお願ひ申し、觀音經を授けんと言うたはみんな僞り事、人目を拂ふ上からは、お命を存へてお屋敷を立退き、夫婦になつて下さんせいなあ。（ト碎けたる思入にて言ふ、才三郎こなしあつて、）

才三　さうとは知らず死ぬるいまはに、佛道の教を受けんと思ひのほか、言語に絶えしその詞、狂氣の沙汰か但し又、それがしを嘲弄めさるお心か。

千種　勿體ない、お主樣は兎も角も、觀音樣を欺いても、あなたに逢うて本心が明かしたいはつかりに。

才三　聞くもなか／＼けがらはしい。そもこなた樣は賤しき身でありながら、殿樣の御不便を蒙むり朝

夕の活計、その御恩を忘るゝのみか罪ある我へ戀慕をしかけ、なほ〳〵罪を重うせんと、こりや何者に頼まれしか。縛の身でないことなら不義の大罪殿へ注進致さんに、今にも死する某が見脱すは寸志の情、この後とても心を改め、我君を御大切にいたさねば、天罰其身に報いますぞ。ちえゝ、見下げ果てたる不所存者、情ないお人ぢやなあ。

トきつと言ふ、千種は恥入りたるこなしにてうつむく。此時四つの時計鳴る、中間及び丹下いできたりて、

丹下　今うつ時計は巳の上刻、千種樣の御用向も終りなば、土壙の中へ歩ませえ。

才三　疾より覺悟の尾花才三、何時なりとも、早く死刑に行はれよ。

丹下　おゝよい覺悟だ、科人を引きずるい。

中間　はあゝ。（ト才三郎を元の所へ引立てる。丹下あたりを見廻し、）下にならう。

丹下　さあこれからは身共が役目、死罪の場所へ女は無用、千種樣には最早用事もござるまい。奥殿へお越しなさい。

千種　そのお指圖なら入らぬ世話、申し殘せしこともあり、その一段聞き切るまでは、御臺樣へお答へがならぬわいなあ。

才三　あいや、その儀は某一言半句、御返答は仕らぬ。唯心にかゝるは殿樣の御身の上。千種の方には君のお傍へ、少しも早く。

千種　斯くまで忠義なこなさんを、刀の錆にかけるとは、あたら花を散らすのぢやなあ。

ト千種の方は思入あつて奥へはひる。才三郎眼を閉ぢ覺悟の思入、下手より前の近習二人出來る。

作藏　丹下殿には刻限違はず、見張りの御役目御苦勞千萬。

兎六　それがしも死罪の場所へ罷出しは、朋友よりの誼、御前よしなに、

兩人　お執成し下されい。

丹下　各方は身共次第、死罪と極まる才三殿、今改めて申すではござらぬか、朋友の某なれば申聞けん。罪ほろぼしだ、よく聞かつせえ。元來貴殿は親御の權威を鼻にかけ、第一家中の者を眼下に見下し、蔑にいたされたを、今思ひあたつたであらう。

作藏　身共などはお髭の塵を取らぬ故、さして出世は致さねども、此身は安泰といふものだ。

兎六　奥女中へ取入つて、ごま第一の不忠のお手前、とう／＼終ひが縛り首。

丹下　はて、天道は正直、悪いことは出來ぬものだ、むゝはゝゝゝ。（ト嘲笑ふ。）

杜之　（上手障子の内にて、）やあ、かしましい、丹下控へい。

丹下　はツ。（ト驚き控へる。障子明くと小姓二人を從へて桂之助ゐる。）才三郎をお手討の用意、申付置きましてござりまする。

桂之　丹下、その方は文武兩道は申すに及ばず、諸事萬端の掛引、人に勝れて才あるもの、さるによつて予が心にも適ひし故、傍近く召使ふが、嘸滿足であらうな。

丹下　冥加にかなひ、有難い仕合せに存じまする。

桂之　それに引きかへ、才三めはさして功なき愚者、助命致すも無益の者。

丹下　御意の通り功なき者を、御扶助遊ばさるゝは無益の至り、彼等如きを則ち、祿盜人とか申すのでがなござりませう。

桂之　いかさま、さうであらう。

丹下　これなる才三亡命の上は、我君樣へお願ひがござりまする。何卒御聞濟み下さりませう。

桂之　其方の願ひとあらば、何事なりともかなへくれん。

丹下　先以て大慶に存じ奉る。そのお願ひと申しまするは餘の儀でござらぬ。唯今彼れが相果てますれば、毎朝のお髮上の儀は、これにをりまする田川伴藏、鳴子鬼六の兩人へ仰せ付けられ下さりませう。

桂之　其方が推擧なれば、苦しうない。順役申し付くるぞ。

丹下　はッ、こは有難き仕合せ。御兩所我君の御諚、嘸御滿足でござらうの。

作藏　貴殿の御推擧を以て、身不肖なる我々へ、右のお役目仰せ付けられ、

曳六　此の身の面目、有難う存じ奉ります。

丹下　さあ御兩所、我君の御許容ある上は、重役方へお役目披露、少しも早く此の場を退出。

作藏　はッ、左樣ござらば我君樣。

曳六　丹下どの。

兩人　御前よろしう。（ト兩人下手へはひる。丹下思入あつて、）

丹下　いざ我君、御猶豫あつては臣下の者、他聞の憚り、以後の政事が相なりますまい。才三如き不忠の族お手討に遊ばされしとて、不仁の君と嘲りもござるまい、片時も早く御手討に遊ばされませう。

桂之　（平舞臺へ下り才三郎の傍へ行き、思入あつて、）こりや才三、予が寵愛致せしをば、自分の才智と心得、物にたかぶり日毎の增長、あまつさへ唯今の越度免れぬところ、その仔細は家に仇なす汝が相好、未然を察する某なれば、予が手にかくる觀念いたせ。

才三　はッ、大罪犯せし才三郎、いかなる刑に行はるゝとも憎むべき謂れなし、不肖なる某が勿體なくも殿樣の、お手にかゝるは身の仕合せ、さはさりながら今年まで、御扶助を受けし御恩も送らず、相果てまするが心外に存じます。

桂之　やあ、この期に及んで忠義だて、聞く耳持たぬ覺悟なせ。

才三　疾より覺悟仕ッてござります。

丹下　はて、いゝざまだ。やい不忠者の尾花才三、自體うぬらが日頃から、いけッしらけたしやッ面をひけらかす故、女子供が附廻すをよい事に心得、そは附いてをる故に、今日のやうな大事が出來いたす。それも身共がいらぬ世話、はてさて笑止千萬。（ト桂之助のためらふを見て、）さ、我君、御猶豫あらず、新身のお試し。

ト桂之助領き、白鞘を拔き才三郎の眼先へ突きつける。才三郎首をさし出し、觀念の思入。

桂之　覺悟はよいか。南無阿彌陀佛。

ト言ひさま丹下の首を打落し、返す刀にて才三郎の縛を解く、才三郎心得ぬこなしにて、

才三　これは。

桂之　是にて成敗相濟んだ。兩人の者、早まゐれ。

ト千種、小牧、奥にて「ハア、」と返事して出來る、才三郎こなしあつて、

才三　合點行かざる我君の御賢慮、罪ある某が御手討になさるべきを、縛ばかり切り解き、御助命下さる其の仔細は。

桂之　まッ斯く爲すも、勸善懲惡、

才三　ちえゝ有難うござります。

千種　もはやお許しある上は、

小牧　御安堵なされ、才三殿。

ト千種才三郎へ大小を渡す。才三郎二腰をとる。

桂之　予が額へ疵つけしを越度なりと、すでに死刑に行ふべき旨、嘸不仁なる某と恨みつらん、其の儀も承知いたせしなれど、これ幸ひと繩うつては罪科脱れず、斯く庭前へ引出せしは、仔細あつてのことぢやわえ。

才三　して其仔細とは、何のやうな儀でござりまするな。

桂之　才三郎、近う。

才三　はッ。(ト桂之助の傍近く寄る。)

桂之　その仔細別儀でない、今曉七つ時そちが親六郎左衞門が預りおく花形の茶入、寶藏へ祕めおきしを奪ひ取つたる曲者あり、これまさしく此程追放なせし筑田喜藏が族の仕業なれども、この事表だつて詮議いたさば家の瑕瑾、事荒だてなば其の品の、知れざることもあらんと存じ、兎や角せんと思ふ内、そちが僅の越度を言ひたて、罪に落して追放致す、何卒暫らく汚名を受け、忍び忍びに寶の詮議、役目と申すは此の儀ぢやわい。

才三　すりや、父六郎左衞門がお預かりの、花形の茶入紛失とな、えゝゝゝ。(トびつくりする。)

六郎　(上手より出來りて、)我君これに渡らせたまふか、恐れながら昨夜お夜詰引けて後、もはや七つに程近き故、愛宕山圓福寺へ參詣なして歸る途中の練塀外、怪しき曲者松ヶ枝を傳はりおりるを捕へしが、宵の小雨でぬかり道、思はず辷りし隙を窺ひ、行方知れず曲者を取逃したる身どもの越度、なれども此事他聞を憚り、何氣なき體にもてなし、殿樣へまツかくと申上ぐれば有難くも、汝に詮議いたせよとの御諚なるぞ。

才三　はツ、未だ若年未熟なる某なれど、大切なる御寶詮議の、役目を蒙る上は千辛萬苦なすとても、尋ね出し奉らん。

六郎　その花形の茶入に、添へたる包みは鶯鴦切、色情に溺れ不淨をそゝぐ其時には、必ず凶事ある試

しもあれば、若年の其方へ心得の爲め申傳へん。

桂之　いや、六郎左衛門、若年の才三なれども、かねて色情に溺れぬ心底、篤と見屆けおいたれば、心遣ひには及ばぬぞ。

才三　すりや、某の心底を。

千種　今こそ明かす手段と申すは、死ぬるいまはのこなた樣へ普門品に事寄せて、不義をしかけしこの千種、恥しめられしまごゝろは、あつぱれ君の御眼力。

小牧　私とても同じこと、お指圖受けて恥しい、戀に事寄せあられもない、あのゝものゝと申しましたを、必ず笑うて下さりまするな。

才三　さばかり深き殿樣の思召しとも存じませず、千種殿、小牧殿、無禮の雜言御容赦下さりませ。

六郎　斯くまで深き君の御賢慮、これより直に御暇賜はり、落着くところは其の以前召使つたる若黨作平、唯今にては柴井町に酒店を出しをるとのこと、彼れに賴つて身を忍び、寶の在所を詮議いたせ。

才三　かしこまつてござりまする。然らば、これより。

ト桂之助思ひ入、近習に持たせし手箱の中より金を出して、小牧に渡し、

桂之　茶入求むる用意の金子。（ト才三郎へ渡す。）
才三　重ね〴〵の御惠み、左樣ござれば御前樣、千種樣にも御機嫌よろしう。
六郎　忰、もはやお暇いたすからは、暫しの間町家の住ひ、必ず怠ること勿れ。
才三　長居はおそれ、あなたも堅固で。
六郎　そちも達者で。（ト苦痛のこなしにて、名殘りを惜しむ。）
桂之　六郎左衞門一世の別れ、忰才三へ暇乞ひの盃しやれ。
六郎　なに、一世の別れとは。
桂之　（六郎左衞門をとくと見て、）六郎左衞門、そちや切腹いたしをらうな。
才三　なんと御意遊ばしまする。
桂之　我心中を見ぬくこと、フラソコの中を見るが如し、始終の樣子を察せしところ、眼中のどよみ、語音の狂ひ、呼吸のいきの合はざるは、汝切腹なせしに相違なし。
六郎　むゝ、（ト思入あつて、）おどろき入つたる御眼力、いかにも茶入失ひし申譯には、まッ此の通り。
ト肌をぬぐ、襦袢血に染み、白布にて腹帶をしてゐる。才三郎びつくりなし傍へ寄つて、
才三　すりや親人には、申譯のその爲に、御切腹なされしか、はゝはい。

六郎　縛り首にも及ぶべきところ、切腹なすは武士の本懷、我に心殘さずとも、紛失の茶入尋ね求めし歸參なし、再び尾花の榮えを見せよ、草葉の陰にて相待ちをるぞよ。

才三　茶入紛失なしたる故、親人にもこの生害、この盜賊は父の敵、日ならず詮議し出して御無念お晴らし申さん。

六郎　出かした〳〵。

才三　われも門出に、別れの盃。

ト手水鉢の柄杓を取つて水を汲み、六郎左衞門に出す。六郎左衞門苦しげに水を一杯呑み、才三郎殘りをぐつと呑みほし愁ひの思入、此内桂之助、小牧、千種この體を見て愁ひの思入、六郎左衞門こなしあつて、

六郎　最早近づく此身の知死期、息ある内に門出〳〵。

才三　はッ。（ト身繕ひして行きかゝる、下の方より作藏つか〳〵と出て、）

作藏　死罪と極まる才三郎の命を助け、紛失なしたる花形の茶入を詮議の役、はてゆるかせな御成敗。

桂之　他聞を憚る一大事。それ。（ト才三郎へ目くばせする。）

才三　（心得て、）大事を知つたる田川作藏、動くまいぞ。

伴藏　何をこしやくな。（トかゝる、この時曳六窺ひ寄つて、）

曳六　才三、觀念。（ト切つてかゝるを、立廻つて兩人をぐつと引敷く。）

桂之　其奴ら兩人は、喜藏丹下に荷擔のもの。

兩人　何を。（ト跳ね返す、又立廻つてよきほどに、）

桂之　斬つてしまへ。

才三　はッ。（ト兩人を斬倒す。）

桂之　見事。

ト六郎左衛門につたりと思入あつてがつくりとなる、才三郎寄らうとして顏をそむけ、刀の糊紅を拭ふ。千種は感心のこなし、小牧才三郎へ見惚るゝ、千種小牧と入替つて文庫を持たせる。と、時の鐘、誂への小鼓にて、双方よろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると、直に尻明けに引返す。

（柴井町伊丹屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、塗家作り、軒口に伊丹屋と印したる紺暖簾、

八重桔梗の紋附けあり。正面暖簾口、下手酒樽の書割、一升桝、五合桝其の他漏斗など、つぎ場の道具、いつもの所門口、下手黒板塀、石の重りをしたる用水桶、兩社大神宮と印したる祭禮の提灯を立てあり、總て酒屋の店がゝり。神明の祭りの體。聖天の鳴物にて幕明く。と丁稚三太德利に酒を計つてゐる。中間、寺の下男、長屋の嚊アなど、がや／＼言ひながら買ひ物をしてゐる。

三太　もし／＼お上さん、澤庵は賣りきつてしまつた。

嚊　えゝ、この小僧としたことが、それだから早くおくれといふのに。

三太　お前ばかりのお客ぢやアあるめえし、しづかにしてくんねえ。

嚊　洟ツたらしめ、口ばつかりまめな奴だよ。

○　これ／＼丁稚、手前ばかりで手が廻るまい、こゝの家には番頭も主人もをらぬか。

三太　番頭さんは出番で、若い者は屋敷廻り。

□　そんなら、評判の内儀に店へ出て貰へ。

△　さうだ／＼お上さんの顔でも見りやあ、いくら待たしても堪忍してやるから、早く呼べといふに。

三太　お前もいゝ氣な人だ。お上さんの顔を見よう／＼と思つて、その油揚を狐にでも取られるだらう。

△　晝日中、狐がゐるものかえ。

ト この時さし金附の鳶一羽下り來り、寺男の持つて來た岡持の油揚をさらつて行く。

皆々 そりや〳〵鳶が。

△ えゝさらやあがつたな。どうするか見やあがれ。(ト空を見上げて下手へはひる。)

◎ さあ、早く一合くんねえ。

三太 あい〳〵。(ト徳利をとつて酒をつぐ。)

◎ つぎを氣を附けてよ。

三太 下司ばつた人だ。

○ こゝの家へ來ると、咽喉がぐび〳〵する、孔句ばかりはずまう。

□ ときにお中間さま方も、こゝの家へ酒を買ひに來さつしやるが、上さんは美しい器量でござるの。

○ 左樣々々、新橋きつての評判さ、それで、わしらも愛宕下から、ひやかしながら來たのさ。

鳴 ほんに男といふものは御苦勞なことだなう。こゝのお上さんは、元は吉原の井筒屋の花魁で、勝山とかいふ全盛の太夫さんぢや。

◎ そんなら、仲の町張りと見えるの。(ト茶碗酒を呑む。)

鳴 小倩さん、こんなにお客を待たさずとも、こゝへお上さんをよんで、皆さんに見せてお上げな。

三太　神明樣の見せ物ぢやァあるめえし、よく見たがる人達だの。おい〳〵お上さん、ちよつと見世へ來ておくんなさい、お上さん〳〵。

しづ　あい〳〵、今行くわいなあ。（ト奧よりおしづ世話女房の打扮にて、絲卷の絲を卷きながら出來る。と皆おしづに見とれるこなし、）ほんにお前一人で困つたであらう、お剩錢でも上げるのかえ。

三太　何さ、お剩錢ぢやァあござりません、こゝへ來てゐる折公が、お前さんの顏が見たいといふから、それでお呼び申したのさ。

しづ　これはしたり、お客樣へむかつてどうしたものぢや。皆さん御免なされませ、身體ばかり大きうても腕白者で困ります。

□　何さ、子供だもの、しやうがない。然しにこりと笑つた所を見りやあ、腹も立たねえのよ。

しづ　ほんにまあ、御常談ばつかり、おほゝゝゝ。

△　さあ〳〵、いつまで見ても飽きはない。

皆々　先樣はお代り〳〵。

三太　代はお戻り〳〵。

ト皆々から錢をとつて錢箱へ投げ、仕出德利岡持などを提げ、捨ゼリフにてわや〳〵下手へはひる。

しづ　三太や、そなたもよう働きやるが、お客でもかまはず、氣にあたるやうなことばかり言うてから
に、そのたんびに冷汗をかくわいの。
三太　なんの氣の弱いお上さんだ、笑つてゐると直に貸しになるから、何でも現金に賣るのが、一番勝
だぜ。
しづ　そこらはだいぶ賢者ぢやと、褒めにやならぬわいなあ。そりやさうと、今のお客樣に帳面へ附け
るのはないかや。
三太　何さ、ありやあみんな現金ばかりさ。それといふのもね、お前さんの顏が見たいといつて、愛宕
下、西の久保、鐵砲洲からも。（ト手を鼻の先へ出す。）
しづ　あゝ、びつくりする。
三太　どん〳〵買ひに來ますぜ。どうでもお前樣は、こちの家の福の神だねえ。
しづ　そなたの言やる通り、福の神なら苦勞をせぬが、私が廓を出ても、まだまア身請の殘金が濟まぬ
ので、こちの旦那もいろ〳〵と心遣ひばかりあるとこへ、わたしの弟の才三郎が浪人なして掛り
人、今朝用達しに行きやつたが、もう今に見える時分、お茶の支度でもしておかうかいの。
三太　そりやあ私にも出來るが、今言はんしたお前さんの事で金が濟まないから、旦那さんも案じると

言はんすが、家にお金がなくてもひとりでに、たんとできることがあるぞや。

しづ　何ぢやえ、たんとお金ができるとはえ。

三太　ほしけりやあ私が出してやらう。待たんせ〳〵。（トあちこち思入、おしづ不思議に思ひ、）

しづ　えゝ、何をしやるやら、阿房なことをして叱られまいぞえ。えゝもう、しんきな、お茶の支度でもしませうか。

トおしづ奥へはひる。三太は手桶の柄杓を持つて門口の用水の傍へ行き、

三太　聞き及ぶ中山寺の觀世音、無間の鐘をつく時は、海川へはまる所のお金が集まるとのこと、鐘にもせよ、石にもせよ、桶にもしろ、志すところは無間の鐘、此の世はひるにせめられても、だんないだんない大事ない。

ト無暗に用水桶の石をたゝきながら、空を見上げて思入。屋體ばやしになり、伊丹屋十兵衛、千木箱と泥生姜をさげ、佐野松屋清兵衛女郎屋の亭主、女衒の源六附いて出て來る。

清兵　もし〳〵、そこへ行きなさるは、伊丹屋十兵衛さんではないか。

十兵　（振返つて見て、）これは誰かと思つたら、佐野松屋の御亭主に判人の源六さん、お前様は神明様へ御參詣でござりますか。

清兵　どうして、そんな優長なことぢやない。お前の所へ來たのさ。

源六　丁度い丶所で逢ひました、こ丶は門中、

十兵　まあ、家へ行つて話しませう。

清兵　そんなら十兵衞さん。

十兵　さあ、おいでなせえ。

ト三人舞臺へ來る。此時三太は無性に柄杓を持つて石をた丶きゐる。十兵衞これを見て、

十兵　これ三太手前何をしてゐるのだ、お客樣がおいでなさるに、家へはひつてお茶でも汲まねえか。

三太　わつしアいま、無間の鐘を撞くところだ。

十兵　え丶べらぼうめ、家へはひれといふに。

三太　だんない〳〵、大事ない。

十兵　何をいふのだ。

ト叱りつける。此時空より以前の鳶、舞ひさがりて、油揚を三四枚ばら〳〵と落し、清兵衞、源六の頭上へ落ちる、三太あわて丶、

三太　そりやこそ、金だ〳〵。（ト拾ふ。）

兩人　なに、金とは。

ト兩人きよろ／＼して、あたりを見廻す。源六すべつて油揚をとつて不思議のこなし、十兵衞は呆れて、

十兵　もし／＼、その油揚は鳶が落したと見えます、羽織も頭も油だらけ。

兩人　違えねえ、こりやあ油揚だ。

十兵　まあ／＼、内へおはひりなせえ。（トこれにて兩人身體を撫で／＼内へはひる。）その油揚を拾つて、何にする。捨てゝしまへ。

三太　お上さんにやらうと思つたが、こりやあ油揚だから狐に化かされたか。

十兵　しつかりしろ。（ト脊中をたゝく。）

三太　あい、しつかりした。（トしやんとする。）

十兵　あゝ、ぬけ作め。（ト引寄せて囁く。）

三太　おつと、よし。

ト下の方へはひる。十兵衞内へはひり、門口をしめる。

十兵　おいでそう／＼鳶がさらつた油揚で、お羽織もどこもかしこも汚れました。

清兵　かう十兵衛様、羽織どころか、私が顔をよごしちやあ濟みますめえ。今考へて見りやあ、やつぱり鳶にさらはれたやうなものだ。

源六　もし〳〵旦那、そのお腹立は御尤もでござります。まあ私も參りましたからは、あなたのお顏の立つやうに談じませう。

　　ト此時奥よりおしづ小土瓶に茶碗二つ、口取の菓子鉢を持つて出來り、

しづ　源六さん、親方さんも御同道で、ようござんした。

源六　あゝ花魁ぢやあねえ、お上さん。すつぱりと、廓詞がぬけましたね。

しづ　はい、親方さん、まだ御挨拶もいたしませぬ、どなた樣も御機嫌ようおいでなされますゐか。その節は何かとお世話になりまして、今に御恩は忘れませぬ。まあお茶一つ。

清兵　あい〳〵。

　　トおしづ兩人に茶を出す。兩人とつて、源六思入あつて、

源六　ときに十兵衛さん、今日はちつと野暮な事を言ひに來ました。ほかのことでもない、こゝにゐる勝山さんの身の代、聞けばお前の主人の家の娘、是非身請がしたいといふ故、忠義な事實銘な人だと思つたから、この親方樣へもだん〳〵お願ひ申して、二百兩の所を百兩金取つて殘金百兩貸

して上げたも、こりやあほんの男づく、達引といふものでござりますぜ。かう今までべん〳〵と引張るわけぢやァありさうもねえもんだ。お前方は人を馬鹿にしなさるのかえ。

ト角目だつて言ふ、十兵衛思入あつて、

十兵　もし源六さん、お話しづくのことだから、御損亡をかけるやうな私でもござりませぬ、商人の眼先、私も大なり小なり暖簾をかけてゐる眞面目な酒商賣、不義理を致すやうなことは、天道様をかけて致すことぢやあござりませぬ。問屋の仕切り何やかや、手延びになつてお氣の毒でござります。

ト言譯に困るこなし、おしづ以前よりふさいだる思入あつて、

しづ　親方の手前を思へばこそ、源六さんもかれこれとおつしやるもの丶、實にこちらでも朝夕苦勞致してをりますること、どうぞお前のおとりなしで、いつ幾日といふ手堅いことにいたしましたら、私の心積りもござりまする。な、親方さん。

清兵（煙管の吹殼をた丶きながら。）源六をこ丶へおいて言ふぢやあねえが、奉公人を女護の島ほど抱へて、おく佐野松屋清兵衛、今まで勝山がことに何一つ不足もなし、第一勤めがい丶から、とてものことに好いた所へ、やるのが双方によからうと思ふから、十兵衛さんに身請をさして丁度半年、私や

あかう見えても涙もろいが、又錢金のことなら容赦も勘辨もねえことは、此の勝山がよく知つてゐる。その又おれを不義理にするとは、勝山といひ源六も、目先の見えねえものぢやあねえか。

源六　十兵衛様、あの通り親方の言はつしやることを、無理か無理でねえか、默つてゐちやあ分からねえわな。此の百兩の金も、相手が十兵衛だ、石に判だと思ふから私が請合つて、貸して上げた百兩、今日の明日のとべん／＼だらり、旦那へ對して私が中途でやりくつたやうに思はれて、痛くねえ腹を探られるやうなものだから、旦那をお連れ申して、野暮に大きな聲をしても、白い黑いを分けにやならねえ。

十兵　だん／＼のび／＼になつたは、申譯もない御無沙汰、かれこれ申したところが、御承知もなりにくうござりませうから、どうぞ當月晦日まで。

清兵　いや、その晦日も十四日も聞き飽きた、安請合に請合つたとて、大まい百兩といふ金がさうちよつくらにできるものかな。吉原から小三里の道を歩いて來たからは、十兵衛様手短にかうしやせう。お前の金ができるまで、勝山を家へ預からう。金ができたらいつ何時でも、駕籠を持つて迎ひに來なせえ。それが手附かずの話だ。

源六　なるほど、こりやあ近道だ。十兵衛さん、その積りにしやせう、それがいゝ／＼。

ト源六立ちかゝるを十兵衞思入、おしづ兩人の間へはひり思入あつて、

しづ　もし〳〵そのやうにおつしやらすと、又御相談のいたしやうもござりまする。親方さん、源六さん、廓へ行けなら參りませうが、どうも今とおつしやつては、なあ十兵衞さん。

十兵　そりやあもう耳を揃へて百兩の、金がなければ連れて行かうとおつしやるが、さう自由にもなりますまい。

清兵　そりや又どうして。

源六　何故ならない。

十兵　さればでござりまする。身の代金は二百兩、内金百兩お渡し申してござりませ。

清兵　その百兩取つてあるから、勝山をこゝへよこしたではないか。

十兵　さゝ、それぢやによつて、十兵衞がしつかりと預かりました。

源六　して後金の百兩を、べん〳〵だらりと引つぱるから、玉を連れて返るのに、それでもこつちが誤りか。

十兵　誤りどころか、得手勝手といふものだ。

兩人　そりや又何故に。

十兵　玉を引上げ、渡した金の百兩は。
兩人　や。
十兵　清兵衛さん、あまり勝手がすぎませうぜ。
源六　もし〳〵親方、こいつあだいぶ手重くからんでまゐりますぜ。
清兵　源六、何もかも胸にある、百兩位はほしきやァ今でも返してやらあ。
源六　そんなら金子を。
清兵　佐野松屋の清兵衛、百や二百の端金は、ちよつと出るにも御所持だわ。〈ト胴卷より包金を出し〉さ、
　これを取つたら言分あるまい。
十兵　ありますね。
兩人　まだあるかえ。
十兵　半年あまりの雜用ざらひ、お前の出やうがそでないから、耳を揃へて貰ひたい。
清兵　どういへばかういふと、横ッたふしに出かけたな。
十兵　何もよこしまは申しません、あまりと言へば因業故。
源六　なに因業だえ、因業でも巾着でも、取らにやあならねえ身請の金、耳を揃へて請取らにやあ、代

官所へ引立てゝ、砂利を掴んで恐れながらの根くらべ。

清兵　ぐづ／＼言はずと、引立てろ。

源六　さあ、勝山さん、歩みなせえ。（トおしづへ手をかけるを、十兵衞へだてゝ）

十兵　さうはならねえ。

兩人　ならずば金か。

十兵　さあ。

兩人　引立てようか。

十兵　さあ、それは。

兩人　金を濟すか。

十兵　さあ。

三人　さあ／＼／＼。

ト詰めよつておしづを引立てにかゝる。この以前より尾花才三郎下手より出で門口に窺ひゐて、この時つか／＼と内へはひり源六を突廻し、清兵衞をへだてゝ、

才三　其方達は内儀を捉へて、こりや何とする。

源六（呆れて、）見りやあお若いお侍、
清兵　何とするとは知れたこと、貸した金の濟方に、私が所へ連れて行くのさ。
源六　それを不承と思ふなら、百兩といふ金を立てなせえ、よもやお金はむづかしさうだ。
清兵　大小さしたお侍、めつたに口出しはできますまい。
才三（思入あつて、）いかにも、金子遣はさう。
兩人　そりや、あのまことに。
才三　後とも言はず、唯今呉れう。
兩人　えゝ。（トびつくりする。才三郎懐中より包金を出し、）
才三　掛矢形の封印なれば、中改めて受取りやれ。
清兵　まことに百兩。見ず知らずのあなたからは受取りにくい、なう源六。
源六　左樣々々、十兵衛さんも男なら、百兩出して貰ひませう。
才三　こりや町人、身が所持の金子は不通と申すか。
兩人　さうではなけれど。
才三　然らば金子受取つて、宛名は十兵衛、請取が申受けたい。

清兵　さうおつしやることならば、唯今請取を認めませう。それ源六、（ト矢立を渡す。源六紙入より紙を出し、さら／＼と認め清兵衛へ渡す、清兵衛讀んで紙入より實印を出し、三判押して、）へい、身請の殘金百兩の請取、お渡し申します。これで金子は濟みました。（ト金を懷中する。）

源六　長居はおそれ、旦那、急いで汐留から船としませう。

清兵　むら田がおれの馴染だ、源六行かうか。

源六　皆さん、おやかましうございました。（ト兩人門口へ出る。）

才三　兩人待て。（ト思入あつて言ふ。）

源六　へい。御用でもございますかえ。

才三　殘金百兩相渡せば、此方は身請の客だぞ。

兩人　へい。

才三　その身請の客の店先で、遊女屋渡世なすものが、立騷いで濟まうと思ふか。

兩人　へい。

才三　そのまゝにては歸さぬぞ。（トきつと言ふ。）

兩人　えゝ。（トびつくりしてへたる。）

才三　と申す所なれど、言はゞ目出度き身請故、このまゝに差し許すぞ。
兩人　それはけつこうな思召し。
才三　えゝ、きり／＼とうせをらう。
兩人　へい／＼／＼。（トあわてゝ門口へ出て）
清兵　やれ／＼嬉しや、得手かういふ終ひは酷い目に逢ふものだ。それをこのまゝ打たれもせず、
源六　濡手で百兩しめるとは、もし旦那、お禮がしつかりござりませうね。
清兵　此の禮はお定まり、五分の禮だ。
源六　いや五分とは有難い。
清兵　その禮はこれだ。（ト以前鳶のさらひし油揚をつまんで出す。）
源六　この油揚が禮とは。
清兵　はて、五分（昆布）に油揚といふわ、
源六　えゝ、油揚とは一兩かえ、あんまりひどいね。
清兵　それぢやあいつそ何にもやらず、五分たゞ（昆布鱈）とはどうだ。
源六　いや、悪い洒落だ。はゝゝゝゝ。

ト兩人足早に花道へはひる。十兵衞後を見送りて、

十兵　若旦那、何とお禮を申しませうか、思ひがけない大まいの百兩、あなた樣より拜借致しましたで、面目次第もござりませぬ。

しづ　兄弟とはいひながら、今は流浪の才三殿、お前の金を借受けては、どうも私が濟まぬわいな。

才三　姉者人、その心遣ひは御無用になされませ。今更いふに及ばねども、お前が幼いその時に、氏神の祭禮の折から勾引されて苦界の勤め、故主の娘と十兵衞殿が身請なしたる姉者人、後金の催促に詮方盡きたる今日の手詰、見るに忍びず用立てたる百兩は、紛失なしたる寶の茶入詮議の爲めの用意金、まだ手がゝりのあるではなし、その心遣ひは無用になされませ。

しづ　兄弟の義理を思ひ、その志しは嬉しいが、今にも寶の詮議して在所知れなば金の入用。

才三　それぢやというて現在の、姉者人に二度の勤めがさせられませうか。寶は身のさし合せ、一寸延びれば廣い世界、それがしとても流浪の身の上、殿へお髮を上げたを幸ひに、今より町髮結と姿を替へ、窃に寶の詮議をなさん。もし手がゝりのことあらば、その時必ず十兵衞殿。

十兵　其の儀はお氣遣ひ下されますな。私も後金の百兩の心當りのないではござりませぬ。其の仔細と申しまするは、元私は大津の生れ、親共は身貧な暮しの黒木賣り、兩親ともに歿りし後弟を連

れて御當地へ立越へ、私は親旦那樣へ若黨奉公、弟の彥三は材木町の白木屋へ養子に遣はし、私は朋輩どもと口論いたし御暇を願ひしに、有難い親旦那の御助力にて酒屋渡世の身から一身、稼ぎ溜めたる百兩にて、身請なしたる女房が後金の心當は、以前親どもが召使ひましたる藤助と申す者、唯今にては京都にて相應なる暮しをして、書狀の便りもいたしますれば、それへ賴つて百兩の金借用いたす心積り、兩三日の中には上京致さんと存じましたが、直に明朝出立致しませう。これおしづや、明日早く旅立するから、留守を必ず賴むぞや。

しづ　そりやもう家のことは必ず案じなさんすな、然し旅の用意もなければ、明日といふのもあんまり急で、せめて二三日支度して、曆を選んで立たしやんせいなあ。

十兵　いや／＼、もし寶の手がゝりが急に知れまいものでもなし、思ひたつたが最上吉日、是非とも明日は早く旅立ち。

才三　そんならどうでも、立たつしやりますか。道中無事に戻られるやう、神明樣へ參詣して來ませう。（ト下手へ來て、）然し、あんまり性急で、なれぬ旅では。

ト此の時奧より三太丸盆に茶碗を三つ載せ持つて出る。

三太　もし、なれた風味の甘酒、祭り祝ひに一つあがらんかえ。（ト三人の前へ出す。）

十兵　おゝよく氣が附いた。ひとよ酒といふからは、今宵を直に立祝ひ。

しづ　暫しの別れ、奥でゆつくり。

三太　うまいなく。

十兵　三太、おぬしも呑んだか。

三太　お初穗をやらかしました。

十兵　すばやい奴め。（ト思入あつて、）ほんに、才三樣へおみやげを。（ト以前の千木箱を出す。）

才三　千木箱は飴でござるか。

しづ　雨では今宵は、

才三　定めし、しつぽり、

十兵　旅の支度を、

三太　立振舞に、

ト三太十兵衞の前へ顏を出す。十兵衞頭を打つ。才三郎は門口を明ける。これを木の頭

才三　降らねばよいが。

ト才三郎空を見上げ十兵衞頭へ手をあげる。おしづ十兵衞の手を持つて顏をそむける。これをキザミ、

賑やかなる唄にて、よろしく、

ひやうし幕

二幕目

芝片門前文彌内の場

〔役名――座頭文彌、百木屋彦三、坊主小兵衛、筑田喜藏、髪結才三郎、佐野松屋清兵衛、女衒源六。綿屋の若い者與助、座頭でく市、こぶ市。文彌母おりく、文彌妹お菊、同妹おいち等。〕

(文彌内の場)――本舞臺三間の平舞臺、所々へ瓦をおきしこけら葺の屋根、正面三尺の佛壇、これに鶯茶切の袱紗打敷にかけおり、此の脇一間反故張りの障子。下手は折廻し鼠壁、上の方葺下ろし下屋、いつもの所門口。下の方後へよせて裏長家の雪隱。下座の前黒塀、門口に「もみりやうじ鍼治灸點、文彌」といふ木札。總て芝中門前文彌内の體。こゝに文彌母おりく、世話婆の打扮にて綿を摘みゐる。傍に綿屋の若い者與助煙草を喫みゐる。下手に文彌妹おいち、素麺箱の上にて手習をしてゐる。此の見得稽古唄にて幕明く。

りく　もし與助さん、この十袋は明日まで待つて下さりませ。

與助　あい、明日中でようござります。摘賃は此間のと一緒に七百五十持つて來ました。

ト財布より錢を出しておりくに渡す。

りく　これは有難うございます。

與助　おいち坊、よう手習の精がでますの。

いち　いえ〱、私や一向精はでませぬわいな。

與助　いや〱、いつ來て見ても、よう精が出ます。

りく　仕合せと手習ひが好きでございます。お恥しいことながら私は手習ひが嫌ひで、一字一點讀めませぬ故、せめて子供等には手を書かせたう、姉めも小さい時から仕込みましたお陰には、人なみには書きまする。親の慾目かおいちめも、年よりは良うできますやうに思はれます。

與助　できるとも〱、なか〱十歳や十一で、このやうに書くものはない。

りく　有難うございます。これ、與助さんがお褒めなさる、精を出さねばならぬぞや。

いち　あい、よく精を出しますから、どうぞ私にもお金さんのやうな、お机買うて下さんせいな。

りく　おゝ、春になつたら、よいのを買うてやらうわいの。

ト花道より小兵衞出來り門口へ來て、

小兵　婆アどん、今歸つた。（ト内へはひる。）

りく　何と思うて歸らしやつた。

小兵　何と思つて歸るものだ、おれが家だから歸つて來たのだ。

りく　あんまり、おれが家〳〵というて下さんすな。こゝの家は文彌の名前、何一つ持つても來ずに、あんまり大そうなことを言はしやんすな。

小兵　言はねえでどうするものだ、十年此方餓鬼めらの足手を延ばした其の上に、うぬにも暑いめ寒いめさせず、餓じいめをさせねえのは、誰が蔭だと思やあがる。

りく　えゝもおいて下さんせ、そりやこつちで言ふことぢや、賃綿摘んだり人仕事したり、夜の目も寝ずに精出して、子供を始めこなたまで、私が過しておいたのぢやわいな。

小兵　僅な仕事を鼻にかけて、亭主の箔を剝がしやあがるな。

ト小兵衞鐵砲笊より秤を出し、これを振上げ打たうとするを與助留める。

與助　これはしたりどうしたものだ、若い者ぢやァあるめえし、よい年をしてお互ひに、夫婦喧嘩はみともない。もうよい加減にしなせえな。

りく　いえもう、人樣の笑ひ草になるのが厭でござります故、言ふまいとは思ひますけれど。

小兵　言ひたくなくば何故だまつてゐねえ、この梅干婆ァめ。

りく　なにを、この藥罐親仁め。

與助　これさ〳〵、もうよいかげんにしなせえと言ふに、この子が怖がつてゐるわな。さういつまでも言つてゐられると、私も歸るに歸られねえ。中にはひつた不承に五合買はうから、それで了簡して下さい。

りく　いえ〳〵、お前さんにお錢を遣はしましては、濟みませぬわいな。

與助　なにさ、たんとは買はない、酒が五合に肴が二百、兩方でたかゞ一朱、（ト財布より一朱を一つだし小兵衛の前へおき、）これで了簡して下せえ。

小兵　こんなことをなすつちやあお氣の毒でござります、併し折角の思召し、お貰ひ申しておきます。（ト金をいたゞき、）婆アどん、中なほりにお角力酒屋へ行つて、何ぞ見つくろつて來て下せえ。

りく　えゝも忙しいのに、よく人を遣つてからに。（ト言ひながら味噌漉を持ち行きかける。）

與助　どれ、そこまでいつしよに行かう。

小兵　これは與助さん、とんだ御厄介になりました。

與助　もう喧嘩は止しにしなせえよ。（トおりく與助門口へ出て、）いや、困つた代物だ。

りく　あれだから喧嘩は絶えませぬ。

與助　尤もなことだ。さあ行きませう。(ト兩人花道へはひる。)

小兵　よくつべこべとしやべりやあがる婆アだ。コレお市燗のできるやうに、奥へ行つて火を起しておいてくれ。

いち　あい〳〵。

ト稽古唄になり、おいち奥へはひる。花道より筑田喜藏、浪人裝にて出來り、

喜藏　文彌といふ座頭の家が、小兵衛の家だといふことだが、どうぞゐてくれゝばよいが。(ト本舞臺へ來り門口より內を覗き、がらりと明けて、)小兵衛家にゐたか。(トづッとはひる。)

小兵　喜藏樣か、びつくりした。

喜藏　此間から突當てようと、手前が後を追つて步いた。

小兵　何ぞ用でもあつてかえ。

喜藏　用も用、大用だ。(ト上手へ住ひ、)外でもない、此間手前に賴んだ彼の品は、幾何の質に入れたのだ。

小兵　彼の品とは何かえ、お前の盜んだ茶入のことかえ。(ト大きな聲でいふ。)

喜藏　あこれ、しづかに言へ。

小兵　あの花形の茶入なら、百兩に置きやした。

喜藏　なに百兩においた、いや太え奴だな。持主に半金渡し、どこの國にか五十兩上借りをする奴があるものか。

小兵　ないとは言はれねえ、こゝにありやす。（ト煙草を呑みながら、煙管にて鼻をたゝく。）

喜藏　いけしやあ〳〵とした奴だ、どうしてくれう。（ト喜藏悔しき思入。）

小兵　どうともお前の勝手にしなせえ、堅氣な者の代物なら僅一分の上借でも、言立によりやあ盗人同然、それとこれとは違ひやす。而も佐々木の家の重寶、直足の附く代物を承知で質に置くからア、まさかの時は一緒に行く氣、拔き損やあ首仕事、五十兩ぢやあ安いものだ。

喜藏　すりや、盗物故高をくゝり、上借をしたといふのか。なるほどこれは惡い奴だ。（ト佛壇の袱紗を見て、）あの佛壇の打敷は、茶入を包んだ袱紗だが、何で家へ殘しておいた。

小兵　あれを附けてやつたところが羽織の紐と同じことで、百にもふめやあしねえ故、そこで婆アの氣休めに、打敷代りにやつたのさ。

喜藏　流石は年の功だけあつて、百の錢にも拔目はないな。仕方がない、五十兩はきれいにわれにくれてやるが、おれも酒と假宅で、此の頃はちやんころなし、改めて十兩ばかり小遣ひを貸してくり

やれ。

小兵　そりやあありせえすりやお貸し申しますが、上借をした五十兩は、半月ばかりに取られてしまひ、二朱の金にも困る仕儀、丁度幸ひお前を玉に、十か二十になる仕事があるが、半口乘つてくんなさらねえか。

喜藏　そりやあ金にせえなることなら。して、その仕事は。

小兵　家の婆アが盲人めに官位を取つてやりてえと、喰ふものも喰はねえで溜めた金が十か二十、私にかくして出來た樣子、盲人を騙して引出す積りだ。

喜藏　どういふ法でその金を。

小兵　そりやお私が胸にあります。然しこゝで話しもなるめえ。

喜藏　どこぞで一ぱいやりながら、

小兵　あら筋を話しませう。

喜藏　そんなら小兵衞。

小兵　若旦那、さあ行きませう。

ト稽古唄にて兩人下手へはひる。花道より文彌の姉おきく、島田娘の打扮にて、袋に入りし三弦を抱

へ出來る。後より女衒の源六つき出來り、花道にて、

源六　もし姐さん、それぢやあお前の家は向うかえ。

きく　はい、あれが私の家でござんすわいな。

源六　揉み療治の看板の出てゐる家だね。よし／＼、後方親方を連れ證文に來ます。

きく　どうぞ只今も申します通り、廓へ行くといふことは文彌にはおかくし下され。お屋敷へ御奉公に參ります積りに、おつしやつて下さりませいな。

源六　そりやあ必ず案じなさんな、わつちも親方も俄や茶番が好き故、ちつとは狂言心がありやすから、いゝりやんこの積りで迎ひに來やす。

きく　左樣なれば、また後程。

源六　面談いたすでござらう。（ト肩を張つて堅く言ひ、）おきやアがれ、もう侍になるやつさはゝゝゝゝ。

ト源六は引返してはひる。おきくは舞臺へ來り、

きく　かゝさん、今歸りましたわいな。（ト內へはひる。）

いち　（奧より出來りて、）姉さん、今日はお早うござんしたな。

きく　おゝおいち、かゝさんは奧にゐやしやんすか。

いち　いゝえ、かゝさんは父さんのお酒を買ひに、行かしやんしたわいな。

きく　すりや父さんが歸らしやんしたとか。えゝも折の悪い　何處にゐやしやんすぞいな。

いち　今までこゝにゐやしやんしたが、見えぬからは又どこぞへ。

きく　どうぞへ行つて下さんすればよいが。

トおきく案じる思入、合方にておりく味噌漉と徳利をさげ、口小言を言ひながら出來り　門口を明け
おきくを小兵衞と思ひて、

りく　さあ、呑みたくば呑んだがよい。（ト肴と徳利を突出す。）

きく　（びつくりして、）母さん、私やお酒は嫌ひぢやわいな。

りく　おゝ娘か、ほゝゝゝゝ、今親父殿といさかうた故　腹立まぎれに見違うたわいの。これおいち、親父殿はどこぞへ行たか。

いち　あい、内にはゐやしやんせぬわいな。

りく　どうぞもう、歸つてくれねばよいが。（トおきくに向ひ、）それはさうと、今日はどうであつたの。

きく　あい、悦んで下さんせ、今日はいつもよりお客も多く、さる旦那様から御祝儀をお貰ひ申しましたわいな。（トおきく帶の間より巾着を出し、紙包の金と錢を出す。）

りく　それはよいことをしやつたの、わしも今日は綿の摘賃、草双紙の綴代、何やかやで一分あまりになつたわいの。（ト佛壇の下段より小文庫を出し、内より錢と金を出し見せる。）

きく　どうぞ早うお金を溜めて、文彌の官位がとつてやりたい。忘れもせぬ三歳の年、私が抱いてつい落し、石に打附け情なや兩眼ともに潰せしあの子、せめて望みの官位でもとつてやらねばこの姉の、どうも義理が濟まぬわいな。

りく　はて、それとても約束事、その替りには若い身で恥も厭はず茶兒世へ出て、淨瑠璃を語つて人樣に、合力受けるも文彌の爲め、そなたの蔭で今日のを入れ、十五兩餘になつたわいな。

ト文庫の金包へ金を一つにする。

きく　とはいへ、座頭の官位でさへ、百五十兩入るとのこと。

りく　身貧な暮しで大まいの、

きく　金の出來よう當もなし。

りく　はて、何としたら、

兩人　よからうなあ。（ト兩人思入、おきく思ひ出せしこなしあつて）

きく　これはしたり、私としたことが、大事の撥を茶店の床几へ忘れて來たが、かゝさんお前大儀なが

ら、ちよづと行て來て下さんせいな。

りく　おゝ、あの撥を失うては、明日から生業の障りになる。つい一走り行て來ようわいの。

きく　ついでながら身替りの地藏樣へ、私の替りにお參り申して來て下さんせいな。

りく　おいノヽ。歸りに神明前の泉市樣へ寄つて、草双紙をとつて來る程に、ちつと遲うならうわいの。

ト言ひながら門口へ出る。

きく　そんならゆるりと、行てござんせいな。

りく　どれ、行て來ようわいの。

ト四つ竹節になり、おりく花道へはひる。おきく文庫を佛壇の下へしまふ。又稽古唄になり、花道よ り髮結才三郎手拭の片褄下駄がけ、鬢盥をさげ髮結の打扮にて出來り、直に門口へ來て、

才三　をばさん、お家かね。（ト門口を明ける。）

きく　おや、髮結の才三さんかえ。母さんは今愛宕下まで行きましたわいな。

才三　さうでございますか。（ト内へはひり、）おきくさん、御面倒ながら、どうぞ油手拭を洗濯して下さりませ。

きく　はいノヽ畏りましたわいな。

才三　嘸油染みてお困りでござりませうが、一人者の悲しさ洗人がござりませぬから、お頼申します。

きく　ほんにお一人では嘸お困りでござりませう、早うよいお上さんをお持ちなさんせいな。

才三　いくら持ちたくつても、誰も女房になるものがござりません。（ト佛壇の袱紗へ目を附け思入あつて）もしお菊さん、ぶしつけなことを言ふやうだが、お前さんのお家に合しては、あの佛壇の打敷は立派な切でござりまするが、ちよつと拜見いたしたうござります。

きく　あい、これでござんすかえ。（ト袱紗を取つて見せる。）

才三　（裏表を見て）こりやお結構な品だ、表は古代の鶉切、裏は燃えたつ飛龍紋、まさしくこれは、（ト思入あつて）異なことをお聞き申しますが、この打敷は久しくお家にござりますか。

きく　いえ、その袱紗は此間父さんが、どこでやら買うて來なさんしたのぢやわいな。

才三　むう、して親御さんの御生業は。

きく　さあ、父さんの生業は。（ト言ひ兼ねる。）

いち　紙屑屋でござんすわいな。

才三　へゝい左樣でござりますか。こりやお結構な品だ、大切になされませ。（トおきくに返し）左樣なら御面倒でも、早く洗つて下さりませ。

きく　直に洗つてあげますわいな。

才三　（門口へ出て）はい、おやかましうござりました。（ト合方にて、花道附際まで行き思入あつて、）はて心得ぬは今の打敷、世にも稀なる鴛鴦切は紛失なせし花形の、まさしく茶入を包みし袱紗、此家の内にあるといふは、もしや寶の盗賊が。（ト振返り見る途端に、おきく門口を明け見て、）

きく　まだ、おいでなさんせぬか。

才三　いえ、唐櫛の掃除をしてゐました。どれ、もう一精出しませうか。

ト稽古唄になり、才三郎合點の行かぬ思入にて考へながら花道へはひる。おきく後を見送り門口を閉め、

きく　これおいち、そなたにちつと頼まにやならぬ事があるわいの。

いち　姉さん、わたしにお頼みとはえ。

きく　さ、そなたに頼みは。（トあたりへ思入あつて、）奥でとつくり話さうわいの。

いち　そんなら姉さん。

きく　妹おじや。

と寺鐘になり、おきくおいちの手を引き奥へはひる。寺鐘を打上げ床の淨瑠璃になる。

〽世の中の善きも惡しきも見えぬ眼に、突く杖の木は直なれど、心ゆがみし座頭の坊、孝子文彌を右左り、なさけ容赦もあらけなく、

トこれへテンツヽを冠せ、花道より座頭文彌下駄にて杖を持ち、これなでく市こぶ市の二人同じく座頭の打扮にて、文彌を引立てゝ出來る。後より白木屋彦三羽織着流し町人の打扮にて、捨ぜりふにて留めながら出來り、花道にて、

こぶ　やい／＼汝は憎い奴だ、市名も取らぬ分際で四分の者に突きあたり、ろくすつぽうの詫もせず、

でく　盲人の法を知らぬからは、誰が弟子だか師匠へことわり、きつと仕置をせねばならぬ。

文彌　そのお腹立は御尤もでござりまするが、突きあたりしはあなた方より。いえ、私の不調法、幾重にもお詫いたしますほどに、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

彦三　どういふ譯か知らないが、最前から二人して可哀さうに打ち打擲、もうよい加減にお前方も了簡しておやんなさいな。

こぶ　えゝこの人は大きにお世話な、仲間の法ですることだ。素人の知つたことぢやあない。

でく　了簡しろならしまいものでもないが、たゞ了簡がなるものか、いけ馬鹿々々しい。

兩人　退かつしやい／＼。

ト兩人又杖で打つを、彦三留めて、

彦三　これさ〳〵お前方もさりとは執着い人達だ。いかに眼が見えぬとて、このひが〳〵ひすな座頭殿をめつたむしやうに打敲き、ひよつと打ちどこでも惡くつて、もしものことがあつたなら、假令官位のある身でもその分には濟みさうもないもの、人の留めるその内によい加減に了簡しなさい。わしも中へはひつて酒の一つも進ぜませう。どうぞ了簡して下さい。

〽酒と聞いては二人とも、元より眼のなき座頭の坊。

こぶ　そりや、何と言はつしやる、わしらが了簡することなら、お前が酒を買はつしやるとか。

でく　どこのお方か知らないが、さりとは眼の明いた御挨拶、お前に免じて、

兩人　了簡しませう。

彦三　すりや了簡して下さるとか、それは早速忝けない。(ト紙入より金を出して一分紙に包み)少しばかりだが、これで歸りにいつぱい呑んで下さりませ。(トでく市に渡す。)

でく　(探り見て)これは〳〵有難うござります。

こぶ　これ〳〵、いくらある〳〵、りやんこか〳〵。

でく　どうして〳〵、額だわ〳〵。

こぶ　なに額だ、どれ〳〵。（ト探り見て）こいつは話せるな。
でく　晩に橋向うへ泊りに行かう。
こぶ　そのこと〳〵。こりやあ旦那有難うござります。
彦三　何の禮に及ぶものか、さあ〳〵早く行かつしやい。
でく　はい〳〵。何とこぶ市、見ず知らずの者に一分出して下さるとは、このやうな旦那はあんまりないの。
こぶ　いゝはりとは、氣の利いた旦那様だ。
〽慾に心のくら闇も、金の光りに座頭の坊、杖突きたてゝ急ぎ行く。（ト兩人花道へはひる。）
〽後を見送る彦三に、文彌はおづ〳〵前へ出で、
文彌　これは〳〵何れの旦那様でござりますか、あなたさまのお陰にて、今の難儀を脱れました。え、有難うござりまする。
彦三　さて〳〵祝儀座頭といふものは、意地の悪い憎いもの、めつたむしやうにお前を打つたが、どこぞ怪我でもしはせなんだか。
文彌　いえ〳〵、どこも何ともござりませぬ。

彦三　いや〳〵、だいぶ身體に泥がついてある。

〽衣類の砂を打拂へば、（ト彦三文彌の砂を拂ひやる。）

文彌　これは憚りでござりまする。もうよろしうござりまする。

彦三　さうしてお前の家は、この近所かえ。

文彌　はい、この向うが私の家でござりまする。

彦三　なるほど、揉療治の札が出てゐますの。

文彌　左樣でござります。いやも穢うはござりますが、ちよつとお立寄り下さりませ、母にお禮を申さしたうござりまする。

彦三　なに、その禮には及ばぬことだが、お前の麁相でないことを、家の衆に話して聞かさう。

文彌　左樣ならお立寄り下さりますか。どれ、御案內いたしませう。

〽勝手覺えし我家の門、文彌は彦三伴ひて、（ト文彌本舞臺へ來りて、）

母さん、今歸りました。

〽聲に姉妹立ちいでゝ、（ト奥よりおきくおいち出來りて）

きく　おゝ文彌戻つたかいの。

いち　兄さん、だいぶおそうござんしたな。
文彌　姉さん、妹、して母さんは。
いち　今愛宕下まで行かしやんしたわいな。
文彌　おゝさうであつたか。さ、旦那様、これへお通り下さりませ。
　　ト　これにて彦三内へはひる。
きく　これはどなた樣でござりますか、ようおいでなされました。
彦三　御免なされませ。（ト上手へ通る。）
　　〽お菊はふつと彦三の、とりなり見ればしとやかに、由ありげなる當世風、てもよい殿御と見とれゐる、文彌はそれと氣も附かず、
　　ト　この内彦三は上手へ住ふ。おきくは彦三を見てうつとりと見とれてゐる。
文彌　（思入あつて、）これ姉さん、あなたにお禮を申して下され。今家へ歸る道にて、四分の衆に突當られ、おのが麁相をこつちへ塗りつけ、市名をとらぬ身を以て何でわしらに突當つたの、詫の仕やうが惡いのと杖をもつて打ち打擲、酷い目に逢ふ所をこの旦那様の御挨拶で、無事に歸つて來ましたほどに、ようお禮を申して下され。

きく　それはまあ、何と御禮を申さうやら。(ト彦三なぢつと見て恥しき思入)あなた、有難うございますわいな。

彦三　いやも、同じ盲人のその中でも、祝儀座頭は撿校や勾當なぞが貸金の催促に歩く故、意地の悪い者とは聞けど、あまりと言へば無理難題、見兼ねてわしが中へはひり、やう〳〵濟ましは濟ましたが、見なさる通り着物もよごれ、綻も切つたれど、必ずこつちの悪いのではない程に、そのことを話さうと、それ故一緒にまゐりました。

きく　それはまあ御親切に、有難うございますわいな。

文彌　これ〳〵姉さん、まだその上に四分の衆に、御酒代迄もあなた樣が、お出しなされて下されました。母さんがお留守故、姉さん、お前二人前、ようお禮を言うて下さりませ。

きく　あい〳〵、お禮が申したうてならぬわいの。これ〳〵おいち、そなたもお禮を申しやいの。

いち　あい〳〵。

きく　重ね〴〵のあなたの御恩、有難うございますわいな。

文彌　有難うございます。

いち　有難うございますわいな。

きく　まだ〳〵そのやうなことでは濟まぬ。あなた有難うござります。
文彌　いやも、有難うござります。
　　トおきく文彌あちこちして、とゞ兩人向ひ合ひ、
兩人　えゝ有難うござります。（ト互ひに辭儀をする、おいち見て、）
いち　兄さん、そりや姉さんぢやわいな。
きく　ほんに、文彌か。
文彌　姉さんであつたか、はゝゝゝゝ。
　〽これも他生の緣ならめ、
彦三　いやも、そのやうに禮を言はれては、逆上せ上つてなりませぬ。
文彌　これおいち、お茶でも上げぬかいの。
いち　あい〳〵。（トおいち茶を汲み、茶臺へ載せて出すを、）
きく　いえ〳〵、私が上げるわいな。（ト茶臺をとつて恥かしさうに、）あなた、お茶を一つお上りなされま
　せいな。
彦三　いやも、必ずかまうて下さりますな。（トこの内文彌あたりを探り、煙草盆を探り取つて、）

文彌　これ〳〵おいち、お煙草盆をあけぬかいの。

いち　おい〳〵。（トおいち取つて出さうとするをおきく引とつて、）

きく　私があげるわいの。はい、お煙草をおあがりなさりませいな。

彥三　えゝも、構うて下さるなといふに。

いち　（おきくに隱して、そつと茶を汲みて、）はい、お茶一つお上りなさりませいな。（ト茶を出す。）

彥三　（取つて、）これは〳〵、まだありますのに。

きく　（また茶を汲んで、）も一つおあがりなさりませいな。

彥三　またお茶でござりますか。もう〳〵このやうには吞めませぬ。

きく　それでは私のは、お厭でござりますか。

彥三　いえ〳〵、さうではなけれども。

文彌　これはしたり姉さん、もうよい加減になされませ。彼方が御迷惑の樣子ぢやわいの。それはさうと旦那樣、母が歸られましたなら是非お禮に上りませうが、あなた樣はどちらさまでございますか、お名前を承りたうござりまする。

彥三　それはいと易いことなれど、なにこれしきの事に、お禮を受ける覺えもなければ。

きく　いえ〳〵あなたのお名前を、わたしもちつと。どうぞ、お聞かせなされて下さりませいな。

彦三　そのやうに言はるゝを、言はぬのも却つていかゞ、わしは本材木町の白木屋の養子、彦三といふ者ぢやが、必ず禮には來て下さるな、却つて迷惑しますわいの。

文彌　すりや、あなたは材木町の、白木屋の若旦那、

きく　彦三樣とおつしやりますか。

ト　おきく索麪櫃の上の手習草紙へ彦三の名を書留める、彦三もおきくへ思入あつて、

彦三　いや先刻からよほどの間、得意まはりがおそなはれば、もうお暇いたしませう。

文彌　でもございませうが今暫時、何はなくともお煮花でも。

彦三　いえ〳〵、先刻から何ばいも〳〵、お茶は御馳走になりました。

きく　左樣ならば、もうお歸りでございますか。

彦三　これを御緣に、この邊へまゐつた折はおたづね申さう。

文彌　どうぞ、お立寄りなされて下さりませ。

ト　彦三立上る、おきく本意なき思入、おいち彦三の草履をなほし、

いち　はい、お履物。

彦三　これは憚り。〔ト彦三門口へ出て、おきくへ思入あつて〕あ、あたら花をば。

きく　え。

彦三　いやさ、話しにその中まゐりませう。

〽心殘して彦三は、見返り〳〵歸り行く、

ト彦三思入あつて行きかけ、振返りおきくと顔見合せ、心を殘して花道へはひる。

〽影見ゆるまで延上り、見送る姉を見えぬ目に、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、

トおきく門口の柱へすがり、うつとりと向うを見送りゐる。おいちは煙草盆茶碗を片附けゐる、文彌探り〳〵上手へ向ひ、

文彌　もし姉さん、信心はしようもの、今日の難儀を彦三樣の、お情故に助かりしも神や佛の皆御利益何と有難いことではござりませぬか。もし姉さん〳〵、なぜ物を言はつしやりませぬ。

いち　もし、姉さんは門口に、今のお方を見送つてゐなさんすわいな。

〽言ふに盲目の勘もよく、扨はと悟る弟に、姉はうつとり心も附かず、

ト此中文彌扨は彦三に心有るかといふ思入、おきくは延上り、影の見えぬ思入にて、

きく　あゝ姿といひ心といひ、てもまあ、よい男ぢやなあ。

文彌　姉さん、よいとは何が。
きく　さあ、よいというたは、お天氣ぢやわいな。
文彌　はあゝ、さうでござりましたか。いや、よいと申せば彦三樣は、聲柄といひ、よい男でござりませうな。
きく　よいとも〳〵、とんと錦繪に畫いた、彦三郎のやうぢやわいの。
文彌　それでお前も。
きく　え。
文彌　いや、彦三郎は贔屓でござりますな。
きく　いくら贔屓に思うたとて、私などが及はぬこと。殊には廓へ。（ト帶の間より書置の文を出し思入。）
文彌　や。（ト合點の行かぬ思入。）
きく　さあ苦勞忘れにせめて一幕、どうぞ見たいものぢやわいな。
〽お菊は胸のもつれ髮かき上作らしほく〳〵と、外面に出て妹を招けばさとくも走り出で、
ト　おきく思入あつて門口へ出て、おいちを招く、おいち心得つか〳〵と門口へ出て、
いち　姉さん、何でござんすえ。

〽言ふをおさへて囁けば、

そんなら、さつきの話しの後を。

きく　内では文彌に憚りあれば、何かは隣りで、妹おじや。(ト兩人下手へはひる。)

〽手を引連れておとゞいは、隣りの家へ忍び行く、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、

文彌　もし姉さん〳〵、あゝ又門口ではないか。

〽言ひつゝ門口探り見て、

こりや門口でもないが、もしや今の彦三樣のあとでも追うて行かれたか。おいちや〳〵、はあゝこれも一緒に行たさうな。あゝ人の心は知れねども、彦三樣には姉さんもどうやら心のある樣子、とはいへあなたは、白木屋の若旦那とあるからは、所詮及ばぬことなれど、男と違つて女の身は氏なうて乘る玉の輿、どういふ緣で末始終願ひの叶ふまいものでもない。私も願ひの官金を早う溜めて官位を取り、最前いぢめた四分の奴等を見返してやりたいものだ。えゝ、見返す眼はなかつたもの、はゝゝゝゝ。どれ、汚れた着物を着替へませうか。

〽勝手覺えし戸棚の内、着替への布子取出す、拍子に落ちる黑羽織。

ト文彌戸棚より布子を出す、この時黑の單羽織落ちる、文彌取上げ、

こりやお師匠樣から貰うた羽織、(ト ちよつといたゞき傍へおき、)いや布子より、今日はまだ、溜つた金を見なかつた。どれ、一寸お目にかゝらうか。

ヘ文彌はあたりに人のなき、折を幸ひ佛壇より官金取出し算へ見る、身の樂しみも寸善尺魔、喜藏小兵衞のわるものが謀し合してあわたゞしく、門の戸開けて駈込む小兵衞、逃がしはせじと喜藏が引附け、

ト 此中文彌思入あつて佛壇より以前の文庫を出し、中より金を出し算へながら嬉しき思入。此中下手より小兵衞、喜藏出來り、門口より窺ひ囁き合ひ、わざとバタ〳〵と跫音をさして、小兵衞内へ逃込むを喜藏引つとらへて、

喜藏　うぬ、逃げるとて逃がさうか。

小兵　どうか御免なされて下さりませ。

ヘ聲にびつくりあたふたと、文庫を羽織でうち隱し、

ト 文彌あわてゝ文庫の蓋をなし、あり合ふ黑の羽織を冠せ、

文彌　おゝ、さういふ聲は、おゝ親父樣ぢやござりませぬか。

小兵　文彌か、面目ない〳〵。

文彌　こりや、どうなされたのでござります。
喜藏　どうも致さぬ、此奴めは身が紙入を抜きとつた。
文彌　えゝ、すりや親父さまには。
喜藏　盗みをひろいだ。
〽聞くに文彌は小兵衛にすがり、
文彌　これ親父様、何か樣子は知らねども、せつぱ詰つたことあつて貧の盗みでござりませうが、情ないことして下されましたなあ。
〽わつとばかりに泣きふせば、小兵衛はわざと哀れげに、
小兵　これ文彌、とんだ權太のせりふだが、常が常故この小兵衛が慾にふけつて盗みしかと、思ふであらうがさうではない、これまで婆アや子供等に苦勞を掛けたも取る年に、眼が覺めて見りや面目なく、せめて我身の言譯に、親子三人喰ふものも喰はずに溜めると噂に聞く、その官金の足しにもと思つた所が出來ぬは金、所詮この身はわるものと名をとつたる上からは、お上のお仕置受けるとも、そなたに官位が取つてやりたく、盗めば直に天の網かゝりや繋がるそなたにまで、苦勞をかけるが面目ない。

文彌　すりや親父様には是までに、うつて替つて私を不便と思うて官金の、足しに盗みをなされしとた、その思召しが千萬兩、もう〳〵金子は入りませぬほどに、盗みし品をお返し申し、お詫申してこの後は、さもしいことはふッつりと、思ひとまつて下さりませ。

〽身をかきむしる後悔も、嘘僞りと文彌は知らず、

〽涙ながらに眞實の異見、してやつたりとうなづき合ひ、

ト文彌小兵衞にすがりいふ。小兵衞、喜藏うまいといふ思入。

小兵　おゝそなたの異見に附いて、盗んだ品はお返し申さう。もしお侍樣、今お聞きなさる通りの譯せつないことでござりますれば、どうぞお許しなされて下さりませ。

喜藏　盗んだ品を返すことなら、悴に免じて許してくれう。

小兵　それは有難うござりまする。サアお受取り下さりませ。

〽怪しの紙入取出せば、喜藏は中を改めて態とびつくり仰天なし、

ト小兵衞古びし紙入を喜藏に渡す、中を改め見て、

喜藏　さあ、ないわ〳〵、金入の中へ入れおいた金子が見えぬが、扨は手早くもこかしをつたな。

小兵　めつさうなことおつしやりませ、こかした覺えはござりませぬ。

喜藏 なに、ないことがあるものか。

文彌 して、その金子はいかほどでござりました。

喜藏 さあ、その金高は、(ト喜藏いくらに言はうといふ思入、小兵衞は二十兩にといへと二本指を出す、喜藏呑込み)
おゝ、入れおいたは二十兩だ。

文彌 えゝ。(トびつくりなす、小兵衞心得思入あつて、)

小兵 いえ／＼、金入の中にござりましたは、百足小判と文錢ばかり、金といつてはござりませぬ。

喜藏 おゝそのほかに封金にて、高野へ納める祠堂金が二十兩入れてあつた。さあ、きり／＼と出してしまへ。

小兵 いくら出せとおつしやつても、盗まぬものは出されませぬ。

喜藏 うぬ盗人たけ／＼しいと、出さぬといつてその分におかうか。

〽我手の平を打叩き、音を聞かする打擲に、小兵衞は苦しき聲を出し、

ト喜藏自分の手をたゝき、小兵衞を打つ體に見する。小兵衞打たれる思入にて、

小兵 あゝ痛い／＼、さう打たれては死にます／＼。どうぞ堪忍して下さりませ。

喜藏 そんなら金を出してしまへ。

小兵　それぢやといふて。

喜藏　出さずば、うぬ、まッ二つに。

ト鯉口ならせば文彌はおどろき、

文彌　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ。（ト喜藏を留め、）これ親父樣、命に替へる寶はない、取つたら取つたと詫言して、早う金をお出しなされませ。

小兵　さあ、取つたものなら出しませうが、元より取らぬ二十兩、達つて取つたとおつしやるなら、此身のめんばれ、すつぱりと、切つて疑ひお晴らし下され。

喜藏　むゝ、よい覺悟だ、どれ眞二つにいたしてくれう。（ト喜藏又鍔音をさせる。）

文彌　あゝこれ、お侍樣、必ず早まつて下さりますな、私には義理ある親、殺さしましては。

ト文彌喜藏を留める。兩人うまいといふこなしあつて、

喜藏　むゝ、義理ある親故殺しては濟まぬとあるなら待つてもやらうが、取られし金はいかゞ致す。

文彌　その二十兩は私から、あなたへお返し申しませう。

喜藏　取られし金さへ返すことなら、此の方とて事は好まぬ。さあ、その金子を受取らう。

文彌　たゞ今差上げますでござりまする。（ト文彌思入あつて、）もし旦那樣え、あなた樣へ私がお願ひが

ございます、と申すは外でもございませぬ、唯今上げます二十兩の内五兩はども足りますまいがその金とてもおろそかに溜めた金ではございませぬ。目の不自由な私に官位が取つてやりたいと、お年寄られし母さまがすゝぎ洗濯縫仕事、その片手間に賃綿や草双紙の綴さへも廻らぬ絲のきしみがち、見兼ねて姉が茶見世へ出て、一錢二錢の合力受け語る哀れな淨瑠璃も、身につまさるゝ三の切、これもみんな我身故と、眼は見えねども心に見え、こぼるゝ涙呑込みて、吹く笛の音もかれ〴〵に、苦勞身にしむ秋の夜の風も厭はず療治にあるき、親子三人夜の目も寐ず稼ぎ溜めても朝夕の煙の代に半なり、殘るは僅か端錢、昨日は五十今日は百微塵積つて山とやら、やうやう溜めた十五兩、(ト文庫より錢と金を出し、布子と羽織も列べて)足らぬところは私が着替布子に師匠から貰うた黑の夏羽織、薄い世帶のその中で、年月溜めた此の金を親の爲とて一時に、出すを不便と思召し、これにてどうぞ親父さまの命を助けて下さりませ。もし、お願ひでござりまする。

〽この年月の艱難も水の哀れや官金に、布子を添へてふし拜む文彌が心ぞいぢらしゝ、

ト文彌布子の上へ金をおき喜藏を拜む。兩人うなづきて、

喜藏　木綿布子にべんべら羽織、五兩の質には高いものだが、そちが心が不便故、これで命は助けてく

れる。

文彌　すりやお助けなされて下さりますか、ちえゝ有難うござりまする。

〽騙らるゝとも知らずして、悦ぶ我子を尻目にかけ、小兵衛はハッと空涙

ト文彌悦ぶ。喜藏金をとつて懐へ入れる。

小兵　はあゝ。（ト泣く眞似をして、）あゝ世の中におぬしのやうな、孝行な者がまたとあらうか、親甲斐もないこの小兵衛を親と思うてこの年月、艱難苦勞して溜めた金もをしまず着類まで、添へて助けてくれるとは、子とは思はぬこれ文彌、そなたの眼には見えまいが、おりや手を合してをがんでゐるわいの。（ト文彌の鼻の先へ足を出し、をがむ。）

文彌　あゝ勿體ないことおつしやりませ。親のことを子がするはこりや世間の當り前、それを禮をおつしやつては、却て罰があたりまする。

小兵　なんの、これが罰どころか、をがまずにはゐられぬわいの。

ト尻を捲つて文彌の鼻の先へ出す。文彌拂ひのけようとして尻を探る。小兵衛はおどろき飛退く。

喜藏　あゝ盜みをひろぐ人でなしの、子には稀なる親孝行、五兩足らぬもこのまゝに、許してくれるも子のお陰。（ト喜藏門口へ行く。）

小兵　その子の爲めと盜んだる、紙入故に目串がぬけず、騙りとらるゝ二十兩。

喜藏　どうしたとゝ（トきつと言ふ、文彌眞中にて喜藏を留め、）

文彌　あもし、何事も私を不便と思うて。

喜藏　むゝ、そちに免じて許してくれる。

文彌　有難うござりまする。

喜藏　あゝ、命冥加な親仁だなあ。

〽命冥加と言ひ捨て逃足早き門の口、小兵衞は衣類を小脇に抱へ、拔足さし足立出て、

ト喜藏門口へ出る。小兵衞布子と羽織を引抱へ門口へ出て、

小兵　喜藏さん、うまく行きやした。

喜藏　さうよ、思つたよりうまく行つた。

小兵　然し、高野へ納める祠堂金とは、あんまりまるむさであつた。

喜藏　何だ、布子と羽織を持つて來たのか、可愛さうにおいてくればいゝに。

小兵　どうで官金を取つたからは、もう家へは歸らねえ。四百がものでもとらねえのは損だ。

喜藏　いや、慾どうしい奴だ。

小兵　はて、年を取ると誰でもさうだ。

〽始終立聞く文彌はびつくり、（ト文彌何心なく門口にて二人の話を聞きびつくりして、）

文彌　扨は騙りであつたるか、やゝゝゝゝ。

〽尻邊にどうと倒るゝ文彌、聲におどろき兩人は、後をも見ずに走り行く。

ト文彌はあきれてどうとなる。外の二人は驚き尻を端折り逸散に花道へはひる。文彌は起上りて、

あゝこれ、待つて下され、親父さま。

〽驅出す拍子門口の柱へばつたり仰向に、はずみを打つて倒れしが、起上つて齒嚙みをなし、

ト文彌つか〳〵と行き、門口へ突きあたり倒れ、起上つて悔しき思入

え丶、所詮追ひかけ行つたとて、眼の見えぬ悲しさは鼻の先にゐられても、それと知れぬ身の因果、いかになさぬ仲ぢやとて、あまりと言へば情ない、かういふことゝ知らぬ故、母さまや姉さまの、いくせの思ひでやう〳〵と溜めて下された十五兩、斷りなしに遣うては濟まぬ事と思うたれど、義理ある親の命づく、どうも子として見てゐられず、よしや後にて母樣にお叱り受けなば其時は、我身の命を捨てゝもと覺悟極めて遣ひし金、あゝ眼かいも見えぬ者をだまし、騙りとるとは親父樣、お前は鬼か蛇かいの。

〽身をかきむしる悔み泣き、かくとは知らず立歸る姉は不思議と門口より、内の樣子を窺ひゐる、文彌はやう〳〵泣く眼を拭ひ、

ト此中文彌よろしく思入。下手より以前のおきく、おいち出來り、門口にて内の樣子を窺ひゐる。

あゝ此の事を母さまや姉さまに言うたなら、何故父樣のいふことを眞實にしたと仰しやらうが。よい衆の身の上なら、僅な金であらうけれど、その日暮しの身の上では、又と出來よう當もなし親兄弟の丹精を無足にした申譯、口でまだ〳〵言はうより、いつそ淵川へでも身を沈め、さうぢやさうぢや。

〽けつさうかへて駈出るを、おきくは門の戸開けて入り、（トおきく此時内へ入りて、）

きく　いや、その覺悟には及ばぬわいの。

文彌　や、お前は姉さん。（トびつくりなし逃げようとする。）

きく　あゝこれ逃げるに及ばぬ、門口で樣子はあらまし聞きましたが、必ずきな〳〵思やんな。父樣に騙られしその金よりも輪をかけて、たんとお金ができたほどに、死なうなどゝいふ惡い了簡出しやんなや。

文彌　それぢやというて母樣や、お前が折角溜めた金、どうもわしや言譯がない。

いち　もし兄さん、姉さんが又澤山お金を上げると言はしやんす故、そのやうなこと言うて下さんすな。私や悲しうなつてならぬわいな。
〽涙ぐめば、
文彌　おゝよう言うてくれた、嬉しいぞよ。とはいへ私に姉さんが、今の金に輪をかけて下さるとは、そりや僞り、私に力をおとさすまいため。
きく　いえ〳〵、僞りではさら〳〵ない、今に百兩渡さうわいの。
文彌　えゝ、（トびつくりなし、）そりやまあどうしてその金が。
きく　さあ、まだそなたには話さねど、さるお屋敷の奧樣へ拙い藝の淨瑠璃がお耳に入つて所望され、今日お屋敷へ上る積り、貧しい暮しに支度もなかろと、衣類はもとよりさし物まで、皆お上から下されしまだその上にお手當とて、金子百兩下さる約束、今に駕籠にてお屋敷から、迎ひの衆が來る筈ぢやわいの。
文彌　そりやまあほんのことでござりますか、これといふのも日頃から、親を大事兄弟を憐れんで下さるお心故、天道樣の皆お惠み、そのあまりにて此身の仕合せ、えゝ有難うござりまする。
〽歎きの內の悅びも裏表なる姉弟、嬉しいに附け悲しいに附けて淚ぞさきだてり。折からこ

こへ吉原から駕籠をつらせて佐野松屋、
　　ト花道より佐野松屋清兵衛、女衒の源六附添ひ、後より駕籠舁四手駕籠を擔ぎ出來り、

源六　はい、御免なさいまし。

清六　あゝこれ源六、屋敷から來た積りぢやあないか。

源六　ほんに、さうであつた。（ト大きな聲して、）頼まう〳〵。

いち　あい、どちらからおいでになりました。（ト門口を明ける。）

源六　私かえ、身共は、屋敷から迎ひに參つた。

きく　（門口へ出て來て、）これは〳〵むさくろしい所へ、ようおいで下されました。さあ〳〵あれへお通り下さりませいな。

清兵　左樣なら御免なせえ。（ト言ひかけるを源六袖を引く。）いや、罷り通る、許しやれ。
　　ト兩人おきくと頷き合ひ上手へ通る。文彌思入あつて、

文彌　もし、姉さん、どなた樣がおいでなされました。

きく　今言うたお屋敷から、迎ひにおいでなされたのぢやわいの。

文彌　それはまあようおいで下されました、私は文彌と申す盲人にて、即ちお菊の弟にござります。

清兵（侍の思入にて、）すりや、その方がお菊殿の舎弟でござるか、以後は入魂に頼みます。
源六　もし旦那、上手さうな按摩さんだ。いや、座頭殿でござる。
きく　これおいち、お茶をあげぬかいの。
いち　あいあい。（ト茶を汲み、兩人へ出す。）
清兵　いや、かまやるなかまやるな。
文彌　して姉樣が御奉公に出ますのは、どなた樣のお屋敷でござりますな。
源六　あい、奉公に出るのは吉原さ。
文彌　えゝ。
清兵　あいや、吉原の近所にて、えゝ、見返り播磨守と申す大名でござる。
文彌　へゝえ、吉原の近所に、そのやうなお屋敷がござりましたかな。
源六　あるともあるとも、吉原の近所故、世間では吉原御殿と申すわ。
清兵　而も、尾州侯の五軒長屋に習ひ、五十軒などゝいふがあれば、
源六　また、世繼長屋、稻毛長屋などゝいふお長屋もあるて。
文彌　へゝえ、左樣でござりますか、してあなた方は。

清兵　私でござるか。いや、身共でござるか、身共は稲荷九郎助と申す奥用人でござる。
源六　拙者は朝日如來次と申す、御錠口番でござる。
文彌　これからは私もお屋敷へ出ますれば、御懇親にお願ひ申しまする。
源六　ときに姐さん。いやお菊どの、遠方のことなれば、支度を早くなされ。即ちこれは上より下さる裲襠小袖、（ト手拭をとつて出す。）
きく　これは／＼結構な品を、有難う頂戴いたしますわいな。
清兵　まづ何は兎もあれ、もの丶取極なれば、請狀を致すでござらう。（ト懐より年季證文を出す。）
源六　文彌殿は名前主のことなれば、印形を出さつしやい。
文彌　かしこまりました。（ト文庫の內より印形を出し渡す。清兵衞證文へ判を押し、）
清兵　文言はよむに及ばぬ、お定りの年季證文いや奉公人請狀、約束の手當金即ち百兩渡し申す。
ト胴巻より百兩包みを出し、おきくに渡す。
きく　これは有難うござります。さあ文彌、これはそなたへ。（ト百兩を文彌に渡す。）
文彌　や、こりや姉さん、小判でござりますな、生れて始めて百兩といふ金を持つて見ました。えゝ、有難うござりまする、（ト金を頂き、）もし姉さん、何はなくともお前の身祝ひ、お二人樣へ御酒一つ。

きく　それも調へておいたわいの。これおいち、その鯛の鹽燒をこゝへ持つて來やいの。

トおきくけたおりくの買つて來た、味噌漉の中の肴へ思入する。

いち　あい、このぬたでござんすかえ。

きく　あ、それではない、こちらぢやわいの。（トおいちに呑み込ませる。）

いち　あい／＼。

ト呑込み、八寸の膳の上へぬたの小皿を載せ出す　おきく、五合徳利の酒を燗徳利へうつし、土瓶へ入れる。源六思入あつて、

源六　いや、これは御丁寧な、御無用になさればよいに。九郎助殿御覽なされ、この鯛の鹽燒は眼の下一尺八寸もござりませう。

清兵　いかさま、これは見事なことだ。

源六　こちらは何だ、ひらめの刺身に口取物、臺重は鮑に初茸、此又鮭の照燒は唾のたまるほどうまさうだ。

清兵　こゝらでこんな料理をするは、神明の車屋であらう。これは／＼大そうな御馳走だ。

きく　（徳利を出し、）さあ、お燗がよろしうござります。お一つお上り下さりませ。

清兵　どれ、お辭儀なしに御馳走になりませう。
きく　おいち、お酌をしやいなう。
いち　あい〳〵。（トおいち酌をする、兩人よろしく呑む。）
文彌　お口には合ひますまいが、澤山召上つて下さりませ。
清兵　いやも、御酒と申しお肴と申し、申分はござらぬ。
源六　ちよつとお近附にけんじ天皇と致さう、いや、仕らう。（ト文彌に猪口をさす。）
文彌　私は一向不調法でござります。（トよろしくのんで、）是は御返盃にいたしまする。（ト源六へさし、）
　御用人樣へ伺ひまするが、姉はお屋敷へ上りまして、何御奉公を勤めまする。
清兵　おゝ、姉御はお仕立がよい故、ぶッつけ仲の町へ出す積りだ。
文彌　何とおつしやります。
清兵　いや、仲の町ではない、中奥へ出す積りだ。
文彌　へい、お側でござりますか。
源六　左樣さ、突出しの時には、蕎麥も配るのさ。
文彌　いづれ其中母と一緒に、御禮ながら上りませうが、お年寄樣は何とおつしやいます。

清兵　あゝ、家での年寄は遣手のお爪。
文彌　へゝえ、お爪さまとおつしやりますか。
源六　いや／＼お年寄とはお局の事、おゝお局ならば、岩藤どのと言ひます。
文彌　左樣でござりますか、して御中老樣は。
清兵　中老はおますにおきん。
源六　あ、もし、何をおつしやります。中老は尾上どのでござります。
文彌　それでは、芝居でいたします、鏡山のやうなお名でござりますな。
源六　さあ、お局と中老は、何處の屋敷でも同じ名でござる。
文彌　左樣でござりまするか。（ト此中おきくはら／＼と思入あつて、）
きく　まあお話は跡にして、も一つお上りなされませいな。
清兵　いや／＼先刻から數獻過し、殊のほか酩酊いたしました。
源六　身共は殊に肴をあらし、ゲツプウの出るやうだ。
清兵　もはや夕景におもむけば、支度がよくば同道いたさう。
きく　はい、もうよろしうござりますわいな。

源六　（思入あつて、）いや、これは見事々々、今までとはうつて變い、御殿模樣の鹿の子入り、やの字姿は又格別だ。

〽聞くに文彌は、ぞく／＼悦び、

文彌　あゝその見事な御殿風を、一目なりとも見たいものぢや、これおいち嘸やそなたは羨しからう。

いち　いえ／＼私や、（ト言ひかけるをおきく目で押へる、）あい、姉さんのあの裝を、お前にちよつと見せたいわいの。

文彌　あゝ見たうて／＼ならねども、見ることならぬ因果の身、せめてのことに探つてなりと。

〽立寄る文彌にお菊はびつくり、四邊見まはし佛壇の打敷取つて膝に當て、

ト文彌探り寄る、おきくびつくりして、佛壇の以前の袱紗をとつて膝にあて、

きく　これ、こゝを探つて見やいの。

〽手を持ち添へて膝の上、袱紗の模樣をさぐらすれば、

文彌　（思入あつて、）これはまあ、結構さうな縫模樣、一目なりとも見たいものだ。（ト文彌膝の所に顔を寄せて、）もし姉さん、この小袖は抹香の匂ひがしますの。

きく　え。こりや抹香ぢやない、匂ひ袋ぢやわいの。

〽弟をくるめる詞のあや、傍でおふ〳〵くるわの亭主、

清兵　さあ〳〵太う酩酊致したれば、日の暮れぬ中に同道致さう。

きく　はい、唯今參りまするほどに、暫く門口でお待ち下さりませいな。

清兵　然らば御馳走の醉ざまし、風に吹かれて相待ち申さう。

源六　後のいつぱいが利いたかして、ひよろ〳〵と致すやうだ。

〽わずかな酒にひよろ〳〵と、醉うた裝して門の外、後におきくはしよんぼりと、せき來る涙呑込みて、

きく　これ文彌、わしが御奉公に出るからは、母樣のお力はおいちが年が行かぬ故、眼は見えいでもそなたばかり、どうぞ今の百兩で官位をとつて、これまでにいぢめた衆を見返した上、言ふまではなけれども、お年寄られた母さんを、大事にかけてたもいの。

文彌　そりやもうお前がない後は、眼は見えいでも母樣の、お世話はわしがしますほどに、必ず案じて下さるな。

きく　就いてはおいちも母さんや、この兄さんに世話やかさず、素直に御用をたしませうぞや。

いち　あい、母さんや兄さんの御用は素直にいたしますほどに、侍になつたら腰折の人形買うて下さんせ。

きく　おゝ、買うてやりませうとも〳〵。春にならずと此の頃に、よいのを買うて届けるぞや。
いち　嬉しうござんす。
きく　そんなら私やもう行きますぞ。
文彌　あ、これ、一目母さんに、その裝を見せて行かしやんせ。
きく　豫て母さんは御存じ故、逢はいでもだいじない。殊には段々取る年に涙脆うなつた故、定めて家にゐやしやんしたら、生別れでもするやうに、（トホロリして、）結句逢はぬがよいわいの。
文彌　いかさま、こゝに母さんがゐられたことなら、泣かつしやろ、私も悲しうて、名殘りをしうござりまする。

〽文彌が泣けば妹も、共に泣く音の哀れさを、身に知る雨の袖袂、

ト文彌おいちしく〳〵と泣く。おきくも名殘をしき思入にて、

きく　あ、もう〳〵、そのやうなこと言うてくりやんな、心が殘つて惡いわいの。どれ、日の暮れぬ内行きませう。
文彌　あゝこれ姉さん、お前は常に癪持なれば、お師匠樣に貰うたる熊膽入りのこの丸藥。（ト文庫より藥包みを取出し、）これをお前に上げるほどに、形見と思うて下さんせ。（トおきくに渡す。）

きく　あゝこれ、形見とは氣にかゝる。

文彌　おいや、形見ではない、そりや餞別。

〽何の心も附かずして、門出を祝ふ餞別を形見と言ひし一言は、後にて思ひ知られける。

ト此中おきく心にかゝる思入にて門口へ出る。おいちつかつかと行つて、

いち　姉さん、もう行かしやんすか。（ト袖にすがる。）

きく　さつきのことを頼むぞよ。

いち　あい。はあゝゝゝ。（ト泣くを、）

きく　あ、これ。（ト目で押へる、おいち口へ袖をあてる。おきく清兵衛に向つて、）これはお待遠でござりましたわいな。

清兵　いざ、お支度がよくは、それ、鋲打これへ。

源六　はあ。

〽氣轉四つ手の駕籠の垂れ、上がる間おそしと乘りうつれば、

トおきく心の急く思入にて駕籠に乘る、文彌門口へ送り出て來て、

文彌　そんなら姉さん、御機嫌よろしう。

きく　そなたも達者で。
文彌　あゝ、どうやら死別れでもするやうに。
いち　私も悲しうござんすわいな。
清兵　あゝ、これ、目出度い門出に。
源六　涙は不吉。
きく　弟、さらば。（ト駕籠の垂をばらりとおろす。）
清兵　それ、乗物上げい。
源六　はあゝ。
　へはツとばかりにかき上ぐる、駕籠におきくは忍び泣き、廓をさして急ぎ行く。
　ト若い者駕籠を舁上げ、清兵衛、源六せり立て花道へはひる。
いち　おゝ、もう表が暗うなつた。どれ、灯しの支度をしませうか。
　へとつかはおいちが奥へ行く、後に文彌は金おしいたゞき、
文彌　あゝ、姉さんのお陰にて、思ひがけないこの百兩、母さんにお目にかけなば、嘸お悦びなさることよであらう。早うお歸りなさればよいに。

〽待つ間ほどなく母親が、歸る日暮の急ぎ足、（ト花道より以前のおりく足早に出來り）

りく　やれ〳〵日が短かうなつた。今しがた七つを打つたに、もう足元が暗うなつた。（ト言ひながら門口へ來り、）あい、今戻つたわいの。（ト内へはひる。）

文彌　や、母さんお歸りなされましたか、お待申してをりました。

りく　待つてゐたとは、何ぞ用でも。

文彌　さあ、外のことでもござりませぬが、姉さんがお屋敷へ、御奉公においでなされました。

りく　なに、おきくがお屋敷へ奉公に出た。

文彌　お前さまも、御存じぢやござりませぬか。

りく　いや〳〵そのやうな事は知らぬ。今聞くが始めてぢやわいの。

文彌　はて、合點の行かぬ、御存じのやうに言うてゞあつたが。

りく　して、その先は何樣ぢや。

文彌　さあ、吉原の近所にて、見返り播磨守樣といふお屋敷ぢやわいの。

りく　はて、そのやうなお屋敷は、聞いたこともないわいの。

文彌　それでも先のお屋敷から、立派な刺繡のお小袖やお手當金も百兩下され、而も鋲打の乘物でお迎

ひにおいでなされました。噓でない證據は、此の金。(ト文彌金を出し、おりくに渡す。)

りく　刺繡の小袖で鋲打に、乘るのは立派な御奉公、殊には大まい百兩のお手當までも下さるとは、願うてもない身の仕合せ、それを私に隱すは不思議、こりや、たゞ事ではないわいの。

文彌　えゝ。(トびつくりなす。)

りく　して〳〵證文へ、判でもしやつたか。

文彌　はい、請狀とやらへ判をしてやりました。

りく　その證文の文言は。

文彌　お定まりぢやと申します故、つい承はらずにしまひました。

りく　えゝ目かいも見えぬ身を以て、譯も聞かずに證文へ、何故印形をおしてやつた。母が歸つた上の事と言ひ延べてはおかなんだ。お屋敷なればよけれども、どんな所へおきくをば、連れて行たやら知れぬわいの。

文彌　すりや、お屋敷ではなかつたか、ほい。

〽はつとばかりに氣も半亂、どうとなりしが起上り、

程は行くまい、後おひかけて。(ト行かうとするを、おりく留めて、)

りく　えゝ、とりのぼせて、これ文彌、目も見えいで何處をあてゝ。

文彌　それおやといふて。

りく　はて、待てと言はゞ待ちやいなう。

〽爭ふ中へ妹おいち、文たづさへて立ちへだて、

ト文彌行かうとするをおりく留める。此の時奥よりおいち文を持出て、兩人を留めて、

いち　あゝもし、母さんも兄さんも、必ずお案じなされますな、姉さんの行先は、私が知つてゐますわいな。

文彌　おゝおいち、そなたが知つて居やるとか。

りく　して、行く先は何處なるか。

兩人　早う言うて聞かしやいの。

いち　あい、姉さんの行先は、このお文に書いてありますわいな。

〽差出す文を文彌は取上げ、

文彌　えゝ、この文を讀んだなら、定めて樣子が分からうが、何をいうても見えぬ此眼。

りく　眼は見えながらこの母は、皆目讀めぬ盲目同然。

文彌　こりやどうしたら、
兩人　よからうぞいの。
　ヘ途方に暮るれば、おいちはさかしく、
いち　もし母さん、私が讀んで上げませう。
文彌　あゝさうぢや、そちばかりは眼が見える。早う讀んで聞かしやいの。
りく　どれ、灯りを點けてやらうわいの。
　ヘ母はこちくへ火打箱、燈火つくれば書置を、おいちは開き聲張上げ、
いち　「一筆書き殘しまゐらせ候、左候へば弟文彌事幼き時に我身が背負ひ縁より落し石にて打ち、終に三つの年よりして盲目となり候故、物の色さへ知らぬ不便さ。成人するに從がつて過越し方を思ひ出し、盲目となせし身の詫に、せめて官金調へて行末樂に致させ度く、御前樣にも御苦勞かけ、丹精いたし候へども、はかぐしく調ひ申さず、いかゞはせんと思ふ折節、今日愛宕下にて御祝儀な下されし御方は、吉原の遊女屋にて佐野松屋の旦那樣故、切ない譯をお話し申し、百兩に此身をば苦界へ沈めまゐらせ、何卒この金子にて、文彌に官位を御取り下され候やう、くれぐも願ひ上げまゐらせたゞ心にかゝり候は眼の不自由な弟に、まだ年行かぬ妹を殘し、御前樣にお世話かけ候段、

それのみ心ぐるしく存じ〻〻、まだ〳〵申し置き度きこと御座候へども、はかどらぬ筆に書殘し〻〻あら〳〵目出度くかしく、御母樣へきくより。」

ト傍の二人は呆れはて、

文彌　扨は屋敷へ奉公と、僞り言うて姉さんには、苦界へその身を沈められしか。

りく　おゝ、出かしたとは言ひながら、なぜ一言此の母に、相談かけてくれぬぞい。

文彌　おゝさうぢや、この金持つて姉さんを廓から取り返さん。（ト行かうとするをおりく留めて、）

りく　あゝこれ、そなたは知るまいが、印形なした上からは、たとへその金倍にしても返さぬのが廓の法。

文彌　すりやもう取返すことはならざるか。目が見えぬばつかりに、現在姉を廓の勤め。あゝ、この眼が明きたい〳〵。

ト悔み歎けば母親が、（ト文彌眼を明きたき思入、おりくこなしあつて、）

りく　その明きたがる兩眼を、つぶせし姉が言譯なれば、志しを無足にせず、官位を取るが姉への孝行。

文彌　とは言へ、座頭の官位さへ、百五十兩入るとの事。

りく　その足らずめは京都へ上り、そなたの師匠一老さまへ、お願ひ申さばかなふは必定。

文彌　そんなら、これから京都へ上り、あ、その行く道の路用の金が。(ト當惑の思入。)

りく　それぞ幸ひ、溜めたる金を。

文彌　さあ、その金は親父さまに、騙られましてござりまする。

りく　えゝ、すりや、あの人でなしに、やゝゝゝ。

〽聞いてびつくり母親が、呆れ果てたる表の方、

ト此中下手より以前の才三郎出で、門口にて窺ひゐて、此時、

才三　いや、その道中の路用の金は、わしがお貸し申しませう。

〽言ひつゝはひる才三を見るより、(トおいち見て、)

いち　や、そなたはさつきの才三さま。

文彌　縁もゆかりもない者に。

りく　路用の金を貸さうとは。

才三　唯は貸さぬ、質がとりたい。

文彌　そりや、いかなる品を。

才三　あの佛壇にかけてある、鴛鴦切の袱紗が望み。

りく　すりや、あの袱紗を。

才三　五兩の質に預かりたい。

〽金とりだせば母親が、袱紗をとつて才三に渡し、

ト才三郎懐ろより金を出しおりくの前へおく、おりく佛壇の袱紗をとり、才三郎に渡して、

りく　はて、物ずきな、何で袱紗を。

才三　望むはこつちの詮議の當。

文彌　え。

才三　さあ、まとまらずともその金を、路用になして、少しも早く。

文彌　え丶有難うござりまする。

〽え丶有難やと親と子が、勇み悦ぶ表口、隙もあらばと窺ふ小兵衛、おいちはそれと目早く見附け、

ト此内下手より以前の小兵衛うそ／＼と出來り、門口を覗く。おいち見て、

いち　あれ、父さんが。

文彌　えゝ。（トおどろく拍子に、懐中より金包をぱつたり落す。）

小兵　落ちたはまさしく。

ト小兵衛つか〳〵とはひる。文彌金の上へぺつたりと坐り、

文彌　いえ、何でもござりませぬ。（ト才三郎小兵衛を見て、）

才三　寶の盗賊。（ト捉へようとする。）

小兵　南無三。（ト此時おいち行燈を吹消す。）

〽闇はあやなし、

ト才三郎小兵衛にかゝるを、おりく支へる。小兵衛は門口を出る、文彌探り寄つて、門口をしやんと締め、ホツト思入。双方よろしく、三重、時の鐘にて、

幕

三幕目

鞠子宿藤屋の場

宇都谷峠殺の場

〔役名＝＝伊丹屋十兵衛、座頭文彌、提婆の仁三、薩摩侍鹿子島新吾、大阪者太郎兵衛、日光の百姓

出津村の勘太、江戸ッ兒から熊、藤屋の亭主四郎兵衞、江戸ッ兒消炭の鍋、どんどろ坂の兵藏、藤屋の女房おむら、同下女おいね、同おせん等□

（藤屋店頭の場）　本舞臺三間の間常足の二重、正面藤屋といふ紺の長暖簾、上手間中戸の戸棚、下手茶壁、講中の掛札。上の方一間海鼠壁、丸の内に御泊宿鞠子宿藤屋と記しあり。下の方一間出格子、總て東海道鞠子宿藤屋店頭の體。二重に藤屋の女房おむら、掛硯りを控へ帳面を附けてゐる。下女二人は留女にて、一人の田舍道者を引張りゐる見得にて幕明く。

いね　もし、あなた、お泊りぢやありませんか。

せん　奥座敷が明いてござります。

兩人　さあ、お泊りなされませな。

道者　こりやお美しい姐え達、喰ひ物はどうでもいゝが、晩にお酌をしてくれるか。

せん　いえ／＼鞠子の宿で名代の藤屋、そのやうなことはいたしませぬわいな。

いね　女郎衆なら呼んであげますぞえ。

道者　馬鹿なことを言つたものだ。長旅をするものが、そんな事をしてなるものか。

いね　左樣なら外へ行つて、お泊りなされませいな。

道者　えゝ野暮な奴だな。（ト下女二人の背中をたゝき、上手へはひる。）
せん　えゝ、好かない道者面だよ。
むら　おいねや、奥の八疊は江戸のお二人連と、大阪のお方ばかりかえ。
いね　いえ〳〵京のお方も、薩州のお侍樣も、御一緒でござりますわいな。
せん　それにまだ年の若い按摩さんが、おいでなさんすわいな。
むら　江戸のお方は勇み衆故、間違ひのできぬやう、時々座敷を氣をつけてくれいへ。
いね　そりやもう如在はござんせぬ。今も見舞うてまゐりましたわいな。
ト馬士唄になり、花道より百姓勘太、草鞋菅笠にて小さな包を背負ひ出來る。
せん　あなたお泊りぢやござりませぬか。（ト袖を引く。）
勘太　夜通し歩くわけにもいかねえから、泊りは泊るが定宿がある、駄目なこんだ引かつしやんな。
せん　どちらが御定宿でござりますか、手前は鞠子の藤屋でござります。
いね　お風呂も丁度わいてなります、お泊りなされませいな。
勘太　えゝ此の女どもは油斷のなんねえ、おれが定宿がその藤屋だ、どうしてそれを知りをつた。おいを泊めてえと思つて、鞠子の宿の藤屋でござるなどゝ、其の手は喰はない、おいたがえゝ。

いね　何で嘘を吐きませうぞいな。あれ御覽なさいまし、鞠子宿藤屋と壁に記してござりますわいな。

勘太（壁をよく／＼見て、）はあ、そんならこゝが名代の藤屋かな。實は定宿でもなんでもないが、後の立場で敎はつて來たのだ。

むら　それはようおいでなされました。まあおかけなさりませいなあ。これお茶を持つて來なよ。

ト奥にて「あい」と返事して、小女盆へ茶をのせ持來り、おせん盥へ水を取る。

小女　お茶をおあがりなされませ。

むら　お荷物はこちらでお預かり申しませう。

いね　お笠はこれへかけておきますぞえ。

せん　おみ足をお出しなされませ。

むら　直にお風呂を召しますか。

いね　御飯を直に召上りますか。（ト皆々口やかましくいふ。）

勘太（耳をおさへて、）あゝこれ／＼、さうべちやくちやと言はれては、逆上せてなんねえ。どうぞ靜かにして下せえ。ときに旅籠錢はいくらだ。

むら　はい、東海道はお定り、二百文でござりますわいなあ。

勘太　書辨當はつきますかね。
むら　お望みなら差上げませうわいな。
勘太　大きさはどの位だな。
いね　どのやうにでも、結んで上げませうわいな。
勘太　梅干と澤庵をいれて、尺二寸廻り位に結んで下せえ。
せん　かしこまりましたわいな。
勘太　それ極めたら草鞋を脱ぐべい。（ト草鞋を脱ぎ足を洗ひながら、）間違はぬやうにして下せえ。
せん　いえ／＼、間違ひはいたしませぬわいな。
勘太　好いのなら、間違つてもだいじない。
小女　この人は慾ばつた人だ。
むら　これはしたり、お客樣に向つてどうしたものだ。さあ、あなた奥へおいでなさいまし。
勘太　どりやお世話になり申さう。
むら　これ、御案内申しや。
小女　あい／＼。

ト小女先に立ち勘太奥へはひる。と花道より十兵衞脚絆草鞋一本差し、合羽をつけし割掛の荷を擔ぎ菅笠を手に持ち出來りて、

十兵　やれ／＼日が短くなつた。今日は府中まで行けるだらうと思つたが、鞠子泊りで丁度好い。

いね　（十兵衞の近寄るのを見て、）もし、お泊りぢやござりませぬか。

十兵　あい、泊るのだが、一人旅だがいゝかえ。

いね　あなた方なら、よろしうござりますとも。

せん　さあ、おあがりなさりませいな。

十兵　それぢやあお世話になりませうか。

いね　お荷物をこちらへ遣はされませ。

せん　お泊りでござりますよ。

トおむら出て、十兵衞の荷物をおいねより受取る、十兵衞腰をかける。おせん盥を持來り、草鞋をとり十兵衞の足を洗ふ、奥より小女茶を汲んで來る。

小女　はい、お茶をおあがりなさりませ。

十兵　あい、おかたじけ。（ト取つて呑む。）

むら　今日はお天氣でよろしうございましたが、どちらからお立でございました。
十兵　掛川から立ちましたが、大きにおそくなりました。
むら　いえ〱それではお早うございましたわいな、お客様にお氣の毒でございますが、今晩はお泊りが多うございまして、お座敷が込み合ひます故、お合宿にお願ひ申したうございますわいな。
十兵　そりやあだいじございませぬ。私も一人だから、賑やかなはうがよろしうございます。
ト足を洗ひ上る。
むら　お一人故、お大事な品はお預かり申しませうわいな。
十兵　なに荷物の中は着替ばかり、お預け申すほどの品でもございませぬ。
いね　お風呂がよろしうございますが、直におめしなさいますか。
十兵　ちと風氣故、湯は止しませう。
いね　左樣なら、お座敷へ御案内致しませうわいな。
十兵　どれ、草臥を休めようか。
三人　さあ、おいでなされませいな。
ト宿場の騷ぎ唄にて、この道具廻る。

（蔀屋座敷の場）——本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、上の方一間次の間仕切りの襖、下の方一面に障子立きり、角行燈をおいてある。こゝにがら熊、消炭の龜江戸ッ兒の勇み裝にて、しがみ火鉢にあたり茶を呑みゐる。上手に薩摩侍新吾大髻の頭にて、懷中鏡にて鬚を拔きゐる。此の脇に大阪者太郎兵衛小さな板にて底まめの薬をねつてゐる。下手に勘太煙草を呑み、この傍にどんどろ坂の兵藏江戸近在の若い者の打扮にて、小楊枝を遣ひゐる。この模樣にて道具留る。

熊　もし大阪の肥つたお方え、お前何を練んなさるのだ。

龜　えゝ意地きたなしめ、喰物なら、喰はうと思つて。

太郎　いや、わしは底まめをとがめて、えらう難儀をしましたさかい。吹殼を練つて附けますのぢや。

熊　底まめなら、いゝ薬があつたッけ。

太郎　さよかな、どないな薬がありますな。

熊　節分の柊を黑燒にしてつけるといゝ。

勘太　はあゝ、柊が底まめの薬になりますかな。

熊　なるどころか、底まめでも手の豆でも、豆一通りの妙薬だ。

新吾　くやくヽ若い者、豆一通りの薬とあるからは、四つ目屋の代りには相ならぬかな。

熊　そりやあもう、豆と名のついたものなら、何豆にでもきゝます。
兵藏　何で柊がそんだにきくだんべい。
熊　知らねえか、豆なら柊、（豆殼柊）と言はァ。
龜　株ウ言つてやあがらあ。
皆々　はゝゝゝ。（ト笑ふ、新吾腹を立つて、）
新吾　うぬ、武士たるものを嘲弄いたして、ふとかい奴だ、頭打ち斬るぞ。
熊　はあゝ、眞平御免なせえ。びんた打ちきられてたまるものか。
龜　これだから、つまらねえ口をきくなといふのだ。もし旦那、どうぞ御了簡なすつて下さりませ。
新吾　以來きつとたしなみをらう。
ト睨みつける。この時奥より提婆の仁三上方商人の打扮にて、手拭を持ち、湯上りの體にて出來る。
仁三　どなたもお風呂がようわいてをりますが、どうでござります。
太郎　おゝ京のお方、どこへおいでぢやと思うたら、風呂へおいでゞあつたかな。
仁三　今よう空いてをりますが、お這入りなされませぬか。
太郎　いや、私は底まめをとがめて、よう風呂へ這入りませぬわいの。

熊　もし、底まめの藥なら。

龜　また四文と出かけるか。

勘太　なるほど、お江戸のお方は性懲もないことぢや、はゝゝゝ。

ト下手よりおいね先に十兵衞出來り、

いね　もし皆樣、お狹うござりませうが、もうお一人お願ひ申しますわいな。

新吾　くや〳〵、外の者の頼みなら罷りならぬ所なれど、おぬしが頼み故承知いたす替り、わい共が頼みも承知いたすであらうな。

いね　そりや魚心ありや、水心でござりますわいな。ほゝゝゝ。さあ、あなた此方へおはひりなされませいな。

十兵　へい、どなたも御免なされませ。

仁三　さ、御遠慮なう火鉢のねきへお寄りなされ。

十兵　有難うござりまする。

いね　左樣なら、皆樣お願ひ申します。

新吾　くや〳〵、わい共が頼みも承知であらうな。

いね　知りませぬわいな。

トおいね奥へはひる。がら熊十兵衛を見て、

熊　龜や見や、この旦那は江戸ッ兒だな。

龜　さうよ、江戸に違えねえ。

熊　どうでも江戸面は違ふな、きりゝしやんとしまつてゐらア。

龜　これ、わき國の人もゐらあ、あたり障りになることを言ふなえ。

熊　言つてもいゝや、違ふから違ふと言ふのだ、上方の贅六などゝ一つになるものか。もし旦那え、お前さんは江戸でござりませうね。

十兵　左樣でござります、私は柴井町の者でござります。

熊　有難え、江戸兒が來たので話しが出來らア。もしわつちらア神田竪大工町で、大工でござりますが、何事も胸に思つてゐることができず、がら〳〵するのでがら熊と申します。又この野郎はつまらねえことをぶつ〳〵と慍りやすから、消炭の龜と言ひやす。地震この方長い錢をとつたところから、伊勢參宮に出かけやしたが、京、大阪で耗つて仕舞ひ、つまらなく江戸へ歸る道さ、何卒皆さん、今夜は落噺しの三十石のやうに、國々の噺でもしようぢやござりませんか。

仁三　はあゝ、そりやよい思ひ附ぢや、どうで宵から寐られもせず。

太郎　さよぢや、どこの方か知れもせぬ方と、こないに合宿するといふも、いはゆる他生の縁とやらぢやなあ、申し。

勘太　さうでござる。一樹の影のいちごの流れとかいふことがござる。

兵藏　そりやあ爺さん、權現堂の切れた時かね。

勘太　大方さうだんべい。

十兵　これはつんぼゥ話しだの、あはゝゝゝゝ。

新吾　くやくやお手前は大阪の者ぢやさうなが、大阪はどの邊でござるな。

太郎　私でござりますか、大阪心齋橋通り、南へ入り北へ下る東へ三軒目で、加賀屋太郎兵衛と申しまする。

新吾　はあゝ、太郎兵衛かゞやと申すはお手前がことか。

太郎　御常談おつしやりますな。

十兵　（勘太に向ひ）もしお前さんはどちらでござりまする。

勘太　わしやあ日光男體山の麓、土井遠江守様御城下より三里の在、出津村百姓どんどろ坂の勘太郎と

申します。

十兵　はあ、日光在でござりますか。してお上りでござりますか、お下りでござりますか。

勘太　伊勢參宮に上りでござります。

熊　おい、そつちの勇みの兄ィ、何處だ。

兵藏　おらか、おらあ江戸さ。

熊　何だ、江戸だ。受取りにくい江戸だな。

龜　引を立てにやあ、通用はむづかしい。

熊　兄ィ、お前江戸は何處だ。

兵藏　竹の塚さ。

熊　道理でをかしいと思つた。もしお侍樣え、あなたアどちらでござります。

新吾　わいどもは薩州鹿兒島アの者なるが、劍道修業の爲めに日本六十餘州、武者修業にありく者なアるが、執心なら一本まゐらうか。（ト熊の鼻の先へ鐵扇を出す、熊びつくりして）

熊　まつぴら御免なされませ。（ト此中仁三日記帳を附けてゐる。十兵衞見て）

十兵　もし、そこに帳をつけておいでなさるお方、お前樣はどちらでござりまする。

仁三　はあ、わたいでござりますか、わたいは京都下立賣松原上る所で、小間物を生業致します、仁兵衛と申しますものでござります。

熊　もし、京のお方え、帳はいつでも附けられらア、こゝへ來て話でもしなせえな。

仁三　はゝ有難うおますが、日記を附けます故、その晩に附けませぬと、つい附落してなりませぬ。それにまだ當宿へ狀をことづかつて參りました故、ちよつと屆けて參りまして、ゆつくりとお話しいたしませう。

熊　それぢやあ早く行つて來なせえ。

仁三　（帳面を懷ろへ入れ、手紙を持つて、）さよなら、直行つて參じます。どなたもお話しなされませ。

　ト下手へはひる。

新吾　くや〳〵、若いの、宵の間に盲目がをつたではなかつたか。

熊　あい、飯は宵に喰ひやした。

新吾　えゝくや、盲目が、をつたではなかつたといふこつちや。

熊　分からねえ、めしは喰つたといふに。

十兵　あゝもし神田のお方、その盲目とおつしやるは盲人のことでござりまする。

兵藏　盲人とは何のことだ。

龜　大方唐人の親類だらう。

兵藏　盲人とはめくらのことだ。これでも引をたてずば通用はしますべいか。

熊　附目でいふから分からねえ。

太郎　ほんに、あの宵にゐられた按摩さんは、何處へ行かれたらう。

勘太　たしか、隣り座敷で療治をしてゐましたつけ。

熊　如在ねえ、唯は通さねえな。（ト奥へ向ひ）おい、按摩さん〳〵。

文彌　（奥にて）はい〳〵、お療治なら今しまひますと參ります。

熊　面白え話があるから、そんな引けたことを言はねえで、早く來なせえ。

文彌　唯今しまひますと、直まゐります。

熊　もし、柴井町の旦那え、何處が何だのかんだのといつても、江戸ぐらゐなとこはございませんね。

十兵　そりや江戸ばかりいゝといふ譯もないが、唯しも故郷ほどいゝ所はないもので、大阪の方は大阪、京の方は京、江戸で生れたものは實に江戸がいゝのさ。

熊　いゝの何のといつて、較べものになりやあしねえ。もし大阪の肥つたお方え。

太郎　いやも、その肥つたお方は置いて貰ひたいな。

熊　そんなら、どぶつなお人かね。

龜　なほ惡いや。

熊　もしお前、江戸へ行きなすつたことがあるかしらねえが、江戸から見りやあ、京大阪なぞはくだらねえ所だ。

龜　これさ、くだつてもくだらなくつてもいゝぢやあねえか、腹を立つと惡いわえ。

熊　腹を立つたつてかまふものか、江戸に較べりやあくだらねえ所さ。

太郎　なるほどお前の言はしやる通り、私も今度お江戸見物して來ましたが、實にえらいとこぢやて。

熊　天下のお膝下だ、えらからうが。

太郎　いやもえらい犬の糞ぢや、どこもかしこも犬の糞で、あれがほんの武藏國江戸ぢやない、嘔吐ぢやがな。

熊　なんだ、この土左衛門め、途方もねえことを言やあがるな。これ、犬も喰へものがあるから糞もたれらあ、茶粥ばかり喰やあがつて、鰻の頭を賞翫するとことは譯がちがわァ。初鰹が三分しても片身は犬にくれてやらあ。惡くごた〳〵ぬかしやあがると、横ぞッ方を蹴破つて風穴を明け

るぞ。

太郎　いや、どえらいたんくはぢやな。

熊　何がどうしたと。(ト熊立ちかゝるを、皆々捨セリフにて留める。)

十兵　これさ、つまらない事を言募つて喧嘩をしてはみつともない。お互ひに旅のことだ、まあ〳〵不承しなさい不承しなさい。

熊　何さ、大きな聲をしたくもござりやせんが、あんまり江戸馬鹿にしやがるから。

龜　これ、いゝかげんにしろえ、柴井町の旦那が、口をきいておいでなさらあ。

熊　旦那、大きに有難うござりまする。

勘太　いやも、誰でもめい〳〵の國を惡く言はれると、腹の立つものぢや。然し何處がえゝの、彼處がえゝのと言うたとて、えいと言うたらわしらが國、日光を見ぬ中は、けつこうとは言はれぬ。

十兵　これはしたり、又お前が初めなさるか。

新吾　わい共いまだ日光は見ぬが、結構なのは國元の武者小路、江戸の大名小路よりはるかに立派ぢや嘘ぢやと思ふなら、今から薩州へ行て見て來るがいゝ。

熊　誰が見に行く奴があるものか。

亀　えゝ、だまつてゐろと言ふに。

十兵　さあ〳〵、もう〳〵喧嘩はしつこなし〳〵。

ト合方きつばりとして、奥より文彌、風呂敷包みを腰へ結び、さぐり乍ら出來り、

文彌　だいぶ、お賑やかでござりますな。

熊　おゝ按摩さん來なすつたか。さあ〳〵こつちへ出ねえ〳〵。

文彌　はい、出ましてもよろしうござりまするか。

熊　いゝどころか、座頭の中座敷、ずいと出なせえ。

文彌　左樣なら御免なされませ。（ト前へ出る。）

熊　按摩さんといふものは、勘のいゝ者だが、お前なぞはまあどこがいゝと思ひなさる。

文彌　はい、どこもよろしうござりまする。

熊　おつウ、胡麻をするの。

文彌　いえもう胡麻とやらではござりませぬが、眼の見えませぬ一德は、どこでも同じことでござりまする。

新吾　くりや座頭の坊の申す通り、關東の若い者なぞも、盲目であつたらよかつたに。

熊　大きにお世話だ。
勘太　いや、この按摩さんは如在ねえ按摩さんだ。
十兵　どうか療治も上手さうだ、ちつとばかり肩をつかんで貰ひたい。
文彌　かしこまりましてごります。
十兵　どなたも御免なされませ。
文彌（十兵衞の後ろへまはり肩を揉みながら、）旦那、お前さんは江戸でござりますな。
十兵　あい、わしは柴井町さ。
文彌　はあ、柴井町の旦那といふはお前さんでござりましたか。それぢやあ私は御近所でござります。
十兵　お前どこだえ。
文彌　片門前でござりまする。
熊　もし柴井町の旦那え、この按摩さんで洒落ができやした。
十兵　はあ、何といふ洒落が出來ました。
熊　按摩旅を見ず、といふのだ。龜、どうだよからう、眼が見えねえから按摩旅を見ずさ。
龜　そりやあ分かつたが、心は何といふのだ。

熊　分からねえ野郎だ、いつでも隣の娘がさらつてゐらあ、鳴は瀧の水、按摩旅を見ず。

龜　あんまにわりい洒落だな。

熊　悔しくば誰でもやつて見ねえ、これでも隨分苦しんだのだ。

太郎　私も一つ洒落ませう。あんまと首尾よく寶藏へ忍び込み、とはどうだね。

熊　べらぼうに長い洒落だ。

兵藏　短く言へば、あんまの天人かね。

熊　面白くねえの。

勘太　そんなら、座頭附けてあんま(も)をくふといふのはどうだんべい。

熊　こりやあ小父さん、下にはおけねえ。

勘太　二階へでも上るべいか。

熊　どうとも勝手にしなせえな。

新吾　わいども、一つ洒落申さう、あんまに杖ない胴慾だとは、どうぢや〱。

十兵　これは秀進でござります。

熊　旦那も隅にはおけねえわえ。

新吾　然らば眞中へはじけ出ようか。
熊　はじけ出られてたまるものか。
皆々　はゝゝゝ。
文彌　あんまり皆さんが、あんまりくとおつしやるので、私は嚏をしつゞけで。ハックショ。どうか風を引いたやうでござります。
十兵　旅で煩らつてはいかない、振出しでも呑みなせえ。
文彌　ありがたうござりまする。
太郎　ときに、もう寐ながら話しとしてはどうでござりませう。
兵藏　それがようござりまする。私などは無口だから、默つてゐるせいか、睡くなりました。
熊　何にしろ、床をとつて貰はう。
ト から熊手をたゝく、奥よりおいねおせん出來り、
兩人　はい、御用でござりますか。
熊　おら達はどこへ寐るのだ、床をとつてくんな。
せん　はいくかしこまりました。あなたと大阪のお方とお侍様は、こちらへおいでなされませ。

太郎　どうでも江戸さんとは、のがれん仲かな。

熊　又寐ながら喧嘩をしやせう。

勘太　これ、わしどもはどこへ寐るのぢやな。

いね　お前さんは按摩さんと御一緒に、このお隣りへお休みなされませ。（ト十兵衞に向ひ、）あなたは京のお方と、こゝへお休みなすつて下さりませ。

十兵　あい〳〵承知しました。

兵藏　おらあどこへ行くのだな。

せん　お前さんはお江戸でござりますから、お江戸のお方と御一緒がよろしうござります。

兵藏　有難え、江戸は江戸連れだとよ。

龜　何でもいゝから、早く行つて寐よう。

兩女　さあ、おいでなされませいなあ。

ト宿場の騒ぎ唄にて、わや〳〵とおせん先に新吾、太郎兵衞、熊、龜、兵藏等下手へはひる。おいれは勘太郎を連れて上手へはひる。この中始終文彌、十兵衞の肩を揉んでゐる。

十兵　やれ〳〵、大風り吹いたあとのやうだ。

文彌　やうやく靜かになりました。
十兵　ときに、按摩さんもういゝ、しまひな。
文彌　いえまだ、下を揉みませぬ。
十兵　下はいゝから早く行つて休みなせえ。それ、五十あるよ。（ト財布より錢を出し渡す。）
文彌　いえ、これでは多うござりまする。
十兵　なに少しばかり、とつておきねえ。
文彌　それは有難うござりまする。
いね（出來りて）さあ、按摩さん、お前はこちらへござんせいなあ。
文彌　はいはい。左樣なら旦那樣、お休みなされませ。
十兵　大きに御苦勞であつた。
いね　どれ、手を引いて上げようわいな。
トおいね文彌の手を引き上手屋體へはひる。下手よりおせん夜着蒲團を持つて來て敷き、
せん　旦那、お床を延べましてござります。お休みなされませいなあ。
十兵　あいあい、京のお方はまだ歸んなさらねえか。

せん　はい、まだお歸りなされませぬわいな。

ト言ひすて、はひる。時の鐘鳴る。十兵衞床の上へ上り、鼻紙を出して枕へ當てながら思入あつて、

十兵　あゝ世の譬にもある通り、旅は辛いものだといふに、とりわけ辛いこの十兵衞、せつぱつまつた金の無心に、わざ／＼京までのぼつたところ、當にしてゐた藤助が死んで間もなき初七日に行合はして、向うよりこつちが先へ力落し、南無阿彌陀佛もしんそこから、つい二七日三七日と二十日餘りも逗留したれど、馴染も薄い女房に金の無心を言はれもせず、詮方なさにすご／＼と歸りは歸つて來たけれど、家へ歸つて女房に京三界まで駈け歩き、其の算段ができぬかと思はれるのが面目なく、江戸へ段々近附くのが却て苦勞に夜の目さへ、合はぬ此身の胸算用。あゝ寐つかれずとも横になり、どれ、足でも休めようか。

ト十兵衞夜着を着て寐轉ぶ。下手の障子を明けて仁三出來り、

仁三　もうお休みなされましたか。

十兵　（床より顏をあげて、）御免なせえ、今寐ました、だいぶおそうござりましたな。

仁三　いやもう、夜といふものは知れにくいもので、手紙一本でいかう暇どりました。

十兵　さあ／＼、早くお休みなさい。

仁三　どれ、ふせりませうか。

ト仁三寐轉ぶ。時の鐘。ばた〳〵になり、下手より新吾おいねを追ひかけ出來り袖を捉へて、

新吾　おのれ、逃げるとて逃がさうか。

いね　あれ、お放しなされませいな。

新吾　いや〳〵放さぬ〳〵、おのれ武士たる者に約束の變替いたいて、濟まうと思ふか。

いね　いえ〳〵、そのやうなことを申した覺えはござりませぬわいな。

新吾　なに、ないことがあるものか、それが不承知なことならば、こゝへ今夜泊りはせぬわ。

いね　いえ、もうどのやうにおつしやりましても、私は存じませぬわいな。

ト　おいね新吾を振拂ひ奧へ逃げてはひる。新吾捨ゼリフにて追ひかけはひる。仁三顏を上げて、

仁三　いやも旅籠屋といふものは、とつともう夜通しさう〴〵しいものぢや。もし江戸のお方、お休みなされましたか、もし〳〵。あゝ晝の勞れでよう寐られたやうぢや。（ト床の中で腹這ひに起き、十兵衞の寐息を考へ、）どりや一服喫みませうか。（ト煙草をつぎ、火入れへ手をかざし見て、）あゝ火入の火が消えてしまつた、くさいが行燈でつけようか。（ト行燈の灯で點けようとして火を消し、）こりやしまうた、行燈まで消してしまうた。

ト時の鐘、凄き合方になり、仁三起上り脚絆を穿き身拵へをする。十兵衛頭をあげ窺ひゐる。仁三抜足をして十兵衛を跨ぎ、上手へ行かうとして十兵衛の包みに躓づき、取りのけようとするを十兵衛此の包みを押へゐて、ぐつと引く。仁三びつくりなして逃げようとするを十兵衛捉へようとし、仁三振拂はうとして立廻り、十兵衛仁三を押へて、

十兵　盗人が這入りました。皆さん起きて下さい。御亭主灯りを、早く／＼。

ト ばた／＼になり、下手より藤屋の亭主四郎兵衛手燭を持ち、おむら其外以前の人々、思ひ／＼の寐起の裝にてうろたへながら出來り、

皆々　どろばう／＼。（ト捨ゼリフにてあちこちなす。）

熊　どろばうはどつちへ逃げやした。

新吾　わいども頭打ちきつてやらうと思うたに。

十兵　いや、お案じなされますな、盗人は私が押へてをります。

太郎　やあ、こりや關東のお方か。

勘太　お手柄でござりました。

四郎　これは／＼江戸のお客樣、ようとり押へて下さりました。

むら　皆さん、お座敷に粗相はござりませぬか、お改め下さりませ。
太郎　さうぢや〳〵、めん〳〵の荷物を改めねばならぬ。（ト皆々よろしく荷物を改める。）
新吾　やあ、ないわ〳〵、わい共の大小がない。
太郎　さうおつしやれば、わしが越中褌が見えない。
熊　大方この野郎が盗んだに違えねえ。
龜　構ふことはねえ、たゝきしめろ〳〵。
兵藏　棒しばりにして、肥溜へたゝッ込め。（ト皆々わや〳〵いふ。）
勘太　何にしろお侍様の、大小がなくなつては大變だ。
四郎　まあ〳〵、お靜になされて下さりませ。
新吾　武士たるものゝ魂を、盗むといふがあるものか、ふとかい奴め、覺えてをれ。
ト有合ふ枕にて仁三の頭をうつ。これにて額へ疵つき、仁三手拭にて押へる。
十兵　これはしたり旦那樣、額へ疵が附きました、手あらいことをなされますな。
新吾　やあ、大小を盗んだ故、打殺してもだいじない。
むら　あゝもし旦那樣、あなたのお腰は後ろへまはつてをりますわいな。

新吾（後ろへ廻りし大小を前へ廻し。）やあ、これは後にあつたか、然らば何も粗相はない。
太郎　たゞ、私が褌が見えぬばかりぢや。
四郎　もし、お前樣の鉢卷にしておいでなさるのは、そりや褌ぢやござりませぬか。
太郎　やあ、こりや手拭と間違つたと見える。
十兵　それぢや此奴が盜んだは、私が所持の包みばかりか。（ト風呂敷包みをとつて見せる。）
熊　何にしろ太え奴だ。どんな面だか、面を見てやらう。（ト仁三の顏を上げ見て。）やあ、こいつァ宵に泊つた上方者だ。
太郎　いや、油斷もすきもならぬことぢや。
四郎（前へ出て。）いえ、皆樣御苦勞をかけまして、甚だ申譯もござりませぬが、今日は據なく、私が留守故、かやうな者を泊めましてござります。（トおむらに向ひ。）これだから不注意はないことぢやない、おれが留守なら氣を附けろと、言つておくのに。
むら　それぢやというて、商人風のお方ぢやもの、盜人と知れるものかいな。
四郎　その盜人と知れぬ者を、知るのが旅籠屋生業ぢや。
むら　知れぬものを知れとは、そりやお前が無理ぢやわいな。

四郎　うぬ、亭主に口答へするな。

十兵　これさ〳〵御亭主、夫婦喧嘩は後にして、早く盗人の片を附けて下せえ。

四郎　はい〳〵、よろしうございます。皆様への申譯に、簀巻にして阿部川へはふり込みます。

熊龜　こいつァ面白い、手傳つてやらう〳〵。

仁三　（顔を上げ、江戸口調にて、）もし、どうぞ堪忍して下さりませ。今日から心を改めまして、決して盗みはしませぬから、命ばかりはお助けなすつて下さりませ。

十兵　（これを聞き、合點の行かぬ思入にて、）もし、皆さんお聞きなされましたか、上方者だと思つたら、こいつァ江戸ッ兒でござりますぜ。

勘太　ほんに、今の言葉のやうす。

太郎　江戸なまりに違ひない。

仁三　（思入あつて、）へい、何をお隠し申しませう。生れは江戸でござりますが、身性がわるさに喰ひ詰めて、せうことなしに故郷を立退き、今では、五十三次でほんのよすがの旅稼ぎ、護摩の灰でござります。

新吾　やあ、扨はおのれは護摩の灰か、當年四十三歳に罷りなれど、護摩の灰は初めて見た。

十兵　五十三次を股にかけて、稼いで歩く護摩の灰が、着替ばかりのこの包みを、何で目がけて盜んだのだ。

仁三　いえ、私が目がけましたは、お前樣の荷物ぢやあござりませぬ、襖をへだてゝ隣りにゐる座頭さんの包みでござりまする。實は神奈川からつけて來たが、どうもこれまで間が惡く、今夜といふ今夜こそ仕事をしようと思ひのほか、柴井町の旦那樣の荷物へ足のさはつたが、此身の不運捉へられ、惡いことはせぬものと、眼が覺めましてござりまする。

十兵　むゝ、そんなら隣りの座頭どのゝ、包みを目がけて附けて來たのか。

仁三　今夜で三晩めでござります。

熊　うぬ、眼も見えねえ按摩のものを、取らうとは太え奴だ。

鶴　江戸ッ兒の面を汚しやあがつた代り、袋だゝきに敲きしめるぞ。

四郎　あもし、まあ〳〵お待ち下さりませ、こゝで打殺しでもいたしますと私の迷惑、皆樣のお腹癒せには、簀卷にして阿部川へどんぶりとやりますから、どうぞお靜になされて下さりませ。

仁三　（十兵衞に向ひて、）もし、柴井町の旦那樣、盜人とは申しながら何一品とりませねば、あなた樣の」お執成で、どうぞ命の助かりますやう、お慈悲でござりまする、お願ひでござりまする。

トしな〳〵といふ、十兵衛思入あつて、

十兵　何と皆さん、憎い奴でござりますが、御連中に何一品無くなつたものもなければ、所謂罪を憎んでその人を憎まずとやら、どうか御堪忍なすつて、助けてやつては下さりませぬか。

太郎　いやもう、捉へたお前がその心なら、堪忍せいで何としませう。

勘太　兎角世の中は堪忍が第一、されば昔奈良の堪忍と駿河の堪忍とが相談して、中に天神が寐てござつたといふ譬がある。

兵藏　何を言はつしやるのだ。

十兵　もし、鹿兒島の旦那樣、あなたも御堪忍下さりますか。

新吾　わいども了簡のならぬところなれど、お手前に免じ了簡致し申す。

十兵　神田のお方も、よろしうござりませうな。

熊　簀卷にするなら手傳つてやらうと思つたが、皆さんが御承知なら、御多分にやあ漏れますまい。

十兵　ときに宿の御亭主、皆さんも御承知故、お前もどうぞ了簡して、助けてやつて下さりませ。

四郎　いえもう、お前樣の御挨拶と言ひ、皆樣が御得心なら、何の事を好みませう。

むら　そんなら、お助けなされて下さりますか、やれ〳〵嬉しや、家から科人を出すことかと、大てい

案じたことぢやござりませぬわいな。

四郎　これ、よく聞けよ、皆様方が御不承知なら、いやでもおうでも簀卷にして、阿部川へ打込む所、危い命を助かつたも、柴井町の旦那を始め、皆様方のお蔭故、よくお禮を申すがよい。

仁三　（皆々へ向つて、）へい、柴井町の旦那様、どなた様も此御恩一生忘れはいたしませぬ。え丶有難うござりまする。（ト仁三ひれ伏す。十兵衞思入あつて、）

十兵　人間僅五十年、半分寐て暮す時は二十五年の命だから、この後心を改めて、だいじに命を持つかい丶。

仁三　（顏を上げ、涙を拭ひて、）いえもう、これに懲りぬことはござりませぬ。簀卷にされて阿部川へ打込まれて御覽じませ、罪の深みに浮みもやらず、底の藻屑となるところ、旦那様のお情であぶない命を拾つた上は、悪い心は阿部川へ簀卷にして流してしまひ、今日から此身は生れ替り、心はがまぬ肩に棒、當て丶なりとも堅氣になり、三尺店でも持ちましたら、きつと御禮に上ります。

十兵　なにその禮には及ばねど、これからこなたが心を入替へ、堅氣になるのが何より禮、必ず人とならつしやい。

仁三　あ丶、しんみも及ばぬそのお詞、有難涙がこぼれます。（ト涙を拭ふ。）

四郎　いや、夜更とは言ひながら、油断のならぬ壁に耳。
むら　夜明けぬ中に少しも早く。
仁三　さやうなれば、皆様方。
十兵　縁があつたら、
仁三　その内お目にかゝりませう。
ト仁三しなくと下手へ行き、ちよつと舌を出し、肩で笑つて下手へはひる。
四郎　扨々柴井町の旦那様、あなた様のお蔭にて、何一品とられもせず。
むら　此のやうな有難いことは、ありませぬわいな。
勘太　いやも、御亭主より泊り一同、厚うお禮を申さねばなんめえ。
太郎　同じ江戸さんでも、がら熊さんとはえらい違ひぢや。
熊　何だ、えらい違ひとは、どう違ふといふのだ。
新吾　まあ、物に譬へて見ようなら、泥鼈にお月様、下駄に燒味噌かな。
熊　どつちが鼈で、どつちがお月様だえ。
兵藏　そりやあ言はずとも知れたことだ、お前等が鼈さ。

熊　何だ、この竹の塚め、髄とは誰がことだ。（ト立ちかゝるを、皆々留める。）
十兵　これはしたり、又つまらねえことを言つて、喧嘩をするのか。
四郎　まあ〳〵、お靜になされて下さりませ。
太郎　お前方は寄ると觸ると、言ひ爭うては喧嘩ばかり、
新吾　物に譬へて見ようなら、犬と猿のやうだ。
熊　どつちが犬で、どつちが猿だえ。
十兵　また始めたのかな。
新吾　さあ、お手前がきやつきやといふから、猿でもあらうかい。
勘太　なるほど、思ひなしか猿に似てゐるやうだ。
熊　何だ、猿に似てゐる、この唐變木め、途方もねえ事をぬかしやあがる。有難くも尊くも江戸の大芝居の役者で、中村鴻藏といふ大立者に似てゐるのだ。
太郎　そないな役者がありますかいな。
熊　あるかないか、目を明いて見やがれ。
四郎　まあ〳〵お待ちなされませ。その鴻藏といふ役者があるかないか存じませぬが、まあ、あるとし

て御了簡なされませ。

熊　何だ、あるとしてとは、をかしな白だね。

むら　まあ、よろしうございます。家の人は芝居が嫌ひ故、役者はとんと存じませぬが、その鴻藏は能い男で、私なぞは大最屓でございますわいな。

熊　いや、お上さん、お前は眼の明いた人だが、御亭主は盲目同然だ。なんであんな御亭主を持ちなさすつたのだ。

四郎　これは御挨拶だ。

十兵　いや、盲目と言へば、隣り座敷の按摩さんはどうしましたらう。

太郎　この騷ぎに出て來ぬとは。

勘太　どうかいたしはしませぬか。

ト勘太襖の隙より覗く。これにてこの道具少し廻りて、上手の屋體を見せる。內に文彌すつぼり蒲團をかぶり寐てゐる。

はあ、蒲團をかぶつて寐そべつてゐ申す。

十兵　まさか、寐入つてゐもしまい。

熊　どれ、行つて起してやらう。

ト熊上手の障子屋體へはひり、蒲團を引きめくる。内に文彌包みを抱へ、うつむきゐて、

文彌　あゝ、どろばうがはひりました〳〵。（ト慄へゐるを、熊手をとつて）

熊　これさ、もうどろばうはゐねえよ。

勘太　安心してこつちへござらつしやえ。

文彌　はい〳〵、左樣なら、もう盜人はをりませぬか。やれ〳〵嬉しや、それで落着きました。

トさぐり〳〵眞中へ出る。

十兵　それぢやあお前もさつきから、寐てゐたのではなかつたか。

文彌　どういたして、寐るどころぢやござりませぬ。最前からの樣子をば襖越しに聞きまして、怖うて怖うてなりませぬ故、蒲團をかぶつてをりました。いや手前の申すことばかり申して、柴井町の旦那樣え、あなたのお蔭で助かりました、有難うござりまする。

十兵　定めて聞いてゐなすつたらうが、お前をつけて來たさうだが、何と怖いことぢやないか。

文彌　皆樣方と違ひまして、目の不自由な私故、一倍怖うござります。どうぞ柴井町の旦那樣え、あなたのお側へ寐かして下さりませ。

十兵　さあ〳〵遠慮なしに、こゝへ來て寐なさい。
文彌　有難うござります。
四郞　ときに皆樣方、まだ七つ前でござりますれば、御安心なされて、一寐入りお休みなされませ。
むら　どうぞ明朝は、御ゆるりとお立ちなすつて下さりませ。當所の名物でござりますれば、とろゝを差上げたうござりまする。
新吾　わいども、とろゝは大好物、麥飯なれば猶えいが。
熊　おれもとろゝは大好きだ。
太郞　左樣なら柴井町の旦那。
勘太　お蔭で難をのがれました。
兵藏　大きに有難うござりました。
十兵　明朝お目にかゝりませう。
四郞　さあおいでなされませ。

ト皆々下手へはひる。後十兵衞、文彌殘り、

十兵　さあ〳〵按摩さん、こつちへ寄んなせえ。いや、按摩さんといふと言ひ憎ひが、お前の名は何と

言ひなさるえ。
文彌　はい、私は文彌と申しまするが、して、旦那樣には何とおつしやります。
十兵　私は伊丹屋十兵衞といつて、居酒屋生業をしてゐます。
文彌　へえ、十兵衞樣とおつしやりますか。
十兵　聞けばお前は片門前だといふことだが、旅稼ぎに出なすつたのか。
文彌　いいえ、師匠の用事がござりまして、京へ上ります者でござりますが、覺えたこと故療治をしながら參ります。
十兵　何にしろ、眼の不自由な身で、京まで行くは物騷なことだ。
文彌　左樣でござりまする。こつちは少しも存じませぬが、今の奴も神奈川からつけて參つたさうでござります。（トこれにて十兵衞南無三といふ思入あつて、）
十兵　こりやとんだことをしたわえ。
文彌　どゞ、どうなされました。
十兵　あゝ下司の智慧は後からと、今こゝの家の亭主が寶卷にして阿部川へ流すと聞いて不便になり、合宿衆に詫言して護摩の灰を助けてやつたが、神奈川から鞠子まで附けて來たとあるからは、路

用を遣つて來た仕事、これから心を改めて、盗みは一切しませぬと、涙をこぼして言つたのも大方此の場を退かう爲め、先へ廻つてこなたをば、待伏せなすに違ひない。早くこゝへ氣が附いたら、彼奴を縛つて問屋場へ四五日の中預けて置き、その間にこなたを立たせればよかつた。今更言つても死んだ子の年、えゝ悔しいことをしたわえ。

ト十兵衞悔しき思入れ、この中文彌苦勞なるこなしにて、

文彌　そりやお前樣のおつしやる通り、待伏せしてをるに違ひはござりませぬ。ひよつと彼奴にこの包みを取られた時は、生きても死んでも。

十兵　え。

文彌　いえ、行くことも歸ることもなりませぬ。もし伊丹屋の旦那樣、あなたは御了簡深いお方故、どうか此の難儀をば、脱れようはござりませぬか、お考へなされて下さりませ。

十兵　さあ、別に考へようもないけれど、人によつては七つ立とか六つ立とか、又泊りも何時と極めてする人があるが、お前は是れまでどうであつたえ。

文彌　はい、目の不自由な者故、朝は大概五つ立、暮れは七つ半に泊ります。

十兵　むゝそれぢやあ、彼奴も神奈川からこゝまでこなたをつけて來る中、立や泊りも知つてゐよう。

どうで網を張るからには五里六里と先へは行くまい、一里か二里の近い所に、五つに立てば一時早く六つから待つてゐるであらう。(ト思案して、)それぢや文彌さんかうしなせえ、今夜ももう七つ前後、直に今から立つたなら、夜が長いから夜の中に五里ぐらゐは行かれよう。夜が明けたなら駕籠に乘り、酒手を惜しまず急がしたら、九里と十里の違ひにならう。さうしたことなら脱れられよう。

文彌　(思入あつて、)なるほど先へ乘越しましたら、どうか脱れられませう。それに附けても旦那樣、お慈悲深いをお見かけ申してあなたへお願ひがござりまする。眼の不自由なその上に、東海道は始めて故、とてものことのお世話序に、どうぞ京まで御一緒にお連れなされては下さりませぬか。

十兵　それはお前が言はずとも、わしが上りのことならば一緒に連れて行つて上げるが、何をいふにもこつちは下り右と左りに仕方がないが、長い道中は兎も角もつい鼻の先の岡部へ行くに、二里九町といふ丁場にて宇都谷といふ峠があるが、眼明なら知らぬこと杖一本つき外せば、崖から谷へ眞逆さま、眼前人の難儀をば見捨て、行くは本意でない、わしも心の急く旅なれど、折角お前の賴み故その峠だけ送つて上げよう。陰德あれば陽報ありと、お前を助けておいたなら、惡く此の身に報いもしまい。

ト十兵衛文彌を助けたら、その報いで金ができようかとの思入。文彌嬉しく、

文彌　それはまあ御親切に有難うござりまする。あなたのやうなお慈悲深いお方に出逢ふも、信心致す神や佛の皆お助け、首尾よく京へ上りまして江戸へ歸りましたらば、どのやうなお禮でもいだしませうほどに、お連れなされて下さりませ。

十兵　なに、それにやあ及ばない。峠まで送つて進ぜるから必ず案じなさんな。

文彌　それなら送つて下さりますか、えゝ有難うござりまする。（ト文彌悦ぶ、十兵衛手をたゝきて）

十兵　女中衆々々。（ト呼ぶ、奥よりおせん出來り）

せん　はい、何ぞ御用でござりますか。

十兵　いや、ちと急な用があつて、早立せねばならぬ故、梅干でも澤庵でも早いが御馳走、有合せでよいから、湯漬を二膳出して下さい。

せん　はい、かしこまりました。

トおせん奥へはひる。この中十兵衛、文彌は脚絆など穿き、支度をする。

文彌　あゝ、何だか心がわく／＼と、忘れでもせねばよいが。

十兵　よく氣を附けて、支度をしなさい。

文彌　はい〳〵。（ト脚絆を穿きしまひ、手をたゝき、）女中衆々々。
せん　（奥より出來り、）はい、御用でござりますか。
文彌　今頼んだ湯漬はまだかな、早くして下さい。眼の悪い者を連れて行くのだから。
十兵　これはしたり、眼の悪いとはお前のことだ。
文彌　ほんに、さうでございました、はゝゝゝゝ。
　　ト合方にて奥よりおせん膳部を二膳持ち、おいれお櫃と土瓶を持ち來り、兩人へ出す。
せん　まだ御飯を炊きませぬから、お茶漬でござります。
いね　お急ぎ故、お煮花で上げますわいな。
十兵　私は茶漬が嫌ひ故、茶をかけずに下さい。
兩人　はい〳〵。（ト兩人給仕をし、十兵衞文彌飯を喰ふ。）
十兵　これ、しづかに喰ひなさい、急ぐ時には支へるものだ。
文彌　なに、大丈夫でござりまする。（トいふ内に、文彌せきこんで胸に支へし思入にて苦しむ。）
いね　胸へお支へなされましたか。
せん　お茶でもおあがりなされませいな。

十兵　それだから靜に喰ひなせえといふのだ、（ト背をたゝく、これにて胸の通りし思入。）
文彌　あゝ、ひどい目に逢うた。（とおせん茶を汲んで出す、文彌とつてぐつと呑み、）あッつゝゝゝ。
いね　まあ、お靜におあがりなされませ。
文彌　どうして、靜にしてゐられるものか。（ト文彌又急いで飯を喰ひ、胸へ支へ苦しむ。）
十兵　また支へたのか。（ト背中を叩くを木の頭。）
文彌　はあ、もう一膳下さい。
ト箸をしやに構へ、茶碗を出す。十兵衞よく喰ふといふ思入にて、
と山おろしにてつなぎ、直に引返す、

ひやうし幕

（宇都谷峠の場）――本舞臺正面高二重、この後ろ更に高き二重一面に畫心に岩組、杉の立木には蔦絡みあり、上手前の方に古びたる辻堂。向う一面に遠山を望み、夜の遠見。下手に宇都谷峠の蔦の細道といふ古びたる傍示杭。總て東海道宇都谷峠の體。時の鐘山おろしにて幕明く。と上、下より○△の狩人二人出來りて、

○やあ、山中の五郎平ぢやないか。
△おゝ、さういふは鹿谷の四郎介か、もう何時であらうな。
○一番鷄が鳴いたから、七つでもあんべい。
△この間はさつぱり逢はなんだが、替ることもなかつたか、ちよつと尋ねに行かうと思ふが、晝出るのがおつくうでな。
○さうよ、狩人と泥坊は晝出ることのないもんだ。
△いや、泥坊と言へば、此頃は海道筋は物騷だといふことだ。
○そりやあ用心せずばなるまい。
△何の取られるものもないくせに。
○かう見えても大金持だ。
△はあ、痴氣でかな。
○違ひない、はゝゝゝ。
△どれ、夜明までにもう一働きしようか。
○そんなら五郎平、

△早く歸らつしやい。
ト上、下へ別れてはひる。時の鐘、合方、微めて山おろし、梟の聲にて花道より十兵衞、小田原提灯を提げて先に立ち、後より文彌風呂敷を斜に脊負ひ、菅笠を持ちて出來り、

十兵　これから路が險しいから、氣をつけて歩きなせえ。
文彌　有難うござりますが、眼は見えませぬが、杖があるだけ大きに歩き好うござります。
十兵　私が先へ立つて行くから、よく提灯で見て來なせえ。
文彌　いえ、私は提灯があつてもなうても、同じことでござりまする。
十兵　ほんにさうであつたな。（ト兩人話しながら本舞臺へ來り、文彌石に躓き草鞋の紐切れる。）あゝこれあぶない、躓いたのか。
文彌　はい、躓く拍子に力がはひつて、草鞋の紐を踏み切りました。
十兵　そりやあ、大變なことをした。買ふにも家はなし。（ト思入あつて、）よし〳〵こゝに錢さしがあるから、これで結んでおきなせえ。（ト十兵衞財布より緡を出し文彌に渡す。）
文彌　はい〳〵、どうか療治ができればようござりますが。
十兵　ゆつくりと直しなせえ、その中一服やつてゐるから。

卜十兵衞提灯を辻堂の軒へかけ、緣側へ腰をかけ、摺火打にて煙草をのみゐる。文彌草鞋の紐を緖にて結びながら、

文彌　まだ新らしい草鞋の紐が、ぷッつり根から切れるといふのは、どうやら心にかゝることぢや。

十兵　何の氣にすることがあるものだ。險岨な路を步いては、草鞋は直に切れるわな。

文彌　なるほど、さうでござりませう。（卜文彌草鞋をなほし穿く。）

十兵　どうか、それで穿けさうか。

文彌　まづ間に合せに結びつけました。

十兵　そりやあよかつた、さあ〳〵こゝへ來て、一服喫みなせえ。

文彌　有難うござりました。（卜手拭にて手を拭き、煙草入を出し煙草をつぎ、）一つおかし下さりませ。

十兵　そりやあさうと文彌さん、さつきから聞かうと思つたが、神奈川から護摩の灰がお前をつけて來たといふが、背負つてゐる包みの中には、何ぞ大事なものでもあるのかえ。

文彌　（思入あつて、）へい、御親切な旦那樣故、何をお隱し申しませう、背負つてをります包みの中には、金がはひつてをりまする。

十兵　いや失禮なことをいふやうだが、お前が持つてゐる金ならば、僅な金であらうのに、何でそれな

文彌　神奈川から、護摩の灰がつけて來たか。
旦那樣方の御身分では、僅な金でござりませうが、私などの身にとりましては、大まいの金でござります。

十兵　む、大まいの金とは、いくらそこに持つてゐなさる。

文彌　へい、百兩持つてをりまする。

十兵　えゝ、（トびつくりして、）はて、大そう持つてゐなさるの。（トぞつとして、金のほしくなりし思入にて、）してまあ、お前は何しに京都へ。

文彌　はい、今出川の惣録へ、官位を取りにまゐりまする。

十兵　あゝ、若いとは言ひながら大まいの金を持つて、眼も見えぬ身で唯一人、東海道を上らうとは、さりとはあぶないことだの。

文彌　いえもう、人の氣の附かぬやう、汚れ腐つた古襦袢の中へくるんでおきまする。もし途中にて泥坊に出逢つた時は身ぐるみ脱ぎ、路用も別に胴卷へ五兩入れてござりますれば、それを渡して襦袢だけ呉れろといふたら、氣も附くまいと思ひの外、神奈川からつけて來るとは餅は餅屋、怖いことでござりまする。

十兵　かういふ怖い目をせずに、江戸で官位はとられぬものか。
文彌　いえ江戸でも官位はとれますが、わざ〳〵京まで參りますは、今出川の惣錄で今一老を勤めまするは、この文彌が師匠にて、もし官位でも取るならば五十や七十の金ならば貸してやらうと言はしやる故、此の百兩に五十兩借りて官位を取る積り、それ故どうも私が、參りませねばならぬ仕儀、連があつては却つて邪魔と、人の心の附かぬやう、泊り〳〵で療治をいたし、一人で京へ上ります。
十兵　さういふ譯なら仕方がない。私も知らぬが盲人の、官位は高いものださうだ。譬にもいふ撿校千兩、して百五十兩で取る官位は、何といふ官位だね。
文彌　へい、座頭の官位でござります。
十兵　はあ座頭の官位が百五十兩とか、唯一口に座頭の坊と口ではいふが、百五十兩とは、はて高いものだな。
文彌　いえもう知らぬお方は、盲人の中では座頭が低いやうにおつしやりますれど、なか〳〵以て容易に官位はとれませぬ。
十兵　はて、とんだものだ。（ト此中十兵衞始終文彌の包みへ思入あつて金のほしきこなし。）知らぬ先は恐も

角も、聞いて見ればけんのんなのはこなたが背負つてゐるその百兩、今夜のほどは脱れても、その百兩を盜まれたら、こなたは何とする心だ。

文彌　この官金を盜まれますれば、私が運ももうこれまで、生甲斐もないことなれば、淵川へでも身を投げて死ぬより外はござりませぬ。

十兵　いや〳〵、そりやあ惡い了簡、人間一生は塞翁が馬、惡い事のあつた後ではまたよい事のあるものだ。よしや金を盜まれても死なうなぞとは思ひなさんな。其又金に利息をつけ、禮狀添へてこなたの所へ返しに來ないものでもない。死は一旦にして安しとやら、必ず死なうと思ひなさんな。こればつかりは私が意見、仇に思つて聞かつしやんな。

文彌　御親切な御教訓、きつと忘れはいたしませぬ。有難うござりまする。

十兵　とんだ意見で大きにおくれた。さあ白まぬ中に少しも早く、

ト時の鐘。十兵衞軒の提灯をそつと消し袂へ入れる。文彌杖をついて行きかゝるを、十兵衞思ひきつて風呂敷包みを取らうとする、文彌びつくりしてその手にすがり、

文彌　こりや十兵衞樣、な、な、何とさつしやります。

十兵（ぐつとつまり、）さあ、此の行先でこのやうな、護摩の灰が出ようも知れぬ。氣を附けて行かつしや

い。（ト包みを放す、文彌胸を撫でおろして、）

文彌　あゝ、私や又ほんまのことかと思うて、びつくりいたしました。

十兵　（これでは行かぬといふ思入にて、）いや文彌さん、こなたにちつと頼みがあるが、何と聞いては下さるまいか。

文彌　へい、御恩になつた旦那樣、身にかなうた事ならば、

十兵　すりや、聞いて下さるか。

文彌　して、そのお頼みとおつしやるは、

十兵　さあ、頼みといふは外でもない。その百兩の金が借りたい。

文彌　えゝ。（ト文彌びつくりなし、逃げようとするを十兵衞捉へて、）

十兵　さゝその驚きは尤もだが、まあ私が言ふことを一通り聞いて下され。（ト誂への合方になり、）何を包まう、私は元さる屋敷の若黨にて友朋輩と喧嘩なし、既に命にかゝはるところ旦那樣のお情で命助かり町家の暮し、その御主人の娘御が勾引されて廓の勤め、御恩送りに身請せし金の殘りにつまりし所、その金貸して下されたは、その娘御の御舍弟にて金は殿より預かり金、一つよければ又二つと借りたる金を調達せねば、御舍弟樣の御難儀故、金の工面に京都までわざ〲上れば

その先の、主人が死んだ後へ行き、鵙の嘴にすご〳〵と歸る途中で入用の金を持てゐるこなたに逢ひ、どうも見のがすことがならず、いつそ取らうか借りようかと最前からとつおいつ、種々の思ひで言ひ出す無心、長うとは言はぬ程に、僅三月か四月の中私に貸して下さらば、その百兩に利に利を添へて、きつとこなたに返さうほどに、無理なことだが文彌殿、どうぞその金貸して下され。

ト十兵衞思入にていふ、文彌術なき思入にて、

文彌 段々の入譯を聞けば聞くほど切ない譯、貸せとおつしやる此の金は、護摩の灰につけられて今宵取られてしまふところ、お前樣のお陰にて無事に我手にある百兩、義理にもお貸し申さねばならぬ金をば義理をかき、お斷りを申しますは、あなたよりもこつちに又切ない譯のあつてのこと、三歳の年より眼の見えぬ私を不便に思はれて母や姉の艱難苦勞、この百兩の官金も姉が苦界へ身を沈め、私にくれたる身の代金、官位もとらず途中にて人に貸したの盜まれたのと言うては江戸へ歸られませぬ、さうなる時には御意見を背いて死なねばなりませぬ。もし十兵衞さま、旦那さま、お慈悲深いあなた故、こゝの所を幾重にもお聞分け下さりまして、どうぞお許し下さりませ。

ト文彌思入にていふ、十兵衞も氣の毒なる思入にて、

十兵　さういふ譯の金と聞いては、よしや貸さうと言はれても義理にも是は借りられぬ。今言つたことは水にして、聞かぬ昔と思つて下さい。
文彌　(嬉しき思入にて、)すりや旦那さまには、この金を思ひきつて下さりますか。
十兵　おゝ思ひきるとも〳〵、すつぱり思ひきりました。
文彌　えゝ、それで安心いたしました。
十兵　とてものことに安心ついでに、私はこゝで別れませう。
文彌　そりや又何故でござります。
十兵　一旦無心を言ひかけたれば、私が送つて行つたなら、こなたは却つて怖からう、丁度こゝは峠の下口、これから先は足場もよければ氣をつけて行かつしやい。
文彌　そんならどうでもあなたには、
十兵　別れて歸るがこなたの安心。
文彌　とは言へどうやら、
十兵　怪我せぬうちに、
文彌　え、

十兵　急がつしやれ。
ト十兵衞花道へ行きかけ、思入あつて拔足にて下手へ返り窺ひゐる。文彌花道の附際まで行き、向う
へ思入あつて、
文彌　旦那様、大きに御厄介になりました、お靜においでなされませ。もし十兵衞様、旦那様。〈ト向う
へ思入あつて〉あゝ、もうおいでなされたやうだ。〈ト思入あつて、〉人の心は知れないものだ。眼の
見えぬ身を不便に思ひ、こゝまで送つて下されしお慈悲深い十兵衞様が、打つて替つて百兩の官
金貸してくれとの頼み、聞けば餘儀ないお主の爲め、以前が武士とあるからは、もし切り取りで
もさつしやらうかと、思へばどうやらぞつとして、身の毛もよだつやうであつた。これから下り
とあるからは、夜明けぬ中少しも早く、道を急いで、おゝさうぢや。
ト時の鐘、山おろし。少し凄みの合方になり、文彌上手へ行きかゝる。十兵衞後ろより脇差を拔き、
切らうとして惡いといふ思入二三度あつて、トゞ後ろから思ひきつて一刀あびせる。文彌これを知ら
ず二足三足行き、がつくりとなり、糊紅肩先へ滲むを、文彌探り見て、びつくりして、
やあ、こりや。〈ト倒れる。〉
十兵　文彌どの、堪忍して下せえ。

ト又一刀切る。文彌起上りちよつと立廻つて、

文彌　や、こりや十兵衞樣、いやさ十兵衞どの、こりやこなたは私を殺して、此金を取る氣だな。

十兵　わッつゝどいつ入譯を話したとても貸さぬは道理、さら／＼無理とは思はねど、その百兩の金かないと大恩受けたお主の難儀、道にそむいたことながら、私も以前は若黨奉公武士の祿を食んだからは、切取りなすも武士の習ひ、お主の爲めには換へられぬ。その替りには一周忌おそくもこなたの三年までには、金こしらへて身寄を尋ね、敵と名乘つて討たれる心、京三界まで驅け歩き都合のできぬその金を持つてゐたのがこなたの因果、欲しくなつたが私が因果、因果同志の惡緣か殺す所も宇都の谷峠、しがらむ蔦の細道で血汐の紅葉血の涙、此の黎明が命のをはり、許して下され、文彌どの。

ト又一刀切りつけ、包みを奪ひ取り、中より金財布を引出すを文彌しつかと捉へて、

文彌　すりやこなさんはこの金を、取らうばかりに親切らしく、眼界の見えぬ私を連出し、人里放れし宇都の谷にて、殺して金を取る氣だな、斯ういふことのあらうとは知らぬ江戸には母人や廓へ行かれし姉者人が、今日は彼處明日は何處と、指折り算へて待ちわびるその陰膳の高盛が、枕飯と聞かれたら、嘸や歎きはいかばかり、これ皆こなたがする仕業、かゝる非道な心と知らず、世に

賴もしき人と思ひ、佛賴んで地獄とやら、こなたは鬼か獄卒か、呵責の刄受くればとて、やはかこの金渡さうか。

十兵　おゝその恨みは尤もだが、こなたを連出し殺さうなどゝ、初手から企んだことではない。

文彌　えゝ聞かぬ／＼、慾にふけつて盜みをするのぢや。伊丹屋十兵衞は人殺しぢや、誰ぞ來て下され。

ト文彌大きな聲するを、十兵衞口を押へて、

十兵　あゝこれ、聞譯のない文彌殿、慾にふけつてむごたらしう何でこなたが殺されう、お主の爲にする殺生、約束事とあきらめて、許して下され／＼。（ト手を放し、又切りつける。）

文彌　伊丹屋十兵衞は人殺しぢや／＼。（ト財布をかせに兩人立廻り、トゞ文彌したゝかに切られ、）えゝ、殺さば殺せこの恨み、生替り死替り、五百生が其間蟲けらにまで生を替へ、恨みを晴らさでおくべきか。

ト風の音になり、文彌すつくと立ちて物凄き體、

十兵　むゝ、恨まば恨め、お主の爲め、もうかうなつたら是非がない。

ト文彌を切倒す、文彌よろぼひながら財布を持つたまゝ辻堂へ逃込む。十兵衞續いてはひる。横手板羽目の崩れ穴より、吹替の座頭糊紅にて這ひ出で、後ろ向にて緣より落ちる。と其穴より十兵衞財布

を口に啣へ半身出し、刀を振上げきつと見得、又吹替とちよつと立廻り、よき所へ切倒し止めをさし、ほつと思入。財布の金を押しいたゞき懷へ入れ、刀の血糊を拭ひ鞘へをさめなどして、座頭の死骸を見て不便なといふ思入にて、

あゝ人の心と飛鳥川、流れ寄つたる合宿で、眼界の見えぬ不便さに、こゝまで送る親切もお主の爲めに入用の金子を所持なすばつかりに、うつて替つて非道にも、おれが手にかけ殺すとは、人の心も大空も替り易いが慣ひとは、はてあぢきなき世の中ぢやなあ。（トホロリとして涙を拭ひ）せめて死骸は往來の、人の目褄にかゝらぬやう。

ト文彌の死骸を辻堂の蔭へ入れ、血の附きし手を手拭にて拭き、その手拭を捨てようとして思入あつて袂へいれ、菅笠割掛を取つて行かうとする。此の時上手藪を押分け、提婆の仁三頰冠りにて十兵衞をきつと見、つか／＼と出て腰を捉へ引戻す。十兵衞びつくりして振拂ひ、行かうとするを立廻つて菅笠と荷物をよき所へおき、仁三手拭をとり兩人きつと見得。仁三十兵衞の懷ろより財布を引出し、これをかせに立廻りよろしくあつて、十兵衞財布をとり懷中に入れ、仁三を捉へようとする。そのはずみに腰の提煙草入を仁三に取られる。十兵衞手早く荷物と菅笠とを持ち、つか／＼と花道へ行く途端に、どんと本鐵砲の音するに、十兵衞笠をかざしちよつと下にゐる。仁三見事に尻ギパをするを本の頭。十兵衞ほつと思入あつて、

あゝ、狩人か。

ト十兵衛割掛を肩へかけるをきつかけに、鶏笛、馬士唄、山おろしになり、仁三胸を明け、腹ないぢつて見てホツと思入。十兵衛は花道へはひる。双方見合つてキザミ、

ひやうし幕

四幕目

材木町白木屋の場
裏借家才三内の場
柴井町伊丹屋の場

〔役名――伊丹屋十兵衛、文彌の亡靈、白木屋彦三、坊主小兵衛、筑田喜藏、髪結才三郎、白木屋庄兵衛、番頭丈八、座頭こぶ市、下剃萬次、白木屋の若い者松六、同杉八、丁稚善太。十兵衛女房おしづ、白木屋お駒、下女おかつ等。〕

(白木屋の場)――本舞臺三間常足の二重、白木屋といふ掛暖簾、正面赤壁、狀差し、眞中暖簾口、押入。上手一間千本格子の屋體、いつもの所門口、下手種々の材木、板割の書割、天水桶、總て白木屋店頭の體。二重に番頭裝の丈八、帳合をしてゐる。舞臺に杉六、松六若い者の裝にて、煙草を喫みゐる。角兵衛獅子の鳴物にて幕明く、

松六　こう杉八、こつちの家の聟さんは柴井町の伊丹屋十兵衞樣の弟で、小い時から貰ひ受けて、行く行くはお駒さんと妻す積りで旦那樣はおいでなさるが、算筆と言ひ男ぶりなら言分のない聟さんを、どういふことかお駒さんが嫌ひなさるは、分からねえぢやあねえか。

杉八　さうよ、あの又美しいお駒さんを、聟の彥三さんの方でも嫌つて、此間から花川戶の假宅佐野松屋の花魁、古今とやらに惚れ込んで、たしか今日で三日居續けをしてゐるさつしやるは、どういふ了簡であらうの。

松六　何でも今に大もめが、できねばよいと思つてゐるのよ。

杉八　いやも、家のごたつくのは厭なことだなう。

丈八　これ〳〵手前達は、寄ると觸ると內外の人の噂ばかりする。惡い癖だ。さあ〳〵一服喫んだらば早く河岸上をしてしまはぬか。

松六　はい〳〵、今行くとこでござります。

杉八　さあ〳〵來さつしやい〳〵。

ト兩人下手へはひる。花道より丁稚善太、髮結裝の才三郞、鬢盥を提げ、後より萬次下駄にて毛受と砥石を持ちて出來り、

善太　さあ〳〵髪結さん、早く來てくんな〳〵。

才三　今行くよ、横町の伊勢屋をしまつて直に行くから、番頭さんにさういつておいてくんな。

善太　何さ、番頭さんぢやあねえ、お駒さんが襟を剃つて貰ひてえから、早く呼んで來いと言ひなすつた。早く來なせえ〳〵。

才三　お駒さんが呼んで來いとか、それぢやあちよつくら行かざあなるめえ。こう萬や手前先へ伊勢屋へ行け。

萬次　あい、先へ行くから、早く來なさいよ。

才三　今直に行くよ。

萬次　お駒さんぢやあ、直にやあ來られまいの。

才三　無駄を言はずと、早く行けよ。

善太　さあ、早く來なせえ。(ト萬次は花道へ戻つてはひり、善太は才三をひつぱり舞臺へ來て、)はい、番頭さん、番頭さん、髪結さんを連れて來ました。(ト門口へはひりながら大きな聲にて言ふ。)

丈八　このべらぼうめ、大きな聲でびつくりさせをつた。

才三　番頭さん、今日は結構なお天氣でござります。

丈八 お、髪結どんか、待つてゐた、髭だけちよつとやつて貰ひたい。

才三 お前さんかえ。こう子僧どん、お前お駒さんが呼んで來いと言つたぢやあねえか。

善太 番頭さんだといふと、髭におそれて來ねえから、お駒さんが呼ぶといふ計略はこの善太　何と膽がつぶれたか、ばたくばつたり。(ト不器用に見得をする。)

才三 えゝ忌々しい、一ぱいはめられたか、仕方がない。さ、やりませう。(ト剃刀を磨ぎにかゝる。)

丈八 仕方がないとは御挨拶だ、小僧水を汲んで來い。

善太 あいく。

ト丈八眞中へ坐る。善太金盥へ水を汲んで來る。才三捨ゼリフにて髭を剃りにかゝる。奥よりお駒振袖、娘の裝、下女おかつ附き出來り、

かつ 髪結どん、先刻にからお駒さんが待つておいでなさるに、何をしてござんしたえ。

才三 おかつどんか、何だお駒さんが待つてゐなさるえ、そりや私ちやあござりますまい、外の者たらうね。

お駒 才三さん、いえ才三どの、さつきにから待つてゐるに、外の者とは何のことぢやぞいの。

丈八 もしお駒さん、お前さん髪結を待つてゐるとおつしやるが、何の御用でござります、

お駒　さあ、その用といふはな。
かつ　お駒さんが御用とは、襟が剃つて貰ひたいとおつしやつてなあ。
お駒　さあ、その襟よりはまだほかに。
才三　何だ、襟が剃つて貰ひたいえ、嘘ばかり。私ぢやあねえ。聟さんの彦三樣にたんと剃つてお貰ひなされませ。
お駒　そりや何を言はしやんす、どうして私が彦三さんに。
丈八　お駒さん、お前はあの聟さんは、お厭かいな。（ト お駒の方を向かうとする。）
才三　どつこい、髭を剃つてゐる中は、こつちの顏も同然、自由にやあなりません。
ト顏を持つてこつちへ向かせる。
善太　えゝ、いゝ氣味だ〳〵。
丈八　何をこいつが。
才三　これさ、動いちやあいけませんよ。
かつ　もし才三殿、お駒さんのお心を知つてゐながら、何を言はしやんすぞいな。
才三　お駒さんの心かえ、私アよく知つてゐます。浮氣者の情なし、初めの中は兎や角と親切らしく言

つたのを、眞面目に受けたが大きな間拔け、こつちの思ふ半分も先ぢやあ思つてくれないのが、浮氣女のみんな持前、ねえもし番頭さん。

丈八　それ〳〵、いくら男の方で思うても、そこらあたりの女子の方ではつん〳〵と、ちつとはこちの心の中を、汲んでくれたがよいぢやござりませんかえ。（ト又お駒の方を向かうとする。）

才三　これはしたり、さう動かれちやあ、切りますよ。

丈三　おつと切られてたまるものか。（ト正面を向く。）

お駒　いえ〳〵、そんな恨みを受ける覺えはござんせぬ。私が心の言譯を、

かつ　あもし、それをこゝでおつしやつては、な、邊りに人目。（ト言つては惡いとの思入。）

才三　何の人目どころか、許嫁の聟さんだもの、隨分仲をよくなさるがいゝのさ。

お駒　あれ、またあんな。（ト思入。）

丈八　これ〳〵才三、聟樣の彥三樣とお駒さんが仲のよいのが、何で貴樣は腹が立つのだ。

才三　いゝえいさ、聟さんばかりならようござりますが、お駒さんにやあ此の頃また蟲がつきましたよ。

丈八　なに、蟲がついたとは。

才三　あい、蟲さ。（ト才三元結をひねつて、）こんな蟲がついたのさ。（ト丈八の襟へ入れる。）

丈八 あゝ氣味の惡い。これ、てんがうせずと、早う剃らぬかいの。
才三 はい〳〵、ぢつとしておいでなさい。
かつ もし、才三殿。えゝも、言ひ度うても。
　　ト丈八へ思入、才三丈八の耳を兩手で塞ぎ、
才三 おかつどん、何が言ひたいのだ。
かつ その言ひたいのはな。（ト言ひかける、丈八思入。）
丈八 これさ〳〵、何故おれが耳を押へるのだ。
才三 いえさ、耳が剃れたか、押へて見たのさ。
丈八 てんがうせずと用がある、早く剃つてしまつてくれ。
才三 はいもう、眉毛を剃付けるとしまひでござります。危いから目をしつかりと塞いでお出なさい。
丈八 よし〳〵、それしつかりと瞑つてゐるぞ。（ト丈八目を塞ぐ。）
かつ もし丈八どの、それでは何處も見えまいがな。
丈八 どうして、さつぱり見えはしない。
かつ 見えぬその間に。（ト思入あつてお駒才三へ囁く。）

お駒　かうぢやわいな。

才三　そんなら、今夜私の家へ。

お駒　必ずその時私が言ひわけ。

かつ　待つてゐて下さんせえ。

才三　はい、合點でござります。(ト浮かれて、丈八の片眉毛を剃り落す、善太見て、)

善太　やあ、番頭さんの眉毛が半分なくなつた、ハアイ〳〵。(ト手を拍つて笑ふ。)

丈八　何、おれが眉毛がどうした。(ト撫でゝ見ておどろき、)やあ〳〵、こりや眉毛が半分紛失した。

才三　ほんに、これは思はぬ粗相、眞平御免なされませ。

丈八　やい〳〵おのれは〳〵、白木屋の白鼠忠義一途の番頭たるべき丈八が眉毛を、半分剃落して濟まうと思ふか。

才三　いえもう申譯もない不調法、然し眉毛が片方殘りましてもをかしなもの、とてもの事に兩方ながら剃落してあげませうか。

丈八　白痴面め、おのれ人を嘲弄しをるか。うぬどうしてくれう。(ト立ちかゝる、善太見て、)

善太　やあ、をかしい、片方の眉毛で力みをる、これがほんのかた〳〵かただ。(トツクをうつ眞似をする。)

丈八　おのれまでが同じやうに、たゝきのめしてくれう。

善太　そりや、怒つた〳〵。

ト善太逃げて奥へはひる。丈八算盤にて才三郎を打たうとするをお駒とめて、

お駒　これ丈八、わしが才三殿に襟を剃つてくれと頼むはずみに、そなたの眉毛をつい落した故、私が詫言するほどに、堪忍してたもいなう。

丈八　いえ〳〵、お前さんが詫をなさるが一倍腹が立ちます。お放しなされませ〳〵。

かつ　これ〳〵丈八殿、髪結どんもさうぢやというてなれば、もう堪忍してやらしやんせ。

丈八　いや〳〵、了簡ならぬ〳〵。

才三　もし〳〵、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

かつ　あれ、あのやうにあやまつてぢやわいな。さあ才三どの、お前は早く歸らしやんせ。

才三　はい〳〵左様なら、私はお暇いたしませう。（ト才三鬢盥を持ち門口へ出る。）

お駒　これ才三どの、必ず晩に。

丈八　なに、晩にとは。

才三　いえさ、晩ほどお詫にまゐりませう。

ト才三花道へはひる。三人は捨ゼリフよろしく、奥より善太出て、

善太　おかつどん〳〵、旦那樣がお呼びなさる、早く來なせえ〳〵。

かつ　あい〳〵忙しない、今行くわいな。（トおかつ、善太奥へはひる。）

お駒　これおかつ、わしも一緒に行くわいなう。（ト行かうとするを丈八とめて、）

丈八　どつこい、逃がさぬ〳〵、ちよつとお待ちなされませ。

お駒　丈八としたことが、こゝ放しやいなう。

丈八　いえ〳〵放されませぬ。お前樣に言はねばならぬことがござります、下においでなされませ。

お駒　いえ〳〵、そなたに何も聞くことはないわいなう。

丈八　お前さんがなうても、私の方にたんとござります、まあ下においでなされませ。（トお駒を無理に坐らせて、）もしお駒さん、お前さんはおいとしいな〳〵、小い時から許嫁の彥三樣はお前を嫌ひ、この頃は假宅へ居續け、山の宿の佐野松屋の古今といふ女郎に陷り、內を外なる身持放埓、親旦那も今に愛想を盡かし、追出しなさるは知れたこと、あんな水臭い男は思ひ切り、心立のよい聟をとつて、親旦那に樂をさせるが、孝行といふものでござりますぞえ。

お駒　なるほど、そなたの言やる通り、不束な私故嫌うてござんす彥三樣、疾うから私や思ひきつてる

るわいな。

丈八　そんならお前は、聟さんを思ひ切り、外に思ふ男でもござりまするかえ。

お駒　さあ、恥しいことながら、私が思ふは、つい、こゝらに。

丈八　私が思ふは、つい、こゝらにとは。(トいろ〳〵思入あつて、)もしお駒さん、思ふ男といふは、この丈八でござりますかえ。

お駒　何のそなたに、阿房らしい。

丈八　なに、阿房らしい。といふて外に男は見えず、やつぱり私ぢや〳〵。えゝ有難い忝い、さういふお前の心と知らず、もう言はうか〳〵と口までぞろ〳〵出かけても、言出し兼ねてをりました。有りやうはお前の顔を見る度に、氣も心もうき〳〵として、どうもなることぢやござりませぬ。あらうことか白木屋の番頭とも言はれる者が、どうぞ此の戀かなひますやうにと、夜々芝の神明樣へ跣足參りをいたしました。その御利益でお前の方から、氣があるとは、えゝ有難い〳〵。

　　トお駒の袖を捉へるを、お駒振拂つて、

お駒　えゝも何のことぢや、惡いことしやんな。

　　トお駒逃げるを追廻す。花道より彦三少々醉つたる體にて出來り、門口へ來て、わざと咳拂ひなして

内へはひる。丈八心附かずお駒と心得彦三を捉へる。

彦三　これ、丈八、何をしやる。

丈八　（びつくりして、）や、お前様は若旦那様。

お駒　（びつくりして、）ほんに、あなたはいつの間に。

彦三　お駒どの、商人の店先で不行儀千萬。いやさ、番頭殿とお樂しみぢやの。

お駒　いえ／＼、どうして私が。

彦三　いや／＼、お樂しみ／＼、はゝゝゝ。何ぢややら私も醉つて、さつぱり分からぬ。これお駒、水一つたも。

お駒　あい／＼。（トお駒奥へはひる。）

彦三　これ番頭殿、そのやうに面目ない顔せずと、私が戻つたこと親父さまへお報せ申してたも。

丈八　はい／＼かしこまりました。折角うまくやりかけた所を、悪いところへ。

彦三　どうしたな。

丈八　どれ、お報せ申してまゐりませう。

ト丈八奥へはひる。お駒水呑茶碗を盆へ載せ、持つて出で、

お駒　はい、お冷水を持つて參りました。（ト前へ出す、彦三取つて）

彦三　おゝ大儀々々、（トぐつと呑み、）あゝ醉覺めの水、甘露々々。

ト思入、奥より白木屋庄兵衞更けたる打扮、羽織着流しにて出で、

庄兵　何ぢや、悴が戻つたとか。（ト言ひながら住ふ。）

彦三　親父さま、唯今歸りましてござります。

庄兵　おゝ彦三戻つたか、見れば酒機嫌の樣子、得意廻りに一昨日から出て、今日で三日戻らず、そりやも若い者のこと故、假宅にでもゐるのならばよけれども、日頃實體なそち故、もし神隱しにでもなりはせぬかと、たいてい案じたに、よう無事で戻つて來やつたの。

彦三　親父樣、私はあんまりようも戻りませぬ。

お駒　（思入あつて）もし若旦那、父樣があのやうに機嫌ようおつしやるに、あんまりようも戻りませぬとは、何事でござりますえ

彦三　はて、知れたこと　家にゐては親父樣の澁い顏や、そなたの愛想のない顏を見るが厭さに、得意廻りをかこつけに此頃の夜泊り日泊り。勿體ない、十年以來御恩を受けた親父樣、いや恩を受けたとはいふものゝ　こつちから賴んだといふではなし、そつちの勝手で小さい時から養子に貰は

れ、何一つ不足なく育てられたは世間いつたい、こりや當然といふもの。その上望みもないこのお駒と夫婦にすると言はれるが、いやで〳〵そなたの顏を見る度に、むしづの出るほど厭でござります。何の阿房らしい、この身代の一つや二つ貰うたとて、町人は一夜撿校、もしもの事でもある時は、箸も持たぬ乞食も同然、それ故片時も此の家にゐることが、私はいやになりましてござります（ト思入にていふ。庄兵衞思入あつて、）

庄兵　これ彥三、最前からの惡口雜言、酒の上ぢやと思うて聞いてゐたが、そんなら眞實娘や親に。

彥三　ふツつり愛想が盡きました。

お駒　もし彥三さん、御酒の上ではありながら、言ひたいがいな愛想盡し、そりやもう不束な私が、御氣に入らぬは知れてあれど、何の恨みで父さんに、愛想が盡きて此の家を、お前は眞實出やしやんすのかいな。

彥三　おゝ出るとも〳〵。何の隱さう、吉原の佐野松屋の古今といふ女郎に馴れなじみ、引くに引かれぬ深い仲、此家を出てその女郎と夫婦になり、假令肩へ棒を當てゝしつけぬ生業してなりと、氣儘に浮世が渡りたうござります。どうぞ親父樣、私を御離緣なされて下さりませ。

庄兵　成程娘が氣に入らずこの親にも愛想が盡きて、家にゐるが厭ならば離緣しまいものでもないが、

柴井町にゐるそちが兄御、伊丹屋十兵衛殿から貰うた悴なれば、十兵衛殿に逢つた上、はて、厭なものなら不縁のもと、勝手に暇をやりませう。

彦三　そんなら私の、望みの通り。

庄兵　おゝ、離縁せいで何とせうぞい。

彦三　それ聞いて、落付きましてござります。

ト花道より十兵衛羽織裝にて出で、舞臺へ來り、家へはひらうとして門口に窺ひゐる。此中奥より丈八、おかつ出て、

丈八　もし旦那樣、お前樣やお駒さんに、愛想が盡きたといふ道樂息子の彦三殿、定めてお前樣も愛想がお盡きなされましたならば、何の十兵衛殿に御相談は入りませぬ。望みの通り、とつとゝ追出しておしまひなされませ。

彦三　誰かと思へば丈八殿、こなたにも今までは何かと世話になりました。急に此家が厭になり、離縁を望む彦三を、とつとゝ追出せとは忝い、禮から先へ言ひませう。

かつ　もしお駒樣、樣子は殘らず承りました、日頃おやさしいお心に打つて粹つた若旦那樣、御離緣なされたいとおつしやるは、もしやあなたの。

お駒　あゝこれ、不束な私に愛想の盡きるは御道理なれど、日頃から御不便がる父樣を捨てゝ、家出をしだいとおつしやるは。

かつ　どうも合點がまゐりませぬ。

彥三　はて知れたこと、親父樣始め內外の者に愛想が盡きて離緣して出て行くに、仔細もございもあるものか。

丈八　いや呆れたものだ。大恩のある親旦那にふて勝手の罰あたり、傍に聞いてゐてさへ悔しくつて悔しくつてなりませぬ。私が一走り迎ひに行つて、十兵衞どのを呼んで來ませう。

ト丈八立ちかゝる。十兵衞門口にて聞いてゐて思入あつて、

十兵　あいや、お迎ひには及びませぬ。伊丹屋十兵衞、丁度これへ參り合せてをります。

ト門口をあけて十兵衞はひる、皆々見て、

彥三　ほんに、お前は兄者人。

庄兵　おゝ十兵衞殿、いつの間にござつた。さあ〳〵こちらへ入らつしやれ〳〵。

ト十兵衞通らうとして丈八を見て、

十兵　これは番頭さん、此間は御目にかゝりませぬ。

丈八　十兵衛様、よくおいでなされました。ずつとお通りなされませ。（ト氣の毒さうにいふ。）

十兵　左様なら御免下さりませ。（ト十兵衛よきところへ住ひ、）扨庄兵衛様、その後は久々お目にかゝりませぬ、御機嫌よう。お駒さんにもお變りなく、お目出度うござります。

庄兵　十兵衛殿にもお達者で、お互ひに悦びます。こなたには大阪からいつ戻られました。

十兵　へい、やう〳〵一昨日歸りましたばかり、私旅行中は何かと御厄介におあづかりまして、御禮の申上げやうもござりませぬ。

庄兵　いやも、別條なく戻られて、このやうな目出度いことはござらぬ。さうして大阪表の用向は調ふて戻られたかな。

十兵　有難うござります。いえ、もう首尾よく調達いたして歸りました故、御禮旁々今日上りまして、唯今お店先で委細は承りました。詳しい樣子は存じませぬが、十一の年から御恩になつた、あなたへ對して彦三めが唯今のふて勝手、このお家に愛想が盡きて離縁したいなどゝ、まるで氣違ひ同然な奴、打ち打擲も致し度うござりますが、こゝでいたさばお家の恥、私が宿へ連歸りまして、きつと性根をたゝきなほしますが、もし役に立たぬ根性ならば十兵衛に思案がござりますれば、どうぞ私に弟めをお預けなされて下さりませ。

庄兵　いかにもこなたへ預けませう、何をいふにも若い者のこと、とつくりと彦三の了簡を聞いた上、厭のものならば厭のやうに、兎も角も相談しませう、直に彦三を連れて行かつしやれ。

十兵　有難うございます。これから同道いたして帰ります。やい弟、おのれはまあ天魔の見入りしか、情ない恐ろしい根性になりをつたな。まあ何事もこゝでは言はぬ、さ、おれと一緒に柴井町へ帰りをれ。

彦三　行きますとも〳〵。愛想の盡きた家に半時たりともゐるは厭だ、大手をふつて出て行きます。

丈八　あれ、あの通りの無頼漢。十兵衛さん、とつとゝ早く連れて行かつしやれ。

十兵　はい〳〵、いやもどなたもお腹の立つは御尤も、もしお駒さん何れ一両日の内お詫に上ります。ほんにお前さんに上げようと、駿河細工の絲箱を買つて來て、急いで忘れてまゐりました、その時持つてまゐりまする。旦那様へよろしうおつしやつて下さりませ。

お駒　そんなら、もうお歸りでござんすか、日頃に替る彦三さん、合點の行かぬ今日の仕儀。

かつ　どうやら御様子のありさうな事、憚りながら十兵衛様、御思案なされて下さりませ。

十兵　御親切に有難うござります。さあ弟、御挨拶申して行きをらぬか。

彦三　出て行く家へ何の挨拶、然しこれまで養育の恩も送らず、剰へ心にもない、いや、どうとも勝手

にするがいゝ、顔を見るのもふつ〳〵いやだ。（ト言ひながら門口へ出る。）
十兵（ト門口へ出て、）こりや、口數利かずと行きをらぬか。
彦三　でも、挨拶をしろとお前が。
十兵　えゝ、口强情な。左樣ならば旦那樣。
庄兵　十兵衞殿、しづかに行かっしやれ。
丈八（門口へ來て、）さあ、きり〳〵と歸って貰ひませう。
彦三　ゐろと言っても、ゐるものかえ。
十兵　はて、默って行けといふに。おやかましうござります。
ト思入あつて行きかける。彦三つぶやくを叱りながら兩人花道へはひる。
丈八　やう〳〵行きをつた。もし旦那樣、あのやうな惡い奴は追出しておしまひなされまして、そこらあたりにゐます實體な孝行な聟さんを、お取りなさるがようござります、なあお駒さん。
トそつとお駒の手を取る、お駒振袖にて丈八をたゝく、庄兵衞思入あつて、
庄兵　これ丈八、最前私が屋敷方へ送つた、材木の帳面を調べかけておいた、わが身奧へ行つて調べておいてくれ。

丈八　はい／＼畏りました、どうで私が貰ふこの身代、お駒さんも得心で。

庄兵　や。

丈八　いや、とつくり帳の調べをいたしませう。（ト奥へはひる。）

庄兵　これ、娘こゝへ來や。

お駒　あい。（トもぢ／＼してゐる。）

庄兵　はて、こゝへ來やれといふに。（ト合方になり、お駒おかつと顏見合せ、お駒傍へ來る。）これ娘、わがみは何と思やるか、日頃孝行にした彦三が、この頃の身持放埒、離縁を望む心底は何か樣子のありさうなこと、わがみは彦三が家を出ても淋しいことはないか。これ、默つてゐては分からぬ。どうでもわがみは彦三が氣に入らぬか。

お駒　はい。（ト苦しき思入、おかつはさう言つては惡いといふ思入。）

庄兵　十二の年から養子に貰うたあの彦三、夫婦になるのが厭になつたのは、もしや外に好いた男が、いや、そんなことがあるまいものでもなけれども、まゝにならぬが浮世の中、これ、親一人子一人ぢやぞよ。外に便りのない此の親に、必ず／＼苦勞をかけてたもるなよ。

かつ　御尤もでござります。お駒樣に限り、そのやうなことはござりますまいけれども、また私がとつ

くりと、お心の内をお尋ね申して見ませうわいな。

庄兵　女房が死んでから氣儘に育てた一人娘、あまい親ぢやと笑はせてたもるなよ。

お駒　もつたいない、父さんのお言葉、

かつ　必ず仇に思召しまするな。

お駒　ほんに思へば世の中に、

庄兵　苦勞は絶えぬものぢやなあ。

ト時の鐘にて、よろしく道具廻る。

（裏借家才三内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面崩れたる鼠壁、錦繪などを張りし襖を立てたる一間の押入。上手一間折廻し崩れ壁。下手一つ竈勝手道具あり。よき所に神棚、いつもの所門口。此の外崩れし板塀、總て材木町裏借家の體。こゝに角行燈を灯し、才三以前の裝にて寐轉び、下剃萬次と合卷を見てゐる。さんげ〳〵にて道具留る。

才三　さつき伊勢屋で借りて來た草雙紙は、龜井戸の國貞の繪で面白さうだ。

萬次　こりや種員の弟子の柳水亭種淸の作で、五月雨濡仲町、小三金五郎さ。

才三　ほんに草雙紙で思ひ出した。今夜横町の寄席が大寄で、玉輔、扇橋、馬生三人の掛合咄だ、手前四つまで聞いて來ねえか。

萬次　そいつあ有難え、本當にやつておくんなさるか。

才三　なに、嘘をつくものか、さあ行つて來さッし。（ト叺煙草入より百錢をだしてやる。）

萬次　こりや有難え。お前酒をさう言へと言ひなすつたから、買つておいたが、お肴でもあるのかえ、こゝにあります。そんなら行つて來ますよ。

ト萬次はよき所へ德利をおいて、花道へはひる。才三思入あつて、

才三　いつぞや殿樣のお眼鏡にて、表向御追放と僞り、紛失なせし御家の重寶花形の茶入、詮議せよと有難きお指圖、お髮を上げたを幸ひ町髮結となり、今日は淺草明日は深川と、所を替へて茶入の詮議、寶紛失の夜より行方知れざる筑田喜藏が中間小兵衛、たしかに寶の紛失も彼等が仕業に疑ひなし、この程芝にて計らずも、茶入の袱紗は手に入りしが、まだ兩人が行方知れず、どうぞ早く詮議の手蔓に、取りつき度いものだやなあ。

ト思案の思入。花道よりおかつぷら提灯をさげ、お駒の手を引き出來り、

お駒　そなたの教へた通り、琴の御師匠さんへ行くと父さんに嘘いうて家を出たが、早う才三さんに逢

はせてたもいなう。

かつ　向うの角の長屋が才三様のお家でござります。さあおいでなさりませ。（ト兩人舞臺へ來り、門口より覗き、）もし才三さん、お内でござりますか。

才三　おゝおかつどんか、さつきから待つてゐました。（ト門口を明ける。）

かつ　よう待つてゐておくんなさいました。お駒さま、おはひりなされませ。

ト兩人内へはひる。才三は門口へ掛金をかけて三人よろしく住ふ。

才三　よくおいでなすつた。さあ、こつちへおいでなさい。

お駒　才三さんお前に逢はうと、父さんに嘘いうて、やう／＼家を出たわいな。

才三　こんな汚ない所へ、お坐りなすつたことはあるまいが、まあゆつくりとお話しなさい。

かつ　却つてこれがお駒さんの、お樂しみでござりますわいな。

お駒　才三さん、お前も知つてござんす通り、此間から彦三さんの夜泊り日泊り、今日久しぶりで戻るや否や父さんや私へ愛想盡し、離縁してくれいと言はしやんす所へ、兄さんの十兵衛さんがござんして、連立つて家を出て行かしやんしたわいな。

才三　そんなら彦三殿は、白木屋の家を出る所存で、兄十兵衛の所へ行つたと言やるか。

かつ　日頃親御樣へ御孝行な彦三樣、俄にお心の變つたは、お駒樣とお前樣の仲を御存じの上の、御離緣ではあるまいかと存じます。

才三　彦三殿の兄の十兵衞は、元私が親父樣の家來なれば二人が仲を覺り、主筋の義理を思ひ波風立てず離緣する彦三が實の心底、盃こそせね幼きより、許嫁せし彦三が女房お駒、言はずと知れた間夫の才三、添ふに添はれぬ二人が惡緣。

お駒　そんならお前は、彦三さんの義理を思ひ、私を捨てるお心かいなあ。

才三　捨てる心はなけれども、浮世の義理が立たぬわいなう。

お駒　情ないこと言はしやんす。今更お前に捨てられては、私や死ぬより外はござんせぬわいなあ。

ト才三にもたれて泣く。

かつ　お小さい時お屋敷へお上りなされて、彦三樣とお許嫁のことは御存じない故、才三樣も深いお仲におなりなされたことなれば、親旦那樣へお話し申して、仕樣もやうもござりませうほどに、必ずきな／＼お思ひなされまするなえ。

萬次　（ばた／＼にて花道より走り出來りて、）おい／＼才三さん、もう寐なすつたか、大變だ／＼。

ト門口をたゝく。

才三　何だ、萬次か、大變とは何のことだ。（ト兩人を後へ寄せ、門口を明ける。）

萬次　大變といふのはね、横町の髪結の親方の家に夫婦喧嘩があつて、皆々行つてゐるからちよつと顔を出しなさい。（ト手を取り、引つ張る。）

才三　なに、親方の所に喧嘩がある、今こつちにちつと用があるから、手前いゝやうに言つてくれろ。

萬次　いゝえ、それぢやあ惡いから、ちよつとおいでなせえ〳〵。（ト引張る。）

才三　仕方がねえ、行くよ。今穿物を穿いて行くわ。

萬次　穿物は何でもようござります、さあ早くおいでなせえ〳〵。

才三　忙しねえ男だ、今行くといふに、

ト才三穿物を捜す振りにておかつに囁き、門口へ出る。萬次引張り花道へはひる。お駒おかつ見送り門口をしめる。時の鐘になり、花道より筑田喜藏五十日鬘、頬冠り着流し大小にて、小兵衛は白髪鬘一本差にて出來り、

喜藏　裏家住居の才三が家へ忍んで來てゐる白木屋の娘、日頃の思ひを晴らさうといふ、小兵衛めが思ひ付き。

小兵　當百四枚で下劑の野郎をうまく欺し込み、才三めをつり出させ、あとへこつそりし付け込む魂膽、

ちつとも早く行かつしやれ。

ト兩人舞臺へ來り、門口より窺ひ囁き合ひ、そつと門口を明けてはひる、内の兩人見て、

かつ　どなたでござります、此方の主人は出られまして、私共は餘所の者でござります。

小兵　（門口へ掛金をかけて、）やかましい、默つてうしやあがれ。

兩人　（兩人をすかし見て、）あれ、盜人が。（ト大きくいふ。喜藏刀を拔きて、）

喜藏　聲をたてると、一突だぞ。（ト刀を突立てる。）

兩人　えゝゝゝ。

ト逃げようとするおかつを小兵衛引附ける。喜藏はお駒の帶を捉へる、帶するする〳〵と解ける。

喜藏　腰元小牧、筑川喜藏を見忘れはしまい、久しぶりであつたなあ。

ト帶の端を捉へきつと思入、お駒喜藏を見ておどろき、

お駒　や、ほんにお前は喜藏さん、どうしてこゝへ。

かつ　そんならもしや、お駒さんが忍んでおいでを聞きつけて。

喜藏　佐々木の屋敷にゐる中から、附けつ廻しつ口說いても、得心しない腰元小牧、尾花才三にうつほれて、追放された後を慕ひ、屋敷を下つて親の家、才三も今は町髮結ひ、二人が仲のむやくしさ、

いつか一度は此の念を晴らさうと思ふ中、今夜手前が家を抜け、此の家へ忍んで來ると聞き、贋迎ひをかけ才三めを、旨い手段で追ッ拂ひ、これからおれの隱れ家へしよびいて行つて自由にするのだ。

お駒　え〻、かういふこと〻知つたなら、此家へ忍んで來まいもの。これおかつ、どうせうぞいなう。

かつ　よろしうござります、私がついてゐます。めつたに手籠にはさせませぬ。

小兵　やかましい、邪魔をしやあがるな。

かつ　いえ〳〵、そこ退かしやんせ。

小兵　え〻、うるせえ奴だ。

ト小兵衛おかつを蹴倒す、おかつ脾腹をあてられ、ウンと倒れる。

お駒　あれ、おかつが。(ト立ちかゝる。)

喜藏　ぢつとしてゐろといふに。

ト引きすゑる。小兵衛こなしあつて、

小兵　もし喜藏樣、邪魔のない中女めを、早くしよびいて行かつしやりませ。

喜藏　お〻合點だ。さあ、おれと一緒にうしやあがれ。

お駒　いえ〳〵、何でおのれの自由にならうぞ。

喜藏　えゝ、やかましい。

ト喜藏お駒をかい込む。お駒あれえ〳〵ともがく、喜藏懐より手拭を出し猿轡をかける。小兵衛は門口に窺ひゐる。その中おかつムゝと心附き、これを見て、

かつ　お駒さまは、やらぬ〳〵。

ト喜藏の足にすがり附く、小兵衛臺所より薪を持來り、おかつの帶際をとつて引据ゑ、

小兵　邪魔をしやあがると、かうだぞ。

ト小兵衛おかつを續けうちに打つ。これにておかつ苦しみ、喜藏の足を放す。此間に喜藏お駒を抱へ門口を出ようとする。花道よりバタ〳〵にて才三走り出來り、門口を明けようとして明かぬ故内の樣子を窺ふ。内より喜藏門口を明けるを才三すかし見て、

才三　やゝ、お駒を手籠に、何者なるぞ。

喜藏　誰でもねえ、筑川喜藏だ。

才三　なんと、(ト才三内へ入り、喜藏を附廻し、お駒を圍ひ)おゝ珍らしや筑川喜藏、孫は屋敷にゐる中より、心をかけし腰元の、お駒を手籠めのこの場の有樣。

喜藏　いかにもうぬが言ふ通り、思ひをかけたお駒故、何といつても連れて行くのだ。
小兵　此の家へ忍んで來ることを、ちらりと聞いたを幸ひに、下剃野郎の贋迎ひで、汝を釣出しその後の明巣へしかけて寢鳥をさす、小兵衞樣の指金だ。腹が立つなら勝手にしろ。
才三　おゝ存分にする。まだ其の上に、二人の者に詮議がある。（トつか〳〵と行き押入より一腰を出す。）
小兵　こりやをかしい、何で二人に、
兩人　詮議があるとは。
才三　仔細は其身に覺えがあらう、佐々木の重寶花形の茶入、盜み取つたる筑田喜藏、此のほど芝にて手に入れたる鴛鴦切のこの袱紗。（ト二幕目で手に入れし袱紗を出して見せ）小兵衞が持參と聞いたるからは、二人が仕業に疑ひあるまい。さあ眞直に、白狀いたせ。
トきつと言ひかけ、ぶる〳〵震へ出す。
お駒　もし才三さん、何でお前はそのやうに。
才三　やゝ折も折とて此の病ひ、えゝゝゝ。（ト身體を押へ悔しき思入、兩人見て）
小兵　何だ〳〵。やい才三、何でぶる〳〵ふるへるのだ。
才三　此程よりの瘧の病ひ、寶詮議の緒に取付きながら、身動きならぬこの業病、思へば〳〵口をし

い。

ト震へる思入、小兵衛聞いてオ三を蹴倒し足にて踏む。アレとお駒寄るを喜藏引附けきつと見得。

小兵　さあ野郎、動かれるなら動いて見ろ。詮議々々とぬかしても、身動きはなるめえが。

喜藏　やい才三、無念口をしいか、いゝ態々、我が尋ぬる花形の茶入は、この喜藏様が盗んだのだ。

才三　すりや推量に違ひなく、汝等兩人が仕業よな。

小兵　盗んだ譯を言つて聞かさう、よく聞きやあがれ。御旦那喜藏様が預かりの、御納戸金二百兩遣ひ込んだを、われが親尾花六郎左衛門に、見出されて殿へ披露したばツかり、喜藏様は門前拂ひ、それが無念さ、六郎左衛門が預かつてゐる寶の茶入、ひん盗んだ越度にて六郎左衛門は腹を切り、くたばつたので意恨は五分々々、とてものことに惚れてゐる、以前の家來庄兵衛が娘のお駒を取持つのも、おれが手で茶入を質に入れた金を山分にした恩返し、仔細といふはこの通りだ。憎まば憎め遠慮はねえぞ、こりや敵役の當然だわ。

ト踏みにじる。才三その足を取つて跳ね起き、小兵衛を投げのけ、きつと見得、喜藏驚き、

喜藏　や、才三郎がこの體は。

才三　おゝ瘧の病ひと言つたは僞り、企みの次第を聞かう爲め、茶入の盜賊二人とも繩打つて屋敷へ引

く、さあ尋常に覺悟なせ。

喜藏 そんなら病ひと言つたのは、茶入の在所を聞く手段か。

小兵 (立上りて、)それ知られた上からは、生けてはおけぬ、覺悟ひろげ。

才三 小癪な一言、茶入の在所を白狀なせ。

喜藏 面倒な、疊んでしまへ。

ト三人刀を拔き、よろしく立廻り、トヾ才三喜藏を一刀切る、喜藏ハツと苦しむ。お駒鬢盥の剃刀を取り喜藏へ突いてかゝる。小兵衞たぢ〳〵となり、正面の壁へ行當る。これにて壁ばら〳〵と壞れると、小兵衞はその壞れより後ろへ逃げてはひる。才三はその後を追かけてはひる。此中お駒は喜藏と立廻りあつて、

喜藏 こりやお駒め、故主の喜藏を切る氣だな。

お駒 夫の助太刀、覺悟しや。

喜藏 小癪な女め、くたばつてしまやがれ。

ト兩人立廻つてきつと見得になり、尙兩人立廻りの中にお駒も傷を負ふこと、トヾお駒喜藏の脇腹へ剃刀を突込む、喜藏ハツと苦しむ、この模樣にて道具廻る。

（借家裏手の場）——本舞臺三間一面屋根附の崩れたる鼠壁、上の方松の立木、下手崩れたる屋根を見せたる物置、總て今の借家裏の體。上手に才三刀を振上げ、下手に小兵衞傷を負ひたる體にて刀を差附けてゐる。

才三　さあ小兵衞、茶入の在所、きり〱白狀してしまへ。

小兵　いや知らねえ、覺えはねえ、よしまた知つてゐるとても、うぬに知らせてなるものか。

才三　言はずばかうして。（ト小兵衞を一刀切る。）

小兵　人殺しだ〱。

ト聲を立てる。才三小兵衞の口を押へ、立廻つてきつと見得。これより兩人立廻りあつて、才三小兵衞を切下げる、小兵衞苦しみ倒れる。才三落ちたる煙草入を見付け、中より出かゝりし書物をとり、開き見て、

才三　や、こりや是茶入の質入切手、これさへあれば、えゝ忝い。（ト煙草入のまゝ懷中する。時の鐘にて後ろの壁の崩れより、お駒剃刀を持ちて這ひ出る、才三見て、）や、お駒には傷を負うたか。

お駒　才三さん、茶入の在所は知れましたか。

才三　今小兵衞が取落したる、煙草入に入れあつたる、寶の茶入の質入切手。して喜藏めは。

お駒　假令悪人なればとて、現在故主の喜藏殿を、我が手にかけしは主殺し、その言譯は。
　　ト剃刀を喉へ突き立てる。
才三　すりやお駒には、命を捨てゝ。
お駒　悪人なれども喜藏殿を、手にかけたる上からは、親へ難儀のかゝらぬやう、此の身を捨てゝ。
才三　あつぱれ心底、それでこそ武士の娘、寳の茶入手に入れて、殿へ差上げその上にて、後より追付
死出三途。
お駒　いえ／＼、此の場の罪は死行くこの身に引受くれば、お前は寳を手に入れて、御歸參なされたそ
の後に、幾萬歳の御壽命過ぎ未來はどうぞ。
才三　云ふにや及ぶ、未來永々替らぬ夫婦。
お駒　そのお詞が未來へ土産。
才三　心殘さず成佛しやれ。
お駒　嬉しうござんす。
才三　見捨てゝ行くは本意ならねど、片時も早く寳の質受。（ト行きかゝる。）
萬次　（窺ひ出で）うぬ、才三め。

ト才三へかゝる、才三よろしく引附ける。お駒思入あつて、

お駒　これが別れか。

才三　ふびんやお駒。

お駒　早うお前は。

才三　合點だ。

ト才三萬次を投げのけ、逸散に花道へ走りはひる。お駒落入る。これにて道具廻る。

（柴井町伊丹屋の場）――本舞臺三間常足の二重。正面鼠壁、眞中暖簾口。上の方障子屋體。下の方三尺の袋戸棚、へだて四つ目垣、此の脇小庇附の伊丹屋勝手口といふ腰高の本障子。總て柴井町居酒屋裏手の體。上手の屋體に、十兵衞女房おしづ病鉢卷にて病み勞れし體、木綿夜具の上に括り枕にもたれゐる。二重に以前の十兵衞行燈を點けてゐる。時の鐘、門附の合方にて幕明く。

しづ　旦那殿、また日が暮れるのかいな、あゝ日の暮れるが厭でならぬわいな。

十兵　それでもどうも仕方がねえ、そんなことを言はずとも精出して藥を呑んで、早くよくなつてくれろよ。

しづ　いくら藥を呑んだとて、どうで助からぬ私の病ひ、此の苦しみをしようより、一日も早く死にたいわいな。

十兵　馬鹿なことを言つたものだ。假令死にたいと言つても、命があれば死なれるものぢやあねえ。病ひは氣から起きると言ふから、氣をはき／＼持つがいゝ、何ぞ喰ひてえものでもねえかの。

しづ　いえ／＼何も喰べたうはござんせぬ。えゝ早う死にたいわいな。

十兵　はて、困つたものだなあ。

ト暖簾口より以前の彦三出來りて、

彦三　兄者人こゝにござりましたか。姉者人お粥でもあがらぬか、拵へて來ませうか。

しづ　彦三どの、もう／＼必ず構うて下さるな。

十兵　今も何ぞ喰へと言へば、何も厭だ兎角早く死にたい／＼とばかり、實におれも當惑するよ。

彦三　御尤もでござります、其の御苦勞なさる中へ、又御苦勞をかけまする私の不行跡、面目次第もござりませぬ。

十兵　兄弟の仲に何そんな、氣の毒なことはなけれども、合點の行かぬ汝が心底、小さい時に白木屋へ貰はれ、十二の年から大恩受けた養ひ親の庄兵衛どの、常から孝行な者、實體な者と不便をかけ

られたおぬしが、打つて替つた今の仕儀、是には何ぞ樣子がなくてはならぬ筈、兄弟の仲に遠慮はないほどに、包まずかくさず其の仔細を、言つて聞かせてくれまいか。

彦三　事を分けたる兄者人のお詞、假令どのやうなことがあらうとも、言ふまいと思うたなれど、言はねば明りの立兼ねる此の身の言譯、一通りお聞き下さりませ。（ト思入あつて、）何をおかくし申しませう、十二の時から大恩受けた庄兵衛樣、末は夫婦と約束のお駒どの、お前の故主尾花の御子息才三郎殿と言交し今は互ひに深き仲、この彦三がある時は言はずと知れた密夫も同然、一人は恩ある養父の娘、相手は縁ある故主の御子息、この身さへ退く時は浪風立たずと思案を極め、心にもない身持放埒、愛想を盡かされ離別の望み、こゝに一つの難儀といふは、ふつと馴染んだ吉原の佐野松屋の古今といふ女郎、ほんの座興に二度三度、今では退くに退かれぬといふ其の譯は、弟の行方を尋ぬる古今、頼る方なき女の一人身、力と頼むと切なる心底、據なき義理詰故、色には染まねど孝心の道につながる惡緣は、定りごとゝ兄者人、お許しなされて下さりませ。

十兵　詳しい樣子を聞いて見れば、こりやさうなければならぬところ、大恩のある白木屋の家へ疵を付けず離緣をするとは、若い者には似合はぬ心底、出かしました〳〵。

トこの樣子を聞きおしづ思入あつて、

しづ　彦三殿が小さい時から、許嫁のお駒どのと言交したは私が弟才三郎、それ故科もない身に疵を附け離縁する彦三殿、面目ないやら切ないやら、そんな事を聞くに就けても、一日も早く死にたいわいの。

十兵　又そんな愚痴を言ふと、一倍病ひが重くなる。苦勞の絶えぬは浮世の中。さうしてその古今とやらの弟といふは、何處の何といふ者ぢやぞ。

彦三　その古今といふは芝の片門前で、至つて貧しう暮らした者、文彌と云つて盲目の弟に官位が取らせ度く、佐野松屋の家へ百兩に身を沈め、その百兩の金を持つて、弟の文彌は京都へ上つたそれ限りで、風の便りも音信もなく、行方が知れぬと苦しい話し。

十兵　（聞いてぎつくり思入あつて、）何といふ、そんならその古今の弟は、文彌と云ふ座頭、あの文彌といふか。

彦三　左樣でござります。

十兵　え丶丶丶、（トびつくりする。彦三合點の行かぬ思入。）

彦三　兄者人、何故そんなにびつくりなされます。

十兵　おれがびつくりしたのは、（ト思入あつて、）お丶さうだ、その古今とやらが、嘸賴りないことであ

らうと思つて、それでびつくりしたのだ。(ト言ひまぎらす。)

しづ　あれ、また肩がつかへて來た、苦しや〳〵。(ト苦しき思入。)

彦三　姉者人、私が肩を揉んであげませう。

しづ　あ、彦三殿、どうで助からぬ病ひ、捨てゝおいて下さんせ。

彦三　でも、そのやうに切ないのを。

十兵　いや〳〵おぬしが揉んでは却つて氣がつまる、おれが揉んでやるから、おぬしは店へ行つて、藥を煎じて來てやつてくれ。

彦三　はい〳〵、どれ藥を煎じて來ませう。(ト彦三は暖簾口へはひる。)

十兵　(上手へ來て、)どれ〳〵おれがそろ〳〵擦つてやらう。おゝだいぶ支へて來た、これぢやあ切ない筈だ。いつたいそなたの病ひは、こゝが斯うといふ取りとめた事のない、名の附けやうのない病ひだと醫者殿の話し、何でも氣をしつかりと持ちさへすれば、斯ういふ病ひはなほるものだ。

しづ　いくら氣をしつかり持つても、毎晩々々夜半になると、枕頭へ血だらけな座頭が來る故、怖い怖いと思ふので、こんな病ひになりました。

十兵　(びつくりして、)なに、毎晩々々座頭が來る、さうしてそりやあいつ頃から。

しづ　十月の二十日の晩から、

十兵　なに、十月二十日の夜から。南無阿彌陀佛々々。（ト小聲に言つて眼を拭く。）

しづ　あ切ない、肩がつかへて苦しい〳〵。

ト苦しき思入。時の鐘。花道より座頭こぶ市、安下駄を穿き笛を吹きながら出て、

こぶ　按摩鍼の療治。

ト呼びながら舞臺へ來る。十兵衞聞付けて、

十兵　丁度いゝところへ按摩が來た、餅屋は餅屋だ、揉んで貰ふがいゝ。おい按摩さん〳〵。

こぶ　はい〳〵、お呼びなさいましたか。

十兵　おい此方だ、療治をしてくんな。

しづ　（これを聞いて、）いえ〳〵旦那殿、私や按摩と聞いてもぞつとする。止しにして下さんせ〳〵。

十兵　何だ、按摩はいやだ、そいつァおえねえ、折角呼んだからちつとばかり。

しづ　いえ〳〵、どうぞ堪忍して下さんせ。

十兵　さうか仕方がねえ。おい按摩さん、折角呼んだが病人が厭だといふから、氣の毒だが錢はやるから歸つてくんなせえ。

こぶ　いえ私お錢貰ひぢやあなし、たゞ錢はお貰ひ申しません、然し口明だからたゞ歸るは厭でござりますどなたでもようござりますから、ちよつとでも揉ませて下さいまし。

十兵　何だ口明だから、縁起が惡いから揉ませてくれろ、なるほどこりや尤もだ、そんなら仕方がねえ、おれをちつとばかり揉んで下せえ。こちらへはひんなせえ。

しづ　旦那どの、私は座頭さんは見るも厭、そこの障子をしめて下さんせ。

十兵　おい〳〵。（ト屋體の障子をしめて、）今藥ができるから、ちつとの中辛抱してゐるがいゝ。（ト十兵衞二重下手の障子を明け、勝手口へ來り障子を明けながら、）さあ按摩さん、あぶねえよ、手を出しな。

こぶ　はい〳〵、有難うござります。

ト十兵衞按摩を中へ入れ、障子をしめて二重の横手へ出る。この時こぶ市手をひかれながらよき所へ連れられて來る。

十兵　座頭さん、大きに御苦勞、一服お呑みなせえ。

こぶ　（思入あつて、）はい〳〵、お療治をしまつてにしませう。

十兵　さうか、おれも一昨日旅から歸つて、まだ草臥がぬけねえから、足をちよつと揉んで下さい。

ト枕を出して横に寐る。こぶ市足を揉みにかゝる。

こぶ　もし旦那、今御病人があるとおつしやつたが、お上さんでござりますか。

十兵　さうさ、女房が病氣で困るのさ。

こぶ　それは嘸お困りでござりませう、そして一昨日旅から歸つたとおつしやりますが、どちらへおいでなさりました。

十兵　據ねえ用で、上方へ行つて來ましたが、一人旅といふものは面白くないものさ。

こぶ　いえも、一人旅は不自由なものでござります。

十兵　座頭さん、お前上方の方へ行きなすつたことがあるかえ。

こぶ　はい、上方まではまゐりませぬが、駿河までは參りましたよ。（ト言ひながら段々強く揉む思入。）

十兵　あいたゝゝゝ、痛え〳〵。座頭さん、もうちつと靜に揉んで下さい。

こぶ　はい〳〵、かしこまりました。

十兵　座頭さん、お前駿河はどこまで行きなすつた。

こぶ　はい、宇都谷峠まで行きました。

十兵　や、（トびつくり思入、こぶ市膝のあたりをぐつと掴む思入。）あいたゝゝゝ、あゝ痛え〳〵。（ト跳び起き。）座頭さん、お前めつぽふかいな、ひどい揉みやうをするぢやあねえか。

ト薄ドロ〳〵、寐鳥、凄き合方になり、こぶ市すつぽんにて文彌に摑り、十兵衛の足を撫つてゐる手をきつと取つて、

文彌　まだ〳〵こんなことぢやあない、骨は骨、皮は皮、揉んで〳〵揉み殺すのぢや。(トきつといふ)

十兵　(見ておどろき)やゝ、唯の座頭と思つたに、扨はそちは文彌だな。

文彌　宇都谷峠の、恨みの一念思ひ知れ。

十兵　おゝ尤もだ〳〵、主人の爲めに據なく、そなたを殺して取つた金、口惜しからうが文彌殿、親兄弟もあらうから、その人達へ恩金は、利に利を添へて戻さうから、こらへて成佛して下され。

文彌　いゝや浮ばぬ、成佛せぬ。恨みを晴らさでおくべきか。

十兵　おゝ尤もだ〳〵、許して下せえ。こらへて下せえ、南無阿彌陀佛々々。

ト大ドロ〳〵にて文彌十兵衛をさいなむ思入あつて、文彌後退りにて消える。十兵衛はアツと苦しみ倒れる。暖簾口より彦三藥鍋を持ち出で、思はず十兵衛に躓きびつくりして、

彦三　やゝ、お前は兄者人、どうなされた。もし兄者人々々。(ト引起す、と十兵衛心附きて)

十兵　南無阿彌陀佛々々々々。(ト眼を閉ぢて思入)

彦三　是さ兄者人、氣をしつかり持たつしやりませ。

十兵（眼を開きて、）おぬしは彦三か。
彦三　兄者人、どうなされました。
十兵（氣を替へて、）おれとしたことが、女房の介抱でがつかりして、持病の癪が起つたのだ。
彦三　さうして、もう癪はなほりましたか。
十兵　もうさつぱりとよくなつた。（ト言ひまぎらしてほつと思入。）
しづ　障子の内にて、）あゝ切ない、苦しや〳〵。
彦三　あれ、姉者人が。
十兵　また苦しいか。（ト障子を明けて介抱し、）これもやつぱり文彌が祟り、いやさ、たゝいてやらうか。
あゝ情ないことだなあ。
ト時の鐘、ばた〳〵になり、花道より番頭丈八走り出來り、舞臺へ來て裏口の障子へ行當り、
丈八　あゝ、居たわ〳〵、これ〳〵、こゝを明けて下さい〳〵。
彦三　はい〳〵、どなたゞか、明いてをります。（ト行つて障子を明ける、これにて丈八ばつたり内へ倒れる。）
えゝびつくりいたしました。や、そなたは丈八ぢやないか。
丈八　はい、丈八でござります。あわてさつしやりまするな〳〵。あいたゝゝゝゝ。

十兵（ト來て）これは丈八殿、何の御用で今時分。
丈八　今時分來たその用は、大變でござる〳〵。
兩人　なに、大變とはどのやうなこと。
丈八　大變といふは、娘御のお駒さんが才三の家で、主人の息子筑田喜藏と中間の小兵衞を殺し、自分も喉を突いたれど急所をよけて死にきらず、御役人方へ委細の樣子を白狀した故、科人なれど主殺しなればお駒さんは囚人、白木屋の家は亂ちき騷ぎでござるわいの。
十兵　そんなら、お駒どのは主殺しの囚人となゝ、やゝゝゝゝ。
彥三　詳しい仔細は知らねども、かういふ事のないやうにと、此の身一つに思案を極め、離別したのも水の泡となつたか、ほい。
ト當惑の思入。ドロ〳〵になり、文彌行燈よりよろしく現はれる。おしづこれを見て、
しづ　あれまた座頭が、あれえ。（ト苦しみ、どうとなる。）
彥三　なに、座頭とは。
ト彥三の眼には見えぬ思入、十兵衞駈けより介抱、
十兵　これおしづやァい、氣をたしかに持つてくれ。これ、弟、水を一口、早く〳〵。

彦三　はい〳〵。

ト彦三茶碗へ手桶の水を汲む。此時丈八何心なく文彌を見附けて、

丈八　や、幽靈だ。

ト着物を頭からかぶる。これにて彦三持つてゐる茶碗を落す。十兵衛文彌を見て手を合せるを、一時に木の頭。

彦三　とんだ、粗相をした。

ト合點の行かぬ思入にて四邊を拭く。十兵衛は口の内にて念佛を唱へる。文彌は段々正面の壁へ薄くなる仕掛け、これをキザミ、大ドロ〳〵にてよろしく、

ひやうし幕

五幕目大切

柴井町伊丹屋の場

品川宿海禪寺の場

鈴ケ森提婆殺の場

（淨瑠璃）　古今彦三の名を假宅に　心中玉露白小袖　（富本連中）

〔役名――伊丹屋十兵衞、提婆の仁三、文彌の亡靈、白木屋彥三、尾花才三郎、文彌母おりく、杜庵婆お百、彌次馬の喜太、居酒屋の若い者彌太、丁稚三太。十兵衞女房おしづ、佐野松屋吉今等。

（伊丹屋の場）――本舞臺上手へ寄せて三間常足の二重、正面紺暖簾左右腰羽目、此上法度書の張出し、下手九尺平舞臺、酒肴と書きし三尺の立障子、内に小皿物を載せし臺、盤臺に鮪のどて、軒口に河豚、蛸などつるし、後ろに酒樽、舞臺前下手に三人の仕出○△□床几へ腰をかけ、小皿物にて酒を呑みゐる。下手に番公肴をこしらへゐる。若い者彌太、丁稚三太角盆を持ち給仕をしてゐる。總て柴井町居酒屋の體。角兵衞獅子にて幕明く。

彌太　おわらい〳〵、

○　おい〳〵小僧どん、ぬるいから熱くしてくんな。

三太　はい〳〵（ト燗銚子を取つて）中臺のお二人さん、お燗なほしだよ。

△　おい〳〵若い衆、鮪鍋をもう一枚と、刺身を少しばかり作つてくんねえ。

彌太　はい〳〵入口のお二人さん、鮪鍋が一枚にお刺身が一人前出ます。

番公　あい〳〵、鮪鍋はお二人前だの。

彌太　知れたことだアな、

○　もし、お前さん方は、大師へでもおいでなすつたのかえ。

△ いえ、私等は海晏寺の紅葉を見に行きましたのサ。

□ 今日はお天氣がいゝから、嘸賑やかでござりましたらう。

△ いやも、大そう人がでました。

○ いや、大そう人が出るといへば、四五日後に材木町の白木屋のお駒といふ娘が、引廻しに出たといつて、見物が大そう噂をしてをりました。

△ 私なぞも見に行きましたが、お慈悲なもので、死んだ故捨札ばかりで濟みました。

三太 もし、その白木屋はこつちの家の親類でござります。

○ はあゝ、こつちの家の親類か、めつたなことは言はれないものだ。

△ 惡く言はねえでよかつた。

彌太 はい、お肴ができました。

三太 お燗もよろしうござります。

ト彌太鍋と刺身を持つて來る。三太燗銚子を持つて來る。皆々捨ゼリフにて酒を呑みゐる。甚九の合方角兵衞獅子の鳴物にて、花道より提婆の仁三そぼろなる裝女の半纏を引かけ、額に疵のある惡漢の打扮、酒に醉つたるこなし、彌次馬の喜太同じくそぼろなる裝、素面にて仁三を肩へかけて出來り、

仁三　これ、そんなに引張るな。下馬の直が下らあ。
喜太　あぶないから一緒に來いといふことよ。
仁三　べらぼうめ、おらあ醉やあしねえ。（ト言ひながら居酒屋を見て、）こう待ちや、こゝで一ぺいやつて行かう。
喜太　今角力酒屋で呑んで來たばかりぢやあねえか。もういゝ加減にしや。
仁三　酒ばかりはいゝ加減にできるものかえ、もう五合引つくり返さにや浸み足らねえ。
喜太　おらあ呑まねえから堪忍してくれよ。
仁三　手前呑まざあ、飯でも喰はッし。
喜太　先へ行くのにおそくならあ、歸りにしやな。
仁三　まあ、いゝから入れよ。
彌太　あ、おわらひ〳〵。（ト呼立てる。）
仁三　何だ、おわらひ〳〵、べら棒め、をかしくもねえことが笑へるものか。
彌太　いえ左樣ぢやございませぬ、手前は居酒屋でございますから、おはひりなさいましと、申したのでございます。

仁三 入れと言はなくつても、今入るとこだ。
彌太 店は込みやつてをりますから、奥へいらつしやりませ。
仁三 大きにお世話だえ、どこへ行かうとおれが勝手だ。(トひよろ〳〵する。)
喜太 これサ、店は込んでゐるから奥へ行けよ、若い衆が困らあ。
仁三 手前おつウ肩を持ちやあがるな。(トひよろ〳〵として○の足を踏む。)
○ あいたゝゝ。
喜太 それ見ろ、人樣の足を踏んだ。もし、喰え醉つてゐますから御免なさいまし。
○ なに、よろしうございまする。
仁三 よくなくつてどうするものだ。足を出してゐるから踏んだのだ。大事の足なら踏んべしよつて懷へでも入れておけばいゝに。
喜太 これさ、詰らねえことを言ふな。うぬが粗相をしておきやあがつて。もし、どうぞ堪忍して下さいまし。
○ その御挨拶には及びませぬ。ほんの出合頭でございます。
仁三 おつウ言やあがるな。

喜太　ゑゝ、默つてゐろといふに。

ト兩人二重へ上り胡坐をかき、懷から手を出しおたつてゐる。

彌太　御酒はいくつかけませう。

仁三　いくつといつて高が二人だ、四升も五升も呑みやあしねえ。まあ二合かけて下ッし。

彌太　お肴は何にいたしませう。

仁三　何にすると言つたつて、何があるか知れるものか。先づお肴を承はらうか。

彌太　お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮魚、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰶の魚田もできまアす。

仁三　よくしやべる奴だな。もう一ぺん言つて見や。

彌太　お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮肴、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰶の魚田もできまアす。

仁三　先づ、はしらのお吸物にしよう。（ト向うの肴を見て、）こう若い衆、向うに吊してあるなア何だ。

彌太　へい、鐵砲でございます。

仁三　お臺場へでも持つて行けばいゝ。（ト又見て、）あの隣りの首縊りを見たやうな、赤いものは何だ。

彌太　あれは、蛸でございます。

仁三　なに、蛸だ。（ト目を据ゑて見て、）若い衆、あの蛸の足は何本ある。

彌太　御常談おつしやりますな。

仁三　知らねえから聞くのだ、何本あるよ。

彌太　八本でございまする。

仁三　疣はいくつある。

彌太　そりやあ知れませぬ。

仁三　分からねえ奴だな。

喜太　手前が分からねえのだ。

仁三　あの柱の脇に立つてゐる、禿頭は何だ。

三太　番公さん、お前を禿頭だとよ。

番公　これでも昔は青かつた。

仁三　おい、昔青い禿頭は、ありやあ何だ。

彌太　あれは番公でございまする。

仁三　番公の煮附はできねえか。
彌太　御常談をおつしやりませ。
喜太　これ、忙がしいや、早くさう言つてやりやな。
仁三　それぢやあ先づ、はしらのお吸物に鮪の刺身、鐵砲鍋にはだのぬただ。
彌太　かしこまりました。奥のお二人さんは、はしらのお吸物に鮪のお刺身、鐵砲鍋にはだのぬたで二合かゝりますよ。
番公　あい〳〵合點だ。
仁三　おい〳〵若い衆、この野郎は呑まねえから、飯をいつしよに持つて來て下ツし。
彌太　はい〳〵。
喜太　おい飯はいゝよ。おらあ今喰つて來たから。こう手前豪氣に手を廣げるが、おれの懐を當にするな。おらあ一文もねえよ。
仁三　いゝと言ふことよ。手前にはゞは背負はせやあしねえ。落着いて飯でも喰え。
ト彌太吸物刺身などを盆へ載せ、燗銚子を提げ來りて、
彌太　へい、お待遠でござりました。

仁三　待遠どころか、べらぼうに早かつた。
喜太　さあ、おらあ呑まねえから、大きいものでさつさとやれ。
仁三　酒はづれはしねえものだ。一ぺい呑め。
喜太　呑まねえといふことよ。
仁三　野暮な奴だな。(ト仁三茶碗を出す、喜太ついでやる、仁三ぐつと呑んで、)あゝ、いゝ酒だ。(ト刺身を喰ひ、)
喜太や喰つて見ろ、このきはだはめつぽふにうまい。
喜太　そりやあ芝肴だ、わけはねえ。
彌太　へい、お誂へでござります。
ト河豚鍋を持つて來る。兩人捨ゼリフにて酒を呑む。仕出も此中酒を呑みながら、仁三を見て氣味惡き思入。
仁三　何だ、人の面アぢろ〳〵見やあがつて、おれが面がをかしいか。
喜太　誰も何とも言やあしねえ。
仁三　なに、言はねえことがあるものか。(トこれにて仕出はそこ〳〵にしまつて、)
△　さ、おい、若い衆、こゝはいくらだえ。

彌太　三百七十二文でございます。
○　こつちはいくらになるえ。
彌太　四百二十四文でございます。
○　あい、勘定はこゝへおくよ。
△　八文足らないが、一朱でまけてくんな。
彌太　へい、よろしうございまする。まあお靜かにおいでなさいまし。（ト皆々門口へ出る。）
○　いやも、とんだ生醉が來やあがつたので、うまい酒をまづくした。
△　何だか、風の惡い奴だ。
○　あんな奴には、掛り合はないことだ。
仁三　何だと。
三人　そりや聞えた。逃げろ／＼。（ト皆々下手へ逃げてはひる。）
仁三　此奴らア待ちやあがれ。（ト立ちかゝるを、）
喜太　これさ、うつちやつておけよ。
仁三　なに、彼奴らに掛り合ひをつけて、勘定でも吹ツかける處よ。（ト言ひながら酒を呑み、河豚鍋を喰つて、）

この鐵砲はめつぽふにうめえ、だまされたと思つて喰つて見や。

喜太　おらあ河豚は喰はねえ。

仁三　何故喰はねえのだ。

喜太　命がをしいや。

仁三　しみッたれなことを言ふな。どうで疊の上ぢやあ死ねゝえ身體だ。

喜太　これ、何をいふのだ。（ト喜太仁三の袖を引く、仁三思入あつて、）

仁三　おい／＼若い衆、もう一合かけて下ッし。（ト燗銚子を出す。）

彌太　はい／＼。（ト受取り、はひる。）

喜太　まだ手前呑むのか。

仁三　いゝやア、うつちやつておけ。ドレお燗の來る中寐て待たうか。

ト仁三ひどく醉ひし思入にて、下の方へ寐る。喜太思入あつて、

喜太　もし若い衆、堪忍してくんねえよ。ひどく喰え醉つてゐるから。

彌太　いえ、どういたしまして。

喜太　（仁三をゆすぶりて、）これ、起きろよ／＼、先へ行くのがおそくならあ。起きろと言つたら起きね

えか。（ト有合ふ障子の衝立を仁三の前へ引寄せ身體を隱し、）おい若い衆、お邪魔たらうがちつとのうち、こゝへ寐かしておいてやつてくんねえ。おらアちよつと行つて來るとこがあるから、もし此の野郎が起きたなら、先へ行つたといつて、そして勘定を取つてくんなせえ。

彌太　かしこまりました。

喜太　それぢやあ若い衆頼んだよ。

彌太　よろしうござりまする。

喜太　どれ行つて來ようか。（ト甚九の合方にて喜太は下手へはひる。後時の鐘になる。）

彌太　とんだ居殘りをおいて行かれた。（ト表へ思入あつて、）おゝ今の間にすつぱり日が暮れた。

番公　灯りの支度をしたがいゝ。（ト是にて彌太、三太灯棚と店の八間へ灯りを點ける。）今夜は肴がよく賣れたから、もう仕舞つてもいゝのだが、旦那に惡いから看板へ灯りを入れておくがいゝ。

三太　あい〳〵。（ト表の行燈へ灯りを入れる。）

彌太　おい、金公、今夜はたしか湯が早仕舞だつたの。

番公　増上寺で御法事が始まつたから、今夜から早仕舞だ。

彌太　それぢやあ今の中、一風呂へひつて來ようぢやあねえか。

番公　生醉ひはいゝかえ。

彌太　大丈夫、眼の覺める氣遣ひはねえ、もし眼が覺めたら六百二十四文だから、小僧貰つておいてくれよ。

三太　あい〳〵。六百二十四文だね。

彌太　忘れるなよ。さあ行つて來よう。（ト彌太、番公の兩人は下手へはひる。）

三太　どれ、洗ひ物でもしておかうか。

ト三太下手にて德利、皿などを洗つてゐる。四つ竹節にて花道よりお百肩入の半纏、布子、紺の足袋垢擦りの附きし手拭を被り、桂庵婆アの打扮にて、文彌の母おりくを連れ出來り、

お百　をばさん、お前の行く所は向うの酒屋だよ。

りく　左樣でござりますか。

お百　まあ行つて御覽、どんなにいゝお家だらう。（ト言ひながら本舞臺へ來り。）はい、御免なさいまし、おや小僧どん洗ひ物か、嘸冷たからうの。いつもながらよくお働きだ、お前のやうに働く者はこの柴井町に一人もないよ、ほんに小僧どんの親玉といふのだ。また鮪の胴骨があつたら、葱の青

みと除けておいておくれよ。ときに旦那はお家かえ。

三太　あい、奥にゐなさるよ。

お百　大門のお百婆ァが雇女を連れて參りましたと、ちよつとさう申しておくれ。

三太　あい〳〵。（ト奥へ向ひ。）もし旦那え、よくしやべる杜庵の婆ァさんが參りました〳〵

十兵　おい〳〵今そこへ行くよ。（ト合方になり、奥より十兵衞煙草入を提げ出來り。）おゝ、おつかあおいでか。

お百　（腰をかけて。）旦那、此間はお眼にかゝりませぬが、めつきりお寒うなりましてござりまする。お障りもござりませんでお目出度うござりまする。先日は澤庵を有難うござりまする。早速かくやに致しまして、お前さん、親父どんと二人で久しく樂しみましてござりまする。ほんに此間の若い衆はどうでござりまするか、お前さん、ふだんお世話になります旦那の所故、どうぞよい奉公人をと搜しましたところ、お前さん、あの若い衆はまことにまめでそして正直で、お前さん、よく働きます。こちらのお家へ惡い奉公人をお世話いたしては濟みませぬ。またお前さんお禮も申しませなんだが、先達は親父どんが、深川までお使に參りましたそのお禮に、お金をお貰ひ申しまして有難うござります。まことにあんなことをなされましては、お前さん、お氣の毒でござり

まする。まあお聞きなすつて下さりませ、お前さん、御存じのお酒好故お貰ひ申して歸りますと、お前さん、直に五合買つてくれと申しますから、お酒は旦那で滑酒でもお貰ひ申して呑むがよい、それよりはそのお金で褌でも買ふがよいと申しましたを、お前さん、たうとうお酒にして了ひました。まことに／＼困り者ぢやあござりませぬか、お前さん、酒を呑むお錢はござりますが、褌を買ふお錢がござりませんで、お前さん、お恥しいことでござりますが、三年この方褌無しでござりまする。お前さん、勿論たゞの褌では間に合ひませぬ、お前さん、越中褌にいたしましても、二布なければできません、お前さん、御存じはござりますまいが、大の疝氣持で、睾丸が大きうござりますから、お前さん。

　　トお百首を振り／＼しやべる、十兵衛呆れし思入にて、

十兵　こう／＼おつかあ、もういゝ／＼。なるほど小僧が、おしやべりだと言つた筈だ、實にお前は口まめだ。

お百　いえ／＼、これでも皆さんが、無口だ／＼とおつしやります。

十兵　いや、無口どころか八口位だ、はゝゝゝゝ。

お百　ほんに私としたことが、自分の勝手なことばかり申しまして、お前さんの肝腎のお話をいたしま

せなんだ。此間お賴みなされました、雇女のよいのがござりましたから、お前さん、直に連れて參りました。（トおりくへ思入あつて、）このお婆さんでござりますが、以前は相應に暮したお人でござりますが、お前さん、不仕合せで此間から月雇女に出なさいますが、年をとつてゐなさいますゆゑ、臺所の世話はしたくないと申して、ござりますが、その代りお裁縫はどんなことでも出來ますわいな。

りく（思入あつて、）これは〳〵旦那樣でござりますか、お初にお目にかゝります。年を取りましてござりますゆゑ、お役には立ちますまいが、どうかお使ひなされて下さりませいな。

十兵　あい〳〵。年恰好も丁度よければ、そつちさへよくば賴みたい、今言ふ飯を炊いたり、水を汲んだり、臺所の用をするものは他に爲手があるし、又裁縫もたいがい外へ出せば、小僧の仕着衣紋び位はして貰はずばなるまい。唯お前に賴むは内の者が眼が惡い故、手水に行つたり何やかやするに、男の手では氣がおけて却つて病氣に障る故、その世話をして貰ひたいのだ。

りく　それは嘸お困りなされませう、私も年久しく眼の惡い者の世話を致しましたが、それは〳〵手のかゝるもの、慣れましたことなれば、ようお世話いたしませうわいなあ。

十兵　どうぞ面倒を見てやつて下さい。都合がよくば、今夜からゐて貰ひたいが、どうだらうね。

お百　直にゐて貰ひたいと、旦那樣がおつしやるが、お前の方の都合はえ。

りく　はい、何も用事はござりませぬから、直に居りましてもよろしうござります。

十兵　それぢやあどうぞさうして下さい。

りく　かしこまりましてござります。

お百　これ、をばさん、こゝのお家は大事のお得意、お前氣を附けて勤めておくれよ。お定りは一分二百だが、湯錢はもとより、そりや古いものゝ一枚位は、お心の附かない旦那ぢやあないから、必ず大事に勤めておくれよ。左樣なら、明日宿書は持つて上ります。おや、私としたことが、お上さんのお見舞も申さず御免なすつて下さいまし、小僧どん又澤庵の出しおきがあつたら、かくやにするから除けておいておくれよ。をばさん大事にお勤めよ。旦那おやかましう。はい、左樣なら。

トお百よろしく思入あつて、花道へはひる。三太後を見送り、

三太　よくしやべる婆さんだ。

十兵　いつもながら幕なしには困る。さあ、をばさん此方へ上んなせえ。

りく　左樣なら、御免なされませいな。（ト おりくは二重眞中へ上る。）

十兵　今聞けば、をばさん、お前も眼の惡い人の世話を、久しくしたと言ひなすつたが、お前の家に眼の惡い人でもあつたかえ。
りく　はい、忰が眼が惡うございました。
十兵　むゝ、その息子といふのは盲人かえ。
りく　左樣でございます。三つの年に怪我をいたし、兩眼ともつぶしまして、按摩をいたしてをりました。
十兵　して、お前の家はどこだえ。
りく　片門前でございまする。
十兵　え、（トぎつくり胸に思ひ當る思入あつて、）して、その息子さんの名は何と言ひなさるえ。
りく　はい、文彌と申しまする。
十兵　えゝ、（トびつくりなし、）思ひがけない。してその息子は。（ト十兵衞は因果が廻り來たかとの思入。）
りく　（涙を拭ひて、）お話し申すも涙の種、お聞きなされて下さりませ。その忰文彌ことは、しかも昨年十月初め、官位を取りに京都へ百兩持つて上りましたを、今に歸つて來るであらうと一月待ち二月待ち、待つに甲斐ない一年越し、何の便りもございませねば、占やら巫女やら御鬮も幾度か取

りましたれど、心の迷ひに生死判らず、その官金も文彌の姉が苦界へ沈めし身の代金、便りに思ふ姉弟二人に別れてその後は、十一になる妹と年老い朽ちし私ばかり、足手纏ひの妹を知邊へ預けて雇女奉公、惜しからぬ身をながらへて苦勞致すも、文彌が生死を聞いて死にたうござります故、旦那樣、御推量なされて下さりませ。（トおりく涙を拭ひゐる。十兵衞術なき思入。）

十兵　あゝ年とりし身に尤もだ。何にしろ氣の毒なことだが、してそのお前の息子どのが、金を入れておいたのは、胴卷か財布かえ。

りく　はい、私が着てをります、この小紋の餘り切で、財布を縫うてやりましたが、それへ入れてまゐりました。

十兵　（ぎつくり思入あつて、）はあ、小紋の財布か、それぢやあその息子殿は、所詮再び歸るまい。一年この方便りのないは、たしかに所持の官金故間違ひがあつたに違ひない、旅へ出た日を命日に、訪ひ弔ひをしてやんなせえ。（トホロリと思入、おりくはワツと泣き伏し、）

りく　左樣なら、悴めは死にましてござりませうか。

十兵　萬に一つ無事か知らぬが、まあ死んだらうと思はるゝ。

りく　あゝ、自由になりますことならば、此の身と替つてやりたいに、後へ殘つて子供故死ぬにも死な

れず憂目を見ますは、何たる因果でござりませうぞ。

十兵　頼りに思ふ子に別れ、嘸お前も便りなからう、ふとしたことで思ひがけなく、さあ、かうして雇女におくといふのも、何ぞの縁であらうから、これから此方の家にゐて女房の世話をして下さい。その替りには私がまた、文彌さんになり代りお前の世話をしようから、雇女に來たと思はずにお前の家にゐる積りで、暇があつたら寺詣り物見遊山も氣任せに、行きたい時に行きなさい、小遣錢も上げるから心を樂に持ちなさい。

りく　馴染もない私を御親切に、そのやうに言うて下さる旦那樣、嘸や娘が聞きましたら悦びますでござりませう。便りのできますことならば、文彌にもこの事を言うて聞かせたうござりまする。

十兵　あゝ、その文彌さんのことは言ひなさんな。これからお前を親と思つて私が世話をしますから、必ず／＼案じなさんな。さうしたことなら少しは佛も、

りく　え、

十兵　いやさ、佛いぢりは年寄の役、線香でも上げてやんなせえ。

りく　何から何まで有難うござりまする。

トおりく手拭にて涙を拭ひ、ひれ伏す。十兵衛不便なといふ思入。此の時衝立の蔭に寐てゐた仁三郎

の覺めし思入にて、

仁三　あゝ――（ト伸びをしながら起上り、衝立を除けて、）あゝ、好い心持に醉つてぐつすりやつた。小僧、水をいつぺいくんな。

三太　はい／＼。（ト下手より朝顏茶碗へ水を汲んで持つて來る。）

仁三　（取つて呑んで、）あゝ、うめえ／＼。（ト呑みほして、）この水の味ばかりア、下戸の奴等は一生知らねえ。（トあたりを見て、）喜太野郎め、先へ行きやがつたか、おほかた勘定はしやあしめえ。（ト十兵衞に向ひ、）もし、旦那、火を一つ貸しておくんなせえ。

十兵　さあ／＼、お附けなさい。（ト煙草盆を出す。）

仁三　（雁首で引寄せ煙草を喫みながら、）もし旦那、勘定はいくらでござります。

十兵　はい。これ小僧、店の者は何處へ行つた。

三太　湯が早仕舞だから、拔けない中にはひると言つて行きました。

十兵　あの、それぢやあ、御勘定はいくらだか。

三太　いえ、その生醉の勘定なら、六百二十四文でござります。

十兵　これはしたり、お客樣をどうしたものだ。御免下さりませ、形ばかり大きくても、まだ子供でご

ざります。

仁三 なに生酔だから生酔だといふのだ。子供は正直でいゝ。それぢやあ勘定は六百二十四文だね。

十兵 左様でござります。

仁三 どうぞ御面倒でも、お剰銭をおくんなせえ。

十兵 はい、二朱でござりますか、一分でござりますか。

仁三 二朱でも一分でもいゝ、金はお前に預けてあらア。

十兵 何もお預かり申した覚えはござりませぬが。

仁三 なに、ねえことがあるものか、去年お前に預けておいた、百両の中で六百二十四文引いて、残りをわつちに返してくんなせえ。（トきつといふ。）

十兵 （ぎつくりして、）や、（ト思入あつて、）これ、をばさん、奥に病人一人ゐるから、奥へ行つて世話をしてくんなせい。小僧や、をばさんを案内しろ。

三太 はい／＼。

りく 左様なら、御免下さりませ。（ト合方にて善太先におりく附いて奥へはひる。十兵衛仁三に向ひて、）

十兵 もし、御酒の上かは知らないが、此方に何も預かつた覚えのないに預けたとは、どこで私に預け

なすつたのだ。
仁三 何處でもねえ、宇都谷峠で。
十兵 やあ。(トびつくり思入。)
仁三 何と覺えがあらうがな。
十兵 むゝ。
仁三 十兵衞さん、お久しうござりやした。(ト世話に言ふ。)
十兵 むゝ、さういふこなたは。
仁三 忘れなすつたか十兵衞さん、去年の十月鞠子の藤屋で簀卷にされて、阿部川へ打ちこまれるを、お前さんの情で其の晩助かつた、私ア提婆の仁三といふ旅を稼ぎの護摩の灰さ。
十兵 (仁三の顔をとつくと見て、)額の疵にその時の面差變つて見忘れたが、言はれて見れば覺えのある、鞠子で一つに泊つたお人。
仁三 こゝにお前がゐようとは、夢さらおらア知らなんだ。今日友達の交際で、喰つた上へ又喰ひ、たうとう倒れてお店の邪魔、醉が覺めたか聞いた聲、はて誰だらうと延上り、見りやお尋ねてゐたお前、どこでどう廻りあふか、惡いことは出來ねえものだ。(ト家の内をだろ〳〵見て、)三間間口

の居酒店、思つたよりやあ立派な暮し、これぢやあお金を預けておいても、まあ安心といふものだ。

十兵　最前から聞いてゐれば、二言目には十兵衛に金を預けたと言ひなさるが、私にはどうも合點が行かない。

仁三　とぼけなさんな十兵衛さん、宇都谷峠の辻堂でうめえ仕事をしてゐながら、知らねえ顏をしなさんな。

十兵　宇都谷峠の辻堂で、うまい仕事をしたなぞとは、そりやあいつたい何の事だ。

仁三　何のこツたもねえものだ。いゝしらで言つたらお前の爲めに惡からうと思ふから、隱してやるのにそつちから、白ばツくれりやあ言つて聞かさう。あの晩藤屋を追出され、せう事なしに宿はづれの賽の神の古宮でごろりと寐たが寐附かれず、煙草をくらつてまじ〳〵と、夜の明けるのを待つところへ通りかゝつた二人連、ばれた仕事の埋草に、覗いて見りやあこなたと座頭、こいつアおれをはく氣だなと、後から附いて行つて見りやあ、情ごかしで峠へ連出し、ばつさりやつて而も百兩、護摩の灰も及ばねえ素人衆にやあいゝ肚胸だ、長い短い言はねえから、山分けにして五十兩きれいにおれにくんなせえ。

十兵　又しても〳〵、此の身に覺えもないことを、こりや言ひかけなさつしやるな。
仁三　むゝ、それぢやあお前はどうあつても、知らねえと言ひなさるのか。
十兵　さあ、知らぬことは何處までも。
仁三　いゝや、知らねえとは拔けさせねえ。たしかな證據を見せてやらう。
　　ト仁三腰より矢の提煙草入をとつて、十兵衞に突きつける。十兵衞びつくりして、
十兵　や、その煙草入は。(ト取りにかゝるを、仁三持ちかへて、)
仁三　どつこい、それから御覽じろッさ、黑棧留の三度形、而も金具は八重酸漿、定紋附の道中提、この煙草入はお前のだらう。
十兵　その金物はいくらもある、鹽町仕入れの安煙草入れ、こりやあ世間にまゝある品。
仁三　それぢやあ、これも知らねえとか。
十兵　この十兵衞が所持といふ、たしかな證據のないものを。
仁三　よく知らねえといふ人だ。こう、これを見な。(ト煙草入の段口より請取を出して、)此の煙草入の投口に、入れてあつたは京から江戸へ、手紙を出した島屋の請取り、名宛は伊丹屋十兵衞樣、かういふたしかな證據があつたら、知らねえとは言へめえが。

十兵　むゝ、（トぎつくり思入あつて、）八重酸漿の紋附は鹽町仕入の金物故、私はかりとも言へないが、その請取があるからは、いかにも私が煙草入、したがそりやお京から歸りに、たしか伊勢路で落しました。

仁三　その落したといふのが、もう目串の抜けねえ初まりだ。いくらこなたが白をきつても、地藏の顔も三度形、この飛脚屋の請取ぢやあ知らねえとは言へめえが、後前揃はぬ言葉の文夢か現か宇都谷で、いかに座頭を殺せばとて、人を盲目にした仕方、所は蔦の細道だがさりとは太え膽ッ玉、夜盗の上に人殺し、その兇状も八重酸漿、この段目の上らぬ中命替りの煙草入、五十兩ちやあ安いものだが、黙つて言ひ直で買ひなせえ。（トきつといふ十兵衞思入あつて、）

十兵　そりやあ落した煙草入を、拾つてわざ〳〵この江戸まで、持つてござつたこなさん故、それ相應の禮ならばしまいものでもないけれど、身に覺えねえ人殺し、泥坊なぞと脅されてはその禮さへもできませぬ。といつたらそれを證據にして、訴人をすると言はれうが、私は兎もあれこなさんは、商人めかして旅かせぎ、叩いたならばどのやうな埃りが立たうも知れぬ身の上、いらざる人の世話よりも、おのが頭の護摩の灰、追つた方がよさゝうなものだ。

仁三　（尻を捲り、十兵衞に詰寄り、）やかましいやい、黙りやあがれ。そりやお汝が言はねえでも江戸を喰

詰め旅へ出て、護摩の灰をするからア、夜盗かッさき家尻切り、時代な文句ア言ひたくねえが、暗え所へも幾度か、ひゞあかぎれの切れた身體、どうで始終は刀の錆、犬の餌食になるおれと、おぬしア一緒に入る氣か。(ト手強く言つて氣を替へ和らかに、)そりやあ悪い了簡だ、譬にもいふ此世の地獄、素人と違つて私らア、行きやあまんざら羽目通りで、干物の頭を嬉しがり、嚙ぢるやうなこけでもねえ、娑婆にゐるより樂々と一疊敷に住居して、髮は日髮にしいつけ、その掛つた着物を着る株だが、それでも行く氣は少しもねえ。ましてお前は素人のこと、こゝあ一番考へものだぜ。(ト和らかに十兵衛の顏を見る、十兵衛ぢつと思案の思入、仁三又手強く、)これ默つてゐちや分からねえ。否とか應とか挨拶しろえ、背負つて立たれぬ兇状持でも、うぬ等に頭を押へられ此のまゝ素手ぢやあ歸られねえ。さういふ羽目になつたからにやあ、汝が悪事を言ひつけて案内がてら一緒に行かう。おれが身體を捨てたところが高が無宿の喰詰者、三間間口の居酒店奉公人の四五人も、使ふ旦那と板附に列んで掛かりやあ本望だ。さあ、この二品を證據にして訴人をするぞ、覺悟しろ。

ト仁三きつとなつて立上る。十兵衛思入あつて、

十兵 そんならどうでもこなさんは、その二品を證據にして、この十兵衛が訴人をする氣か。

仁三　知れたことだ。（ト十兵衛を見る。十兵衛當惑の思入、仁三思入あつて和らかに）とさあ見ず知らずの者ならば、言はにやあならねえところだが、鞠子の宿で命をば助けられたお前故、打明話しをしなさりやあ、殺した科も私が背負ひ、五十の所は二十でもうんといふのが根が江戸ッ兒、實ア私も喰詰めて長く江戸にもゐられぬ身體、九州路に知邊があるからそれを頼つて行く積り、何をいふにも路用に困り、どうしようかと思ふ矢先、思ひがけねえお前に逢つたは、こゝで路用を借りろといふ、天道樣の言はゞお指圖、寐覺の惡いこの一品、いくらかくらは言はねえから、路用の金を貸して下せえ。

十兵　むう、すりや、鞠子の宿で逢つたを縁に、路用を貸してくれとあるなら、そりや貸すまいものでもねえ。

仁三　そんなら貸してくんなさるとか、そいつア有難い。首尾よくそれで九州まで、脱れて行きやあ仕合だが、もし又途中で捉りやあ宇都の谷峠で座頭を殺し、金を取つたも私が仕業と、どうで斬られる身體だから、御恩送りに背負つて行きやす。その替りにやあさうなつたら、見舞ぐらゐは入れてくんなせえ。

十兵　何にしろこなさんも、いつがいつまでさうしてゐたら、トゞの仕舞は身の詰り、これから下へ行

つたなら心を入替へ堅氣になり、生業でもさつしやるがよい。澤山のことはできまいが、少し位は用立ませう。

仁三 そりやあ有難うござります。實に私も九州へ行きやあ堅氣になる氣だが、持つて生れた病ひ故又もや彼方で惡事をして、江戸へ逃げて出て來たら、お邪魔ながら二階へでも、匿つておいてくんなせえ。その時必ず十兵衛さん、見ねえ顔はならねえよ。

十兵 そりやあ私も男だから、碎けてお前が頼みなさりやあ、世話をしめえものでもない。

仁三 さうお前が言つてくんなさりやあ、下へ行くにも氣が丈夫だ。善は急げといふからにやあ今夜直に立ちたいが、先立つ物は路用の金、二三十兩貸してくんなせえ。

十兵 かうなる上は得心づく、いかにも貸して進ぜませうが、生憎金が今手元に。（ト言ひかけるを、）

仁三 いけ常談を言ひなさんな、この屋體骨で二十や三十、なにねえことがあるものか。

十兵 さあ、見かけは五十や百兩には困らぬ顔をしてゐても、内證で質をおくのが商人、二季の拂ひや五節句に困る時には神奈川の、伯父のところで融通をすれば、旅へ出がけを幸ひに、私と一緒に神奈川の伯父の所まで行つて下さい。三十兩が五十兩でも金を借りて進ぜませう。

仁三 そりやあ思召は有難いが、神奈川までは一晩泊り、お前に足を運ばすのが。

十兵　丁度ほかに用事もあれば、今夜の月を幸ひに、これから行つたら黎明には、神奈川迄は行かれよう。

仁三　それぢやあお前に旅立を、送られて行くやうだ。

十兵　まあ何にしろ支度をする中、一ぺいやつて待つて下さい。

仁三　丁度さつきの持越しで、熱くしてやりてえところだ。

十兵　酒も肴もそこにあるから、心置きなく呑みなせえ。

仁三　そいつは何よりの有難い。（ト十兵衛仁三を切つてしまはうといふ思入にて立上り）

十兵　その呑む酒が。（ト末期の水といふ心）

仁三　え、（ト振返り顔を見合せる、十兵衛氣を替へて輕く）

十兵　醉はつしやんなよ。

ト唄になり兩人よろしく、此の道具廻る。

（伊丹屋奥の場）―本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手に佛壇、地袋戸棚、下手鼠壁、上手折廻し障子屋體、いつもの所門口、下手勝手口、こゝにおしづ眼病みの體にて床の上に夜着にもたれ

てゐる。おりく背中を擦りゐる。此の見得にて道具留る。

しづ　もし、をばさん、大きに開いて來ましたから、もうようござんすわいな。（ト擦りながら、）してまあ、

りく　そのやうに御遠慮なされましては、却つてお目にさはりますわいな。

あなたは何日からして、このやうにお煩ひなされましたぞいな。

しづ　さあ、忘れもせぬ去年の十月、而も二十日の明方より風邪を引いたが初にて、一年あまりのぶらぶら病ひ、かてゝ加へて風眼にて、此間より兩眼とも、明くことならぬ盲目同然。

りく　それは嘸まあ、御不自由でござりませうわいな。

しづ　今聞けばお前の息子さんも、眼が不自由でござんしたさうな。

りく　左樣でござります。三つの年に目を潰し、長々苦勞をかけし上、行方知れずになりましたが、大方死にましてござりませう。

しづ　頼りに思ふ子に別れ、嘸力なうござんせうな。

りく　御推量なされて下さりませいな。（トやはり合方にて、奥より十兵衞出來りて、）

十兵　おゝ雇女のをばさん、御苦勞であつた。つい忙しいので忘れてゐたが、まだ藥が一帖殘つてあつた、どうぞ煎じてくんなせえ。

りく　かしこまりましてござります。煎じやうは常の通りでござりますか。

十兵　お定りの一ぱい半入れて、一ぱいに煎じるのだ、生薑が二片入りますよ。

りく　はい〳〵。どれ、お煎じ申しませうわいな。

　　ト　おりく枕頭にある藥包を持つて奥へはひる。十兵衞おしづの傍へ來て、

十兵　おしづ、どうだ少しはいゝか。

しづ　はい、大きによろしうござりますわいな。

十兵　そりやあ何にしてもいゝことだ。そりやあさうと、おれは今夜急な用で神奈川まで行つて來ねばならぬ故、家を氣を附けてくれよ。

　　ト　戸棚より紺の脚絆、一腰を出し、脚絆を穿きかける。おしづこれを聞き扨はといふ思入あつて、

しづ　もし旦那え、今夜神奈川へおいでなさんすは、どうぞ止しにして下さんせいな。

十兵　いや、おれも夜る夜中行き度くもないが、是非行かねばならぬことだ、丁度雁女の來たを幸ひ、あのをばさんに頼んでおけば、何も不自由なこともあるまい。直歸つて來るから氣を附けてゐてくれ。

しづ　いえ〳〵どうあつてもお前さんは、片時も放されぬわいな。

ト おしづ飼ひ寄り、身拵へする十兵衛の袖を捉へ留める。

十兵 それだといつて、遁れられない急な用で行くことだ。何も女郎買ひにでも行くといふのぢやあなし、わる留めをするにやあ及ばない。

しづ いえ〳〵留めねばならぬわいな、それとも達つて今宵の内行かねばならぬことならば、私もいつしよに連れて行つて下さんせいな。

十兵 そりやあおしづ分からねえといふものだ。達者なものなら知らないこと、病人を連れて何處へ行かれるものだ。

しづ (むつとせし思入にて、)なるほどさうでござんせう。病みほうけた私なぱ連れて行く氣はござんすまい。

十兵 こりやあ汝あ、おぢなことをいふナ。

しづ さあ言はねばならぬ十兵衛殿、お前は私を置き去りに、捨てる心でござんせうがな。

ト きつと言ふ。

十兵 (思入あつて、)何を馬鹿なことをいふのだ。今でこそ女房なれ、以前は恩あるお主の娘御、假令どんなことがあらうとも、汝を捨てゝ濟むものが。

しづ　いえ〳〵さうでござんせぬ。お前は捨てる心でござんす。
十兵　とは又何故。
しづ　お前の心が水臭い故。
十兵　なに、水臭いとは。
しづ　連れ添ふ女房に身の大事、なぜ明かしては下さんせぬ。
十兵　何と言やる。

ト稽古笛の入りし合方になり、おしづ探り〳〵佛壇の下段より小紋の財布を出し、

しづ　お前の心が水臭いといふのは、即ちこれでござんす。

ト財布を十兵衞の前へ出す、十兵衞びつくりして、

十兵　やゝ、これをどうして。（ト思入。おしづ思入あつて）
しづ　いつぞやお前が上方から戻つてから、佛壇の下段は決して明けるなと、言はしやんすほど見度うなり、夫の言葉を背いてはそでないことゝ思ひながら、お前の留守に下段の内明けて見ればこの財布、何故これが見せともないか不審な事とそのまゝに、様子も聞かず二年越し、最前雁女のをばさんが話を聞けば財布の合紋、扨はいつぞや上方にて調達なせしといふ金は、眼かいも見えぬ文

彌殿を。

十兵　あゝ、これ。（ト仁三、おりくへ憚る思入、おしづ小聲にて、）

しづ　お前は殺して取らしやんしたかと、ぞつと身の毛も立つ怖さ、隱すことほど現はるゝと、お前の命にかゝはる財布、絡む紐の女房に何故隱しては下さんす、現在殺せし文彌殿の母御が來た故身の大事と、眼界も見えず病みほうけし私を捨てゝ逃げようとは、思へば情ないことぢやわいな。

トおしづは十兵衞に縋り泣く、十兵衞は表と裏へ憚る思入あつて、

十兵　その恨みは尤もだが、これには深い樣子のあること、仔細ないふにもこの財布の裏と表に鷄の眼鷹の眼、逃げも隱れもせぬほどに、今夜一夜やつてくれ、あとでとつくり仔細を話さう。

ト言ふにも構はずおしづ十兵衞を捉へゐる。合方段々凄みになり、おしづへ文彌の亡靈の乘りうつりし心にて、十兵衞を恨めしさうに見上げて、

しづ　えゝ恨めしい、お前はなあ、私がこの眼の潰れしも元はと言へばお前故、文彌殿がいくせの思ひで調へたりし官金を、取らうばかりに邪慳にも宇都谷峠で殺害なせし、その一念に此の身の苦しみ、而も十月二十日の夜、明方近き小夜風にふるへ附しが病の因、つひにこの眼の潰れしも文彌殿の一念で、わが身を苦しめこなさんにみぢめを見する死靈の祟り、晝夜六度の熱の差引、骨は

骨皮は皮、揉み碎かるゝ苦しみも、これも誰故こなさん故、えゝ恨めしい十兵衞殿。

　　トおしづ物凄くいふ。十兵衞ぞつとせし思入にて、

十兵　あゝこれ、おしづ何をいふのだ、そなたは熱に浮かされたのか。

しづ　何の熱に浮かされよう、大事の〳〵夫故、片時こなたの傍放れず、みぢめを見せねばならぬわいなう。

十兵　えゝ、病ひの業とは云ひながら。つまらぬことを言つてくれるな。

　　ト十兵衞おしづをぢつと抱きしめ、仁三とおりくへ憚る思入、おしづ振拂つて立上りきつとなり、

しづ　いゝや言はねば腹が癒ぬ。宇都谷峠で文彌殿を、殺害なせしは伊丹屋十兵衞。(ト言ひかける。)

十兵　(おしづの口を押へて、)　えゝ又しても入らぬ口、此身に覺えもないことを夢か現か情ない。

　　トぢつと思入、おしづ振拂ひ、

しづ　十兵衞は、人殺しぢや〳〵。

　　トこれにて十兵衞捉へるを振拂ひ、ちよつと立廻つておしづの口をぐつと押へ、

十兵　ちえゝ、お主の娘でなくばなあ。(トおしづ十兵衞の手を振拂はうとするを、十兵衞抱締るはずみに口を押へし手過つて喉へかゝりぐつと締める。これにておしづ眼を明き苦しみ、十兵衞をきつと見る。十兵衞びつ

くりして、)やゝ、こりや女房を。(ト手を放す、おしづひよろ〳〵としてよろしく倒れる。)手が廻つてか、敢ない最期、ホヽホイ。(ト十兵衞びつくりしてどうと倒れる。)

仁三 (奥にて)十兵衞さん、まだかえ。(ト十兵衞この聲を耳にし、二枚折屏風でおしづを匿し)

十兵 あい、今そこへ行きますよ。(トばた〳〵にて、奥より彌太走り出來り)

彌太 もし旦那、雇女婆が裏口から、血相かへて駈出しました。

十兵 扨は大事を。

彌太 (屏風の内を見て)や、こりやあお上さんが。

十兵 あゝこれ、(ト押へて囁く。)

彌太 すりや、雇女の跡追つかけ。

十兵 ちつとも早く。

彌太 合點だ。

ト時の鐘にて、彌太逸散に花道へ走りはひる。奥より仁三出來りて、

仁三 さあ、支度がよくば行きやせうぜ。

十兵 大きに待遠であつた。

仁三　や、あの人影は。

ト脇差を取つて立上る。此時薄ドロ〳〵にて上手障子屋體へ座頭の影うつる。仁三見て、

十兵　（見て、）行燈の破れさ。

ト行燈をぐるりと廻す。破れ穴あり、これにて人影消える。

仁三　どうやら座頭に。

十兵　え。

ト仁三ぞつとして身震ひをする。これといつしよに、十兵衛脇差をしやんと差す。これを道具替りのしらせ。

仁三　あゝ、風でも引かにやあいゝが。

ト仁三尻をぐるりと捲り、小楊枝を使ふ。十兵衛屏風の内を見て愁ひの思入よろしく。時の鐘の送りにて、此の道具廻る。

（品川宿海禪寺の場）――本舞臺三間正面黒幕、卒塔婆を結込みし玉柵垣、正面低き草土手、種々の石塔、上手に小高き石地藏、草井戸柳の立木、舞臺上下、眞中に石塔、下の方草土手の淨瑠璃臺。

總て南品川海禪寺葬所の體。雨車雷の音にて道具納まる。とばた〳〵にて花道より古今島田髷、白の小袖、淺葱のしごき赤合羽を着て竹の笠をかざして出る。あとより彦三同じく白の小袖淺葱の帶おしよぼからげ、毛氈を肩へかけ俵を冠り走り出る。と突然ドンと落雷のしたる音して舞臺の柳の木に火花を散す、古今花道へどうと倒れるを彦三介抱して、

彦三 古今、心はたしかか。

古今 彦三さん。

彦三 これ。（ト留める。これより富本連中の淨瑠璃になる。）

〽心中と噂を白の晴小袖、帶も淺葱の緣ぞと放れぬ手と手彦三が、肩にかけたる毛氈は何處やら寒き秋の雛、古今の髪も寐亂れしよさの枕にひゞきたる砧の槌も末枯れて、葉末に消ゆる草の露、置きまどはせて佇めり。（ト兩人よろしく舞臺へ來る。）

これ、古今、恐ろしい今の雷で、持病の癪でも起りはせぬか。

古今 いえ〳〵、どうで死ぬる此身なれば、怖いことはござんせぬ。

彦三 思へば浮世に捨てられた二人が身の上、死出三途の晴着にと、對に仕立てした白小袖。

古今 蓮の臺で女夫の樂しみ、早う殺して下さんせいなあ。（ト思入。本釣鐘）

〽更渡る鐘の音くらき夜嵐に今死ぬる身も肌寒く、ぢつと寄添ふ眼もうるみ、愚痴な女に未練な男、こんな因果な惡緣を出雲とやらの神さんが結び逢へて馬鹿らしい。添ひ遂げられぬ仇中で何故このやうに可愛いと、力の限り抱きしめ涙果てしはなかりけり。

彦三 今更いふも愚痴なことだが、白木屋を家出せう爲め心にもない吉原通ひ、ふつと上つた佐野松屋、そなたの顏を見てびつくり。

古今 いつぞや芝で弟の、難儀を救うて下さんしたその時に、いとしらしい親切なお方ぢやと、思ひこがれた彦三樣。

彦三 樣子を聞けばそなたの身の代百兩の、金を持つて出た弟の、文彌の行方を尋ぬる力と賴まれ、退くに退かれぬ浮世の義理。

古今 馴染重ぬる其中に、色や浮氣を取りおいて、眞實惚れて片時も、思ひきられぬ互ひの因果。

彦三 白木屋を離別したその後は兄貴の家に掛り人、金のできやう當もなく紋日物日もそなたの身揚り。

古今 呼ばる、だけは呼びとげても、お前と深うなつてより、爲になるお客は放れ、果は二人が身の詰り、弟の生死も定まらず、生きて甲斐ない私が身の上。

彦三 思案工夫もせん方盡き、一緒に死なうと覺悟を極め、この品川の海禪寺は彦三の菩提所、こゝで

古今　死ぬるが本望故、弟子になると嘘言うて、座敷を借りて最期の支度。
彥三　首尾よく廓を拔け出て、一緒に死ぬのは嬉しいが、後に殘つた母さんに歎きをかける不幸の罪。
古今　ふとした事の義理詰から、かうした仕儀になつたのも、
彥三　前生からの約束事、
古今　思へば、深い、
兩人　惡緣ぢやなあ。
〽顏と顏とをすりよせて、そもや初會の其夜から、男ばかりか氣にほれて、やるせないほど呼びたさに、焦れてかけたる待人の來ぬに木櫛の恥かしく、心で解けた結島川、まだ年のある其中に女夫にならばどうしてと、算へ暮して灸すゑる日まで互ひに言交し、悅ぶ甲斐も情なや、冥土とやらへ早く行て添ひとげるのが樂しみと、思ひつめたる女氣に男心の亂れ燒刄になまる風情なり。（トよろしく思入あつて）
彥三　よしなき歎きに時移り、人目にかゝらば互ひの身の上。
古今　早うお前の手にかけて下さんせいな。
彥三　覺悟はよいか。

古今　南無阿彌陀佛。

〽いざ二人が座をしめて、覺悟ながらも惚れた同志、輪廻の絆しあからみ、これが此世の別れかと、またもや下に手執る刀の雲間に浮名殘るらん。

ト これにて富本連中を消し、彦三は一腰を拔き、

彦三　南無阿彌陀佛。

ト 古今の胸先を突かうとする。ドロ〳〵にて彦三の腕痺れる思入。彦三又突かうとすると、ドロ〳〵にて兩人ちよつと放心する。正面の石塔の水鉢より、文彌の亡靈現はれ、陰火燃える。これにて兩人心附き、四邊を見て、

はて心得ぬ。思はず腕の痺れしは、やつぱり未練の氣おくれか、覺悟はよいか。

古今　さあ〳〵早う。

彦三　南無阿彌、

ト 又突かうとする。ドロ〳〵にて文彌の亡靈刀を留める思入。彦三思はず刀を落すを古今見て、

古今　未練でござんす彦三さん、死におくれる其中に、追手の者に捕へられなば二人の恥、いつそ私が。

ト 落ちたる刀を取つて死なうとする。始終ドロ〳〵、文彌留める思入。古今刀を落す、彦三見て、

彦三　やゝ。最期を急ぐ際となり、二人の腕が痺れるは。

兩人　はて合點の行かぬ。（ト心得ぬ思入、文彌の亡靈思入あつて、）

文彌　おなつかしや姉者人、緣につながる彦三殿、死なうといふは無分別、こゝばかりに日は照らず、何處の裏にも身を忍び、頼りない母者人や幼い妹の身の上を、必ず〳〵頼むぞや。

ト手を合せる、これにて兩人初めて文彌の亡靈を見ておどろき、

彦三　やゝ、さういふ聲は。

古今　弟文彌、どうしてこゝへ。

文彌　必ず〳〵二人の衆、どうぞ短氣をとゞまつて、呉れと頼むは母者人や妹がこと、名殘りは盡きじ早おさらば。

トドロ〳〵烈しく、文彌の亡靈卒塔婆の中へ消える。兩人びつくり思入あつて、

彦三　扨は今のは、弟文彌が亡靈にてあつたるか。

古今　そんなら弟は長旅にて、此の世を去りし亡魂の、

彦三　この場へ現はれ思はずも、二人が最期をとゞめしか。

古今　不便な弟が、

兩人　身の上ぢやなあ。

　　ト思入、禪の勤めばた〳〵にて、花道よりおりく走り出で舞臺へ來り、兩人に躓きびつくりして、

りく　もし〳〵御免なされませ、心の急きます者でござります、お免しなされませ。

　　ト此時月出る。古今おりくなすかし見て、

古今　や、お前は母さんぢやござんせぬか。

りく　（びつくりして、）ほんにそなたは娘のお菊、よい所で逢ひましたなあ。

古今　思ひがけない、どうしてこゝへ。私や恥しい〳〵、堪忍して下さんせいなあ。

彦三　（思入あつて、）いつぞや芝にて文彌殿が、難儀を救ひしその時は、面も留守にて逢はざりしが、扨は古今が母御なるか。

りく　さうおつしやるはその時に、忰文彌が御恩になつた彦三樣、思ひがけないと申さうか。

彦三　面目ない姿でお目にかゝりました。

りく　合點の行かぬ、彦三樣といひ娘がその裝、そんなら、二人は。さうしてこゝは。

彦三　この彦三が菩提所、品川の海禪寺。

古今　どうしてこゝへ夜夜中、お前は一人ござんした。

りく　私にもさつぱり合點が行きませぬ。これ娘悦びや、今日といふ今日文彌の敵が知れたわいの。
古今　何と言はしやんす、弟の敵が知れたとはえ。
彦三　して〳〵それは、何處の何者。
りく　さあ、その譯といふは今日晝間、柴井町の伊丹屋十兵衛といふ居酒屋へ、雇ひ奉公に行たところ、その十兵衛といふが、駿州宇都谷峠で、文彌を殺した奴でござるわいの。
兩人　えゝゝゝ。（トびつくり思入。）
りく　不思議なことには、十兵衛の佛壇の下に文彌が持つて出た、小紋の財布が匿してあつたので、敵といふが知れた故、そなたに早う知らさうと吉原へ行く道を違へ、さまよひ來た此の墓原、思はず二人に逢ふといふも、これもやつぱり文彌が導き。もし彦三樣、娘古今に力を合せ、文彌の敵十兵衛を、討たせてやつて下さりませ。（トこれにて兩人心苦しき思入。）
古今　そんなら文彌は、宇都谷とやらで、人手にかゝり敢ない最期、その弟の敵といふは、
彦三　縁につながる彦三が實の兄、十兵衛殿であつたるか、ホイ。（ト當惑の思入。）
りく　何とおつしやる、あの伊丹屋の十兵衛といふは。
古今　力と頼んだ彦三さんの、兄さんでござんすわいな。

りく　えゝゝゝ。（トびつくりする。彦三思入あつて、）

彦三　深い樣子は知らねども、御主の爲めに、十兵衞殿、なくてかなはぬ金の入用、扨は宇都谷峠にて金を持ちたる弟文彌を、金がほしさに手にかけて、奪ひとつたに疑ひなければ、現在文彌の敵ながら、この彦三の兄なれば助太刀かなはぬ弟の敵。さあ古今、兄の代りに彦三を、此の場に於て潔よく討つて未來の弟が、迷ひを晴らして見れいやい。

古今　いえ〳〵、敵の弟彦三さん、知らぬこと故力と賴み、夫婦の緣まで結んだお前、どうして敵と討たれませう、とても添はれぬ敵同志、冥土へ行つて弟へ、その言譯をするほどに、お前の手にかけ私をば、早う殺して下さんせいな。

彦三　いや〳〵それでは道ならず、やつぱりそなたが彦三を。

古今　いえ〳〵私を、彦三さん。

彦三　いや、そなたが。

古今　いゝえお前が。

兩人　早う殺して下されいの。

　　　ト兩人刃を互に突附ける。おりく聞いて、

りく　いつぞや芝にて文彌の難儀を、助けられたる恩義と言ひ、娘古今が力と頼み、夫婦の縁を結んだと聞くからは、討つに討たれぬ文彌の敵。

古今　知らぬこと〻て助太刀を、頼んだ夫は敵の弟。

りく　思ひまはせば淺ましい、血で血を洗ふ、

古今　夫婦兄弟。

彦三　因果同志の、

三人　寄合ひぢやなあ。

ト三人手を取りハア、と泣く。此の見得寺鐘にて、よろしく道具廻る。

（鈴ヶ森の場）――本舞臺向う一面の黑幕、數疊み、眞中に題目の大石塔、上手に石地藏、下手にお駒の捨札、所々に松の立木。總て鈴ヶ森夜の體。時の鐘、雨車、波の音にて道具留る。と上手より以前の十兵衞半合羽、脚絆、草履、一本差し、小田原提灯を提げ、仁三尻端折り番傘を相合にさし出來りて、

十兵　今まではい〻天氣だつたが、ばら〳〵降りでまつくらになつた。

仁三　もう何時だらうね。
十兵　さうさ、品川が引過だから、九つ半でもあらうか。
仁三　夜が更けたせゐか、べらぼうに寒い。
十兵　どうか、雨もあがつたやうだ。
　ト雨車止み、仁三傘をすぼめ、下手の捨札を見て、
仁三　まつくらで知れねえが、この捨札は何だしらぬ。
十兵　なに、そりやあ材木町の白木屋の娘の捨札だ。
仁三　あゝ噂のあつた主殺しかえ。
十兵　存命ならば磔刑だが、死んだが増しか捨札ばかり南無幽霊頓生菩提俗名お駒南無阿彌陀佛々々。
　トちよつと捨札へ回向する。
仁三　お前知る人かえ。
十兵　あい、私が弟の縁により、白木屋は親類さ。
仁三　この捨札を見るにつけ、悪いことはしたくねえ、どうで始終は廻しの上、ばつさりやられか　抑南、と覺悟はしてゐるけれど、紙幟や捨札を見ると、身の毛がよだつやうだ。あゝ剣呑々々。

ト身震ひする。

十兵　誰しも命はをしいものだな。（ト十兵衛わざと提灯の明りを消し、）南無三、躓いて灯りを消した。

仁三　こいつァまつくらで、歩きにくい。

ト仁三行きかける。十兵衛後ろから一腰を抜き切らうとする。仁三刀の光りに振返り十兵衛と顔見合せる。十兵衛ひらりと刀を後ろへ匿す、仁三これを見て、

十兵衛さん、お前さん何で抜きなすつた。

十兵　え、さあ灯りがありやあいゝけれど、くらやみぢやあ險難、それ故脅しに抜いたのだ。

仁三　いや、さうぢやァあるめえ。お前おれを切る氣だらう。

十兵　なんと。

仁三　神奈川まで行つたなら、金を貸さうと連れ出して、人通りなき鈴ケ森、文彌もどきにばつさりと。こゝでおれを切る氣だらうが、その手は喰はねえ、止しにしやれ。

ト仁三傘を持ちきつとなる十兵衛思入あつて、

十兵　むゝ、さう推量の上からは、何を隠さうお主の爲、文彌を殺して奪ひし百兩、一旦は役に立てし故再び金の才覺なし、身寄の者に返せし上敵と名乗つて討たるゝ心、まだその金も揃はぬ中、我

身の大事を知つたるこなた、無心合力したところが一度や二度ではよも聞くまい、度重なれば現はるゝ惡事千里の人殺し、お上の成敗受くる時は、金も返さず身寄の者に討たるゝこともかなはぬ故、神奈川までと連出したは、こゝで此方を殺さう爲め、訪ひ弔ひはせうほどに。

ト十兵衞下にゐて言ひかける。

仁三　おきやあがれ。（ト十兵衞を蹴倒す、十兵衞どうと倒れ兩人きつと見得。）うぬ大それたぺてんしめ、上部は堅氣の商人風、内證拵ぎの人殺し、その身の惡事を隱さうとおれをこゝで斬る氣だらうが、うぬらが腕ぢやあ殺されねえ。もうかうなつたらうぬが身も、娑婆と冥土の生別れ、提婆の仁三が引導を渡さぬとても駒の上、拔身の槍の供揃へ、天下いつぱい淨玻璃の鏡に寫る紙幟、その身の素性を散し書、所も名におふ鈴ヶ森、犬の餌食になりやあがれ。

ト兩人きつと見得。

十兵　さういふそなたを先馬に、冥土の旅の一里塚、此の松並木の露霜と覺悟極めて往生しやあがれ。

仁三　何を小癪な。

ト波の音になり、十兵衞拔いて切つてかゝる。仁三傘にて立廻り、仁三上手の地藏を蹴倒し臺石を小楯に上へ上り傘を開き、十兵衞下より刀をさしつけきつと見得。鳴物替つて仁三一刀切られて倒れ、

十兵衛上手にて刀を振上げて見得、これより仁三糊紅になり手負ひの立廻りよろしくあつて、トヾ十兵衛仁三を切倒し、とゞめに咽喉を突く。仁三突かれたまゝに十兵衛の髻を摑む。此時十兵衛立上る。仁三咽喉へ刀の立ちしまゝ一緒に立上る、十兵衛摑みし手をもぎ放す。仁三ひよろ〳〵として刀をさしたまゝ仰向けにばつたり倒れる。十兵衛ほつと思入あつて、

十兵 不便ながらも十兵衛が惡事を知つたがこなたの不運、やがて冥土で言譯なさん、成佛得脱してくりやれ。南無阿彌陀佛々々。

ト回向なし刀の血糊を拭ひ、シヤンと差し行かうとする。ばた〳〵にて上手より彦三、古今出來り十兵衛に行當り、ちよつと立廻つて十兵衛眞中に兩人左右へ別れ、きつと見得。この時二十日の月出で、三人顔を見合せびつくりして、

彦三 や、兄者人か。

十兵 さういふそちは、弟彦三。

古今 そんならお前が十兵衛様か。

十兵 して、この女中は。

彦三 廓で馴染を重ねし古今。

十兵　すりや文彌殿の姉なるか、して〳〵二人が此のなりは。
彦三　廓の金にはつまるの慣ひ、若氣の至りに忍び出で、心中なさんとせしところ。
古今　亡き弟にとゞめられ、一先姿を匿さんと、大森在へ行く途中。
十兵　折も折、時も時、こゝで逢ひしは此身の願ひ、何を隱さうお主の爲めいつぞや宇都の谷峠にて、そなたの弟を殺せし十兵衞、敵を討つて佛へ手向けよ。まつた弟彦三は兄弟ひとつでない證據、この場で古今に助太刀致せ、唯殘念なは文彌殿を殺して取りし百兩を、返せし上と思ひしも、才覺ならぬ今日の今、これぱつかりが心殘り。
トばた〳〵になり、上手より尾花才三郎麻上下大小、中間箱提灯を持ち出來り、
才三　やあ十兵衞こゝにありしか、首尾よく茶入の質受なし、本地へ歸參の尾花才三、殿のお覺え目出度くして、拜領なせし金子百兩これで先頃その方が、我へ返せし百兩も又もやそちへ返し與ふぞ。
ト才三郎懷中より袱紗包みの證文を出し渡す。十兵衞開き見て、
十兵　やゝ、こりや金子と思ひのほか、これなる古今が年季證文。
才三　その金高も卽ち百兩、それを古今へ渡しなば、そちが望みもかなふ同然。
十兵　すりや才三樣にも一部始終を。

才三　唯今姉に承つたり。
十兵　扨は女房おしづには。
才三　一旦死せしも我所持の、身替り不動の利益にて、姉者人には蘇生なしたり。
十兵　はあゝ忝い、今ぞ此の身の本望成就、文彌殿の官金も元はそなたの身の代金、此の證文は百兩替り、いざ此の上は弟の敵、二人が對の白無垢も敵討のこれ晴着、さあ立上つて我を討て。
彦三　とは言へ、現在兄者人。
古今　縁につながる私がどうして。
十兵　討たねば古今彦三とも、文彌へ義理が立つまいが。
兩人　それぢやというて、
十兵　きり〳〵討たぬか。
兩人　さあ、
十兵　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
十兵　(思入あつて、)討たずば、いつそ。

ト十兵衛腹へ刀を突き立てる。

才三　やゝ、こりや十兵衛には。

兩人　早まつたことして下されたなあ。

十兵　悔むは無用、十兵衛が命を捨てるは豫ての覺悟、これにてどうぞ文彌殿を、殺せし罪は許して下
された。

才三　あつぱれ健氣なそちが生害。

彦三　浮世の義理とは言ひながら、

古今　思へば果敢ない、

兩人　緣ぢやなあ。

才三　古今が身請濟む上は、彦三諸共白木屋の、家名相續いたせし上、一子出來れば伊丹屋の、後見な
して家名を立てよ。

十兵　殘る方なき御計らひ。

三人　ちえゝ忝い。

ト此時黑裝束の捕手四人ばら〳〵と出て、

捕手　人殺し、動くな。

十兵　何を。

ト此時樂屋頭取出て、

取頭　先づ今日はこれぎり。

と目出度く打出し

宇都谷峠（終り）

（附錄）主なる興行年表

岩戸の景清

年時	座名	名題	景清	時政	重忠	義時	義盛	常胤	衣笠	朝日
嘉永三年三月	河原崎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川海老藏	坂東彦三郎	市川九藏	市川猿藏	尾上松緑	市川鰕十郎	尾上菊次郎	岩井粂三郎
明治三十八年九月	歌舞伎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川壽美藏	市川猿之助						市川九女八
明治四十一年一月	新富座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川九藏	尾上幸藏	市川團吉	市川雷藏	中村竹三郎	市川小文次	なし	尾上紋三郎
大正五年十一月	市村座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	尾上菊五郎	なし	中村吉右衞門	坂東三津五郎	守田勘彌	中村東藏	尾上菊次郎	河原崎國太郎
大正八年一月	歌舞伎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川段四郎	中村雀右衞門（吳竹）	市村羽左衞門	片岡市藏	市川中車	市村龜藏	中村福助	片岡我童
大正十二年二月	帝國劇場	岩戸だんまり（いはと）	河村菊江（阿古屋）	田中勝代（牧の方）	守田勘彌	坂東玉三郎	橘薫（吳羽）	小原小春（楓）	鈴木福子	東日出子

閻魔小兵衛

年時	座名	名題	小兵衛	伊之助	若草	おろく	西心	重衛	吳羽	蝶々賣

年時	座名	名題	若菜姫	春之助	小いそ	秋篠	浪六	豊後之助	鰭九郎	秋作
嘉永四年十一月	河原崎座	弁鯉瀧白旗（のぼりごひたきのしらはた）	市川海老藏	市川團十郎	岩井粂三郎	岩井粂三郎	市川九藏	尾上新七	市川團之助	河原崎長十郎
文久三年十月	守田座	善惡浮世繪草紙（ぜんあくうきよゑざうし）	市川市藏	中村芝翫	坂東三津五郎	坂東三津五郎	中村鶴助	岩井米次郎	岩井しげ松	尾上榮三郎
明治二十一年三月	市村座	善惡浮世繪草紙（ぜんあくうきよゑざうし）	市川權十郎	片岡我童	岩井松之助	岩井松之助	市川壽美藏	澤村鉄次郎	市川鯉舞子	なし
大正九年三月	新富座	善惡浮世繪草紙（ぜんあくうきよゑざうし）	市川左團次	松本幸四郎	坂東秀調	坂東秀調	市川段四郎	市川壽美藏	市川松蔦	市川猿之助

白縫譚

年時	座名	名題／役割	若菜姫	春之助	小いそ	秋篠	浪六	豊後之助	鰭九郎	秋作
嘉永六年二月	河原崎座	しらぬひ譚（ものがたり）	坂東しうか	坂東しうか	坂東しうか	嵐璃寛	嵐璃寛	坂東彦三郎	坂東彦三郎	嵐璃玨
安政三年一月	大坂角座	けいせい白縫譚（しらぬひものがたり）	嵐璃寛	中村玉七	藤川友吉	嵐璃寛	嵐璃寛	三桝大五郎	片岡市藏	中村翫雀
文久二年一月	守田座	繰返米升賚（くりかへしみますのたまもの）	坂東三津五郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	市川小團次	市川小團次	中村鶴藏	市川市藏
明治元年五月	守田座	心筑紫白縫物語（こゝろづくししらぬひものがたり）	坂東三津五郎	坂東三津五郎	澤村訥升	尾上菊次郎	中村芝翫	關三十郎	坂東太郎	中村芝翫
明治五年三月	中村座	宿櫻しらぬひ譚（やよひざくらしらぬひものがたり）	坂東三津五郎	なし	なし	中村芝翫	なし	中村仲太郎	なし	尾上菊五郎
明治七年五月	澤村座	彩絲模樣白縫（いろもやうさくらのしらぬひ）	坂東しうか	坂東しうか	坂東しうか	なし	中村壽三郎	坂東太郎	坂東太郎	澤村百之助
明治十三年一月	中島座	贄筆白縫壽語録（としだましらぬひすごろく）	勝川又吉	尾上幸藏	澤村巴枝	なし	中付壽三郎	中村壽三郎	關三十郎	市川家團次
明治十九年三月	市村座	しらぬひ譚（ものがたり）	中村福助	河原崎國太郎	なし	中村芝翫	なし	片岡我童	なし	中村福助

明治二十二年六月	桐座	しらぬひ譚	澤村源之助	なし	なし	坂東秀調	なし	市川權十郎	なし	市川小團次
明治二十三年七月	歌舞伎座	しらぬひ譚	岩井松之助	中村雁治郎	坂東秀調	なし	中村福助	なし	片岡市藏	なし
明治三十三年三月	新富座	しらぬひ譚	なし	市川小若	尾上幸之助	なし	中村又五郎	尾上菊松	嵐吉太郎	澤村宗之助
大正四年十月	帝國劇場	しらぬひ譚	なし	なし	なし	尾上梅幸	なし	尾上松助	なし	澤村宗十郎
大正九年七月	歌舞伎座	しらぬひ譚	なし	なし	なし	中村歌右衞門	なし	市川中車	なし	中村福助

雪駄直し

年時	座名	名題	長五郎	源之丞	おこよ	お長	主膳	半次	與五郎	吾妻
安政三年三月	市村座	夢結蝶鳥追	坂東龜藏	坂東彦三郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	關三十郎	淺尾與六	河原崎權十郎	中村歌女之丞
文久二年三月	守田座	蝶小蝶團鏡寫繪	市川小團次	市川市藏	尾上菊次郎	尾上菊次郎	嵐雛助	中村鶴藏	中村福助	坂東三津五郎
明治七年八月	喜昇座	喜久富比翼蝶々	坂東鶴藏	松尾猿之助	大黒家昇若	大黒家昇若	坂東三八	尾上尾上右衞門	坂東家太郎	市川君三郎
明治十三年十月	中島座	花蝶姿繪合	關三十郎	勝川又吉	澤村巴杖	澤村巴杖	中村壽三郎	尾上幸藏	尾上幸藏	坂東佳好
明治十七年十二月	新富座	身重荷市大注連	尾上松助	尾上登美松	中村かたる	澤村源之助	大谷門藏	市川猿十郎	市川左伊三	中村歌女之丞
明治二十七年一月	歌舞伎座	夢結蝶鳥追	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上榮三郎	坂東秀調	片岡市藏	尾上松助	市川染五郎	中村兒福
大正七年一月	明治座	夢結蝶鳥追	市川左團次	市川壽美藏	市川松蔦	なし	市川中車	片岡市藏	なし	なし

年時	座名	名題	文彌	仁三	重兵衞	彦三	古今	才三郎	おしづ	小兵衞
大正八年十二月	市村座	夢鳥蝶鳥追（ゆめむすぶてふにとりおひ）	尾上菊五郎	坂東三津五郎	中村時藏	なし	中村吉右衞門	中村東藏	市川男女藏	市川米藏

宇都谷峠

年時	座名	名題	文彌	仁三	重兵衞	彦三	古今	才三郎	おしづ	小兵衞
安政三年九月	市村座	蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）	市川小團次	市川小團次	坂東龜藏	坂東彦三郎	尾上菊五郎	河原崎權十郎	尾上菊五郎	淺尾與六
慶應二年六月	守田座	蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）	市川小文次	市川小文次	中村福助	中村福助	坂東玉三郎	尾上梅幸	なし	中村歌太郎
明治六年十二月	澤村座	宇都谷峠噂怪談（うつのやたうげうはさくわいだん）	坂東太郎	坂東太郎	大谷門藏	坂東橋三郎	澤村千鳥	澤村鈍二郎	なし	澤村しやばく
明治十一年八月	大坂中座	蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）	坂東太郎	坂東太郎	市川瀧十郎	實川雁正	嵐珏丸	嵐橘治	實川正朝	坂東太眞五郎
明治十六年八月	新富座	小夜砧宇都谷峠（さよぎぬたうつのやたうげ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	なし	なし	なし	坂東秀調	なし
明治三十五年九月	東京座	花薄宇都谷家話（はなすゝきうつのやばなし）	市村家橘	市村家橘	市川染五郎	なし	なし	なし	市川猿之助	なし
大正四年九月	市村座	蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衞門	なし	なし	なし	尾上菊次郎	なし

大正十三年七月廿八日印刷
大正十三年七月卅一日發行

『默阿彌全集第一卷』　非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂